昭和五年八月五日印刷
昭和五年八月十日發行
昭和六年三月一日再版
昭和十二年八月五日三版

國譯一切經　中觀部二

不許複製

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所　　兩角製本所

索　　引

（頁數は通頁を表す）

—中觀部二索引終—

闇の爲めに覆はるる者を照らし

○涅槃を建立せん。

般若燈論釋邪見品第二十七竟

[三五]一切の到彼岸を論ずる者、深き大智慧者、大乘に乘る者たる分別照明大菩薩は、此の中論を釋する長行を造り訖つて發願して言はく、願はくば一念の善を以て隨喜迴向して等しく一切衆生に與へ、命終して彌勒を見んと。」

[三五] 譯者の附加なるべし。分別照明大菩薩は本論の作者清辨菩薩をさす。

て悉く皆寂滅す。是れ自覺の法なり、是れ虚空の如き法なり、是れ無分別の法なり、是れ第一義境界の法なり。是の如き等の眞實甘露を以て而も開解せしむ。是れ一部の論の宗意なり。

問うて曰く、諸佛所說の初、中、後は皆眞實なり。此の論中に何ぞ廣く諸驗を立つることを須ひんや。

答へて曰く、或は愚鈍の諸の衆生等あり。佛の阿含に於て正しく信ずること能はず。彼の衆生を攝取せんと欲するが爲めの故に廣く諸驗を立つ。我れ今龍樹阿闍梨に頂禮せんが故に而も頌を作りて曰く、

[三四]牟尼法王の子、　大智阿闍梨は
般若の妙理を以て、　此の中論を開演せり。
善く利他の行を解して　世を照らすの日月となり、」
甚深の法を顯了して、　佛道を得るの因を說く。」
闍梨の所作を　我れ今悉く解釋し、」
諸の惡見を息めんが故に　般若燈論を造る。
此の般若燈は　深妙無比の法なり、
然も我が今の所作に　若し少しの福德有らば、」
此の般若燈を以て、　願はくば衆生の類を攝し、」
法身の如來十方の　刹に遍滿するを見、」
自所覺の法を得し、　諸見戲論を息め、
寂滅無分別にして　無比なること虚空の如くならん。」
復た願はくば般若燈にて　普く世界の

【三三】
若人見世間　如我之所見
如斯之人等　能見十方佛
諸法從緣生　自無有定性
若知此因緣　則達法實相
若知法實相　是則知空相
若能知空相　則爲見導師

般若燈論全體の結語を述ぶ。

【三四】
牟尼法王子　大智阿闍梨
以般若妙理　開演此中論
善解利他行　爲照世日月
顯了甚深法　說得佛道因
闍梨所作者　我今悉解釋
息諸惡見故　造般若燈論
此般若燈者　深妙無比法
然我今所作　若有小福德
以此般若燈　願攝衆生類
見法身如來　遍滿十方刹
得自所覺法　息諸見戲論
寂滅無分別　無比如虚空
復願般若燈　普照於世界
○爲照於世界　爲闇所覆者
建立於涅槃

種の苦の種子たる諸見を起すを見るが故に而も憐愍を起せばなり。論偈に說くが如し、

(二七)[三〇]佛は諸苦を斷ぜんが爲めに　微妙の法を演說し、
憐愍を以て因となしたまふ。　我れ今瞿曇に禮す。

釋して曰く、『苦を斷ず』とは謂く、一切衆生の生死等の一切の諸苦を斷ずるなり。『妙法』とは謂く、清淨なるが故に名づけて妙法と爲し、能く煩惱熏習の火を滅するが故に名づけて清淨となし、復た次に、一切功德の因增長圓滿するが故にまた清淨と名づく。妙法とは所謂る大乘なり。勝鬘經に說くが如し、『[三一]世尊よ、妙法を攝受する者は謂く大乘を守護するなり。何となれば、世尊よ、一切聲聞辟支佛の乘は皆大乘中より出生するが故なり。乃至一切世間出世間の善法もまた皆大乘中より出生するが故なり。世尊よ、譬ふれば阿耨達池より四大河を出すが如く、是の如く是の如く、世尊よ、大乘は能く聲聞辟支佛の乘を生ず』と。是の如き乘は慈、悲、喜、捨を以て因となし、世間の名利を以て因となさず。『今瞿曇に禮す』とは謂く、無上の妙法寶を開示するが故に名づけて瞿曇となす。復た次に、姓が瞿曇なるが故に名づけて瞿曇となす。『禮す』とは云何ん。二種の禮あり、一には謂く口言にて稱歎す、二には謂く身を屈し頭面を地に著く。梵王所問經の偈に言ふが如し、『[三二]深く因緣法を解すれば則ち諸の邪見無し。法皆因緣に屬し、自の定まれる根本無し。因緣法は不生なり、因緣法は不滅なり。若し能く是の如く解すれば諸佛は常に現前す。』此の品初に自部の人の立驗に過あるを說き、又諸見の空を以ての故に而も開解せしめたり。是れ品の義意なり。般若中に說くが如し、『佛、勇猛に告ぐ、極勇猛よ、菩薩摩訶薩色は起見の處に非ず、また斷見の處に非ず、乃至受想行識は起見の處に非ず、また斷見の處に非ず。若し色受想行識は起見の處に非ず、また斷見の處に非ずと知らば、是れを般若波羅蜜と名づく』と。

[三三]今無起等の差別の緣起を以て開解せしむれば、所謂る一切の戲論と及び一異等の種種の見を息め

【三〇】佛爲斷諸苦　演說微妙法
以憐愍爲因　我今禮瞿曇
第一句は梵文には「一切見を斷ぜんが爲に」とあり、什譯も同じ。本論は長行にも「苦を斷ず」と註しあれば原典の相違なるか。他の三句はよく一致す。

【三一】以下邪見品に關する散說、勝鬘經、梵王所問經、般若經を引く。

【三二】「深解因緣法　則無諸邪見
法皆屬因緣　無自定根本」
「因緣法不生　因緣法不滅
若能如是解　諸佛常現前」
西藏譯に於ては此二偈を缺き、論主清辨の問答註釋を擧ぐ。惟ふに此前偈は羅什所譯の思益梵天所問經第三卷並に菩提流支所譯の勝思惟梵天所問經第五卷中の左の偈を引用せしものならん。
信解因緣法　則無諸邪見
法皆屬因緣　無有定根本
第一句の「信」を「深」と改め、第四句の「有」を「自」と變ぜし他、兩者全同なることに注意すべし。次に後偈も亦多分羅什所譯の思益梵天所問經第一卷並に菩提流支所譯の勝思惟梵天所問經第二卷中の左の偈文に基きて創作せしものと考へらる。
若見知五陰　無生亦無滅
是人行世間　而不依世間

(二六)一分は是れ有邊にして　一分は是れ無邊ならば、
彼の有と無との邊を離れて　更に倶等の邊無し。

釋して曰く、此れ謂く、世間の『最後の邊』等の四句無し。何となれば、論偈に説くが如し、

(二七)云何んが一の取者にして　一分は是れ壞あり
一分は是れ壞なきや。　是の如きは然らず。

釋して曰く、云何んが然らざるや。前の二種の燈喩の驗中に已に破せるが如きが故に是れ然らずとなす。論偈に説くが如し、

(二八)有邊及び無邊の　是の二成ずることを得れば、
非有非無邊も　其の義また成ずることを得ん。

釋して曰く、此れ謂く、若し一人にして是れ亦有邊亦無邊が成ずれば、相待するを以ての故に非有邊非無邊も亦成ず。而も是の事なし。第一義中の如きは總じて一切の見は皆然らずと説く。是の如く物(人)をして解せしむることをなすは、論偈に説くが如し、

(二九)是の第一義中には　一切法空なるが故に、
何處に、何の因緣にして　何人か諸見を起さん。

釋して曰く、此れ謂く、若し第一義中に一切諸體皆空ならば、何人ありて何の境を緣じ、何を以て因となして何等の見を起すや。彼の人空、境空、因空、見空なるを以ての故に、人有り、境有り、因有り、見の起ること有るは然らず。是の義を以ての故に品初に自部の人『第一義中に是の如き五取陰の自體あり、是れ見處なり』と言へるは、此の出因の義は然らず。云何んが然らざるや。第一義中に已に物(人)をして一切の諸見は悉く皆空なるを解せしめしが故に然らず。若し世諦中に依りて而も因を立つれば自ら汝の義に違す。佛婆伽婆を世親となすは、一切衆生虚妄分別して種

【二六】一分是有邊　一分是無邊
離彼有無邊　更無倶等邊
梵文及什譯第二十五偈に相當し、殊に前二句は梵文に正確に一致す。後二句は「有邊と無邊とより別なる有無倶邊無し」の意なり。

【二七】云何一取者　一分是有壞
一分是無壞　如是者不然
梵文及什譯第二十六偈に相當しよく一致す。

【二八】有邊及無邊　是二得成者
非有非無邊　其義亦得成
梵文及什譯第二十八偈に相當しよく一致す。第二十七偈に相當するものは本論に缺く。又第一句は「有邊〃無邊との二つ」に非ずして「有邊にして無邊なる二倶」の意なり。

【二九】是第一義中　一切法空故
何處何因緣　何人起諸見
梵文及什譯第二十九偈に相當し第一句を除いて大體一致す。梵文には「一切の存在空なるが故に、何處に、誰に、何故に、如何なる常等の諸見起らん」とあり。

[三二](一九)世間若し有邊ならば　云何んが後世有らん。
　世間若し無邊ならば　云何んが後世有らん。

釋して曰く、『邊』とは云何ん。謂く『究竟の處』『盡の處』等を邊と名づく。阿羅漢の涅槃の陰に似たるが如し。而も今、後世の在るあるは謂く、前世の陰を因となし、後世の陰を果となして展轉して終り無きなり。是の如く前陰の因に依りて後陰の果を起すが故に、然も今此の諸陰の展轉相續して起るあり。論偈に說くが如し、

[三三](二〇)此の諸陰の相續は　猶し燈燄を燃やすが如し。
　是を以ての故に世間は　有邊無邊に非ず。

釋して曰く、此の中に驗を立つ。『無明あり、煩惱未だ盡きずして諸陰は相續して斷ぜず。此の陰に果あるが故なり。譬ふれば燈燄の相續するが如し』と。是を以ての故に世間有邊なるは然らず。此の相似の果起つて壞せざるは、前陰壞せずして後果あるに非ざるが故に、譬ふれば燈と前燄との如し。是を以ての故に世間無邊なるは然らず。所說の驗義の如きは應に論偈に說くが如し、

[三四](二一)前世の陰已に壞して　後陰別に起らば、
　則ち前陰に因らず。　是れを名づけて有邊となす。

釋して曰く、此れ謂く、前陰起り已つて卽ち滅し後陰相續の因とならずんば卽ち是れ有邊なり。論偈に說くが如し、

[三五](二二)若し前陰壞せずして　後陰起らずんば、
　旣に前陰に因らず。　而も卽ち是れ無邊なり。

釋して曰く、云何んが無邊なる。謂く一切時に常住なるが故なり。是の義は然らず。論偈に說くが如し、

【三二】世間若有邊　云何有後世　世間若無邊　云何有後世
梵文及什譯第二十一偈に相當し全く一致す。以下本品第二偈で拙出せし世間有邊無邊の問題を論ず。

【三三】此諸陰相續　猶如燃燈燄　以是故世間　非有邊無邊
梵文及什譯第二十二偈に相當し、略〻一致す。

【三四】前世陰已壞　後陰別起者　則不因前陰　是名爲有邊
梵文及什譯第二十三偈に相當し、略〻一致す。

【三五】若前陰不壞　後陰不起者　旣不因前陰　而卽是無邊
梵文及什譯第二十四偈に相當し略〻一致す。但し以上二偈本論の譯文拙なり。什譯を見るべし。

なきは卽ち是れ無常なり。若し人有る處に人有らば卽ち是れ常なり。人處に天無きが故に天無きは卽ち是れ無常なり。猶し一物の一處に亦白にして亦黑なるが如きは其の義然らず。若し有る人『我は是れ常に非ず、また無常に非ず』と言はば、論偈に說くが如し、

(二六)[一九]若し常と無常との　二義成ずることを得れば、
非常非無常なる　汝の意も亦成ずることを得ん。

釋して曰く、此の義は人をして解せしめ難きが故なり。復た次に、第一義中には論偈に說くが如し、

(二七)[二〇]有る處に有る人來りて、　住處より去ることあらば、
生死は則ち無始なり。　而も是の事あることなし。

釋して曰く、『有る處』とは若しくは天世の處、人世の處なり。『有る人』とは謂く若しくは天若しくは人なり。『住處』とは謂く天等の世界の處に住するなり。『去ることあり』とは謂く、人ありて異趣の處に向ひて去るなり。若し爾らば此の我は無始より已來恒有にして卽ち是れ常ならん。而も是の事なし。云何んが無きや。謂く衆生と及び人とは先に已に遮せるが故なり。是の義を以ての故に常我あること無し。若し『常我なしと雖も而も無常我あり』と言はば、是れ亦然らず。論偈に說くが如し、

(二八)[二一]若し常我有ること無くんば、　誰か復た是れ無常なる、
亦常亦無常なる、　非常非無常なる。

釋して曰く、此れ謂く、常に待するが故に無常と說く。本と常あること無くんば何に待して無常と說かん。

復た次に、常無常等は皆已に成ぜず。今當に邊等の四句を觀察すべし。論偈に說くが如し、

【一九】若常與無常　二義得成者
非常非無常　汝意亦得成
梵文及什譯第十八偈に相當しよく一致す。

【二〇】有處有人來　從住處有去
生死則無始　而無有是事
梵文及什譯第十九偈に相當し、殊に梵文に正確に一致す。「有處、有人」は「或處、或人」の義なり。

【二一】若無有常我　誰復是無常
亦常亦無常　非常非無常
梵文及什譯第二十偈に相當し、殊に梵文の意をよく顯はす。「常我」の「我」は「常住なる何者も無い」とある「何者(kaçcit)」と云ふ代名詞を當せるなり。

が如し。

(一三)[一五]若し天が人と一ならば、　我は則ち常に墮す。
天既に是れ無生なり。　常なるは生ずべからざるが故に。

釋して曰く、是の如き我は卽ち常過に墮す。

[一六]自部の人言ふ、一異等の義に何の過ありや。

論者言ふ、若し未生の天が卽ち是れ天ならば我は則ち無起なり。無起ならば卽ち是れ常なり。是を以ての故に我は未生の天の時に應に能く天所作の業を起すべきも而も是の事なし。若し『我は是れ常にして未生の天の時に已に能く天所作の業を起す』と謂はば、世人の信ぜざる所なるが故なり。復た次に、若し我が無常ならば此の人中の我が天中に生ずる時、昔の人中の我は今卽ち壞するが故なり。若し汝の意に『異あることを得んと欲して而も上の所說の如き一の過なし』と謂はば、是の事然らず。異を計すればまた過あるが故なり。論偈に說くが如し、

(一四)[一七]若し天と人と異らば　我は則ち無常に墮す。
天と人と異るが故に、　相續するは然らず。

釋して曰く、其の過云何ん。謂く異あるが故なり。譬ふれば提婆達多と耶若達多との二我の相續するは則ち過ありとなすが如し。

復た次に、若し有る人『我の相續は是れ一にして、是れ天の義あり、是れ人の義あり』と言はば、今當に之に答ふべし。論偈に說くが如し、

(一五)[一八]若し天が一分に在り、　人また一分に在らば、
常と無常とは共俱なり。　一處なるは然らず。

釋して曰く、云何んが然らざるや。謂く天處に天あるは卽ち是れ常なり。天處に人なきが故に人

【一五】若天與人一　我則墮於常
天既是無生　常不可生故
梵文及什譯第十五偈に相當し、よく一致す。但し第二句「我」の語無きが可なり。

【一六】自部人の見の批評第二。

【一七】若天與人異　我則墮無常
天與人異故　相續者不然
梵文及什譯第十六偈に相當しよく一致す。但し之も第二句は「我」の語無きが可なり。

【一八】若天在一分　人又在一分
常無常共俱　一處者不然
梵文及什譯第十七偈に相當し大體に於て一致す。「一部が天に屬し一部が人に屬せば、常と無常との兩性質を具するの過ある」を意味す。

の如きは過去の五陰と異あることを得ず。相續異らざるが故なり。過去の陰が因となるが故なり。譬ふれば提婆達多の過去の五陰の如し』。但だ此れが前を離れて應に獨り立つべきの過あるのみに非ず。亦更に餘の咎あり。上偈に說くが如し『是の如くならば應に常住にして現陰の緣と爲らざるべし』と。云何んが緣と爲るや。謂く後陰起らざるが故なり。若し爾らば則ち死有より生ぜず。而も彼の前世所受の生陰は仍ち過去に在り。今別に更に異陰有りて現在に於て生ず。是を以ての故に則ち大過あり。云何んが過となすや。論偈に說くが如し、

(二〇)諸業皆斷壞し、[二二]　此の人所造の業に
彼の人當に報を受くべし。　是の如き過咎を得ん。

釋して曰く、若し爾らば卽ち斷の過あり。諸業の果報を失するが故なり。又彼の人罪を作りて此の人果を受けん。復た次に、若し『業と生と一時に起る』と言ふは然らず。論偈に說くが如し、

(二一)生は共業より起るに非ず、[二三]　此の中に過あるが故なり。
我は是れ作なること瓶の如し、　先に無にして後に起る。

釋して曰く、我は云何んが是れ造作なるや。謂く、先に無にして後に有なればなり。我は先に煩惱業を起さず。應に瓶の如く外法を以て生因となし、先世所集の業を以て生因となさざるべし。是の如く能く後陰を生ずるの因なれば則ち無體となし、有に非ず不有に非ず。復た次に、過去世にも亦前の二種と同じき過あり。『有に非ず不有に非ず』とは、是の如き法無きが故なり。過去世の有無等の四句を觀察し已りぬ。今當に次いで未來の四句を觀ずべし。論偈に說くが如し、

(二二)或は是の如き見あり、[二四]　來世に我れの起ること有りや、
來世に我れの起ること無きやと。　過去に同じく過あり。

釋して曰く此れ謂く、來世の一異、俱、不俱等は今また是の如くに遮するが故なり。論偈に說く

【二二】諸業皆斷壞　此人所造業　彼人當受報　得如是過咎
前偈の歸結をなすもの、什譯第十一偈に相當し、大體一致す。梵本には此偈を缺く。

【二三】非生共業起　此中有過故　我是作如瓶　先無而後起
梵文及什譯と著しく相違す。

【二四】或有如是見　來世有我起　來世無我起　同過去有過
梵文及什譯第十四偈に相當し大體一致す。來世に於ける我の有無の見を破す。本品第二偈の問題に關す。

陰を離れて應に可取なるべきも　而も不可取なるが故なり。

釋して曰く此れ謂く、我が若し取に異るは然らず。何となれば、若し取を離れて我あらば云何んが是の我相を取ると說くべけん。若し相の說くべき無くんば則ち取を離れて我無し。若し『取を離れて我無し、但だ取が是れ我なるのみ』と謂はば、是れ亦然らず。取を離れて[八]我異あること無きが故なり。譬ふれば餘物の如し。此の中に驗を立つ。取に異らずして我有らば、取は是れ可取の法にして我は不可取なるが故に、譬ふれば取の自體の如し。何となれば、取は起滅あるも我は則ち爾らざればなり。

復た次に、云何んが取を以て卽ち取者となさん。若し『取を離れて取者あり』と謂はば、是れ亦然らず。若し五陰を取らずして取者あらば、應に五陰を離れて別に取者有るべし。彼れの義は是の如し。我れ今道理を說かば、論偈に說くが如し、

(七)[九]我は取に異らず。　また取に卽是ならず、
　而もまた無取なるに非ず、　また定んで是れ無ならず。

釋して曰く、此れ謂く、我は取を離れず、また取に卽せず。而も無取に非ず、また是れ無ならず。已に物(人)をして解せしめたり。若し『過去世に我有り』と言はば然らず。論偈に說くが如し、

(八)[一〇]今世に過去無きは　是の事また然らず。
　過去は前生なれば　今世と異らず。

(九)[一一]若し今が前と異らば　前を離れて應に獨り立つべし。
　是の如くならば應に常住にして　現陰の緣と爲らざるべし。

釋して曰く、此れ謂く、問者は此の如きを得んと欲せず。云何んが得んと欲するや。謂く前世の五陰は今世の五陰のために緣となることを得んと欲す。我れ今驗を立てん、『提婆達多の今世の五陰

は有漏の五陰身をさし、「陰」とあると同じ。前偈は陰と我と一なるを否定し、此偈は陰と我の異なるを否定す。

【八】我異。異の我、別の我なり。

【九】我不異於取　亦不卽是取　而復非無取　亦不定是無　梵文及什譯第八偈に相當しよく一致す。但し最後に「此れ決定す」(梵文)「此卽決定義」(什譯)の一句あり。

【一〇】今世無過去　是事亦不然　過去前生者　與今世不異　梵文及什譯第九偈に相當すべきも偈文著しく相違す。されど要するに前世の陰と今世の陰との不異なるを言ふ。

【一一】若今與前異　離前應獨立　如是應常住　不爲現陰緣　梵文及什譯第十偈に相當し大體に於て一致す。前世の陰と今世の陰と別異ならば、前世の陰は常住にして今世の爲に緣をなさずと言ふ。

の衆生の如し。復た次に、身と及び諸根とも亦別なるが故なり。若し根等は異なりと雖も而も我は是れ一なりと言はば此れまた然らず。論偈に說くが如し、

(四)還つて是れ昔の我ならば　但だ是れ取の自體のみ。
若し彼の諸取を離るれば　復た何の我あらんや。

釋して曰く、此れ謂く、提婆達多の過去世の我が還つて是れ今日の我なるが如きは然らず。取の別なるが故なり。譬ふれば耶若達多の我の如し。是を以ての故に前世の生が還つて是れ今日の生なるは然らず。復た次に、若し我相は取相に異るを得んと欲すれば上偈に說くが如し、『若し諸取を離るれば復た何の我あらんや』と。是の如き我なきが故に陰を離れて我あるは先に已に廣く遮せり。有我を計する者若し是の意を作して、『我をして無體ならしめんと欲せずして、卽ち取を以て我體と爲さ』ば、是の分別を作すは無我を說くに似たるが如きも、また取體を以て我と爲すなり。論偈に說くが如し、

(五)若し取が是れ我ならば　何處に更に我あらん。
取は起滅するに由るが故に　云何んが是れ取者ならん。

釋して曰く、第一義中には取は是れ我ならず。取には起滅法の二體ありて先に已に無我を說いて信解せしめしが故に云何んが(我が)取たらん。謂く取と及び取者とは、取は是れ業にして取者は是れ作業人なり。譬ふれば薪火の二種の如し。復た次に、先に已に我を遮せるが如きが故に我の義は成ぜず。云何んが成ぜざるや。先偈に『取は卽ち是れ我に非ず、起滅あるを以ての故に』と說けるが如し。我は亦是れ有に非ず、亦是れ無に非ず。是の如き我は世諦中にもまた物(人)をして解せしむること能はず。今當に更に『陰を離れて我あり』と計する者に答ふべし。論偈に說くが如し、

(六)若し彼の取に異りて　我あるは然らず。」

る、存在する」の意にして且つ第一人稱なれば、「未來不起」「未來起」はそれ〴〵「未來に於て我れは存在しないであらうか」「未來に於て我れは存在するであらうか」の意となり、前偈に過去世に於ける我れの有無を立言せるに對す。又「邊」とは世間有邊等の見にして、前偈の世間常等の見に對す。

【四】過去世有我　是事則不然
　彼先世衆生　非是今世者
前二句は梵文に正確に一致す。後二句は梵文に「何となれば、前生に於てありし其の同一者が此の(現在の)ものに非ざればなり」とあるの義譯なり。

【五】還是昔我者　但是取自體
　若離彼諸取　復有何我耶
前二句は梵文には「我は同一にして取のみ異ると云はゞ」とあり、什譯も同じ。本論の譯は意義不明なり。後二句は梵文及什譯によく一致す。

【六】若取是我者　何處更有我
　由取起滅故　云何是取者
梵文及什譯第六偈に相當す。第五偈に相當するものは本論には缺く。取者は取の主體にして我と同じ。

【七】若異於彼取　有我者不然
　離陰應可取　而不可取故
梵文及什譯第七偈に相當し、多少の出入あれど一致す。取

釋して曰く、今此の品はまた空の所對治を遮して諸見の空を解せしめんが爲めの故に說く。

[一]自部の人言ふ、有自體の五取陰は是れ見處なるが故なり。陰若し是れ無にして而も見處たるは、然らず。五陰が是れ見處なるは倶舍論中に說くが如し、彼の五陰は是れ苦、是れ集、是れ世間、是れ見處なりと。是の如き等は是れ有なるが故なり。

論者言ふ、然らず。今當に諸見を觀察すべし。此の中に論偈に說くが如し、

(一)[二]往昔過去世に、　我れは有たりしや無たりしや。
　是の常等の諸見は　皆先世に依りて起る。

釋して曰く、此れ謂く、我れ過去に於て是れ有たりしや是れ無たりしや、亦有亦無たりしや、非有非無たりしやとの是の如き諸見は過去世に依りて起る。世間の常、世間の無常、亦常亦無常、非常非無常等の四見は現在世の陰に因待するが故に『過去世の陰の常等の諸見は皆此れに依りて起る』と說く。『依』とは謂く緣なり。誰の緣となすや。謂く諸見の緣なり。『見』とは何の義ありや。謂く取等に執著するなり。論偈に說くが如し、

(二)[三]復た異の諸見あり、　未來の不起、未來の起等と、
　邊を執するは、　皆未來に依りて起る。

釋して曰く、此の諸見は過去世に依りて起る。世間の有邊、世間の無邊、亦有邊亦無邊、非有邊非無邊等の四見は現在の陰に因るが故に、未來當起の陰を名づけて後邊となす。今且く觀察せん。『先世に依止して諸見を起す』とは論偈に說くが如し、

(三)[四]過去世に我れ有りきとは　是の事則ち然らず。
　彼の先世の衆生は　是れ今世の者に非ざればなり。

釋して曰く、云何んが然らざるや。謂く時の別なるが故に、異業の所生なるが故に。譬ふれば餘

【一】本論で自部人と言へば、概して小乘諸派に對する大乘派をさすも、倶舍論の引用ありて、外道に對して佛敎派をさすが如し。倶舍論中の說として散文を以て「彼五陰者是苦、是集、是世間、是見處、如是等是有故、」と譯出せる文は、西藏譯に照せば先きの觀苦品第十二の最初に引用せる「苦集亦世間、見處及彼有、」といふ偈頌と全く同一文なり。兩文を一見しては到底同一偈文の異譯と認め難し。是れ亦譯語不統一の一例なり。

【二】往昔過去世　我爲有爲無　是常等諸見　皆依先世起　梵文及什譯と一致す。第二句「我」は梵文の第一人稱動詞abhūvam(私は存在した)の主格に相當するものなれば特に「我れ」と訓みたり。後にātmanの語が用ひらる。其れに相應する場合は漢譯も「が」と訓むべし。又第三句「常等の諸見」は「世間常等の諸見」の意なり。本譯には「世間」の語を省略せり。

【三】復有異諸見　執未來不起　未來起等邊　皆依未來起　「未來不起」「未來起」は譯適切ならず。起の原語はbhaviṣyāmiとあり、此語には「起る」の意もあれど此場合は「有

るが故に、智障と煩惱との體なる無明已に斷ずるが故なり。論偈に說くが如し、

（一二）無明若し已に斷ずれば、　諸行は復た生ぜず。[一四]
智慧を修習するが故に、　無明は乃ち斷ずることを得。

釋して曰く、此れ謂く、諸行は生ぜず。緣を闕くが故なり。種子無體なるが故に芽則ち生ぜざるが如し。今何の智を修習して無明を斷ずることを得るや。此の論中の所說の如きは、緣起を照らす智は、一切諸體の有自體を遮し、人法二無我の境界を解するの空智なり。『修』とは謂く數數習ふなり。論偈に說くが如し。

（一三）一一の支滅すれば　彼彼の支は起らず。[一五]
唯獨の苦陰聚は　名づけて正しく永滅すと爲す。

釋して曰く、此れ謂く、行道の一一の有支は對治道起るが故に則ち滅す。此等の有支の更に起らざるは行の滅するに由るが故なり。行滅すれば則ち識滅し、乃至生、老、死、憂悲等滅す。『唯獨の苦陰、正しく永滅す』とは、是れ世諦の所攝なるが故なり。若し第一義中ならば是の無明等は無起無滅なり。云何んが復た緣起と名づけん。佛は世諦に依るが故に第一義を說けり。我が義は是の如し。前偈に說くが如く、『世諦に依らずんば第一を說くこと能はず』。是を以ての故に我が所立の義を壞せず。此の品の初めに自部の人、我れに謂ひて『立義に過あり』と言へるは、今此の過なきを說かんが故に而も世諦緣起を以て物（人）をして信解せしめたり。是れ品の義意なり。佛無起を說けるが如きを名づけて緣起となす。此れ謂く、不起なるを說いて緣起となす。若し彼れ無起ならば云何んが滅あらん。若し能く無滅に於て無滅を覺すれば、緣起法を解すと名づく等なり。

釋觀邪見品第二十七

【一四】無明若已斷　諸行不復生　修習智慧故　無明乃得斷
梵文第十一偈に正確に一致す。什譯には此偈を欠く。

【一五】一々支滅者　彼々支不起　唯獨苦陰聚　名爲正永滅
唯獨は kevala（純なる）の譯語にして苦陰聚の形容詞なり。此偈多少の出入あれど梵文第十二偈、什譯第九偈に一致す。

老、病、死、憂悲、　　哀泣、愁、苦等あり。

釋して曰く、此れ謂く、また五陰の因を說いて有支の體となす。復た次に、五陰の因を有と名づくるは、謂く獨り五陰の因のみを有と名づくるに非ず。無色界の四陰の因もまた有と名づく。『生』とは謂く、先に陰體なくして今陰の起るありなり。『老』とは謂く變壞の相なり。『死』とは謂く陰體なきなり。『病』とは謂く身が苦の爲めに逼らるるなり。『憂悲』とは謂く愛別離、怨憎會等より內に燒燃を被り有相起るが故なり。『哀泣』とは謂く、所愛と及び福德ある眷屬を喪失し、此れに因りて聲を發して其の德行を稱し而も之を哀泣するなり。『苦』とは謂く身受なり。『愁』とは謂く心受なり。『勞倦』とは謂く身心疲極するなり。是の如く廣說す。

生等を皆名づけて苦となすは云何ん。論偈に說くが如し、

(九)[二二]愁と及び勞倦等とは、　皆生を以て因となす。
　獨り此の苦陰起り、　畢竟じて樂相無し。

釋して曰く、『獨り苦陰起る』とは、謂く、樂と和合せざるが故なり。『陰』とは謂く聚なり。『起』とは謂く生なり。『陰相續』とは是れ世諦所攝の緣起にして第一義に非ず。先品中に無起を說いて信解せしめしが如きが故に、我が所立は破せず。若し『生死の行は流轉す』と言はば云何んが是れ『不起』なるや。我れ今之に答へん。論偈に說くが如し、

(一〇)[二三]是れ謂く、　生死諸行の根本たり。
　無智者の所作にして、　實を見る者は爲さず。

釋して曰く、『諸行は生死の根にして無智の所作なり』とは、此れ謂く、無智者は諸行の無始より已來展轉して、緣より起り幻の如く燄の如くなる過患を見ざるが故に樂を求め、樂を求むるがための故に福、非福、不動等の諸行を造る。『實を見るものは作さず』とは謂く、聖道已に起りて眞實を見

【二二】愁及勞倦等　皆以生爲因　獨此苦陰起　畢竟無樂相　前偈の最後の句「哀泣愁苦等」より續いて其れ等と愁及勞倦等は皆生より起ると言ふ。後二句は梵文には「斯くして此の單に苦なる陰の現起あり」とあり、畢竟無樂相の句無し。

【二三】是謂爲生死　諸行之根本　無智者所作　見實者不爲　「生死諸行の根本」なる譯は意義不明なり。梵文によれば「それ故に無智者は生死の根本たる諸行を爲作す。それ故に無智者は作者にして、智者は如實を見るが故に然らず」とあり。

愛は又取の緣となる。　取には四種あり。

釋して曰く、此れ謂く、求欲するの相を而も名づけて『愛』と爲す。無聞と凡夫は樂受のための故に貪求の心を起す。刀蜜を舐めて後時に舌を傷くるの過患を覺せざるが如し。

若し樂受のために貪を起すは爾るべきも、云何んが苦受と不苦不樂受とに於て而も貪を起すや。謂く苦受と不苦不樂受ともまた愛の緣となるを以ての故なり。苦受を受くる時にもまた離を求むる心の生ずるあり。また是れ愛なり。是の故に過なし。

四取とは謂く、欲取、見取、戒取、我語取なり。云何んが『取』となすや。謂く積集の義なり。復た次に、愛の增長なるが故にまた卽ち是れ取なり。五欲の樂を得んがための故に追求の心を起すもまた名づけて取となす。論偈に說くが如し、

[一〇](七)取に由りて諸有あるが故に、　取者は有を起す。
取者無きを以ての故に、　苦を脫し諸有を斷ず。

釋して曰く、『有』は是れ業相なり。復た次に『有』は是れ『生』の異名なり。而も生の因法をまた名づけて『有』となす。若し爾らば云何んが卽ち因是れ果なるや。今現見するに因は果名を受くるが故なり。譬ふれば佛の出世の樂の如し。彼の識等の五支は果分なり。是れ現在世の所攝なるが故なり。而も無明と行とより生ずと言ふ。若し善知識に値ひて正法を聽聞し正思惟を起すことを得れば、苦樂等の諸行に於て能く無常、苦、空、無我等の行を見る。復た次に、諸行は無生にして自體空なり。彼の眞實智を起す者は復た愛を起さず。愛を起さざるが故に復た追求すること無し。上偈に說くが如し、『若し取あること無くば苦を脫し諸有を斷ず』と。此の義云何ん。謂く、取あるが故に『有』あり。若し取無くんば則ち『有』なし。『有』は云何の相なる。論偈に說くが如し、

[一一](八)五陰は是れ有の體なり。　有より次で生を起し、

【一〇】由取諸有故　取者起於有
以無取者故　脫苦斷諸有
梵文「取あるによつて取者に對して有は現行す。若し取無くば解脫して有は起らざるべし」とあるより見れば、右の漢譯第三句は疑問なり。意味上からも「取者」は「取」なるべきなり。

【一一】五陰是有體　從有次起生
老病死憂悲　哀泣愁苦等
梵文第八偈に正確に一致す。尙此偈の文義は次偈に續く。

(三)名色の體より　次第に六入を起し、
　情、塵等和合して　六觸を起す。

釋して曰く、云何んが『內の六入』となすや。謂く眼入、耳入、鼻入、舌入、身入、意入等なり。『眼入』とは色を以て境界となすが故なり。彼の清淨色は是れ眼識の所依止の處なるが故に、清淨色を名づけて以て眼入となす。是の如く聲等を以て境界となす彼の清淨色は是れ耳等の識の所依止の處なるが故に、清淨色を名づけて耳等の入となす。『意入』とは無間次第滅を以て彼の意入となす。云何んが『入』となすや。謂く識と及び心心數法等は清淨色中より起るが故に之を名づけて『入』となす。

何故に『觸』と名づくるや。謂く苦受、樂受、不苦不樂受等と各々和合するが故に觸と名づく。論偈に說くが如し、

(四)彼の眼と色と、　及び作意との三種と、
　名色とを緣と爲すに因り、　爾れば乃ち識生ずることを得。

釋して曰く、『識生ずることを得』とは、眼は色を以て緣となし、識は色を緣とするが故に而も識生ずることを得るが如く、是の如く耳は聲を以て緣となして耳識生ずることを得、乃至意は法を以て緣となして意識生ずることを得。云何んが『觸』と名づくるや。論偈に說くが如し、

(五)彼の色と識と眼等との　三種共に和合するを、
　是の如きを名づけて觸となす。　觸より受を起す。

釋して曰く、境界と根と意等との三種を一體となすが故に而も名づけて『觸』となす。觸を緣となすが故に三種の受を起す。論偈に說くが如し、

(六)受は起愛の緣となる。　受の爲めの故に愛を起す。

【六】從於名色體　次第起六入　情塵等和合　而起於六觸
第三句は梵文には單に「六入に依りて」とあり、西藏無畏論も同じ。什譯は「情塵識和合」として本論の譯と似たり。情塵は根境の義なり。

【七】因彼眼與色　及作意三種　與名色爲緣　爾乃識得生
作意は梵文には和合(sa-manvāhāra)とあり。又此偈什譯には欠く。

【八】彼色識眼等　三種共和合　如是名爲觸　從觸起於受
梵文第五偈に正確に一致す。

【九】受爲起愛緣　爲受故起愛　愛又爲取緣　取者有四種
梵文第六偈によく一致す。

なるが故なり。譬ふれば無色界には死有と生有にして中有なきが如し。何となれば、死有の中間に有身起るは是れ中陰に非ず、身は是れ報なるが故なり。譬ふれば現在に受得する所の身の如し。復た次に、有身起るは是れ苦諦の所攝なるが故なり。譬ふれば意體を以て身となすが(如し)。異處に往至して刹那刹那に相續隨つて起るが故に而も中有なし。一向に陰あるに非ず。汝中陰の義を立つるは是の義成ぜずと。

復た次に、中陰ありといふ者は言ふ、若し中陰なくんば云何んが後の受生の處に至るを得んやと。

復た次に、中陰なしといふ者は言ふ、死有より相續して生有に至る時には經を授くるが如く、燈を傳ふるが如く、印を行ずるが如く、鏡像の現ずるが如く、空に聲の響くが如く、水中の日月の影の如く、種子より芽を生ずるが如く、人の酢を見て口中に涎を生ずるが如く、是の如く後陰の相續起る時には中陰の往來して此を傳へ彼に向ふもの有ること無し。是の故に智者は應に是の如く解すべし。上偈に說くが如し、『識相續託し已りて爾の時に名色起る』と。

云何んが『名色』となすや。『名』に二種あり。一には謂く自ら諸趣に往く、二には謂く煩惱の爲めに使せられ強ひて諸趣中に入らしめらる。復た次に『名』とは謂く、無色の四陰を總じて名づけて『名』となす。

云何んが『色』となすや。『色』とは可變異の故に色と名づく。謂く四大と及び四塵等なり。獨り識のみ名色の緣となるに非ず。無明と行等も亦彼れの緣となる。

復た次に、『識は名色に緣たり』とは、識と及び無明等とは是れ定んで名色のために緣となるに非ず。有る處には化生の者ありて而も彼の六入のために緣となる。無色界に生ずる者の如し。此の識は但だ『名』のために緣となるのみ。論偈に說くが如し、「

の諸煩惱も亦後世を受くる識のために緣を作す。何故に獨り『諸行』とのみ言ふや。諸行に勝力あるが故なり。譬ふれば王者鬪戰して勝を得るとき獨り王のみ勝つに非ず、一切の兵衆も亦名づけて勝つとなすも、王は主たるに由るが故に『王勝つ』と言ふが如し。

復た次に、或は有る人是の如き意を起して言はん、『無明が不善の諸行の因となるは然るべし。但だ愚癡は是れ不善なるが故なり。云何んが善法の諸行のために因となることを得んや』と。此れ謂く、未だ無明を斷ぜずんば天女眷屬の樂を受けんと欲するがための故に而も諸の福德の行を造る。是を以ての故に無明も亦福德行のために展轉の因となるなり。

復た次に、生死は是れ第一義不善にして有らゆる福德の諸行も生死に繫屬さるれば皆不善と名づく。是を以ての故に無明は能く總じて諸行のために緣となるなり。

復た次に、善趣、不善趣、不動趣の三種の業には各々上中下の差別あり。是れ等の諸行を名づけて『諸趣に往くの業』となす。『諸趣に往く』とは諸師各々執すること同じからず。薩婆多人の如きは說いて言ふ、『彼の中陰あり、名色の相續ありて往いて生處に託するを以ての故なり』と。正量部人、[四]曇無毱多部人等は說いて言ふ『彼の中陰なし、但だ行を以て緣となして識起ることを得。爾の時に名づけて託生すと爲す』と。

復た次に、中陰ありと計する者は言ふ、有色の諸の衆生等は一處に於て滅すれば、是の有色の衆生より還つて[五]相續生じ無間に前後に起つて彼の異趣に至るを名づけて託生となす。相續隨つて生ずるが故なり。譬ふれば燈の如し。是を以ての故に名色は陰に依止して相續あり。死の刹那より受生の刹那に至るまで無間に生ずるが故に名づけて受生となす。譬ふれば現在の人、此より彼に到るが如しと。

復た次に、中陰なしといふ者は言ふ、色界の死有と生死との二有の中間には更に中有なし。有漏

【四】曇無毱多(Dharmagupta)部。法護部なり。以下有部、正量、法護の三部に於ける中陰有無の論を擧ぐ。

【五】相續。識相續の意なり。

が故に、名稱高遠にして一切世間に徧し。是の因縁を以ての故に名づけて佛となす。汝今、縁起法のために過を作さば自ら所欲に違す。論偈に說くが如し、

(一)無明の覆ふ所、　彼の三種の
　後有の諸行業を造作し、　此れに由つて諸趣に往く。

釋して曰く、『明』の所對治を名づけて無明となす。而も此の無明は能く衆生の智慧を覆障して後有の諸行を造作せしむ。云何んが『後有』と名づくるや。謂く、未だ生を受けざる者が不相離の和合の因果と共に後有に趣向するが故に名づけて後有となす。云何んが『諸行』と名づくるや。行に三種あり。一には謂く無我の法、二には謂く刹那、三には謂く三種の業なり。云何んが『三業』となすや。謂く福と非福と不動等なり。復た三種あり。謂く身と語と意となり。無明は獨り諸行の縁たるのみに非ず。亦能く識等の後支のために展轉して縁體となる。また獨り無明のみ衆生を覆障するに非ず。更に諸餘の煩惱あり。『行』とは謂く有爲法を造作するが故に之を名づけて行となす。論偈に說くが如し、

(二)諸行の因縁を以て　識は諸趣に託す。
　識相續託し已りて　爾の時に名色起る。

釋して曰く、云何んが『識』となすや。一一の物に於て分別して境界を取るが故に識と名づく。『託す』とは『生ずる』を言ふ。『行縁』とは謂く、行は識のために縁となるが故に『行縁』と名づく。また獨り諸行のみ識のために縁となるに非ず。彼の識生ずる時にまた諸の心數法ありて共に生ず。是を以ての故にまた諸の心數法を以て縁となす。

復た次に、『行が識に縁たり』とは、阿羅漢の如きは亦諸行あるも何故に後有に託する識のために縁とならざるか。彼の愛繩斷ずるを以ての故に後有に託する識のために縁とならず。是の故に愛等

【一】無明之所覆　造作彼三種
　後有諸行業　由此往諸趣
梵文「無明に覆はれたる者は後有のために三種の行を爲作し、その業によつて趣に往く」とあるに正確に一致す。

【二】以諸行因縁　識託於諸趣
　識相續託已　爾時名色起
梵文によく一致す。「託す」とは「入る」の義なり。又「識相續」は屢々用ゐられる熟語にして單に「識」とあると同義なれど、識は相續の狀態に於てあるが故に斯く言ふ。

〔三四〕此の品初の鞞婆沙等の所立の驗は、論主已に其の過を説きて、涅槃に自體有ること無きを顯示せり。是を以ての故に此の下に經を引いて顯成せん。梵天王所問經の偈に言ふが如し、『實には涅槃あること無し。如來涅槃を説くは虚空の自ら結するが如く、虚空の自ら解くが如し』と。梵王、佛に白して言ふ、『若し有分別の衆生が一切法の起あり滅あることを得んと欲すれば、佛は其の人に於て亦出世せず。若し涅槃に於て分別の相を起して是れ有體なりと言はば、然も彼の衆生は決定して生死を出づること能はず。世尊よ、涅槃は其の義云何ん。一切の相皆寂滅するを是れを涅槃となす。一切の所作皆已に謝せるを是れを涅槃となす。世尊よ、愚癡の衆生は佛法中に於て出家することを得と雖も、而も外道の見中に墮して涅槃の體を求む。麻中に於て油を求めて指手して得と言ふが如し。何ぞ乳中に異にして生酥を求覓せん。若し一切法の畢竟寂滅中に於て涅槃を求むれば乃ち是れ邪慢外道中の聲聞にして、佛法中の聲聞に非ず。若し是れ正見成就の行者ならば一法として起あり滅ありと作さず。また一法を證獲することを得んと欲せず。また聖諦の理を見ず』と。摩訶般若中に説くが如し、『佛、須菩提に告ぐ、涅槃は幻の如く夢の如く、影の如く燄の如く、鏡中の像の如く、水中の月の如く、乾闥婆城の如し』と。

〔一〕釋觀世諦緣起品第二十六

釋して曰く、今此の品は亦空の所對治を遮するに而も世諦緣起を以てせんが爲めの故に説く。

自部の人、我れに謂ひて言ふ、彼れ先に『如來は處所無く、一法として爲めに説くこと無し』と言へるは其の義然らず。

論者言ふ、我れ今當に説くべし。如來は一切の外道及び人天等の衆生を驚怖せしめ、諸の惡見の過患を息めしめんと欲するがための故に緣起法を説きたまへけり。佛は緣起法を覺了するに由る

【三四】以下品末の教證。梵天王所問經及び摩訶般若波羅蜜經。最初に梵天王所問經の偈として、

實無有涅槃　如來説涅槃　如虚空自結　如虚空自解

と記されをるも、西藏譯及び觀誓の廣疏に依れば、之は梵天王所問經の偈にあらずして、別の經偈なり。梵天王所問經の文は「梵王白佛言」以下の長行のみ。なほ西藏譯に於ては、本品の最後に大寶積經中の菩薩藏會の文及び楞伽經の偈等を引證せるも、本漢譯に於ては之等をすべて省略せり。

【一】羅什譯中論の品名は「觀十二因緣品」、梵本には「觀十二支品」とあり、「十二因緣」は「十二支」に對する漢譯語にして「十二緣起」と云ふと同じ。「世諦緣起」とは特色ある言葉なるが、要するに十二支緣起説をさす。之に對して前品までに出でたる、法の無自性を意味するところの龍樹獨自の緣起説は「第一義緣起」と謂ひつべきものなり。

るが爲めの故に、名づけて大乘となす。第一義佛あるが故に彼の佛に依止して而も化身を起し、此の化身より說法を起す。第一義佛が說法の因となるに由るが故に我が所立の義を壞せず、亦世間の所欲を壞せず。

〔三三〕復た次に薩婆多人は言ふ、如來所說の法は皆是れ分別あるが故に法を說くなり。衆生を化する心自在の願力が說法を起すの因なるを以ての故なり。譬ふれば聲聞等の爲めに法を說くが如しと。

論者言ふ、是の義は然らず。化佛が法を說くは是れ無分別なり。汝の語の一向に分別なるが如きに非ず。

薩婆多人言ふ、佛は無分別にして而も爲めに法を說くは然らず。無分別なるが故なり。譬ふれば土塊の如し。

論者言ふ、化佛と第一義佛とは異を說くべからざるが故なり。世諦中に佛あるは遮せず。世諦中に彼の第一義佛が說法の因となるは亦遮せず。第一義中には如來は無戲論なるが故に如來を分別して、若しくは悲あり若しくは悲なしといふは是れ戲論なり。是の如き戲論は悉く皆無體なり。悲愍せらるる衆生と及び能く悲を起す者とも皆無體なり。汝先に『若し世諦中に悲あらば、謂く石女の兒に哭くが如し』と說けるが如きは、是の喩は然らず。『悲』とは云何の想なる。謂く他の苦あることを見て憂苦の心を起す、是れを悲相と名づく。譬ふれば慈母の極愛の子を憐むが如し。諸佛菩薩が諸の衆生に於て憐愍の心を起すも亦復た是の如し。縱ひ石女をして悲憐の心あらしむるとも我れに於て何ぞ妨げん。而も復た爾らず。譬ふれば龜毛の如し。空と太虛空とは相似せず。是の故に設ひ悲あるも諸佛の悲心と石女の悲心とはまた相似せず。諸佛の悲は無量劫より來た積集熏修して究竟に具足し、一切諸の衆生界に徧滿す。若し石女に此の悲なくんば更に復た『世諦に悲あるは石女の悲と相似す』と言ふこと莫れ。

【三三】有部の見に對する批評五。

復た次に、先佛所說の法に於て自ら解し自ら證するが故に、一切諸法は皆先佛已に說き今佛隨順して說いて一字を加へず。是を以ての故に『如來は處所無く、一法として爲めに說くこと無し』。

復た次に、第一義中には一切諸法は畢竟して空なるが故に一法として總相の智のために、別相の智のために取らるべきもの有ること無し。是を以ての故に『如來は處所無く、一法として爲めに說くこと無し』。金剛般若經に說くが如きは、『如來の菩薩たりし時、〔三二〕定光佛の邊に一法として受くべき無し』と。何となれば、不可取、不可說なるが故なり。諸の外道等は甚だ憐愍すべし。我れ今此の『無體』、『自體空』の最上乘の所說の道理を以て其の邪辯を破す。然も彼の外道は惡見の道理に依止して自ら己れの宗の過を覆藏し、其の所見に執して是の偈を說いて言ふ、〔三三〕

彼の第一義中に、佛本と法を說かず。　佛は無分別ならば、大乘を說くは然らず。
化佛が法を說くは、是の事則ち然らず。　佛は心に法を說くこと無し、化は是れ佛に非ず。
第一義中に於て彼れ亦法を說かず。　無分別にして性空なればなり、悲心あるは然らず。
衆生無體なるが故に亦佛體あること無し。　彼の佛無體なるが故に亦悲愍の心なし。

外道等は論者に謂ひて言ふ、彼の佛法中に若し『世諦中に悲愍あり』と言はば、猶し石女の兒に哭くが如し。

論者言ふ、此の中に第一義を明さば一相なるが故に所謂る無相なり。佛無くまた大乘無し。第一義とは是れ不二の智の境界なり。汝偈を說けるは正に是れ我が佛法の道理を說けるなり。今當に汝の爲めに如來の身を說くべし。如來の身は無分別なりと雖も先に利他の願力を種えて大誓の莊嚴熏修を爲せるを以ての故に、能く一切衆生を攝し一切時に於て化佛の身を起し、此の化身に因りて文字章句の次第して聲を出すあり。一切の外道、聲聞、辟支佛に共ならざるが故なり。而も二種の無我を開演して第一義波羅蜜を成就せんと欲するが爲めの故に、最上乘に乘る者を成就せんと欲す

【三二】 定光佛の原語は Dīpaṃkara にして、錠光、燃燈、燈作と譯す。過去久遠の昔に出現したまひし如來にして、釋尊に別記を授けたまひし師佛なり。

【三三】「彼第一義中　佛本不說法
　佛無分別者　說大乘不然」
「化佛說法者　是事則不然
　佛無心說法　化者非是佛」
「於第一義中　彼亦不說法
　無分別性空　有悲心不然」
「衆生無體故　亦無有佛體
　彼佛無體故　亦無悲愍心」

本論に於ては之等四偈に續きて「外道等謂論者言、彼佛法中、若言世諦中、有悲愍者、猶如石女哭兒」」といふ長行を追記せるも、西藏譯に於ては漢譯の四偈に相當する部分が三偈となり、漢譯の長行に相當するものが一偈となる。惟ふに西藏譯の第四偈は世俗による慈悲の不實なることを娼婦の歔欷に譬へたるものなるを以て、斯る醜猥なる意味を頌出するに忍びず、故意に長行中に追說して、しかも醜猥なる部分を「石女哭兒」と佳譯すると同時に、原典に於ける前三偈を敷衍して四偈に譯出し、以てその偈數を原典に一致せしめたるならん。

故に、所證の眞實法は言說すべからず。上偈に說くが如し『如來は處所無く、一法として爲めに說くこと無し』と。

復た次に、如來の說法とは云何ん。諸有を攝せんが爲めの故に無量千劫に福智の聚を積集し、佛身は此の福智の聚より生ぜり。譬ふれば如意珠に悉く能く一切の色像を顯現するが如し。一切衆生の心自在の願力を以ての故に、如來より無功用に聲の出づる有りて三乘を攝す。佛の身力の故なり。所有の聞者は迷ふが故に謂ひて『如來我が爲めに法を說く』と言ふ。『爲めに法を說く』とは世諦中に於て施設して有るのみ。

復た次に、陰は如來に非ず、陰を離れて亦如來無し。先に已に觀ぜるが故なり。如來の名は一物あること無く、能く說く者なく、また聽者なく、また說處なし。實體無きを以ての故なり。上偈に說くが如し『如來は處所無く、一法として爲めに說くこと無し』と。

復た次に、諸行に所造作なく、及び諸行聚是れ無漏にして二障倶に斷じ、不共佛法の爲めに等しく依止と作る、此の四法を具するが故に如來と名づくるなり。彼の諸行聚は所造作なきが故に說法あるは然らず。乃至聽法者は是れ有漏の行聚にして而も『聽者』『受者』と言ふは皆是れ言說にして實體有ること無し。第一義中には幻の如く化の如し。誰か說き誰か聽かん。是を以ての故に『如來は處所無く、一法として爲めに說くこと無き』なり。

復た次に、如來は菩薩道を行ぜる時、宿願力を種えて自在に〔三〇〕四攝法を以て諸の衆生を攝せり。是の諸の衆生は定報を種うる善根因緣力を以ての故に、信樂の諸根と心願の自在に由りて一切衆生をして歡喜せしめんが爲めの故に、六十種に具足して無功用に法を說く。聲は如來に依りて起る。然も如來は常に定心にして功用力の所作無く覺觀の體無し。而も『聲の出づる有り』と言ふは是れ皆然らず。是の如きを以ての故に『如來は處所無く、一法として爲めに說くこと無し』。

〔三〇〕四攝法とは菩薩が衆生を度脫せしめんが爲に、先づ用ゐて衆生を攝招する四種の法にして、布施攝（法施財施を以てする攝法）、愛語攝（親愛の言葉を以てする攝法）、利行攝（身口意三業の善行を以て衆生を利益する攝法）、同事攝（形を變じて衆生に親近して、衆生と事業を同じうし、以て引導する攝法）即ち是れ也。

能分別滅するが故に、　所分別も亦亡す。

論初より已來諸法を推求するに、有もまた無く無もまた無く、亦有亦無もまた無く、非有非無もまた無し。是れを諸法實相と名づく。平等の性空にして諸の戲論を滅し安隱の道を得。若し世諦中に依りて因を出さば、已に前に過を說けるが如し。

[二八]修多羅人言ふ、第一義中に涅槃あり。佛は衆生をして證得せしめんが爲めの故に、根を觀じ、心を觀じ、法を觀じ、時を觀じ、方を觀じて爲めに法を說けり。若し涅槃なくば佛は應に此の說法を作し乃至八萬四千の諸行煩惱の對治門を說くべからず。涅槃を得しめんが爲めに而も所說あり。故に涅槃あり。

論者言ふ、第一義中に『說法』を以て因となして、汝爾ることを得んと欲するや。論偈に說くが如し。

（二八）[二九]有所得は皆謝し　戲論息みて吉祥なり。
如來は處所無く、　一法として爲めに說くこと無し。

釋して曰く、『有所得は皆謝す』とは謂く、有所得の境界無體なるが故に、有所得の心も亦無體なり。復た次に、有所得の境界は無爲なるが故に有所得の心も亦起らず。是の如く一切の有所得は皆謝す。『戲論息む』とは謂く、有所得の境界無體にして彼の境界の言說の相も亦起らず。是を以ての故に『戲論息む』と名づく。『吉祥』とは謂く、一切の災殃悉く無體なるが故に名づけて吉祥となす。彼の所起の分別性なる一切法は成ぜず、及び一切法は不可說なるに由るが故に、第一義中に『說法』を以て因となすは、上偈に說くが如く『如來は處所無く、一法として爲めに說くこと無き』なり。

復た次に、自覺所得の眞實法は言說すべからざるに因る。然も此の言說は分別の境界と同じきが

【二八】 諸部の見に對する批評三。

【二九】 有所得皆謝　戲論息吉祥
如來無處所　無一法爲說
梵文及什譯第二十四偈に相當しよく一致す。有所得(upalambha)は「覺知」の義。後二句は「如來は何處に於ても、誰の爲にも、何の法をも說かれしこと無し」の意なり。

復た次に、若し第一義中に此の見あらば彼の對治法は然るべし。今此の諸見を觀ずるに無なるが故に、論偈に説くが如し、

(二五)[二四]滅後の有無等と　及び常等の諸見とは、
　涅槃と前後際とが　諸見の所依止なり。

釋して曰く、此れ謂く、如來の滅後に如來有りとなすや、如來無しとなすや、亦如來有り亦如來なしとなすや、如來有るに非ず如來無きに非ずとなすや。世間の有邊、世間の無邊、亦有邊亦無邊、非有邊非無邊、乃至世間の常、世間の無常、亦常亦無常、非常非無常の、是の如き四見は十二種あり、『如來の滅後』は涅槃に依りて起り、『世間の邊』等は未來に依りて起り、『世間の常』等は過去に依りて起る。是の如き等の見は云何んが起るや。虚妄分別の習氣の過あるに由るが故なり。然も此の分別の自體有ることなきは已に開解せしめたり。是を以ての故に論偈に説くが如し、

(二六)[二五]諸體は悉く皆空なり。　何の有邊、無邊、
　亦邊亦無邊、　非邊非無邊なる。

(二七)[二六]何ぞ此彼の物あらん。　何ぞ常、無常、
　亦常亦無常、　非常非無常あらん。

釋して曰く、是の如き等の分別の所依止の境界は無體なり。彼の依止無體なるが故に分別の心も亦無體なり。何となれば、一切法は一切時に一切種に衆緣和合より生じて畢竟空なるが故なり、無自性なるが故なり。是の如き法中何者か有邊なる。誰か邊、亦邊亦無邊、非邊非無邊ありとなすや。乃至何者か是れ身なる。誰か有身となす。身と神とは一なり、身と神とは異なりとの、是の如き等の六十二見は畢竟空中に於て皆不可得なり。是を以ての故に修多羅中の偈に説くが如し、

[二七]所分別既に無し、　分別は何處に起らん。

【二四】滅後有無等　及常等諸見
　涅槃前後際　諸見所依止
梵文及什譯第二十一偈に相當し、大體に於て一致す。第二句は梵文什譯共に「有邊等と常等の見」として、邊、常の兩見を擧ぐ。偈意は「如來滅後の有無の見は涅槃に基き、有邊等の見は後際に基き、常等の見は前際に基く」と言ふなり。

【二五】諸體悉皆空　何有邊無邊
　亦邊亦無邊　非邊非無邊
梵文及什譯第二十二偈に相當し、よく一致す。第一句「體」は dharma（法）の譯語にして唯一例なり。

【二六】何有此彼物　何有常無常
　亦常亦無常　非常非無常
梵文及什譯第二十三偈に相當し、よく一致す。第一句は義譯にして「何の同、何の異あらん」の意なり。什譯の「何者爲一異」が正確なり。

【二七】所分別既無　分別何處起
　能分別滅故　所分別亦亡

涅槃の邊と生死とは　亦少しの差別無し。

釋して曰く、此れ謂く、生死と涅槃とは同じく無所得なり。是の二俱に不可得なるが故なり、亦分別性の無なるが如きが故なり。生死涅槃は皆不可得なるを已に信解せしめたり。是の故に汝の所說の如く『涅槃を得んが爲めに而も精進を起す』を因となすは其の義成ぜず、亦義に違す。今涅槃と生死とを以て開解せしむれば、論偈に說くが如し、

（二四）[二二]生死の際は涅槃なり、　涅槃の際は生死なり。
此の二の中間に於て　少許の法有ること無し。

釋して曰く、『涅槃』とは眞如法界空の異名なり。眞如は別異なきが故なり。譬ふれば虛空に方の殊別ありと雖も異相なきが如し。

[二三]鞞婆沙人言ふ、彼れ『一切の惡見は皆空を以て能く出離す』と、及び涅槃は是れ空なることを得んと欲するも、若し『涅槃は是れ能く諸見を對治すること無し』と謂はば然らず。是の故に涅槃有り。是れ對治するが故なり。譬ふれば明の闇を對治するが如し。

論者言ふ、此の中に燈光の能く照らすと及び有體なるとは成ぜざるが故に汝の喩は無體なり。是れ能成立の過なり。我れ『空』と言ふは一切諸法の不可得なるを謂ふなり。卽ち是れ有所得の對治を說く。然も彼の有所得の境界は一切時に不可得なるが故なり。而も空は是れ有體に非ず。無生なるが故なり。譬ふれば空華の如し。また是れ無に非ず。先に已に說きて遮せるが故なり。空に執著すれば亦是れ邪見なり。是の故に智者は應に此の執を捨すべし。若し無智者が空の有體を執すれば、空は有體なるが故に則ち利益なし。寶積經に說くが如し、『佛、迦葉に告ぐ、若し人あり、能く空を見ると言はば、我れは彼の人不可治なりと說く』と。是の如きが故に空義は成ぜず。汝『對治』を言ひて因となすは因義成ぜず。

【二二】生死際涅槃　涅槃際生死
於此二中間　無有少許法
梵文及什譯第二十偈に相當し大體に於て一致す。梵文には「かの涅槃の邊際たるものは生死の邊際なり。兩者には如何なる微細の相違も無し」とあり。

【二三】有部の見に對する批評四。

(一九)[一六]汝若し涅槃は　　非體非非體なりと說かば、
　體非體が若し成ずれば　二の非體も亦成ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、明と闇とは明あるが故に闇を說くべきが如く、是の如く體非體あるが故に非體非非體あることも成ずることを得。復た次に論偈に說くが如し、

(二〇)[一七]非體非非體が　　若し是れ涅槃ならば、
　是の如き二の非體は　何の法を以て能く了せん。

釋して曰く、此れ謂く、若し智を以て能く了すと言はば此の智は先に已に遮せるが故なり。論偈に說くが如し、

(二一)[一八]如來滅度の後に　有と無とを言はず。
　また有無と　非有及び非無とを言はず。
(二二)[一九]如來現在世にも　有と無とを言はず。
　また有無と、　非有及び非無とを言はず。

釋して曰く、此れ謂く、身中に神有りて神と身と一なるか、神と身と異なるか、身を離れて神有るか、卽ち身是れ神なるかは、諸の不記中に皆說かず。是の故に第一義中に涅槃は成ぜず。汝の出因の義も亦成ぜず。其の過は汝に在り。

[二〇]毘婆沙人は復た言ふ、第一義中に涅槃あり。生死を怖畏する者は彼れを求めんが爲めの故に勤精進を起す。求者が無法を得んが爲めの故に勤精進を起すことを見ず。

論者言ふ、我が宗中の如きは人の彼の涅槃を得するもの有るを見ず。第一義中には生死と及び涅槃とは倶に無差別なるが故なり。論偈に說くが如し、

(二三)[二一]生死の邊と涅槃とは　少しの差別有ること無し。

【一六】汝若說涅槃　非體非非體
　體非體若成　二非體亦成
　梵文及什譯第十六偈に相當し、よく一致す。「體、非體」は同じく「有、無」の義。第四句「二の非體」は「有と無との二つについての否定」の意にして、非有非非有の句をさす。

【一七】非體非非體　若是涅槃者
　如是二非體　以何法能了
　梵文及什譯第十五偈に相當しよく一致す。

【一八】如來滅度後　不言有與無
　亦不言有無　非有及非無
　梵文及什譯第十七偈に相當し、よく一致す。上來「體、非體」の語を用ひしを玆に至つて「有、無」の語を用ふ。全く同義なり。

【一九】如來現在世　不言有與無
　亦不言有無　非有及非無
　梵文及什譯第十八偈に相當しよく一致す。

【二〇】有部の見に對する批評。

【二一】生死邊涅槃　無有少差別
　涅槃邊生死　亦無少差別
　梵文及什譯第十九偈に相當し、よく一致す。但し梵文什譯共に「邊」の語無し。此の譯者の補足なるべし。

論者言ふ、汝の所立は其の義然らず。論偈に說くが如し、

[一三](七)若し汝、涅槃は　是れ體にして是れ非體なりと說かば、
涅槃は是れ體なるが故に　解脫なるは然らず。

釋して曰く、此れ謂く、體と非體とは相違するが故に、若し是れ體ならば則ち非體に非ず。若し是れ非體ならば則ち是れ體ならず。若し相待ならば則ち體と非體との相あらん。是の如く說くは義相應せず。何となれば、分別執著の過あるが故なり。

犢子部言ふ、涅槃は云何んが『非體』なる。謂く身と及び諸根との無體なるが故に名づけて非體となす。云何んが是れ『體』なる。謂く畢竟無上の樂あるが故に名づけて是れ體となす。

論者言ふ、此の語は善ならず。身と諸根と及び覺等とは已に遮せるが故なり。亦即ち是れ無起等を遮す。『畢竟無上の樂』は有爲の起を遮し亦彼の樂を遮せるが如し。若し無爲の樂を以て物(人)をして解せしめんと欲すれば此の驗の體なく、汝の所立の義は相應せず。復た次に、若し『涅槃は有自體なり』と言はば論偈に說くが如し、

[一四](八)若し汝、涅槃は　二倶にして有自體なりと說かば、
涅槃は是れ無爲にして　二體は是れ有爲なり。

釋して曰く、此の偈は何の義を顯すや。謂く體非體の外に別に涅槃の相あることを顯す。若し彼の法が此の法と別相ありて而も是の法の體なるは然らず。譬ふれば水と火との如し。是の如く體と非體とを涅槃の相となすは然らず。

[一五]復た次に修多羅人言ふ、涅槃は非體非非體なるが故に倶に不可說なり。彼れ向に『二體の過あり及び有爲なり』と言へるは然らず。

論者言ふ、亦是の事無し。今此の語に答へん。論偈に說くが如し、

【一三】若汝說涅槃　是體是非體
涅槃是體故　解脫者不然
梵文及什譯第十一偈に相當し、前二句は正確に一致す。「是れ體にして是れ非體」とは有と無との兩性質を有することなり。
後二句は梵文には、涅槃が有にして無ならば「有と無とは解脫たるべきも其は然らず」とあり、什譯も同じ。本論の譯は著しく異る。

【一四】若汝說涅槃　二倶有自體
涅槃是無爲　二體是有爲
梵文及什譯第十三偈に相當し、多少の出入あれど大體に於て一致す。「二倶」は有と無との兩性質を有すること。「二體」も有と無とをさす。後二句は「有と無とは有爲にして涅槃は無爲なり」との意を顯はす。

【一五】經部の見に對する批評。

釋して曰く、鞞婆沙等は涅槃は是れ第一義なりと分別し、善く煩惱を息むるを以て因と爲す。今汝の義は是の如き體に非ざるが故に而も『涅槃は無體なり』と言ふは無善等となすや。義皆然らず。譬ふれば空花の如し。若し『涅槃は無實にして無自體なり』と言はば、是の如き驗は能く『涅槃は無體に非ず』といふ者を開解せしむること無し。汝の所說は人をして解せしめ難し。復た次に、鞞婆沙は『涅槃は先に有體にして後無體なり』と分別し燈を以て喩となすは、此れは是れ世間の所解を顯示するなり。燈未だ滅せざる時には有體にして、滅し已れば是れ無體なるを以てなり。若し汝無體を計すること彼の『已滅の燈』に同じくば向の偈に說けるが如し、『若し涅槃無體ならば云何んが是れ無因ならん』と。此れ謂く、燈無體にして而も因ありて施設して燈と作すが如く、是の如く、諸陰と煩惱とは無體にして而も因ありて施設して涅槃となす。論偈に說くが如し、

(五)[一〇]涅槃は無體に非ずして　而も因を藉らざる者なり。
　若し無因無緣ならば　是れを名づけて涅槃と爲す。

釋して曰く、汝の所說の如きは涅槃の無體なるは是れ第一義なり。是を以ての故に來去流轉の相あるに因りて生死ありと施設す。涅槃の有體無體は是れ世諦中の所說にして第一義に非ず。論偈に說くが如し、

(六)[一一]大師の所說は　有を斷じ非有を斷ずと。
　是の故に知る、涅槃は　無に非ず亦有に非ず。

釋して曰く、經に說くが如し『或は有る人は有を以て有を出でんことを求め、或は有る人は有を以て有を出でんことを求めず』と。是れ皆然らず。若し『涅槃是れ體なり』と言ふは然らず。[一二]犢子部言ふ、我れ今涅槃を立つること彼れと同じからず。是れ體の義あり、非體の義あり。二義あるが故に上の如き過なし。是の義應に爾るべし。

【一〇】涅槃非無體　而不藉因者　若無因無緣　是名爲涅槃
前二句は梵文及什譯第八偈後半に相當し、後二句は第九偈後半に相當す。(中論註參照)。

【一一】大師所說者　斷有斷非有　是故知涅槃　非無亦非有
梵文及什譯第十偈に相當す。

【一二】犢子部の見を批評す。一體、非體は有、無の語と同一にして、「涅槃は有にして無」と立つるなり。

釋して曰く、此れ謂く、涅槃の有自體は驗して信解せしむべき無し。若し涅槃をして有體ならしむれば卽ち老死相に墮す。何となれば、有體にして老死相を離るるもの無く、また老相死相にして體を離るるもの無ければなり。小乘の人は涅槃に老死相あることを欲せず。是を以ての故に我が出驗の如きは『第一義中には涅槃は是れ體に非ず。老死相なきが故なり。譬ふれば石女の兒の如し』と。是の故に汝の宗は因義成ぜず。因成ぜざるが故に、亦正義と相違するが故に。

復た次に、今更に過を與へん。若し汝、涅槃が是れ有爲なることを欲せずして而も涅槃は是れ無爲なるを得んと欲するは然らず。處として一物の是れ體にして復た是れ無爲なるもの有ること無し、今當に驗を立つべし、『涅槃は是れ體に非ず、無爲なるが故なり。譬ふれば空華の如し』と。復た次に、更に其の過を說かん。論偈に說くが如し、

(三)[七]涅槃若し有體ならば　　云何んが是れ無因なる。
亦一法として、因を離れ有なることを得るもの　有ること無し。

釋して曰く、此れ謂く、『體』は皆因を藉りて施設あることを得。涅槃が是れ體ならば無因なることを得ず。是を以ての故に此の中に驗を出す『涅槃は是れ體に非ず、無因にして能く施設するが故に譬ふれば兎角の如し』と。

[八]多摩羅跋及び修多羅人等は言ふ、(多摩羅跋とは唐に赤銅葉と言ふ)、鞞婆沙師の如きは『涅槃は燈の滅するが如し』と說くも、我れ今涅槃を說かば但だ是れ無起なるのみ。世諦中に於て施設して有なるが故なり。我が所立は其の義相應すと。

論者言ふ、今此れに答ふれば論偈に說くが如し、

(四)[九]汝、涅槃が體に非ずんば、　云何んが是れ無體なる。
若し涅槃が無體ならば、　云何んが是れ無因なる。

【七】涅槃若有體　云何是無因　亦無有一法　離因而得有
梵文及什譯第六偈に相當す。「有體」は有の義。無因は anupādāya（受けずして）の譯語にして、什譯は「無受」とするも、「受けず」は此場合「據らず」の義を含蓄し、無因の譯は正し。

【八】多摩羅跋。經部の說を擧げ、有部の立場より尙論者に近きも、未だ至らずとして難ず。

【九】汝涅槃非體　云何是無體　若涅槃無體　云何是無因
前二句は梵文及什譯第七偈の前半に相當す。卽ち「涅槃が有に非ずば、如何にして無が涅槃ならん」(梵文)「有尙非涅槃、何況於無耶」(什譯)とあり。
後二句は梵文及什譯第八偈の前半に相當す。卽ち「若し涅槃が無ならば其は如何にして無受ならん」(梵文)「若無是涅槃、云何名不受」と。

復た次に鞞婆沙人言ふ、彼の偈に『若し一切が空に非ずんば則ち起滅あること無し。斷苦と證滅と無し。復た離か涅槃を得ん』と說けるが如きは然らず。我れ今涅槃有りと立つ。云何んが涅槃となすや。謂く第一義中には諸行は自體あり。諸の煩惱を斷じ及び名色を滅して涅槃を得るが故なり。駝角の如きに非ず。涅槃は爾らず。有體、有斷、有滅、有得なるが故なり。

論者言ふ、先の偈に『若し一切が空に非ずんば則ち起滅あること無し。斷苦と證滅と無し。云何んが涅槃を得ん』と說けるが如きは此れ謂く、有自體ならば壞すべからざるが故なり。『自體』は若し是れ自宗の出因と立喩とに相似あらば、所成と能成とは則ち力ありとなすも、而も今此の力なきが故に因と喩との義は亦成ぜず。又また汝の先の所立の義に違す。我れ今問はん。汝所立の涅槃は是れ第一義諦となすや、是れ世諦と爲すや。若し是れ第一義諦なるを得んと欲すれば我れ今之に答へん。論偈に說くが如し、

（一）無退にして亦無得、　非斷にして亦非常、
　不生にして亦不滅、　此れを說いて涅槃となす。

釋して曰く、此れ謂く、是の如き涅槃は我が得んと欲する所なり。汝の所說の如きは『斷の故に』『滅の故に』を出因等と爲して、諸の煩惱を斷じて涅槃を得すといふは、此等の因の義今皆成ぜず。顚倒の心の故に是の如き說を作すも義皆然らず。

復た次に、諸の涅槃ありと執する者、或は『涅槃は是れ眞實の法』と說き、或は『涅槃は是れ施設の法』と說くも二つ倶に然らず。是の義を以ての故に次に須く觀察すべし。論偈に說くが如し。

（二）涅槃が有自體ならば　卽ち老死相に墮す。
　涅槃が是れ體ならば　卽ち是れ有爲法なり。

【四】有部の見に對する批評の二。「彼」とは論者をさす。

【五】無退亦無得　非斷亦非常
　不生亦不滅　說此爲涅槃
梵文及什譯第三偈に相當しよく一致す。第一、二偈に相當するものは本論には別出せず、其の意は上來の長行中に出でたり。「無退」はaprahīṇam（棄てられることなき）の譯語なり。

【六】涅槃有自體　卽墮老死相
　涅槃是體者　卽是有爲法
此偈梵文及什譯第四、五偈を綜合せる偈なり。前二句は第四偈の前半に相當す。卽ち「涅槃は實に有に非ず。（涅槃若し有ならば涅槃に）老死相あらん」（梵文）「涅槃不名有、有則老死相」（什譯）とあり。又後二句は梵文及什譯第五偈前半に相當す。（中論註參照）。「體」は bhāva の譯語にして「有」の義なり。

卷の第十五

釋觀涅槃品第二十五

釋して曰く、今此の品は亦空の所對治を遮して涅槃無自體の義を解せしめんが爲めの故に說く。

鞞婆沙人は言ふ、[一]彼れ先に『若し一切が空に非ずんば則ち起滅あること無し』と言へるは、此れ謂く無自體の義なり。無自體ならば石女の兒の如く則ち起滅なし。煩惱は無自體なるが故に是れ起滅に非ず。而も煩惱と及び名色の因とも亦起滅に非ずんば上偈に『斷苦と證滅と無く、復た誰か涅槃を得ん』と說けるが如し。彼れ先に已に此の說を作せば、[二]我れ今所斷あるが故に涅槃を證することを得んと欲す。經の所說の如きは『染と染者と共に煩惱を起す。此れ盡く滅するが故に名づけて涅槃となす』と。是の如く涅槃には心解脫を得。譬ふれば燈の滅するが如し。涅槃を得るは煩惱に自體有るに由るが故なり。彼れ上に無自體と說けるが如きは、若し煩惱の體なくんば亦涅槃無し。譬ふれば石女の兒の如し。復た次に、若し無自體を以て驗をなすに涅槃を得ること無くんば亦得涅槃の義を破す。卽ち是れ差別の法體を破するなり。是れ彼れの立義と出因の過なり。

論者言ふ、汝の說は善ならず。諸法無自體ならば幻の如し。燈の滅するは是れ亦世諦智の境界に違せざるが故なり。無自體ならば無始の因緣より展轉して起り幻の如く燄の如し。諸行の無起なるが卽ち是れ涅槃なり。涅槃を證得するも亦復た是の如し。自體有ること無し。我れ亦『無體の體』[三]を立てさるが故に立義の過に非ず。上に石女を引いて喩となせるは第一義中に於て成ずることを得。汝有自體の義を執すれば壞すべからざるが故に所斷あるは然らず。是を以ての故に若し眞實の理を見ずして而も『自體有り』と說かば得涅槃の義は成ぜず。法の自體壞するが故なり。是の事云何ん。汝の向の出因と立義と譬喩との三法は皆成ぜざるが故に過あり。

【一】「彼」とは問難者より見たる論者なり。「若一切非空則無有起滅」は前品第二十偈をさすと見てもよし。又此の品の初めに本來有りし「若一切非空、則無有起滅、無斷苦證滅、復誰得涅槃」の一偈をさすと見てもよし。

【二】以下有部の見に對する批評一。以下「煩惱有自體なるが故に之を斷じて涅槃を得す」と云ふ有部の義を立つ。

【三】無自體なることを本性として存立する如き或るもの。「無體の體」の「體」は存在物(bhāva)なり。

論者言ふ、『見諦』とは何の義ありや。

自部の人言ふ、謂く內の諸入等の有自體を見るなり。顛倒せざるが故に。

論者言ふ、汝所說の起等の道理は先來より已に遮せり。見苦等の無起なるが是れ『見諦』の義ならば、汝の向の說を成ずることを得。內入等の有自體を見るが不顛倒なりとは、是の語は顛倒す。汝の所欲は其の義成ぜず。應に細かく云何んが『見苦』なるかを觀察すべし。子が母に從つて歡喜丸を索め指手にて得と言ふが如きに非ず。此の品中には自部人の所說に過あるが爲めに、空の對治を遮して聖諦の無體を明し、物(人)をして信解せしめたり。是れ品の義意なり。

是を以ての故に此の下に經を引いて顯成す。梵王所問經に說くが如し、『佛、梵王に告ぐ、此の門[五〇]を以て應に知るべし、苦は聖諦に非ず。集滅道も亦聖諦に非ずと知る。復た次に、云何んが是れ聖諦なるや。梵王よ、若し苦が無起ならば是れを聖諦と名づく。集能く起ること無くば是れを聖諦と名づく。一切法畢竟して涅槃の如く起滅無きを見れば是れを聖諦と名づく。若し諸法平等無二なるを知りて道を修すれば是れを聖諦と名づく』と。是の故に經に說く、[五一]『若し因緣法を見れば是の人能く佛を見る。亦聖諦を見、能く聖果を得、諸の煩惱を滅す』と。

梵文には「此の緣起を見る所の者は苦集滅道を見る」とあり、什譯も大體之に一致す。本論の偈は「苦集滅道の有生滅(卽ち有自體)を見る者は緣起を見ず」として、究極に於ては同義を顯はせど、表面全く異れる言ひあらはしを取る。

【五〇】門。三本俱「問」とす。

【五一】「是の故に經に說く」以下は羅什譯中論觀四諦品第廿四の第四十偈に「是の故に經中に說く、若し因緣法を見れば、則ち能く佛を見、苦集滅道を見ると爲すと。」ある文と此の本偈の什譯釋文中に「能く四聖諦苦集滅道を見、四聖諦を見て四果を得、諸の苦惱を滅す。」とある文とを結合せし覺書に過ぎず。後世の竄入なるべし。西藏譯には之を欠く。

り起ることを得んと欲せずんば上偈に說くが如し、『若し緣起法を壞すれば空義則ち成ぜず』と。汝空義を壞すれば何等の過を得るや。論偈に說くが如し、

(三七)[四六]一物として作を須ひず、　亦人の起業すること無く、
不作にして作者と名づけん。　則ち空義を壞すればなり。

(三八)[四七]無生にして亦無滅ならば、　是れ則ち名づけて常と爲す。
種種の諸の物類は　皆自體に住せん。

釋して曰く、云何んが『物類』と爲すや。譬ふれば畫壁に種種の色、種種の形、種種の姓、種種の量等の差別有るが如し。云何んが『自體に住す』と名づけん。謂く作者無きを『自體に住す』と名づく。不壞なるを以ての故に而も名づけて常と爲す。若し『常』と言はば、論偈に說くが如し、

(三九)[四八]未得の者應に得すべく、　及び苦邊を盡すの業あり、
一切の煩惱の斷あり。　空義無きを以ての故なり。

釋して曰く、此れ謂く、世間出世間の所證の勝法と及び苦邊を盡すとは、對治法を修することを須ひず。所說の相は而も是の如きを得んと欲せず。故に從緣起法は幻の如く燄の如く自體無起なることを得んと欲す。有體無體等には過失あるが故なり。慧眼を翳はるる者は妄りに『諸法緣より起らざる』を見る。此の見は是れ世諦の見なるに妄執して第一義となす。其の見は何等ぞ。論偈に說くが如し、

(四〇)[四九]所謂る苦と集と　乃至滅と道とに於て、
生滅有りと見れば　是の見は不見と名づく。

釋して曰く、云何んが『不見』なる。謂く如實の緣起法を見ざるが故なり。
自部の人言ふ、若し見苦等の諸行を離れては別の見諦の法有ること無し。

【四六】一物不須作　亦無人起業
不作名作者　則壞於空義
梵文及什譯に同じ。殊に梵文には言葉の順序まで一致す。第四句が理由になり、前三句は其の歸結をなす。第一句は梵文によれば「何等作さるべきもの無し」の意、第二句は「起されざる作用あり」、第三句は「作さざるの作者あらん」の意なり。

【四七】無生亦無滅　是則名爲常
種々諸物類　皆住於自體
梵文及什譯と多少異る。甚だしき義譯とも考へらる。(中論註參照)。

【四八】未得者應得　及盡苦邊業
一切煩惱斷　以無空義故
漢譯としては上の如く訓むの他なけれど、明かな誤譯にして、正しくは「若し不空ならば、未得の者の得すべきことゝ、苦を盡す作業と、一切煩惱の斷とは無し」とせざるべからず。梵文第四句 yady açūnyam na vidyate は yady açūnyam (若し不空ならば)が挿入句になり、na vidyate(有らず、無し)は其の前の文にかゝる。然るに之を yady açūnyam と續けて讀みたるなり。

【四九】所謂苦與集　乃至於滅道
見有生滅者　是見名不見
此偈梵文及什譯と全然異る。

を長くせずして大ならしめ、また闇を了せずして明ならしむ』と謂はば、此の過は已に前に說けるが如し。

自部の人言ふ、云何んが作者皆無自體なるや。

論者言ふ、處處の作者は皆無自體なるを見るが故なり。譬ふれば幻所作の事の如し。內入等に作有るもまた是の如し。而も此の內入もまた無自體なり。若し一物として有自體なるもの有らば卽ち先の義に違す。此れ謂く、所作の體有ること無きが故なり。汝有自體の義を執するは、體若し有ならば汝は分明に我が爲めに之を說くべし。若し有作にして及び有體なりと言はば何等の物に似るや。是の故に汝の所說は皆是れ邪見なり。論偈に說くが如し、

(三四)[四三]法と非法との因無くんば、　果は無因の過を得。
若し法と非法とを離るれば　汝は無待の果を得す。

釋して曰く、若し汝の意に、世論に違せずと謂ひて是の如き說を作し、法と非法と有ることを得んと欲すれば、論偈に說くが如し、

(三五)[四四]若し汝、法と非法との因　有ることを得んと欲すれば、
果は、法と非法とより起る。　云何んが是れ空ならざる。

釋して曰く、此れ謂く、凡そ有起なるものは皆空なるが故なり。譬ふれば幻所作の事の如し。獨り汝の自宗に違するのみに非ず、今更に餘の過咎あり。論偈に說くが如し、

(三六)[四五]一切言說の事と　世間とは皆破せらる。
若し緣起法を壞して　空義また成ぜずんば。

釋して曰く、『言說』とは謂く是の言を作すなり。『瓶を作り衣を作る』と。提婆達多は『白牛を將ち來れ、我れ乳を飲まんと欲す』と言ふ。若し瓶等に自體有らば作を須ふるは然らず。若し緣よ

【四三】無法非法因　果得無因過
若離法非法　汝得無待果
梵文「汝に取つては法と非法とを離れて果報は存せず。又法と非法とを因とするも果報は存せず」とあり、什譯も大體之に一致す。本論のみ異る。

【四四】若汝欲得有　法非法因果
從法非法起　云何不是空
梵文及什譯と一致す。

【四五】一切言說事　世間皆被破
若壞緣起法　空義亦不成
梵文に正確に一致す。後二句は前提にして前二句は結論の形をなす。而して右の譯では「言說事」と「世間」とは二つの事がらとなり居るも、梵文によれば「世間的なる言說事」と譯すべきが如し。言說事は saṃvyavahāra(慣習)の譯語なり。「世間的言說事」を普通は「世俗」と譯す。

何故に捨せざるや。若し所證の果にして有自體ならば、云何んが復た能證の人有りと說かん。是を以ての故に論偈に說くが如し。

(二九)[三八]既に果の自體無ければ、　果に住すると向ふとも亦無し。
　八人有ること無きを以て　則ち僧寶有ること無し。

釋して曰く、『八人』とは謂く、四道四果の人に差別有るが故なり。『人』とは云何ん。謂く人中の勝人、士夫等なり。若し四聖諦にして無自體ならば獨り僧無きのみに非ず。論偈に說くが如し、

(三〇)[三九]若し四聖諦無くんば、　亦法寶有ること無し。
　法と僧と有ること無きが故に、　云何んが當に佛有るべけん。

釋して曰く、『佛』とは能く法を以て弟子を覺するが故に佛と名づく。復た次に、今有自體を執する者に問はん。佛婆伽婆は有自體なりとなすや無自體なりとなすや。

問うて曰く、此れ何の過ありて是の問ひを作すや。

答へて曰く、若し汝、佛は有自體なることを得んと欲すれば、則ち眞如を覺了するを藉らずして而も名づけて『佛』となさん。論偈に說くが如し、

(三一)[四〇]覺を以て緣と爲さずんば、　佛は無緣の過に墮す。
　佛を以て緣と爲さずんば、　覺は無緣の過に墮す。
(三二)[四一]佛が有自體ならば、　諸の菩薩修行して
　佛の爲めに勤精進するも、　應に成佛することを得べからず。
(三三)[四二]是法と及び非法とを　人能く作す者無からん。
　不空ならば何ぞ作を須ひん。　有體にして作さるるは然らず。

釋して曰く、此れ謂く、若し法有自體にして而も作を起す者あるは然らず。又汝の意に『また小

【三八】既無果自體　住果向亦無
　以無有八人　則無有僧寶
梵文及什譯第二十九偈に相當しよく一致す。梵文及什譯の第二十七、二十八兩偈に相當するものを本論は欠く。偈の序數は便宜上彼れに順じて附したり。

【三九】若無四聖諦　亦無有法寶
　無有法僧故　云何當有佛
梵文及什譯と同じ。

【四〇】不以覺爲緣　佛墮無緣過
　不以佛爲緣　覺墮無緣過
覺は bodhi(菩提)の譯語にして佛と菩提、卽ち覺者と覺との相因待するを言ふ。多少の出入あれど梵文及什譯に一致す。

【四一】佛有自體者　諸菩薩修行
　爲佛勤精進　不應得成佛
梵文「汝に於ては、自性上非佛なるものは菩提の爲に精進するも菩薩行に於て菩提に達せざらん」とあり、什譯も之に一致す。本論は多少異る。

【四二】是法及非法　無人能作者
　不空何須作　有體作不然
梵文及什譯に一致す。是法、非法は第六偈の法、非法と同じく、德行、不德行の意。有體は自性の義なり。

若し定ならば云何んが見るべけん。論偈に說くが如し、

(二四)苦若し有體ならば、　　應に滅の義有るべからず。

汝は有體に著するが故に、　即ち滅體を破す。

(二五)苦若し定性有らば、　　則ち修道あること無し。

道若し修すべくんば、　　即ち定性あること無し。

釋して曰く、此れ謂く、若し滅の體有らば即ち苦の體有り。修者云何んが數數に正見等を起すが故に名づけて『修』となさん。若し此の『道』の體先に已に成就して而も有起なるは然らず。若し此等の過を避けんと欲して而も道は修すべしと說かば、論偈に說くが如し、

(二六)道若し是れ修すべくんば　即ち自體あること無し。

苦、集、乃至滅　　　是れ等悉く皆無し。

釋して曰く、此れ謂く、道の有起の義若し成ずるも亦無自體を離れず。是を以ての故に上偈所說の道理の如く、無起の苦ならば、苦は無なるを以ての故に、滅は則ち無體なり。若し『是れ苦を滅するの道』なりと言はば、論偈に說くが如し、

(二七)苦を滅せんが爲めなる道は　何ぞ道を得べきもの有らん。

苦の自體を解かず、　　　亦苦の因を解かず。

釋して曰く、此れ謂く、汝所說の道理の如きは、苦は有自體なり。有自體ならば則ち解くべからず。亦苦因を解かざるの過ありて、斷の義成ぜず。因體を斷ぜざるが故に斷は即ち無體なり。愛體が無盡ならば、有盡の義は成ぜず。滅は『無體』と名づく。無體なるが故に證滅の義は成ぜず。若し『證滅』無くして滅に趣くの道が有自體ならば則ち修あること無し。若し修道なくんばまた四果を證する人無し。若し證果の人有ることを得んと欲して而も有自體の見を執して捨せずんば、今問はん、

の無餘に驚かされざるを得ず。

【三四】苦若有體者　不應有滅義

汝著有體故　即破於滅體

梵文及什譯第二十三偈に一致す。「有體」は有自性の義。「滅體」の體は譯者の補足語にして無意義。但し此の滅は四諦中の滅諦を意味す。

【三五】苦若有定性　則無有修道

道若可修者　即無有定性

梵文及什譯第二十四偈に一致す。

【三六】道若是可修　即無有自體

苦集乃至滅　是等悉皆無

此偈前二句は前偈後半の繰り返しなり。後二句は、梵文及什譯第二十五偈の前半に相當す。

【三七】爲滅苦者道　何有道可得

不解苦自體　亦不解苦因

此偈前二句は梵文及什譯第二十五偈後半に一致す、即ち前偈の後二句と合して本來一偈を形づくるものなり。其れが本論にては斯くの如き特殊なる取扱を受けたり。

論者言ふ、虛空の過は已に先に說けるが如し。大過咎は今汝の身に聚まりて逃避すべきこと難し。云何んが過咎なるや。論偈に說くが如し、

(三〇)若し一切不空ならば、　無起にして亦無滅なり。
　四聖諦の體無きの過は、　還つて汝の身に在り。

釋して曰く、此の義云何ん。若し苦が空に非ずして有自體ならば則ち作者無し。作者無きが故に緣より生ぜず。是の有を執するは世諦の中にも亦信ぜざる所なり。何ぞ況んや第一義をや。是を以ての故に論偈に說くが如し、

(三一)緣より生ぜずんば　何處に當に苦あるべけん。
　無常は卽ち苦の義にして　彼の苦は無自體なり。

釋して曰く、此れ謂く、苦が因緣より生ぜずんば卽ち是れ常なり。常ならば則ち苦に非ず。修多羅人言ふ、若し無常なるが故に苦ならば苦なるが故に無我なり。若し無我ならば則ち無自體なり。是の如きを以ての故に苦は無自體なり。

論者言ふ、汝の所說は義として相應せず。論偈に說くが如し、

(三二)苦既に無自體ならば、　何處に當に集有るべけん。
　集有ること無きを以ての故に、　是れ則ち空を破す。

釋して曰く、此れ謂く、苦の體は無起なり。何となれば、若し有自體ならば因緣を待たずして有ればなり。論偈に說くが如し。

(三三)苦若し定んで性有りて　先來より見ざる所ならば、
　今に於て云何んが見ん。　其の性異らざるが故なり。

釋して曰く、若し先に苦の性を見ずんば聖果を得する時にも亦應に見ざるべし。何となれば、性

【三〇】若一切不空　無起亦無滅
　無四聖諦體　過還在汝身
　多少の出入あれど梵文及什譯に一致す。第一偈の法有の立場よりの問難を其儘廻らして彼への反難とす。

【三一】不從緣生者　何處當有苦
　無常卽苦義　彼苦無自體
　第四句は誤譯なり。梵文には「彼れは有自性のものには存せず」とあり、「彼れ」とは無常をさす。什譯も「定性には無常無し」として梵文に一致す。本論の譯は彼れ(tat)と云ふ代名詞を「苦」を意味するものと解せしなり。

【三二】苦旣無自體　何處當有集
　以集無有故　是則破於空
　前二句は梵文及什譯共に「苦が若し有自體ならば何ぞ集あらん」の意を表す。原典の相違か、或は義譯して反面の意を顯はせるものか、本論譯にても意味は通ず。されど後二句は明かな誤譯にして、意味全く通ぜず。正しくは「集有ること無し。空を破するが故なり」とあるべきにして「故に」の語を置き違へたり。

【三三】苦若定有性　先來所不見
　於今云何見　其性不異故
　什譯第二十六偈と全く同文なり。第二十二偈の次に什譯第二十六偈をそのまゝ引入するが如きことを敢てせし譯者

非有に非ず非無に非ず、異に非ず一に非ず、自に非ず他に非ず、亦俱に非ず不俱に非ず。所有の『緣より起るもの』は第一義中には自體無起なり。世諦に依るが故に眼等の起あり。我れ『此の起は空なり』と說くは謂く自體空なるが故なり。經の偈に言ふが如し、

〔二七〕『緣に從へば生ずと名づけず、生法は無自體なり。
若し緣に屬するもの有らば、是れ卽ち名づけて空となす』と。

世間と出世間とは但だ是れ〔二八〕假施設なり。其れ空を解する者あらば名づけて不放逸となす。楞伽經に『自體無起』と說くが如し。諦の無起なるは、佛大慧に告げて『我れ一切法空と說く』といふが如し。若し『緣より生ず』と言はば亦是れ空の異名なり。何となれば、施設に因るが故なり。世間出世間の法は並びに是れ世諦の所作なり。是の如く名字を施設するは卽ち是れ中道なり。摩訶般若波羅蜜經に說くが如し、『云何んが中道と名づくるや。謂く有起、無起、及び有無等の邊を離るるが故に名づけて中道となす。所謂る諸體は起なく不起なく、有に非ず無に非ず、常に非ず無常に非ず、空に非ず不空に非ず。中道を修する者之を觀察する時、眼の有體を見ず、眼の無體を見ず、乃至色受想行識に體を見ず無體を見ず』と。又寶積經に說くが如し、『佛、迦葉に告ぐ、有は是れ一邊、無は是れ一邊、二を離るる中間には則ち色なく受想行識なし』と。是の如き中道を名づけて實相を得證するの方便と爲す。是を以ての故に論偈に說くが如し。

(二九)未だ曾て一法として　因緣より生ぜざるもの有らず。
是の如くならば、一切法は　是れ空ならざるもの無し。

釋して曰く、此れ謂く、緣より起る所の物は譬ふれば幻等の丈夫の如く畢竟して無體なり。
僧佉人言ふ、虛空等の如きは緣より生ぜず。『緣より生ずる法』を出因と爲すは彼の宗中に於て一分の義にして此の義成ぜず。是れ彼の出因の過なり。

〔二七〕從緣不名生　生法無自體　若有屬緣者　是卽名爲空
觀誓の廣疏に依れば、之は無熱池龍王所問經の偈頌なり。本譯觀有爲相品第七註(一一五)を參照せよ。

〔二八〕假施設(ケセ、ツ)。十八偈の假名字と全く同じ。假名、施設とあるも同じ。

〔二九〕未曾有一法　不從因緣生　如是一切法　無不是空者
梵文及什譯と全く同じ。第二句不從因緣生(apratītya-samutpanna)は前偈と異り「緣所起ならざるもの」の意なり。

を見れば卽ち是れ道を修するなり』と。是の義を以ての故に摩訶衍中に聖諦の道理成ずることを得。道理成ずるが故に智慧成ずることを得。智慧成ずるが故に『一切皆然る』べし。若し空を誹謗すれば上偈に說くが如し、『若し空に然らざれば一切皆然らず』と。論偈に說くが如し、

(一五)汝今自過を持して　而も我れに與へんと欲するか。[二三]
　また人馬に乘りて　自ら其の所乘を忘るるが如し。

釋して曰く、若し汝空をして過失あらしめんと欲せずんば今當に之を說くべし。論偈に說くが如し、

(一六)汝若し諸法は　皆有自體なりと見れば、[二四]
　諸體は無因緣にして　還つて自然の見を成ず。

釋して曰く、若し諸體の有自體を見れば則ち諸體は因緣より生ずること無し。因緣を待たずして體有るが故なり。復た次に、若し諸體の有自體を見れば今當に過を說くべし。論偈に說くが如し、

(一七)若し因と果と無待ならば、　作者と及び作業と[二五]
　乃至起滅等の　一切の法皆壞す。

釋して曰く、此れ謂く、因緣を待たずんば因果等の義は皆また成ぜず。汝云何んが空義に於て妄に分別を生ずるや。譬ふれば小兒、畫の夜叉を見て怖心を生じ聲を發して大いに叫ぶが如し。若し、色等是れ空にして自體有ること無く虛空華の如しと、是の分別を作さば應に此れに於て怖畏を生ずべからず。是を以ての故に論偈に說くが如し、

(一八)從衆緣生法は　我れ卽ち是れ空と說く、[二六]
　但だ假名字と爲す、　亦是れ中道の義なり。

釋して曰く、眼等の諸體、緣より起らば、諸緣中に眼等は有に非ず無に非ず、亦有亦無に非ず、

【二三】汝今持自過　而欲與我耶　亦如人乘馬　自忘其所乘　梵文及什譯と同じ。

【二四】汝若見諸法　皆有自體者　諸體無因緣　還成自然見　多少の出入あれど梵文及什譯と一致す。第一句の「諸法」、第三句の「諸體」は共に bhāva (存在、物)の譯語にして全く同義。偈意は「諸存在は自性をもちて實有なりと見れば、諸存在は無因緣にて有ることになり、自然生の見を成ず」となり。

【二五】若因果無待　作者及作業　乃至起滅等　一切法皆壞　梵文及什譯と相違す。中論註參照。

【二六】從衆緣生法　我說卽是空　但爲假名字　亦是中道義　梵文及什譯と同じ。第一句の從衆緣生法は「衆緣より生ずる法(卽ち衆緣所生の法)」の意に非ず、全體が所謂る緣起(pratītya-samutpāda)の譯語にして「衆緣より生ずると云ふこと」自體を意味す。よつて特に和訓せず、「緣起」の語と置き替へて解すべし。

分別の空を遮せんが爲めには、今此の空を遮せんが故に而も空は無自體なりと言ふも、亦空を執して是の分別を作すにあらず。空は今應に捨すべきが故なり。寶積經中に說くが如し、『佛、迦葉に告ぐ、寧んぞ我見を起すこと須彌山の如くなる。亦增上慢を作さずんば空見を起す』と。是の義を以ての故に色の空を見ず色の不空を見ず。論偈に說くが如し、

（一四）若し空に然る者には[三二]　則ち一切皆然り、
若し空に然らざる者には　則ち一切然らず。

釋して曰く、此れ謂く、正しく空を見れば、何等か『一切皆然り』となすや。謂く有起等なり。云何んが『然る』や。謂く有無等と及び眼等とは皆自體空にして、幻丈夫の丈夫の自體空なるが如し。何となれば、一切衆緣を藉りて聚集せるを體となすが故なり。云何んが『體』となすや。『體』は謂く苦なり。云何んが『苦』となすや。謂く此の『起』を苦と名づけ、見苦等の行を名づけて苦諦となす。云何んが『集』となすや。謂く苦を起すの因を集と名づく。復た次に、『集』とは謂く、此れより苦を起すが故に集と名づく。若し見集等の行ならば名づけて集諦と爲す。苦の因を滅するを之を名づけて『滅』となす。見滅等の行を名づけて滅諦となす。苦因を滅することを得る方便の爲めの故に而も名づけて『道』となす。若し見道等の行ならば名づけて道諦となす。彼の聖諦は是の如く有なるが故に其の法は成ずることを得。自然の智を以て一切の行を覺するが故に乃ち名づけて『佛』となす。聲聞に隨順して說かば、經に言ふが如し、『佛は諸の比丘に告ぐ、是の如き苦は我れ往昔に於て聞かず。諸法中に眼起り智起り明起り覺起ることを得て、是等の諸體は自體皆幻の如し』と。故に第一義中には無起等を見るを『聖諦を見る』と名づく。文殊道行經に說くが如し、『佛は文殊師利に告ぐ、若し一切諸法の無起を見れば卽ち苦諦を解す。若し一切諸法の無住を見れば卽ち能く集を斷ず。若し一切諸法の畢竟して涅槃なるを見れば卽ち能く滅を證す。文殊師利よ、若し一切諸法の無自體

【三二】若然於空者　則一切皆然
若不然空者　則一切不然
梵文に正確に一致す。「然り」は yujyate（可能なり、成立す）の譯語にして「空の成立する人には一切成立す。空の成立せざる人には一切成立せず」の意なり。又此の漢譯は「若し空に然らば則ち一切皆然り、若し空に然らずんば則ち一切然らず」と訓むも可なり。
この偈の本釋文中に引用せる文殊道行經の文は安慧の釋論より採用せしものと考へらる。釋論觀聖諦品の最後に記せる左の一節とこの引文とを對照すれば、兩者の關係自ら會得せらる可し。如經中說、寶跡菩薩、白妙吉祥菩薩言、若了一切法無生、是爲知苦、若見一切法無住、是爲斷集、若悟一切法畢竟寂滅、是爲證滅、若見一切法無性、是爲修道、釋論及び西藏譯に於ては之が何れの經文たるかを示さゞるも、本漢譯に於ては文殊道行經の說といひ、觀誓の廣疏に於ては入如來智德不思議經（華嚴經の不思議境界分）の文なりとす。

得すること能はず。是を以ての故に煩惱と及び生等の滅するは是れ涅槃の相なり。若し聰慢の者ありて是の如き分別を作し『空と不空と有り。云何んが空となすや。謂く諸陰の空を見るなり。彼の執見無體なるを以ての故なり。云何んが不空なる。謂く諸陰の不空を見て而も我れ已に我れを見たり、今我れを見、當に見るべしと言ふなり。是の如く諸陰の空は、諸陰を離れて空有らず、空中に諸陰を見、諸陰中に空を見る』と。是の見を作さば是れ不正思惟にして增上慢と名づく。論偈に說くが如し、

(一九)少智愚癡の者は、　惡見を以て空を壞す。
　不善に蛇を捉へ、　不如法に呪を持するが如し。

釋して曰く、此れ謂く、無分別慧命のために障礙を作すが故なり。是の如き等は惡見の所壞となす。復た次に、諸の無體に於て有體の見を起すを亦『空を壞す』と名づく。譬ふれば不善に蛇を捉ふるの人は自ら其の命を害するが如し。空に於て有體を執する者も亦能く解脫命を害す。持呪人の呪法に依らずんば而も自ら損壞するが如し。是を以ての故に不善に空を解する者は能く種種不饒益の事を作す。論偈に說くが如し。

(二〇)諸佛は是を以ての故に　心を廻らして法を說きたまはず。
　佛所解の深法は　衆生入ること能はずと。

(二一)汝今若し是の如く　空に於て誹謗を生じ、
　『法に起滅なく　乃至三寶を破す』と謂はゞ、

釋して曰く、『誹謗』とは謂く、一切是れ空と言ふとき汝瞋忿するが故に空のために過を作さんと欲するも、空は終に汝の過を被らず。何となれば、諸體の無自體なるは、第一義中に於て空なるがに無體なり。無體の義を我れ亦用ひず。執著の相あるを以ての故なり。復た次に、自部の人の所

【一九】少智愚癡者　以惡見壞空
　如不善捉蛇　不如法持呪
　前二句は誤譯にして正しくは「惡しく見られたる空は少智愚癡の者を壞す」とせざるべからず。少智愚癡者(manda-medhasam)は業格なるを主格と誤まり、durdṛiṣṭāi(惡しく見られたる)を durdṛiṣṭyā(惡見を以て)と誤まりたるなり。

【二〇】諸佛以是故　廻心不說法
　佛所解深法　衆生不能入
　多少の出入あれど梵文及什譯と一致す。「佛所解の深法」とは空法をさす。其れが鈍根に了解せられざるを思ひて說法の心を止められしとの意なり。

【二一】汝今若如是　於空生誹謗
　謂法無起滅　乃至破三寶
　梵文及什譯と全く異る。此漢譯に獨立の意義を認めて解すれば、既出第一偈より六偈までの空法に對する問難の言を纏めて、次に空法の眞意を說かんとする前提とす。

釋して曰く、此れ謂く、若し人二諦の差別を解せずんば、境界の相に錯亂せざるも、不正思惟多くして、此の人甚深の佛法を解せず、而も有體無體の執覺を起す。『深』とは云何ん。涉度し難きなり。『佛』とは先に已に解せるが如し。『法』とは天人をして甘露の法を證得せしむるが爲めの故なり。『行』とは是の如き等の甚深の境界に於て、應知、應斷、應證、應修するなり。復た次に、不顚倒の教を說くを甘露法と名づく。是の人第一甚深無分別智の道理に於て解せざるが故に、不顚倒を行じて眞法の境界に住すと雖も而も無起無滅の法體に於て衆生に說き、非境界に於て境界の見を起す。是の如き說を作す者は中論の道理を解せず。而も『世諦中の起滅等の法は一切皆無し』と言ひて是の分別を作さば、其の過も亦上偈に說くが如し、『若し一切法空ならば無起にして亦無滅なり』と。是の如き分別あらば、諸佛如來が世諦に隨順して持戒、修定、生住滅等の諸法體有りと說けるを解せず。無智の人は第一義中にも亦是の事有りと謂ふ。是の虛妄分別を作さば[一七]諸有の曠野の中に墮在して出期あること無し。

自部の人言ふ、若し第一義諦を以て解脫を得れば應に二諦を宣說すべからず。

論者言ふ、是の事を以ての故に論偈に說くが如し。

(一〇)[一八]若し世諦に依らずんば、　第一義を得ず。
第一義に依らずんば、　終に涅槃を得ず。

釋して曰く、『世俗諦』とは一切の諸法は無生にして性空なるも而も衆生は顚倒せるが故に妄に執著を生じ世間に於ては實となす。諸の賢聖は世間の顚倒の性に了達するが故に、一切の法は皆空にして無自性なりと知る。聖人に於ては是れ第一義諦にして亦名づけて實となす。佛は衆生の爲めに二諦に依つて說く。云何んが第一義諦となすや。謂く普く一切の言語の道を過ぐるが故なり。一切小乘の所分別は一切の分別の因を離れしむるが故なり。復た次に、若し世諦無くんば第一義諦を證

【一七】諸有。有(bhava)は存在。

【一八】若不依世諦　不得第一義　不依第一義　終不得涅槃　什譯と全く同じ。梵文には「世俗に依らずしては第一義は敎へられず。第一義に來らずしては涅槃は達せられず」とあり。大體に於て一致するも、「敎ふ」「達す」等の言ひあらはしに含蓄あり。

論者言ふ、[一二]汝の所引は義皆然らず。論偈に説くが如し、

[一三](七)汝今自ら　　空と及び空義との、
能く諸の戯論を滅するを解せずして、　而も空を破せんと欲するや。

釋して曰く、『空』とは能く一切の執着戯論を滅す。是の故に空と名づく。『空義』とは謂く、空を縁ずるの智を名づけて空義と爲す。汝今眞實の相を破壞することを得んと欲するは、人の拳を運らして以て虚空を打ちて徒に自ら疲極して終に損ずる所無きが如し。汝若し是の言を作して上偈に『若し一切法空ならば無起にして亦無滅なり』と説くが如きは、汝是の如き説を作さば亦徒に疲勞して[一四]中意を解せず。何となれば、論偈に説くが如し、

[一五](八)諸佛は二諦に依りて　　衆生の爲めに法を説きたまふ。
一は謂く世俗諦なり、　二は謂く第一義なり。

釋して曰く、『世諦』とは謂く世間の言説なり。色等の起住滅の相を説くが如く、提婆達多の去來、毗師奴蜜多羅の喫食、須摩達多の坐禪、梵摩達多の解脱を説くが如し。是の如き等を『世間の言説』と謂ひ、名づけて世諦となす。是等は第一義と名づくと説かず。『第一義』とは云何ん。謂く是れ第一にして義有るが故に第一義と名づく。又是れ最上無分別智の眞實義なるが故に第一義と名づく。『眞實』とは『他縁無き』等を相となす。若し眞實に住して所縁の境界に無分別なる智ならば第一義と名づく。彼の起等の隨順所説を遮せんが爲めの無起等と、及び聞思修の慧は皆是れ第一義なり。『慧』とは云何ん。是れ第一義なり。能く第一の遮を爲して不顚倒の方便因縁を作すが故に、是の故に復た第一義と名づくるなり。論偈に説くが如し、

[一六](九)若し人、二諦の差別相を　解すること能はずんば、
即ち眞實の　　甚深佛法の義を解せず。

【一二】以下右の問難に答へて論者自身の立場を明す。

【一三】汝今自不解　空及於空義　能滅諸戯論　而欲破空耶　之も梵文及什譯と若しく相違す。此邊原典に相違ありしか。中論註參照。

【一四】中意。中道の意。

【一五】諸佛依二諦　爲衆生説法　一謂世俗諦　二謂第一義　梵文及什譯と同じ。この偈の釋文中提婆達多(Devadatta)毗師奴蜜多羅(Viṣṇumitra)須摩達多(Sumadatta)梵摩達多(Brahmadatta)等の外道の名は特に重要なる必然的意義を有せざること一見明かなり。只「甲の人」「乙の人」といふに他ならず。この部分に相當する安慧の釋論には「提婆達多來去、沒囉賀達多(Brahmadatta)解脱」と記す。本論の釋は之を敷衍せしものなるべし。

【一六】若人不能解　二諦差別相　即不解眞實　甚深佛法義　梵文及什譯と同じ。

釋して曰く、若し僧寶無くんば四道四果の差別有るべからず。復た次に、僧寶無きが故に亦法寶無し。法寶無きが故に亦佛寶無し。故に論偈に言ふ、

（五）[8]若し法と僧と無くんば　云何んが佛寶有らん。
若し三寶皆空ならば　則ち一切の有を破す。

釋して曰く、『佛』とは謂く、自ら聖諦を覺し復た能く他を覺せしむ。故に名づけて佛と爲す。云何んが『寶』と爲すや。謂く得難きが故なり。經の偈に言ふが如し、

[9]『應に我が已解を解すべし、　應に我が已修を修すべし。
應に我が已斷を斷ずべし、　是れに由るが故に佛と稱す』と。

此れ謂く、一切法の有自體中に於て平等の覺を得す、是の故に佛と名づく。修多羅中の偈に言ふが如し。

[10]『無體法中に於て覺了して　盡く餘り無し。　諸法を平等に覺す。
是の故に名づけて佛と爲す』と。

此れ謂く、諸佛所覺の境界を若し無體と言はば然らず。上偈に說くが如し、『若し三寶皆空ならば則ち一切の有を破す』と。是の義過あり。故に論偈に言ふ、

（六）[11]若し因果の體空ならば、　法と非法とも亦空なり。
世間の言說等を、　是の如く悉く皆破す。

釋して曰く、此れ謂く、是の說を作す者は而も過あることを得んと欲せざるも此の過を云何んが免れんや。若し空を立てずして起滅有り、諸體有自體ならば彼れは過なきを得。是の中に驗を作す。諸體は有自體なり、起滅有るが故なり。若し諸體は無自體と言はば應に起滅有るを見るべからず。譬ふれば空華の如し。

見れば次の長行の「若し僧寶無くんば四道四果の差別有るべからず」も恐らく誤譯にして、正しくは「若し四道四果無くんば僧寶有るべからず」なるべし。「八人」とは前偈の四向四住の八輩をさす。

【八】若無法僧者　云何有佛寶
若三寶皆空　則破一切有
後二句は梵文には「是の如く語らば汝は三寶を破す」とあり、原典の相違なるか。什譯は梵文に近し。前二句は三者全く同じ。

【九】應解我已解　應修我已修
應斷我已斷　由是故稱佛

【一〇】於無體法中　覺了盡無餘
諸法平等覺　是故名爲佛

【一一】若因果體空　法非法亦空
世間言說等　如是悉皆破
梵文には「空を(語らば)果報の實有と、法と非法と、一切世間の慣習とを汝は破す」とあり、什譯も同じ。本論の譯は前二句が著しく異る。法、非法はそれぞれ dharma, adharma の譯語にして既出の如く德行、不德行を意味す。什譯では「罪福」とあり。

釋して曰く、彼れの所說の[二]道理の如くに物(人)をして信解せしむるは是の事然らず。空なるが故なり。虛空華の如し。是を以ての故に彼れは此の過を招く。起滅は無體なるが故に即ち苦諦の體無し。苦諦無體なるが故に能起の集諦も亦無體なり。集諦無體なるが故に滅體も亦無體なり。滅諦無體なるが故に苦滅に向ふ道の正見を以て首と爲す道諦の所修は即ち無體と爲す。上偈に說くが如し、『彼れ此の過を得』と是を以ての故に、諸有の生死を怖畏する衆生は四諦の境界に於て勤行精進し、苦は應知、集は應斷、滅は應證、道は應修なるに、此等皆無ならん。云何んが無なるや。故に論偈に言ふ。

[三](二)若しくは知と及び若しくは斷と、修と證作業等とは、
聖諦無體なるが故に、是れ皆不可得なり。

釋して曰く、四聖諦とは謂く、能く聖人の相續體を作すが故に名づけて聖諦と爲す。又復た『諦』[四]とは謂く『眞實』の義なり。若し無と說かば是の義然らず。故に論偈に言ふ、

[五](三)聖諦無體なるが故に四果も亦有ること無し。
果の無體なるを以ての故に果に住する者も亦無し。

釋して曰く此れ謂く、身見、疑、戒取等の衆過を薪となし聖諦は火となつて、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢等あり。聖諦の火能く煩惱を燒くを見る。『果に住する者』とは謂く、須陀洹道を得すれば須陀洹果なり。又名づけて[六]他緣和合となさざるが故に所有の天魔も破壞すること能はず。又戒、定、慧、解脫、解脫知見等と和合するが故に僧と名づく。是の僧は名づけて無上の福田と爲す。彼れ若し無くんば其の義爾らず。故に論偈に言ふ、

[七](四)若し僧寶有ること無くんば、則ち八人有ること無し。
聖諦若し無體ならば、また法寶有ること無し。

【二】 一切法空と云ふ道理。

【三】 若知及若斷　修證作業等
聖諦無體故　是皆不可得
梵文及什譯と同じ。殊に梵文には言葉の順序まで一致す。第二句「證作業」は saksat-karman(證得作用)の直譯なれど、普通は單に「證」と譯さる。それにて可なり。知・斷・修・證はそれぞれ四諦に相應する行にして其の意義は中論註參照。

【四】 諦(satya)。眞實、眞理の意。

【五】 聖諦無體故　四果亦無有
以果無體故　住果者亦無
此偈第四句に於て住果者(phalastha)即ち得果者のみを否定すれど梵文及什譯にては住果者と共に向果者(pratipannaka 果を約束せられたるもの)をも否定す。本論にては之が省略せられたり。

【六】 他緣和合。他の緣と和合すること、四果は他の緣と和合せずして能く自己自身に成立するを云ふ。

【七】 若無有僧寶　則無有八人
聖諦若無體　亦無有法寶
前二句は誤譯にして、正しくは「若し八人有ること無くんば、則ち僧寶有ること無し」とせざるべからず。梵文の cet(若し)の語を「八人」にかけて讀むべきを誤りて「僧寶」にかけて讀みしなり。之より

惱は無自體なり。是れ斷ぜらるるが故に。譬ふれば女人を幻作するとき是れ幻化なりと雖も而も諸の凡夫は染欲心を起し後に非實を知りて染心自ら捨するが如し。煩惱の無實なるも亦また是の如し。此の中に已に外人の成立する所の驗は過あるを說き、我れ自ら成立せる驗は過なきを顯はし、顚倒の無自體を解せしめし故は、是れ品の義意なり。是を以ての故に此の下に經を引いて顯成せん。

二六金光明女經中の偈に說くが如し、『言語は是れ色に非ず、一切處に有ること無し。畢竟して有ること無きが故に煩惱もまた是の如し。語に實體無く內外に住せざるが如く、煩惱の體も無實にしてまた內外に住せず』と。佛、舍利弗に告ぐ、『若し染汁卽如實の義なるを解すれば、一の染汁の顚倒の得べきもの無し。衆生染を起すこと若し無實ならば卽ち是れ顚倒なり。若し彼の顚倒が是れ無實ならば中に於て眞實の相なきが故なり。舍利弗よ、是の如く解すれば說いて淸淨となす』と。煩惱に實體無きが故なり。二七如來正覺を成ずる時の所說は、煩惱は是れ色に非ず、是れ無色に非ず、受想行識に非ず、受想行識なきに非ず。非識に非ず、非無識に非ず。不可見なるが故に、不可取なるが故に、解者は斷除する所なし。證時にもまた所得なし。證を以てせず得を以てせず、無證、無得、無相、無爲、但だ假名字にして猶幻化の如し。諸法の不動相に於て取に非ず不取に非ず、影の如く響の如く、相を離れ念を離れ無生無滅なり。

釋觀聖諦品第二十四

釋して曰く、今此の品は亦空の所對治を遮して四聖諦無自體の義を解せしめんが爲めの故に說く。自部の人言ふ、若し聖諦は空にして無自體なりと謂はば是の義爾らずと。故に論偈に言ふ、

(一)若し一切法空ならば、　無起にして亦無滅なり。
　聖諦の無體を說きて、　汝是の如き過を得。

【二六】以下本品の結語。教證として金光明女經を引く。

【二七】「如來正覺を成ずる時」以下に相當する西藏文は極めて簡單に如來は諸の煩惱の有に非ざること色に非ざることと又二に非ざることを悟つて、しかも所得なしと說かれしことを表はすに止るも、漢譯には頗る懇切に布演されをることに注意すべし。

【一】若一切法空　無起亦無滅
　說聖諦無體　汝得如是過
梵文及什譯と一致す。第三句の無體は abhāva の譯にして單に「無」と云ふと同じ。偈意は「一切法空にして不生不滅ならば、四聖諦の無を說くの過を得」となり。此偈より以下第六偈までは、法有の立場より法空の立場に提出せらるゝ問難の形を取る。隨つて冒頭の「自部人」は主として有部の立場をさすと見て可なり。それを自部と稱するは外道に對すればなり。小乘に對して大乘の別派(卽ち唯識等)を自部と稱することもあり。

無我、苦、不淨は、　而も應に是れ可得なるべし。

釋して曰く、此れ謂く、無我等の自體は能く我等の倒を除く。相待あるを以ての故に、無我等もまた成ぜず。無我なきが故に何處に我あらん。是れ顚倒の見なるが故なり。譬ふれば無人ならば終に杌に於て人想の顚倒を起さざるが如し。是の如き因等にて、其の過は免れ難し。是の觀察を以てすれば、常無常等の顚倒と、及び不顚倒とは因あること無し。故に無因なるは、論偈に說くが如し、

(二二)彼の無因を以ての故に　則ち無明、行滅し、
　乃至生、老死の、　是れ等同じく皆滅す。

釋して曰く、此れ謂く、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死等は顚倒の因無きに由るが故に、無自體を證得して諸の煩惱を息む。其の義成ずることを得。諸の有自體を說く者は、是の諸の煩惱に實體有りとなすや、實體無しとなすや。今何の問ふ所ぞ。論偈に說くが如し、

(二三)若し人の諸の煩惱に　一の自の實體有らば、
　云何んが能く斷除せられん。　誰か能く有體を斷ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、有自體ならば壞すべからざるが故なり。若し諸の煩惱の無實なること兎角の如くならば、また此の偈に過を說くが如し、『云何んが能く斷ぜざる』と。謂く、無ならば捨すべからざるが故なり。虛空華の捨すべからざるが如し。無自體なるが故に、馬體無ならば此の無を捨せしむべからざるが如し。また次に、若し是の意をなして『實の煩惱あり、聖道起る時に能く斷ずるが故に』と謂ひて、此の說に過なしと謂はば、此の實の煩惱は是れ何等の相にして對治道起るとき而も能く斷ずるや。汝の立義は物(人)をして解せしめ難し。是を以ての故に有實體、無實體なる煩惱の分別を起して、而も能く此の分別を斷ずるは然らず。是の中に驗を立つ、『第一義中には煩

對なり。什譯も梵文に一致す。意味上之の方可なり。

【二二】以彼無因故　則無明行滅
　乃至生老死　是等同皆滅
梵文には「是の如くして顚倒の滅するが故に無明滅す。無明滅するときは行等滅す」とあり、什譯は之に正確に一致す。本論の譯は之と多少異るも意味は同じ。第一句は「顚倒の因無きが故に」の意なり。

【二三】若人諸煩惱　有一自實體
　云何能斷除　誰能斷有體
梵文及什譯に正確に一致す。第二句の「自實體」第四句の「有體」は共に自性(svabhāva)の義なり。
尙此の偈の次に他本には凡て此偈と對句をなす一偈を置けど、本論には缺く。(中論註參照)。

また次に、世間の人言ふ、顚倒と合する者を、顚倒人と名づくと。

此の顚倒は、已に倒を起せる者と合ありと爲すや、未だ倒を起さざる者と合ありと爲すや、倒を起す時と合ありと爲すや。今此の三種に答へん。顚倒と合するは是れ皆然らず。論偈に說くが如し、

(一七)已起の者には合無し、　未起なるもまた合無し。
已と未との倒者を離れて、　合時あるは然らず。

釋して曰く、此れ謂く、已に倒ある者が更に倒と合するは則ち無用となす。何となれば、倒者空なるが故なり。譬ふれば餘の不倒者の如し。若し『有倒が時と合す』と言はば此れ倶過あり。倒と不倒とを離れて時と合するは然らず。是の觀をなす時は悉く皆然らず。若し有りと言はば汝今當に答ふべし。此の顚倒は誰と合するや。是の故に倒と合する者あること無し。是の義を以ての故に汝は先の所說の如き過を得。また次に、第一義中の如きは一切の諸體は皆無自性なり。此の道理を說いて已に開解せしめたり。是を以ての故に論偈に說くが如し、

(一八)無起未起ならば、　云何んが顚倒有らん。
諸倒悉く無生ならば、　何處に顚倒を起さん。

釋して曰く、此れ謂く、偈意は無生なるが故に顚倒あること無きを顯はす。汝の出因等は皆これ過あり。論偈に說くが如し、

(一九)常、樂、我、淨等にして　而も實に有りと言はば、
彼の常、樂、我、淨は　翻つて則ち顚倒となる。

釋して曰く、此れ謂く、第一義中に常我等あるは應に知るべしまた是れ顚倒なり。論偈に說くが如し、

(二〇)我と及び常樂等と、　若し當に是れ無なるべくんば、

【一九】已起者無合　未起亦無合　離已未倒者　有合時不然
梵文及什譯第十七、十八兩偈を綜合せる如き一偈なり。即ち「已に顚倒せる者にも顚倒は起らず。未だ顚倒せざる者にも顚倒は起らず」(第十七偈)。「顚倒しつゝあるものにも顚倒は起らず。汝自ら觀察せよ、何者に顚倒起るや」(第十八偈)。而して梵文で「顚倒起らず」とある所を「顚倒が倒者と合せず」と云ふ言ひあらはしを取る。恐らく原典の相違なるべし。

【二〇】「時」は倒時の意なり。

【二一】無起未起者　云何有顚倒　諸倒悉無生　何處起顚倒
梵文第十九偈「不生なる顚倒が如何にして起り得ん。顚倒不生なるときに、何處に顚倒者あらん」に大體に於て一致すと見るべし。

【二二】常樂我淨等　而言實有者　彼常樂我淨　翻則爲顚倒
梵文によれば第四句は「顚倒に非ず」とあり、什譯も「則非是顚倒」として梵文に一致す。意味上より見て此の方可なり。

【二三】我及常樂等　若當是無者　無我苦不淨　而應是可得
之も第四句は梵文によれば「無我、不淨、無常、苦は有ることとなし」とあり、右の漢譯と反

一切寂滅の相なり。　　是の故に執有ることなし。

釋して曰く、執に三種あり。謂く具と、起と、及び境界等なり。『執具』とは、これ能く執じて總じて物體を緣ずるの智なり。『執を起す』とは謂く、所執の心が或は妄置し或は非撥する等なり。又『執を須ふる者』とは謂く、執を起すの人なり。『所執の境界』とは謂く、所計の常樂我淨等の境界なり。此の三法は皆自體空なり。我が所說の道理の如きは執具等の一切皆寂滅の相なるを開解せしめんと欲す。是の故に執なし。而も彼の執者が有あるの言を以て物(人)をして解せしむるは譬喩あること無し。是を以ての故に論偈に說くが如し、

(二六)執性有ること無きが故に、　邪正等もまた無し。
　誰か今、是れ顚倒にして、　誰か是れ非顚倒なる。

釋して曰く、第一義中には誰か是れ顚倒にして唯か是れ非顚倒なる。菩薩摩訶薩は無分別智に住して一切の分別を行ぜず、正なく邪なく、顚倒なく不顚倒なし。

また次に、若し人言はん、定んで顚倒あり、顚倒を具足する者あるが故なり。譬ふれば蓋あれば則ち蓋を持する者あるが如し。凡夫に顚倒あるもまた是の如し。顚倒者あるに由つて、是の故に顚倒あり。

論者言ふ、是の義は然らず。上偈に說けるが如し、『執性』あること無きが故に邪正等もまた無し』と。此の二の道理は先に已に開解せしめしが故なり。起あるはまた成ぜず、是の如く是の如く、顚倒と及び顚倒者とも亦成ぜざるが故に、上偈に說けるが如し、『誰か是れ顚倒にして誰か非顚倒なる』と。此の言は顚倒なきを謂ふ。顚倒なきが故に顚倒者もまた無し。また次に、若し顚倒あらば即ち非顚倒あり。是を以ての故に汝の因の義成ぜず。第一義中には譬喩無體なり、また汝の義に違す。

【八】執性無有故　邪正等亦無　誰今是顚倒　誰是非顚倒　梵文によく一致す。什譯は多少義譯せり。

論者言ふ、無起なるが故なり。此の無起の義は道理として先に已に遮せるが如し。譬ふれば涅槃の如し。無起ならばまた無常なし。また次に、此の無常の體能く『常』の分別智を起す。若し是れ顚倒の執なりと言はば、常覺所緣の境界は、則ち體あること無し。是の故に前偈に說けるが如し、『無常もまた是れ執なり、空ならば何故に執に非ざる』と。『倒』とは即ち第れ顚倒なり。何となれば、分別あるが故なり。譬ふれば常執者の如し。此の中に驗を立つ。『第一義中には、色無常なるは即ち是れ顚倒なり。これ分別なるが故なり。譬ふれば色を執して常となすが如し』。

自部の人言ふ、智が分別ならば、諸行空と言ふは、其の智は一向に顚倒に非ず。

論者言ふ、また是れ顚倒なり。我が說に過なし。

自部の人言ふ、若し是の如くならば、此の空智はこれ解脫を得るの因に非ず。これ倒なるが故なり。譬ふれば內入これ苦樂等の智の境界なるが如し。

論者言ふ、汝の立義中、是れ何の義なるや。

自部の人言ふ、眼空を緣ずるの智は是れ解脫を得るの因に非ずや。

論者言ふ、若し爾らば反つて我が義を成ず。云何んが我が義を成ずるや。無分別智を以て解脫を得るが故なり。若し眼空と言はば眼空の智は是れ有分別なるが故なり。且く是の語を置け。今還つて汝の爲めに我が本宗を說かん。無常を執して常となすが如きは卽ち是れ顚倒なり。無我を我となし、無樂を樂となし、不淨を淨となすも、また是の如くに說く。

自部の人あり立義分別して言ふ、是の如き執あり、能執所執あるを以ての故なり。然もその執を起すに凡そ三種あり、而して是れ無ならず。

論者言ふ、汝の義は然らず。論偈に說くが如し、

（一五）執具[一七]と、　執を起す者と、　及び所執の境界とは、」

【一七】執具起執者　及所執境界
一切寂滅相　是故無有執
後二句は梵文及什譯と全く同じ。前二句は玆には執具、起執者、所執境界の三法の名目を擧げたれど、梵文及什譯には侚執(grāha 著)なる一法を擧ぐ。

執具(yena grihnāti 其れを以て執する所のもの)(什譯、所用著法)。

起執者(grahītri 執著者)(什譯、著者)。

所執境界(yad grihyate 執著せらるるもの)(什譯、可著)。

論偈に說くが如し、

(一三)第一義中に於ては　畢竟して顚倒なし。
　　如來は終に　是れ我、無我等と說かず。

釋して曰く、第一義中には亦、我と無我とを說かざるが故に、汝の譬喩と及び出因とは無體なり。
また次に、若し修多羅人の意に言はん、第一義中に顚倒あることを得んと欲せず。何となれば、顚倒には二種あり。一は生死に隨順し、二は涅槃に隨順す。云何んが『生死に隨順す』と名づくるや。所謂る無常を常とするの倒、無我を我とするの倒、無樂を樂とするの倒、無淨を淨とするの倒なり。云何んが『涅槃に隨順す』と名づくるや。所謂る空に於て空を執し、無常に於て無常を執するなり。是の如き等あるが故に顚倒と名づく。若し無分別智を得んと欲すれば當に此の二種の顚倒を斷ずべし。是れ智障たるが故なり。
自部の人言ふ、若し無常の物に於て無常の見を起すが是れ顚倒なるは其の義然らず。
論者言ふ、顚倒とは是れ何の義なるや。
自部の人言ふ、實は是れ無常なるを、是れ常と謂はば、顚倒と名づくべし。
論者言ふ、この說は善ならず。その過は論偈に說くが如し、

(一四)無常を常と謂ふを　名づけて顚倒の執となさば、
　　無常もまた是れ執なり、　空ならば何故に執に非ざる。

釋して曰く、謂く彼の智の所緣の顚倒の境界なるが故に、此の言は卽ち是れ顚倒の義なり。譬ふれば人の『三界の欲を離れ已らば何故に解脫と名づけざる』と言ふが如し。此の言は卽ち是れ解脫なり。
自部の人言ふ、汝今また『無常もまた空』と說く、云何んが是れ第一義ならざるや。

【一三】於第一義中　畢竟無顚倒
　　如來終不說　是我無我等
他本にはすべて此偈なし。前半二句は直前の長行に接續すべき結語にして、後半二句は觀法品第十八に於ける第六偈の後半「(諸佛によりて)亦如何なる我もなく、無我もなしと說かれたり。」を別譯して茲に引證したるものと考へらる。故にこれは釋偈にして、本品の本頌にあらず。されど本論は誤つて之を論偈となせるを以て、今假りに之に隨つて本頌の一に加へたるのみ。

【一四】無常謂常者　名爲顚倒執
　　無常亦是執　空何故非執
梵文及什譯の第十三、十四の兩偈を綜合せる如き一偈なり。卽ち前二句は梵文第十三偈前半「無常に於て常と云ふ是の如き執持が若し顚倒ならば」に相當し、後二句は梵文第十四偈後半「無常なりとの執持も空に於ては何ぞ顚倒ならざる」に相當す。此の後二句の句義は「空中には常無常俱に不可得なれば無常と云ふも亦顚倒なるべし」の意なり。

釋して曰く、第一義中には愛と非愛とは皆不可得なり。何となれば、第一義中には色像等の自體は空なるが故なり。云何んが幻化の人の如くなる。不實の境界に於て相似を顯現するが故なり。云何んが像の如くなる。人功を待たずして而も能く起現し、形と相似するが故なり。是の因緣を以て汝の上の出因と立義等は成ぜず。何となれば、第一義中には物體成ぜざるが故なり。また汝の義に違す。論偈に說くが如し。

[一一](一〇)若し彼の愛に因らずんば、　則ち不愛有ることなし。
　愛に因つて不愛あり。　是の故に愛有ることなし。

[一二](一一)不愛は愛に待することなく、　愛は不愛に待することなし。
　若し愛を以て緣となさば、　不愛ありと施設せん。

釋して曰く、愛は無自體なり。其の義は是の如し。是を以ての故に應に不愛あるべからず。不愛無體なるが故に、愛は不愛に待せず。而も愛ありと言ふは是れまた然らず。論偈に說くが如し、

[一三](一二)可愛の者有ることなくんば、　何處に當に貪を起すべき。
　不愛若し無體ならば、　何處に當に瞋を起すべき。

釋して曰く、彼の二は無體なるが故に、癡もまた無體なり。是の故に所說の過の如きは、今還つて汝に在り。

[一四]修多羅人言ふ、第一義中に是の如き愛非愛の顚倒あり。佛經の所說の如し。若し經中に說かば當に是れ有なりと知るべし。譬ふれば『無我』を說かば定んで是れ無我なるが如し。今經中に現に此の語あり。所謂る『無常を常と計し、無我を我と計し、無樂を樂と計し、不淨を淨と計す。是れを顚倒と名づく』と。是の義を以ての故に第一義中に是の如き愛非愛の顚倒あり。

論者言ふ、世諦中に於ては愛非愛顚倒あるも第一義中に有るに非ず。是の故に我が說は過なし。

【一一】若不因彼愛　則無有不愛
　因愛有不愛　是故無有愛
第三句は梵文によれば「因不愛有愛」なり。意味上も此の方可なり。

【一二】無不愛待愛　無愛待不愛
　若以愛爲緣　施設有不愛
梵文及什譯と全く異る。梵文には「不淨に因待せずしては淨無し。その(淨)に緣りて不淨を我等は施設す。其故不淨は實に存せず」とあり、之によつて前偈と對句をなす。

【一三】無有可愛者　何處當起貪
　不愛若無體　何處當起瞋
梵文及什譯と全く同じ。但し第一句「可愛者」は çubha (淨)の譯にして單に「愛」とあると同じ。

【一四】經部說の批評一。

また次に、自部の人ありて言ふ、色等の六物より能く顚倒を起す。云何んが無からんや。彼れ無しと謂ふは其の義爾らずと。故に論偈に言ふ、

(七)色[8]、聲、香、味、觸、　及び法を六種となす。
愛非愛を緣となし、　物に於て分別を起す。

釋して曰く、此れ謂く、六種の物に緣つて能く諸煩惱を起す。此の中に驗を說く。『第一義中に愛非愛顚倒ありて緣となり、能く貪瞋癡等を起す。第一義中に物は有體なるが故なり。若し無と言はば六物體に非ず。譬ふれば生盲者の眼識の如し。又貪瞋等能く顚倒の分別を起す。我が所說の如きは因に力有るが故に諸顚倒あり。是の因緣を以て譬喩に過なし。

論者言ふ、汝の語は非なり。皆是れ虛妄なり。論偈に說くが如し、

(八)色[9]、聲、香、味、觸　及び法體の六種は、
乾闥婆城の如く、　燄の如く、また夢の如し。

釋して曰く、是の如き等の自體は皆無自體にして勢分もまた無し。乃至世諦誹謗の過もまた無し。何の過なきや。此の物無きを以ての故なり。云何んが乾闥婆城の如くなる。時處等を以て衆人共に見るが故に、是れを乾闥婆城の如しと名づく。云何んが燄の如くなる。譬ふれば愚者熱時の燄を見て謂ひて是れ水と言ひ、之を逐ひて已めず、徒に自ら疲勞して竟に所得なきが如し。是の如く一切諸法は自體皆空にして著法の凡夫もまた是の如し。故に燄の如しと言ふ。云何んが夢の如くなる。有る時有る所に思念する因果の體、及び一切法は、無自體なるが故に、是れを夢の如しと名づく。若し色中の有ならば、論偈に說くが如し、

(九)若[10]しくは愛、若しくは非愛を、　何處に當に得べけん。
猶し幻化の人の如く、　また鏡中の像の如くなるに。

【八】色聲香味觸　及法爲六種　愛非愛爲緣　於物起分別
後二句は梵文と著しく異る。梵文には「色聲香味觸法は貪瞋癡に對する六種の體事と分別せらる」とあり、什譯も略ぼ之に一致す。

【九】色聲香味觸　及法體六種　如乾闥婆城　如燄亦如夢
梵文及什譯と一致す。

【一〇】若愛若非愛　何處當可得　猶如幻化人　亦如鏡中像
梵文及什譯と同じ。梵文によれば偈意は「猶し幻人に似、影像に等しきものに於て、淨又は不淨が如何にしておこらん」となり。

と欲すれば、則ち此の瓶は青黄黑色等と和合すと說くべからず。また應に青黄等の色を說いて人に示すべからず。若し無の瓶絹の處あらば青黄等の色を說くべからず。また人に指示すべからず。依止の處無きが故なり。是の諸の煩惱畢竟じて無主無體なるの義は、石女の兒に青黄の相の說くべきもの無きが如きが故に、是の故に、無を以て體となすの義は成ぜず。今當に次に自部の人等に答ふべし。論偈に說くが如し、

（五）身に煩惱の見を起して　我我所を緣ずるも、
　　煩惱と染心とは　五に求むるに不可得なり。

釋して曰く、名色聚集の因を名づけて身となし、自身を緣じて染汙の見を起す、是れを身見と名づく。貪等の三種は此の義と同じ。觀如來品中の偈に說くが如し、『陰に非ず陰を離れず。陰中に如來無く、如來中に陰無し。如來が陰を有するに非ず』と。諸煩惱もまた（是の）如し。五種中に煩惱無きも、能く苦を起すが故に名づけて煩惱となす。染者は煩惱に非ず。今不異の義を遮せんが爲めの故なり。若し染者が卽ち煩惱ならば能燒と所燒とは同じく一なるの過を得。また煩惱に異らずして染者あらば此の義は已に先に遮せるが如し。また次に、若し煩惱に異りて染者あることを得れば、則ち煩惱を離れて獨り染者有るの過あり。是の故に異體は成ぜず。染者中にもまた煩惱無く、煩惱中にもまた染者無く、また染者が煩惱を有するに非ず。是の如く五種に求むるに煩惱は無體なり。煩惱の無體なるを以ての故に則ち能成立の法なし。是れ汝の譬喩は過あり。論偈に說くが如し、

（六）愛非愛顚倒は　本と自體有ることなし。
　　何等を以て緣と爲して、　而も能く煩惱を起すや。

釋して曰く、我が法中の如きは愛非愛顚倒は本來無體なり。是を以ての故に第一義中には煩惱は、これ緣より起るの法に非ず。能成立の法なきが故に、これ汝の立義の過なり。

【六】身起煩惱見　緣於我我所
　　煩惱與染心　五求不可得
梵文「自身見の如く、諸煩惱は惱者に於て五種に（求むるも）存在せず。自身見の如く惱者は諸煩惱に於て五種に（求むるも）亦無し」に多少相違す。但し後二句は「染心」を惱者（kliṣṭa）の譯と見れば一致す。前二句は梵文の譯としては解し難し。漢譯に獨立した意義を認めて解すれば「身について染汙の見を起して我我所を分別するも、我たる煩惱と、我たる惱者との實有性は五種に求むるも不可得なり」の意なり。

【七】愛非愛顚倒　本無有自體
　　以何等爲緣　而能起煩惱
梵文及什譯と全く同じ。

我に因つて煩惱あり、　　　我無くんば彼れは起らず。

釋して曰く、此れ謂く、我は世諦にて成ずることを得るに非ず、また第一義中に成ずることを得るに非ず。是を以ての故に、若し我を離るれば則ち煩惱は有らず。何となれば、能依の無體なるが故に、所依もまた無體なり。此の義を開かんが爲めの故に偈に說くが如し、『我に因つて煩惱あり』とは、煩惱は是れ我の法にして、また是れ所受用なるが故なり。然も我の自體は成ぜず。觀我品中に觀ぜるが如く、煩惱に能依の處なきが故なり。其の驗は是の如し。第一義中には貪等は皆無し。我の依止無體なるが故なり。譬ふれば石女の子を生まざるが如し。何ぞ說いて子色の白黑を言ふことを得んや。

自部の人言ふ、我有ることなしと雖も、但だ心と煩惱と和合するが故に煩惱の起るあり。而も煩惱は是れ心上の法なり。汝無我の義を立つるは、其の因成ぜず。

論者言ふ、汝の語は非なり。其の過は論偈に說くが如し、

(四)誰れか[五]彼の煩惱を有せん、　有するの義は則ち成ぜず。
若し衆生を離るれば、　煩惱は則ち無屬なり。

釋して曰く、此れ謂く、煩惱がこれ衆生ならば、一切處に於て推求するに衆生は不可得なり。若し衆生を離るれば煩惱は屬なし。心の起るは先に已に遮せるが故に、また識の自體を除くが故に、また有實を遮するが故に、汝の心の義は成ぜず。我が因の義は成ぜざるに非ず。

自部の人言ふ、彼れ煩惱無きの義を受くるは則ち無を以て體となす。『無體の體』成ずるが故に、諸體は更互に體相無し。

論者言ふ、汝今諸體の若しくは瓶、若しくは絹、及び餘物等の有ることを得んと欲すれば、是れ體となすや。是れ無體となして而も能く有覺を起す因なりと言ふや。瓶をして是れ無體ならしめん

【五】誰有彼煩惱　有義則不成　若離衆生者　煩惱則無屬
梵文「是等諸煩惱は誰かに屬して起れど、その誰かなるものは成立せず。誰かを離るれば、煩惱は誰にも屬さずして存在せん」に正確に一致するものと見て可なり。「衆生」は kasyacit（誰か）に對する義譯と見るべし。

卷の第十四

釋觀顚倒品第二十三

釋して曰く、今此の品はまた空の所對治を遮して顚倒の無自性を解せしめんが爲めの故に說く。

[一]自部の人言ふ、分別あるが故に諸煩惱を起す。是の如き煩惱は顚倒より起る。顚倒を以ての故に則ち貪等あり。彼れ若し無くば、義相應せずと。故に論偈に言ふ。

[二](一)分別より煩惱を起し　貪瞋等ありと說く、
善不善の顚倒なり。　此の緣よりして起る。

釋して曰く、諸論中に『貪瞋等は次第に隨つて善不善より起る』と說く者は謂く、愛と非愛とありて、此の緣より起り、緣よりならざるに非ず。應に知るべし、不正思惟の分別を、能く煩惱を起すの緣となす。此の中に驗を立つ。『第一義中に諸陰等は自體有り。是れ第一義中に陰等は因緣より起るが故なり。譬ふれば貪等の如し』若し無自體にして緣より起らずんば、譬ふれば虛空華の如くならん。

論者言ふ、是の義は然らず。論偈に說くが如し、

[三](二)愛非愛の顚倒ありて、　皆此の緣より起る。
我は無自體なるが故に、　煩惱もまた非實なり。

釋して曰く、非實とは謂く、貪等の煩惱は第一義中に起るに非ず。是を以ての故に汝は譬喩を闕く。是れ立義に過あり。汝若し『我は世諦を以て喩となし第一義に非ず』と言はば所成立の法あることなし。若し世諦中に於て成立あらば反つて我が義を成ず。論偈に說くが如し、

[四](三)我は若しくは有なるも若しくは無なるも、　是の二は皆成ぜず。

【一】自部人は唯識派の人なるべし。此の品は主として自部人の說を難ず。

【二】分別起煩惱　說有貪瞋等
善不善顚倒　從此緣而起
善不善顚倒(çubha-açubha-viparyāsa)は普通「淨不淨顚倒」と譯さる。本論では「愛非愛顚倒」ともす。「淨(好ましく美しきもの)を不淨とし、不淨を淨とするの誤謬」なり。是れ卽ち「分別」にして、此れを緣として貪瞋煩惱を起すと言ふなり。此偈梵文及什譯と一致す。

【三】愛非愛顚倒　皆從此緣起
我無自體故　煩惱亦非實
梵文「淨不淨顚倒に緣りて起る所のものは自性より有るに非ず。それ故諸煩惱は眞實に非ず」とあり、什譯も之に一致す。右の漢譯第三句は梵文及什譯と異る。

【四】我若有若無　是二皆不成
因我有煩惱　我無彼不起
第二句「是二」とは我の有と無とをさす。又後二句は梵文には「我を離れては諸煩惱の有と無とは如何にして成立せん」とあり、什譯も之に一致す。本論のみ異る。

『唯だ一心念佛を修して色を以て如來を見ず、無色を以て如來を見ず、相を以てせず、好を以てせず、戒、定、慧、解脫、解脫知見を以てせず、生を以てせず、家を以てせず、姓を以てせず、眷屬を以てせず、乃至、自作に非ず他作に非ず。若し能く是の如くならば名づけて佛を念ずとなす』と。又佛地經中の偈に言ふが如し『無起等の法これ如來なり。一切の法は如來と同じ。凡夫の智は妄りに相を取ると雖も、常に無法中に行ず。無漏の根力衆德の鏡に中に於て、如來の像を顯現するも、而も實に眞如の體有ることなく、また未だ曾て如來の身有らず。世間の所見は鏡像の如く、本より往來の相無し』と。又楞伽經の偈に言ふが如し『佛は陰を以て緣起するも、處として人の見るもの有ることなし。若し人の見るもの無しと言はば、云何んが觀察すべけん』と。

七道品、六波羅蜜の諸功德の聚を以て如來となし、乃至法性、法界、法住、實際、眞如、涅槃の是の如き等の法と如來の身とは一となすや。異となすや。一に非ず異に非ず。此等は無自體なるが故に、如來もまた無自體なり。又觀緣品に無起を說ける中に、已に起を遮せるが如きが故に、また如來の起も無自體なりと遮す。又觀去來品に已に去來の無自體を遮せるが如きが故に、如來もまた無自體なり。是を以ての故に外人の立義は皆無自體なり。また先の出因の義に違するが故なり。向の偈に說けるが如きは『如來無體なるが故に世間もまた無體なり』と。是の故に品初に說ける外人の立義等に過あることを而も信解せしめ、自說の法身は成立あるの義もまた信解せしめたり。是の義を以ての故に我が義は成ずることを得。

楞伽經中に說くが如し、『佛、大慧菩薩に告ぐ、如來の身は常に非ず、無常に非ず、因に非ず、果に非ず、有爲に非ず、無爲に非ず、覺に非ず、界に非ず、相に非ず、無相に非ず、是れ陰に非ず、陰を離るるに非ず、言說に非ず、所說の物に非ず、一に非ず、異に非ず、悉く和合無く、乃至無所得無所緣にして、一切の戲論を出過せるを、名づけて如來となす』と。又如來三蜜經に說くが如し、『佛、寂慧菩薩に告ぐ、如來の身は虛空に等しき身、無等の身、一切世間に勝るる最勝の身、一切衆生に徧ずる如身、無譬喩の身、無相似の身、清淨無垢の身、無染汙の身、自性清淨の身、自性無生の身、自性無起の身、心意識等と和合せざるの身、幻の如く燄の如く水中の月の如きを自體とするの身、空無相無願にて觀察せらるるの身、十方に徧滿するの身、一切衆生に於て平等なるの身、無邊無盡の身、無動無分別の身、住不住に於て無壞を得るの身、色體無きの身、受想行識無きの身、地界、水界、火界、風界等に合成せらるるに非ざるの身なり。是の如き身は、實に非ず生に非ず、また大等の所成に非ず。實非實の法に非ず、一切世間の知る能はざる所、眼に從つて生ぜず、耳に依つて聞かず、鼻識の所知とならず、舌の所成に非ず、また身と相應せず』と。又舍利弗陀羅尼經の所說の如きは、

けて法を見るとなす。若し能く法を見る者は卽ち如來を見るとなす』と。また次に、色身これ如來、言敎の身及び法身も亦これ如來なりといはば、前偈に說くが如し、[三四]『若し色を以て我を見、音聲を以て我を求むれを過ぎたり』と。又金剛般若經中の偈に言ふが如し、[三四]『若し色を以て我を見、音聲を以て我を求むれば、この人は邪道を行じて、如來を見ること能はず』と。是の如き觀察をなす時は外人所立の『諸體に自體あり』の言を成立すること有らんに、如來を引いて譬喩となすは然らず。論偈に說くが如し、

〔一八〕[三五]如來の自體は　　世間の自體に同じきを以て、
　如來無體なるが故に　　世間もまた無體なり。

[三六]釋して曰く、此れ謂く、如來を觀る時は、諸の陰界等は自體有ることとなし。一切の自體は皆無體なりと分別するが故なり。云何んが分別するや。謂く陰界入は、能相所相、若しくは因若しくは果、有體無體、一異等の法にて上の如く廣く分別すれば、悉く皆無體なればなり。諸の陰入等は云何んが無體なりや。觀陰品中に說けるが如し、『若し彼の色因を離れて色有るは然らず』と。彼の所觀の道理の如く、陰は無體なるが故に、如來もまた無體なり。又觀界品中に說けるが如きは、『無物これ虛空なり』と。彼の中に虛空等の如く六界を觀察する時『自體に非ず他體に非ず、能相に非ず所相に非ず』と。一切の諸體悉く皆無なるが故なり。已に色の無自體を說けり。次に識界を觀ぜん。是の如き識界等を分別して如來となさば、彼の識界を觀ずるに體に非ず無體に非ず、能相に非ず所相に非ず、無自體なるが故に、また如來無し。又觀入品に說くが如きは、無自體に入り已つて開解せしめ『此の諸入を離れて別の見者無き』ことを成ずることを得。是の如く諸入の境界を以て如來となすは義皆成ぜず。又燃可燃品の如きは、已に一異倶に遮して、薪と火と皆無自體なるを明せり。是の如く若しくは智を以て如來となし、及び三十二相、八十種好、慈悲、喜捨、十力、無畏、三十

【三四】若以色見我　以音聲求我　是人行邪道　不能見如來
　この偈安慧菩薩の釋論中にも引用せられども、これが何經の頌たるを示さず。本論によつて金剛般若經の偈たるを知る。

【三五】以如來自體　同世間自體　如來無體故　世間亦無體
　梵文及什譯に同じ。三者正確に一致す。

【三六】以下本品の結論。前來諸品の所說を引きて上說の證とし、更に敎證として楞伽經、如來三密經、佛地經を引く。

外人の意に、如來の出因と引喩とを以て我を成立せんと欲すれば、其の義は成ぜず。是を以ての故に因喩は同じからず。また先の義に違す。文殊所問經に説くが如し『佛、文殊師利に告ぐ、不生不滅を名づけて如來となす』と。若し有る人『第一義中には如來の滅後に有無を説かず、この故に如來有り。石女の兒無きを説いて無兒と言ふが如くならず』と言はば、我れ今彼れに答へん。汝は種種分別の習氣を以て智慧に熏習するが故に執して如來を説くも、これ皆然らず。論偈に説くが如し、

(二五)麁重の執見の者は　如來の有無を説く。
　　如來の滅度の後に　云何んが分別せざる。

釋して曰く、此れ謂く、如來の滅後に如來有りや如來無しや、亦有亦無なるや、非有非無なるや。この義然らず。正しく習して智眼開く者は論偈に説くが如し、

(二六)如來は自體空なり、　應に思惟を起すべからず。
　　滅後に如來有り、　及び如來有ること無しと。

釋して曰く、此れ謂く、境界無體にして慧は無分別なり。是を以ての故に汝の先の出因と譬喩は過あり。何となれば、無常の色身、言教の身、法身あり、能相、所相、因果、能覺、所覺、空、無相、無作、無願、如幻、如夢等は悉くこれ分別なり。論偈に説くが如し、

(二七)戲論は分別より生ず、　如來は分別を過ぎたり。
　　戲論の爲めに覆はるるものは、　如來を見ること能はず。

釋して曰く、譬ふれば生盲の者日輪を見ざるが如く、如來を見ざるも亦また是の如し。何故に見ざるや。戲論分別にて慧眼を覆ふが故に是れを不見と名づく。云何んが見となすや。能く法性如來を見る、是れを名づけて見となす。また次に、經偈に言ふが如し『能く緣起を見る者は是れを名づ

【三〇】麁重執見者　説如來有無
　如來滅度後　云何不分別
　梵文什譯第十三偈に相當し、且つ梵文に正確に一致す。後二句は「滅度したまへる如來についても有無を分別せん」の意なり。

【三一】如來自體空　不應起思惟
　滅後有如來　及無有如來
　梵文及什譯第十四偈に相應す。右の漢譯の後二句は第三句の「思惟」の內容なり。

【三二】戲論生分別　如來過分別
　爲戲論所覆　不能見如來
　梵文及什譯第十五偈に相當す。前二句は稍〻義譯なり。第一句は「戲論は分別を生ず」と訓み得るも意味上より反對に訓みたり。「分別より戲論を生ず」とは屢〻あらはるゝ一定した命題なり。

【三三】能見緣起者　是名爲見法
　若能見法者　卽爲見如來
　西藏譯及び安慧菩薩の釋論に於ては、偈頌にあらずして長行となる。觀誓の廣疏に依れば、稻稈經の文なりと。

爲めの故に、境界に於て二見を起すの過を息めんが爲めの故に、第一義を得んが爲めの故に、說いて無二と言ふ。是の如く不善分別の垢を洗濯せんが爲めの故に空、無相、無作、夢幻等の語を說く、是の故に空を說いて一切の見を滅す。論偈に說くが如し、

(二八)若し法に自體有らば　空を見るも何の益あらん。
　諸見分別は縛なり、　此の見を遮せんが爲めの故なり。

釋して曰く、此れ謂く、物に自體有らば、空を見るも無益なり。彼の見を破せんが爲めに空を讃ず。

外人言ふ、若し『二つ倶に說かず』と言はば、此の語は卽ち戲論の過ありと。

論者言ふ、汝の語は非なり。異人の分別を遮せんが爲めの故に二つ倶に說くべからずと言ふ。說くべからざるが故に過なし。譬ふれば聲を以て聲を止むるが如し。また次に、若し第一義を以て信解せしむれば、是の如き驗なし。若し第一義の心に住して世諦の智を以て說かば、第一義中には一切法空なり。是の說をなさば過なし。後偈に說くが如し『若し世諦に依らずんば第一義を解せず』と。此れ謂く、不空を遮せんが爲めの故に空を說き、然も空を取らず。この故に過なし。是の如く如來の自體もまた空なり。

若し有る人『如來は若しくは常、若しくは無常、亦常亦無常、非常非無常なり。世間は有邊、世間は無邊、亦有邊亦無邊、非有邊非無邊なり。若し如來の義成ずることを得れば、我の義もまた是の如く成ず』と言はば、今當に之に答ふべし。論偈に說くが如し、

(二九)寂滅法中に於ては、　無常等の四は過なり。
　また寂滅中に於ては、　無邊等の四は過なり。

釋して曰く、此れ謂く、如來の自體は空なり。能依無體なれば所依の分別もまた無體なり。若し

【二八】若法有自體　見空有何益
　諸見分別縛　爲遮此見故
この偈は安慧の大乘中觀釋論に於ても、佛護の根本中論註に於ても引用せられ、後者に於ては之を以て提婆阿闍梨の偈となし、觀音の廣疏も亦同じ。玄奘譯廣百論・教誡弟子品第八に次の如き偈あり。參照すべし。
　若法本性空　見空有何德
　虛妄分別縛　證空見能除

【二九】於寂滅法中　無常等四過
　亦於寂滅中　無邊等四過
梵文及什譯第十二偈に相當す。無常等の四、無邊等の四はそれ〳〵常無常、邊無邊に關する四句をさす。

且く是の事を置いて今還つて我が本宗を說かん。論偈に說くが如し、

(二〇)彼の所取の五陰は　自體より有らず。
若し自體無くんば　云何んが他體有らん。

釋して曰く、此れ謂く、若し自體より有らずんば云何んが他體より有らん。何となれば、自體無きが故にまた他體無し。その義は論偈に說くが如し、

(二一)法體は是の如きが故に、　取と及び取者とは空なり。
云何んが當に空を以て、　空の如來を說くべけん。

釋して曰く、思惟觀察するに、取と及び取者とは、是の二は皆空なり。云何んが空を以て空の如來を說かん。この事無きが故なり。

外人言ふ、彼れの先の所說は、一切諸法は皆戲論無しと。今また說いて一切法空と言ふは、還つてこれ戲論なり。本の所說に違す。

論者言ふ、實に所問の如し。何となれば、論偈に說くが如し、

(二二)空は則ち應に說くべからず、　非空も應に說くべからず。
俱、不俱もまた然り　世諦の故に說あるのみ。

釋して曰く、若し有る人『聞慧を離れて能く一切の境界に於て第一義空を得』と言はば、則ち一切法空を說かず。是の如き人無きが故に、所化の衆生の福智の聚に隨順せんと欲するが爲めの故に、空等の語を說く。但だ世諦を以て施設するが故に說く。不善分別の垢を洗濯せんと欲するが爲めの故なり。邪見癡眼の膜を破せんが爲めの故に一切の境界は不空と說く。何となれば、若しくは空を說いて邪見を增長するが爲めなり。又執我等の膜を破せんが爲めの故に一切の境界は空と說く。第一義中には幻の如く燄の如く自體無生なるが故に、二つ俱に說かず。異人の立驗を遮せんが

【二五】彼所取五陰　不從自體有　若無自體者　云何有他體
梵文及什譯の第九偈に相當す。偈文は同じ。

【二六】法體如是故　取及取者空　云何當以空　而說空如來
梵文及什譯第十偈に相當す。第一句「法體如是故」は單に evam(是の如くして)の譯なり什譯は「以如是義故」とす。

【二七】空則不應說　非空不應說　俱不俱亦然　世諦故有說
梵文及什譯第十一偈に相當す。第四句「世諦故有說」は梵文には「認知(prajñapti)の爲めに說かる」とあり、什譯の「但以假名說」の方が正確なり。然し假名を以て說くことは卽ち世諦の說なるを意味す。この偈に對する本釋は安慧菩薩の釋論に「若一切處決定說者，或說爲有，或說爲空，一切當知，皆世俗諦勝義諦中卽無性故，如尊者提婆所說頌言，若不依俗諦，卽不說勝義，若不依勝義，卽不說涅槃，」とある說を敷衍せしものと考へらる。

論の文句の如し。是等の因を以て應に廣く驗をなすべし。

〔三三〕彌息伽外道所計の韋陀の聲これ常なりといふが如きは今此の義を遮せん。汝分別する所の聲は、聲自體に非ず。何となれば、根の所取となるが故なり。譬ふれば色の如し。また次に、聲は了出の法に非ず。是れ依りて行ずべき因なるが故なり。提婆達多に瓶を將ちて來れと言ふに卽ち聲に依つて瓶を將ちて來り餘物を將ちて來らざるが如し。譬ふれば頭語手語等の如し。是の如くに有るが故なり。また次に、聲は了出の法に非ず。是れ所召の法なるが故に。譬ふれば頭語等の如し。是の如くに有るが故なり。また次に、聲は了出の法に非ず。これ能く成就するの法なるが故に。譬ふれば頭語等の如し。是の如くに有るが故なり。また次に、聲は出法に非ず。これ喜怒の因なるが故に。譬ふれば頭語等の如し。是の如くに有るが故なり。是等の因を以て當に廣く驗をなすべし。若し有る人『劫初の諸天子の故に』と言はば、また前と同じく遮す。又また韋陀はこれ破戒惡人の所作にして、殺生婬天、親處邪行、飲酒等を說くが故なり。譬ふれば〔三四〕波西目伽論の如し。

外人言ふ、韋陀中に殺生を說くはこれ非法ならず。呪力を以て禳ひ殺罪を畏れざるが故なり。譬ふれば呪毒を以て人を害せざるが如し。

論者言ふ、不與取、邪行等は是れ極惡の法なり。然れば非一向なり。この故に此の殺生罪を作すはこれ惡道に趣くの因なるが故に、作意して殺すは狂亂時を以て殺すに非ざるが故に。譬ふれば祭祀に入らざる羊の如し。又また若し『羊等は梵天遣はし來ること祭祀の爲めなり』と言はば此の義然らず。祭祀の爲めにして來生するに非ざるなり。何となれば、是れ受食の物なるが故なり。譬ふれば業報の果の如し。『是の如くに有るが故に』等の諸因は廣く上の如く說く。かの是の如き不顚倒なる一切法無自體は、如來の所說にして、一切天人の供養する所なり。如來には一切智、十力、無畏等の諸功德ありて具足するが故なり。

〔三三〕彌息伽外道說の批評二。

〔三四〕波西目伽(pātimokkha)は戒本なれば、波西目伽論とは經分別(sutta-vibhaṅga)を指せるなるべし。

事は記すること能はず說くこと能はざるが故に名づけて一切智なしとなすや、是等は皆無なるが故に記せずとなすや。

又また汝『總じて知らざるが故に名づけて不智となす』と言はば、此れ卽ちこれ知なり。何等か是れ總なる。謂く一切諸法は皆無自體なるのみ、物(人)をして解せしむるが故なり。佛涅槃の後當來の世に、諸弟子等もまた無自體の義を以て衆生をして解せしむ。

[三二]復た彌息伽外道ありて言ふ、佛家所說の十二部經は一切智人の所說に非ず。作者あるが故なり。譬ふれば鞞世師等の論の如し。

論者言ふ、若し『作者あり』といはば、汝の出因の義は成ぜず。何となれば、可化の衆生あることを見るが故に、如來は無功用にして自然に言說を出だす。猶し天鼓の空中に自ら鳴るが如し。我が法中の如きは、作者と受者と皆無きが故に、汝『作者あり』の義を立つるは、この因は成ぜず。汝の韋陀は作者あり。誦習せるが故なり。譬ふれば鞞世師等の論の如し。汝所立の因は則ち非一向なり。若し外人是の如く『韋陀の文句は作者あること無し。其の義云何。作者は時遠くして憶すること能はざるが故なり』と意はば、論者言ふ、この說は善ならず。汝は但だ因を說くのみにして譬喩あること無し。又汝の韋陀中に『[三三]一力の山中に一力毗陀を造り、三摩山中に三摩毗陀を造り、迦逋處(唐に白鴿地と言ふ)に阿闥毗陀を造る』と言ふ、云何んが作者無しと言はんや。是の故に汝の立宗の義は成ぜず。若し『是れ了にして作者に非ず』と言はば、此の了の義は先に已に遮せり。汝の立了の義は成就すること能はず。何となれば、文句は是れ作法なり。人の受學する如きは、次第に文字章句を披讀す。譬ふれば僧佉論の文句の如し。また次に、汝の文句はこれ作法なり。樂欲あるが故なり。譬ふれば僧佉論の文句の如し。また次に、文句はこれ作法なり。受持あるが故なり。譬ふれば僧佉論の文句の如し。また次に、文句はこれ作法なり。誦習あるが故なり。譬ふれば僧佉

[三二] 彌息伽外道の批評一。
彌息伽(mimāmsaka)は解論派なり。

[三三] 一力毗陀 ṛig-veda.
三摩毗陀 sāma-veda.
阿闥婆毗陀 atharva-veda.
迦逋 kahva

が故に』を以て因となせば、豈に人にして一事も知らざるもの有らんや。又また世間は悉く知るが故なり。云何んが知るや。謂く如來は眞解ありと知るが故なり。汝凡夫等を以て喩となすはこれ皆然らず。世間の凡夫もまた少しく所知あるが故なり。また次に、諸天等の如きも能く過去、未來、現在、三界の所攝、及び不攝等の事を知る。如來此の事を知らずと謂はんや。若し知らずんば反つて我が義を成ず。云何んが我が義を成ずるや。謂く汝の天等は邪智を以て所知あるが故に如來と同じからず。又また此の智は惡なるを以ての故に名づけて無智となさんか。汝事ふる所の大師等の如きは一切智ありとなすや、一切智なしとなすや。若しこれ一切智ならば如來もまた是れ一切智なり。若し汝の師に一切智なくして而も『如來は一切智なし』と說かば、是の如きの言は信ずべからざるなり。何となれば、汝の師は一切智に非ざるが爲めの故なり。

〔二〇〕復た外道の聰慢と號する者ありて說いて言ふ、如來は一切智なし。何となれば、如來は十四難を記せざるが故なり。又また說いて言ふ、如來は一切智なし。何となれば、如來は孫陀利の死を記せざるが故なり。又また說いて言ふ、如來は一切智なし。何となれば、如來は旃遮女婆羅門毀謗の事をなすを記せざるが故なり。又また說いて言ふ、如來は一切智なし。何となれば、如來は華氏城の壞するを定んで記せざるが故なり。又また說いて言ふ、如來は一切智なし。何となれば、如來は生死の前際を知らずして自ら其の無知を障ふが故なり。又また說いて言ふ、如來は一切智なし。何となれば、如來は提婆達多の僧等を壞する事を知らずして出家を度するが故なり。是等の記せず知らざるは如來に一切智なきが故なり。

論者言ふ、汝聰慢等の虛妄所說の立義、出因、及び譬喩に今その過を與へん。汝何ぞ說かざるや、尼乾外道は我、人、衆生、壽命有りと計す。汝何ぞ說かざるや、鞞世師人は實法有りと計す。汝何ぞ說かざるや、僧佉人は自性有りと計す。汝何ぞ說かざるや、韋陀中所說の丈夫を。此の如き等の

【二〇】聰慢外道の批評。聰慢は特殊な外道派の名に非ずして、增上慢の者をさす。

十力無垢の輪は　一切三有の日なり。
無量の言說の光　普く無明の闇を照らす。

此れを眼病者の日あることを信ぜざるが如しと謂ふ。或は有るが說いて言ふ、『如來は一切智無し、これ人なるが故なり。譬ふれば餘人の如し』と。また有るが說いて言ふ『如來の智は一切智に非ず、これ智なるが故なり。譬ふれば凡夫の智の如し』と。また有るが說いて言ふ『如來の身は一切智の所依止の處に非ず。これ身なるが故なり。譬ふれば凡夫の身の如し』と。

論者言ふ、是等の所說は非なり。若し第一義中に如來は一切智無きことを信解せしめんに『これ人なるが故に』『これ凡夫の智なるが故に』『これ凡夫身なるが故に』といひて因となすは、此等の因義は咸皆成ぜず。法身は永く人を離るるが故に、智(を離るるが)故に、身(を離るるが)故に、諸有の戲論(を離るるが)故に、三界に攝せざる所なるが故に、これ出世間無漏法の聚なるが故に、名づけて法身となす。また次に、若し更に有る人說いて『如來は一切智無し、これ作なるが故に』と言ひて、廣く是の如き諸因を說かば、前所立の如く、其れに過咎を與ふ。若しまた有る人譬喩をなして『如來の身は一切智の所依止の處に非ず、これ屍なるが故に、譬ふれば凡夫の死屍の如し』と言はば、此の喩の過失も、また前に智門の譬喩出因等を遮せるに同じ。若し『これ能取にして及び所緣あり』と言はば、また此の過を以て之を說く。

また次に、汝『如來に一切智無し』と言ふは此れ何の義ありや。一切は知らざるも少しく所知ありとなすや、一も知らずとなすや。若し外人初めの問を受くれば卽ち應に問うて言ふべし、何故に不知なるや。若し外人の意に『諸根の境界を知ること能はず、是の故に知らずと言ふ』と謂はば、論者言ふ、此の諸根等もまた能く知あり。何となれば、境界を知るべきが故なり。譬ふれば自手等の如し。若し後問を受くれば、汝の先の立義は則ち自ら破すとなす。何となれば、汝先に『人なる

が如來有らん』とは善說ならずとなす。我れ今說いて取者と取と有りと言ふ。若し取者無くんば、また取有ること無し。譬ふれば龜毛の衆の如し。云何んが『取』と名づくるや、謂く無漏解脫の不共法等を、以て五陰となし、任持する所あり。この故に所說の因の如し。云何んが『取者』と名づくるや、謂く如來の身なり。此の如來有るが故に我が所立の義成ずることを得。

論者言ふ、是の義然らず。何となれば、論偈に說くが如し、

(九)[一七]如來取る所の取は、　此の取は不可得なり。
取と及び取者とは空なり、　及び一切種は空なり。

釋して曰く、此れ謂く、取は無自體なり。無自體の義は先に已に解せしめたり。また更に說かず。『一切種』とは謂く自體の種、他體の種等なり。眞實を見る者は一切種の門に觀察するの時、第一義中に於て施設すべからず。世諦に隨順して施設あり。云何んが施設するや。謂く不可思議未曾有の十力、無畏、不共等の諸の功德海の熏修せる如來は、一切世間の供養する所となる。中論にはかの五陰に因つてこの施設を作す。經に言ふが如し『一人出世すれば多人利益し多人安樂す』と。是の義を以ての故に假施設と名づく。佛言ひて曰へるが如きは『我れは是れ衆生の眞善知識なり。一切衆生は生苦等あり。解脫することを得しめん』と。[一八]又佛の言へるが如きは『應に知るべきものを我れ已に知れり。應に修すべきものを我れ已に修せり』と。阿含經中に是の如き說をなす。我が所立の義は與に相違せず。如來は世諦中に於て、この施設をなすも、第一義に非ず。

外人復た言ふ、第一義中に得んと欲せざるは、自ら彼の宗に違す。

論者言ふ、若し第一義中に如來有るを、人をして信解せしめんに、汝は驗を出さず。而もまた我が所立を破すること能はず。我れは先に第一義を受くるが故に、然る後に遮を說くに非ず。[一九]諸の外道等は甚だ憐愍すべし。何となれば、經偈に說くが如し、

【一七】如來所取取　此取不可得
取及取者空　及一切種空
此偈は他本に凡て缺く。或は經偈を本頌に加へたるか。

【一八】又如佛言、應知者我已知、應修者我已修
この散文譯に相當する西藏譯は偈文にして、本論觀聖諦品第二十四に於ては同一偈文を「應解我已解、應修我已修、應斷我已斷、由是故稱佛、」と譯せり。是れ亦本論翻譯不統一の一例なり。

【一九】西藏譯に於ては、「諸外道等甚可憐愍」より「此謂如眼病者不信有日」に至るまで一貫せる意義を現はす一節となり、外道等が普く一切を照したまふ佛說の光を受け入れざることを眼病者が日光を受け入れざるに譬ふ。然るに本論の譯文にては此の意義を把捉すること困難なるのみならず、中間の四句の偈即ち「十力無垢輪、一切三有日、無量言說光、普照無明闇、」を以て獨斷的に經偈となせり。

なすや、身中に徧すとなすや』と。佛言ふ、『大王よ、王は自在を得たり、今還つて王に問はん、大王の宮中の菴羅樹の果は何の氣味をなすや、形狀色相はまた何等に似るや』と。王言ふ『世尊よ、我が所住の宮には菴羅樹なし、云何んが氣味形色を問言するや』と。佛言ふ『大王よ、身中に我有らば王も大小長短を問言すべし、然も此の身中に本とより我有ること無し、云何んが我れをして王の所問に答へしめん』と』。是の如く答ふるは卽ち是れ如來は無我を記すなり。

【一五】多摩羅跋外道說いて言ふ、第一義中に如來有り。取にて施設するが故なり。此れ謂く、若し無しと言はば取上に於て而も施設あらず。云何んが取ありや。謂く無上解脫の熏修せる諸陰相續を取るが故に如來と名づく。經の所說の如きは『佛の名は父母の作に非ず、乃至諸天の作に非ず』と。其の義は是の如し。また次に、云何んが佛と名づくるや。謂く最後に解脫を得る時に乃ち名づけて佛となす。是の如き等を以ての故に如來有り。

論者言ふ、上偈に說くが如きは『陰に卽せず離れず、陰中に如來無く如來中に陰無く、如來が陰を有するに非ず。何等か是れ如來なる』と。此れ謂く、如來は此れ第一義中に於ては畢竟じて不可得なるが故なり。論偈に說くが如し、

（八）【一六】一なるも異なるも如來無し、　五種に求むるも得ず。
　云何んが當に取を以て　如來有りと施設すべけん。

釋して曰く、此れ謂く、第一義中に自體有らば、云何んが施設すべけんや。若し甁の如しと言はば是れ假施設なり。爾るを得んと欲すれば、汝所立の義は便ち成ぜずとなす。汝の所言の如き『施設を以て如來有り』とは、此の立因の驗は第一義中に成ぜず、また因義と相違す。云何んが相違するや。謂く、施設して甁等有りと取るは、但だこれ世諦中に有るが故なり、第一義に非ず。

復た自部の人あり論者に謂ひて言ふ、彼れ向に偈を說きて『若し諸取有ることなくんば、云何ん

【一五】多摩羅跋說の批評一。多摩羅跋(tamāla-pattra)は多摩羅樹の葉なるがそれを表徵とする外道の一派あり。

【一六】一異無如來　五種求不得　云何當以取　施設有如來　梵文に正確に一致す。「一なるも異なるも、五種に求むるも」とは「陰と一なるも異なるも、又陰に關して五種に求むるも」の意なり。

とを得んと欲するや。上偈に過を說けるが如し。今問はん、如來は是れ陰體となすや、陰體に非ずとなすや。若しこれ陰體ならば、已に前に答へしが如し。若し陰體に異らば則ち如來無し。何となれば、陰の自體に非ざるが故なり。譬ふれば兎角の如し。また前に說けるが如し。第一義如來の未だ起らざる已前には、非如來は如來の陰を取らず。未だ起らざる已前には如來無きが故なり。譬ふれば非如來の如し。論偈に說くが如し、

[一三]（七）猶し未だ取有らざるが如きは　名づけて取と爲すことを得ず。
若し彼の取を離るれば、　處として如來有ることなし。

釋して曰く、此れ謂く、取を離るれば如來の體無し。今當に驗を說くべし、『五陰中には丈夫無し。是れ作なるが故なり。譬ふれば瓶の如し』。是の如く、緣より起れる法には丈夫無し。これ作なるが故なり。譬ふれば瓶の如し。無常の法には丈夫無し。これ作なるが故なり。譬ふれば瓶の如し。正智、邪智、疑智中には丈夫無し。これ作なるが故なり。譬ふれば瓶の如し。憂喜の因中と、諦の所攝中には丈夫無し。これ作なるが故なり。譬ふれば瓶の如し。是の如き諸因にて當に廣く驗を說くべし。

[一四]犢子部復た言ふ、第一義中に如來有り。若し無しと言はば、佛の記せざる所なり。外道所執の丈夫の如くに、如來も卽ち記して無と言はん。然も未だ曾て無と說かず。如來若し無しと言はば、何に緣つてまた記せん。有る人問うて言ふ、『死後に如來無きや』と。佛また答へず。是を以ての故に如來有り。

論者言ふ、經中に說くが如し、「一國王ありて來つて佛に問うて言ふ、『世尊よ、我れに所疑あり、請ふ世尊に問はん、唯だ願はくは世尊、我がために直に答へよ、廣說するを須ひされ、身中の我は大となすや小となすや、長となすや短となすや、色相方圓各〻何等に似るや、一處に在りと

【一三】猶如未有取　不得名爲取
若離於彼取　無處有如來
梵文「未だ取せられずんば如何なる取も無し。而して取を離れて如何にして如來有らん」と云ふに正確に一致す。漢譯第一句「有取」は upādatta（取せられたる）と云ふ受動分詞の譯なり。saṁskṛita（爲作せられたる）を「有爲」と譯すが如し。

【一四】犢子部說の批評二。

(四)[八]若し自體有ること無くんば、　云何んが他體有らん。
　若し自他の體を離るれば、　何等か是れ如來なる。

釋して曰く、此れ謂く、畢竟して如來有ることなし。若し『自體他體の外に別に如來の體有り』と言はば、第一義中には成ぜず。汝は過なきに非ず。

[九]犢子部言ふ、陰に因りて如來有りと施設す。陰と一異を言ふべからず。何となれば、陰の自體に非ざるが故に一ならず。無陰の自體に非ざるが故に異ならず。若し是の如く如來を說かばその義成ずることを得ん。

論者言ふ、[一〇]第一義如來が陰を取るを施設すとなすや、第一義如來に非ざるが陰を取るを施設すとなすや。彼れ若し陰を取るを如來となさば、取は則ち無義なり。若し非如來ならば、今其の義を問はん。論偈に說くが如し、

(五)[一一]彼れ未だ陰を取らざる前に、　已に非如來有りて、
　而も今陰を取るが故に、　始めて是れ如來たるや。

釋して曰く、此れ謂く、未だ陰を取らざる前に已に我有りと、外人の意言は此の如し。論者言ふ、若し爾らば論偈に說くが如し、

(六)[一二]彼れ未だ陰を取らざる時には、　則ち如來有ること無し。
　未だ取らずんば無自體なり、　云何んが後に陰を取らん。

釋して曰く、此れ謂く、取を離れては如來は成ぜず。何んとなれば、如來は無自體なるが故なり。外人所執の如きは『我は陰體無くして、我が後時に如來の陰を取るを、如來となす』と。

論者言ふ、今此の我は如來の陰を取らずと遮す。我は如來に非ざるが故なり。譬ふれば餘物の如來の陰を取りて如來とならざるが如し。若し如來は陰を取り已つて後に如來とならば、汝等爾るこ

【八】若無有自體　云何有他體
　若離自他體　何等是如來
梵文及什譯と全く同じ。

【九】犢子部說の批評一。犢子部は非卽非離蘊の我を立つ。

【一〇】第一義如來とは、それ自身にて如來として成立せる如き如來なり。その如來が陰を取りて具體的なる如來となると言はゞ「取」は無意義になると云ふ。又非第一義如來とは、陰を取らざる前には如來として成立せざるが如き如來なり。「非如來」と云ふも同じ。

【一一】彼未取陰前　已有非如來
　而今取陰故　始是如來耶
第二句は梵文に基き上の國譯の如く訓みたり。「已に有らば如來に非ず」と訓むも意味通ず。

【一二】彼未取陰時　則無有如來
　未取無自體　云何後取陰
梵文及什譯に一致す。陰を離れて別に如來自體ありて其れが陰を取ると言ふを破す。

なり。乃至最後に無ならざるも、また是れ世諦なり。

〔六〕阿毗曇人復た言ふ、五陰これ假設なるが如く、如來もまた是れ假設なり。而も如來の自體はこれ作者なりと言ふ。是の如き解を以て如來の無自體を成立すれば、反つて我が義を成ず。何となれば、諸陰は是れ作なるが故なり。若し『他を以て緣となして如來の起るあり』と言はば、是の如き成立は、また譬喩をなすべきものなし。是の如く一切の『他を以て緣となす者』は悉く自體有り。また火輪の色等の如きは、これ無分別の眼識の境界なるが故なり。是の如く一切の他を以て緣となす者は皆自體有り。我が宗の立義は是の如し。

論者言ふ、火は空中に於て上下に徧轉して輪體無し。輪體は空なるを以て、喩となすは然らず。火等に起あるは先に已に遮せるが故なり。是の如く實法と及び眼識等の諸識と色等の境界とは先に皆已に遮せり。眼乃至色等の如く、一切法もまた是の如く遮するが故なり。若し因緣を待ちて起らば有自體の義は成ぜず。何となれば、論偈に說くが如し、

　(三)法、他の緣より起らば、　我有ること然らず。
　若し我有ることなくば、　云何んが如來有らん。

釋して曰く、此れ謂く、『他を以て緣となす』とは是れ假設なるが故なり。譬ふれば幻人の如し。若し如來にして無自體ならば、何ぞ能く諸體有自體の譬喩を成立せん。是の如き意を以て、先に譬喩する所は則ち過ありとなす。また次に、汝『如來は有自體なるが故に、一切の諸體は有自體なることを得』と言はば、是れまた然らず。

外人言ふ、一物として如來となすべき無しと雖も、而も如來はこれ有なり。我が喩は成ずることを得。上の如き過なし。

論者言ふ、この義は然らず。何となれば、論偈に說くが如し、

【六】有部說の批評二。他を以て緣となすもの、卽ち他に緣りて有るものは皆自體（自性）ありとは、有部哲學の根本的立場なり。

【七】法從他緣起　有我者不然　若無有我者　云何有如來
梵文「他に緣りてある所のものは無我なり。無我なる所のものが如何にして如來たり得ん」漢譯第一句の「法」は梵文に於ける「所のもの」と云ふ代名詞に相當するものにして漠然と任意の對象をさす用語なり。

如し。諸の外道等は陰の外に如來有りと謂ひて、此の方便を以て我を成立す。今此れに答へんが故なり。若し陰を離れて外に如來有らば、驗して信解せしむべき無し。是の如く陰を離れて如來有るは然らず。『互に無し』とは謂く、如來中に陰無く陰中に如來無きなり。『如來中に陰無し』とは、譬ふれば雪山中に藥無くば、藥有りと言ふを得ざるが如し。『陰中に如來無し』とは、譬ふれば林中に師子無くば師子有りと言ふを得ざるが如し。『如來が陰を有するに非ず』とは、財を具足する者を名づけて有財となし、具足せざる者を名づけて有財となさざるが如し。是の如く五種を以て觀察するに如來は成ぜず。所說の如くに觀察方便する時は、如來有ることなし。譬ふれば賊を收めて多く衆人を獲、謂ひて是れ賊と言ふも、その檢驗するに及んで還つてこれ好人にして實の賊有ることなきが如し。是の如く陰を離れて外に何等か是れ丈夫なる、何等か是れ自在なる。汝所說の如來は成ぜず。所說成ぜざるが故にまた譬喩を闕く。譬喩闕くが故に、これ立義に過あり。

[三]修多羅人また言ふ、陰に因るが故に假設して如來と名づく。我等の所說に過なしと。

論者言ふ、是の義は然らず。汝の所說は則ち過ありとなす。論偈に說くが如し、

(二)[四]陰に因りて如來有らば、　則ち自體有ることなし。
　若し自體無くんば、　云何んが他に因りて有らん。

釋して曰く、此れ謂く、自體有らば、是の如き過を得。應にこの知を作すべし、如來は無自體なりと。此の中に驗を說かん。『第一義中に於ては如來は無自體なり。假設なるを以ての故に。譬ふれば旋火輪の如し。無實なるが故に、譬ふれば瓶の如し』。

[五]阿毗曇人言ふ、第一義中に瓶は實體有り。可識なるが故に、譬ふれば色の如し。

論者言ふ、瓶等がこれ實なるはまた成ぜず、譬喩あることなきが故なり。然れども瓶及び水等はこれ世諦中に有り。色は第一義中には無實なり。何となれば、若し法分別して無ならば、これ世諦

【三】經部說の批評二。

【四】因陰有如來 則無有自體 若無自體者 云何因他有 梵文及什譯と一致す。

【五】有部說の批評一。

卷の第十三

釋觀如來品第二十二

釋して曰く、今此の品はまた空の所對治を遮して、決定して第一義諦如來身を解せしめんが爲めの故に說く、

〔一〕修多羅人及び鞞世師等は言ふ、有自體の色等の諸體あり、これ體なるが故に。譬ふれば如來の如し。何等かこれ如來なる。謂く金剛三昧の解脫道に、同じく無間の第十六刹那心を起すとき、彼の差別門の初めて起る刹那を、卽ち名づけて智となす。此の智はこれ第一義諦の如來智にして、所依の陰をまた如來と名づく。

論者言ふ、若し世諦に依止すれば、智の諸體と及び如來とは自性あり。汝取ることを得んと欲すれば、此れ我が義を成ず。今第一義諦に依りて如來を觀ずれば、若し此の智がこれ陰自體ならば已に諸陰中に攝入す。今如來を遮し、また彼の智を遮す。論偈に說くが如し、

〔二〕陰に非ず、陰を離れず、　陰と如來とは互に無し、
如來が陰を有するに非ず、　何等かこれ如來なる。

釋して曰く、陰とは謂く積聚の義なり。『陰は如來に非ず』とは、如來の自體はこれ陰に非ざるが故なり。此の中に驗を說かん、『第一義中には陰は如來に非ず。陰はこれ起盡の法なるが故なり。譬ふれば凡夫の諸陰の如く、又外の四大等の如し』と。是の如く『作なるが故に』を以て因となすも、當に廣く驗を說くべし。また次に、諸陰は如來に非ず。已に此の陰の起法を遮したり。また實法を遮し及び色等の陰を遮するが故なり。また次に、今將に智を一門となして、別に第一義中に智は如來に非ざるを遮せんとす。これ起盡の法なるが故なり。これ智なるが故なり。譬ふれば凡夫の智の

〔一〕經部說及び勝論說の批評一。

〔二〕非陰不離陰　陰如來互無　非如來有陰　何等是如來
「陰と如來とは互に無し」とは「陰中に如來無く、如來中に陰無し」と云ふ梵文の義譯なり。什譯は「此彼相在せず」とす。

二の自體有ること無きなり。若し『初有の滅時に即ち後有生ず』と謂はば、今應に隨つて何れの陰中に在つて死するも卽ち此の陰中に於て生ずべく、應に餘の陰中に生ずべからず。是の如く死有滅し已つて能く初有を取ること成ぜざるは、已に信解せしめたり。死有の滅時に能く初有を取ることも亦成ぜず。是を以ての故に已滅と及び滅時とは倶に成ぜず。我が所說の道理の如きは、死時の諸陰滅し已つて還つて此の陰を用ひて相續生ずるは、また然らず。その過は論偈に說くが如し。

(三二)是の如く三時中に　有の相續するは然らず。

若し三時無くんば　何ぞ有の相續あらん。

釋して曰く、此れ謂く、死有より續いて初有を生ずるは然らず。『相續して不斷不常なる』の語は是れ世諦にして第一義諦に非ず。是の故に我が所立は破せず。(三三)是を以ての故に、品初に外人『是の如き時有り、成壞の因となる』と說けるが如きは、今廣く此の因の過を說けるが故に、時を立つること成ぜず。成壞の無自性を以て物(人)をして信解せしむること、是れ品の義意なり。是の故に此の下に經を引いて顯成す。般若經中に說くが如し『佛、極勇猛に告ぐ、色は不死不生なり。受想行識も不死不生なり。若し色受想行識が無死無生ならば、是れを般若波羅蜜と名づく』と。

【三二】如是三時中　有相續不然
若無三時者　何有有相續
第三句は梵文には「三時中に無きときに」とあり、什譯も然り。三時中に有の相續無きときには、一般に有の相續無しとの意にして、本論の第三句は誤謬なり。又三時は過現未をさす。什譯には「三世」とあり。

【三三】以下本品の結語。敎證に般若經を引く。

釋して曰く、此の中に驗を說かん、『第一義中には死有は是れ滅なれば未來の有を取らず。是れ滅なるが故に、是れ死有なるが故に。譬ふれば阿羅漢の死有の如し』。復た次に、死有とは過去の有に名づけ、初有とは現在の有に名づく。若し死有滅して次に初有を起さば、是れ則ち無因なり。若し此の死有未だ滅せざる時に能く初有を取らば、是れ有なるが故に過なきことを得と言はば、此の中に驗を說かん、『死有未だ滅せずんば初有を取ること能はず。未だ滅せざるが故なり。譬ふれば現在の有の如し。

外人復た言ふ、死有の〔二八〕欲滅のとき能く初有を取る。

論者言ふ、また善說ならず。其の過は論偈に說くが如し、

(一九)〔二九〕是の死有の滅時に　能く初有を生ずれば、
　滅時は是れ一有にして　生時は是れ異有なり。

釋して曰く、此れ謂く、滅時と生時との二有各ゝ異るが故に、云何んが能く取らんや。

外人答へて言ふ、彼れの所說の如く、有が相續して體異るとは、我れも亦是の如し。

論者言ふ、提婆達多の死有は提婆達多の初有を取らず。異あるが故なり。譬ふれば耶若達多の死有の如し。又また汝『已滅未滅の〔三〇〕滅時に初有を取る』と謂ふは然らず。上の二の如くに過あり。又また汝『若し滅の未だ現前せざるとき能く初有を取る』と謂はば、前の二と同じく過あり。是の如く生時と及び已生とに初有を取るも亦然らず。また前の如き過あり。是を以ての故に論偈に說くが如し、

(二〇)〔三一〕滅時と及び生時とに　初有を取るは然らず。
　而も此に滅せる陰は　後復た還つて生ずるか。

釋して曰く、此れ謂く、外人は已滅の陰が還つて復た重生することを得るを欲せず。一人一時に

【二八】欲滅とは「滅しつゝあるとき」の意なり。

【二九】是死有滅時　能生初有者　滅時是一有　生時是異有　梵文と正確に一致し、什譯と多少異る。

【三〇】滅時（滅しつゝあるとき）とは已滅未滅の際なり。

【三一】滅時及生時　取初有不然　而此滅陰者　後復還生耶　梵文「若し滅しつゝある(有)と生じつゝある有と同時ならば、其處に於て死して其の同じ陰に於て生まれん」。什譯は此の梵文に正確に一致し、本論の譯は多少相違す。

論者言ふ、是の義は然らず。汝の轉變は驗なく、人をして解せしめず。轉變の義は先に已に遮せるが故なり。汝今また轉變の分別を起さば、今更に驗を說かん、『若し物にして不可變ならば、終に變あること無し。何となれば、不可變なるが故なり。譬ふれば兎角の如し』。

復た次に、若し諸體に自體有らば、義應に爾るべからず。其の過は論偈に說くが如し、

(二七)先に自體有らば　　後に無なるは則ち然らず。
涅槃の時には便ち斷ず、　即ち斷滅の過あり。

釋して曰く、今現見するに此の體は起あり滅あり。是の故に諸體は無自體なり。何となれば、起滅の法なるが故なり。此の義は先に已に說きたり。また次に、若し諸體に先に自體有らば、阿羅漢の心心數法は後時に更に生ぜざるが故に、即ち斷滅の過なり。此の過を汝は避くること能はず。若し汝の意に『涅槃の時に是れ斷ずれば、また是の斷より未だ涅槃せざる前の諸有の相續する時、我れに何ぞ斷滅の過あらん』と言ひて而して『相續して斷過なし』と謂はば汝は善說ならず。我れ前に『涅槃の時に斷ず』と說けるは、正しく汝『未だ涅槃に入らざる前の諸有の相續』を言ふを遮するなり。前に『涅槃の時に便ち斷ず』と言へるが如きは、此れ已に是れ斷見の過を解せしめんが故なり。若し後時に是れ斷ずれば解脫を障ふ。何故に爾るや。此の斷見は解脫を得ざるに由るが故なり。是の如くに汝に答ふ。

汝の心猶足らずんば今當に復た聽くべし。此の現在の『有』の末後に命終する時是れを『死有』と名づく。未來の有中に初めて受生するの心を是れを『初有』と名づく。此の中の義意は論偈に說くが如し、

(二八)死有は是れ滅なり、(その時に)初有を取るは然らず。
死有未だ滅せざる時に、　　初有を取るは然らず。

【二六】先有自體者　後無則不然
涅槃時便斷　即有斷滅過
多少の出入あれど梵文及什譯に一致す。第三句梵文には「涅槃時には有の相續寂滅するが故に」とあり。

【二七】死有者是滅　取初有不然
死有未滅時　取初有不然
死有(carama-bhava) 最後の有。初有(prathama-bhava) 最初の有。此世に死し後世に生ずるときの最後と最初の有情の五陰身が即ち「死有、初有」なり。此の梵文と一致し什譯と異る。

外人ありて言ふ、我れは是の過なし。其の義云何ん。上の偈本を引いて云ふ、『諸法有體ならば常に非ずまた斷に非ず』と。

論者問うて言ふ、何故に爾るや。

外人また論偈を引いて答へて曰ふ、

(二五)[三二]起盡相續は　　果と及び因とに由り、
　　因滅して果起り　　不斷にしてまた不常なり。

釋して曰く、外人の意に謂ふ、因始めて滅する時に果の起ること有るが故に不斷なり、果始めて起る時に因の滅すること有るが故に不常なり。また經に說くが如し、『五陰は無常、苦、空、無我、にして而も斷滅せず』と。是の義を以ての故に因と果と斷に非ず常に非ずと。

論者言ふ、若し是の如くならば義相應せず。前滅後起は今その過を說かん。論偈に說くが如し、

(二六)[三三]是の起盡相續が　　因と及び果とに由らば、
　　因滅して而して果起るは、　　若しくは斷及び若しくは常なり。

釋して曰く、此れ謂く、因滅すれば更に生ぜざるが故に則ち斷過に墮す。已に滅すれば起らざるが故なり。譬ふれば焦種の如し。

[三四]鞞世師等論者に謂ひて言ふ、彼の論中の偈に說くが如し、『若し物、緣より起らば、此の果は緣に卽せず、また彼の緣を離れず、斷に非ずまた常に非ず』と。此れ謂く、論者先に得んと欲する所を、今また說いて過となすは然らず。

論者言ふ、此の語は善ならず。何となれば、此の偈は世諦中に於て不斷不常と說く。第一義には非ず。何となれば、第一義中には一切法は斷常の過なし。

[三五]僧佉人言ふ、因變じて果となり、果に住するが故に、有體と說くことを得。斷常の過なし。

【三二】起盡相續者　由果及與因　因滅而果起　不斷亦不常　梵文には「有を立つれば不常不斷なり。彼の有は果と因との生滅相續なればなり」とあり。漢譯は之と充分に一致せざるも大體に於て相應す。但だ、梵文の後半二句を初めに置けり。起滅相續は生滅相續(udaya-vyaya-saṃtāna)の義なり。

【三三】是起盡相續　由因及果者　因滅而果起　若斷及若常　梵文「若し彼の有が果因の生滅相續ならば、滅の再生あらざるが故の、因の中斷伴ひ來る」。右の漢譯は大體に於て之に相應す。但だ、第四句の「若しくは常なり」の一語全く不用なり。次の長行にも「斷過」のみを言へり。

【三四】勝論說の批評三。

【三五】數論說の批評三。

(一二)有體より體を生ぜず、　また無體を生ぜず。
　無體より體を生ぜず、　また無體を生ぜず。

釋して曰く、『有體より體を生ぜず』とは第一義中には體無きが故なり。譬ふれば巳生の體の如し。若し外人『種子の體の如きは後時に能く芽を生ずるが故に謂く是れ體より能く體を生ずるなり』と言はば是れまた過あり。何となれば、芽未だ生ぜざる時にはまた芽體無し。稻體生ぜざるを以ての故なり。譬ふれば餘の未生の物體の如し。芽未だ生ぜざる時には名字あること無し。此れ謂く、未だ言說あらざるが故なり。兎角の如し。『無體より體を生ぜず』とは謂く、因體無ければ體無生なるが故なり。『(有體より)無體を生ぜず』とは體の無なるが故なり。譬ふれば兎角の如し。『無體より無體を生ぜず』とは先に已に驗を說いて破せるが故に。

今問はん、體等は自より生ずとなすや、他より生ずとなすや。並びに過あるが故なり。其の義は論偈に說くが如し、

(一三)法體は自より生ぜず、　また他より生ぜず。
　また自他より生ずること無し。　今何處に生を說かん。

釋して曰く、是の如き不生は前に已に廣く說けるが故に、此れ謂く、畢竟無生なり。成壞は體有ることなきを以ての故に、汝の根本の因義成ぜず。若し第一義中に有體を得んと欲すれば、今當に過を說くべし。論偈に說くが如し、

(一四)諸法有體ならば　卽ち斷常の見に墮す。
　當に知るべし、受くる所の法は　若しくは常若しくは無常なればなり。

釋して曰く、何故に爾るや。謂く此の法は若しくは常なるか若しくは無常なるが故なり。何となれば、常ならば壞せざるが故に是れ常見の過なり。無常ならば壞するが故に是れ斷見の過なり。

【一九】有體不生體　亦不生無體　無體不生體　亦不生無體
「有體」と「體」は共に單に有(bhāva)を意味し、「無體」は單に無(abhāva)を意味し、偈は「有より有を生ぜず、有より無を生ぜず、無より有を生ぜず、無より無を生ぜず」の意なり。梵文及什譯に全く同じ。但し什譯は「有、無」を「法、非法」と譯す。

【二〇】法體不自生　亦不從他生　亦無自他生　今說何處生
梵文及什譯と全く同じ。法體は存在の義にして前の「物體」と同じ。

【二一】諸法有體者　卽墮斷常見　當知所受法　若常若無常
「所受法」は「有體として承認する所の法(存在)」の義。多少の出入あれど、梵文及什譯と一致す。

釋して曰く、此の中に驗を立つること上の如し。體法有なるが故なり。若し『自體有り』と言はば則ち應に壞せざるべし。是を以ての故に汝等の立因は成ぜず。

復た次に、更に過を與ふる道理あり。此の成壞法は一となすや異となすや。二つ俱に然らず。是の義云何ん。論偈に說くが如し、

(一〇)[一六]是の成壞の二法　一體なるは然らず。
　是の成壞の二法　異體なるは然らず。

釋して曰く、此れ謂く、相違するが故なり。譬ふれば愚と智との如し。然れども此の二法は同じく一物に依る。譬ふれば餘の物體の如し。此れまた因義成ぜざるの過あり。

[一七]辨世師人偈を說いて言ふ、

　我れは常に物體に　成有りまた壞有るを見る。
　是の故に知る、體法は　定んで有にして不空なり、と。

論者言ふ、汝實に見るは、但だ是れ凡夫の智と同じく、第一義に非ず。今當に汝の爲めに其の意を分別すべし。論偈に說くが如し、

(一一)[一八]起は先に已に遮したり、　無起の法もまた遮す。
　成を見るは愚癡なり、　壞を見るもまた爾り。

釋して曰く、此れ謂く、成壞の體無し。外人若し『成壞を見るは云何んが是れ愚癡にして第一義に非ずと知るや』と言はば、論者言ふ、此れ先に已に答へたり。汝若し意不足なるに由らば、今更に爲めに說かん。第一義中に於て若し物體有りと見れば、此の成と壞とは彼の體に依るべし。然も此の物は有體にして能く體を生ずとなすや、無體にして能く體を生ずとなすや。是れ皆然らず。何となれば、其の義は論偈に說くが如し、

【一六】是成壞二法　一體者不然
　是成壞二法　異體者不然
梵文及什譯と全く同じ。

【一七】勝論說の批評二。
　我常見物體　有成亦有壞
　是故知法體　定有而不空

【一八】起者先已遮　無起法亦遮
　見成者愚癡　見壞者亦爾
前二句に相當するもの梵文にも什譯にも無し。後二句は梵文の四句一偈「成と壞とが汝に取つて眼見せらるるは、愚癡の故に成と壞とは見らるるなり」を要約せる形なり。

(七)[一一]盡ならば起有ることなし、　盡無きもまた起無し。
　　盡有らば壞無し、　盡無きもまた壞無し。

釋して曰く、此れ謂く、若し法に無常あらば名づけて『盡』となす。盡あらば則ち起なし。起と盡との二法は相違するが故なり。譬ふれば生と死との如し。若し『起り已つて無間に滅せず』と言はば此れ盡法に非ず。是を以ての故に、向の所說の如き起盡の法は世諦中に於て成ぜざるが故に。盡法有らば思惟分別するを須ひず。盡無くんば自體を壞するに非ざるが故に。譬ふれば解脫の如し。

[一二]鞞世師人言ふ、應に成壞有るべし。體法有るが故なり。若し成壞無くんばまた體法無し。譬ふれば蟾蜍の毛の而も成壞あるが如し。是れ物體の法なるが故に必ず成壞法あり。

論者言ふ、第一義中に若し一物として實に成壞ある者あらば、應に成壞法を說くべし。然も成壞の說くべきもの無きが故に。その義は論偈に說くが如し、

(八)[一三]若し彼の成壞を離るれば、　則ち物體有ること無し。
　　是の成壞の二法は、　物體を離れてはまた無し。

釋して曰く、物體は成を以て體と爲すが故に、成にして既に無體ならば、汝向に『體法有るが故に』と說いて因となせるは成ぜず。何となれば、所依無體なるが故に能依もまた成ぜず。

復た次に、汝物體を以て因となさば、今其の過を說かん。

[一四]修多羅人言ふ、物體は無實にして自性是れ空なり。然れども物上に於て成壞法ありと。薩婆多人また說いて言ふ、物は實體有り自性不空にして此の物の上に於て成壞ありと。

今總じて彼の二部の成壞に答へん。論偈に說くが如し、

(九)[一五]成壞の二法有りて　物體空なるは然らず。
　　成壞の二法有りて　體不空なるは然らず。」

【一一】盡者無有起　無盡亦無起
　有盡者無壞　無盡亦無壞
　梵文及什譯と全く同一なるも、「起」は當然「成」と譯さるべきなり。盡(kṣaya)は滅盡の義。長行を見よ。

【一二】勝論說の批評一。

【一三】若離彼成壞　則無有物體
　是成壞二法　離物體亦無
　梵文及什譯に全く同じ。物體は bhāva(存在)の譯語なり。

【一四】經部說の批評一。有部說の批評二。

【一五】有成壞二法　物體空不然
　有成壞二法　體不空不然
　梵文「成と壞とは空なるものにはあり得ず、成と壞とは不空なるものにはあり得ず」。右の漢譯は梵文の論意を充分顯はさず。而も原文同一なりしことは想像し得。

今外人に問はん、法體は、是れ壞性にして壞因來つて壞するを得となすや、非壞性にして壞因來つて壞するを得となすや。此の法體が若し是れ壞性にして壞因來つて壞することを得といはば然らず。何故に然らざるや。法體の起る時、無間に卽ち壞す。また起れば便ち滅し第二の刹那に到らず。云何んが壞因の來るを待ちて壞することを得ん。若し法の自體が非壞ならば、譬ふれば、涅槃の如く、また彼の壞因來つて壞するを待たず。また次に、壞には因有ることなし。壞は無因なるが故に法は則ち壞せず。譬ふれば無爲の如し。此の驗を以ての故に彼の『壞因』を破す。彼の因既に破すれば卽ち法體を破す。是れ汝の立義の過なり。且く成壞の二法が前後にして有るは然らず。『壞を離れて成無き』を釋し已りぬ。

復た次に、同時に成壞あるは義また然らず。何となれば、論偈に說くが如し、

(五)[八]成が壞と同時なるは　云何んが得べけん。
また生と死との同時なること　然らざるが如し。

釋して曰く、此れ謂く、是の觀をなす時、義は前と同じく解す。復た次に、互に成ぜざるは論偈に說くが如し、

(六)[九]成壞互に共にして成ぜんにも、此の二は成ずること有ることなし。
離にして此の二互に成ぜんにも、二法云何んが成ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、成壞の二法は成ずることを得べからず。外人先に『時有りて成壞の因となる』と說けるが如きは、因則ち成ぜず。

[一〇]薩婆多毘婆沙人復た言ふ、此の自性壞法は起りて卽ち滅するに非ず。起の無間に住あるに由るが故なり。此の住の無間に而も滅あり。

論者言ふ、是の事然らず。その義は論偈に說くが如し、

【八】成與壞同時　云何而可得
　　亦如生與死　同時者不然
梵文に基き「成」を主語にして訓みたり。此偈第一偈第四句を論證す。

【九】成壞互共成　此二無有成
　　離此二互成　二法云何成
梵文「相互に結合しても相互に離れても成立無き所の彼の二つ(成と壞)、其れの成立が如何にしてあり得ん」。之に依つて見れば漢譯第三句「離此二互成」は「成壞二つは互に離れても成立すること無き」義を顯はさんとするなり。由つて國譯の如く訓みたり。

【一〇】有部說の批評一。自性壞法は「自性をもてる壞法」の意なり。

(二)成を離れては則ち壞無し、　云何んが壞有ることを得ん。
死を離れては則ち生無し、　壞無きに何ぞ成有らん。

釋して曰く、此れ謂く、成を離れて壞法有ること無し。世間の人は皆共に解するが故に廣く說くを須ひず。『成を離れて壞無き』を釋し已りぬ。復た次に、與俱なるもまた壞無しとは論偈に說くが如し。

(三)若し成と壞と俱ならば　云何んが當に得べけん。
また生と死と同時なるを　得べからざるが如し。

釋して曰く、此の中に驗を說く、『壞と成とは同時に有るに非ず。何となれば、成は是れ壞の緣なるが故なり。譬ふれば死と生と俱なるを得べからざるが如し』。不俱なるを釋し已りぬ。復た次に、第二に『壞を離れて成無き』を分別すれば、論偈に說くが如し、

(四)若し壞を離れて成有らば、　云何んが當に得べけん。
諸體の上に無常は　一切時中に有り。

釋して曰く、此れ謂く、壞を離れて成無し。何となれば、立義中の如し、『諸體無常』とは謂く、色法等の自體は無常なるが故なり。譬ふれば無常の自體の如し。

復た正量部人あつて言ふ、法は無常なりと雖も、壞因來つて法體卽ち壞することを得。一切時に皆無常あるに非ず。

論者言ふ、若し爾らば、譬ふれば人あつて瀉藥を服し已りて便ち瀉し、乃ち他に語りて『是れ天我れを瀉す』と言ひて『藥が瀉す』と言はざるが如く、汝もまた是の如し。無常の法は一切時中に能く法體を壞す。而も壞因の來るを待つと言ふは是の事然らず。若し壞因を得て無常始めて能く法體を壞すれば、但だ是れ壞因能く法體を壞するのみ。何ぞ復た無常能く壞すと言ふことを得ん。

【四】離成則無壞　云何得有壞
離死則無生　無壞何有成
第三句は誤譯にして正しくは「生を離れては則ち死無し」と譯すべく、漢譯は生と死の語を倒置せり。隨つて第四句も壞と成の語が逆にして、正しくは「成無きに何ぞ壞有らん」(成を離れては壞有ることなし)とせらるべきなり。

【五】若成與壞俱　云何當可得
亦如生與死　不可得同時
前二句の譯は不正確なり。梵文では「壞」が主語となり、「成と俱にして如何にして壞おこらん」とあり。前後の關係上之が正しく、之によつて此偈は第一偈第二句を論證することゝなる。

【六】若離壞有成　云何當可得
諸體上無常　一切時中有
梵文及什譯とよく一致す。前偈までは壞を主語にして論じ、茲では成を主語にして論ず。「諸體」は諸存在(bhāva)の譯語、「無常」は無常性(anityatā)の譯語。此の無常性は五位七十五法中の一法に數へらるゝもの、açāçvata の語と異る。何此偈は第一偈第二句を論證するものなり。

【七】正量部說の批評一。「壞因」とは法體を壞せしむる因なり。

則ち是れ因ならず。譬ふれば蛇足の如し。時有るに由るが故に成壞の二法は時に隨つて轉ず。是の故に、時を說いて因となす。因成ずるを得るが故に、卽ち是れ我が所立の義成ずることを得。

論者言ふ、成壞の二法は、成を離れて壞ありとなすや、成を離れずして壞ありとなすや、與倶にして壞ありとなすや。是れ皆然らず。論偈に說くが如し、

（二）成を離れては壞有ること無し、　與倶なるもまた壞無し。
壞を離れては成有ることなし、　與倶なるもまた成無し。

釋して曰く、我が佛法の義は是の如く是の如し。汝所說の、時を因となすが如きは、其の義成ぜず。何となれば、若し成を離れて壞あらば則ち成に因らずして壞あり。壞は則ち無因なり。又成法の壞すべき無きが故なり。云何んが『成』となすや。謂く衆緣合するなり。云何んが『壞』となすや。謂く衆緣散ずるなり。また次に、若し成を離れて壞あらば、成無きに誰か當に壞すべけん。故に譬ふれば無瓶の如し。是の故に成を離れて壞無し。若し『與倶にして壞有り』と謂はば是れまた然らず。何となれば、法先に別に成じて然る後に合あらば、是の合法は異を離れず。若し異を離るれば壞は則ち無因なり。是の故に與倶なるもまた壞無し。是の如く、若し壞を離るるも、壞と共なるも成有ることなきは、何となれば、若し壞を離れて成有らば成は則ち常となればなり。常は是れ不壞の相なり。而も實には法の是れ常なるもの有ることを見ず。是を以ての故に壞を離るるもまた成無し。若し『與倶にして成有り』と謂はば是れまた然らず。成と壞とは相違するに、云何んが一時に倶なるを得ん。

僧佉人言ふ、何ぞ他立に過を與へて自義の成ずるを得ることあらん。自ら若し成ぜんには、應に道理を說くべし。

論者答へて言ふ、汝の義は非なり。其の過は論偈に說くが如し、

【二】離成無有壞　與倶亦無壞
離壞無有成　與倶亦無成
梵文及什譯と全く同じ。
成(sambhava)は存在の生成。
壞(vibhava)は存在の滅壞。
成壞決定相の不可得を論じて存在の不生不滅不常不斷を說くが本品の趣旨なり。

【三】數論說の批評二。

(二四)[四三]是の故に果は、　　縁の合と不合とより生ず。
果有ることなきを以ての故に　和合法もまた無し。

釋して曰く、此れ謂く、諸縁を離れては和合法無し。また次に、先に已に因は果を生ぜずと遮せるが如く、今和合もまた果を生ぜずと遮す。云何んが生ぜざるや。謂く此の和合は是れ近生に非ず、また遠生に非ず。第一義中に不生なるは、先に因縁を遮せる中に已に信解せしめしが如し。是の如く和合法は果を生ぜず。非和合法もまた果を生ぜず。又[四四]百論中に説くが如し『世間の名字は和合に由つて有り。法體は非有なり。體非有なるが故にまた和合無し』と。[四五]ここを以ての故に品初に外人の説ける所の因には、出因の過を與ふ。彼の時法を遮して、因果無自性を信解せしめんが爲めの故なり。是れ此の品の義意なり。ここを以ての故に我が義成ずることを得。般若經中に説くが如し『極勇猛よ、色は因に非ず果に非ず。若し色が因に非ず果に非ずんば、乃至受想行識も因に非ず果に非ず。何となれば、色は和合無きが故なり。若し色が和合無くんば、乃至受想行識もまた和合無し。色を見ず受想行識を見ずして所行なくんば、是れを般若波羅蜜と名づく』と。佛、識趣後世經中に於て偈を説いて言ひたまふが如きは、

若し和合處を説かば　是の説は方便門にして、
第一義に趣かんが爲めなり、　智者是の如く解すべし、と。

釋觀成壞品第二十一

釋して曰く、今此の品は、また空の所對治を遮せんが爲めなり。前品の如きは因果無自性なるを以ての故に、已に信解せしめたり。今諸法の成壞無きを顯示せんが爲めの故に説く。

[一]僧佉人言ふ、第一義中に時有り。何となれば、時は是れ成壞の因なるが故なり。若し時無くんば

【四三】是故果不從　縁合不合生　以果無有故　和合法亦無　什譯と全く同じ。梵文は多少異りて「果は和合の所作に非ず、果は不和合の所作に非ず。果を離れて何處に縁の和合有らん」とあり、之の意譯と見るべし。

【四四】百論の引用二。(破一品、破因中有果品等參照)。

【四五】以下本品の結語。般若經と識趣後世經を引いて數證とす。

【一】數論説の批評一。この數論説は安慧菩薩の本品釋論の最初に「數論師言、勝義諦中、應知有時、爲成壞因、此非不有、如兎角等、若有成壞、證成我義、」とある叙述に基きしものならん。

故に說く『眼は是れ因にして識は是れ果』『稻は是れ因にして芽は是れ果』と說くが如きは有なるを以ての故に說く。若し識と芽との喩を說くこと成ずることを得れば、卽ち是れ我が所立の義成ずることを得。其の驗は是の如し。

論者言ふ、若し曾て少許の果の生ずる有りて是れ第一義ならば、『此れは是れ因、此れは是れ果』と言ふを得べく、是の如き指示をなすべし。今能生の因は無なるが故に、汝上に引ける所の『世人咸な是れ果の因と說く』とは、所立成ぜず。また汝の義に違す。

[四〇]また僧佉人ありて言ふ、和合法の故に果生ずることを得。此の和合法は時節を得るに由るが故に能く果を生ず。而も此の品の初めに、彼れ我れを遮して『果の生滅あるを因となすが故に、因成ぜず』と言へるは、是れ成ぜざるに非ず。また獨り因のみ能く果を生ずるに非ず。復た和合と及び時節を得るに由りて而も能く果を生ず。彼れの所言の如き『因は果を生ぜず』とは正しく我が義を成ずるなり。

論者言ふ、因緣の和合は『是れ實法にして自體能く生ずる』に非ず。若し(和合の)自體生じ已つて能く果を生ずべくんば、今則ち然らず。何となれば、其の過は論偈に說くが如し、

(二三)[四一]自體と及び衆緣とより　和合は生ずること能はず。
自體既に生ぜずんば　云何んが能く果を生ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、和合は果を生ぜず。何となれば、實法に非ざるが故なり。譬ふれば幻等の如し。また提婆の[四二]百論に和合を遮する偈中に說くが如し、

一和合は無し、　諸和合も亦無し、
若し是れ一と言はば、　應に因緣を離れて有るべし。

今當に汝の爲めに正義を分別すべし。論偈に說くが如し、

【四〇】數論說の批評八。

【四一】自體及衆緣　和合不能生
自體既不生　云何能生果
梵文は「諸の緣因の和合が自己自身を能生せざるとき、彼れは如何にして果を能生せん」とあり。之の意譯と見るべし。此の偈と次偈に於て、「衆因緣の和合する」その「和合法」そのものが果を能生すると云ふ考へを否定す。

【四二】百論の引用一。(卷上破一品參照)
一和合者無　諸和合亦無
若言是一者　應離因緣有

云何んが一となさん。また火と薪との如きは云何んが一なるを得ん。此の二喩は世間共に見る。ここを以ての故に我れ今驗を說かん、『因と果とは一となるを得ず。何となれば、能生と所生に異あるが故なり。譬ふれば父子の二なるが如し』と。此れ謂く、一を計すれば過あり。また次に、異を執すれば云何ん。謂く因と果と異るが故に、譬ふれば一切は因法に非ざるが如し。而も汝は因が非因と同じきを欲せず。汝の意は因果の二法相續して不異なることを得んと欲す。

また次に、今問はん、因中先に有果なるを執すれば、此の果は先に有り已つて生ずとなすや、未だ有らずして生ずとなすや。是れ皆然らず。其の過は論偈に說くが如し、

(三八)果若し已に有らば　何ぞ因より生ずるを用ひん。
果若し未だ有らずんば　因は復た何ぞ能く生ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、果が若し有自體ならば何ぞ因を假つて生ぜん。世諦の中にもまた人をして信解せしむること能はず。果が若し無自體ならば虛空華の如し。世諦中に於ても亦、能く人をして解せしむること能はざるなり。上偈に『果が空ならば云何んが生ぜん』と說けるが如し。此の觀察を以て、第一義中に因能く果を生ずるは、然らず。若し因にして果を生ぜずんば則ち是れ因ならず。前の外人の所立の如き『能く果を生ず』とは、因が應に處處に因となるべきが故なり。今爲めに此の因の義成ぜざるを破したり。汝も亦先の所說なる第一義中に於て『因が果を生ずる』の義を成立せるに違す。また次に、今『違す』と言ふは謂く、第一義中に於ては因は果を生ぜず。世諦の中には幻化等の如く生ずること有るが故なり。

(三九)鞞世師人また言ふ、第一義中に因は能く果を生ず。何となれば、世人咸な『此れは果の因』と言ふが故に、當に知るべし、因は能く果を生ず。若し因が果を生ぜずんば、終に指示して『此れは是れ果の因なり』と言はず。譬ふれば駝角の弓は無なるが故に說かざるが如し。今、有なるを以ての

【三八】果若已有者　何用從因生
果若未有者　因復何能生
「果若し已に有らば」及び「未だ有らずば」を梵文では今少し强き表現を取りて「果が自性上實有であるなら」、及び「自性上非實有であるなら」とす。什譯の「若果定有性」「若果定無性」はその意をあらはす。

【三九】勝論說の批評二。

が故なり。譬ふれば空華の如し。第一義中には稻芽上に於て麥芽あるは無體なり。體の滅するは是れまた然らず。無體なるが故なり。譬ふれば稻芽の滅するに非ざるが如し。また次に、緣より起るものは自體皆空なり。是れ我が法中の第一義の觀なるが故なり。若し少許の物の不空なるもの有りと謂はば、此等の物は則ち因緣より生ぜず。世諦の中にも亦この事なし。譬ふれば空華の如し。上の偈に『未起の果が不空ならば果は不空の過を得』と說けるが如きは、此れ謂く、果は不空ならば起滅なきの過を得。今汝をして解せしめん。第一義中には果は空なるも、而も起あるが故に、譬ふれば幻等の如し。第一義中には果は空なるも、滅あるを以ての故に、また幻等の如し。果もまた是の如し。若し果が『他體無き』を以て體となさば、此の果は則ち起なく滅なし。世諦の中にもまた果無きが故なり、譬ふれば空華の如し。また上に『果空ならば云何んが起らん、果空ならば云何んが滅せん』と說けるが如きは、此れ謂く、起と滅とは倶に無體なるが故なり。此の果既に空ならば則ち起滅なし。然も外人は果をして起滅なからしめんと欲せざるが故に此の中に驗を立つ、『內入等の果は無自體なるに非ず。而も起あるが故なり。譬ふれば幻等の如し』と。此の無起無滅の驗を以て、卽ち汝の果の有起有滅を破す。汝の差別の法破するが故に、是れ汝の立義の過なり。

また次に、能生の因、此の因は、果と一となすや、異となすや。其の過は論偈に說くが如し、

(一九)因と果と一なるは、　終に是の義あることなし。
　因は果と異なるも、　また是の義あることなし。

釋して曰く、何故に因果は一異なることを得ざるや。是の中の過咎は、論偈に說くが如し。

(二〇)因果若し一ならば　能所は則ち一となる。
　因果若し異ならば　因は則ち非因に同じ。

釋して曰く、此れ謂く、汝は能生と所生との二なることを得んと欲せざるも、父と子との如きは

【三四】路伽耶(lokāyata)。路伽耶陀とも譯さる。順世外道のこと。
【三五】果空云何起　果空云何滅　以果是空故　無起亦無滅　梵文及び什譯とよく一致す。
【三六】因與果一者　終無有是義　因與果異者　亦無有是義　梵文及什譯と同じ。一はekatvam(同一性)、異はanyatvam(別異性)の譯語なり。序偈の一異の問題に觸る。
【三七】因果若一者　能所則爲一　因果若異者　因則同非因　梵文及什譯と全く同じ。第二句「能、所」は夫々janaka, janya の譯にして「能生、所生」の意、又此の偈の「異」の原語にはprithaktva が用ひらる。

論者言ふ、是の如き義なし。今此の過を遮せんが爲めの故に、論偈に說くが如し、

[三二]未だ起らざるの果が不空ならば、　不空ならば則ち滅することなし。
起滅なきを以ての故に　果は不空の過を得。

釋して曰く、此れ謂く、果は緣より起らず。果は自體有るを以ての故なり。若し有にして起らば是の如き義なし。已に有なるが故に更に起るを須ひず。若し起らずして果有りと謂はば、是れ則ち果體は應に常にして滅せず。ここを以ての故に果は不空の過を得。而も執者は果をして不空の過あらしめんと欲せず。論偈に說くが如し、

[三三](二七)果不空ならば起らず　果不空ならば滅せず。
果不空なるを以ての故に　起無くまた滅無し。

釋して曰く、果が若し空ならば則ち起滅なし。若し定有ならば復た起るを須ひず。起なきが故に滅なし。ここを以ての故に、果が若し不空ならば云何んが起滅せん。また次に、云何んが『此の如き果は是れ起滅の法なるが故に』といふを得んと欲するや。果が若し已に有ならば、則ち起滅の法有ることを見ず。譬ふれば現在相の如し。

また[三四]路伽耶ありて言ふ、果の未だ起らざる前には、果は無自體なり。何となれば、果の體は空なるが故なり。果已に起らば、また他の法體無し。

論者言ふ、是の說は虛妄にして道理あること無し。我れ今汝に答へん。何となれば、論偈に說くが如し、

[三五](二八)果空ならば云何んが起らん　果空ならば云何んが滅せん。
果は是れ空なるを以ての故に　起無くまた滅無し。

釋して曰く、此れ謂く、第一義中には、果空にして起有るは然らず。何となれば、果は無體なる

趣意を顯はすことゝなる。又此漢譯中の「已壞」の語は過去を意味す。

【二九】因若不和合　云何能生果
因若有和合　云何能生果
梵文、什譯とよく一致す。

【三〇】因中果若空　云何能生果
因中果不空　云何能生果
第一句「因中果若空」は梵文によれば「因が果について空」の意にて、漢譯とは反對に因が空なることを意味す。什譯は「若し因空にして果なくば」として梵文の意をあらはす。又第三句「因中果不空」も梵文によれば「因が果について不空」の意にて、漢譯とは反對に因の不空なるを意味す。什譯は「若し因不空にして果あらば」として梵文の意をあらはす。前後の關係より梵文及び什譯の意味の方がよし。

【三一】鞞婆沙說の批評二。

【三二】未起果不空　不空則無滅
以無起滅故　果得不空過
此の偈他本には本頌中に無し。釋家の偈なるべし。

【三三】果不空不起　果不空不滅
以果不空故　無起亦無滅
梵文、什譯とよく一致す。前偈は因が空にしても不空にしても果を能生せざるを言ひ、此偈と次偈とは、果が空にしても不空にしても不生不滅なるを言ふ。

釋して曰く、此れ謂く、時別の因果は二なるが故なり。已生の果は已生と未生の因と、已壞の果は已壞と未壞との因と、和合せざるは、論偈に說くが如し、

(二四)已生の果は、已と未との因と、合すること有ること無し。
　また已壞の果は、已と未との因と合すること無し。

釋して曰く、此れ謂く、因果の二が同時なるを得るは、先に已に遮せるが故なり。時に別あるに由りて、汝の義は成ぜず。是の觀察を作さば、因と果とは永く和合することなし。論偈に說くが如し。

(二五)因若し和合せずんば、云何んが能く果を生ぜん。
　因若し和合あらば　云何んが能く果を生ぜん。

釋して曰く、此の下に驗を作らん、『第一義中には因は果を生ぜず。和合せざるが故なり。譬ふれば種子の地に在るとき芽は高山に出でざるが如し』。

また次に、今道理あり、彼の稻種中の無果と及び有果とを執する者に過を與へん。論偈に說くが如し。

(二六)因中の果若し空ならば　云何んが能く果を生ぜん。
　因中の果が不空ならば　云何んが能く果を生ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、種より果を生ぜず。果は空なるを以ての故なり。先に答ふる所の如し。譬ふれば餘果の如し。『因中の果が不空』とは謂く、果已に有るが故に因は果を生ぜず。譬ふれば因が因を生ぜざるが如し。先に已に答へしが故なり。

毘婆沙人言ふ、果の未だ起らざる前に此の果先に有り。

切り離して後句にかけて「未來と現在との結合がない」と讀みたる所より漢譯の如き誤りを生じたるなり。

【二六】已生は現在、未生は未來の意なり。

【二七】已果及未因　畢竟無和合
　未果及已因　亦復無和合
　偈中の「已果」「已因」は夫々「已生の果」「已生の因」にて卽ち「現在の果」「現在の因」の意なり。而して前二句は「現在の果は未來の因と合せず」の意となり梵文と一致するも、後二句は全然異る。後二句は梵文次偈（第十四偈）の前半「未來の果は現在の因と合せず」に相當す。而して十三偈の梵文の意は「現在の果は未來の因と合せず、亦過去の因、現在の因と合せず」とあり、什譯も之と同じ。

【二八】無有已生果　與已未因合
　亦無已壞果　與已未因合。
　此の偈原典の相違の故か、譯の解釋違ひの故か、殆ど解し得ず。「已生果」を主語とせる立言は前偈に既に出でたれば茲に再び出づる筈なきものなり。梵文の偈意は「未來の果は現在の因と合することなく、亦未來の因、過去(已失)の因と合することなし」とあり、什譯も同じく、之によりて以上三偈は相關聯して一貫した

(二一)[24]因が果と和合して住すれば、云何んが果を生ずるを得ん。
果と和合せずんば　何物か能く果を生ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、因は果を生ぜず。何となれば、因果は體異らざるが故なり。因の自體の自ら因を生ぜざるが如し。若し因が果と和合して共に住すれば既に果を生ぜず。因は則ち無用なり。法體に顚倒あるが故に、是れ汝の立義の過なり。若し人あり『因は果と和合せず』と言はば、また上の如く答ふ。物は果を生ぜず。何となれば、果は空なるが故なり。譬ふれば餘果の如し。且く已に總じて、因能く果を生ずるを遮したり。今當に別に說いて、彼の眼識等の果を遮すべし。若し此の眼識は眼を以て因となさば、此の眼は見已つて境を取るとなすや、見ずして境を取るとなすや。二つ倶に然らず。若し眼が見(已つて)取り、然る後に識起らば、識は則ち無用なり。若し眼が見ずして取らば、色の境界は則ち無用となる。

復た有る人言ふ、第一義中に因能く果を生ず。何となれば、因は果に作因を與ふるが故なり。若し因が果を生ぜずんば、是れ則ち乳は酪の因に非ず。譬ふれば乳と瓶との如し。

論者言ふ、汝の說は善ならず。何となれば、論偈に說くが如し、

(二二)[25]過去の果は、過去の因と、　合すること有ること無し。
また未來の果は　已生の因と合すること無し。

釋して曰く、此れ謂く、因と果と倶に無なるが故なり。譬ふれば兎角の如し。また次に、過去の因は時の別なるを以ての故に、則ち果と和合せず。

また次に、[26]已生と未生の果が已生と未生の因と和合せざるは、論偈に說くが如し、

(二三)[27]已果と及び未因とは　畢竟して和合すること無し。
未果と及び已因とも　またまた和合すること無し。

【二四】因果和合住　云何得生果
不與果和合　何物能生果

此偈の前二句は、梵文及び什譯の第十偈(前偈)の後半に當る。卽ち「果と遍して(和合して)住する因が如何にして(果を)能生せん」(梵)、「又若因在果、云何因生果」(什譯)が此偈の前二句なり。而して梵文第十一偈の前半「若し果と遍せずんば(和合せずんば)其の(因)は如何なる果を能生せん」(此句の什譯には疑問あれば玆に擧げず)が此の偈の後二句なり。而して梵文及び什譯の後半「因は(果を)見ずしても、亦見ても果を能生せず」(梵)、「因見不見果、是二俱不生」(什譯)に相當するものは本論には省略せらる。但し長行には其の意の釋出づ。

【二五】無有過去果　與過去因合
亦無未生果　與已生因合

此偈の後二句は誤譯なり。梵文の意は「過去の果は過去の因と合することなく、未生(未來)の因、已生(現在)の因と合すること無し」にて、什譯も然り。梵文第三句の na-ajātena na jitena に含まるゝ「未來」「現在」の語は共に前句の「因」の語にかゝり「未來の因、現在の因」の意なるに、之を前句より

論者言ふ、若し因體を捨せずして果と名づくれば、但だ名字に差別あるのみにして果體無し。上に說けるが如き過を汝免るること能はず。若し因體を捨して果體の起る時に、而も還つて果體の中に住するは、是の義然らず。汝は思量せずして是の如き說を作す。

また次に、今、有を執する異の僧佉に問はん、汝『因能く起す』と言ふは、因已に滅して能く果を起すとなすや、未だ滅せずして能く果を起すとなすや。二つ俱に然らず。論偈に說くが如し、

[二二](二〇)已に滅して果を生ずと爲すや、　未だ滅せずして果を生ずと爲すや。
　因滅すれば已に壞す、　云何んが能く果を生ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、已に滅すれば復は是れ因ならず。何ぞ能く果を生ぜん。若し因起り已りて體滅せずんば、何ぞ能く果を生ぜん。汝の所說は義相應せず。

[二三]復た異の僧佉人ありて言ふ、實法は恒に住す。而も前の物體滅して後の物體起る、此の變異あり。是の義を以ての故に、因體滅せずして能く果を生ずと。

論者言ふ、是れまた過あり。前體滅する時には實法も亦滅す。何となれば、實法は物體と異らざるが故なり。譬ふれば已滅の法體の如し。後の法體の起る時には實法も亦起る。何となれば、實法は物體と異らざるが故なり。譬ふれば已起の法體の如し。汝の所說の如きは世諦の道理と相違す。若し第一義の道理に依れば、何の法體有りて滅し、何の法體有りて生じて、而も變異ありと言はん。

また次に、汝前の法體滅すと言ふは、此の體は是れ因體となすや、因體に非ずとなすや。若し是れ因體ならば、前の法體の滅するとき因體も亦滅す。偈に『因滅す』と言ふは、謂く、是の已滅の因に、能く果を起すの力あるに非ず。また次に、若し前法滅するも因體に非ずんば、論偈に說くが如し、

【二二】爲已滅生果　爲未滅生果
　因滅者已壞　云何能生果
梵文及び什譯の前二句を四句に敷衍して一偈とせるものなり。卽ち「已に滅失せる(因)が如何にして已生の果を能生せん」(梵)「云何因滅失、而能生於果」(什譯)の二句に相當する偈なり。而して梵文及び什譯の後二句は本論にては次偈に移す。
【二三】數論說の批評七。

[一六]また更に異の僧佉人ありて言ふ、未だ和合せざる前に果已に先に起りて、後和合する時に方に乃ち顯了すと。

論者答へて言ふ、是の義あること無し。論偈に説くが如し、

(八)[一七]若し未だ和合せざる前に　已に果の起る有らば、
　彼の因縁を離れ已りたれば　果起るは、則ち無因なり。

釋して曰く、此れ謂く、和合の因縁を離れて先に有果なるは、世諦の中にも實に亦此の如き事あることを見ず。ここを以ての故に我が佛法中には果は先に起ること無し。汝『後に顯了す』と言ふは先に已に答へ訖れり。

[一八]更に異の僧佉人ありて言ふ、因法は已に滅すと雖も、果の起る時に至つて猶ほ因體の住するあり。

論者言ふ、若し因滅し已つて而も體を捨せず、即ち住して果體となるは、是の如き義なし。何となれば、論偈に説くが如し、

(九)[一九]若し因が變じて果とならば　因は卽ち向去あり。
　先に有にして復た生ずれば　則ち重生の過に墮す。

釋して曰く、此れ謂く、因體が果となりて而も體を捨せずんば、提婆達多の此の宅を捨せずして而も彼の宅に至るが如くならん。何となれば、因體已に有りて而も復た更に起るは則ち重生となればなり。既に果を生ぜずんば全く所作なし。また次に、若し『[二〇]卽因が變じて果となる』と謂はば、卽ち是れ變と名づけず。變とは卽是に名づけず。泥團は是の瓶に卽せざるが如し。泥團滅し已りて瓶の生ずるあり。(卽是ならば)變と稱するを得ず。不變なるが故なり。譬ふれば泥自體の如し。

[二一]僧佉人また言ふ、因は能く果を生ず。我が義は是の如し。上の如き過なしと。

【一六】數論派の説の批評四。

【一七】若未和合前　已有果起者　離彼因緣已　果起則無因　第三句「離……已」は nir-muktam(離れたる)と云ふ過去受動分詞の形を寫せるものなり。此の偈は什譯より梵文に近し。

【一八】數論派の説の批評五。

【一九】若因變爲果　因卽有向去　先有而復生　則墮重生過　「向去」は saṃkramaṇa(轉移、移行)の譯語にして、前二句の梵文は「因滅したるとき果が若し因の轉移として起らば」とあり。又後二句は「因は前に已に生じたるに再生すべし」とある梵文の義譯なり。

【二〇】什譯の「是卽前生因、生已而復生」の方直譯に近し。卽因とは「因そのもの」の意なり。

【二一】數論説の批評六。

釋して曰く、此れ謂く、世諦中は於てもまた、與者をして滅者ならしめんと欲せず。一法に二體あるは過なり。

また次に、若し未だ果に作能を與へずして先に滅すれば、今當に次に答ふべし。論偈に說くが如し、

(六)[一三]若し因未だ能を與へずして　而して因先に滅すれば、
　因は(已に)滅したれば、果起るとき　此の果は則ち無因なり。

釋して曰く、此れ謂く、無因にして果有ることを欲せず。ここを以ての故に因滅し已つて果方に生ずるに非ず。何となれば、已に滅せるが故なり。譬ふれば久しく已に滅せる者の如し。此の義は一切世間の共に解する所にして、復た更に物(人)をして解せしむることを須ひず。

[一四]修多羅人また言ふ、和合法の起るとき同時に能く果を生ずる有り。燈と光との同時に起るが如し。是の義應に爾るべし。

論者言ふ、若し同時にして果を生ずと謂はば、是れまた然らず。論偈に說くが如し、

(七)[一五]若し和合と同時にして　能く果を生ずれば、
　能生と及び所生とは　一時中に墮在せん。

釋して曰く、此れ謂く、同時の過ありて、能生所生の二法をして、父子の二の如くならしめんと欲せず。同時にして起るは上の如き過あり。また次に、云何んが別時にして起るや。謂く所生と及び能生とは因果にして二たり。今次に驗を作さん、『果と因と和合して同時に倶に起るに非ず。何となれば、所生と及び能生は二なるが故なり。譬ふれば父子の二の如し』。先の所說の如く、器、炷、油等の和合ありて力あるが故に、世諦中には燈は光と共に同時に起るも、燈と光と相望めて因果をなすに非ず。是の故に汝の說は善ならず。

【一三】若因未與能　而因先滅者
　因滅而果起　此果則無因
梵文の正確な譯なり。第三句の「因滅」は hetau nirud-dhe の譯にして、「因は已に滅してゐるから」の意にて、「果無因」の立言の根據になるものなり。

【一四】經部の說の批評四。「和合法」とは五位七十五法中の一法「和合」にして因緣を和合せしめる法なり。

【一五】若同時和合　而能生果者
　能生及所生　墮在一時中
第一句は漢文としては「若し同時に和合して」と訓むべきが如くなれど、梵文には「果が和合と倶に顯現するなら」とあれば、國譯の如く訓みたり。又、四句「一時中に墮在せん」は單に「同時とならう」の意なり。又第三句の「能生、所生」は極めて適切な譯語なり。
　能生＝janaka
所生＝yo janyate

は謂く、通じて種種の果を生じ、能く他を長養し、他をして相續せしめ乃至遠處に通じて諸果を生じて自分が生ずるに非ず、能く廣く饒益す。是の如き等を名づけて因と緣との差別相となす。『非因緣と同じ』とは謂く、非因緣は果を生ぜず。何となれば、果の空なるが故なり。ここを以ての故に因緣は非因緣と同じ。また次に、今因中無果を執する者の爲めに驗を出さん、『第一義中には種子等の諸因緣は果を生ずること能はず。何となれば、果は空なるが故に。譬ふれば非因緣の如し』。

また次に、〔一〇〕修多羅人言ふ、緣は能く果を生ず。何となれば、決定の緣ありて能く果を生ずるが故なり。若し果空ならば、義相應せずと。

論者言ふ、第一義中には是の如き驗なし。還つて上の非因緣の過に同ず。他をして信解せしめんと欲するも汝の驗は無力なり。

〔一一〕修多羅人また言ふ、麥種子より能く麥芽を生ずるを見る。ここを以ての故に彼れの出因は義理あること無し。

論者言ふ、世諦の中には實に麥種より能く麥芽を生ずるを見るも、第一義には非ず。若し第一義中に於て麥より芽を生ずといはば是の義然らず。是の如く觀察するに果の生ずることあるは然らず。先に答へしが如し。汝果の生滅を立てて以て因となすも、果に生義あること然らず。

また次に、今因中無果を執する者に問はん。因は果を生じ已つて滅すとなすや、未だ果を生ぜずして滅すとなすや。

執者答へて言ふ、我れに何の過ありて此の二問をなすや、

論者言ふ義相應せず。論偈に說くが如し、

〔一二〕(五)果に作能を與へ已つて　而して因方に滅すれば、
　　與因と及び滅因との　則ち便ち二體あり。

〔一〇〕經部の說の批評二。

〔一一〕經部の說の批評三。

〔一二〕與果作能已　而因方滅者　與因及滅因　則便有二體
梵文、什譯とよく一致す。「作能」は hetuka(因性)の譯語として適切なり。「二體」とは「與ふるものと滅するものとなり」又「體」の原語には ātman(自體)が用ひらる。

貪瞋諸見の三煩惱の因となり、色聲の五種も亦能く貪瞋等の三煩惱の因となる。是の因等は驗量あるを以ての故に、因中の果には取あり。汝現量にて不可取なりと言ふと雖も、然も今驗量にては可取あるが故に、彼の出因の義は成ぜず。若し現量と及び驗量とに、倶に不可取ならば、此れ我が義に違し及び因成ぜず。

論者言ふ、我れ『不可取』と道へるは、謂く、因緣和合中に於て畢竟して果無きが故に不可取なり。汝『極遠等なるも亦不可取にして一向に無には非ず』と言ふは、世諦の中にもまた此の理なし。何ぞ況んや第一義をや。第一義中に於てはまた極遠等の物なく、上の如き苦、樂、色、聲等も第一義中に於てはまた無し。是れ則ち因の義成ぜず。言ふ所の『果』は果も亦自體空なるが故なり。若し因中に無果ならば、世諦中にも果はまた生ぜず。譬ふれば柜より柜を生ずること能はざるが如く、因もまた因を生ずること能はず。汝『因が能く果を生ず』と言ふは、世諦中に於てもまた已に破せらる。

また異の[七]僧佉人ありて言ふ、若し因の未だ生ぜざる時には先に因體無し。果も亦先に無にして後方に生ずと。

論者言ふ、今當に驗を說くべし。若し先に因無くば後にも亦生ぜず。有ることなきが故なり。譬ふれば空華、石女等の如し。廣く前に驗を說けるが如し。

[八]今更に總じて修多羅人及び鞞世師等の因中無果を計する者に答へん。論偈に說くが如し、

（四）若し[九]衆因緣和合するも　果無しと謂はば、
　　是れ則ち衆因緣は　非因緣と同じ。

釋して曰く、此に『果無し』と言ふは謂く、果の空なるが故なり。因と果とは云何んが差別せん。『因相』とは謂く、自果の生ずる無間に自分を生ずる生等の差別を、是れを因相となす。『緣相』と

【七】數論派の說の批評三。

【八】經部、及び勝論派の說の批評一。

【九】若謂衆因緣　和合無果者　是則衆因緣　與非因緣同
此偈も前二句は「衆因緣和合中に果無くば」の意なり。第二偈と同じく因中無果說を難ず。

和合中に無果なるに　何ぞ和合を須ひて生ぜん。

釋して曰く、此れ謂く、果は生ぜず。生有ることなきが故なり。譬ふれば兎角の如し。若し生無くんば生法の體は壞す。是れ汝の立義等の過なり。

若し因緣和合中に果有りと立つれば、今當に重ねて破すべし。論偈に說くが如し、

(三)若し衆因緣和合して[四]　果有りと謂はば、

是の果は應に可取なるべし。　而も實には不可取なり。

釋して曰く、此れ謂く、果は不可取なり。何となれば、一心に取らんと欲するも而も取ること能はず。果無きを以ての故なり。此の下に驗を作さん『和合中に、芽の果と名づくるもの有ること、また不可取なり。何となれば、和合中に果無きが故に不可取なり。若し不可ならば是の中に則ち無し。譬ふれば種中に瓶絹有ることなきが如し。是の如く和合中に於て芽の果と名づくるもの無きが故に不可取なり』。

[五]僧佉人言ふ、彼れ『和合中に不可取なり』と說くも、また是の義あり。所謂る、極遠と極近と、及び諸根の損患すると、心迷悶する時と、隔障ある等とは、能く取を障へて、物體有りと雖も而も取るべからず。『一向に無なるが故に不可取』なるに非ず。若し無と言はば是れ彼れの出因と立義の過なり。

また次に、更に異の僧佉人ありて言ふ、前所說の如き過は、今當に更に說くべし。彼れ上に因を出して『不可取』と言へるは、此の因に何等の義ありや。是れ現量にて不可取となすや。諸根識の如きは而も實に是れ有なるも、また現量の所取とならざるが故に、彼れの立因は是れ一向に非ず。若し[六]驗量を以て不可取ならば因の義成ぜず。猶し因中の果に取ありと驗するが如く、可量なるが故なり。若し可量ならば因は則ち空ならず。譬ふれば果體有るが如し。是の如く苦樂の二種は能く

【四】若謂衆因緣　和合而有果
是果應可取　而實不可取
前二句は梵文によれば「因と諸緣との和合中に果が存在するなら」とあり、卽ち和合中に果の存在するや否やを問ふにて、和合より果の生ずるや否やを問ふに非ず。前二偈と異る所なり。此の點を右の漢譯は充分に表さず。什譯の「若し衆緣和合の是の中に果有らば」の方正確なり。又「可取」「不可取」は夫々「把捉せらるべき」「把捉せられざる」の意なり。又此偈は第一偈と同じく因中有果說を難ず。

【五】數論派の說の批評二。

【六】驗量。比量と同じ。

卷の第十二

釋觀因果和合品第二十

釋して曰く、今此の品は亦空の所對治を遮せんが爲めにして、鞞世師等の前品中に於て時を立つること成ぜざるを以ての故に說く。

[一]鞞婆沙人及び僧佉人等は言ふ、第一義中に是の如き時有り。果に生滅あるが故なり。種子と水土と和合するとき、時節有體なるを以ての故に而も芽生ずることを得るが如し。若し因無くんば果は則ち生ぜず。ここを以ての故に前所說の如き因は力あるが故に、當に知るべし、時有り。

論者言ふ、若し有るが說いて『因緣和合して果の生ずるあり』と言はば、今當に之に答ふべし。論偈に說くが如し、

（一）[二]若し衆因緣和合して、　果生ずと謂はば、
　是の果は先に已に有なるに　何ぞ和合を須ひて生ぜん。

釋して曰く、和合中に若し有果ならば、是の如き過を得。何となれば、有は生ぜざるが故なり。若し有にして和合中より生ずれば、有なるに云何んが生ぜん。若し『生ず』と言はば、和合中に則ち無からん。何となれば、『有』と『生』との二法は相違すればなり。また次に、若し有果ならば則ち生ぜず。已に有るが故なり。果若し已に有らば更に生ずるを須ひず。何となれば、生と不生との此の二は相違すればなり。

若し有るが『因緣和合中に無果にして能く果を生ず』と言はば、今當に之に答ふべし。論偈に說くが如し、

（二）[三]若し衆因緣和合して　果生ずと謂はば、

【一】鞞婆沙、及數論派の說の批評一。

【二】若謂衆因緣　和合而果生　是果先已有　何須和合生　梵文に正確に一致す。但し「衆因緣和合」は梵文では「因と諸緣との和合」とあり、「因」の語は單數形、「緣」の語は複數形で出づ、此の語例は問題上に關係をもち、因は果に對して常に自體にして隨つて唯一、緣は果に對して常に他體にして隨つて多なればなり。此の因と緣との概念の規定は第四偈の次の長行に出づ。什譯にては單に「衆緣和合」とせらるるも「衆因緣」の方適切なり。此の偈因中有果說を難ず。

【三】若謂衆因緣　和合而果生　和合中無果　何須和合生　之も梵文、什譯と正確に一致す。因中無果說を難ず。

刹那も時は住せざるが故なり。此の一刹那に即ち起時と住時との差別あり、刹那に住せずして速に滅するを以ての故に定んで時有ることなし。

釋して曰く、此れ謂く、物の生ずるに因るが故に則ち名づけて時となす。此の行法を離れては別の時體無し。

時有りと執する者言ふ、定んで時あり。差別の言說を起す因あるが故なり。無法にして能く言說を起すの因なるを見ず。已作、今作、當作の瓶あるを見るが故に卽ち時有りと知ると。

論者言ふ、汝の語は善ならず。已作の瓶等の能く言說を起すの因は、是れ諸の行法にして、また是れ時に非ず。汝の因は成ぜず。相違の過あればなり。能く言說を起すの因は是れ世諦の法なり。汝種種に時を說くも皆成ぜざるが故に、先に了因を說けるが如きは義また成ぜず。

〔一五〕此の品の初めより已來、外人の成立に過を與へ、自說成立して過なし。空の所對治たる時を遮して自體有ることなきを信解せしめんが爲めなり。此の品の義意は是の如し。ここを以ての故に此の下に經を引いて顯成せん。放光經に佛說けるが如し。『佛、須菩提に告ぐ、時は色法に非ず、無色法に非ず、受想行識の法に非ず、無受想行識の法に非ず、生法に非ず、無生法に非ず、住法に非ず、無住法に非ず、異法に非ず、無異法に非ず、壞法に非ず　無壞法に非ず、受法に非ず、住法に非ず、出法に非ず、無受、無住、無出法に非ず。乃至老相に非ず、病相に非ず、死相に非ず、青相に非ず、瞰相に非ず、壞相に非ず、散相に非ず、無老、無病、無死、無青、無瞰、無壞、無散の相に非ず。須菩提よ、若し色に非ず、生に非ず、住に非ず、異に非ず、壞相に非ずんば、是れを般若波羅蜜と名づく。また次に、須菩提よ、若し色に非ず、非色に非ず、乃至受想行識に非ず、非受想行識に非ずんば、時は卽ち時に非ず、また非時に非ず。若し時が時に非ず非時に非ずして言說すべからずんば、是れを般若波羅蜜と名づく』と。また妙臂經中の所說の如し、『菩薩摩訶薩は三世の所有る諸行を了知して、已起の故に說いて過去世と名づけ、未起の故に說いて未來世と名づけ、起時の故に說いて現在世と名づく』と。此の現在世に陰界入等は住せんも、住せざるを了知す。何となれば、一

〔一五〕以下本品の結語。放光般若經と妙臂經の教證を引く。

鞞世師人言ふ、第一義中に實時の體有り。非他と及び他と、一時と及び非一時と、遲疾等の如きは卽ち是れ時相なり。無體にして有相なるに非ず。

論者言ふ、第一義中には少許も體無し。世諦の中には諸行の差別、相待、相續ありて『非他』及び『他』等の識起る。『一時』とは謂く、諸行は無差別にして刹那に相待す。『非一時』とは遲あり疾あり。『遲』とは謂く、後時に相續隨轉し、『疾』とは謂く、相續隨轉せざるなり。『非他』の識起るは但だ是れ諸行にして別に時有ることなし。汝所立の因は無體なり。何處に時體の得べきもの有らん。若し外人の意に『他等の識起るは諸の行法を緣ずるにて、是れ時に非ずんば何處に時を得べけんや』といはゞ、論者言ふ、汝時を以て是れ常、是れ一として他に解せしむるは、此の驗は有ることなし。我れ今驗を說かん、『世諦中に於ては常一の時が是れ他等の識を起すに非ず、識なるに因るが故なり。譬ふれば色等の識の如し。

鞞世師人また言ふ、定んで實時有り。假設の體有るが故なり。

論者問うて言ふ、何等の物に似るや。

鞞世師答へて言ふ、色等の如し。

論者言ふ、第一義中には色等の體は成ぜず。先に已に說いて能く物(人)をして解せしめしが如く色相は無體なり。色相無體なるが故に譬喩は無體なり。譬喩無體なるが故に時も亦成ぜず。我も亦無なれども而も有と說く。譬ふれば車、軍、林等の如し。實體無しと雖も而も施設あり。故に是れ一向に非ず。有る人の意に『諸の行法に依りて時ありと施設す、晝に日住し、摸呼に栗多住すと說くが如し』と謂ひて此の說を作さば、應に是の如く答ふべし。論偈に說くが如し、

(一八)[一四]物に因るが故に時有り、　物を離れては時有ることなし。
　　また少しの物體も無し。　何處に時は得べけん。

【一四】因物故有時　離物無有時
　　亦無少物體　何處時可得
梵文、什譯と全く同じ。第一、二、三句の「物」「物體」は皆 bhāva(存在)の譯なり。存在と時間との關係を言ひあらはす重要な偈なり。

摸呼喋多、晝夜、半月、一月、時行、年雙等の分量あり。若し分量あらば是れ則ち時有り。譬ふれば稻穀等の有なるが故に則ち分量あるが如し。故に時有りと知る。

論者言ふ、汝の所說の義は相應せず。何となれば、論偈に說くが如し、

(五)[二]不住の時を取らず、住時もまた有らず。
可取不可取ならば、云何んが施設すべけん。

釋して曰く、『不住』とは謂く、諸の行聚は是れ起滅の法なり、名づけて不住となす。世諦中には行聚等を時と名づくるも、是の時は不可取と名づく。『住時』とは、また法體の外に於て非色の時の可取にして是れを住時と名づくるもの有らず。云何んが『可取不可取』なる、云何んが『施設』なる。時若し可取ならば卽ち能く施設するも、時が不可取ならば施設すること能はず。ここを以ての故に諸行は是の如し。曰く行等の作に分齊あり、諸行の生、住、滅、摸呼、喋多等の法に分量あるが故に名づけて時となす。汝の所說の如き因は其の義成ぜず。何となれば、所依なきが故なり。譬ふれば無體の如し。

鞞世師人言ふ、常時有り。刹那、羅婆、摸呼、喋多、過去、未來等の種種の差別あるを以てたり。譬ふれば淨摩尼珠の彼の衆色に因つて種種相の現ずることあるが如し。

論者言ふ、此の體を彼の體に待して刹那等の名あることを得。我が義は是の如し。論偈に說くが如し、

[三]此彼の體は相待す、世諦法は是の如し。
第一義には無體なり、體を離れて何ぞ時有らん。

釋して曰く、『相待』とは謂く、外人は世諦中に於て相待ありと立つ。我が義も亦爾り。第一義中に常時有ることなし。我が所說の過の如きを汝は免るること能はず。

【二】不取不住時　住時亦不有
可取不可取　云何可施設
第三句「可取不可取」は之も梵文に對する解釋違ひと思はる。その梵文は yo gṛhyeta-agṛhītaç ca とあり、之だけを單獨に見れば「把捉せらるべくして把捉せられざるもの」の意にて、卽ち漢譯と等しくなれど、此梵文の前半 yo gṛhyeta は前句にかゝり、後半の agṛhītaç ca は後句にかゝり前後別義なり。卽ち前半は「把捉せらるべき所のもの」として前の「住時」にかゝり、「把捉せらるべき所のものたる住時は存在しない」の意となる。そして後半は後句にかゝりて「把捉せられない(卽ち不可取なる)時が何うして施設せられよう」「不可取ならば時が何うして施設せられよう」の意となる。羅什譯は此の意味を正確に顯はせり。「可取不可取」の漢譯も「可取なるものが不可取なら」とにても讀まば幾分原意に近くし得るも、梵文の論意を充分理解せざりし譯らし。

【三】他本には中論本頌中に在らず。釋偈なるべし。
此彼體相待　世諦法如是
第一義無體　離體何有時
第四句は次偈の第二句と同じ。「體」は物、存在の意なり。

なすも、中に於て差別あり。功德具足するを上品人と名づけ、稍々減ずるを中品人と名づけ、全く無きを下品人と名づく。是の如き等は待の故に成ずとなすや、不待の故に成ずとなすや。且く上の者あるも上自體に非ず。相待あるが故なり。譬ふれば中自體の如し。是の如く中もまた中自體に非ず。相待あるが故なり。譬ふれば下自體の如し。下もまた下自體に非ず。相待あるが故なり。譬ふれば上自體の如し。また次に、相待あるを以て因となして汝をして上中下等の無自體を解せしめんと欲するが故なり。汝無自體を得んと欲せざるや。若し有自體を得んと欲すれば、中に待するが故に喚びて上となすは、是れまた然らず。

是の如く一數の體と及び一、二等も亦前の如く遮す。一數とは今當に說くべし。第一義中には一は一數の體に非ず。何となれば、是の數は待あるが故なり。譬ふれば二數等の如し。是の如く二は二數の體に非ず。多は多數の體に非ず。應に一數の如く說くべし。第一義中には法體の外に於て而も彼の數あることを欲せず。云何んが得んと欲するや。一と謂ふは二なく及び異なきが故に名づけて一となし、一なく及び異なきが故に名づけて二となし、二なく及び異なきが故に名づけて三となす。三より已後は總じて名づけて多となし　また前の如く遮して開解せしむ。今當に更に說くべし。第一義中には一もまた一に非ず。是れ數ふべきが故なり。譬ふれば異の如し。是の如く二もまた二に非ず。多もまた多に非ず。また一數の如くに說く。應に是の驗をなすべし。

『等』とは云何ん。謂く一塵は一塵に非ず、是れ數ふべきが故なり。譬ふれば異の如し。是の如く二塵は二塵に非ず、多塵は多塵に非ず。また上の如く說く。及び長短、遠近、前後、因果は、長短遠近前後因果に非ず。乃至、有爲と無爲とは、有爲に非ず無爲に非ず。また是の如くに說く。

鞞世師人言ふ、[二]第一義中に是の如き時有り。何となれば、分量あるが故なり。若し時無くんば則ち分量なし。馬に角なくして分量ありと說くべからざるが如し。時有るに由るが故に刹那、[三]羅婆、

【二】以下勝論說に對する批評。[三]刹那(kṣaṇa)羅婆(lava)摸呼栗多(muhūrta)は何れも瞬間を意味す。

釋して曰く、彼の二とは謂く現在と未來とを二となす。過去時に待せずんば則ち現在と未來時とを成ぜず。何となれば、若し過去時に待せずして現在と未來時と有らば、何處に於て現在と未來時と有らん。相待なきを以ての故に現在と未來時とは亦成ぜず。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

(四)過去と別なく　　餘の二も次第に轉ず。
　及び上、中、下品と　　一體等も應に觀ずべし。

釋して曰く、此の方便を以て應に展轉して說くべし。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

未來と及び過去とが若し現在時に待すれば、
未來と及び過去とは現在時中に有り。
未來と及び過去とが現在時中に無くんば、
未來と及び過去とは何に待して有ることを得ん。
現在時に待せずんば彼の二は則ち成ぜず。
未來と及び過去となり、是れ則ち時有ることとなし。
現在と及び過去とが若し未來時に待すれば、
現在と及び過去とは未來時中に有り。
現在と及び過去とが未來時中に無くんば、
現在と及び過去とは何に待して有ることを得ん。
未來時に待せずんば彼の二は則ち成ぜず。
現在と及び過去となり、是れ則ち時有ることとなし。

釋して曰く、此れは是れ釋論の偈にして、前の如く自ら成立して外人に過を與ふ。
云何んが上、中、下品の次第、乃至一體等となすや。譬ふれば人の如し。類同して名づけて人と

り。隨つて全偈の意は「過去時に因待せずしては彼の二つ(現在未來)は成立しない。それ故に現在時と未來時とは成立しない」となる。長行は此の意味に取つてあり。又羅什も此の意味に譯せり。

【九】與過去無別　餘二次第轉　及上中下品　一體等應觀
　梵文「此の方法によつて殘されたる二つは繰り返しをもつ。上中下と一等とも知るべきである」。「餘二」とは現在と未來なり。中論註參照。

【一〇】以下の六偈は現在時と未來時とに就いて、既出第一、二、三偈と同じ形式の偈を作れるもの。中論本頌にあらず。

一、未來及過去　若待現在時
　　未來及過去　現在時中有
二、未來及過去　現在時中無
　　未來及過去　待何而得有
三、不待現在時　彼二則不成
　　未來及過去　是則無有時
四、現在及過去　若待未來時
　　現在及過去　未來時中有
五、現在及過去　未來時中無
　　現在及過去　待何而得有
六、不待未來時　彼二則不成
　　現在及過去　是則無有時

若し過去時に待して現在と未來時と有らば、應に過去時中に現在と未來時と有るべし。何となれば、過去時に因つて現在と未來時とを成ずるが故なり。また應に現在と未來時とは過去時中に住すべし。是の如くならば現在と未來とは盡く過去時と名づく。若し一切時を盡く過去時と名づくれば、則ち現在と未來時と無し。盡く過去なるが故なり。若し現在と未來時と無くんば、また應に過去時も無かるべし。何となれば、現在と未來時とは已に過去時中に在るが故なり。

また次に、若し時に待あらば、或は彼れは同時に有らん。待と相違せざるが故なり。譬ふれば父子の異るが如し。若し時に待ありと立てずんば、現在と未來と別に起る過あり。其の義は論偈に說くが如し、

(二)[六]現在と未來とが　過去時中に無くんば、
現在と未來とは　何に待して有ることを得ん。

釋して曰く、此れ謂く、過去時中には現在と未來時無し。若し過去時中に現在と未來時と無くして而も過去時に因つて現在と未來時とを成ずと謂はば、此の二は云何んが成ずることを得ん。若し現在と未來時と無くば何等の過ありや。此の下に驗を說かん、『第一義中には現在と未來時の自體無し。時は待あるが故なり。譬ふれば過去時の如し』。

また次に、鞞婆沙人言ふ、[七]現在と未來とは過去中に於て同時なるを得るが故に相待あり。

論者言ふ、また別時の相待あり、兄弟の如し。是れ一向に非ず。汝の語は非なり。是の如く時の相待あるは成ぜず。

また次に、若し時の相待なくして(時)成ずることを得れば、其の過は論偈に說くが如し、

(三)[八]過去時に待せずんば　彼の二は則ち成ぜず、
現在と及び未來となり。　是れ則ち時有ること無し。

【六】現在與未來　過去時中無
現在與未來　待何而得有
第四句「何に待して有ることを得ん」は、梵文には「如何にして彼れに因待して有り得よう」とあり、此の「彼れ」は「過去時」の代名詞なり。されば什譯の「云何んが過去に因らん」の方が正確なり。他は梵文と全く同じ。

【七】鞞婆沙說の批評。

【八】不待過去時　彼二則不成
現在及未來　是則無有時
此偈の後二句は梵文に對する僻釋違ひにして或る意味の誤譯と見らる。梵文後二句は次の如し。
pratyutpanno 'nāgataç ca,
tasmāt kālo na vidyate.
此の二句は切り離して見れば漢譯の如く「現在と未來となり。それ故に時は存在せず」と讀み得。そして「現在と未來となり」はその前句の「彼の二つは成立せず」の「彼の二つ」の內容を示すものとなる。そしてそれを根據として「それ故に時は存在せず」と、時そのものゝ存在を否定することゝなる。然し此の解釋は前後の關係上適當ならず。梵文第三句の「現在」「未來」の語は共に第四句の「時(kālo)」にかけて、「現在時と未來時とはそれ故に存在せず」と讀むが適當な

別して執して時有りと言ふ。第一義中には應に是の如く觀察をなすべし。

鞞世師人言ふ、有爲法の外に別に時有りと說く、而も是れ常なり。

論者言ふ、今此の時を遮するが故に、第一義中には有爲法の外に別に時有らず。有體なるが故なり。譬ふれば有爲の自體の如し。第一義中には常時有ることなし。可識なるが故に。譬ふれば瓶の如し。

鞞世師人言ふ、虛空等の如きは是れ一向に無常なるに非ず。

論者言ふ、彼の虛空は[四]分に異りては無體なり。また是の如く遮するが故に。

鞞世師人言ふ、色體の外に時ありて色と和合す。現在時を緣じて識の起ることあるが故なり。譬ふれば人と杖と合するが如し。提婆達多の境界と杖と合するを識見するが如くに、また是の如くに色上に於て現在の識を起す。此の色の外に別體あるを名づけて時となす。是の故に別に時あり。

論者言ふ、汝『識の起ることあり』と言ひて因となすは、杖を緣ずるの識は時相に非ざるの境界に於て起るが故に時相は則ち壞す。執杖者は常に非ざるが故に常の義は則ち壞す。自體の法と差別の法と、是の如き等は皆破するが故に、是れ汝の立義と出因とは等しく過あり。杖と和合すとは譬喩無體なり。第一義中には執杖者は成ぜざるが故に、喩は然らずとなす。色を緣ずるの覺が時と和合するとき、此(時)の覺は顯了すること能はず。是の故に時無し。

また次に、三時が別に成ずれば相待ありとなすや、相待なしとなすや。若し『時は待ありて成ず』と立つれば其の過は論偈に說くが如し、

(一)[五]現在と及び未來とが　若し過去時に待すれば、
現在と及び未來とは　過去時に已に有り。

釋して曰く、此れ謂く、時に待あり。時に待あるが故なり。譬ふれば過去時の如し。また次に、

【四】分。部分(avayava)の意。

【五】現在及未來　若待過去時
現在及未來　過去時已有
梵文、什譯と全く一致す。「待」(apekṣya)は什譯では「因りて」と譯さる。火が薪に依るが如き相待關係にして、本論中では「待」「因」「因待」「相待」「觀待」「觀」等と譯する。中論では重要な語なり。

しめたり。是れ此の品の意義なり。ここを以ての故に我が義は成ずることを得。般若經中に說くが如し、『極勇猛よ、色は是れ我に非ず、是れ無我に非ず、乃至受想行識は是れ我に非ず、是れ無我に非ず。若し色受想行識が我體に非ず無我體に非ずんば、是れを般若波羅蜜と名づく』と。經の偈に言ふが如し、

我無く、衆生無く、　人無く、受者無し、
但だ衆緣を身と名づく、　佛は是の如き解を得たまふ、と。

此の中に我と人と衆生と及び諸行聚と、是等は皆空にして有因にて起ること無きを明かす。又空寂所問經に說くが如し、『一切衆生は我見の幢を竪て、無明の帆を張り、煩惱の風に處し、生死の海に入る。諸佛の大悲は大敎綱を張り、天人を撈漉して涅槃の岸に置く』と。上の偈に說くが如き不二安隱の門は能く諸の邪見を破し、諸佛の所行の處なり。是れを無我の法と名づく。[四五]

釋觀時品第十九

釋して曰く、今此の品は亦空の所對治を遮して諸體の無自體を解せしめんが爲の故に說く。
鞞世師人言ふ、[一]第一義中に時有り、法の自體に(對して)了因となるが故なり。譬ふれば燈の如し。若し時無くんば云何んが了因あることを得ん。譬ふれば龜毛の衣の如し。物體(有るに)由るが故に時を以て了因となす。是の故に時有り。
論者言ふ、世諦の中に諸行若し起らば卽ち名づけて[二]作となす。此の起は但だ是れ諸物體の起にして更に別の起なし。此の諸行の因果[三]已に起るを過去時と名づけ、因滅して果起るを現在時と名づけ、因果倶に未だ起らざるを未來時と名づく。作に分齊あるが故に物に約して時となし、別の時有ることなきも、世諦中にはまた時有りと假說す。『構乳の時來る』と言ふが如し。然れども外人分

【四五】「上の偈に說く…」以下は西藏譯になし。また中論の何處にも之に相當する偈文なし。恐らく譯場に列せし何人かゞ中論の敎說に基いて創作せし偈文が此の品末に附加せられしならん。
【一】勝論派の說の批評一。物あり時ありと立つるを難ず。
【二】作。作用(kriyā)の意と解すべし。
【三】已に起るとは、起り已るの意なり。

爲法の體は念念に滅す。故に不常なり。今當に汝の爲めに其の義を開演すべし。論偈に說くが如し、

（二一）不一[四一]にして亦不異、不斷にして亦不常なり。
　是れを諸の世尊の　最上甘露法と名づく。

釋して曰く、『甘露』とは謂く、無分別智を得るの因なるが故なり。諸佛の如きは己れの所得の智を以て、一切衆生界に於て、佛日の言說の光を以て、衆生の機に隨つて慧華を開かしむ。また次に、諸の聲聞人は聞思修の慧を習するを以て眞實甘露法を得、現に涅槃を證し一切の苦を息む。或は福智の聚未だ滿足せざるが爲めの故に、解脫を證せずと雖も後世には決して得す。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

　諸[四二]の眞實を修する者は、　今は未だ果を得せずと雖も、
　將來に決定して得すること、　業の如し。假に勤めざれ。

釋して曰く、諸の眞實行を修する者は、若しくは此世に若しくは後世に而も果を得せざるも、諸行を熏習するに因つて未來世中に自然に眞實智を得し、また他を緣となすこと無し。論偈に說くが如し、

（二二）諸佛[四三]は未だ出世せず、　聲聞は已に滅盡するも、
　然れども辟支佛ありて、　寂靜に依りて智を起す。

釋して曰く、三蜜經に『辟支佛は寂靜に依るが故に實智慧を起す』と說くが如きは、身心寂靜を因となすに出るが故に智慧起ることを得るなり。是れを甘露法と名づく。若しくは今世若しくは後世に能く眞實を修する者あらば、必定して甘露法を得。是の故に解脫を得んと欲すれば應に當に是の眞實法を修行すべし。

[四四]此の品中に外人の立驗を破し、亦自の驗を說きて過なし。而して諸陰と我我所の空なるを信解せ

【四一】不一亦不異　不斷亦不常　是名諸世尊　最上甘露法　梵文及什譯と同じ。

【四二】諸修眞實者　今雖未得果　將來決定得　如業不假勸　此偈本論には「論偈」とするも他本には中論本頌中に無し。釋偈の誤まられしものか。

【四三】諸佛未出世　聲聞已滅盡　然有辟支佛　依寂靜起智　什譯・梵文とよく一致す。寂靜(asaṃsarya捨離)は什譯では「遠離」とせらる。

【四四】以下此の品の結語。般若經と空寂所問經を引きて教證とす。又前に無盡慧經。三密經の教證あり。

を過ぐ。眞實の自體は我れ說くこと能はず。また次に、此れ一切の體と自體とを遮す。言說にして能く眞實の自體を得、能く無分別智を起し、能く行者をして解して眞實を自覺せしむる方便ならば、是の如き語言は是れ第一義を得るの方便なり。

汝の所言の如き『云何んが眞實の相となすや。若し其の相を說かずんば自宗を立てず。獨り他に過を與ふるのみ。是れ汝の失なり』とは、我れに此の失なし。此の偈を以て答へしは卽ち是れ眞實の相を說けるなり。是の如く且く第一義に約して眞實の相を說けり。今復た世諦に約して之を說かん。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

(一〇)緣より起る所の物は[四〇]　此の物は緣を體とするに非ず。
　また彼の緣を離れず。　斷に非ずまた常に非ず。

釋して曰く、此れ、緣より起る果は此の果は因に卽せざることを明す。是の中に驗を說かん、『因と果とは一にして起るにあらず、異覺の境界なるが故なり、譬ふれば覺と及び境界との如し』。緣より起る所の果は、また彼の緣を離れず。若し離るれば果の起るは則ち無因の過に墮す。また次に、此の中に驗を立てん、『因と果とは別ならず、緣を藉りて方に起るが故なり、譬ふれば因の自體の如し』。是の如く、因果は不一にしてまた不異なるを以ての故に、不斷にしてまた不常なり。また次に、因は壞し已ると雖も、果起るの時には因の類あるに由つて相續して住す。然れば因壞するが故に果も亦壞するには非ず。不異なるを以ての故なり。而して體は斷ならず。果の時には因已に壞するに由るが故に、而も是れ常ならず。經の偈に言ふが如し、

　有體の起るを以ての故に彼の斷は不可得なり。
　有體の滅するを以ての故に彼の常は不可得なり、と。

云何んが不斷不常なる。謂く緣起は法爾として剎那剎那に相續して起る。是の故に不斷なり。有

【四〇】從緣所起物　此物非緣體
　亦不離彼緣　非斷亦非常
梵文とよく一致す。梵文は「如何なるものでも何かに緣りて生ずるものは、その限りその何かと同一ではないが、又別でもない。それ故に中斷することなく、又常住でも無い」とあり。之の義譯として適切なり。但だ「物」は漠然と任意の對象を指示するのみ、又「緣」は梵文では各詞形でなく pratītya (相緣りて) と云ふ絕體法が用らる。又第二句「此の物は緣を體とせず」とは「緣と同一に非ず」の意なり。因果の關係によつて組織せらるるとき、實在は不常不斷にして無限連續性をもち來ることを顯はすが偈意なり。(次の引用偈がその意をよく顯はす)。

まふ。故に名づけて法となす。また次に、自他の相續の所有る熏習と及び無熏習の煩惱の怨賊を悉く能く破壞するが故に、是れを名づけて法となす。眞實の道理は外道等と共ならず。一切執著の箭を拔かんが爲めの故に應に勤めて修習すべし。

また次に、自部と及び外人と同じく我れに謂ひて言ふ、汝若し、分別の自體を盡く捨て餘り無きとき『眞實』を得れば、此の『眞實』の相は云何ん。若し其の相を說かずんば自宗を立てず。云何んが但だ他に過を與ふるのみなる。是れ汝の失なり。

論者言ふ、實に所言の如し。若し實相にして說くべくんば我れ能く分別せん。而も彼の實相は是れ文字に非ず、言說すべからず。初めて修行する者を安慰せんと欲するが爲めに、分別智を以て而も解釋をなさん。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

（九）寂滅にして他に緣ること無く、　戲論にて說くこと能はず、
無異にして無種種なり。　是れを眞實の相と名づく。

釋して曰く、『他に緣ること無し』とは、是の眞實法は他を以て緣となさず。故に『他に緣ること無し』と名づく。所謂る他より聞かず、亦保證なきも自體にて覺するが故なり。『寂滅』とは自體空なるが故に、差別分別の物（衆生）の境界に非ざるが故に名づけて『寂滅』となす。『戲論にて說くこと能はず』とは、戲論とは謂く言說なり。眞實を見る時には說くべからざるが故に說くこと能はず。『無異』とは謂く無分別なり。無分別とは謂く一の境界の分別せらるべきもの無く、分別に境界なきを以ての故に無分別と名づく。『無種種義』とは謂く一味なるが故に、無體の義の故に、無差別の故に、是れを無種種義と名づく。此れ謂く、眞實の相なり。

また次に、無分別なるに由るが故に戲論の說く能はざる所、寂滅なるに由るが故に是れ無分別智の境界にして、復た『他に緣ること無し』と名づく。他に緣ること無きに由つて、是の故に言語の道

【三九】寂滅無他緣　戲論不能說　無異無種々　是名眞實相
之も殆ど梵文の直譯なり。第三句「無異無種々」は「分別を離れて差別無し」の意なり。「異」は長行にある如く、分別(vikalpa)の譯語にして、種々(nānārtha)が却つて普通は「異」と譯さるるなり。又第四句「眞實相」は什譯にては「實相」とあり、「眞實の相」と訓みたるも「眞實なる相」の意味にあらずして、此の場合の眞實(tattva)は名詞にして、「眞實者」を意味し、第七偈の「法性」と同義なり。「眞實相」はその眞實者(法性)のすがたを意味するなり。

彌と芥子との巨細殊に遠きが如し。汝『無を說くこと同じ』と言ふは亦復た是の如し。
第一義中には一切法を遮して涅槃相の如し。福德の聚に隨順せんが爲めに說く所の諸行は、世諦中に於ては是れ實なり。佛の言へるが如きは、『所有る內外の諸物は世間に實と說き不實と說く』と。我れもまた是の如く世間法に順じて實と說き不實と說く。其の義云何ん。論偈に說くが如し。

(八)[三八]一切は實なり、不實なり、　亦實にして亦不實なり、
　實にも非ず不實にも非ず。　是れを諸佛の法と名づく。

釋して曰く、佛所說の如きは、世間には欲得と及び不欲得とを(說く)と。我れまた是の如く世諦中に於ては欲得を說き不欲得を說く。また次に、內外の諸入、色等の境界は世諦法に依れば不顚倒と說く。一切皆實なり。第一義中には內外入等は緣より起りて、幻の所作の如く體不可得なり。其の所見の如くならざるが故に一切は不實なり。二諦の相待するが故に亦實にして亦不實なり。修行者、果を證する時には、一切法に於て眞實を得て無分別なるが故に、實と不實とを見ず。是の故に『實にも非ず不實にも非ず』と說く。また次に、實と不實とは、佛所說の如きは、煩惱障を斷ぜんが爲めの故に、內外入と我我所の空なるを說きたまふ。是れを『一切は皆實』と名づく。不實とは謂く、佛法中に識を說いて我となす。世の解せざる者は妄りに我有り我所有りと執して他に指示して云ふ、『我は是れ作者、是れ聞者、是れ坐禪者、是れ修道者なり』と。是れを『不實』と名づく。摩訶衍中には一切は不起にして一切物の是れ有なるもの無し。分別無分別の、二智の境界となるべきが故に『實にも非ず不實にも非ざる』なり。
また次に、云何んが『佛』と名づくるや。一切法に於て顚倒ならずして眞實に覺了するが故に名づけて佛となす。云何んが『法』と名づくるや。若し人天の善趣と及び解脫の樂とを得んと欲すれば、佛は衆生の諸の根性と欲とを知ること顚倒ならざるが故に、爲めに人天道と及び涅槃道とを說きた

【三八】一切實不實　亦實而亦不實　非實非不實　是名諸佛法　什譯、梵文と全く一致す。

なし」と謂はば、應に是の如く答ふべし、我れは言ふ、一切の句義無なるもまた差別あり。汝解せざるが故に是の言を出すのみ。

有る人言ふ、智慧を以て知りて捨つるが如きは、智慧を以て知らずして捨つると豈に差別なからんや。若し無を說くこと同じと言はば則ち是れ凡夫と羅漢と異らず。生盲と有目と異らず。平地と丘陵と異らず。若し是の如く說かば中道と路伽とは則ち差別なし。此の說をなさば差別を解せず。是れを無智となす。若し路伽が無を說くと中道が無を說くと是れ同ならば、何時に於て同なるや。世俗の言說の時に同なりとなすや、眞實を見る時に同なりとなすや。

且く世諦の時に同なるを論ぜん。因果を撥無するの執は則ち白法善根を拔き、一切の不善道を行じ、世諦の法を壞するが故なり。また次に、中道が無を說くは則ち是の如くならず。所謂る因果相續して如幻如燄なるを說き善業道を行ず。有漏の陰相續するを以ての故なり。其の義云何ん。過去の有陰の相續滅して現在の有陰の相續起り、現在の有陰の相續滅して未來の有陰の相續起る。譬ふれば夢の如し。是れを『中道に無を說く』と名づく。『路伽が無を說く』とは世諦の時にも同に非ず。また眞實を見る時にも同に非ず。汝無を說かば、此の無を說くの識は無の境を緣じて起り、一切時に無を執するを以て相となす。然れども是れ邪智にして破戒の垢を以て自ら其の身に塗る。是れ苦を息むるの因に非ずして、是れ苦を起すの因なり。中道を說く者は未だ眞實を見ざる已前には此の色等の境界の覺あり。此の色等の境界の覺は眞實を見る時に空解を得已りて色等の境界の執覺は起らず。道理を見るに由るが故なり。直に無と言ふは是の事然らず。彼の色の境界あること無しとの覺は、等一義中の實義の如き覺には非ざるが故なり。譬ふれば有覺の如し。此の驗を以て、彼の路伽の無を說く者に過を與ふ。また次に、中道が無を說くと路伽耶が無を說くとは所釋同じからず、云何んが同じからざるや。佛法は有を遮して無を執せず。而も物(人)をして解せしむ。譬ふれば須

第一義中に於て、　　　云何んが二相あらん。
彼の智もまた行ぜず、　何ぞ況んや諸の文字をや、と。

此の經に謂く、心意識等は第一義中に於て畢竟無體なり。何となれば、一切諸法は寂靜の相なるが故なり。心及び諸法は一切皆如にして人の能作するもの無し。寶積經中に說くが如し、『空が諸法を空ならしむるに非ず。是の如き等の法は各各自ら空にして、眞如と等しく涅槃と同じきが故なり』と。この義應に知るべし。經に說くが如し、『佛は道場に坐して諸の煩惱は無體無起にして分別より起り自性より起らずと知る』と。佛は是の如く知る。ここを以ての故に此の義成ずることを得。經の偈に言ふが如し、

[三五]識はこれ諸有の種にして、　彼の識は境界に行ず。
境の無我なるを見已れば、　有の種子は是れ滅す、と。

此の中には有の種寂滅するを明す。この故に『涅槃の如し』と言ふ。云何んが涅槃の如くなる。謂く、一切法は無生平等なるを見る。平等を見已れば心の境界斷じ、心境斷じ已れば言說もまた斷ず。言說斷じ已れば世諦相の所執の戲論は寂滅することを得。この故に空を見れば戲論滅すと言ふ。有る人言ふ、『寂滅相』とは卽ちこれ涅槃眞如法中の性なり。云何んが『涅槃法性の如し』と言ふや。論者言ふ、戲論分別とは『これ世間、これ涅槃』と謂ひ、或は『涅槃は無爲にして是れ寂滅の法なり』と說き、執して『世間は是れ生死の法なり』と說く。此の中に論者は說く、一切諸法は若しくは世間なるも、若しくは出世間なるも無生にして性空、皆寂滅相なり。著法の爲めに衆生は生死卽涅槃の相を知らず。ここを以ての故に今[三六]阿闍梨、涅槃等を以て喩となすは、諸法の本より以來空無相無作にして寂滅無戲論なるを知らしめんが故なり。

自部及び外人等が我れに言ひて、[三七]『彼の中道の說は一切の句義なし。路伽耶の無を說くと則ち差別

【三五】識是諸有種　彼識行境界　見境無我已　有種子是滅
本論に於ては之を以て經の偈となせども、その實之は提婆菩薩の四百論第十四品（漢譯廣百論・破邊執品第六）の最後の偈にして、玄奘譯は左の如し。
識爲諸有種　境是識所行　見境無我時　諸有種皆滅
安慧の中觀釋論も亦その觀性品第十五に於ける第八偈の釋文中に之に相當する左の偈を引き、之を尊者提婆所說の頌となせり。
從識種子生　成三有境界　見境界無我　三有種子滅
之等の異譯を對照して考察すれば、本漢譯偈頌に於ける「有」は三有にして生死の世界をさし、「種」は種子を意味すること明かなり。

【三六】阿闍梨(ācārya)。大師の意。龍樹をさす。

【三七】以下順世の說と中道の說と似て非なるを論ず。

何故に此の言をなすや。彼の諸の外道は因果の所爲に愚にして但だ眼見の身相諸根等のみを卽ち是れ丈夫として、更に別我無しとす。前偈中にもまた無我を說けるが如きは、云何んが無我なるや。謂く身根聚中に於て無我なり。諸佛は一切法に於て了了の智を得たまふ。前偈中に「佛は我を說かず無我を說かず」といふが如し。何故に我と無我とを說かざるや。一切法は眞實にして無戲論なるを證解するに由るが故なり。戲論を無みし已れば我無我の執を斷ず。我無我の執斷じ已れば我無我を起すの境界もまた無し。何となれば、色等を妄置するを我無我の種となす。この執起らざるが故なり。般若經中に說くが如し、『極勇猛よ、色はこれ我に非ず、これ無我に非ず、受想行識は我に非ず無我に非ず。若し受想行識が我に非ず無我に非ざれば是れを般若波羅蜜と名づく』と。

上に『空を見れば戲論滅す』と說けるが如きは今また重ねて釋せん。云何んが戲論滅することを得るや。謂く一切の體は自相不可得にして虛空相の如し。かくの如くに見ざるを是れを空を見ると名づく。若し一切諸法の空にして不可說なるを見るとは、其の義云何ん。論偈に說くが如し、

(七)[三三]爲めに說く、言語を息め、　彼の心の境界を斷じ、
亦起滅の相無く、　涅槃の如くなり、法性は。

釋して曰く、此の中に言語の起ること不可得なるを明かす。云何んが起ること不可得なりや。謂く心の境界斷ずるが故なり。云何んが心の境界となす。謂く色等これ心の境界にして、第一義中には色等成就せざるが故なり。云何んが色は成就せざるや。謂く起滅の相なきが故なり。云何んが「涅槃の如き法性」なる。謂く、涅槃の如く法性には所有の相なし。かくの如く觀ずるを名づけて『空を見る』となす。また次に、云何んが空を見るや。謂く[三四]體(有)と無體(無)との二を見ざるが故に是れ眞見と名づく。或は有る人是の如く疑ひて『云何んが眞見と名づくるや』と。我れ今爲めに說かん。無盡慧經の偈に言ふが如し、

【三三】爲說息言語　斷彼心境界　亦無起滅相　如涅槃法性
第一句の最初の「爲めに說く」は前所說への續きを表す爲めに譯者の補へる語なるが、之を除けば他は全く梵文の直譯にして言葉の順序まで一致す。全文の主語は第四句の最後の「法性」(dharmatā)にして、それは法の法たる本質を意味し、羅什では「諸法實相」と譯さる。此の偈法性(實相)の内容を規定せるものとして重要なり。

【三四】體、無體はそれぐ「有」「無」の意なり。

が爲めに、五陰中に於て爲めに無我を說きたまふ。復た有る衆生は善根淳厚にして諸根已に熟し、能く甚深の大法を信じ一切種智を得るに堪ふ。彼の衆生の爲めに諸佛所證の第一甘露の妙法を宣說したまひ、有爲は夢の如く幻の如く水中の月の如くなるを知らしむ。自性空なるが故に我を說かず、無我を說かず。

問うて曰く、何故に我と無我とを說かざるや。

答へて曰く、我と無我との分別の境界は無なるが故なり。ここを以ての故に世諦の中に假りに我有りと說く。汝の所言の如きは『我れは先の所立の義に違す』と謂ふ。然も我れ亦先の所立に違せず。汝若し『第一義中に我有らしめんと欲す』と言はば、違宗の過は今還つて汝に在り。論者は經の偈を引いて言ふ、

衆生は生死に墮し、　是の如き苦を脫せず。
我無く衆生無く唯だ法と因と有るのみ、と。

此の經は第一義中には畢竟無我なるを明かす。我を有らしめんも我無し。是の驗は、已に我を遮するを說いて力あるが故なり。

また次に、今當に異の分別を解すべくんば、二種の外道ありて各執同じからず。一は言ふ、諸行聚は刹那刹那に壞し乃至後時命終の分にも諸行は壞す。この故に我無し。若し我無くば業果の所爲は是れ則ち無體なりと。此の諸の外道は是の事を見るが故に卽ち怖畏を生じ、怖畏を生ずるが故に亦我を施設するあり。我を施設すとは、謂く、執して我有りと說くなり。二には復た〔三〕盧迦耶蜜迦（唐に無後世外道と言ふ、卽ち路伽耶なり。）ありて言ふ、唯だ身と及び諸根と有るのみにして我の自體無し。諸行中に於て假りに衆生と名づく。而も實に我の諸行を受持するもの無し。生死流轉ありと言ふは是の事然らずと。

【三】盧迦耶密迦。順世外道のことなるが原語はlokāyataにして、又はlokāyatikaにして、普通路伽耶・路伽耶陀・路伽耶底迦等と譯さる。本譯の「密迦」の音は何處より來るか不明なり。或は梵字のtikaがmikaと誤まられしものに非ざるか。こゝに順世外道の說として、散文を以て「唯有身及諸根、無我自體、於諸行中假名衆生、而實無我受持諸行、言有生死流轉者、是事不然」と譯されし一節は、西藏譯に於ては先きに觀縛解品第十六に順世外道の說として譯せる偈文（註八を見よ）と全く同一偈頌なり。かく同一偈頌を異れる文體と譯語とを以て詮表するが如きは、翻譯の不統一を暴露せるものと謂ふ可し。

大の爲めには二つ倶に說きたまふ、と。

此れ謂く、如來は殺生者の爲めに物命を害せざるを最上法となすと略說したまひ、諸聲聞の爲めには人空及び涅槃を最上法となすと說きたまひ、大乘者の爲めには二無我を最上法となすと說きたまふ。智障を斷ずるの方便を說き已りぬ。

有る外人言ふ、彼れ上に佛經中の偈を引いて「我は已れと親をなして、他を以て親となさず。智者善く我を調ふれば則ち善趣に生ずることを得」と說く。ここを以ての故に汝『無我』と言ふは自ら汝の先の所立の義に違す。この故に我を遮すること成ぜず。

論者言ふ、復た有る衆生は是の如き見を起し、因果を撥無し正智を覆障して是の如き言をなす。『畢定して我無し。此世なく後世なきが故なり。また善惡の業を作せる果報なく、また衆生の彼の化生を受くるもの無し』と。(而して)一切時中に不善事を作して必ず惡道に墮す。險岸に臨むが如し。ここを以ての故に諸の婆伽婆は諸の衆生を攝取せんと欲する爲めの故に勸めて大悲を行じ、世諦中に依つて我有りと施設す。其の義は論偈に說くが如し、

(一六)[三二]彼れの爲めに有我を說き　亦無我を說くも、
諸佛所證の法には　我と無我とを說かず。

釋して曰く、諸佛世尊は諸の衆生の心心數法、相續不斷にして未來世に至るを見て、是の因緣を以て、爲めに假我を說きたまふ。復た有る衆生は計して言ふ『我の、常たり徧たり自ら善不善の業をなし自ら作して受食する者あり』と。かくの如き執ありて然も彼の衆生は邪我の爲めに其の心を繩縛せらるるが故に、身根識等の無我の境界に於て迷ひて我を起す。禪定三昧三摩跋提の力ありて其を將ひて遠く去り、乃し有頂に至ると雖も、繩繫せらるる鳥は牽かれ已つて復た墮つるが如く、生死の苦に於て猶ほ厭を生ぜず。諸佛世尊は衆生を知り已つて彼の苦を息め我執の繩を斷ぜん

【三二】爲彼說有我　亦說於無我
諸佛所證法　不說我無我
梵文には「諸佛によつて我ありとも施設され、無我とも說かれた。亦如何なる我もなく無我もないと說かれた」とあり。我を說き無我を說くは俗世諦にして、眞實第一義には我とも無我とも說かれず。第三句「諸佛所證法」は我無我を說かざるが第一義なることを顯はさんが爲めに譯者の補へる句と思はる。什譯には「諸法實相中」とあり。又第一句「彼が爲に」は梵文には無き語なるが、「衆生の爲に」の意と見るべし。

も煩惱を起す。この諸の煩惱は何より起るや。謂く可意と[二九]不可意との諸の分別より起る。分別あるが故に則ち煩惱あり。この故に煩惱を分別の因となす。種子あれば則ち芽の生ずることあるが如し。かくの如く非聖者は不正思惟の分別あるが故に業と煩惱とを起す。若し分別なくば則ち諸の業と煩惱と無し。譬ふれば聖の如し。相續の體は彼の染汚の心より作意を起すが故に名づけて煩惱となし、染汚の心より身口の所作を起すに由るが故に業と名づく。云何んが『煩惱』と名づくるや。謂く貪瞋等なり。能く衆生の垢汚をして相續せしむ。これを煩惱と名づく。當に知るべし、業煩惱を起すは皆戲論分別に因る。彼れ應に斷ずべしとは是れ世諦の相なり。云何んが分別を滅するや。謂く空を見れば則ち滅す。云何んが空を見れば則ち滅するや。謂く空智起る時には則ち分別なし。この故に滅すと說く。

また次に、[三〇]有る聲聞人言ふ、人無我を見るが故に則ち可意と不可意との分別なくして煩惱と及び纒との是等は倶に斷ず。煩惱と纒と斷じ已つて聲聞果を成就す。果成ずることを得已れば何ぞ法無我を用ひんやと。

論者言ふ、汝は善說ならず。煩惱の根蔓熏習を拔きて無餘ならしめんが爲めの故なり。若し法無我を離るれば終に煩惱の根蔓熏習盡きて無餘なるを得ること能はず。此の事を以ての故に法無我を用ふ。また次に、『不染汚の無知』とは、諸佛世尊は一切法の境界に於て不顚倒を得て覺了したまふ。此の覺の所治の障が是れ不染汚の無知なり。若し法無我を見ずんば則ち斷ずること能はず。この故に法無我は是れ無用なるに非ず。かくの如きを以ての故に戲論寂滅して餘り無き相が所謂る空なり。如實に空を見るが故に卽ちこれ解脫なり。解脫とは謂く分別を脫するなり。

經の偈に言ふが如し、

佛は殺生者の爲めに不害法を略說し、　小には空と涅槃とを說き、

【二九】可意不可意は愛、非愛と同じ。好ましき、好ましからざるの意なり。

【三〇】小乘の人無我法有の立場を許す。

釋して曰く、此れ謂く、唯だ假施設の我有るのみ。其の義は是の如し。第一義中には我と法と有ることなし。翳眼の人眼病を以ての故に實法を見ずして、實の毛輪なきに毛輪を妄見するが如し。汝もまた是の如し。實に我有ることなきに我有りと妄見し、邪見を以ての故に取著の意を起す。ここを以ての故に我れは(汝の)因の義成ぜずとなす。若し「我れ無我、(無)我所を得るは實我を見るに由る」と謂ひて因となさば、無我、(無)我所の自體は成ぜず。體成ぜざるが故に卽ち是の因の義成ぜず。汝は是の如き過を得。故に修行者、內外入の眞實を見ることを得んと欲すれば當に勤めて內外法の空を觀察すべし。

問うて曰く、空を得れば何の義利ありや。

答へて曰く、論偈に說くが如し、

(四)[二七]我我所を盡くすことを得れば　また內外入を盡くし、
　及び彼の諸取を盡くす。　取盡くれば則ち生盡く。

釋して曰く、『取』とは謂く、欲取、見取、戒取、我語取なり。行者は無我を見るが故に我語取盡くることを得。我語取の根本盡くるが故に餘の取は自ら盡く。諸取盡くるが故に則ち生盡く。生盡くるが故に解脫を得。二乘の人は無我を見るが故に煩惱障盡きて彼の乘に乘りて去る。これを名づけて煩惱障を斷ずと說く。

煩惱障を斷ずるの方便を說き已りぬ。次に智障を斷ずるの方便を說かん。其の義は論偈に說くが如し、

(五)[二八]解脫は業と惑とを盡くす。　彼の苦盡くれば解脫す。
　分別より業と惑とを起す。　空を見れば分別を滅す。

釋して曰く、此れ謂く、生の因は諸有る煩惱なり。未だ欲を離れざる衆生は境界を緣ぜずして而

【二七】得盡我我所　亦盡內外入　及盡彼諸取　取盡則生盡

前二句は梵文によれば「內的にも外的にも我我所の斷ぜられしときは」となり、此の漢譯は確な譯に非ず。梵文の「內、外」は內外入を意味せずして、內は我に關し、外は我所に關する語と解すべきが如し。卽ち「內的には我、外的には我所」の意なり。什譯は明かに此の意を顯はす。

【二八】解脫盡業惑　彼苦盡解脫　分別起業惑　見空滅分別

多少意譯なれど梵文とよく一致す。第四句の「分別」は梵文よりすれば「戲論」なり。

に解せしめしが故なり。其の義は論偈に説くが如し、

(二)[二四]我は既に所有無し、　何處に我所有らん。
　無我、無我所ならば　我執は永く息むことを得。

釋して曰く、此の中に「無我」と言ふ。ここを以ての故に(汝の)因は成ぜず、譬喩無體なり。第一義中には我の自體有ること成ぜず。また次に、若し有る人「かくの如き我有り。果有るが故に、能依有るが故に」と言ひて是の如き因をなさば亦前の過を以て答ふ。諸行は應に是の如く實義を觀察すべし。所説の道理は即ちこれ已に修行の果なりと説けり。

また次に、[二五]僧佉人言ふ、是の如き我有りて、彼の我我所無きの身根識中に在り。何となれば、彼の法中に修行する者は眞實智起る時に「我れ無我無我所を得たり」と言ふは、實我を見るに由るが故なり。「石女の無兒」は説くを得べからざるが如し。解脱に住して「我れ無我無我所の智を得」と言ふは、解脱に住する者あるに由つて「我れ無我無我所の智を得」と言ふが故なり。故に知る、我有りと。

論者言ふ、諸行聚等は刹那刹那に壞して相續の法起り無我無我所を見ることを得と雖も、而も實我無し。二乘の人は無我を得するが故に、唯だ此の法生じ此の法滅するあるを見るのみにして是の如き見を起す。然れども我の境界は無なるが故に我を緣ずるの心もまた起らず。我は無體なるが故に我所なる内外等の法有ることなし。我を緣ずるの心は復た起らざるを以ての故に、乃至無我の念もまた起らざることを得。唯だ世俗の名字を除いて菩薩摩訶薩は無分別智に住し、能く諸行の本來無生なるを見る。其の義は論偈に説くが如し。

(三)[二六]我我所無きを得れば　法の起滅を見ず。
　我我所無きが故に　彼れの見もまた見に非ず。

【二四】我既無所有　何處有我所　無我無我所　我執得永息　我を立つれば蘊等は我に屬する我所(ātmīya)となる。そして「我我所の寂滅からして、我れのを離れ、我れがを離る」。第四句「我執得永息」は什譯では「名得無我智」とせる。

【二五】數論派の說の批評八。

【二六】得無我我所　不見法起滅　無我我所故　彼見亦非見　第四句「彼見亦非見」とは、我々所を離れて見る人は見る(分別的に)に非ずして如實觀に入る、との義なり。されば什譯は之を「實觀」とせり。

の境界を見るのみ。師子等の聲の如し。若し外人の意に「我が聲と及び智とは衆緣聚集の境界に非ず」と謂はば、この執をなさば此れ即ち自ら壞す。ここを以ての故に汝の差別の法は壞し、是の立義は過あり。

また次に、若し外人未だ深く道理を解せざる者ありて「我が言は、彼の所說の五陰と及び諸根等の如きはこれ不共に境を取るの因に非ず。但だ差別の法を遮せんと欲するのみにして我體を遮せず。彼れが我を嫌ふは自ら本宗に違す」と謂はゞ、

論者言ふ、「我」はこれ世諦中の假名字のみ。汝の所分別なる「これ常」「これ徧」「これ受食者」の如きは、我が法にては世諦中に於て遮するが故に、汝今他をして信解せしめんと欲するもこの我は無體なり。若し第一義中ならば一切時に我あるを悉く皆遮するが故に、但だ獨り差別の法を遮するのみならざるなり。ここを以ての故に汝の所說は虛空を嚙むが如し。

〔三二〕僧佉人言ふ、有る處に是の如き我あるが故に、彼に於て遮すべし。猶し此の井に水なきを遮するは即ち餘の井に水あるを知るが如し。かくの如く身と及び諸根中に我なしと遮するは、定んで餘處に我ありと知るなり。また次に、身根中に我あるによるが故に遮し、身と諸根中に我なきを以ての故に遮するにはあらず。ここを以ての故に我ありと知る。

論者言ふ、先に已に遮せるが故なり。內の諸入等は自在天の作に非ず、自性藏の作に非ず、時の作に非ず、那羅延の作に非ず。かくの如くまた有る處の我は內入等を作らずと遮す。無起なるが故なり。譬ふれば兎角の如し。第一義中には水等は成ぜず。譬喩無體なり。この故に此の說は然らず。

〔三三〕僧佉人また言ふ、かくの如き我あり。我所あるが故なり。譬ふれば自體あれば則ち我所の物あるが如し。我れの舍宅、臥具、衣服、及び(我れの)眼耳の諸根、等と謂ふが故に、我ありと如る。

論者言ふ、我が若しこれ有ならば我所の物も成ずることを得。然も我はこれ無なり。先に已に汝

【三二】數論派の說の批評六。

【三三】數論派の說の批評七。

丈夫と丈夫智との如し。云何んが異の境界となすや。謂く身と及び諸根と因果聚等とを異の境界と名づく。云何んが顚倒の智となすや。謂く陰を緣じて我となすを顚倒の智と名づく。故に言ふ、異の境界(を緣ずるは)顚倒の智なり。實の境界に隨ふは其の義の如き[一九]智なり。彼れは卽ちこれ我なり。この故に我あり。

論者言ふ、[二〇]汝所計の我を我が法中の如きは遮せず。世諦には汎く我ありと說く。汝若しこの立義をなさば反つて我が義を成ず。云何んが我が義を成ずるや。我が佛法中には識を名づけて我となす。聲は其の義の如くに名づけて實我となす、若し色等の諸陰に於て名づけて我となさば、これ則ち假となす。阿含經中の所說の如し、「衆分に依るが故に名づけて車となすことを得。我もまた是の如し。陰を以て因となして假說して我となす」と。此の如き經あり。又また識が能く取りて後に有るが故に識を說いて我となす。

若し[二一]外人の意に「聲は實我の境界を召して識を召さず。これ作なるが故なり。譬ふれば身の如し。智は實我の境界を緣じて識を緣ぜず。これ作なるが故なり。譬ふれば身の如し。かくの如き證にて我あり」と謂はば、

論者言ふ、若し第一義中ならば、我を召すの聲と及び我を緣ずるの智とは皆心を以て境界となす。汝の意に「如實の義ならず」と謂ふは反つて我が義を成ず。云何んが我が義を成ずるや。一切時一切處に於ける我見等は先に已に遮せるが故なり。若し世諦中に遮すればこの事は然らず。假設の聲あり、實體を召すの聲あり、智もまた是の如し。假の境界を緣ずるあり、實の境界を緣ずるありて、我が佛法の義は成ずることを得。我が所欲もまた成ず。若し第一義中に於てならば實我を召すの聲なく、また我の境界となるもの無し。汝所說の師子の聲の義の如きはこれ假設なるが故なり。かの師子の境界は其の義の如くならず。また次に、聲は假施設の處に於て起る。彼處には但だ衆緣聚集

【一九】其の義の如き(如其義)は、恐らく yathārtha の譯語なるべく、「如實」を意味す。

【二〇】世諦と第一義諦との區別と關係を確立して以て諸派の思想を批判し組織せるは清辨の特色ある立場と言ふべし。

【二一】外人。此の場合は上の勝論派をさすと見るべし。

陰相に非ずとなすや。上の偈に「若し我がこれ陰ならば卽ち起盡の法なり」と說くが如し。ここを以ての故に「彼の陰は我に非ず」と言ふ。起滅するを以ての故なり。譬ふれば諸陰の如し。また次に、陰相に非ずとは上の偈に「我若し諸陰に異らばこれ則ち陰相に非ず」と說くが如し。この義を以ての故に我あること無きなり。陰相なきが故なり。譬ふれば空華の如し。其の義は是の如し。また次に、若し我が陰相に非ずんば我は則ち無生にして空華の如く、石女等の如し。若しこれ陰相なりと言はば、これまた無我なり。何となれば、これ起、これ因、これ果、これ物なるが故なり。譬ふれば瓶の如し。行者かくの如く觀察し已れば卽ち無我に通達することを得。

また次に、鞞世師人言ふ、[一六]かくの如き我あり。境界を見るが故なり。我若しこれ無ならば衆生の身中に則ち我あること無し。根等は無心にして猶し窓牖の如くなるに物を見ることを得るはこの事然らず。我は根と相異するによるが故に和合して乃ち見る。彼の見るものは、これ我なるが故に我ありと知る。

論者言ふ、境界を見るを以てこれ我なりと言ふは義また然らず。何となれば、我が境界を見るとは此の驗は無體なり。かくの如く若し我なきも、先の所見の物を後に見て還つてこれ先の所見と識る、我ありと知るは是の如き因と及び譬喩なし。若し身中に我あることを得と立つれば、かくの如き因と及び譬喩なし。若し能く先の[一七]所見の事を憶するを以て我ありと知らば、かくの如き因と及び譬喩なし。若し業あり果報の得べきもの有るを以ての故に、我ありと知らば、かくの如き因と及び譬喩なし。かくの如き等の因にて悉く廣く遮すべし。

[一八]鞞世師中に憍慢者あり、論者に謂ひて言ふ、「我」と說くの聲は其の身中に實我の境界あるによる。聲は彼れの轉た有る處に於て假設するが故なり。譬ふれば人を喚んで師子となすが如し。また次に、我の境界を緣ずるを名づけて正智となし、異の境界を緣ずるを顚倒の智と名づく。譬ふれば

【一六】勝論派の說の批評四。

【一七】所見。見は刊本に「更」とあり、誤字なり。

【一八】勝論派の說の批評五。

破せん。第一義中に於ては我の受食するもの無し。言ふ所の「疑智の因」とは、夜に杌を見るが如し。我はこれ一物なるが故に瓶の如し。應に是の如く說くべし。

また次に、[一四]外人あり是の如き意をなして論者に謂ひて言ふ、彼れは旣に我をしてこれ一物ならしめずして、また還つて簡別して我はこれ物、これ體、これ無常、これ不徧、これ疑智等と言ふ。是の說をなすは其の義然らず。また人ありて自ら分別を生ずるが如し。譬ふれば石女の實に自ら兒なきが如き、何ぞ他に靑黃の色を示すことを得んやと。汝の今の所說を物(人)をして解せしむるはこれ則ち虛妄なり。

論者言ふ、汝の語は非なり。取りて後に識あるを謂ひて我と施設す。この故に識を說いて我となす。般若經中の偈に言ふが如し、「調心は善哉となし調心は樂果を招く」と。また阿含經の偈に言ふが如し、「我は已れと親をなし、他を以て親となさず。智者善く我を調すれば則ち善趣に生ずることを得」と。此れ謂く、世諦中には假りに「我あり」と說く。この諸の外道の分別所執を悉く皆遮するが故に我れは過咎なし。また次に、身と及び諸根とは常徧の我に非ず、不共に境を取るの因(に非ず)。可取なるが故なり。譬ふれば柱の如し。かくの如く「諸根はこれ可量なるが故に」といひ應に廣く驗を說くべし。

僧佉人言ふ、[一五]何の義を以ての故に陰中に我なきや。若し彼の陰中に定んで我なくんば汝の喩は無體なり。何となれば、柱等の諸物もまた我あるが故なり。

論者言ふ、我れもまた我ありと論ぜず。但だ諸陰と及び身根等は常徧の我に非ず、不共に境を取るの因(に非ず)と遮すのみ。此れはこれ我が立義の意なり。汝の妄說の如きは我が所立の驗に依つて解すること能はず。

また次に、諸の修行者は自ら此の陰に於て當に善く觀察すべし。此の如き我はこれ陰相となすや、

【一四】外人。數論勝論に拘はらず、有我說一般の立場にあるものと解すべし。

【一五】數論派の說の批評五。

「非ず」とは無きを言ふ。「陰相に非ず」とは、陰は我なきが故に「陰相なし」と言ふなり。今當に驗を說くべし。「第一義中には色陰等の外に別に我あること無し。陰相なきが故なり。譬へば石女の兒の如し」。

鞞世師人言ふ、[一〇]彼の涅槃の如きは陰相に非ずして而もこれ[一一]我體あり。かくの如く陰相に非ずと雖もまたこれ有なり。

論者言ふ、經の偈に言ふが如し、「また一處に一法としてこれ無爲なるもの有ること無し」と。此の『無爲涅槃等』と言ふは、並びに已に遮せるが故に、一向に是れ無なり。然も常徧の我は苦樂等の依止に非ず。起あるが故なり。譬ふれば色等の如し。汝所立の我もまたこれ徧に非ず。何となれば、これ實なるが故なり。譬ふれば瓶の如し。應に前の如く驗すべし。

鞞世師人言ふ、[一二]虛空の如きはこれ實にしてこれ徧なり。我もまた是の如し。彼れの所立の驗の如きは然らず。一向に「是れ實ならば皆徧ならざる」に非ず。

論者言ふ、汝『虛空は是れ實』と立つるは前に已に遮せるが故に、『我これ徧』なるを遮するが如きが故に、また『虛空これ徧』なるを遮す。一向に「是れ實ならば皆徧」に非ざるにあらず。また次に、我はまた是の如くこれ作者に非ず。何となれば、質礙に非ざるが故なり。譬ふれば思業の如し。我はまた常に非ず。これ實法なるが故なり。譬ふれば瓶の如し。我はこれ可知なるが故に常に非ず。これ一物なるが故に常に非ず。これ等の諸因にて須く廣く驗を出すべし。また次に、我はまた無因に非ず、有體なるを以ての故なり、譬ふれば瓶の如し。第一義中には思はこれ我ならず、これ一物なるが故なり、譬ふれば柱の如し。我は常に非ず徧に非ず、また無因ならず。これ一物なるが故なり。或は正智邪智疑智の因となるが故なり。有る時には喜(の因)となり、怒の因となるが故なり。譬ふれば柱の如し。これ等の驗あり。[一三]次に僧佉人別に「我あり、これ受食者なり」と執するを

[一〇] 勝論派の說の批評二。
[一一] 我體。實體と云ふほどの意なり。ātman は五陰等の法に對する場合は人我を意味すれど、又法の實體を意味す。
[一二] 勝論派の說の批評三。
[一三] 數論派の說の批評四。

る。
[六]自部の論師あつて言ふ、我が若しこれ陰ならば一一の身中に多陰あるが故にまた多我あらん。また次に、我が若しこれ陰ならば卽ち起盡の法なり。かの諸陰は起盡の法なるを以ての故なり。卽ち自ら汝の無起無盡なる差別の我を破するなり。差別の法體破するが故に汝の立義は過あり。また次に、我が若しこれ陰ならば卽ち起盡の法なり。然も外人は我をしてこれ起盡ならしめんとは欲せざるが故に、その所計の我が無起無盡ならば、またまた我れをして信解せしむること能はず。ここを以ての故に我れ今驗を說く。「第一義中には畢竟じて我なし。何となれば、無起無盡の法なるが故なり。譬へば兎角の如し」。また次に、我は若しこれ陰ならば卽ち起盡の法なり。ここを以ての故に我れ今驗を說く。「第一義中には色等の五陰は決定して我に非ず。何となれば、起盡の法なるが故なり。譬へば瓶の如し」。かくの如く陰は果なるが故に、因なるが故に、暫有なるが故に、憂喜の因なるが故に、邪智正智疑智の因なるが故に我に非ず。この諸因の義は廣く前の如く驗す。

陰に卽するを釋し已んぬ。[七]我が陰に異らば、

[八]鞞世師人言ふ、身と及び諸根と覺等の外に而も別に我ありて能く苦樂等のために依止となる。これ作者にしてこれ無心、これ常にしてこれ徧なりと、是の如き說をなす。

また[九]僧佉人あつて言ふ、かくの如き我あり。云何んが有りや。因果の外に別に我あり。然も作者に非ず。これ受食者なり。これ淨これ徧にして聽聞等の具なしと。

僧佉鞞世師等は論者に謂ひて言ふ、彼の所說の如き驗を立つる方便は、我れに此の過なし。また丈夫を以て因となすことあらば上の如き過なしと言ふ。

是の義を以ての故に鞞世師等が「諸陰の外に別に我あり」と言ふは、またまた物(人)をして信解せしむること能はず。論者は知るが故に偈を說いて答へて云ふ、「我が諸陰に異らば則ち陰相に非ず」と。

【六】 五陰卽我なりとの見を難ずる大乘部派の何人かの說を擧げて自說を補ふ。

【七】 我は五陰に異りて存在すと云ふ說を難ず。第一偈後二句の註なり。

【八】 勝論派の我見を擧ぐ。我は作者なりと云ふ。

【九】 數論派の我見を擧ぐ。我は受者なりと云ふ。「受食者」とは單に「受者」と云ふと同じ。

卷の第十一

釋觀法品第十八

釋して曰く、今此の品は空の所對治を遮して、諸行と我と我所との空を解せしめんが爲めの故に說く。諸の外道等は我見を說いて無量種ありと雖もまた五受陰を以て所緣となす。この故に今當に次に諸陰を觀ずべし。佛所說の如きは、若し沙門婆羅門等あつて我を見ると言ふも、但だ五陰を見るのみにして實に我あること無しと。[一]

[二]異の僧佉人あつて是の說をなして言ふ、身相の形色と及び四大聚の諸根と諸根聚の諸識等とを我となすと。

論者言ふ、汝は四大と諸根と陰相とに於て、若しくは總に若しくは別に我分別を起すは、この事然らず。論偈に說くが如し、

(一)[三]若し我が是れ陰相ならば　卽ちこれ起盡の法なり。
　我若し諸陰に異らば　これ則ち陰相に非ず。

釋して曰く、我はこれ世諦の義なり。言說を起して稱して『我』と云ふも陰を以て境となすなり。僧佉人また言ふ、[四]陰ある處に隨つて我の義成ずることを得。卽ち是れ我が所立の義成ずることを得るなり。

論者言ふ、汝の意の如きは我がこれ諸陰なり。若し我がこれ陰ならば卽ち起盡の法なり。此の中に[五]驗を說く。『第一義中には四大と及び造色の聚なる諸根と諸根の聚なる諸識と及び識身等とは我に非ず。これ起盡の法なるが故なり。譬へば外の四大等の如し』。「果なるが故に」、「因なるが故に」、「可識の境界なるが故に」、また「果報なるが故に」との、これ等の因を以て廣く爲めに驗を作

【一】　以上本品の主題を述ぶ。衆生が如何にあるかの問題に對して、有るものは唯五陰の法にして我無しと云ふ、佛敎の哲學的立場を明す。本論中重要な一章なり。
【二】　數論派の說の批評一。
【三】　若我是陰相　卽是起盡法
　我若異諸陰　是則非陰相
我(ātman)は人我、陰は五蘊にして我に對する法なり。本品は先づ法に依つて人我を否定し、次に緣起に依つて法有を否定して實相の義を明かす。有部の人無我法有の立場と大乘の人法二無我の立場とを同時に顯はす。第二句「起盡法」は、起盡は生滅と同じく、「法」は此の場合譯者の附加語にして單に「起盡のもの」と言ふと同じ。
【四】　數論派の說の批評二。五陰卽我なりと云ふを難ず。
【五】　驗は「量」にして、宗因喩の形を整へたる論證式なり。

偈に說くが如し、「諸佛はここを以ての故に心を廻らして法を說かず。佛の解する所の深法は衆生入ること能はず」と。何となれば、第一義中には空執あること無し。若し空と言はば、これ相に執着するなり。遮見中の如きは已に邊等の四見を遮す。若し有邊と說かば則ち後世なし。若し無邊と說くもまた後世なし。何となれば、第一義中には諸法空なるが故なり。偈に說くが如し、「何處に何の因緣にて何人か諸見を起さん」と。若し見の起るありと言ふは然らず。遮合中に言ふが如し、「物果は緣の合と不合とより生ぜず。果なきを以ての故に合法もまた無し」と。遮成壞の如きは「有體より體を生ぜず、また無體を生ぜず。無體より體を生ぜず、また無體を生ぜず」と。また三時に相續あること無しと破す。これ等の義を以て應に知るべし、遮縛解の如きも（縛解に）自體あること無し。衆生の陰界諸入に往來するもの無きを以て、五種に推求するも往來者なし。ここを以ての故に第一義中には生死を離れて外に別に涅槃ありと說かず。〔四九〕寶勝經の偈に言ふが如し、「涅槃卽ち生死にして、生死卽ち涅槃なり。實相の義は是の如し。云何んが分別あらん」と。遮有無中の如きは已に諸法の若しくは有若しくは無を遮したり。若し有る人、有を見、無を見、自他の性を見ると言はば、これ則ち眞實道理を見ざるなり。金光明善女經に說くが如し、「無明の體相は本自ら有ならず。妄想因緣の和合よりして生ず。善女よ、當に諸法を觀ずること是の如くなるべし」と。何處に人と及び衆生と有らん。本性空寂にして所有なきが故なり。

〔四九〕寶勝經の偈として引用せる文は羅什譯中論の縛解品に於ける末文に相當す。以て此の品末の文が如何に杜撰なるかを察すべし。

何となれば、決定の業は無作なればなり。この業無作ならば刀自ら割かず、指自ら觸れざるが如し。ここを以ての故に定なる作者は作ること無し。作者もまた業なし。かくの如く先、後、倶等は不可得なるが故なり。また次に、「若し作等の法なくんば則ち罪福あること無し」。罪福等なきが故に罪福の果報もまた無し。若し罪福の果報なくんばまた涅槃なし。この義を以ての故に、世諦中に於ては諸業ありと說くも第一義には非ず。夢の所見の如くにして中に於て妄りに憂喜を生ずべからず。幻所作の如くにして實體なし。乾闥婆城日出の時に現れ、但だ人眼を誑して所有なきが如し。

佛、諸の比丘に「生死の無際」を告ぐるが如きは、諸の凡夫人正法を解せざるが故に、爲めに生死の長遠を說くなり。また佛、諸の比丘に言ふが如きは、「生死を盡さんと欲する爲めの故に隨順して行ずべし」と。また[四八]無上依經に說くが如きは、佛は世間の亂慧、無因、惡因の諍論に住する者を憐愍するが爲めの故に、世諦中に於て「諸法あり、我あり、人あり、衆生あり、命者あり」と說けり。また次に、佛婆伽婆は彼の衆生生死相續して未だ對治を起さざるを見るが故に、生死の長遠を說く。何となれば、彼の生死の際を盡さんと欲する爲めの故に衆生を勤精進に建立す。善く觀察すれば彼の生死と及び涅槃とは少差別の得べき無きを了す。ここを以ての故に生死あること無くまた涅槃なし。

また觀緣中に說くが如し、「この作は緣中に無く、非緣中にもまた無し」と。かの中に作の不可得なるを遮せるが故にまた緣と合せずして而も作ありと言ふは然らず。觀三相中の如きは已に生を遮せるが故に「若し生等成ぜずんば則ち彼の有爲なるもの無し。有爲法なきが故に何ぞ無爲なるもの有ることを得ん」と。また去と去者とを遮せるが如し。若し去法卽ちこれ去者なりと謂はば、作者と作業はこれ卽ち一となす。若し去法が去者に異なりと言はば則ち去者を離れて去法あり、また去法を離れて去者あり、二つ倶に過あり。觀聖諦にまた第一義中の空無體の義を說くが如し。かの

【四八】無上依經の說として引用せる文は本論第一卷觀緣品の釋文なり。

しと解せしむるが故なり。此の品の初めに外人の所說に過を與へたり。而して業果の無自體の義を以て衆生をして解せしめたり。これ品の義意なり。

[四七]ここを以ての故に梵王所問經に說けるが如し、「佛は梵王に告ぐ、若し業なく果なくんば卽ちこれ菩提なり」と。かくの如く菩提は業なく果なし。菩提を得る者もまた業なく果なし。かの授記を得るものと、及び聖種性ともまたまた是の如し。若し業なく業報なくんば彼の聖種性もまた身口等の業を起すこと能はず。

また次に、觀緣品中に說くが如し、「有らゆる諸物體は皆自性あること無し」と。已に眼等はこれ異處に非ず、及び自在等有るに(非ずと)遮したり。何となれば、眼等は赤白の衆緣より起らず。衆緣もまた眼入等を生ずること能はざればなり。また觀本際品の如きは已に生死の本際を遮したり。無自體なるが故なり。第二頭なきとき、第二頭の眼に病ありと說くべからざるが如し。觀行品の偈に說くが如し、「大聖が空義を說けるは諸見を離れしめんが故なり。若しまた空ありと執すれば諸佛の化せざる所なり」と。これ已に諸見と及び無明等の煩惱を遮せるが故に空と說く。若しまた空を執すれば云何んが化すべけん。また水を以て火を救ふが如し。若し水中に火の起るあらば則ち救ふべからざるなり。觀苦中の如きは已に苦の四義成ぜざるを遮し、また外の萬物の四義成ぜざるを遮したり。何となれば、「苦は自作と名づけず。法は自ら法を作らず。無自體なるを以ての故に何ぞ人あつて苦を作らん」と。若し「我法あり、各々異相なり」と說かば、當に知るべし是の人は法味を得ず。若し「諸法のこれ善、これ不善、これ無記、これ有漏無漏、有爲無爲等の別異」を言はば、この人は甚深寂滅法中に於て義利なしとなす。本住中の如きは、已に本住の不可得なるを遮せるが故に、また三世を遮して戲論分別あること無し。ここを以ての故に諸法則ち空なり。作作者中に說くが如し、「決定有なる作者は決定の業を作さず、決定無なる作者は無定の業を作さず」と。

【四七】以下上來の所說を中論諸品の說によつて證し、又經證として、梵王所問經、無上依經、寶勝經、金光明善女經を引く。但し西藏譯は最初の梵王所問經よりの引證文(觀誓の廣疏によれば、この引證文は大寶積經迦葉會の一節なりと。)を以て本品を終る。以下の引用文中、觀行品、觀苦品、觀本住品、觀作々者品、觀三相品、觀去來品、觀有無品等よりのものは、羅什譯の中論より取り來りしもの、從つてその文體譯語共に他の部分と相違せるのみならず、之等の文は本品に取り特にその必要を見ず。仍りて惟ふに漢譯に於ける此の品末の部分は後人が中論の備忘錄として記し置きしもの、それが遂に本文中に竄入せしならん。

くの如く、身口の業等の所作の事は實あること無しと雖も、而も眼見すべし。應に是の如く知るべし。煩惱とは名づけて三毒、九結、十纒、九十八使等となし、能く身業、口業、意業を起す。今世、後世の善、不善、無記なる苦報、樂報、不苦不樂報を分別し、及び現報、生報、後報等を起すの、是の如き諸業は一一皆空なり。設ひ所作あるもまた無自體なり。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

(三三)[四五]業と煩惱ともまた爾り、　作者と及び果報(も爾り)。
乾闥婆城の如く　幻の如く、また焰の如し。

釋して曰く、これ謂く、業等は因緣和合より生じて幻化の如く實なく、但だ眼見すべきのみ。これ世諦中に有なるも、第一義には非ず。また次に、善趣を得んと欲し及び涅槃を得んと欲するは、またこれ世諦の所說なり。汝「我れ業果を撥無するはこれ邪見の過なり」と謂ふが如きは、過もまた無體なり。

阿毗曇人言ふ、彼れ世諦中に於ては一切法あることを得んと欲すと雖も、而も第一義中に於て一切法なしと誹謗するは、還つて過を免れず。

論者言ふ、經中の偈に說くが如し、「[四六]有體既に成ぜざれば無體もまた成ぜず」と。また經の偈に說くが如し。「有はこれ常見、無はこれ斷見なり。この故に有と及び無とに智者は依るべからず」と。汝「業果を撥無す」と言ふも我れは爾るを欲せず。こゝを以ての故に汝先に「我れ過を免れず」と謂へるは、我れに此の過なし。また次に、汝第一義中には諸體は無自體なり、業と果と、及び業果の合と、作者と及び受者と皆空にして無體なるを聞きて、而して「虛しく梵行に住して空にして獲る所なし」と謂ふはこれ愚癡心なり。愚癡の障を開發せんと欲する爲めの故に、業等の有を以て物(人)をして解せしむ。云何んが解せしむるや。謂く佛の神通力を以て化佛等の事を現作するが如

【四五】業煩惱亦爾　作者及果報　如乾闥婆城　如幻亦如焰
梵文には「業と煩惱と作者と果報」との他に身體(deha)の語を加ふ。什譯も之を省けり。

【四六】有體既不成　無體亦不成
本論に於ては此の二句を以て經中の偈となせども、これ炳かに觀有無品第十五に於ける第五偈の前半「有若不成者、無云何可成」(什譯)の異譯なり。次にまた經の偈として「有者是常見、無者是斷見、是故有及無、智者不應依」といふ譯文を出せども、此の偈が觀有無品の第十偈の別譯なること疑を容れず。(本國譯中觀部一、一〇一頁並に附錄對照二五頁參照)。

(二九)[四一]業は緣より生ぜず、　非緣よりも生ぜず。
業は無自體なるを以て　また業を起す者なし。

釋して曰く、これ謂く、業等は無起なり。業に三種あり。一には謂く業、二には謂く果報、三には謂く受果の者なり。今推求するに業は無起なるが故に作者もまた無起なり。作と及び作者とは先に皆已に遮して實體あること無し。我が所說の如き、業なく及び作者なきの方便は其の義云何ん。論偈に說くが如し、

(三〇)[四二]業なく作者なくば、　何ぞ業より生ずる果あらん。
既に此の果あること無し、　何ぞ果を受くる者あらん。

釋して曰く、ここを以ての故に汝「第一義中に業あり、果を受くる者あり」と言ふは其の義成ぜず、また汝の義に違す。云何んが違するや。謂く翻つて世諦を以て物(人)をして解せしむるが故なり。

阿毘曇人言ふ、業なく果なしと撥するは、これ邪見の過にして、能く慧眼を障ふ。彼れ「中論はこれ眞實の見なり」と說くは然らず。

論者言ふ、汝の語は非なり。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

(三一)[四三]佛の神通力にて　化佛の身を現作し、
是の須臾の間に於て　化身よりまた化を起すが如し。

(三二)[四四]此の初めの化身の佛を　而も名づけて作者となし、
化佛の所作を　是れ即ち名づけて業となす。

釋して曰く、これ謂く、作者は化と相似す。展轉して緣より起り、我體あること無きが故なり。而して此の所作の業はまた化人の如く自體あること無し。譬ふれば化佛よりまた化を起すが如し。か

【四一】業不從緣生　不從非緣生
以業無自體　亦無起業者
第三句の「以業無自體」は此の漢譯の補足なり。梵文には單に「それ故に」とあり。此の場合漢譯の原典に相應の句ありしと考ふるは然らず。其れを加ふるときは梵偈の字數を超過す。

【四二】無業無作者　何有業生果
既無有此果　何有受果者
什譯、梵文と全く一致す。

【四三】如佛神通力　現作化佛身
於是須臾間　化身復起化
第二句「化佛身」(nirmitaka)は單に「化人」と解してよし。必ずしも佛とするに及ばず。次偈も同じ。之を除けば什譯、梵文と全く一致す。但し「須臾間」も漢譯の補足なり。

【四四】此初化身佛　而名爲作者
化佛之所作　是即名爲業

釋して曰く、何處に說けるや。謂く諸論中に諸賢聖等は世諦に約して說けり。若し第一義中に於て觀察すればこれ皆然らず。我が宗中の如きは先に已に方便を說けるが故なり。これ謂く、諸法の上、中、下、貴賤、好醜等の種種の果報は自體あること無し。業及び煩惱の無自體を說くが如くに身もまた無自體なり。ここを以ての故に「煩惱を業の因となし、業を身の因となす」とは、これ皆然らず。所說の過は今還つて汝に在り、所立と譬喩と皆また成ぜず。

また次に、阿毗曇人言ふ、第一義中にかくの如き業あり。果を受くる者あるが故なり。これ若し無くば則ち彼の受者なし。譬ふれば虛空華鬘の如し。今「業あるが故に果を受くる者あり」とは其の義云何ん。故に論偈に言ふ、

(二八)[三九]無明の爲めに覆はれ　愛結の爲めに繫せらるるも、
　而も本の作者に於て　不一にしてまた不異なり。

釋して曰く、「明」の所治を名づけて「無明」となす。「覆」とは謂く慧眼を翳障するなり。[四〇]（云何んが名となすや。名とは謂く衆生なり。）何故に衆生と名づくるや。謂く有情は數數生ずるが故なり。云何んが「愛」と名づくるや。愛とは謂く貪著なり。著は卽ちこれ「結」なり。誰のために結をなすや。謂く衆生を繫するなり。云何んが「繫」と名づくるや。謂く貪等と相應するが故なり。無始經中の所說の如し、「衆生は無明の爲めに覆はれ、愛結に繫せられ、無始より生死中に往來して種種の苦樂を受く。かくの如く、諸の衆生等は自ら惡不善業を作し、還つて自ら不善の果報を受く。」此の業果を受くる者は卽ちこれ我が所欲にては、作者たるを得。然も此の作者と一異を說くべからざるが故なり。ここに果を受くる者あり、第一義中に彼の業あるによるが故なり。

論者言ふ、汝の所說は義皆然らず。此の論の初めより已來、一切諸法を皆已に觀察せり。緣より起れる果あること無く、また緣より起らざる果なし。ここを以ての故に其の義は論偈に說くが如し、

【三九】爲無明所覆　爲愛結所繫
　而於本作者　不一亦不異
什譯と一致するも梵文と異る。梵文の前二句は「無明に覆はれたる衆生は渴愛を結縛とす。彼れはすゝ者（業の果を受くる者）なり」とあり、「衆生」と「受者」の二語を漢譯は省略す。次の長行を見れば原文には此の二語存在せしこと明かなり。

【四〇】云何爲名名謂衆生。此の一句何故に此處に置かれしや不明。全く冗句なり。西藏譯になし。

無始經中の所說として引證せる一節は、雜阿含第十に於ける左の教說と一致す（大正大藏第二卷六九頁）。「衆生無明所蓋、愛結所繫、衆生長夜生死輪廻、愛結不斷、不盡苦際、」巴利雜部第三卷一五〇頁に同文出づ。

論者言ふ、此の語は善ならず。論偈に說くが如し、

(二六)煩惱が若し業の性ならば、　彼れ(煩惱)は卽ち無自體なり。
　若し煩惱が非實ならば　何ぞ業の是れ實なるもの有らん。

釋して曰く、「性」とは謂く因なり。これは「煩惱これ業の因」と說くなり。譬ふれば泥を瓶の體となすが如し。かくの如く煩惱を業の體となす。云何んが「非實」なるや。謂く煩惱は無自體なるが故なり。云何んが無自體なるや。謂く先に觀察せる所にて已に起法を遮し、また諸體の有自體を遮したり。これ謂く、煩惱はこれ業の因に非ざるなり。ここを以ての故に因の義成ぜず。及び汝の義に違す。云何んが違するや。謂く世諦中に於ては煩惱を以て業因となすも、第一義には非ず。この故に違すと言ふ。また次に、(三七)先の觀煩惱品中の偈に說けるが如し、「愛非愛顚倒を而も所起の緣となす。彼れ(愛非愛顚倒)既に無自體なり。故に煩惱は非實なり」と。先に已に廣く遮せるが故なり。

阿毗曇人言ふ、第一義中に是の如き煩惱あり。果あるを以ての故なり。(煩惱)無くして果を受くるに非ず。譬ふれば聾者の耳根の果と及び耳識との如し。今此の煩惱の果あり。云何んが果と名づくるや。果とは謂く業なり。かくの如く第一義中に煩惱あるが故に因の義成ぜざるに非ず。また義に違するに非ず。我が所欲の義の如きは成ずることを得。また次に、業あり。果あるを以ての故なり。無なること虛空華の如きに非ず。業果なる是の身あるによつて、無業にして果あるに非ず。この義を以ての故に當に知るべし、業ありと。

論者言ふ、この義は非なり。汝は不正の思惟、邪見に惱まされ、虛妄分別してこの說をなすのみ。その過は論偈に說くが如し、

(二七)業と及び煩惱とを說いて　而も諸身の因となす。
　業煩惱は自ら空なり、　身は何に從つて所有あらん。

【三六】煩惱若業性　彼卽無自體
　若煩惱非實　何有業是實
「煩惱若業性」とは「業が煩惱を性とする」の意なり。此の場合「性」はātmaka の譯にて「自體とする」の意。什譯の「業は煩惱より生ず」は意譯なり。
又第二句「彼卽無自體」の「無自體」は梵文では tattvatas (如實的、眞實的)の語が用ひられ、次句の「非實」と同じ。

【三七】先の觀煩惱品とは觀顚倒品第二十三をさす。今第十七品に於て後の第二十三品の偈頌を指すに「先の」といひ、觀顚倒品を觀煩惱品と呼ぶが如きは、亂暴も極れりと謂ふ可し。しかも本品所引の偈は「愛非愛顚倒、而爲所起緣、彼既無自體、故煩惱非實、」と譯されをるも、觀顚倒品に於ける第二偈は「愛非愛顚倒、皆從此緣起、我無自體故、煩惱亦非實、」と翻ぜられ、譯語の上にも多少の相違を示す。

【三八】說業及煩惱　而爲諸身因
　業煩惱自空　身從何所有
第二句「諸身の因」の「因」は梵文によれば「緣」なり。什譯は「因緣」とす。

釋して曰く、「梵」とは謂く涅槃なり。若し涅槃の行を行ずれば、名づけて梵行となす。此の行に住するを「梵行に住す」と名づけ、此れに翻ずるを「梵行に住せず」と名づく。何等かこれ「梵行に住す」るや。謂く善業を作し已つて而して涅槃を得るを、梵行に住すと名づく。何等かこれ「非梵行に住す」るや。謂く善業を作さゞるを非梵行に住すと名づく。若し此の業を作さずして自ら涅槃を得れば、一切の非梵行を行ずる人は皆涅槃を得べし。獨り梵行を行ずる者のみ涅槃を得るに非ず。かくの如き過咎あり。然も世諦に於て瓶を作り絹を作る等にも亦この過あり。其の過は論偈に說くが如し、

（二四）[三三]一切世俗の　有らゆる言語の法を破し、
作善と及び作惡とも　また差別あること無からん。

釋して曰く、これ謂く、世間に「彼れはこれ罪を造れる衆生、彼れはこれ福を造れる衆生」と言ふが如きは然らず。汝は「罪福を作さずして自然に得」と言ふを以ての故なり。その過云何ん。論偈に說くが如し、

（二五）[三四]業の住あるを以ての故に　而も不失と名づくれば、
また應に果を與へ已つて　今また更に果を與ふべし。

釋して曰く、「住」とは云何ん。謂く自體在るが故なり。更に「果を與ふ」とは業の住するによるが故に、作者に果を與へ已ると雖も、劵の在るあらば、已償の債を重ねて償ふを須ふるが如きが故なり。業も亦かくの如く體の在るあるによつて還た果を與ふることを得ん。

[三五]阿毗曇人また言ふ、第一義中に是の如き諸業あり。彼れの因あるが故なり。此の業若し無くして而も因あるは然らず。譬ふれば龜毛の衣の如し。今業の因あり。謂く諸の煩惱なり。この故に所說の因の如く第一義中に定んで諸業あり。

【三三】破一切世俗　所有言語法　作善及作惡　亦無有差別　什譯、梵文と合致す。「作善作惡」は什譯にては「作罪作福」とす。原語より見て什譯の方よし。

【三四】以有業住故　而名不失者　亦應與果已　今復更與果　「住」は vyavasthita の譯にして「決定」の意なり。又「不失」は梵文では此の場合「有自性（svabhāvika）」の意なり。されば什譯の「若言業決定、而自有性者」の方が梵文とよく合す。

【三五】以下有部の惑業果の緣起說を批評す。

り。汝先に「種性別なるが故に」と說いて因となせるは因の義成ぜず。心及び心數法の相續あつて起ること別なきによるが故なり。また汝の出因は一向に非ずして別の過あり。云何んが一向に非ざるや。今現見するに別の相續あつて能く別の果を起す。云何んが知るや。牛毛より莞を生じ、角より設羅を生ずるが如し。（荻に似て堅中なり。陸地に生ず。突厥の西胡は用ひて箭笴となす。爾雅に簛と云ふ。堅中蓋竹の類なり）。

正量部の人言ふ、阿含經中に佛は是の如く說く、「不失法あり」と。此の法を以ての故に不斷不常にして諸體成ずることを得。彼れ「業は不起なるを以て不失法もまた不起なり」と言ひて出因となし、而も「我が因の義成ぜず」と道ふは、此の語然らず。

論者言ふ、佛所說の如きは「若し無起ならば彼れ即ち無壞なり」と。汝今此の義を受くることを得んと欲すれば、我が所欲を成就す。然も汝の宗中には此の法を受けざるが故に、若し汝自の宗義を立てて「無起無壞」と謂ふも、其の義成ぜず。

また次に、汝は「諸法は自體あり」と立つるも、決定して應に業の無自體を受くべし。若し諸法は自體あらば即ち過ありとなす。其過云何ん。論偈に說くが如し、

(三二)業若し自體あらば、　是れ即ち名づけて常となす。
　而して業は是れ無作なり、　常法は無作なるが故に。

釋して曰く、これ謂く、自體あらば即ちこれ常となす。若し常ならば即ちこれ業を作すべからず。何となれば、常法は作すべからざるが故なり。また變壞の相なからん。

また次に、若し業これ無作ならば何の過ありや。その過は論偈に說くが如し、

(三三)若し業これ無作ならば、　無作ならば應に自ら來るべし。
　非梵行の罪に住するも、　今應に涅槃を得べし。

【三二】業若有自體　是卽名爲常
　而業是無作　常法無作故
梵文の殆ど直譯なり。什譯も略々同じ。「無作」は「無所作」の義なり。

【三三】若業是無作　無作應自來
　住非梵行罪　今應得涅槃
第二句「無作ならば應に自ら來るべし」は梵文に「作されずして來る怖れあらん」とあるを意譯せるものなれど、疑問あり。此の場合の怖れ(bhaya)は「誤謬」の意に非ずして寧ろ「怖畏」の義なり。されば「惡業を作さずしても怖畏の來るあり」の意にも解さる。羅什は此の義に解して「不作にして罪有り」と譯せり。

死なり。生死とは謂く、諸行が種種の趣に於て流轉するが故に名づけて生死となす。云何んが「不常」なる。業は壞あるが故なり。云何んが「不失法」と名づくるや。謂く佛は處處の經中に於て說けり。此の分別をなすは應に爾るべし。ここを以ての故に我れ先に「業は果と合す」と說きて出因となせるが如きは、義成ぜざるに非ず。[二九]

論者言ふ、汝の所說はこれ皆然らず。今汝の爲めに正しき業の因緣を說かん。其の義云何ん。論偈に說くが如し、

(三一)[三〇]業は本より不生なり、　無自性なるを以ての故なり。
　業は本より不滅なり、　其の不生なるを以ての故なり。

釋して曰く、我が宗中には業に生あることなし。かくの如く種子の相續は第一義中にはまた生あること無し。この故に汝の所立の譬喩は無體にして、譬喩を闕くの過あり。諸業は云何んが不生なるや。無自性なるを以て是の故に不生なり。

今且く正量部の人「種子に相續あるは過なり」と說けるに答へん。汝「業と果と合するありて斷常の過なし」と謂ふは、云何んが過なきや。謂く「不失法の在るあるに由る」と。我れ今推求するに畢竟無なるが故に、上の偈に業は本より不生と說けるが如く、この不失法は第一義中にはまた成ぜず。若し業の生あらば、業の爲めの故に不失法あるべし。業は既に無體なれば不失法もまた無體なり。因成ぜざるが故に汝の義は宗に違す。云何んが違するや。謂く「業と果と合す」とは、翻つて世諦を成じて物(衆生)をして解せしむるが故なり。汝前に「阿毗曇人は種子相續の過あり」と謂へる如きは、此の義然らず。阿毗曇人先に「種子相續の譬喩」を作せるが如きは何の意ありや。今汝の爲めに說かん。此の阿毗曇人は是の如き意あり。謂く種子より相續して展轉に因果隨ひ起つて壞せざるが故なり。而して種子より相續して「不斷不常なる」を以て喩となすは是の如きを得んと欲するな

【二九】以上正量部の不失法の說を擧ぐ。以下その批評。

【三〇】業從本不生　以無自性故
業從本不滅　以其不生故
什譯、梵文とよく一致す。

〔一八〕かくの如き二種の業は　現在に果報を受く。
　或は報を受け已つて　此の業は猶ほ故のごとくに在りと言ふ、

釋して曰く、二業とは謂く、思と及び思より生ずるとなり。或は有る人言ふ、業は報を受け已つて而も業猶ほ在るは念念滅ならざるを以ての故なり。また前の如く無量種の差別を説けるは、また一一の(業)に一の不失法あつて起り、持するが故なり。何故に不失法は果を與へ已つて猶ほ在り、而も更に數數果を與へざるや。謂く已に果を與ふるが故なり。已了の劵の如し。已に財を還へし訖れば縱ひ劵の在るあるも更にまた得ず。不失法もまた是の如し。已に果を與ふるが故に更に數數果を得ず。此の不失法は何時に於て滅するや。故に論偈に言ふ、

〔一九〕度果と及び命終との　此の時に至つて滅す。
　有漏と無漏等の　差別は應に知るべし。

釋して曰く、これ謂く、修道の時に斷ずるは前の命終の時の如し。相似不相似の業に共に一の不失法あつて持することこれなり。須陀洹等は度果し已つて滅し、阿羅漢及び凡夫人は死し已つて滅するが如し。此の不失法にまた差別あり。云何んが差別ありや。漏と無漏業との別によるが故に不失法にもまた漏と無漏とあり。彼れは是の如きが故に不失法はまた種種の業より起つて能く衆生をして方土を受け、趣を受け、色を受け、形を受け、信を受け、戒を受くる等の差別の果を(受け)しめ、果を與へ已つて然る後に方に滅す。ここを以ての故に其の義云何ん。故に論偈に言ふ、

〔二〇〕空なりと雖も而も斷ならず、　有なりと雖も而も常ならず。
　諸業の不失法は　此の法は佛の所説なり。

釋して曰く、「空」とは誰の空なりや。謂く諸行の空なり。外道の所分別の如き有自性の法は無きなり。而も業の「不斷」なるは不失法の在るあるが故なり。云何んが「有」となすや。有とは謂く生

【一八】如是二種業　現在受果報
　或言受報已　此業猶故在
什譯と一致すれど梵文と異る所あり。梵文は「業の一々に對して現在に於て彼の法は生じ、又一切の二種の業の異熟せるときにも住す」とあり、此の「彼法」はやはり不失法をさすと見るべく、偈意を更に解り易くすれば「一切の二種の業の不失法は一々の業の現在するときに生じ、業の異熟するときにも住す」となる。斯く「不失法」を意味すべき「彼の法」の語を果報を意味するものと解せる所より此の漢譯は生ぜしなり。

【一九】度果及命終　至此時而滅
　有漏無漏等　差別者應知
什譯、梵文とよく一致す。

【二〇】雖空而不斷　雖有而不常
　諸業不失法　此法佛所說
什譯、梵文とよく一致す。不失法の説は業果相續して不常不斷なる義を可能にすと云ふ。

是の不失法を以て　　　諸業に果報あり。

釋して曰く、これ謂く、苦集滅を見る道の斷ぜざる所なり。何時に斷ずるや。謂く修道進んで後果に向ふ時に斷ず。また次に、見苦所斷の不善業は斷ずと雖も、此の不失法あるによつて見苦の時に斷ぜざるは、これ不失法能く果を與ふるが故なり。目犍連外道の辱めを被り、離波多比丘の梵摩達王に十二年の禁を被れるが如し。目犍連等は聖果を獲と雖も不失法の在るによるが故に、宿の不善業の報を受けたり。故に論偈に言ふ、

(二六)[二四]若し見道の所斷にして　彼の業も相似するに至らば、
則ち業を壞する等の　　かくの如きの過咎を得。

釋して曰く、此の不失法は若しくは見道の爲めに斷ぜられ、若しくは業と共に俱に後世に至らばこれ則ち過あり。何の過ありや。若し不失法が同じく見道所斷にして隨眠、煩惱、業もまた俱に斷ずれば、即ち業の果を壞す。何等の果を壞するや。謂く見道所斷の不善業の果を壞す。この義應に知るべし、修道に若し斷ぜずんば聖人も應に具足して凡夫の業あるべし。ここを以ての故に煩惱と業とは見道の斷となし、不失法は見道の斷となさず。この故に「業は見道に斷ずるが如く、不失法は修道進んで後果に向ふ時に斷ず」と言へり。彼れ(不失法)は欲界を渡つて色界に向ふ時、色界を度つて無色界に向ふ時に斷ずることもまた是の如し。故に論偈に言ふ、

(二七)[二五]一切諸の行業は　　相似なるも不相似なるも、
現在の未だ終らざる時に　一業より一法起る。

釋して曰く、「相似」とは謂く「同類」の業なり。現在の命終の時に於て一の不失法あつて起り、總じて諸業を持す。不相似とは謂く業の種々の差別なり。欲界の業、色界の業、無色界の業の如く、無量の種あり。また次に、幾種の業あつて不失法の爲めに持せらるるや。故に論偈に言ふ、

【二四】若見道所斷　彼業至相似　則得壞業等　如是之過咎
偈全體の主語は不失法にして、第二句「彼業至相似」とは、「不失法が見道所斷にして、業も其れと同じく見道所斷ならば」の意なり。

【二五】一切諸行業　相似不相似　現在未終時　一業一法起
第四句の「一業より一法起る」は梵文によれば「凡ての業の結合するとき、彼れは一つ起る」とあり、其の「彼一」は前後の關係より不失法をさすと見るが妥當なり。什譯は之等の果報と解して「報獨生」とす。又「一業より一法起る」と言へば一々の業に對應して不失法を生ずることゝなるが、その解釋は次の偈より見れば誤りに非ず。

に已に總じて破せるが如きが故なり。
作善者あるはこれまた然らず。我れ今當に業と果報とに順ずる正分別の義を說くべし。これ何の分別なるや。前の分別の如き「種子より相續し相似す」とは、我が所說の如きは彼の過なきが故に、過垢は染することを能はず。何等を說くや。謂く正分別の義を說くなり。これ誰か說けるや。阿含經中の偈に言ふが如し、

(二三)諸佛と及び緣覺　聲聞等の所說にして、
　一切の諸聖衆の、　共に分別する所のものなり。

何等を分別するや。故に論偈に言ふ、

(二四)不失の法は券の如く　業は負財物の如し。
　而してこれ無記性にして　界に約すれば四種あり。

釋して曰く、これ謂く、不失の法あり。債主に券ありて主は財を與ふと雖も而も散失せずして後時に至つて子と本と俱に得るが如くに、業もまた是の如くに能く後果を得す。業は已に壞すと雖も、不失法の在るあるに由つて、能く行人をして勝果報を得せしむ。また債主旣に財を得已れば負債人の前に於て其の本券を毀つが如く、是の如く是の如くに、不失法は能く造業者に果を與へ已れば其の體また壞す。

不失法は幾種ありや。界に約すれば四あり。云何んが四となすや。謂く欲界、色界、無色界、及び無漏界なり。不失法はこれ何の性なるや。これ無覆無記の性なり。無覆とはまた不隱沒と名づく。無記とは此れ謂く、善、不善を說かざるが故に名づけて無記となす。此の不失法は何の道の所斷なりや。故に論偈に言ふ、

(二五)見道の爲めには斷ぜられず、　而してこれ修道の斷なり。

【二三】諸佛及緣覺　聲聞等所說
　一切諸聖衆　所共分別者
此の偈を此處に阿含中の偈とするも、實は中論本頌なり。本品註二參照。

【二四】不失法如券　業如負財物
　而是無記性　約界有四種
梵文と全く一致す。什譯は第四句の「界に約すれば」を「分別すれば」とす。又「負財物」は「借り物」に非ずして「貸し物」なり。業を作すは業を貸し置くにて其の代り不失法なる債券を自己の中に持ち、時至りて、其の券によりて業の果報の返却を受くと言ふなり。不失法は業果媒介の原理として假定されるものにして有部の無表業の考へに相當す。

【二五】不爲見道斷　而是修道斷
　以是不失法　諸業有果報
什譯、梵文と一致す。「修道」を什譯では「思惟」とす。元來修の原語 bhāvanā は分別、思惟、觀察を意味す。
本偈後半二句の例として釋文中に目犍連が外道に辱かしめられしこと及び離波多比丘が梵摩達王に禁錮せられしことを擧ぐるも、西藏譯には之を缺けり。

釋して曰く、ここを以ての故に佛は此の得果の方便ありと說けり。所說の如きは、その義成ずることを得。

論者言ふ、汝「業果に相續あるが故に」と說き、而して種子を以て喩となすは則ち大過あり。論偈に說くが如し、

(二一)〔一九〕此の分別を作さば　大なる、及び多なる過を得。
是の汝の所說の如きは　義に於て則ち然らず。

釋して曰く、云何んが然らざるや。これ謂く、汝の向の分別の如き「種子より相續し相似する法體あり」とは然らず。何となれば、種子は有形、有色、有對にしてこれ可見の法なれども、相續あるを得(といふを)今思惟するに是の事すら尙不可得なり。何ぞ況や心と業との無形、無色、無對、不可見にして刹那刹那に生滅して住せざるものをや。ために驗を爲らんと欲するも、この驗は成ぜず。また種より芽に至るとは、滅し已つて相續して芽に至るとなすや、滅せずして相續して芽に至るとなすや。若し滅し已つて芽に至らば芽は則ち無因なり。若し滅せずして芽に至らば應に初めの種子より常に芽を生ずべし。若し爾らば一種子中に則ち一切の衆芽を生ぜん。この事然らず。大過あるが故なり。

〔二〇〕正量部の人は阿毗曇人に謂つて言ふ、汝の所說の如き「人の相續より能く天等の相續を起す業あり」とは、この義然らず。何となれば、種性別なるが故なり。譬ふれば荏婆の(種)子より菴羅の果等を生ぜざるが如し。若し善心より次第に能く善、不善、無記の心を起し、無記心より次第に能く善、不善の心を起し、不善心より次第に能く善、無記の心を記すは義皆然らず。乃至、欲界繫の心より次第に能く色界、無色界繫の心を起し、及び無漏心を起し、無漏心よりまた展轉して欲界、色界、無色界繫の心を起すは、また上に芽の起を說けるが如くに今悉く然らず。前の所立の驗中

にして、直前の長行と共に潤文家の添附に係るものなること疑を容れず。

〔一九〕作此分別者　得大及多過　是如汝所說　於義則不然
梵文、什譯と全く同じ。

〔二〇〕以下正量部說の批評。

釋して曰く、これ謂く、慈心と不慈心とを名づけて業となす。この心は滅すと雖も而も相續起る。この相續より果起るとは謂く愛非愛なり。受想あるが故なり。若し心を離るれば果は則ち起らず。今當に相續の法を說くべし。その義云何ん。故に論偈に言ふ、

(一〇)心[一五]より相續あり、　相續より果あり、
故に業は果より先に在りて、　不斷にしてまた不常なり。

釋して曰く、云何んが不斷なるや。謂く相續より能く果を起すが故なり。云何んが不常なるや。第二の刹那に至るまで住せざるが故なり。此の中に驗を作る。「第一義中に是の如き業果ありて、衆生、名字、諸行と合す。諸有の勝果を得んと欲する衆生に、如來は爲めに果を得るの方便を說けるが故なり。これ若し無くば如來は樂果を得るの方便を說かざらん。譬ふれば虛空華鬘の如し」。今方便ありと說くはその義云何ん。故に論偈に言ふ、

(一一)法[一六]を求むる方便は、　謂く十白業道なり。
勝れたる欲樂の五種を、　現未の二世に得す。

釋して曰く、「法」とは謂く果法なり。「方便」とは謂く果法を得るの因なり。「因」とは謂く白業なり。「果」とは謂く現在未來に得する五欲の樂なり。何等の果を得するや。謂く[一七]報果と依果とを得す。「白」とは謂く善淨なり。能く福德を成就する因緣はこの十白業道より生ず。十とは謂く不殺、不盜、不邪行、不妄語、不兩舌、不惡口、不無益語、不嫉、不恚、不邪見等を十白業と名づけ、また十善業道と名づく。皆身口意より生ず。云何んが「勝果」と名づくるや。謂く人天の趣中に於て最勝の人天を得するなり。その義云何ん。故に論偈に言ふ、

[一八]人能く心を降伏し　衆生を利益すれば、
これを名づけて慈善となす、　二世の果報を得す。

【一五】從心有相續　從相續有果　故業在果先　不斷亦不常
什譯梵文と同じ。

【一六】求法方便者　謂十白業道　勝欲樂五種　現未二世得
什譯、梵文と一致す。第一句は梵文によれば「法の完成の方法」とあり、什譯は「法」を「福德」と譯す。本品の「法」の概念は他と異りて德行の意なり。
此偈の釋文中「白」の解說以下は西藏譯に無きものにして、之は羅什譯中論の長行「白とは善淨なるに名づく。福德の因緣を成ずとは、この十白業道より、不殺・不盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不無益語・不嫉・不恚・不邪見を生ずるなり。これを名づけて善となす。身口意よりこの果報を生ずれば、今世の名利を得、後世は天人中の貴處に生ずるなり。」といふ辭句を引用して敷衍せしものに他ならず。

【一七】報果依果は、俱舍に所謂る正報依報にして、身體と居住の國土なり。

【一八】人能降伏心　利益於衆生　是名爲慈善　得二世果報
此偈も亦羅什譯中論本品第一偈の第四句を少しく改めたるのみにて、他の三句は羅什譯そのまゝなり。かゝる偈頌が原本に無かりしことは明了

るが故なり。これ因なるが故なり。譬ふれば餘物の如し。阿含中に説くが如きは、身と及び諸根等とは一刹那にして起り已れば住せずと。汝の義は經と相違す。若し汝この過を避けんと欲して、起り已つて無間に即ち壞すと受くれば、これまた過あり。業若し滅すれば即ち自體なし。若し汝の意に「業の正しく滅する時に能く果を與ふ」と謂はば、而も此の「滅時」は半滅半未滅と名づく。能く果を與ふるは然らず。前に答ふる所の過に同じ。若し汝「滅し已つて果を與ふるか、滅せずして果を與ふるかを説くべからず」と言はば、これを不可説の業と名づく。若し不可説の業が第一義中に於て能く果を與ふるは然らず。不可説なるが故なり。譬ふれば欲生時の如し。汝の所見は堅固なる能はず。出因も成ぜずして、また汝の義に違す。

阿毘曇人言ふ、相續あるが故に我が義は違なし。云何んが知るや。故に論偈に言ふ、

(七)芽等の相續の如きは[一二]　種子より生じ、
　是れに由つて果を生ず。　種を離れては相續無し。

釋して曰く、これ謂く、芽より莖を生じ乃至枝、葉、華、果等各々その相あり。種子は滅すと雖も、相續を起すに由つて展轉して果に至る。若し種子を離るれば芽等の相續は則ち流轉すること無し。是こを以ての故に其の義云何ん。故に論偈に言ふ、

(八)種子より相續あり、[一三]　相續より果あり、
　先に種ありて後に果あり、　不斷にしてまた不常なり。

釋して曰く、云何んが不斷なるや。謂く種子の相續あつて住するが故なり。云何んが不常なるや。謂く芽起り已れば種子壞するが故なり。内法もまた爾り。論偈に説くが如し、

(九)是の如く初心より[一四]　心法相續して起り、
　是れよりして果を起す。　心を離れては相續無し。

【一二】如芽等相續　而從種子生　由是而生果　離種無相續　什譯、梵文と全く同じ。

【一三】種子有相續　從相續有果　先種而後果　不斷亦不常　什譯梵文と全く同じ。

【一四】如是從初心　心法相續起　從是而起果　離心無相續　什譯梵文と同じ。

び非功德と(非)過惡とに、心所作を起す意業を思と名づく。

かの論には是の如く七種の業を以て說いて業相となす。乃至坐禪、誦經、聽聞、記念等も亦名づけて業となすも、皆七種中に攝在するが故に別に說かず。この業あるが故に業と果と合するを見る。「果と合する」とは謂く、五種中に於て五陰の起相あるなり。この故に品初に「業と果との合」を說いて出因とせるは、第一義中に生死あるの義成ずることを得。縛あり解あるを以ての故に生死の體あり。[八]

論者言ふ、今この業は一たび起り已つて乃至[九]受果已來も恒に住すとなすや、一刹那に起り已つて卽ち滅すとなすや。これ皆然らず。その過は論偈に說くが如し、

(六)[一〇]若し住して果を受くるに至らば、　此の業は卽ち常となす。
　業若し滅し去らば、　滅し已つて誰か果を生ぜん。

釋して曰く、若し業の自體起り已つて、無間には壞せずして、後に方に壞あるは然らず。常の過に墮するが故なり。

阿毗曇人言ふ、芭蕉、竹葦等の如く、後に於て果を與へ已つて卽ち壞す。この故に過なし。

論者言ふ、竹葦等は一一の刹那に隨つて壞して住せず。後時に相似に相續して斷ずとは、世諦中に於て壞を說くのみ。若し第一義中にて「業は竹葦等の如く相續して果を受くるに至る」と說くは然らず。若し「業法の自體あり、先と後と俱(同時)とに壞せず」と言はば、物(衆生)をして汝の過なきに非ざるを解せしむること難し。

阿毗曇人言ふ、初めは未だ[一一]壞因を得ざるが故に壞せず。後時に壞因を得てより方に壞す。何の過あらんや。

論者言ふ、此の義は然らず。汝壞因ありと立つるも、而も彼の物はこれ壞因ならず。この物と異

及思爲七業　能了諸業相

「受用自體の福」とは「受用を自體とする福」の義にして、受用(paribhoga)は享樂、愛樂を意味し、福(puṇya)は德行を意味す。梵文には「享樂に結び付ける德行と、同種の非德行」とあり。此の二種に思(意業)を加へて三種、更に前の四種を合して、業相を七種に分析したり。

【八】以上は業とは何ぞやに就いて有部說の基本的な考へを擧ぐ。以下その批評。

【九】受果已來は「受果して後までも」の意か又は「受果に至るまで」の意か。次の偈より見れば後者の如く思はる。

【一〇】若住至受果　此業卽爲常
業若滅去者　滅已誰生果
什譯と全く同じ。梵文より見れば第一句は、長行の「受果已來恒住」の方が直譯的なり。

【一一】壞因。業を壞せしむる因なり、無常法の如し。

に言ふ、

(四)[六]身業と及び口業と　作と無作との四あり。
語起の遠離等なり。　皆善不善あり。

釋して曰く、「語起」とは謂く、文字を以て了了に言を出すを名づけて語起となす。云何んが「遠離」と名づくるや。謂く手足等を運動するなり。「運動」とは謂く、念を起して我れ當に此の善業を作すべしと言ふなり。初めて善業の思を受くるより後に善業の思の所起を受くるまでの人、若しくは善業を作し若しくは業を作さざるも、「遠離無作の色體」恒に生ず。「不遠離」とはまた是の如く念じて「我れ當に此の不善業を作すべし」と言ふなり。若しくは身、若しくは口、若しくは意に、初めの不善業の刹那より所起までの人、若しくは惡業を作し若しくは作さざるも、不善の因より「不遠離と名づくる無作の色體」恒に生ず。云何んが作、無作の色と名づくるや。身口の色を以て他に解せしむるを名づけて「作色」となし、身口の色を以て他に解せしめざるを「無作色」と名づく。故に論偈に言ふ、

(五)[七]受用自體の福と　罪との生ずるもまた是の如し。
及び思とを七業となす。　能く諸業の相を了せり。

釋して曰く、云何んが「受用自體」と名づくるや。謂く檀越の捨する所の房舍、園林、衣服、飲食、臥具、湯藥、資身具等なり。云何んが「福」と名づくるや。謂く撈漉の義なり。諸の衆生の煩惱の河中に沒溺するを見て大悲心を起し、衆生を漉出して涅槃の岸に置くが故に名づけて福となす。「非福」とは謂く、種種不善の事を作して能く衆生をして諸の惡道に入らしむるなり。云何んがまたこれ「受用自體」なるや。謂く福に違背するが故に名づけて非福となす。福と非福とを解し已れり。次に「思」の義を解せん。何の法を以ての故に之を名づけて思となすや。謂く功德と過惡と、及

【六】身業及口業　作與無作四　語起遠離等　皆有善不善　作(vijñapti)、無作(avijñapti)は普通「表」「無表」と譯さる。此の偈梵文には「言語と動作とそして無表と名づけらるる非遠離と、別の無表たる遠離との、是の如きが考へらるる」とあり。此の漢譯は少しく不審なり。照合すれば「身業及口業」は梵文の「言語動作」に當り、言語動作は表業にして後に無表業を殘す。梵文には「表業」の文字は出さず(言語動作が表業なるは當然なれば)。之を漢譯は「作」として補ふ。而して梵文では無表(言語動作の兩者を含む)に就いて遠離と非遠離とを分つ。之に表の言語と動作を合して四種となる。遠離、非遠離が卽ち善と不善なり(中論註參照)。されば漢譯第三句の「語起」は何處から來るか不明なり。釋には「了々に言を出す」とあるも、或は「語起」は「言語と動作」とを意味して、第一句の「身語及口業」の內容を示せるに非ざるか。又「遠離等」とは當然「遠離と非遠離」とを意味し、第四句の「善不善」はその意義を補へるに他ならず。註釋に遠離を「運動」と定義するは疑問なり。

【七】受用自體福　罪生亦如是

すが故に名づけて種子となす。云何んが「非法」と名づくるや。法に違するが故に名づけて非法となす。非法とは謂く惡と及び不善等なり。云何んが無記と名づくるや。謂く法と非法とに違するを名づけて無記となす。無記は四種の業あり。一には報生、二には威儀、三には工巧、四には變化なり。また無記とは善不善を記せざるが故に名づけて無記となす。また無記とは善不善の果を起さずしてまた無記と名づく。かくの如き等の差別あり。倶舍論中にもまた二種あり。その義云何ん。故に論偈に言ふ、

(二)[四]大仙の所說、業は　思と及び思の所起となり。
　この二業中に於て　無量の差別を說く。

釋して曰く、云何んが大仙と名づくるや。聲聞、辟支佛、諸菩薩等も亦名づけて仙となす。佛その中に於て最も尊上なるが故に名づけて大仙となす。已に一切の諸波羅蜜、功德、善根の彼岸に到るが故に名づけて大仙となす。また次に、前偈に列ねたる名を、今當に別釋すべし。その義云何ん。故に論偈に言ふ、

(三)[五]前の所說の如き思とは、　但だ名づけて意業となす。
　思より起る所とは、　即ちこれ身口の業なり。

釋して曰く、云何んが思は但だこれ意業なりと說くや。謂く思は意と相應すれば名づけて意業となす。また次に、此の思は意門中に於て究竟することを得るが故に、名づけて意業となす。身口の業に非ず。云何んが「思より起る所」と名づくるや。謂く知り已り知り已りて作し作するを、思所起の業と名づく。此の業に二種あり。謂く身と及び口となり。若し身門に於て究竟し口門に究竟すれば、身業口業と名づく。

二業を說き已れり。次に無量種の差別を說かん。云何んが無量種の差別と名づくるや。故に論偈

【三】倶舍論の引用一。「二種」とは思業と思已業の二種をさす。倶舍論卷十一、分別業品參照。

【四】大仙所說業　思及思所起
　於是二業中　無量差別說
什譯、梵文に全く合致す。思は五位七十五法中の心所法の一つなるが、業體として意業（意志）を意味す。思所起(cetayitvā)は什譯では「從思生」、玄奘以後は「思已」の說が普通に用ひらる。意思して後現るゝ身口の業なり。本品註二參照。

【五】如前所說思　但名爲意業
　從思所起者　那是身口業
什譯、梵文に全く同じ。

卷の第十

釋觀業品第十七

釋して曰く、今此の品はまた空の所對治を遮して、業と果との無自體の義を解せしめんが爲めの故に說く。

[一]阿毗曇人言ふ、彼れは前品中に於て諸行の流轉と衆生及び人等もまた皆流轉するは然らずと說けり。而も彼れ驗中に義を立てて言ふ、「諸行は若しくは常若しくは無常ならば、これ斷常の過あるが故に、流轉あるは然らず」と。而して諸行は畢竟じて流轉あること無しと說けり。彼れ先に此の說をなせるが故に、我れ今此の中に「常無常には是の如き過なくして諸行の流轉あり」と說かん。この說を作すは物（衆生）をして「第一義中に定んで是の如き內の諸入あつて諸行の生死と業果と合する」を解せしめんと欲するが故なり。これ若し無くば諸行と業果とに合あるを見ず。譬ふれば石女の兒の如し。今諸行と業果との合あるが故に生死あり。この故に我れ今業と果とを觀察せん。その義は阿毗曇中に廣く說けるが如し。故に彼の偈に言ふ、

(一)[二]自ら身口を護るの思と、　　及び彼の他を攝する者と、
慈とは法なり。種子となりて　　能く現未の果を得す。

言ふ所の「思」とは謂く、能く自ら調伏し非法を遠離して、此の心と相應する思なるが故に、名づけて思となす。「他を攝す」とは謂く、布施愛語にて怖畏者を救護するなり。かくの如き等を以て能く他を攝するが故に、名づけて攝他となす。「慈」とは謂く心なり。「心」は卽ち「法」と名づく。またこれ種子なり。「種子」はまた因と名づく。誰の因となすや。謂く「果の因」なり。これ何等の果なるや。謂くこれ現在と未來との果なり。云何んが心を名づけて種子となすや。謂く能く身口の業を起

【一】有部說の批評。「彼れ」とは有部より見たる此の論者をさす。本品は主として有部の業說を批判す。一々注意せず。

【二】自護身口思　及彼攝他者
　慈法爲種子　能得現未果
此の偈は諸種の刊本には長行中に混入し、註家の引用偈の如く譯さるゝも、本頌第一偈なり。梵文には「自ら制し、他を慈愛して、同情ある心、其れは法である。それは後世と此世とに於ける果報の種子である」とありてよく合致す。その他本品の第二偈及び第十三偈も本頌にあらざる如く譯出せらる。これ惟ふに安慧菩薩の釋論に於ける誤認をそのまゝ繼承せし爲ならん。この第一偈の主なる譯語を原語と對照すれば次の如し。
自護身口(ātma-saṃyakam)
思(cetas)
慈(maitram)
右の中「思」は次の意業としての思(cetanā)とは多少異り、寧ろ「こゝろ」と云ふ程の意なり。什譯は「心」とす。

は諸行は空なるが故に「煩惱息むの相を涅槃と名づく」とは此等もまた無し。別に涅槃ありと置立すべからず。かの諸行は自體無起、本來寂滅して涅槃の如きによるが故なり。而も安立して涅槃となさんと欲するは此の義然らず。生死を捨つるもまた爾るべからず。前偈に言へるが如し、「生死を捨つべからず。涅槃を立つべからず。生死と及び涅槃とは無二にして分別なし」と。應に是の如く解すべし。生死と涅槃とは第一義中には無差別なるが故なり。若し「この二の境界は差別す。境の別なるによるが故に慧もまた別なり」と謂ふは、二つ倶に然らず。[三] かの外人の品初の所說の如き「第一義中にこの生死あり」といひ、「縛解あるが故に」を以て因となすは、此の義成ぜず。彼れ驗を說いて成立せる法は、論者前來より已に彼れに過を與へたり。他をして生死涅槃の空にして無所有なるを解悟せしむること、是れは此の品の義にして、この故に成ずることを得たり。

般若波羅蜜經中に佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如し、「善男子よ、色は縛なく脫なし。受、想、行、識も縛なく脫なし。若し色より識に至るまで縛なく脫なくんば、これを般若波羅蜜と名づく」と。また梵王所問經に說くが如し、「佛言ふ、梵王よ、我れは生死を得せず、涅槃を得せず。何となれば、生死と言ふは但だこれ如來の假の施設なるが故にして、一人として中に於て流轉するもの無し。涅槃と說くはまた假の施設にして、一人として般涅槃する者なし」と。かくの如き等の諸の修多羅に此の中に應に廣く說くべし。

【三】以下本品の結語。教證として般若波羅蜜經と梵王所問經とを引く。

[三〇]是の如き執を受くれば、　此の執は不善となす。

釋して曰く、若しかくの如く取を緣じて「我れ當に涅槃を得べし」との(執を)起さば、これは善執に非ず。何となれば、これは不善の執にして解脫を障ふるが故なり。偈意正に爾り。また次に、取は無自體なり。而も取を計して境となし、これを緣じて起る所の邪分別の智は不善の執と名づく。この故に汝「解脫を求むる者は希望あるが故に」と言ひて、これを以て因となすは、此の因成ぜず。かくの如く諸行と衆生と及び彼の人等を諦觀するに、縛脫あるは此れ皆然らず。阿闍黎は諸の學者を敎へて此の偈を說いて曰ふが如し、

(二〇)[三一]應に生死を捨つべからず、　應に涅槃を立つべからず。
　生死と及び涅槃とは　無二にして分別せらるること無し。

釋して曰く、第一義中には生死と涅槃とは一相にして無差別なり。虛空の相の如きが故なり。無分別智の境なるが故なり。集ぜず散ぜず、實法に非ざるが故なり。この故に應にこの分別をなして生死を捨離し涅槃を安置すべからず。若しくは立て若しくは謗するは、皆分別智にて、自在に可得なる物の境界なるが故なり。若しこれ可得なる物の境界ならば、此等は皆これ集散の法なるが故なり。

また次に、或は衆生にして涅槃を以て敎化するに堪ふる者あり。彼れを誘引せんが故に涅槃ありと說く。云何んが安立するや。但だ未來の不善の諸行に於て分別起らず煩惱息むの相。これ則ち名づけて寂滅涅槃となす。故に安立と名づく。また彼れをして生死を厭離せしめんが爲めに、かくの如き言をなす。「生死は苦多し。汝應に捨離すべし。何となれば、諸行の展轉して緣より起るものは自體無實にして幻夢焰の如し。卽ち此等を說いて名づけて生死となし、これを捨離するが故に名づけて涅槃となす」と。世諦門中には是の如き說をなす。第一義には非ず。何となれば、第一義中に

【三〇】受如是執者　此執爲不善
梵文「斯く執持する人には取の大執あり(其の人は取なるものに執し過ぐ)」とあり、什譯も之に同じ。本論の義譯と見るべし。

【三一】不應捨生死　不應立涅槃
生死及涅槃　無二無分別
第四句「無分別」は梵文に基き「分別せらるゝことなし」と訓みたり。梵文と正確に一致し、什譯と多少出入あり。

[26]（八）（已に）縛されし者には則ち脱無し。
釋して曰く、縛の對治道未だ起らざる時は、此れを名づけて縛となし、脱と名づくることを得ず。何となれば對治なきが故なり。具縛者の如し。偈に曰く、

[27]未だ縛されざる者にも脱無し。
釋して曰く、縛の空なるによるが故なり。縛にして空ならば世諦中に於て縛は無體なるが故なり。久しく解脱せる者の如し。若し脱時を解脱者と名づくと謂はば誰かこれ脱時なるか、汝應に定んで說くべし。若し已縛の者を名づけて脱時となさば、これまた然らず。偈に曰く、

[28]縛されつつある時に脱あらば、　縛と脱とは則ち一時ならん。
釋して曰く、縛と脱と同時なるは此の如きを欲せず。この故に彼の人また縛を取らんと欲し、また解を取らんと欲して、若し此の如くならば縛解（一時）の過あり。避くること能はざるが故なり。かくの如きによるが故に、第一義中に解脱あるは此の義然らず。汝上に「相違あるが故に」及び「對治」を言へるが如きは、この因と譬喩との二つ皆成ぜずして、立義に過あり。

外人言ふ、第一義中に解脱はこれ有なり。何となれば、解脱を求むる者は希望あるが故なり。果若し無くんば終に彼れは希望の心を起すことをなさず。譬へば屯度婆、蛇頂珠の如し。定有なるによるが故に、解脱を求むる者は希望心を起す。偈に曰ふが如し。

[29]（九）我れは滅せん。諸取無くんば　我れ當に涅槃を得べし。
釋して曰く、云何んが當に涅槃ありと知るべきや。譬ふれば薪上に火の滅するが如し。この故に定んで涅槃の可得なるあり。

論者言ふ、汝「我れ滅すれば諸取なし、我れ當に涅槃を得べし」と謂ふは、此の執は然らず。偈に曰ふが如し、

【二六】縛者則無脱　此の「縛者」は已縛者（baddha）の意、又「無脱」は「解かるること無し」の意なり。

【二七】未縛者無脱　此の「無脱」も前句に同じ。

【二八】縛時有脱者　縛脱則一時　後句の「縛」「脱」は繫縛（bandha）、解脱（mokṣaṇa）と云ふ名詞なり。

【二九】我滅無諸取　我常得涅槃　梵文に基き第一句を中間で分てり。「滅せん」は「涅槃せん」の意なり。

而も先には實に縛なし、　去來中に已に遮したり。

釋して曰く、汝「先に縛具あるが故に可縛の衆生あり」と謂ふも、縛者より先には實に縛具なし。云何んが驗するや。調達は縛なきによる。何となれば同時なるを以ての故なり。調達の體の如し。また次に、已に縛されし者は縛されず。何となれば已に縛を被るが故なり。已に縛を被る者はまた更に縛されず。解脫せざるもの丶如し。未だ縛されざる者もまた縛されず。何となれば縛なきを以ての故なり。解脫者の如し。縛時にもまた縛されず。何となれば、かの縛時とは、一分は已縛、一分は未縛にして二過あるが故なり。また次に、不可說ならばまた縛の義なし。何となれば不可說なるが故なり。解脫時がこれ已脫なるは此れ則ち然らず。また次に、去來品中に已に廣く分別したり。已去と未去と及び去時とに初發あるは三皆然らず。これまた是の如し。已縛と未縛と及び縛時とに縛の初起あるは三皆然らず。云何んが然らざるや。かの已に縛されし者に更に縛の初起あるは義則ち然らず。何となれば、已に縛されしによるが故なり。譬ふれば久しく已に縛されし者の如し。かの未だ縛されざる者に縛の初起あるはこれまた然らず。何となれば未だ縛されざるによるが故なり。譬ふれば久しく解脫せる者の如し。若し縛されつつある時に縛の初起ありと謂はば、これまた然らず。何となれば、二俱の過あるが故なり。及び不可說なるが故なり。「解脫しつつある」時の如し。

問うて曰く、我が意は定んで是の如き縛ありと謂ふ。何となれば、相違あるが故なり。譬ふれば智慧は無知を對治するが如し。縛を對治するは所謂る解脫なり。解脫によるが故に縛は則ち無に非ず。

答へて曰く、若し汝定んで解脫ありと謂はば、已縛の者となすや、未縛の者となすや、正しく縛時に解脫ありとなすや。三皆然らず。偈に曰ふが如し、

縛解ありと執すれば、今此の義に答へん。前偈に說けるが如し。「衆生は無體なるが故に縛解の法もまた無し」と。偈に說くが如し、「諸行は常なるも無常なるも皆縛なく解なし。衆生は常なるも無常なるもまた縛なく解なし」と。この意正に爾り。

また有る人言ふ、かの「衆生」あり諸取に沒在せるが故に名づけて縛となし、この縛息むが故に解脫を得と名づく。然れども此の「衆生」の常と以び無常とは皆不可說なり。先に「諸行は若しくは常なるも無常なるも皆過あり」と言へるは、我れに此の咎なし。

論者の偈に曰く、

(六)[二三]若し諸取の爲めに縛さるれば、　縛者には解脫無し。

釋して曰く、諸取に因るが故に說いて取者となす。この人正しく諸取の爲めに縛さるるが故に、解脫者と名づくるは義則ち然らず。縛解の二法の性は相違するが故なり。また次に、第一義中には調達の取は、此の取は彼の調達を作さず。何となれば、取によるが故なり。耶若の取の如し。若し定んで此の如くならば、先に其の取なくして而も彼れあるは義則ち然らず。偈に曰ふが如し、

[二四]取無きが故に縛さるること無し。　何の位に人は縛さるべけん。

釋して曰く、若し取位を離るれば別の人位なし。この義を以ての故に人の縛さるべきもの無し。偈意は此の如し。

また有る人言ふ、定んで衆生の是れそれ可縛なるもの有り。何となれば、縛あるによるが故なり。杻械枷鎖等の具ありて彼の人を幽禁するが如し。此の諸取は能縛をなすが故に、衆生の是れそれ可縛なるもの有りと知る。

論者の偈に曰く、

(七)[二五]若し縛者より先に縛あらば、　縛は能く縛すと言ふべし。

【二三】若爲諸取縛　縛者無解脫　梵文には「若し取が繫縛ならば取を有つものは縛さるること無し」とあり、什譯も同じ。右の二句は之と全く異る。第一句は「若し諸取は縛なりと爲さば」と訓み得るも長行より見て上の如く訓めり。

【二四】無取故無縛　何位人可縛　梵文及什譯第六偈の後半に一致す。前句に「取有るものは縛さるること無し」と言へるに對し、「取無きものも縛さるること無し」と言ふなり。

【二五】若縛者先縛　可言縛能縛　梵文及什譯に全く同じ。「而先實無縛　去來中已遮　縛者」は badhniyn（縛さるべきもの）の譯にして什譯には「可縛」とあり。日本語にすれば「縛さるる者」と言ひてよく、繫縛と解脫を受くる主體をさす。

釋して曰く、先に已に說けるが如きは、「諸行は是れ常なるも、諸行は無常なるも皆流轉することなし。外の地等の如し」と。今また是の如し。諸行と衆生とは若しくは常なるも無常なるも、縛解あるはこれ皆然らず。外の地等の如し。この故に諸部の分別する所の如き「第一義中に一切の諸行は流轉し涅槃す」とは、これ皆然らず。その執云何ん。彼れ「諸行は新新に滅壞す」、或は「初めに是の如く住して乃至後時に方に壞あり」と謂ひ、或は「常と及び無常とを說くべからず」と謂ふも、この諸行等は皆流轉と及び般涅槃と無し。何となれば、これ起滅するが故なり。譬ふれば瓶等の如し。先の偈に言へるが如し、「諸行は起滅するもの、不縛にしてまた不解なり。衆生も前の如く說く、不縛にしてまた不解なり」と。諸行は住すること無し。何となれば、刹那刹那に別時にして起ればなり。この〔二〇〕相位中に縛解あるは此の義然らず。前に已に說けるが如し。汝「諸行は貪と俱に起る」と言ふは此れ已に滅せるが故に、已滅の法が解脫を得るはこれ則ち然らず。未來に諸行を起すべき刹那に解脫を得るは、此れまた然らず。相違するを以ての故なり。偈に「諸行は起滅するものにして縛解なし」と言へるが故なり。

また次に、〔二一〕阿毗曇人言ふ、我が俱舍論の偈に曰ふが如きは、「無學の心生ずる時、諸障は解脫することを得」と。汝云何んが「都て縛解なし」と言ふや。

論者言ふ、彼れ（無學の心）の生ずる時には、若しくは染汙あるも若しくは染汙なきも、俱に解脫なし。過失あるが故なり。不可說ならば、彼の染汙の時にも、また上の生時の如く、若しくは染汙あるも若しくは染汙なきも、俱に解脫なし。不可說なるが故なり。

また次に、〔二二〕經部の人言ふ、相續道中には縛解あるが故に過なし。

論者言ふ、かの相續は實體なきが故に、相續道中に若しくは染汙あるも若しくは染汙なきも、また解脫なし。前に已に破せるが如し。世諦中に於ては縛解は成ずるが故に斷滅の過なし。若し衆生に

〔二〇〕相位は單に「位」とあると同じ。狀態の意なり。

〔二一〕有部說の批評一。

〔二二〕經部說の批評二。

如くならば則ち破す。若し實法ならばまたこれ無常なり。譬ふれば色等の如し。この驗によるが故に、汝實人を立つるは則ち體これ無常と說くべしとなす。汝「(人は)法體と差別して不可說なり」と言ふは、この言則ち壞す。立義の過あるが故に。

また次に、無餘涅槃の一刹那の時に人が若し有體ならば、卽ちこれ常の過なり。人が若し無體ならば卽ちこれ斷の過なり。若し無餘涅槃の彼の刹那の時には、人の有體無體を說くべからずと言はば、これ則ち我が中論の義と同じ。經の偈に說くが如し、

[一七]解脫するに若し有我ならば、　有我は卽ちこれ常なり。
解脫するに若し無我ならば、　無我は卽ち無常なり。

また次に、この中に驗を立つ。「第一義中には人を緣ずるの覺は實の境界なし。何となれば、覺なるによるが故に。譬へば瓶等を緣ずる覺の如し」。かの人は、一物なきを驗せるによるが故に、第一義中には則ち解脫なし。若し汝定んで「人はこれ實法なり。何となれば、可識なるによるが故に。譬へば色等の如し」と言はば、この義は然らず。無常等の物も同じくこれ可識にして別體なきが故なり。兎角等の如し。因は一向に非ず。

また次に、[一八]自部の人言ふ、因緣によるが故に展轉に相續して諸行增長し、若し貪等の煩惱と共に起らば善趣を障礙す。貪等あるが故に縛の義成ずることを得。若し縛を被る者、正法を聽聞し正念思惟し、明慧を發生して無智の暗を除き貪等を離るるを得れば名づけて解脫となす。この義を以ての故に縛と脫とは成ずることを得。汝云何んが「縛なく解なし」と言ふや。

論者の偈に曰く、

(五)[一九]諸行は生滅の相なり、　不縛にしてまた不解なり。
衆生も前の如く說く、　不縛にしてまた不解なり。

[一七] 解脫若有我　有我卽是常
解脫若無我　無我卽無常

[一八] 自部人の說の批評二。

[一九] 諸行生滅相　不縛亦不解
衆生如前說　不縛亦不解
梵文及什譯に同じ。「不縛、不解」は「縛されることなく、解かるゝことなし」の意なり。

また次に、解脫者ありと執すればまた應に觀察すべし。この解脫者はこれ諸行となすや、これ衆生となすや、これ人たるべしとなすや。若し諸行が解脫を得と言はば、今この諸行はこれ常なりとなすや、これ無常なりや。若し汝第一義中に諸行を常ならしめんと欲すれば、これ則ち然らず。偈に曰ふが如し、

（四）[一四]諸行の涅槃は　是の事終に然らず。

釋して曰く、第一義中には無起なるを以ての故なり。諸行の常なるは世諦中に於てもまた成ぜざるが故なり。若し第一義中に諸行は無常にして涅槃を得れば、これまた然らず。何となれば、無常なるによるが故なり。外の地等の如し。

若し衆生が解脫を得と謂はば、これまた然らず、偈に曰ふが如し、

[一五]衆生の涅槃は　是の事また然らず。

釋して曰く、若しくは常、無常、若しくは有分別、若しくは無分別にて涅槃を得るはこれ皆然らず。云何んが衆生これ常にしては涅槃を得ざるや。視聽等の諸根の具すること無きが故なり。譬ふれば虛空の如し。若し質礙に非ず又視聽なくして、而もこれ有なるは、世の信ぜざる所なり。石女の兒の如し。若し無常にして涅槃を得と謂はば、これまた然らず。何となれば、若し無常ならば解脫の義なし。外の地等の如し。已に無常ならば解脫を得ずと驗したり。外人立つる所、「法體差別して解脫を得」とは、これ皆成ぜず。立義の過あるが故なり。

また次に、[一六]婆私弗多羅言ふ、我が立義の如きは人ありと言ふも常と說くべからず。また無常に非ず。かくの如きによるが故に、解脫の義は成じて上の如き過なし。

論者言ふ、汝「第一義中に人はこれ實有にして、常及び無常と說くべからずして解脫を得」と謂ふは、これまた然らず。何となれば、因を藉りて施設するが故なり。譬ふれば瓶等の如し。かくの

【一四】諸行涅槃者　是事終不然　梵文と正確に一致す。什譯は涅槃を「滅」と譯す。

【一五】衆生涅槃者　是事亦不然　是も梵文と精確に一致す。什譯は涅槃を「滅」とす。

【一六】婆私弗多羅(vātsīputrīyāḥ)。卽ち犢子部說の批評一。論者の言はこの譯文にては明瞭を缺くも、佛護疏に依れば、こは提婆阿闍梨の說にして「若し解脫に我あらば、そは常住なるべく、若し(我)無くば、無常なるべし。」との意味にして、安慧菩薩の釋論に於ては次の如く譯出せらる。論者言、滅卽解脫、解脫者若有我、無我、有卽是常、若定無說又非、智者所了知故、この譯文も不明瞭の嫌あれど、漢譯燈論のそれに比して理解し易し。

無取ならばまた無有なり、其れ誰か當に往來すべき。

釋して曰く、若し此の取より後の取に向へば、取の體は則ち空なり。本取によるが故に有を施設す。取の體既に空ならば有は寄る所なし。取なく有なくば則ち質礙なし。質礙なきが故に流轉すべき無し。而も汝定んで往來ありと謂ふは、これ則ち然らず。

外人言ふ、我れは中有中に取陰あるが故に、取の義成ずることを得て前の過失なしと。異部が破して言ふ、汝、中有を捨て生有に趣く時この二の中間には取なく有なく、前の如き過失を汝離ることを得ず。

また次に、[一三]經部等の人は言ふ、汝の此の言は我が義を解せず。何となれば、この捨つると及び取るとは、先後の刹那に同一時なるが故なり。而も取なく有なしと言ふはこの義然らず。汝前に「五(種)に求むるも盡く無し。誰か流轉する者ぞ」と言へるが如き、今當に汝に答ふべし。かくの如き人あり。何となれば、後の取に向つて住するが故なり。これ若し無くんば、後の取中に向つて住すとは說くべからず。石女の兒の如し。此の人あるによつて前の取より後の取に向つて住す。云何んが驗知するや。佛の言の如し。「曰く、我れは往昔に於て頂生王及び善見王となる」と。故に知る「人」あつて此れより彼れに至るを。

論者言ふ、先の偈に「若し取より取に至れば則ち無有の過を招く」と說けるが如きは、この義云何ん。初有の取は後有の依止の因とならず。何となれば、有の自性を離れては有は無體なるが故なり。譬ふれば調達此の一房より彼の一房に到るが如し。汝の言ふ所の如き「かの諸取あつて能く人を成ず」とは、この義然らず。何となれば、取なるによるが故なり。餘人の取の如し。この故に偈に言ふ、「無取ならばまた無有にしてそれ誰か往來すべき」と。かくの如く諸行と及び衆生とに第一義中に流轉あるは、これ皆然らず。

【一三】 經部說の批評。

るによるが故に、世諦中には先世成ぜざるに非ず。また次に、後世なきに非ず。云何んが驗するや。謂く彼の有漏の命終の心は能く後世の初めて受胎するの心に續く。何となれば、有漏なるによるが故なり。かの命終の因たる心と別なるが故に、世諦中に於ては義相違せず。

また次に、[9]路伽耶陀は言ふ、第一義中には彼の調達の覺は一切人の覺とまた異らず。何となれば、これ覺なるによるが故なり。調達の覺の如し。

論者言ふ、汝の語は非なり。かの調達の覺は第一義中に前に已に遮せるが故なり。また汝「第一義中には一切人の覺と異らず」と言ふは、この執は成ぜず。世諦中に於て不異を立つれば則ち世と相違す。また次に、かの阿羅漢の命終の心に續念あるも續念なきも、第一義中にはこれ皆成ぜず。譬喩なきが故に成立に過あり。若し「無漏の心は後世に續せず」と立つれば、世諦中に於て我が所成を成ず。

また次に、[10]犢子部言ふ、我が立義の如きは陰、入、界等は若しくは一、若しくは異、若しくは常無常なるも皆不可說なり。人もまた此の如し。汝先に說く所の二種の過失は我れを破すること能はず。何となれば、かくの如き人には流轉あるが故なり。

論者の偈に曰く、

(一)[11]若し人が流轉すれば　諸の陰、入、界中に、
五種に求むるも盡く無し。　誰れか流轉を受くと爲さん。

釋して曰く、流轉なきが故なり。云何んが驗知するや。第一義中には人の得べきもの無し。何となれば、五陰を離れて外には別體なきが故なり。猶ほし兎角の如し、實に人なしと雖も而も汝は有りと謂ふ。この人我の執は實慧を覆障す。翳眼人の毛輪等を見るが如し。また次に、偈に曰く、

(二)[12]若し取より取に至らば、　則ち無有の過を招く。

【九】路伽耶陀說の批評二。

【一〇】犢子部說の批評一。

【一一】若人流轉者　諸陰入界中　五種求盡無　誰爲受流轉　梵文及什譯に同じ。此の偈中の「人」の原語はpudgalaにして、梵文としても前のsattva(衆生)と同義に扱ふ。又「五種に求む」とは法品第一偈の如き形なり。

【一二】若從取至取　則招無有過　無取復無有　其誰當往來　梵文及什譯に全く同じ。偈中の「取(upādāna)」も無有の「有(bhava)」も共に衆生の有漏の五陰身をさし、什譯では共に「身」とせらる。而して無有(vibhava)は衆生(人我)が五陰身を離れてあることを意味し、什譯では「無身」とせらる。

論者言ふ、かの語は善ならず。已滅の諸行と及び衆生とが後の刹那の爲めにその緣をなすは、先の次第緣中に已に遮せるが如く、立義と及び譬に過失あるが故に此れまた是の如し。故に我れに咎なし。

また次に、路伽耶陀は言ふ、汝「諸行は若しくは常なるも無常なるも皆流轉なし」と說くは、これ我が義を成ず。云何んが知るや。我が論中の偈に曰ふが如し、

舍摩は唯だ眼見のみ、　一種を丈夫と名づく。
多聞は後世を說く、　人の獸跡を言ふが如し。
汝今極めて端正、　恣に食ひ之く所に任せ。
過去の業は皆無し、　此の身は唯だ行聚のみ。
死者は竟に還らず　此の事汝信ずべし。

是の故に當に知るべし、一人として此世より後世に至るもの無く、また人の後世より來つて入胎するもの無し。若し有る人「この胎より已前に更に前世あり。云何んが驗知するや。謂く此の入胎の初めの覺は次前の滅心を次第緣となす。何となれば、覺なるによるが故なり、後起の覺の如し」と言はば、此の譬へは然らず。何となれば、唯だ一覺あるのみなるが故なり。この一覺は乃至未終まで常にかくの如くに住するによるが故に先世なし。また次に、また後世なし。何の道理を以てこの說をなすや。調達の命終の心は後世に初めて入胎するの心とならざるが如し。何となれば、命終の心なるが故なり。阿羅漢の命終の心の如し。

論者言ふ、諸行の流轉は世諦中には遮せず。諸行がこれ常にして、流轉を計するは、これまた倶に遮す。故に汝の所成を成ずるに非ず。また次に、調達の色覺は調達の聲覺とこれ不異なるに非ず。何となれば、境界別なるが故なり。譬ふれば他人の身相續の覺の如し。かくの如き驗は譬喩あ

【七】路伽耶陀の說の批評一。路伽耶陀(lokāyata)は現世的快樂主義者にして順世外道と言はる。次偈は其の思想を示す。

【八】舍摩唯眼見　一種名丈夫
多聞說後世　如人言獸跡
汝今極端正　恣食任所之
過去業皆無　此身唯行聚
死者竟不還　此事汝應信

「舍摩」は samaya の略音にして、聚合物を意味す。「丈夫」は puruṣa の意譯にして、人の義なり。「獸跡」は西藏譯に依れば「狼の足跡」。「端正」は身體に就いていふ。この順世外道の說は後の觀法品第十八に於ても長行として譯出せらる。本論は安慧菩薩の中觀釋論より之を襲用せしならんも、後者の漢譯は蕪拙にして理解し難し。

し」とは、この義云何ん。諸趣に往來して先後相續するを名づけて生死となす。若しこれ常ならば諸行は則ち先後の差別なし。而も「流轉す」と言ふは義則ち然らず。

また次に、[四]鞞世師及び自部の人言ふ、「若し諸行常ならば、則ち起滅と先後の差別なく、流轉なくんば、今諸行無常ならば流轉あるべし」と、これまた然らず。何となれば、偈に曰ふが如し、

[五]無常なるも流轉すること無し

釋して曰く、若し無常ならば滅して復び起らず。この故に諸行が五種に往來するはこれ則ち然らず。また次に、「無常なるも流轉せず」とは外の諸行の如し。此の中に驗を立つ。「第一義中には內の諸行等の流轉するは然らず。何となれば、無常なるによるが故に。外の瓶等の如し」。

諸行は二種に――若しくは常若しくは無常にして――流轉するは、倶に然らざるが如く、若し汝衆生の流轉する者ありと分別すれば、また前の如く答ふ。この衆生は常にして流轉すとなすや、無常にして流轉するとなすや、若し倶に立つればまた先に過を說けるが如し。この義云何ん。衆生は常ならば則ち流轉すること無し。何となれば、變異せざるが故なり。また先後の差別なきが故なり。衆生は無常なるもまた流轉すること無し。何となれば、かの已滅の者は起法なきが故なり。偈に曰ふが如し、

[六]衆生もまた同じく過あり

釋して曰く、この故に衆生の若くは常無常にして流轉あるは、また前の所立の諸行の驗の如くに過あり。

また次に、佛法中の人にして、諸行と及び人をこれ無常ならしめんと欲する者は、かくの如き言をなす。未だ對治道を起さずんば、前に滅せる諸行はこれを以て因となし、後に起る諸行の相續を果となす。衆生もまた然り。かくの如く諸行の流轉するの義は成ず。故に我れに過なし。

【四】 勝論說及び自部人の批評一。

【五】 無常無流轉　「常なるも流すること無し」と對句をなす。

【六】 衆生亦同過　第一偈第四句、衆生も諸行と同じく常にしても無常にしても流轉すること無きを言ふ。衆生は sattva(存在者)の譯語なるが、次の本頌の人(pudga-la)と同義にして、生死と解脫の主體を意味す。

かくの如き等の諸の修多羅に此の中に應に廣く說くべし。

釋觀縛解品第十六

また次に、已に有無を遮して斷常の過を離れしめたり。この中に空の所對治なる、繫縛と解脫との無自性の義を明かさんが爲めに、此の品次いで生ず。

[一]有る人言ふ、第一義中に諸の內入等は定んで自體あり。何となれば、かの入等は縛解あるによるが故なり。これ若し無くば則ち縛と解と無し。石女の兒は言說すべからざるが如し。この故に定んで知る、第一義中に諸入は有體なり。

論者言ふ、諸行の相續は幻、焰、夢の如し。而も彼の無智にして極めて盲暗なる者は、無始より已來、我我所の執の爲めに呑食せられ、貪等の煩惱の杻械に拘せらる。この故に如來は生死の囹圄、愛見の闘論を出離せしめんが爲めの故に、世諦中に於て假名の相にて說く。正智起る時には彼の極重の貪等の結使より遠離することを得るが故に、名づけて解脫となす。第一義には此の施設をなすに非ず。何となれば、第一義中に縛と解とあるは義然らざるが故なり。如來所說の生死ありとは、但だ假の施設のみ。而も中に於て實に流轉する者なし。涅槃もまた爾り。但だ假の施設のみ。而も中に於て般涅槃する者なし。この經を見るが故に[二]阿闍黎は言ふ、若し定んで縛解ありと分別すれば、今此の繫縛はこれ諸行となすや、これ衆生となすや。若しこれ諸行ならばこれ常となすや、これ無常なるや。二つ皆然らず。何となれば、若しこれ常ならば偈に曰ふが如し、

[三]若し諸行が是れ常ならば、　彼れは則ち流轉すること無し。

釋して曰く、諸行これ常なるを人に信ぜしめんも、驗は則ち無體なり。若し常を立つれば則ち縛なく解なし。縛解なきが故に法體は顚倒して立義に咎あり。また次に、「諸行これ常ならば流轉な

【一】有部等の法有の論師をさす。

【二】阿闍黎は龍樹をさす。

【三】若諸行是常　彼則無流轉　諸行は常住にしても無常にしても流轉すること無きを言ふ。梵文及什譯と同じ。第二句無流轉は「流轉無し」とも訓み得るも、梵文に動詞形が用ひあれば、其れに基きて訓みたり。

なるべし。また苦を厭ひ樂を求めて聖道を起すこと無し。先に已に有ならば因を須ひざるが故なり。法若し斷ならば則ち染淨と及び苦樂等なし。また禁戒を受持すと雖も空にして果なきが故なり。これ皆然らず。有無の倶は名づけて惡見となす。この惡見によつて能く天人の趣・涅槃の門を閉づ。この故に生死の曠野を出でんと欲する者、諸天婇女と共に遊戲受樂せんと欲する者、一切の受樂を斷ぜんと欲し、一切の戲論息むの樂を受けんと欲する者は、應に有無の二見に依止すべからず。何となれば、彼れに依止すれば斷常の過を得るが故なり。云何んが二見はこれ斷常の過なりや。偈に曰ふが如し。

[二四](二)若し法、自性あらば　無に非ず、即ち是れ常なり。
先に有りて今無きは　此れは即ち是れ斷の過なり。

釋して曰く、かくの如き等の斷常の過によるが故に、中道を說く者は應に正しく思惟すべし。世諦に依るが故に色等の法起る。これ「有の覺」の因なり。色の若し未だ起らざると及び已に滅せるとはこれ「無の覺」の因なり。第一義中には覺は自體空なり。起なきを以ての故にこれ有見に非ず。幻所作の如きが故に無見に著せず。かくの如きによるが故に二邊に墮せず。この中に諸法の自性を遮せんが爲めに、人をして從緣起法の不斷不常を信解せしむ。品義かくの如し、この故に成ずることを得たり。

[二五]般若波羅蜜經中に佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如し。「善男子よ、色は不斷不常なり。かくの如く受、想、行、識は不斷不常なり。若し色より識に至るまで不斷不常ならば、これはこれ般若波羅蜜なり」と。また月燈三昧經の偈に曰ふが如し

[二六]有無はこれ二邊なり　淨不淨もまた爾り。
この故に有智者は　邊を離れて中に住せず、と

【二四】若法有自性　非無即是常
先有而今無　此即是斷過
梵文及什譯と同じ。此邊の偈意凡て中論註を參照すべし。

【二五】以下本品の結語。般若波羅蜜經と月燈三昧經とを教證とす。

【二六】有無是二邊　淨不淨亦爾
是故有智者　離邊不住中

可得なり。偈に曰ふが如し、

〔二〇〕若し自性無くば、　云何んが異るべけん。

釋して曰く、二邊は過あり。智者は受けず。

外人言ふ、汝「自性の有體なるも無體なるも皆變異なし」と說く。意爾ることを欲するや。この故に汝の先の所立の義は破す。因もまた成ぜず。云何んが成ぜざるや。若し自性ありて而も變異すれば、これ然らざるが故なり。

論者言ふ、この說は然らず。何となれば、我れ「無し」と言ふは自性の空を明せるにて、かの自性法ありと說くを欲するには非ず。偈に曰ふが如し、

〔二一〕實に一法として、　自性の得べきもの有ることなし。

釋して曰く、自性あるは然らず。而も汝はかの煩惱習氣の自在力の爲めの故に此の分別をなす。先の偈に「若し自性なくば云何にして異るべけん」と說けるが如し。この變異の過は先に已に說けるが如し。二邊を遮止すると、及び成立するとは、皆これ世諦にして第一義に非ず。この故に我が先の立義は破せず。世諦中に於ては變異あるが故にまた所出の因の義成ぜざるに非ず。

また次に、〔二二〕鞞世師は言ふ、第一義中に眼等の諸入は定んで自體あり。何となれば、此等は能く「有の覺」の因となるが故なり。譬ふれば涅槃の如し。

論者言ふ、汝「有の覺」の因を說くは此の因成ぜず。何となれば、焰中の水の如きもまた覺の因となる。この故に因は一向に非ず。今當に更に說くべし。偈に曰ふが如し、

〔二三〕有はこれ常執にして、　無はこれ斷見なり。
この故に有智者は　應に有無に依るべからず。

釋して曰く、かの斷常の執は何の過失ありや。法若し常ならば樂は常に樂なるべく、苦は常に苦

【二〇】若無自性者　云何而可異
句義前二句に對應す。

【二一】實無有一法　自性可得者
釋偈にして本頌に非ず。

【二二】勝論說の批評二。

【二三】有者是常執　無者是斷見
是故有智者　不應依有無
梵文及什譯に同じ。

因を出して「體は異なり」と言ふは、我が所受に非ず。若し汝不異を欲すれば、則ち自義成ぜず。

論者言ふ、第一義中には、現在の物の有なることまた成ぜず。汝の喩は非なり。若し法ありて世と及び諸位中に經歷すと謂はば、この義は然らず。何となれば、已に起を遮せるが故なり。また次に、去來中に於て現在の法なし。現在に非ざるが故なり。虛空華の如し。また世諦中には過去未來の體もまた成ぜず。

〔一七〕若し僧佉人是の如き言をなして、「汝先に因を出して『異の體』と言へるは此の義然らず。何となれば、我れは諸法に二種の義ありと立つ。一は覆蔽となし、二は自性藏中に入る。この義を成ぜんが爲めに更に須らく驗を立つべし。定んで是の如き不滅の諸法あり。何となれば、覆蔽によるが故なり。譬ふれば日焰かの星光を翳ふが如し。またこれ識の境界なるが故に、時節の說なるが故に。現在世の如し。この故に汝の立因の義は成ぜず」といはゞ、

應に是の如く答ふべし。現在の物は第一義中には、有なることまた成ぜず。何となれば、譬喩なきが故なり。汝覆蔽を立てて以て因となすは、義また成ぜず。この中に應に說くべし。云何んが驗するや。かの未了なる者は終にこれ不了なり。何となれば、不了なるを以ての故なり。虛空華の如し。また次に、(未だ)自性藏に入らずんば終に入の義なし。何となれば、入らざるを以ての故なり。譬ふれば思の如し。

また自性藏の如きは、此の執法には過失あるによるが故に、偈に曰ふが如し。

〔一八〕若し是の自性あらば、　則ち無と言ふことを得ず。

〔一九〕(九)自性有らば、異は　畢竟じて然るべからず。

釋して曰く、この自性は變異せざるによるが故に譬喩は則ち無なり。若しこれ無法ならば則ち變異なし。石女の兒の如し。小より大に至るの此の變異を以て、人をして信ぜしむることは、終に不

【一七】數論說の批評一。

【一八】若有是自性　則不得言無　既出第八偈前二句の再出なり。

【一九】自性有異者　畢竟不應然　此二句を前の二句に續けて且つ上句を「自性に異あるは」と訓めば四句全體が、前の第八偈の再出となるも、梵文及什譯に基き次句と關係せしめて第九偈としたり。隨って「自性有異者」も漢文として無理の如くなれど「自性有らば、異は」と訓みたり。梵文には「本質の無きときに何ものに變化おこらん。本質の有るときに何ものに變化おこらん」とあり。

來の眞實法を見ること能はず」と。この義は云何ん。かくの如き見は名づけて邪見となす。この故に佛は迦旃延を教ふる中に、若しくは有、若しくは無の二邊を倶に遮す。これ正道理なり。この道理によつて彼の自他等の法を見るべからず。此れまた云何ん。偈に曰ふが如し、

　(八)[一三]法若し自體あらば、　則ち無と言ふことを得ず。

釋して曰く、先に未だ起らざる時と、及び後に壞する時には、皆無體なるが故なり。また若し諸法に自性あらば、偈に曰く、

　[一四]法に自性あらば、　後に異するは則ち然らず。

釋して曰く、火の煖を以て相となし後時に冷ゆるが如きは然らず。これが爲めの故に不相似の喩を說く。法のこれ常にしてこれ起作するが如きは、義則ち然らず。この中に驗を立つ、「如し實法を證得すれば內入等の體は則ち顯現せず。何となれば、內入等は後時に異するによるが故なり。水は火を得るが故に煖にして、煖が水の自性たるに非ざるが如し」。

　また次に、[一五]經部師は言ふ、我が阿含の如きは木中に種種の界あり。かくの如き義によつて水にもまた煖あり。汝「煖は水の自性に非ず」と云ふは、この譬は成ぜずと。

論者言ふ、かの阿含中に此の說をなすは、謂く比丘あり、神通と及び心自在とを獲得して、その所緣に隨つて草木等の物を變じて金若しくは水火等となさんと欲し、意の如くに則ち成ず。故に木中に種種の界ありと言ふなり。種種の界とはこれ木中に多界の功能あるを謂ふなり。若し彼の物の中に功能あらば、かの物の功能は彼の物の體に非ず。若し諸の功能が是れかの體ならば、地大中の如きは四の功能あり。また具に濕煖動等を以て地大の體となすべし、唯だ堅のみを取らず。

　また次に、[一六]毗婆沙師は言ふ、世は、位は別なりと雖も而も體は不異あり。應に是の如く知るべし。何となれば、これ識の境界なるによるが故なり。現在の者の如し。この義を以ての故に、汝先に

【一三】法若有自體 則不得言無　法の「自體」と次句の「自性」とは共に prakriti(本質)の譯語なれど、svabhāva に對する「自性」と同義に解してよし。此二句梵文には「本質によつて此のもの〻存在性ありとせば其の非存在性はおこらざるべし」とあり。尙 prakriti は數論派の質料因たる「自性」の概念と言語上同じ。されば燈論は此偈を以て特に數論說を難ずるものとして註釋するも、中論本頌の意は必ずしも然らず。

【一四】法有自性者 後異則不然　梵文「本質の變化は何時に於てもあり得ざればなり」の義譯。

【一五】經部說の批評一。

【一六】毗婆沙說の批評。「位」とは狀態の意なり。

體との三は皆成ぜず。菩薩摩訶薩は無著の慧を以て、諸法の若しくは自、若しくは他、及び有無等を見ず。云何んが見ざるや。無分別智の車に昇るを以ての故なり。

また次に、諸の淺智人は前世に未だ深大法忍を起さず、かの自他、有無等の法に於て言說する薰習の故に、實慧を覆障せらる。前偈に言へるが如し、「若し人自他と及び有體と無體とを見れば、彼れは則ち如來の眞實法を見ること能はず」と。この義云何ん。自他等を見るは正道理と及び阿含とに違するが故なり。偈意は是の如し。道理に違するは先に已に說けるが如し。阿含に違するは汝今當に聽くべし。偈に曰ふが如し。

(七)[二二]佛は能く如實に觀じて　有無の法に著せず。
　迦旃延に教授して　有無の二を離れしむ。

釋して曰く、云何んが教授せるや。佛、迦旃延に告ぐるが如し、「世間は多く二邊に依止するあり。謂く若しくは有、若しくは無なり。深智ある者は有無に著せず」と。かくの如き等なり。また佛、阿難に告ぐるが如し、「若し有と言はばこれ常邊を執す。若し無と言はばこれ斷邊を執す」と。

また次に、或は有る人言はん、若し第一義中に諸法悉く無ならば、云何んが見諦の法あることを得ん。世諦中に法は緣より起るによるが故に、智を以て從緣起の法を觀察するに、自なく他なく、有なく無なし。是の如き見を遮するを名づけて「見諦」となす。云何んが見諦なるや。この緣起法はこれ實を見るの因なるが故なり。何人か實を見るや。謂く諸の佛子、得緣起智の日光に照らされ、これを以て因となすが故なり。

論者言ふ、空を怖畏する者は是の如き說をなす。猶ほし世人の虛空を怖畏するが如し。有對の實物に執著し依止するが故に、心を生じて虛空を遠離するを得んと欲す。空を遠離するは彼れ自他等の見に依止するによる。偈に言ふが如し、「若し人、自他と及び有體、無體とを見れば、彼れは則ち如

(anyathābhāva)の意、「無體」は單に無(非存在)の意にして、全體にて「存在するものゝ變化を人々は無(非存在)と名づく」となりて、前二句にかゝる。

【二二】佛能如實觀　不著有無法
　　教授迦旃延　令離有無二
多少の出入あれど梵文及什譯に一致す。中論參照。この偈の釋文の最初に引用せる迦旃延に對する佛說は雜阿含第十卷(大正大藏經第二卷六六頁)同第十二卷(同八五頁)及び之等に相當する巴利雜部第三卷一三四—五頁に出で、後の阿難に對する佛說は雜阿含第三十四卷(大正大藏經第二卷二四五頁)及び之に相當する巴利雜部第四卷三四〇頁に見ゆ。而して安慧菩薩の釋論には既に之等を引用せり。

論者言ふ、火の無自體なるは觀陰品に已に破せるが如し。有と及び起滅とは第一義中にまた前に已に遮したり。火は成ぜざるが故に、譬喩は無體なり。また偈に曰ふが如し、

（四）自他の性を已に遣る、　何處にまた法あらん。[八]

釋して曰く、體の義は已に遮せるが故に、諸法は無性なり。法の無なるによるが故に、因の義は成ぜず。語意は是の如し。

外人の偈に曰く、[九]

（五）若し人、自他と　及び有體と無體とを見れば、
　　彼れは則ち　如來の眞實法を見ること能はず。

汝言ふ所の如き「自他の性を已に遣る、何處にまた法あらん」とは、偈の所說の如きと此の語は則ち違す。また次に、かくの如き體あり。相違するによるが故に。烏と角鵄との如し。

論者言ふ、第一義中に已に起を遮せるが故に、偈に曰ふが如し、

（六）有體は既に立たず、[一〇]　無法は云何んが成ぜん。

釋して曰く、有執を遮せんが爲めに、この故に無と言ふも、無は更に無體なり。無（體）と言はずと雖も、無は我が欲するに非ず。何となれば、別法として執取すべきもの無きを以ての故なり。この故にまた因の義成ぜざるに非ず。また次に、偈に曰く、

[一一]　此の法體の異するが故に、　世人は無體と名づく。

釋して曰く、法の無體なるが故に、之を名づけて無となす。更に一法として名づけて無體となすもの無し。この故に汝の立因の義は成ぜず。及び義に違するが故なり。云何んが義に違するや。汝は相違法を立てて因となす。相違は破するによるが故に、所立の有法はこれまた成ぜず。故にこれ相違す。また第一義中には烏と鵄とは無體なるが故に、譬喩は成ぜず。この觀察によつて自と他と無

【八】自他性已遣　何處復有法
梵文「自性と他性とを離れては存在は實に如何にして成立せん。自性か他性かの有るによつて存在は成立すればなり」とあり。之の前二句の譯にして後二句は本論に出でず。

【九】若人見自他　及有體無體
彼則不能見　如來眞實法
此の偈を外人の偈とするも、中論本頌にして、論者の立場を言ひあらはす偈と見る方然るべし。
「自、他」は「自性、他性」の略。「有體、無體」は夫々 bhāva, abhāva の譯にして「存在、非存在」又は「有、無」を意味す。「自性他性を見又存在非存在を見る者は佛說に於ける眞實を見ず」の意なり。
尙此偈は梵文及什譯とも次偈の次に置きて第六偈とす。前後の關係上其の方可なり。

【一〇】有體既不立　無法云何成
梵文及什譯では前偈と替つて第五偈となる。「有體、無法」は單に「有（存在）、無（非存在）」の意なり。「存在が成立せずんば非存在も成立せず」の意にして、第四偈の「自性他性を離るれば存在は成立せず」と云ふを直に受く。

【一一】此法體異故　世人名無體
「此法體」は「存在するもの(bhāva)」の意、「異」は變化

て而もこれ有法なり。汝の出す所の因はこれ[四]非一向なり。

論者言ふ、汝は善說ならず。因緣生法は幻夢焰の如し。世諦中に有るも第一義には非ず。この義云何ん。偈に曰ふが如し、

(二)若し[五]自性あらば、　云何んが當に作なる可けん。

釋して曰く、若しこれ作法ならば無自性を離れず。所對治の自體なきによるが故なり。この故に出因は非一向に非ず。世諦中に於ては虛空等はまたこれ無生なること猶ほ兎角の如し。豈これ有ならんや。諸の有爲法の皆無自性なるは、前に已に觀察して他をして信解せしめたり。今また驗を立つ。「第一義中には諸法は無體なり。何となれば、作なるによるが故に。またこれ差別の言說にて觀ずるが故に。幻人等の如し」。若しこの一物に自性あらば、則ち上と相違す。

また次に、この中に外人驗を立つ。「第一義中に彼の內入等は皆自體あり。何となれば、自他の差別の言說を起すの因なるによるが故なり。譬ふれば長に因つて短あるとき長を短の因となすが如し」。今「自」と言ふは「他」なる差別言說のために因となるなり。

論者言ふ、諸法の無體なるは先に已に驗を立てたり。汝執するによるが故に今當にまた說くべし。偈に曰ふが如し。

(三)[六]法に既に自性無くんば、　云何んが他性あらん。

釋して曰く、若し法に自性あらば、自性に[七]觀ずるが故に他性と說くことを得。自性既に無きとき何に觀じて他を說かん。汝「自性は他のために因となる」と言はば、この因は成ぜず。及び義に違するが故なり。また第一義中には短長無き故に譬喩は成ぜず。

外人言ふ、第一義中に眼等は有體なり。何となれば、體なるによるが故なり。譬ふれば火燄の如し。

【四】非一向は不定の意なり。

【五】若有自性者　云何當可作　梵文「自性は實に如何にして所作のものたり得ん」の譯にして、句義は直接前偈の後二句に結び付く。云何當可作は「云何んが當に可作なるべけん」とも訓み得るも所作(kritaka)を「作」又は「作法」とするは本論の譯語例なれば、「作」の一字を以て所作の義を代表せしめて、上の國譯の如く訓みたり。尚本論には、梵文及什譯第二偈の後半に相當する二句を欠く。其は「自性は作さるゝことなきもの、他に因待せざるものなればなり」とありて自性の定義を示す重要なものなり。而して以上二偈八句は四個の命題を含みて相關聯して一つの完結せる論旨を顯はす。

【六】法既無自性　云何有他性　梵文「自性の存在せざるとき如何にして他性あらん。他物の自性を他性と名づくればなり」とあり。之の前二句の譯にして後二句は本論には欠く。

【七】觀は「觀待」の意にして「因る」と同じ。

せず。この故に汝の所說は義則ち然らず。

また次に、第一義中には、若し一法として有自體のもの有らば則ち「起」の義なし。偈に曰ふが如し。

(二)法若し自性あらば、　縁より起るは然らず。

釋して曰く、若し諸法は自性ありと謂はば、かくの如き過を得。若し汝定んで「法に起あるを見る。我れを破すること能はず」と謂はば、この中に應に問ふべし。汝「法に起あるを見る」と言ふは、これ他の因縁に依るや。偈に曰ふが如し、

(三)若し因縁より起らば、　自性はこれ作法ならん。

釋して曰く、若しこれ作法ならば、これ則ち無自體なり。因と縁との相は云何ん。若し法不共にして無間に自分より生じ、唯一にして能く自果を起さば此れはこれ「因」の相なり。此れに翻ずるを「縁」と名づく。云何んが「作」と名づくるや。若し法にして自體あらば則ち作を須ひず。然も今作あるが故に無體と知る。この中に驗を立つ。「第一義中には內入は無體なり。何となれば、因縁より起るが故なり。譬ふれば幻師の幻作せる牛等の如し」。若し自體あらば則ち因縁より起らず。

また次に、有る人この中の譬喩を解せずして、かくの如き言をなす。幻咒藥力の泥、草、木等はこれ有にして無に非ず。これ有なるによるが故に彼の象馬等の形像は顯現するなり。この義を以ての故に汝の譬喩中には成立の法なし。

論者言ふ、汝は善說ならず。我が引喩は象馬等の無體を以て喩となし、草木の有體を取つて喩となさず。また次に、若し草木地等に起あり實ありと謂はば、前に已に遮せるが故なり。

有る人言ふ、有らゆる諸法の、縁より生ずるものは、皆自體あり。虛空等の如きは縁より起らずし

【二】法若有自性　從縁起不然　梵文「諸の縁因によつて自性現起するは然らず」とあるの✱譯なり。存在が各々自性を持し、其の自性が衆因縁の限定によつて現はれ出でて現實の存在生起すると云ふ考へを否定して存在無自性の立場を立てるが本品の趣意なり。漢譯「縁より起るは然らず」とは法が縁より起ることに非ずして、法の自性が縁より起りて法(存在)となることを意味す。

【三】若從因縁起　自性是作法　「作法」は kritaka の譯語にして所作の義。「因縁より起らば自性は所作のものたるべし」と云ふ意なり。而して此の裏に「自性は所作のものたり得ざるが故に因縁より起るは可能ならず」の意を含む。自性の概念については中論註參照。

卷の第九

釋觀有無品第十五

また次に、空の所對治なる若しくは有若しくは無に(就き)、他をして緣起の諸法の不斷不常なるを解せしめんが爲めの故に、此の品の起るあり。

[一]外人言ふ、汝諸法の無自體を說くは、此の義然らず。何となれば、汝の自の言に違し、また立義の過あるが故なり。云何んが言に違するや。人あり、我が母はこれ石女にして、我が父は梵行を修すと說くが如し。他人難じて曰はん、若し汝の父母にして審にかくの如くならば、云何んが汝あらん。汝若し從生すれば、則ち石女と梵行の義は皆立たずと。汝もまたかくの如し。若し無自體ならば云何んが諸法と名づけん。旣に諸法と云ふ、云何んが無自體ならん。故にこれ言に違するなり。また立義の過あり。

論者言ふ、汝諸法に自體ありと謂ふは、第一義中に如何なる等の物あらん。譬なきを以ての故に汝の語は非なり。また次に、若し我れ先に第一義中に於て諸法ありと忍じ、後に無しと立つれば自の言に違すべきも、而も實には爾らざるが故に相違せず。また世諦中に諸法は幻の如し等と安立するは、我れの遮せざる所にして、立義の過なし。

或は聰明邪慢の者ありて言ふ、何等の諸法かこれ無自體なる。若し虛妄分別の諸法の有體の如きを、汝この法は無自體と言はば、これ則ち我が所成を成ずるなり。若し此の諸法は因緣より起つて而も汝の意に此れの無體を欲すれば、則ち現見に違し、及び世間の所解と相違す。

論者言ふ、眞實中に於ては分別なし。「識が色に緣りて起る」は不可得なるが故なり。「この物あるが故に」とは前に已に遮せるが如し。世諦の所說は我れ遮せざるが故に現見と及び世間の所解に違

【一】主として有部の立場と解すべし。

に、疑習の境界なるが故に。これ等の諸因にてこれ應に廣く説くべし。彼れは是の如くして一異倶に遮す。一等の成ぜざるによるが故に、偈に曰ふが如し、

〔一三〕(八)一法は則ち合せず、　異法もまた合せず。

若し有る人言はん、かくの如き染と染者との合あり。何となれば、合時によるが故なり。水乳の二の如し。また次に、第一義中には染者の合あり。何となれば、差別の言説にて觀ずるが故なり。譬ふれば食者と食と相合するが如し。

論者の偈に曰く、

〔一四〕合時と及び已合と、　合者ともまた皆無し。

釋して曰く、前の所説の如き方便にて異法の相合するは、かくの如き義なし。かの外人の品初の説因には已にその過を與へしにより、他をして合の無自體を解せしめんが爲めの是の品中の義は、この故に成ずることを得たり。

般若波羅蜜經中に説くが如し、「佛、極勇猛菩薩に告げて言ふ、善男子よ、色は合せず散ぜず。かくの如く受、想、行、識も合せず散ぜず、若し色より識に至るまで合せずんば、此れはこれ般若波羅蜜なり」と。かくの如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く説くべし。

〔一三〕一法則不合　異法亦不合　梵文「其のものの其のものとの結合（卽ち自己自身との結合）も、異のものものと異のものとの結合（卽ち互に異れるものとの結合）も可能ならず」。

〔一四〕合時及已合　合者亦皆無　梵文及什譯と全く同じ。

のあることなし。何となれば、物體なるが故なり。譬ふれば未だ言説あらざるより已前の物體の如し」。また次に、「第一義中には異は無自體なり。何となれば、總別によるが故なり。譬ふれば色體の如し」。また次に、「第一義中には異は説と及び覺智を起すの因に非ず。何となれば、これ差別の覺智言説の因なるによるが故なり。譬ふれば色體の如し。」』

また次に、この異は異中に在りとなすや、不異中に在りとなすや。これ何の過ありや。若し異中に在らば偈に曰ふが如し、

(七)〔一〕異中に異あること無し。

釋して曰く、若し彼の異法は先に已にこれ異にして而もこの異を言はば、向の彼の異中にはこれ則ち無義なり。異法は空なるが故に、鞞世師所立の「異」の義は成ぜず。

若し不異中に於て有らば此れまた然らず。偈に曰ふが如し、

〔二〕不異中にもまた無し。

釋して曰く、これ自體にして而も異ありと謂ふの過なり。彼れの所説の如き因義は破するが故に、異法は成ぜず。

外人言ふ、一と異とはこれ二邊なり。汝今異を遮す。異法は則ち無からん。この「異」若し無くば應に「不異」を受くべし。この故に汝は悉檀に違するの過を得。

論者言ふ、異法の無きが如きは已に他をして解せしめたり。「不異」の無きは偈に曰ふが如し、

〔三〕異法無きによるが故に　不異法もまた無し。

釋して曰く、異に觀ずるが故に不異あり。已に異を遮せるが故に不異もまた無し。云何んが遮するや。今驗を説かん。「第一義中には見者と可見とは異たるを得ず。何となれば、差別の言語にて觀ずるが故なり。譬ふれば可見の自體の如し」。かくの如く有なるが故に、果なるが故に、因なるが故

【一】異中無有異。梵文及什譯第七偈に相當す。第六偈に相當すべき一偈を本論には欠く。而して此の第七偈の梵文は「別異性は異中にも無く不異中にも無し。而して別異性の非有なるときは、異も同一も存せず」とあり。

【二】不異中亦無　「不異中にも別異性は無し」の意なり。

【三】由無異法故　不異法亦無　第七偈後半。同一(tadeva)を不異法と譯す。

（五）[六]異は異と緣をなす。
釋して曰く、異に待つが故に名づけて異となすなり。偈に曰く、
[七]異を離れては異あること無し。
釋して曰く、種を以て緣起となさば、この種子に待つが故に芽を名づけて異となす。偈に曰く、
[八]若し緣より起らば　此れは彼の緣に異らず。
釋して曰く、第一義中には可見は眼に異るに非ず。何となれば、差別の語に觀あるが故なり。譬ふれば可見の自體の如し。若し法、緣より起らば彼の緣に異らず。若し異ると言はば、この種を離れて芽は餘より出づべし。火の異體に觀ぜずして自性これ煖なるが如し。かくの如く見者は可見に觀ぜず、聞者は可聞に觀ぜず、染者は染等に觀ぜず。火の冷に待たずして自體これ煖なるが如くならん。この「異」は成ぜず。何となれば、世諦中に於ては此の義なきが故なり。
外人言ふ、見者と眼等とは異にして相觀ずるを須ひず。何となれば、相の別なるを以ての故なり。譬ふれば牛と馬との如し。この中に、境界の顯現するを名づけて識相となす。此れはこれ見者なり。この見者の所有の行聚と眼識所依の淸淨色とを以て境となし、此れを名づけて眼となす。形色と及び顯色とは此れを可見と名づく。我が所說の如きは因に力あるが故に、見者と眼等との異義は成ずることを得。
論者言ふ、この語は然らず。第一義中には牛と馬との二體は不可得なるが故なり。また有る人「想の差別の故に、果因の別の故に、見者と眼等との異義成ず」と言はば、また前に同じく答ふ。
また次に、[九]鞞世師人言ふ、「異」の法體ありて物と和合するが故なり。
論者言ふ、若し汝異の法體ありて物と合せしめんと欲すれば、また第二物の自然に異あることなかるべし。彼れは異を立てて別體あるを以ての故なり。この中に驗をなす。「異法の物と和合するも

【六】異與異爲緣。梵文「異のものは異のものに緣りて異なり」。
【七】離異無有異。梵文「異のものは、異のものを離れては異に非ず」。
【八】若從緣起者　此不異彼緣　梵文「或るものに緣りてあるものが、其のものと別異なるは不可得なり」。「緣りてある(pratītya)」を從緣起と譯せるなり。此の例多し。什譯では「若法從因出」とす。以上四句梵文と全く一致す。
【九】勝論師が異(差別性)なる一法體ありと云ふを批評す。

の入とは、眼は前に已に說けり。この中の「餘」とは謂く耳、鼻、舌、身、意なり。云何んが「入」と名づくるや。謂く心心數法の起る所の處門なるが故に名づけて入となす。これにもまた三種あり。謂く聞と可聞と聞者、乃至知と可知と知者となり。かの染煩惱等と及び餘の入とは、二と二とを相望むるも更互に合せず、また一切も合せず。可見等の如く合なきこと、應に知るべし。

今他をして解して疑ひなからしめんが爲めの故に、偈に曰く、

(三)異は異と共に合あり、　此の異は不可得なり。
　及び諸の可見等の　異相は皆合せず。

釋して曰く、可見等とは謂く見と可見と見者となり。かくの如く染と染者と可染とも皆相合せず。この中に驗を說く、「第一義中には見者は可見と及び見と相合せず。何となれば、彼れは異ならざるが故なり。若し物異ならずんば終に相合せず。譬ふれば自體の如し。」

有る人言ふ、「異は異と共に合す」とは、この中に染等の相續若し別處に在らば則ち相合せず。かの別處と及び別の相續と無間に隨轉するによるが故に、名づけて和合となす。この因は成ずることを得。

論者言ふ、若し可見等は先に別處に在りて後に一處に在るを名づけて合となさば、この因は成ぜず。また驗なきが故に汝の語は善ならず。彼れは是の如きが故に、偈に曰く、

(四)獨り可見等の　異相の不可得なるのみに非ず。
　及び餘の一切法の　異もまた不可得なり。

釋して曰く、前の所說の道理の如く、かの聞と可聞と聞者、瞋と可瞋と瞋者等も皆合義なし。

外人言ふ、汝「我と及び可見と眼等とは異なし」と言ふは此の義成ぜず。因成ぜざるが故なり。

論者言ふ、因成ぜざるに非ず。何となれば、偈に曰くが如し、

【四】異共異有合　此異不可得
　及諸可見等　異相皆不合
梵文「異のものと異のものとは（卽ち互に異れるものには）結合あり。而して可見等のものには別異性なきが故に（夫等可見等の）結合すること無し」とあり。漢譯が嚴密に之に一致せざるは繼譯不充分なるによる。梵文第二句 tac ca-anyatvam na vidyate は次の句にかけて讀むべきを單獨に切り離して「此異不可得」と譯せるなり。什譯は正確なり。

【五】非獨可見等　異相不可得
　及餘一切法　異亦不可得
「異相」「異」は共に別異性(anyatvam)を意味す。後二句の譯は意義不明瞭なり。梵文には「如何なるものと如何なるものとも相伴へるものである限り、その別異性は不可得なり」とあり。相因待して成立するものは不一不異なりと云ふは中論の根本命題の一つなり。

釋觀合品第十四

また次に、空の所對治なる諸有る合法は皆無自性なるを信解せしめんが爲めに、此の品の起るあり。

[一]外人言ふ、汝一切法の自性は皆空なりと說くも、かくの如く說くは正道理に違す。何等か道理なるか。佛所說の如きは「根と塵と識との三種あつて和合するを之を名づけて觸となす」と。この義を以ての故に、汝の先の所說は則ち相違となす。我が所立の如きは、第一義中に諸法は有體なり。何となれば、此れ(根塵識の有)を以て因となして說いて名づけて「合」となすが故なり。此れ若し無くんば如來は此の因を說いて合と名づけず。譬へば龜毛を因として說いて衣服となさざるが如し。佛は貪瞋癡等ありと說くにより、かくの如き三結を之を名づけて合となす。我れの說因は正道理に符するによつて、この故に諸法は無自體に非ず。

論者言ふ、汝此の說ありと雖も、義は則ち然らず。偈に曰ふが如し、

(一)見と可見と見者との　此の三は各々異方なり。
　二と二を互に相望むるも　一切も皆合せず。

釋して曰く、見と可見と及びかの見者とは、二と二とを相望むるも更に互に合せず。また一切も合せず。かくの如きによるが故に、偈に曰く、

(二)應に知るべし、染と染者と　及びかの所染の法と、
　餘の煩惱と餘の入とにも、　三種は皆合なし。

釋して曰く、染とは謂く欲相なり。煩惱とは謂く能く衆生の相續を染汙するが故なり。染等を說いて煩惱となす。餘とは謂く瞋等なり。此れにまた三種あり。謂く瞋と瞋者と及び所瞋等なり。餘

【一】主として有部說の立場を示す。後には勝論說を批評す。最初に佛の所說として根塵(境)識の三種和合して觸を生ずることを擧げしは、安慧菩薩の釋論に據りしものなり。

【二】見可見見者　此三各異方
　二二互相望　一切皆不合
梵文と正確に一致す。見(darçana)は見る作用にして眼根を意味し、可見(draṣṭav-ya)は見られるものにして色境を意味し、見者(draṣṭri)は眼識の超越的主體にして人我をさす。此の三者合して具體的眼識生ずと云ふが此場合の所破の見なり。「二と二を互に」とは「二つづつ」の意、「一切も」とは三者の凡てをさす。

【三】應知染染者　及彼所染法
　餘煩惱餘入　三種皆無合
染(rāga)は貪欲、染者(rak-ta)は貪欲者、所染法(rañjanī-ya)は嚴密には可染法と譯さるべく、貪欲の對象をさす。「三種」は右の如き作用と、對象と、主體との三種をさす。右の如き三種の契機を分析して、一切の煩惱や識別に關して、却つて其れ等の契機を實有として其れの和合より具體的事實を導かんとする考へを否定するなり。

釋して曰く、見とは謂く身見等なり。空とは謂く內入を對治する空等なり。若し衆生あり善根未だ熟せず、無生の深法忍を得ずんば、正道を解せず。偈に曰ふが如し、

一八 諸有の見空の者は、

釋して曰く、云何んが見空の者と名づくるや。謂く空に執著して「此の空あり」と言ふなり。此に空に執著とれば何の過失ありや。偈に曰ふが如し。

一九 彼れを不可治と說く。

釋して曰く、如來は彼の空見の衆生は療治すべからずと說けり。此の義云何ん。藥を服下して諸病を動作し、而もまた泄さずんば反つて重病となるが如し。かくの如く空法を說くは諸の惡見を捨せんが爲めなり。若し還つて空に執すれば、彼れは不可治と說く。この義を以ての故に空を捨するは過なし。また人あり、車泥中に沒して、車を出さんが爲めの故に異人に語つて言ふ、無所有を與へん、我が爲めに車を出せと。而して彼の異人ために車を出し已つて其の車主より無所有を索むるが如し。彼れは此の語意を解せざるによるが故に、諸の智人の爲めに輕笑せらる。この故に汝等は空を執して之を以て有となすべからず。この義を以ての故に彼の因は成ぜず。過は汝を離れず。汝所說の因の義は成ぜざるによつて、我れ自因を立つるに前の過失なし。及び力あるが故なり。云何んが力ありや。諸行の空を說いて人をして信解せしむるなり。品義は此の如く、この故に成ずることを得たり。

二〇 般若波羅蜜經中に佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如きは、「善男子よ、かの一切法は顚倒より起つて不實にして所有なく、虛妄にして如實ならず。極勇猛よ、若し人あり、一法を行ずればこれ顚倒の行にして如實の行ならず」と。また梵王所問經に說くが如きは、「世間の愚人は諸諦に執著す。この法は實に非ず、また虛妄に非ず」と。かくの如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く說くべし。

【一八】 諸有見空者

【一九】 說彼不可治 以上二句梵文「而も尙空見ある者、彼等をば不可化と謂ふ」に正確に一致す。

【二〇】 以下本品の結語。般若波羅蜜經と梵王所問經の數證を引く。

爾り。この義を以ての故に所欲は成ずることを得。

論者言ふ、空智起りて諸法乃ち空なるに非ず。法體自ら空にして、智は空を了するが故なり。燈照らして瓶なしと知るが如し。作るには非ず。何となれば、かの瓶は無體にして有らしむべからざるが故なり。この故に汝の說は不善の思量なり。

また有る人言ふ、汝空を說きて他に與へて過となす。而も空に依止して空の無力なるを見てまた空なしと言ふ。この故に汝等の所欲の義は破す。また自の悉檀に違す。云何んが自ら違するや。梵天王問經の偈に曰ふが如し、

[一五] 若し空を解する者あらば　皆これ法性を見る、と。

また楞伽經の偈に曰ふが如し、

[一六] 若し和合を離るれば　是の如き體あることなし。
この故に空にして無起なるを　我れは無自性と說く、と。

かくの如く、汝の阿含に違す。

論者言ふ、汝聞かずや、金剛般若波羅蜜經中に說けるが如き、「我が法門を解すること筏喩の如し」とは、是法すら尙ほ捨すべし。何ぞ況んや非法に於てをや。また摩訶般若波羅蜜經中に說けるが如きは、「色の空を觀ぜず、色の不空を觀ぜず」と。此れ空見もまたこれ執著なるが故に須らく遮止すべきを謂ふ。若しまた不空の分別をなすものあらば、此れもまた捨すべし。この二執は大過失なるを以ての故なり。空を捨するに非ずんば過あり。かくの如く、種種の諸見の過患は心を壞亂す。如來はかの未だ苦を離れざる衆生の苦の種子を斷ぜんが爲めの故に、第一の大悲を起したまふ。偈に言ふが如し、

[一七] 如來、空法を說きたまへるは　諸見を出離せしめんが爲めなり。

【一五】若有解空者　皆是見法性
羅什譯思益梵天所問經卷一、分別品の偈は左の如し。
若知法實相　是則知空相
若能知空相　則爲見導師

【一六】若離於和合　無有如是體
是故空無起　我說無自性
五陰品註五の引偈と同じ。

【一七】如來說空法　爲出離諸見
空法(śūnyatā)は空性、空義の義。此二句什譯に全く一致す。梵文には多少の出入あり。

第一義中には一法として不空なるもの無し。何處に空法の可得なるもの有ることを得ん。汝先に相違の法ありと言ひて分別して因となせるが如きは、此の因は成ぜず。但だ執着を遮せんが爲めの故に、假りに空と言ふのみ。

また次に、[一四]十七地論者は言ふ、所分別の自體の如きは無なるが故に、分別の體は空なり。この諸法の空は眞實にこれ有なり。云何んが眞實なるや。作者に觀ぜざるが故なり。

論者言ふ、汝の此の見は著空の見と名づく。

外人言ふ、何故に我れを名づけて以て空に著すとなすや。

論者言ふ、一切法の無體なるによるが故に空なり。空は實法に非ず。應に執著すべからず。これを遮せんがための故に前偈中に(言ふが)如し。若し一法としてこれ不空なるもの有らば、此れはこれ有分別智の境界なりや。此れはこれ無分別智の境界なりや。若し一物としてこれ空なるもの有らば、これ空智の境界と名づく。而も此の物なし。一物としてこれ不空なるもの無きを以てなり。これを「一切法皆空」と謂ふなり。この故に偈に「何處に空は得べけん」と言ふ。また次に、「一法として不空なるもの無し」と。この言は何の謂ぞ。不空の見は空火に燒かる。空を分別すれば、此れもまた燒かるるが故に、この故に偈に「何處に空は得べけん」と言ふ。

また次に、二を行ずる行者は此の分別をなす、「幻馬等の如きは無體なるが故に空なり。實馬等の如きは有體にして不空なり」と。此れ覺の差別なるのみ。無二の行者は無分別を以て般若波羅蜜を行ずる時には、第一義諦の境界は眞實にして一切法を觀ずるに猶ほし虛空の如く、一相、無相にして見るも所見なし。偈に「一法として不空なるもの無し。何處に空は得べけん」と言ふ。この義を以ての故に彼れの因は成ぜず。

外人言ふ、縱ひ成ぜざらしめ、及び相違を與ふるも、汝は一切時に恒に空を遮す。我が意もまた

【一四】十七地論者。瑜伽師地論の學者をさす。本國譯解題註一二參照。

この義然らず。
異人ありて言ふ、我れはまた「乳は酪を生ぜず」と說かず。酪相は乳に異る。然も和合の自在力を以ての故に乳は酪を生ずるなり。
論者言ふ、汝和合の自在力と言ふは、此の乳は自體を捨して能く酪を生ずとなすや。自體を捨せずして酪を生ずとなすや。若し爾らば何の過ありや。若し自體を捨すれば則ち「乳が酪を生ず」と言ふを得ず。若し自體を捨せずんばこれ則ち相違す。云何んが相違するや。若しこれ乳ならば云何んが酪と名づけん。若しこれ酪ならば云何んが是れ乳ならん。かの世間に於て悉くかくの如くに解す。
若し有る人「乳は酪を生ぜず。但だ變じて酪となるのみ」と言はば、此の如き義はまた前と同じく遮す。かくの如く觀察すれば、第一義中には「諸法の異」はこれ皆成ぜず。汝「諸法は有體なり」と言ひて、これを以て因となすは此の因は成ぜず。
外人言ふ、第一義中には諸法は不空なり。何となれば、これと相違するの法あるが故なり。顚倒の智と及び不顚倒の智との如し。これ若し無くんば則ち違法なきこと虛空華の如し。不空に違するによるが故に空法あり。この義を以ての故に、所說の因の如きは「諸法は不空」なり。
論者言ふ、若し第一義中に陰等あらば、此の有物を除いて空法を立てん。而も第一義中には實に一法としてこれ不空なるもの無し。偈に曰ふが如し、

(七)[一三]若し一法の不空なる(あらば)　これに觀ずるが故に空あらん。
一法として不空なるもの無し、　何處に空は得べけん。

釋して曰く、空と不空とは世諦中に於ては法體に依止す。かくの如き分別は此の義云何ん。舍宅あるが如き、人あつて住するが故に舍は不空と名づけ、人住せざるが故に則ち舍は空と名づく。今

【一三】若一法不空　觀此故有空
無一法不空　何處空可得
梵文及什譯と同じ。

なる如きとき、云何んが因を出すや。謂く「彼れは作なるが故に」なり。「作なるが故に」と言はば、苦と空と無我ともまた成立することを得。かくの如く虚妄法を成立するは、其の自體無くして、即ちまた人無我の義を成立するなり。相離れざるを以ての故なり。

外人の言ふが如きは、「虚妄の義はこれ諸法の自體の不住なるを明す」と。今此の義を答へん。若し法にして取るべくんば、偈に曰く、

[一〇](五)かの體は變異せず、　餘もまた變異せず。
　少は老とならず、　老もまた少とならざるが如し。

釋して曰く、此の二の譬喩は數の次第の如く相似し相對す。此の中に驗を立つ。「法が自體に住して變異するは然らず。何となれば、自體を捨せざるが故なり。譬ふれば少と老との如し」。若し「かの前の刹那が老と異相にして住するを變異と名づく」と言はば、これまた然らず。何となれば、異相は已に去れるが故なり。譬ふれば老と若との如し。

外人「乳の如きは自體を捨せずして而も轉じて酪を成ず。この義を以ての故に因は一向に非ず」と言はば、この義は然らず。今當に汝に問ふべし。何ものかこれ酪なる。彼れ、「乳が是れなり」と言はん。若し乳が是れ酪にして自體を捨せずんば、云何んが分別して此れを名づけて酪となさん。若し定んで分別あらば、偈に曰く、

[一一](六)若し此の體が卽ち異すれば、　乳は卽ちこれ酪なるべし。

釋して曰く、乳は色、味、力用、利益等を捨せざるによるが故に、乳は酪たらず。異なるもまた然らず。何となれば、偈に曰ふが如し、

[一二]乳と異にして何物あつて、　能く彼の酪を生ぜん。

釋して曰く、酪の起るべき無きが故に、餘體にもまた變異なし。「汝因は一向に非ず」と言ふは、

【一〇】彼體不變異　餘亦不變異　如少不作老　老亦不作少　梵文「此のものに變化は可能ならず。他のものにも亦可能ならず。若き者は老いざれば、老いたる者も老いざれば」とあり。第四句のみ梵文と相違す。

【一一】若此體卽異　乳應卽是酪　梵文及什譯と同じ。

【一二】異乳有何物　能生於彼酪　梵文及什譯と同じ。

論者の偈に曰く、

[九]若し法、自體あらば、　云何んが變異あらん。

釋して曰く、法に自體ありて而も變異するは、この義然らず。何となれば、自體は不可壞なるを以ての故なり。而も今現にかの體の變異するを見る。この故に當に知るべし、かの變異するの體は無自體と相離るることを得ず。汝所立の因は則ち自ら相違す。

有る人言ふ、「虛妄法」の義は如實の見ならざるを謂ひ、法の「無自體」はこれ「無我」の義を說くを謂ふ。何となれば、「自體」と言ふは卽ちこれ「我」の名なり。「法の變異を見る」とはこれ諸法の轉變滅壞するを謂ふなり。この故に「虛妄」の語は其の「無我」と相離るることを得ず。この「虛妄」の語は卽ち無我を說くにて、「空」を說くと謂ふに非ず。この故に聖道未だ起らず、我見の山未だ崩れざるときは內外の諸法に、我と及び我所の光影顯現す。聖道起る時は此の諸法に於てまた我と及び我所とを分別せず。若し諸法は無自體と言はば、外道所執の我の如き此の我は無體なり。この義を成立するは則ち我が所成を成ずるなり。かくの如き因は「無我」を成立し、「空」と及び「無自體」とを成立せず。

論者言ふ、汝等、法の無體を分別すること兎角の無體なるが如しと謂ふ。かくの如きが故に怖畏を生ずるなり。譬ふれば小兒、夜に自影を見てこれ人に非ずと謂ひ、聲を失して驚怖するが如し。汝またかくの如し。汝の言ふ所の如き「外道は我を執す。此れの無我を立つれば則ち我が所成を成ず」とは、汝今諦聽せよ、若し「虛妄」の言を以て「無我」と及び外道の執する我のまた無自體なるを成立すとなし、此の解をなさば、是の如く是の如くならば、我れ今「法空」を成立するに因たることを汝に開示すれば、此れまた「人無我」の義を成立するなり。何となれば、この「人無我」とかの「法空」とは相離れざるが故なり。かくの如く此の因は人をして信解せしむ。立義は「聲はこれ無常」

【九】若法有自體　云何有變異　梵文「若し自性有らば何ものに變化あらん」と。句義前二句に對應す。

〔四〕婆伽婆此れを說けるは、空義を顯示せんが爲めなり。

釋して曰く、「劫奪」の語は空と別體なし。「彼處に烟あり」と言ふとき、これ「彼處に火あり」と說くが如し。

外人言ふ、「虛妄」の語はこれ無義なるに非ず。これ何の義ありや。謂く如來は諸法の無我を說かず。若し爾らば云何んが「虛妄」の語を說かん。偈に曰ふが如し、

(三)〔五〕法の變異を見るが故に　諸法は無自體なり。

釋して曰く、この偈は何の義を說くや。謂く諸法の變異を見るが故に、諸法の無體なるを知る。云何んが無體なるや。常住に非ざるを以ての故なり。婆伽婆の「虛妄」の語を說けるは道理かくの如し。また偈に曰ふが如し、

〔六〕有體は無體に非ず。

釋して曰く、云何んが有と名づくるや。自體あるが故なり。汝の道理の如くんば諸法は則ち無體となる。而もこれ然らず。偈に曰く、

〔七〕諸法は空なるに由るが故に。

釋して曰く、諸法は我我所なきが故なり。汝の意は是の如し。この故に應に諸法は有體なりと言ふべし。若し此の如くならずんば、偈に曰く、

(四)〔八〕自體が若し非有ならば、　何の法か變異をなさん。

釋して曰く、現見するに此の體は變異あるが故に、この故に定んで變異法ありと知る。この中に驗を立つ。「第一義中には諸法は有體なり。何となれば、體の變異するが故なり。これ若し無體ならば則ち變異なし。石女の兒の如し」。體の變易あるによつて內入等と謂ふ。この故に第一義中に法は自體あり。

【四】婆伽婆說此　爲顯示空義
梵文及什譯と全く同じ。

【五】見法變異故　諸法無自體
變異(anyathābhāva)は「變化」の意にして一物が他物になること。法は存在(bhāva)無自體(niḥsvabhāvatva)は無自性の義にして、此偈「變化するが故に存在は無自性なり」と云ふ意をあらはして重要なり。梵文及什譯とよく一致す。

【六】有體非無體
此句明かな誤譯なり。梵文の asvabhāvo bhāvo nāsti は「無自性なる存在は無し」の意にして漢譯の「有體」は存在の譯語、「無體」は無自性の譯語、「非」は無しの語に相應し、單語凡て一致するも全文を「存在は無自性なるに非ず」と誤讀したるなり。什譯の「無性法亦無」は正し。

【七】由諸法空故
第三偈第四句、梵文及什譯と全く同じ。句義に關しては中論註參照。

【八】自體若非有　何法爲變異
梵文「若し自性無ければ何ものに變化あらん」に正確に一致す。

釋して曰く、云何んが彼の諸行等の法はこれ虚妄なりと知るや。かの諸行等は自體なきが故に。凡夫を誑すが故に邪智にて分別して謂ひて可得となす。故にこれ虚妄なり。また能くかの第一義諦の境界の念等の忘失の[二]因となるが故にこれ虚妄の法なり。「婆伽婆の說」とは、謂く諸經中に於て諸の比丘に告げて是の如き說をなす。「かの虚妄劫奪の法とは、謂く一切の有爲法なり。最上實とは、謂く涅槃の眞法なり。かくの如き諸行はこれ劫奪の法、これ滅壞の法なり」と。聲聞法中に是の如き說をなす。大乘經中にもまた是の說をなす。諸の有爲法は皆これ虚妄にして、諸の無爲法は皆虚妄に非ず。この二阿含に皆諸行はこれ虚妄の法なるを明かす。この義成ずることを得。

論者言ふ、この中に驗を立つ。「第一義中には內の諸法は空なり。何となれば、劫奪法なるが故なり。幻化の人の如し」。

外人言ふ、立義と出因とに差別なきが故に、汝第一義中に諸法は空なりと言ふはこれ所有なし。劫奪の法とはまた所有なし。出因闕くるが故に立義成ぜず。過失あるが故なり。

論者の偈に曰く、

（二三）[三]若し妄ならば奪法無し。　何もの有つて劫奪せらると名づけん。

釋して曰く、汝「立義と出因と皆所有なし」と謂ふは、若し爾らば此れ既に是れ無なり。竟に何物あつて「劫奪せらる」と名づくべけん。無體なるを以ての故なり。譬ふれば兎角の如し。この故に虚妄と劫奪との此の二語はこれ無義なるに非ず。また何の義あつて境界を分別せん。かの自體空がこれ虚妄の義なり。實の如くに有らざること喩へば光影の若し。これ劫奪の義なり。因と立義との此の二は同じからず。この故に我れには立義闕因の過失なし。二過なきが故に所欲の義は成ず。また次に、「劫奪」の語は、佛婆伽婆、煩惱の障を拔き、及び智障の根を永く盡くして餘りなからしめんが故に、此の說をなしたまへるなり。偈に曰ふが如し、

【二】第一義諦境界念等忘失因とは「第一義諦の境界を念ずることを忘失せしむる因」の意なり。刊本には「忘」を「妄」とするも誤植なり。

【三】若妄奪法無　有何名劫奪　梵文「若し劫奪法が虚妄ならば其處で何ものが劫奪せられん」とあり、之に基いて漢譯を訓みたり。

けるが如し。また緣より起るが故なり。芽の自體の如きは自作と名づけず。若し諸大より作らるるを他作と名づくと言はば、この義は然らず。云何んが然らざる。諸大は色に於て名づけて他となさず。何となれば、その外なるを以ての故なり。色の自體の如し。また實有を遮するが故に、色は無自體にして他義は成ぜず。また共作なるに非ず。一一の(作)成ぜざるを以ての故なり。また無因ならず。何となれば、この無因の執は前に已に遮せるが故なり。かくの如く、聲等もまた應に類して破すべし。[二]この故に品初に因由を說きて「苦なるが故に」とは過失あるが故に此の義は成ぜず。今この品中に苦はこれ空義なるを顯示せんと欲するが爲めに、この故に成ずることを得たり。

般若波羅蜜經中に說くが如し、「佛、極勇猛菩薩に告げて言ふ、善男子よ、色は苦に非ず樂に非ず。かくの如く、受、想、行、識も苦に非ず樂に非ず。若し色、受、想、行、識は苦に非ず樂に非ずんば、これを般若波羅蜜と名づく」と。また梵王問經中に說くが如し、「云何んが聖諦と名づくるや。若しくは苦、若しくは集、若しくは滅、若しくは道を聖諦と名づけず。かの苦等の不起なるを乃ち聖諦と名づく」と。かくの如き等なり。また次に、聲聞乘中に婆伽婆は說く、「比丘あつて佛に問うて曰く、瞿曇よ、苦は自作なるや。佛言ふ、不なり。他作なるや。佛言ふ、不なり。俱作なるや。佛言ふ、不なり。無因作なるや。佛言ふ、不なり」と。かくの如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く說くべし。

釋觀行品第十三

また次は、他をして一切諸行の種種の差別は皆無自性なるを解せしめんが爲めに、此の品の起るあり。この中に外人、經を引いて義を立つ。偈に曰ふが如し、

(一)婆伽婆は、彼の　虛妄の劫奪法を說きたまふ。

【二】 以下本品の結語。教證として般若波羅蜜經・梵王問經・阿含を引く。

【一】 婆伽婆說彼 虛妄劫奪法 外人の偈とあれど中論本頌にして、之より批評せんとする相手の立場を示す偈なり。「虛妄劫奪法」は梵文によれば「劫奪法なるものは虛妄なり」の意にして「劫奪法」は「劫奪と云ふ性質をもつもの」の義なり。而して此の二句は梵文及什譯の前二句に相當し、後二句は本論には出でず。其れは「劫奪法は虛妄なり」と云ふを受けて、「一切の行は劫奪法なり、故に諸行は虛妄なり」とあり。

釋して曰く、外人の意は人を以て他となさんと欲す。此の人は無體にして苦を作すこと能はず。何故に作さざるや。その空なるを以ての故なり。空ならば則ち無物なり。云何んが起作せん。無起にして有體なるは、智人の欲せざる所なり。この故に偈に曰く、

〔一七〕他無きに誰か苦を作らん。

釋して曰く、此の「他」の義なし。語意は是の如し。この義を以ての故に自作と他作とはこれ皆然らず。

「俱作」は二作の苦なるが故に過なしと言はば、これを遮せんが爲めの故に阿闍黎の偈に曰く、

(九)〔一八〕若し一一の作が成ずれば　二作の苦を言ふべし。

釋して曰く、一一の作せざること先に已に遮せるが如し。苦は自作に非ずまた他作に非ず。この故に、汝二作の苦を言ふは此の義然らず。また無因ならず。何となれば、此の無因の執は無起品に已に遮せるが如し。此の中に偈に曰く、

〔一九〕自他の二は作らず、　無因にして何ぞ苦あらん。

釋して曰く、此の品は前來の所說にて苦を遮す。若し無因ならば則ちまた苦なし。無因にして苦あらば、かくの如き義なし。第一義中には苦は不可得なるによる。語意は此の如し。

かくの如く種種に觀察するに、かの苦は無體なり。外人、品初に諸陰ありと言ひ、「苦なるが故に」を以て因となせるは、第一義中には此の執は成ぜず。偈に曰ふが如し、

(一〇)〔二〇〕獨り苦を觀じて　四種の義成ぜざるのみならず、
外の有らゆる諸法にも　四種はまた皆無し。

釋して曰く、前に說く所の道理の如く彼の外の色等を觀察するにまた此の義なし。云何んが色は自作ならざるや。何となれば、若しくは有(因)若しくは無因なるも然らざるが故なり。前に已に說

【一七】無他誰作苦。

【一八】若一一作成　可言二作苦
「一一の作」は自と他との各別の所作なり。「二作」は自他の兩者によって作らるゝ共所作(ubhābhyāṃ kṛtam)の義なり。

【一九】自他二不作　無因何有苦
以上四句梵文及什譯に全く同じ。

【二〇】不獨觀於苦　四種義不成
外所有諸法　四種亦皆無
梵文及什譯に全く同じ。四種(cāturvidhyam)とは、自作・他作・共作・無因作の四種なり。四作を否定するは緣起を立つるなり。

ものを曉知せしめんとし、この故に、偈に曰く、

(七)[一二]自作の苦の成ぜざるとき、何處に他作あらん。
　若し他人が苦を作さば、彼れは還つて是れ自作なればなり。

釋して曰く、自作の苦なし。而して指示して他作の苦と言はば、この語は然らず。別の相續の如し。決定報ある業に他作と言ふは此の如き義なし。この故に偈に言ふ、「何處に他作あらん」と。語意は是の如し。汝「位に差別あつて人に異なし」と言はば、これ妄語となす。この義を以ての故に、若しくは自作の苦若しくは他作は、これ皆然らず。

また次に、[一三]異の尼犍子かくの如き言をなす、人自ら苦を作すが故に苦はこれ自作なり。而も苦は卽ち人ならず、名づけて他作となす。この故に自作と他作との二門は成ずることを得と。

論者の偈に曰く、

(八)[一四]自作の苦は然らず。

釋して曰く、人の苦を作すもの無し。此の義かくの如し。苦は無自體、人は無體なるによるが故なり。若し「苦體がこれ人なり」と謂はば、義また然らず。何となれば、偈に曰く、

[一五]苦は還つて苦を作らざればなり。

釋して曰く、先の偈に言へるが如し。苦が若し自作ならば則ち從緣起ならずと。此の二句に彼れは已に遮せるが如し。語意は是の如し。また次に、苦が還た苦を作さば卽ちこれ果が還た果を作すなり。また苦は自ら起つて因緣を待たざるなり。此の二種は世の見ざる所なり。

汝前に說いて「苦は卽ち人ならず、此の人が苦を作すを他作と名づく」と言へるは、此の說は善ならず。偈に曰ふが如し、

[一六]若し他作の苦といはば、

【一二】自作苦不成　何處有他作
　若他人作苦　彼還是自作
梵文及什譯に全く同じ。後二句が論證の關係によつて前二句に結び付くは梵文によつて示さる。

【一三】尼犍子說の批評。

【一四】自作苦不然
「苦は自所作のものに非ず」の意なり。

【一五】苦不還作苦
梵文には「彼れが彼れ自身によつて作らるゝこと無ければなり」とあり。苦は苦自身によつて作られずの意にして前句の理由になる。

【一六】若他作苦者
梵文「若し他が自ら作れるに非ずば苦は如何にして他所作ならん」とあり、次句と合して之の義譯と見るべし。

釋して曰く、若し人、他作の苦を得んと欲すれば法體は成ぜず。立義に過あり。而も實には然らず。云何んが然らざるや。此の中に驗を立つ。「第一義中には調達の後陰は先陰に於て他に非ざるなり。何となれば、調達の陰なるが故なり。譬ふれば後の自陰の體の如し。また彼の苦體の相續は別ならざるが故なり。立義と譬喩とは前の如く應に知るべし。

また次に、「人」ありと執する者是の如き言を說いて。「他の所造の業に自が果を受く」といふは、是の義は然らず。何となれば、諸位の差別は皆「人」の作なるが故に自作の苦と名づけ、また他作と名づく。二家の所立は我れに此の過なし。

論者言ふ、汝は但だ此の語あるも、これまた然らず。偈に曰ふが如し。

(四)若し「人」が自ら苦を作すといはば、[一〇]　苦を離れて別の「人」無し。
　何等か是れ彼の「人」にして、　「人」自ら苦を作すと言はん。

釋して曰く、何等かこれ苦なる。謂く五陰の相なり。かの苦陰を離れて別に「人」あること無し。云何んが「人」が苦を作すと言はん。また次に、若し汝執して「人は五陰と不一不異なり」と言はば、この義は然らず。何となれば、但だ五陰に於て調達の名を施(設)するのみ。「人」の得べきもの無し。緣起なるを以ての故なり。譬ふれば瓶等の如し。是の如く第一義中には彼の「人」は成ぜず。「人」既に成ぜずんば苦を作す者なし。

また次に、「他人」が苦を作すはこの義然らず。偈に曰ふが如し。

(六)若し他人が苦を作して[一一]　持して此の人に與ふれば、
　苦を離れて何ぞ他有つて　而も他が苦を作すと言はん。

釋して曰く、苦を離れて人なし。前に已に遮せるが故なり。人に別體あるを證知せしむるは驗なきを以ての故なり。かくの如くして自作の苦は不可得なり。先に已に驗を立てしも、未だ解せざる

【一〇】若人自作苦　離苦無別人　何等是彼人　言人自作苦
人は svapudgala(人自體)の譯語にして、作者受者として苦陰の主體たるべきものをさす。我(ātman)の概念と同じ。又第二句は梵文には「苦を離れて更に人自體あらん」とあり、此の裏面の意は「而も實には苦を離れて人自體無し」と云ふに在り。右の漢譯は此の裏面の意味を取り出せるものなり。什譯は梵文の儘を寫す。

【一一】若他人作苦　持與此人者　離苦何有他　而言他作苦
梵文及什譯第六偈に相當しよく一致す。第五偈に相當するものは本論に缺く(中論參照)。又他人は parapudgala の譯。之に對すれば前の svapudgala は「自人、自己」と譯しても可なり。

果別ならず。前に相思あり、此の刹那の作なるを名づけて自作となす。前の刹那の思の積集する所の善不善の業によつて彼の業の滅する時後のために因となる。かの燈焰の前が後の因となるが如し。かくの如く展轉に相續して乃し果を得るに至る。故に不作にして得るに非ず。また作し已つて失滅するに非ず。若し汝の意に「諸行の刹那に先に集むる所の業は後の果を受けず。何となれば、その異なるを以ての故に。別の相續の如し」と謂はば、この義は然らず。偈に曰ふが如し、

(七)處處の緣起法は　かの緣に即是ならず、
またかの緣に異ならず、　不常にしてまた不斷なり。

釋して曰く、我が悉檀は是の如し。汝「異なるが故に」と立てて因となすは此の義成ぜず。何となれば、先心の刹那より傳來する所の業は對治未だ生ぜずんば、相續して果を與ふるによりて功能勝異なるを以ての故なり。譬ふれば紫鑛汁を以て(八)摩多弄伽の(種)子を浸し、之を種うれば後時に華中に紫鑛色あるが如し。世諦に違せず。

また次に、丈夫ありと說く者言ふ、一邊は業を作し、一邊は果を受く。上の如き過なし。

論者言ふ、かの一邊は不作にして得、此の一邊は已に作して失壞す。作業の邊は永く果を得ざるを以て、此の過失あり。

外人言ふ、我はこれ一なるが故に過なし。云何んが一と知るや。一數と相應するが故なり。

論者言ふ、我が一數と相應するは此の如き義なし。何となれば、有なるによるが故なり。譬ふれば一數の如し。この義を以ての故に苦は自作に非ず。

また他作ならず。此の義云何ん。偈に曰ふが如し、

(九)若し前陰が後に異り　後陰が前に異らば、
此の陰は彼れより生じて　「他作の苦」と言ふべし。

【七】處處緣起法　不即是彼緣　亦不異彼緣　不常亦不斷　他本に此の偈なし。觀法品第十偈と略ゝ同じ。同偈を引證せしものと考へらる。

【八】摩多弄伽(mandāraka)。花樹名。

【九】若前陰異後　後陰異前者　此陰從彼生　可言他作苦　梵文に正確に一致す。什譯は稍義譯せり。

義は正に此の如し。

また次に、[五]鞞世師言ふ、身等の諸根と覺聚とは別なりと雖も、而も我は異なし。彼れは一にして偏住し、また是れ作者にして彼れは此の苦を作る。故にこれ「自作」なり。若し「諸行は刹那刹那に生滅して無常なり」と言はば、此の說には過あり。何等の過を得るや。此の心の刹那と倶に生ずるの苦は卽ち此の苦の刹那の心の作ならず。故に自作に非ず。また他作にも非ず。何となれば、他の所作の業に自が果を受くるは、此の義然らざればなり。汝の意に若し他作ならしめんと欲すれば、則ち自の悉檀に違す。

論者言ふ、此の中に驗を立てん。「汝、丈夫は卽ちこれ作者なりと言ふは、この義然らず。何となれば、その常なるを以ての故なり。譬ふれば虛空の如し」。常の驗を以ての故に作者に非ずと知る。丈夫が作者なるは法の自體を破す。立義の過あるが故なり。

また次に、若し汝定んで「我が作る」と謂はば、此の苦は卽ち緣より起らず。かくの如き過あり。この義は云何ん。我が法中を以てすれば苦を名づけて我となすなり。義意は是の如し。

また次に、若し「丈夫の作業が卽ちこれ自作にして餘の因緣を藉らざるには非ず。共に作して後に起ることを得」と言はば、この義は然らず。何となれば、無量の因と共に我が苦を作るによる。應に是の如く知るべし。かの乾草と及び牛糞等が火の爲めに緣をなすが如し。義意正に爾り。

また次に、調達の苦は調達の我の作に非ず。何となれば、苦なるによるが故なり。耶若の苦の如し。汝前に說いて「若し刹那の諸行等には別の作者なし、かの業の所作が卽ちこれ自作なり」と言へるは、今當に汝に答ふべし。第一義中には苦は不可說なるが故に我れに過なし。かの世諦中には相似相續して因果別ならず。世間咸見て是の如き說をなす。「彼處の燈此(處)に來る」、「菴羅樹はこれ我が種うる所なり」と言ふが如く、此れまた是の如し。後時に[六]相あるは彼の前思と相續して因

所依なり。以上四句梵文及什譯と同じ。但し此の漢譯の「現、未來」は梵文及び什譯には「此れ、彼れ」の語を以てあらはす。

【五】勝論說の批評一。

【六】相は「相思」の「相」と共に相の義と見る方解し易し。

巻の第八

釋觀苦品第十二

また次に、苦は無自性にして、對治する所は空なり。定の執を遮せんが故に此の品の起るあり。

外人言ふ、第一義中にはこの諸陰あり。何となれば、苦なるによるが故なり。これ若し無くんば則ちかの苦なきこと第二頭の如くならん。陰がこれ苦なるは經の偈に曰ふが如し、

[一]苦集も亦世間の見處なり、　及び彼れは有なり。

この義を以ての故に、第一義中にこの諸陰あり。

論者言ふ、虚妄に苦を分別するは然らず。偈に曰ふが如し、

[二]有る人、苦の　自作、及び他作、
共作、無因作を得んと欲す。　彼れは果として皆然らず。

釋して曰く、第一義中に種種に無量に理の如く觀察するに彼れは皆然らず。云何んが觀察するや。苦は自作に非ず。偈に曰ふが如し、

[三]苦が若し自作ならば　則ち從緣生ならず。

釋して曰く、自作なるによるが故に、則ち因緣を藉らず。この故に苦が緣より起るは即ち此の義なし。而も彼れは然らずしてまた得んと欲するが故に。此の義は云何ん。謂く緣より起るなり。偈に曰ふが如し、

[四]現(在)の陰を因となすによつて　未來の陰は起ることを得。

釋して曰く、第一義中には諸陰の相續を調達と名づくるも、調達の作には非ず。何となれば、緣を藉りて起るが故なり。譬ふれば一有は現(在)の陰を因となすによつて後の陰を牽き起すが如し。

【一】苦集亦世間　見處及彼有　本論に於ては之を以て經の偈となせども、西藏譯に於ては之を以て俱舍論卷一の偈となし、經に曰くとして「略して說くに五取蘊は苦なり。」といふ一句を引用せり。然るに本論は誤りてこの經文を省略し、直ちに俱舍論の偈文を擧ぐ。而して本論觀邪見品第二十七の最初に於ては此偈が散文として引用せられ、しかも明かに「俱舍論中に說くが如し」と記さる。その引文の亂雜なること餘りに甚だし。本譯觀邪見品第二十七註一を參照せよ。

【二】有人欲得苦　自作及他作　共作無因作　彼果皆不然　梵文及什譯と同じ。「彼れは果として皆然らず」とは、自作他作共作、無因作を考ふるは緣起したる果としての意味を失ふの意に解す。中論註參照。

【三】苦若自作者　則不從緣生　自作(svayaṁ kṛitam)は自所作(それ自身にて作られたるもの)の義。「從緣生」はpratītya bhavati(相緣りて起る)の譯語にして「緣起」の義なり。「苦が自所作ならば苦は緣起するものに非ず」となり。

【四】由現陰爲因　未來陰得起　陰は五蘊身にして是れ苦の

との如し。かくの如く、相より先に體あるはこれまた然らず。何となれば、その體なるを以ての故なり。譬ふれば大丈夫の體の、丈夫の相より先に在らざるが如し。また地は堅より先ならざるが如し。また次に、體と相との二法の同時に起るは、これまた然らず。何となれば、同時に起るが故なり。譬ふれば香と味との如し。前に廣く破せるが如し。品初に成立せるが如きと、及び彼れの過と、所說の苦の空なるとを、人をして了達せしむるが是の品の明かす所なり。この義を以ての故に、此の證は成ずることを得。

般若波羅蜜經中に說けるが如し。「佛、極勇猛菩薩に告げて言ふ、善男子よ、色は不生不死なり。かくの如く受、想、行、識は不生不死なり。若し色、受、想、行、識が無生無死ならば、これを般若波羅蜜と名づく」と。また次に「極勇猛よ、涅槃の無際なるが如く、一切の法もまた無際なり」と。かくの如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く說くべし。

釋して曰く、この義を以ての故に第一義中には應に戯論を起すべからず。品初の所說の如く、生と老と死とを以て因となし、生死を成立するは此の義成ぜず。前所說の過失を免れざるを以て、生老等を前、後、中に約して觀察するが如きは成ぜず。自餘の諸法も皆また類して破す。これまた云何ん。今當に顯示すべし。偈に曰ふが如し、

[一〇](七)是の如く諸の因と果と、　及び彼の體と相と、
受と及び受者等の、　所有の一切法は、
[一一](八)但だ生死に於て　前際の不可得のみならず、
かくの如き一切法は　悉くまた前際なし。

釋して曰く、一切法とは謂く能量と所量、智と及び所知、得解脫者と解脫行等なり。かの所立の因果、體相の如き、これ皆然らず。その義云何ん。今少分を說かん。謂く第一義中には彼の稻穀等の芽は先には有らず。何となれば、その果なるを以ての故なり。芽の自體の如し。若し汝因より先の果を得んと欲すれば、これまた然らず。何となれば、第一義中には因より先に果なし。無因なるを以ての故なり。

[一二]僧佉人言ふ、かくの如き因ありて能くかの果を了す。

論者言ふ、汝「因ありて能く果を了す」と謂ふは、これまた然らず。何となれば、かの因と種種の果とはまた別なるが故なり。譬ふれば泥團より彼の瓶等を作るが如し。また次に、能了の物と及び所了の物とは、彼れは別異あり此れは別異なし。日、寶珠、燈、及び藥草の光には差別あり、瓶等には別なきが如きが故なり。若し因果同時と謂はば、これまた然らず。第一義中を以てすれば、稻芽の二種は同時なることを得ず。何となれば、一時に起るが故なり。牛の二角の如し。また次に、垂壺等の相が牛體より先に在るは此の如き義なし。何となれば、依止の無體なるが故なり。壁と畫

【一〇】如是諸因果　及與彼體相　受及受者等　所有一切法
「體」は梵文には可相(lakṣya)とあり。可相は相によつて相せられる存在自體を指示するが故に「體」と譯せるは適切なり。又第四句はそのまゝ次偈にかゝる。

【一一】不但於生死　前際不可得　如是一切法　悉亦無前際
以上二偈梵及什譯と全く同じ。本品註三を參照せよ。

【一二】以下數論の了因の說を難じて本品の結語とす。敎證として般若波羅蜜經を引く。

た次に、此の中に驗を立つ。「老死より先には生あることを得ず。何となれば、彼の自體なるが故なり。譬ふれば火の暖より先に在るが如し」。

また次に、若し汝かくの如き過失を避けんと欲して、かくの如き言をなして「先に老死あり、後に生あり」といはゞ、これまた然らず。偈に曰ふが如し、

（四）若し[七]先に老死あり　　而して後に生あらば、
　未だ生ぜずんば則ち無因なり、　云何んが老死あらん。

釋して曰く、法として未だ生ぜずして而も老死あること無し。依止無體なるを以ての故なり。語意は是の如し。また次に、此の中に驗を立つ。「生より先に老死あるはこれ則ち然らず。何となれば、彼れを體となすを以ての故なり。譬ふれば住の如し」。

外人言ふ、老死は生に隨著するが故に是の如き過なし。

論者の偈に曰く、

（五）[八]生と及び老死との、　倶時なるは則ち然らず。
　生じつつある時に卽ち死するが故に、　二つは倶に無因を得ん。

釋して曰く、何故に然らざるや。生じつつある時に卽ち死するは、此の如き義なし。何となれば、生は無體なるが故なり。此の義は世間に無き所なり。生が無體ならば何の過失を得るや。二は倶に無因の過を得。二とは謂く老死と同時なるが故なり。共に生ずるを以ての故に、老死の如きは生の因に非ず。今の生もまた老死の因に非ず。この故に老死と同時に起るは此の義然らず。此の觀察によるが故に偈に曰く、

（六）[九]若し彼の先、後、共の　次第皆然らずんば、
　何故に戲論を生じて　生と老死とありと謂ふや。」

【七】若先有老死　而後有生者
未生則無因　云何有老死
第三句は梵文の譯としては正確ならず。文章上「無因」は前二句の結論になり「未生」は次の句にかゝる。卽ち「若し先に老死あり後に生あらば則ち無因なり。未だ生ぜざるに云何んが老死あらん」とあるべきなり。

【八】生及於老死　倶時則不然
生時卽死故　二倶得無因
梵文及什譯に同じ。

【九】若彼先後共　次第皆不然
何故生戲論　謂有生老死
梵文及什譯と同じ。

論者の偈に曰く、

(二)[四]此れ既に前後なし　かの中は何ぞ得べけん。

釋して曰く、かの中體の如きは不可得なるが故なり。語義は是の如し。譬ふれば幻師の幻作せる丈夫の如し。かの相續に於て中體を求むるも此の如き義なし。何となれば、前後は成ぜざるを以て中は無體なるが故に。汝の喩は非なり。所說の過の如きは今還つて汝に在り。かくの如く諦かに生死の無體なるを觀る。偈に曰く、

[五]是の故に前、後、中の　次第は此れ然らず。

釋して曰く、前、中、後とは謂く生、老、死なり。外人若し「生死に自體あり。何となれば、生と老と死とは有なるが故に。石女に兒なきが如くに生老死ありとは說くべからず」と言はば、此の執は然らず。何となれば、かの石女の兒の生老死と初中後とは成ぜざるが故に因の義は成ぜず。譬喩は無體なり。第一義中には一物の生等の自體成ぜざるを以ての故なり。

また次に、云何んが生等の初中後の次第は成ぜざるや。應に審かに觀察すべし。偈に曰ふが如し。

(三)[六]若し生は是れ先にして　老死は是れ其の後なりと謂はば、
生には則ち老死なく　不死にして而も生あらん。

釋して曰く、若し汝の意、生を先となすと謂はば、應に老死を離れて獨り自ら而も生ずべし。若し定んで物ありて彼の生を離るるは、かくの如き物體は終に不可得なり。譬ふれば火馬の自體無起なるが如し。何となれば、馬は火に非ざるが故なり。語意は此の如し。「先に無にして今起る」を生と名づけ、「新新に變異する」を老と名づけ、「命根斷壞する」を死と名づく。また次に、「不死にして生あらん」とは、謂く前世に死せずして是の如くに生ずるが故なり。然も(之は)所欲に非ず。ま

【四】此既無前後　彼中何可得
前後の原語は agra, avara なれば什譯の如く「始、終」の方可なり。「始め終り無ければ中間も無し」の意なり。

【五】是故前後中　次第此不然
此の場合の「前後」の原語は pūrva, apara にして、前の「始終」と異り、正しく「前後」を意味す。又此場合の「中」は前句の中(madhyam中間)と異り、sahakrama の譯語にして、「同時」を意味す。什譯には「共」とす。

【六】若謂生是先　老死是其後
生則無老死　不死而有生
梵文及什譯と全く一致す。但だ梵文の方意義明瞭す。「若し先に生あり後に老死あらば、又生は老死を離れてあり、又不死なるものが生まれん」と。

ば、法體成ぜずして譬喩無なるが故なり。かの稻穀等は世諦門中にてまた無始なりと雖も而も滅壞するを見る。汝難を立つるは義と相違す。

また次に、異の聰慢者ありて言ふ、汝の婆伽婆は一切智なし。何となれば、彼れは生死に初際なきを說いて自ら己れ無智なるを顯はさんと欲するが故なり。譬ふれば死屍に覺了する所なきが如し。

論者言ふ、執着を遣らんが故に是の如き說をなす。この義は云何ん。諸の外道等は生死を分別して初際ありと謂ふ。この故に佛は初際あること無しと言ふ。初際なしとは、即ち生死の無始なるを說くなり。云何んが無始なりや。その無なるを以ての故なり。かくの如く、生死は無始なるが故に初際は見るべからず。婆伽婆は彼れ(初際)に於て無智なるに非ず。また次に、「生死は無際」とは此の中に驗を立つ。「第一義中には諸陰は先のに似て是の如くに有らず。何となれば、前際なきが故なり。譬ふれば幻主の幻丈夫を作すが如し」。

外人言ふ、無分別の識は、彼の幻主所作の幻人の色等を取つて境となすにより、かの諸色等は後時中に於てもまた是の如くに有るが故に、譬喩は無體なり。

論者言ふ、幻主所作の幻丈夫は自ら實體なし。見もまた是の如し。無分別の識の色境界中に幻作の丈夫は自體空なるによるが故に、譬喩は成ずるを得て無體の過なし。この故に汝「生死はこれ有なり、及び彼れを盡さんが爲めの故に」と言ひ、佛說を引いて因となすは、是れ皆成ぜず。

外人言ふ、第一義中に陰の相續あり、これを生死と名づく。何となれば、かの「中」は有るが故なり。これ若し無くんば彼の「中」もまた無し。譬ふれば兎角の如し。生死中に染あり淨あるによるが故に、生死はこれ有なり。我が所欲の義は既に成立せるが故に、汝「因となすは成ぜず、及び義に違す」と言ふは、これ則ち然らず。

釋して曰く、未だ聖道の對治を起さざるより已來、生老死相續して息まず、展轉に因をなすにより初起は定まること無し。この故に無際なり。無邊の成立は世諦中の說にして第一義には非ず。信心ある人は婆伽婆の不顚倒の語を信ず。不信者には非ず。何となれば、顚倒心の人は相似の驗を說く。彼れを對(治)せんが爲めの故に是の如き說をなす。かの劫初の衆生は、身根覺聚皆前世の善不善の業の集因によつて成ぜらる。何となれば、能く苦樂法等の爲めに因を起すが故なり。今現在の身根と聚等の如し。かくの如く共に境因を取らざるが故に、饒益長養すべきが故に、能く他のために饒益をなすが故に、他の顚倒の因を作るが故に、散壞すべき法なるが故に、共に境界の因を取るがための故に。此の如き等の因と立義と譬喩とは前に廣く說けるが如し。應に此の如く知るべし。

外人言ふ、生死に初めあり。何となれば、有邊なるを以ての故なり。法若し有邊ならば無始と謂ふに非ず。譬へば瓶等の如し。正智起る時に生死の邊を見るにより、我が所說の如きは因に力あるが故に、この故に定んで知る、生死に初めあり。

論者の偈に言ふ、

　[三]獨り生死に於て　初際の不可得なるのみに非ず、
　一切法もまた然り　悉く初際あること無し。

釋して曰く、瓶等は初めなし。何となれば、展轉の因にて起るが故なり。初めは既に成ぜず。譬喩は則ち壞して立義の過あるが故に。汝「有邊」と言ひて因となすは義また然らず。何となれば、虛妄に「生死に因あり」と分別するは、佛の記せざるが故なり。この義は後に當に說くべきが如し。

外人言ふ、若し汝生死の無始を得んと欲すれば、かくの如くならば生死はまた應に無終なるべし。何となれば、無始なるを以ての故なり。譬ふれば丈夫と及び彼の虛空の如し。

論者言ふ、汝丈夫と及び餘法の無起を言ふは、世諦中に於てもまた應に爾るべからず。何となれ

【三】本品第八偈を茲に置けるなり。

　非獨於生死　初際不可得
　一切法亦然　悉無有初際

この第八偈を後には「不但於生死、前際不可得、如是一切法、悉亦無前際」と譯出せり。兩者その意義に於て異るなしと雖も、譯語の不整頓たる譏を免れず。

をして生死に自の體性なきを解悟せしめんと欲して此の品の起るあり。

外人言ふ、第一義中にこの五陰あり。何となれば、婆伽婆は別名を作つて說き、及び彼れを盡さんが爲めの故に勤方便して說けるによる。これ若し無くば如來は別名を作つて說くべからず。また彼れを盡さんが爲めの故に是の如き說をなさず。第二頭なければ、眼病むと言ふべからざるが如し。此れ(五陰)は有なるによるが故に別名を作つて說き、及び彼れを盡さんが爲めの故に、是の如き言を說く、「諸の比丘よ、生死は長遠より來るありて無際なり。諸の凡夫人は正法を解せず、出要を知らず。この故に汝等生死を盡さんが爲めの故に應に隨順して行ずべし。應に是の如く學すべし」かくの如き義により因を說くに力あり。この故に當に彼の陰等ありと知るべし。

論者言ふ、汝聖言を引くと雖も而も未だ聖旨を詳かにせず。この義は云何ん。佛世尊は諸の凡夫の無始より已來、生死中に於て未だ對治を起さず、對治なきが故に流轉息まず、煩惱より業を生じ、業より生を生じ、生の相續によつて盛んに諸苦を受くること世の庫藏の如くなるを見るに、佛此れを見已るが故にこの言を說く。生死は長遠にして猶ほし幻焰の如し。また生死の苦は種種無量なり。如來は生死を盡さんと欲する爲めの故に、衆生を勤精進に建立す。若し諦かに觀察すれば、生死涅槃は第一義中に於ては毫釐の差別なし。若し汝第一義中に生死涅槃に差別あらしめんと欲すれば因の義は成ぜず。若し世諦中に因を分別すれば譬喩は無體なり。佛先に「生死は無際なり」と說けるが如きは、彼の無因を說く輩を對破し、有因を明かさんが爲めに、初めて諸法を能生するに起ありと言ふ者の爲めに、如來は彼の一分の衆生の爲めに、是の如き說をなす。

諸の外道あつて過失を求めんと欲し、佛世尊に問ふ。偈に曰ふが如し、

(二)生死の有際なるは不なり、　佛は畢竟じて無なりと言ひたまふ。

此の生死は無際なり　前後も不可得なり。

【三】生死有際不　佛言畢竟無

此生死無際　前後不可得

「有際、無際」は此の漢譯では單に「際限あり、際限なし」の意を顯はさんとせる如くなるが、梵文には第一句は「(生死の)前際は認知せられず」、第三句は「生死は始め終り無し」とあり。之の義譯と見て然るべし。

樹は佉陀羅の根莖枝葉と異體なるを得ず。何となれば、根等の壞する時、樹もまた壞するが故なり。根等の自體の如し。また次に、第一義中には彼の經緯等は絹の體と異らず。何となれば、觀あるを以ての故に、此等の壞する時彼れもまた壞するが故に。經の自體の如し。一體の如く、異體と及び一異とも俱に前の如き過失あり。これ應に廣く說くべし。

かくの如きによるが故に、第一義中に理の如く諦觀すれば、若しくは一若しくは異にしても此の體は成ぜず。世諦中に於て自在に說かば、世の所解に違せず。戒定慧に隨順するは世諦中の說なり。世人執して第一義諦となす。此れを遮せんが爲めの故に、偈に曰ふが如し、

(二九)若し我の眞實と、　諸法の各各の異とを計すれば、
　應に知るべし、彼の說人は　聖教の義を解せず。

(三〇)釋して曰く、云何んが聖教の義を解せざるや。現見と及び驗にて義は皆成ぜざるに而も執して實となすが故に解せずと名づく。此の意は是の如し。この義を以ての故に、此の品中に不一不異の別緣起の義を明して行者に開示すること、是の故に成ずることを得。

(三一)梵天王問經中の偈に曰ふが如し、
　身を離れて法を見ず　法を離れて身を見ず
　不一にしてまた不異なり　應に是の如く見るべし、と。

釋して曰く、「かくの如く見る」とは謂く彼の見を見ざるなり。かくの如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く說くべし。

釋觀生死品第十一(一)

また次に、前品に已に諸法の無性なるを遮したり。空の對治する所は無自性なるが故なり。今他

【二九】若計我眞實　諸法各各異　應知彼說人　不解聖教義　梵文及什譯と一致す。

【三〇】以下本品の結語。「現見と驗」は現量と比量なり。教證として梵天王問經を引く。

【三一】離身不見法　離法不見身　不一亦不異　應當如是見　西藏譯に依れば、この梵天所問經の文は前後一聯の散文なるに、本論に於てはその前半を偈頌とし、その後半を長行とす。

【一】生死(saṃsāra)は「流轉」とも譯さる。中論及び梵本には「本際品」、西藏無畏論には「生死品」とあり。生死流轉に始終なきを論じ、延び生死そのものゝ無自性を明す。

如き義によつて根本は成ぜず。偈に曰ふが如し、

(二五)[二八]已に火と及び薪とを遮したり、　自と取とも次第の如し。
一切は淨にして餘り無し。　瓶衣等もまた爾り。

釋して曰く、云何んが方便して自と取とを遮するや。此の中に驗を立つ。「第一義中には彼の自と取との二は一體なることを得ず。何となれば、作者と作業なるが故なり。斫者と所斫との如し」。「彼の自と及び取とはまた異體ならず。何となれば、觀あるを以ての故に。また餘物なるが故に。取の自體の如し」。取門もまた應に是の如く廣く說くべし。これまた云何ん。「第一義中には取は自我と異體なるを得ず。何となれば、觀あるを以ての故に、また餘物なるが故に。譬ふれば自我の如し」。かくの如く、第一義中には調達の取は若しくは成ずるも成ぜざるも、調達の我の所取とならず。何となれば、觀あるを以ての故なり。また我なるを以ての故なり。譬ふれば餘の調達の我の如し。また次に、第一義中には調達の我は調達の取を取らず。何となれば、取なるを以ての故なり。耶若の取の如し。是の如く、調達の取は若しくは成ずるも成ぜざるも調達の我に觀ぜず。何となれば、取なるを以ての故なり。耶若の取の如し。

かくの如く火と薪と、我と取とは次第に已に說きたり。「一切は餘り無し」とは法と喩と成ぜざるが故なり。「瓶衣等」とは、かの瓶等の物の若しくは果、若しくは因の總實と別實を應に是の如く知るべし。云何んが驗するや。「瓶と土との二の如きは第一義中には一體なるを得ず。何となれば、作者と及び業なるが故なり。斫者と所斫との如し」。「また異體ならず。何となれば、觀あるが故に、また果なるが故に。土の自體の如し」。薪と火とを遮せるが如く、色と非色の法もまた應に類して遮すべし。これまた云何ん。佉陀羅樹の根莖枝葉の如きは佉陀羅樹と一體なるを得ず。何となれば、一枝を斫る時、一切を斫るに非ざるが故なり。譬へば棗樹の如し。また次に、第一義中には佉陀羅

式なり。觀法品第一偈參照。

【二八】已遮火及薪　自取如次第
　一切淨無餘　瓶衣等亦爾
　梵文「火と薪とによつて我と取との系列は說明せらる。一切は完全に(說明せらる)、瓶衣等をも含めて」とあるに正確に合す。「自」は我(ātman)にして茲では人我を意味す。「取」は有漏の五蘊の總稱なり。

「薪なくして火あり」と言ひ、或は待ありと言ひ、或は待なしと言ふ。二つ倶に成ぜず。何となれば、若し薪體なくば火は所依なし。依止なきが故に去は則ち成ぜず。「薪中また火なし」とはこの義云何ん。起あるによるが故なり。譬ふれば識の如し。

また次に、已に薪火を破したり。餘もまた同じく遮す。偈に曰く、

〔二五〕薪の如くに餘もまた遮す、　去來中に已に說きたり。

釋して曰く、第一義中には已去と未去と去時とに去なきが如く、已燒と未燒と燒時とに燒なきの義もまた是の如し。何となれば、燒なるを以ての故なり。火の自體の如し。諸の是の如き等は此の中に應に說くべし。また次に、去者は去せず、未去者は去せず、(去者と未去者とを)離るるもまた去なきが如く、今また第一義中には燒者は燒けず、未燒者も燒けず、(燒者と未燒者とを)離るるもまた燒なし。かくの如き等の驗は先に已に廣く說きたり。何となれば、二作は空なるが故に、燒者なきが故に、二倶の過なるが故に。譬ふれば土塊の如し。應に是の如く說くべし。

また次に、偈に曰ふが如し、

(一四)〔二六〕薪に卽するも是れ火に非ず、　薪に異るもまた火無し。

釋して曰く、一體を遮するが故なり。異體を遮するが故なり。その次第の如く先に已に解說したり。偈に曰く、

〔二七〕火もまた薪を有せず、　火中にもまた薪無く、
薪中にもまた火無し。

釋して曰く、牛を有する者の如く、水中の華の如く、器中の果の如く、彼れは是の如きが故に火薪は成ぜず。譬喩は無體なり。品初の立義の如き「取と取者とあり互に相觀ずるが故なり、火と薪との如し」とは、此の譬は無きが故に過失を免れず。薪火の一異は無體なるを遮せるが故に、此の

【二四】火不餘處來　薪中亦無火　梵文及什譯と同じ。

【二五】如薪餘亦遮　去來中已說　此二句の譯疑問なり。梵文には「此の薪に於て(薪に關して)餘のことは去時已去未來中に說かれたり」とあり。卽ち以上の論議では薪火各別に自體を持して而も相因待すと云ふを遮せるが、薪に關して其の他のこと、(卽ち火が薪を燒時に燒くか、未燒に燒くか等のこと)は去來品中に說けりとの意なり。「如薪餘亦遮」では意味通ぜず。而も單語は梵文と一致する故に誤譯と見て然るべし。

【二六】卽薪非是火　異薪亦無火　梵文に一致するも譯文不明瞭なり。「薪そのものが火なるに非ず、火は薪と異れるにも非ず」の意なり。

【二七】火亦不有薪　火中亦無薪　薪中亦無火　梵文に正確に一致す。梵文には二句に纏まれるも譯して三句となる。隨つて第十四偈は此の漢譯では五句となる。而して「薪そのものが火なるに非ず。火は薪に異るに非ず。火が薪を有するに非ず。火中に薪無く、薪中に火無し」の五種の言ひあらはしは、五蘊に關して我を否定する場合に用ひらるゝ一定した立言の形

にはまた是の如く問はん。かの二角中、何等かこれ左にして何等かこれ右なるや。世人の解する所は相觀によるが故に、第二の成ずることを得るは、此の如き義なし。

また次に偈に曰ふが如し、

(二一)若し體が待して成ずることを得れば　(未だ)成ぜずんば云何んが待せん。
　成ぜずして而も待あるは、　此の待は則ち然らず。

釋して曰く、謂く彼の物成ぜずんば此れは所待なし。語義は是の如し。此の中に驗を說かん。「第一義中には薪は火に觀ぜず。何となれば、火體は成ぜざるが故なり。地水等の如し」。また次に、偈に「成ぜずして待あり」と言ふは、外人若し此の如き說をなさば過失あるが故なり。云何んが過失ありや。偈に「此の待は則ち然らず」と言ふ、待なきを以ての故に、虛空華の如し。また次に、此の待は然らず。何となれば、薪の體は無なるが故なり。譬ふれば餘物の如し。火門もまた應に是の如く說くべし。

また次に、彼れを觀察すれば、偈に曰ふが如し、

(二二)火の薪に觀ずべきもの無く、　薪は火に觀ぜざるに非ず。

釋して曰く、薪は火に觀ぜず、薪體は成ぜず。此の如き道理は先に已に說けるが如し。また異體を遮す。かの別の相續の異は成ぜざるが故なり。偈に曰く、

(二三)薪の火に觀ずべきもの無く、　火は薪に觀ぜざるに非ず。

釋して曰く、相待を遮するが故に、及び異體を薪す、應に知るべし。

また次に、偈に曰く、

(二四)火は餘處より來らず、　薪中にもまた火なし。

釋して曰く、異體を遮するが故に、及び去と實に幷びに薪火あるとを遮するが故に。或は有る人

【二一】若體待得成　不成云何待　不成而有待　此待則不然
體は存在(bhāva)の譯。前二句は梵文及什譯とよく一致するも、後二句には疑問あり。此の漢譯の如くでは前二句を換言せるに過ぎず。梵文には「若し已に成立して因待すとすれば、此のものゝ因待は可能ならず(卽ち已に成立せるものには因待は不必要)」とあり、之によつて「未だ成立せずんば因待せず」と云ふ前二句と對應することゝなる。什譯も梵文に一致す。卽ち燈論は梵文に已成(siddha)とあるを「不成」と譯せるなり。而して梵文 siddha の前に否定辭の省略符「ˋ」を置けば不成(又は未成)の意となる。燈論の原本にその省略符のありしものか、又は譯者が解釋によつて補へるものか、何れにしても茲は無き方が可なり。

【二二】無火可觀薪　薪非不觀火
梵文に一致するも譯拙なり。「薪に因待しても火無く、薪に因待せずしても火無し」の意なり。什譯は正確に此の意をあらはす。

【二三】無薪可觀火　火非不觀薪
之も前二句と同じく「火に因待しても薪無く、火に因待せずしても薪無し」の意なり。什譯の方意義明瞭なり。

何等の體か先に成じて、　而も相觀ありと說かん。

釋して曰く、若し相觀ずれば、薪が先に成ずとなすや、火が先に成ずとなすや。汝應に分別すべし。かくの如く、此の二は一が先に成じて〔一八〕別と相觀ずること無し。第一義中には觀は成ぜざるを以ての故に、因の義は成ぜず。また譬喩の過あり。若し汝世諦中に於て此の因を立つと言はば義と相違す。また譬喩なくして成立するは過あり。

若し汝の意「かの薪先に成ずるが故に過なし」と謂はば、この義は然らず。偈に曰ふが如し、

〔一九〕(九)若し火は薪に觀ずれば　火は成じ已つてまた成ぜん。
薪もまた當に是の如くなるべし、　火無くして得べきが故に。

釋して曰く、汝若し定んで此の如き分別をなさば、火は已に先に成じて後に薪に觀ずるが故なり。この義は云何ん。薪は火に觀ぜずして薪は先に成ずるによるが故なり。語意は是の如し。而も然ることを欲せず。此の中に驗を說かん。「第一義中には薪が火より先に在るの此の如き義なし。何となれば、觀あるを以ての故なり。火の自體の如し」。前に已に廣く說きたり。

外人言ふ、若し薪と火と一が先に成ずること無くば、今薪と火と相觀じて一時に有ること、牛の左右の角の同時に起るが如くならん。故に此の義は成ずることを得。

論者の偈に曰く、

〔二〇〕(一〇)若し此れは待して成ずることを得、　彼れもまた是の如く待すれば、
今一物として待するもの無し、　云何んが二體は成ぜん。

釋して曰く、「此れ」とは謂く火の體相なり。「彼れ」とは謂く薪の體相なり。外人の意は、薪と火とは倶にして成ずることを欲す。一一あるが故なり。此の義は然らず。何となれば、彼れは自に因りつつ更に互に相觀じて生ずるは成ぜざるによるが故なり。語義は此の如し。また次に、牛角の喩

之によつて論意明瞭になる。

【一八】別は「他」の意なり。

【一九】若火觀薪者　火成已復成　薪亦當如是　無火可得故

後二句は梵文に「是の如くならば薪も亦火を離れてあるべし」とあり、漢譯が之と多少異るは、梵文第三句の初めにある evam syāt の解し方による。之は本來「是の如くならば」として前言を受けて後言を引き出す契機になる言葉なるを「薪も亦是の如し」と云ふ形に譯したるなり。

【二〇】若此待得成　彼亦如是待　今無一物待　云何二體成

後二句の譯は適切ならず。此の偈は前後をうけて「若し此れと彼れとが互に因待して成立するときに、因待より前に各々が成立するならば、因待の不必要になる」ことを言ふ。此彼二體の不成立を言ふに非ず。後二句の梵文には「若し因待せらるべきものが（已に）成立するなら、何ものが何ものに因待せん」とあり。

（六）[一三]燃は可燃に異りて　此の二は能く相至る。
　女の丈夫に至るが如く　丈夫の女に至るが如し。

論者の偈に曰く、

（七）[一四]若し燃が可燃に異らば、　此の二は相到らむ。

釋して曰く、汝の意は異の譬を立つ。かの男女は縦ひ是の如くなるも則ち互に相觀ぜず。薪と火とは處を同じくして起るを以て、到の相もまたこれ異るが故なり。相觀ぜずんば我れは因の[一五]非一向を得と言ふべし。偈に曰ふが如し、

[一六]火と薪と既に異あらば　則ち互に相觀ぜず。

釋して曰く、互に相觀ぜずとは此の義云何ん。謂く作者と作業と和合すれば則ち空なり。薪と火との異るが如きは、意爾ることを欲せず。何となれば、彼の二は到ること無きが故なり。汝「作者と作業とは和合して（而も）相異る」と說かば、この義は然らず。法の別を執するが故に、立義に過あり。何等の過ありや。汝「異なるが故に。而も能く相到ること男女の如し」と說くは二つ不可得なり。異門は成ぜざるを以ての故に、非一向の因の過に非ず。但だ彼の外人自ら義に迷ひ、智慧輕薄にして是の如き說を作すのみ。品初に薪火の一異を成立せるは譬喩無なるが故に、二つ皆成ぜず。

外人言ふ、第一義中に薪あり火あり。何となれば、互に相觀ずるが故なり。これ若し無くんば彼の二の相觀は則ち有ることを得ず。譬ふれば兎角の如し。薪火あつて更互に相觀ずるによるが故に、說いて此れはこれ「火の薪」、此れはこれ「薪の火」と言ふことを得。この義を以ての故に譬喩は成ずることを得。

論者の偈に曰く、

（八）[一七]若し火は薪に觀じ、　若し薪は火に觀ずれば、」

【一三】燃異於可燃　此二能相至　如女至丈夫　如丈夫至女
問者の立場よりの偈、梵文及什譯に同じ。

【一四】若燃異可燃　此二相到者　燃（火）と可燃（薪）と異體なること男女の如くならは兩者は相到ることあらんも、その如く異體ならねば、相到る義無しと言ふ。漢譯のみを見れば、「若し」は第二句の終りまでかゝる如きも、梵文に基きて上の如く訓めり。

【一五】非一向は不定の意なり。

【一六】火薪既有異　則不互相觀　火と薪とが各異體ならば互に因待せざることゝなる。而も兩者の因待せざるべからざることを次の偈に述ぶ。「相觀」は「あひくわんず」と訓みても「さうくわんす」と訓みても意義全く同じ。前後の關係上任意にして可なり。

又以上四句は梵文では「火は薪と別異にして薪と合すべし。若し火と薪とが相互に離れて存すれば」となりて多少異つた意味をあらはす。什譯も梵文と正確に一致す。

【一七】若火觀於薪　若薪觀於火　何等體先成　而說相觀有
後二句梵文には「二つの中何れが先に成立し其れに因待して火あり薪ありや」とあり。

また次に、[九]僧佉人言ふ、我が立義の如きは、彼の薩埵（唐に明相と言ふ）と邏羅闍（唐に塵と言ふ）と諸の觸色との增する時を說いて名づけて火となし、若し多摸（唐に暗と言ふ）の增する時には說いて名づけて薪となす。この故に定んで薪を以て火の因となす。薪を以て因となすが故に薪に觀じて火を說く。

論者言ふ、彼れまた過あり。第一義中を以てすれば煖は火の體に非ず。何となれば、大なるを以ての故なり。前の譬の如くに遮す。また次に、偈に曰く、

（五）[一〇]若し異ならば則ち到らず。

釋して曰く、若し火は薪に異らば、異るが故に則ち到らず。譬ふれば未到の火薪の如し。作者を火に喩へ作業を薪に喩ふるにより、此の二の和合するを名づけて作相となす。義は正に是の如し。

また次に、偈に曰く、

[一一]到らざるが故に燒けず、燒けざるが故に滅せず、
滅せずんば自相に住す。

釋して曰く、この火は無因にして薪を離れて成ずることを得るによるが故に、則ち自相に住す。自相に住するが故に之を名づけて常となす。既に此の義なきが故に火と薪との不異なるを知る。若し異を立つれば先に已に遮せるが如し。これ應に廣く說くべし。後の偈に曰ふが如し、

[一二]此の物の彼の物と共なるとき、異なるは則ち然らず。

外人言ふ、若し「異にして到らざる」ときは、かくの如き過を得ん。前偈に「異ならば則ち到らず、到らざれば燒けず」等と言へるが如し。「異にして到ることある」によつて上の如き過なし。云何んが驗するや。女人と丈夫の異なるが故に相到るが如きは、世間の解する所にして能く破する者なし。偈に曰ふが如し、

【九】數論說の批評。薩埵、邏羅闍、多摸はそれぞれ（sattva, rajas, tamas）の音譯にして普通「喜・憂・暗」と譯さる。自性のもつ三德なり。百論註參照。

【一〇】若異則不到　異（anya）とは火と薪とが各々別異なること。不到（aprāpta）は合せずの意。

【一一】不到故不燒　不燒故不滅　不滅住自相　梵文及什譯と同じ。前の一句と合して本品第五偈をなす。

【一二】此物共彼物　異者則不然　觀行品第五偈の後二句に相當す。漢譯のみを見るときは著しく相違するも梵文を見れば同一なること判明す。同處註參照。

答へて曰く、相似を成立すれば彼れもまた同じく破す。地等の自相を我れ引いて喩となしたり。汝「喩は成ぜず」と言ふは我れに此の過なし。第一義中に遮するを以ての故に、世間の所解を壞せざるが故に。

また次に、鞞世師は言ふ、火と薪との微塵は我の一分なり。此の一分の塵は後の塵と合して、此に和合を業作して二塵に依止す。かの二微塵の和合の起作するを　陀臘脾（唐に實と言ふ）と名づく。かくの如く、三塵已に去り漸次に起り已つて光明をなすが故に名づけて火陀臘脾となす。かくの如く薪塵は薪塵と合し、かの薪と火との二は更に互に相觀ず。相觀ずるを以ての故に因果を成ずることを得。

論者言ふ、彼れもまた前偈に「若し火が薪に異らば、薪を離れて應に火あるべし」と說けるが如し。かくの如き等の執は前に已に廣く遮す。此の中に應に說くべし。また次に、第一義中には火は光明を作すに非ず。何となれば、その大なるを以ての故なり。譬ふれば餘の大の如し。及び彼れの起を遮す。第一義中には火大の微塵は火陀臘脾を起作すること能はず。何となれば、微塵なるを以ての故なり。餘の微塵の如し。

問うて曰く、汝の前の立義は何の所以ありや。餘塵を起すとなすや、都て起すこと無しとなすや。若し餘塵を起さば立義は則ち壞す。若し都て起さずんば則ち譬喩は無體なり。

答へて曰く、汝の語は善ならず。先の分別の如きは我が所欲に非ず。後の分別は譬喩また成ず。何となれば、火の微塵の火を起すこと能はざるが如く、地等の諸塵も一一皆爾り。また次に、第一義中には彼の火の微塵は火を起すこと能はず。何となれば、異なるを以ての故なり。譬ふれば水の如し。かくの如く「作なるが故に」、「壞するが故に」、「起るが故に」等の諸因もこれ應に廣く說くべし。

【七】勝論說の批評。

【八】陀臘脾。dravya（實體）の音譯なり。百論第二品の註參照。

說く。この故に因に非ず。譬喩は成ぜず。

若し汝の意「火の正しく燃えつつある時を名づけて薪となす」と謂はば、これまた然らず。偈に曰ふが如し、

(四)[六]若し火の正しく燃えつつある時を　汝謂ひて薪となさば、
かの時には唯だ火あるのみ、　誰かこれ可燃の薪ならん。

釋して曰く、世諦中に於ては未だ燃えざるの時を薪と名づけ、正しく燃えつつある時を火と名づく。薪はこれ火の緣なるを以て、正しく燃えつつある時に於ては唯だ火と說くのみ。故に此れの起るもまた唯だ聚なるのみ。唯だこれ獨自なるが故に能く燒煮照明すとなし。果の因なるが故に說いて火となす。第一義中には起は不可得なり。先に已に遮せるが故なり。

また次に、若し汝の意に謂ふ「四大齊等にして火界の增せざるを說いて名づけて薪となし、或は三大を說いて之を名づけて薪となす。かの三或は四は是れその所燒なり。火もまた是の如し。大聚の和合するが故に說いて火となす」と。かくの如くに說かば今當に驗を立つべし。「第一義中には火は薪を燒かず。何となれば、その大なるを以ての故なり。譬ふれば水大の如し」。かくの如く「色なるが故に」、「有なるが故に」、「麁なるが故に」、「色陰の所攝なるが故に」、「外なるが故に」、「生あるが故に」、「因あるが故に」との、是の如き因にて驗す。これ應に廣く說くべし。彼れの意に「第一義中に火は能く燒く」と謂ふが如きは、これ則ち然らず。また次に、前偈に「かの時には唯だ火あるのみ、誰かこれ可燃の薪なる」と說けるが如き、「唯だ」とはこれ何の義なるか。謂く唯だ大の積聚なるのみなるが故なり。別觀を起すが故に世諦中に於ては說いて薪と火となす。汝「正しく燃えつつある時に於て說いて薪等となす」と謂ふは、この義然らず。

問うて曰く、地等の和合中に火あつて能く燒くが故に、汝喩を立つるも此の喩は成ぜず。

【六】若火正燃時　汝謂爲薪者
彼時唯有火　誰是可燃薪
什譯及梵文第四偈に相當す。前二句は正確に一致するも、後二句は全く意味相反す。卽ち什譯には「爾時但有薪、何物燃可燃」、梵文には「其の薪のみあるとき其の薪は何ものによつて燃やされん」とあり。原典の相違か、或は譯者の解釋違ひなり。

業とは一ならん。若し定んで爾らば汝「是れは薪」、「是れは火」と言ふべからず。薪の外に火あらば一體の義は壞す。不煖不燒なる火は卽ち無用にして、法體に別なきを以ての故に立義に過あり。汝「薪と火と一なり」と言ふは、この義然らず。

また次に、薪と火と異なるはこれまた然らず。何となれば、偈に曰ふが如し、

三 若し火が薪に異らば　薪を離れて應に火あるべし。

釋して曰く、その異るを以ての故なり。譬ふれば餘物の如し。而も爾ることを欲せず。此の中に驗を說かん。「第一義中には火と薪とは異らず。何となれば、觀あるを以ての故なり。薪の自體の如し。かくの如く、第一義中には火と薪とは異らず。何となれば、觀あるを以ての故なり。火の自體の如し。若し「火と薪とは別物にして皆相觀あり。一切は觀あるが故に因は一向に非ず」と言はば、この義は然らず。何となれば、かの一切等の觀の義と相似なるもまた同じく遮するが故に過なし。若し定んで火と薪との異を得んと欲すれば過失あるが故なり。偈に曰ふが如し、

(二)四 是の如くならば常に應に燃ゆべし、　薪に因らざるを以ての故に。

釋して曰く、薪に觀ぜざるが故に彼れは常に燃ゆべし。縱ひ薪なき時にも火はまた滅せず。その異なるを以ての故なり。また乾薪に火を投ずるもまた焰の起ること無からん。義皆然らざるなり。偈に曰ふが如し、

五 また燃火の功なく　火もまた燒業なからん。

釋して曰く、燒くべきの相なし。業の無體なるが故なり。而も爾ることを欲せず。何となれば、幼男小女悉く因あるを知る。皆業あるを欲するが故なり。此の中に驗を立つ。「第一義中には火と薪とは異らず。何となれば、因あるを以ての故に。起作あるが故に。業あるが故に。薪の自體の如し」。廣く前に說けるが如く薪門もまた爾り。薪を以て燃の因となし、起あり業あり。皆火に同じく

【三】若火異於薪　離薪應有火　梵文及什譯に全く同じ。

【四】如是常應燃　以不因薪故　「以不因薪故」は梵文には「燃因無ければ (apradīpana-hetukah)」とあり。此の漢譯は燃因(燃やす原因)を薪を意味すと解せるなり。什譯も同じ。

【五】復無燃火功　火亦無燒業　「燃火の功無し」は「火を燃やす必要なし」の意。以上四句梵文及什譯に一致す。尙梵文什譯には、此の次に此偈の意味を敷衍せるが如き一偈を置くも(中論註參照)、本論には缺く。

卷の第七

釋觀薪火品第十

また次に、前品に已に取と及び取者とを遮して其の執見を除きたり。今また不一不異の緣起法を解せしめんが故に此の品の起るあり。

外人言ふ、第一義中に取と取者とあり。何となれば、此の二法互に[一]相觀ずるによるが故なり。譬ふれば火と薪との如し。云何んが知るや。佛所說の如きは、第一義中に陰等の取と及び取者とありと。此の因成ずるが故に我が義立つことを得。

論者言ふ、總じて起を遮せるが故に薪と火ともまた遮す。汝今未だ悟らずして猶ほ實ありと言ふ。觀陰品に說けるが如きは、「若し色因を離るれば色は不可得なり。(色)因もまた此の如し」と。先に已に破せりと雖も今當にまた破すべし。汝應に此の遮の方便を諦聽すべし。火と薪との二種を有らしめんと欲すれば、これ一となすや、これ異となすや。若し爾らば何の過ありや。薪と火の一なるは是の義然らず。何となれば、偈に曰ふが如し、

（一）[二]若し火が卽ち是れ薪ならば、　作者と作業とは一ならん。

釋して曰く、かの地等の譬喩は無なるによるが故に此れ相應せず。有る人言ふ、「四大はこれ薪、煖界はこれ火なり」と。また有る人言ふ、「かの諸大中に煖界の增起するが故に名づけて火となす」と。

論者この中に更に方便して說く、第一義中には薪火の二事は一體をなさず。何となれば、作者と作業なるが故なり。譬ふれば斫者と所斫に異あるが如し。火を作者となし、燃を作業となす。作者と業とは異るを以ての故に薪と火とは一をなさず。また次に、若し火が卽ち是れ薪ならば作者と作

【一】觀は觀待の意なり。第二偈の「因る」と全く同じ。

【二】若火卽是薪　作者作業一　梵文及什譯と全く同じ。但し什譯は「火」を「燃」、「薪」を「可燃」とす。火薪の方梵文に相應す。

〔二〇〕覺を以て觀察する時には　物體は不可得なり。
無自體なるを以ての故に　彼の法は不可說なり。

前人の言の如き、取と取者と有りとは彼れ皆成ぜず。取を因となすの過は已に上に說けるが如し。取と及び取者とは皆無自性なるが故に此の品あり。この義を以ての故に此の證は成ずることを得。

般若波羅蜜經中に說けるが如し、「佛、極勇猛菩薩に告げて言ふ、善男子よ、色に見者と使見者と無し。受、想、行、識にも見者と使見者と無し。若し色より識に至るまで見者と使見者と無くば、此れはこれ般若波羅蜜なり。また次に、色に知者と見者と無し。受、想、行、識にも知者と見者と無し。若し色より識に至るまで知者と見者と無くば、此れはこれ般若波羅蜜なり」と。是の如き等の諸の修多羅に此の中に應に廣く說くべし。

【二〇】以覺觀察時　物體不可得
以無自體故　彼法不可說

また次に、有る異人は言ふ、是の如き取あり。佛所說の如きは、名色は六入に緣たりと。かの色は是れ四大にして取者の爲めに取らる。この故に實の取者あり。六入具足するによつて次で受等を生ず。眼等より先に彼の取者の因あるに非ず。施設なるが故なり。譬ふれば瓶等の如し。此れはこれ如來の所說の道理なり。汝は此の理に違す。この故に汝の先の所立の義は破す。

論者の偈に曰く、

(一〇)眼、耳、及び受等が　從生する所の諸大、[一八]
　かの諸大中に於て　取者は不可得なり。

釋して曰く、かの取者は實體なきによるが故に、第一義に依れば名色の位中には取者は無體なり。然も世諦中には名色を因となして取者を施設す。この故に阿含の所說に違せず。かの眼等と及び大とは唯だこれ聚なるを以ての故に、汝取者を立てて因となすは此の義成ぜず。過失あるが故なり。理の如く諦觀するに彼れは實體なし。偈に曰ふが如し、

(一一)眼より先には取者無し、[一九]　今にも後にもまたまた無し。
　取者無きを以ての故に　彼の分別あること無し。

釋して曰く、眼等の諸取が(卽ち)取者なるは然らず。彼れは取に異るが故なり。別の相續の如し。四大が取者なるは、是の如く前に驗知して不可得なり。實體の成ぜざるを以ての故なり。譬ふれば四大の如し。實體は第一義には無なるによるが故に、取と及び取者との一異は倶に壞す。一異成ぜざるが故に彼の分別は滅す。云何んが滅するや。實有なること無きを以ての故なり。有の分別滅し、施設に因るが故に無の分別滅す。また次に、汝有を立つるが故に我れに解せしめんと欲するも、我れは第一義中に於て驗するに無體なるが故に有の分別滅す。有旣に滅するが故に無もまた隨つて滅す。婆伽婆、楞伽經中の偈に曰ふが如し、

【一八】眼耳及受等　所從生諸大　於彼諸大中　取者不可得　梵文に正確に一致す。但だ取者は梵文に eṣa(此れ)と云ふ代名詞用ひあり、之に實名詞を當つれば「取者」より寧ろ前偈の「我」なり。什譯が「神」の語を以て補へるは適切なり。

【一九】眼先無取者　今後亦復無　以無取者故　無有彼分別　梵文什譯の第十二偈に相當するもの。第十一偈に相當する第四句は梵文には本論に缺く。「有り無しの分別は止息す」とあり、什譯にも「有無の分別無し」とあり、取者についての有無の分別無しの意に解すれば、本論の譯も意義異らず。

（九）[14]若し見（者）、聞者は異にして、受者もまた差別あらば、

釋して曰く、汝の如く分別すれば何等の過を得るや。今當に汝に示すべし。偈に曰ふが如し、

[15]見（者）、聞者不同にして、　是れ我は則ち多體たり。

釋して曰く、若し世間の物、彼の物に異らば則ち彼れと此れとは倶に有り。其の異るを以ての故なり。瓶鉢等の如し。見（者）聞者の異なるもまたまた是の如し。見（者）聞者の異るが故に齅（者）、嘗（者）、觸（者）もまた各々差別す。この義を以ての故に一相續中に於て無量の我あり。而も爾ることを欲せず。この故に第一義中には見者聞者に別の相續ありとの此の異は然らず。此の中に驗を說かん。「見者は取者にして聞者に異らず。かの取者は因果合して有るを以ての故なり。見者の自體の如し」。また次に、前偈に「見者と聞者と異ならば」と言へるが如きは、これ「見者が緣となつて則ち聞者の可得なる」を言ふ。是の如き義を以て我は多體を成ず。また過去時等に各々差別するが故なり。また次に、此の中に驗を說かん。「第一義中には取者は無體なり。何となれば、緣起なるを以ての故なり。取の自體の如し」。また次に「第一義中には調達の眼等を調達取者の取と名づけず。何となれば、眼等なるを以ての故なり。譬ふれば耶若達多の眼等の自體の如し」。この故に取者と及び取の二つ皆成ぜず。前の過を免れざるを以ての故なり。

[16]婆私弗多羅は言ふ、取と及び取者との、若しくは一若しくは異は倶に不可說なり。この故に過なし。

論者言ふ、說くべきもの有るが故に、豈、過に非ざらんや。また次に、一身の根聚に於て若しくは果、若しくは因なる諸聚を[17]食すれば、我は則ち無量なり。而も爾ることを欲せず。ここを以ての故に我は則ち一ならず。此の義成ずることを得。識は別なるを以ての故に、多相續の見者の不一なるが如くに、多我は成ずることを得。

【一四】若見聞者異　受者亦差別
梵文及什譯に一致す。

【一五】見聞者不同　是我則多體
初句は梵文には「見者有るとき聞者あるべく」とありて多少異る。什譯は梵文に近し。又此偈に至つて初めて我（ātman）の概念出づ。前の本住、取者等と同一なる或るものを指示す。又多體は bahutvam（多數性）の譯語なり。

【一六】犢子部說の批評四。

【一七】食すとは享受の意なり。

一一より若しくは先に有らんも、是の義は則ち然らず。

釋して曰く、彼れ是の如くに說かば則ち外道に同じ。此の義は云何ん。外道の所說は「かの身根の處に積聚せる法は、草土の舍を成ずるが如し。而も別人あつて中に於て受用す。是の如き人は識知すべからず。謂く見者等なり」と。此の義は然らず。何となれば、彼れは一體なるが故に立義に過あり。また次に、第一義中には彼の見者の體は聞者に異らざるに非ず。何となれば、聞者なるが故なり。別體の如し。聞者は相續の異なるによるが故に、見と聞とは同じからず。汝「體は異らず」と言ふは此れ立義の過なり。また次に、見者が見んと欲すれば、眼に觀ぜずして色は應に可得なるべし。何となれば、聞者に異らざるが故なり。譬ふれば聞者の如し。「聞者と異ならざる」の驗によるが故に、眼に觀ぜずして彼の色は可得なり。若し其れ爾らずんば見者は異法なり。此れ皆成ぜず。立義の過なるが故に。

また[一三]異の僧佉ありて言ふ、我が若しこれ一丈夫ならば則ち餘根に墮して去り過ぐ。諸の竅牖を歷るが如し。かの處處に眼等を因とするによつて色等の覺を起す。我れは既に徧せざるを以て則ち別の方所あり。若し彼の眼等の諸根に依らずんば、則ち見(者)聞者等は皆成ずることを得ず。我は徧するによるが故に、則ち餘根に至らず。この故に過なし。

論者言ふ、汝の立因は大過失あり。一一の根中に皆先に我あるによる。この義は然らず。何となれば、道理として此の如き我あること無きが故に。若し人、異の陰入界に一丈夫あつて見者等となすことを得んと欲すれば、論主彼れに救ふること先に觀入品に遮せるが如し。當に此の如く解すべし。また廣く釋せず。

或は有るひと、先の如き過失を避けんと欲して取者ありと說く。其の相云何ん。彼れ謂く、見者聞者は各各に差別して而もこれ一我なりと。此の如き執は是れまた過あり。偈に曰ふが如し。

【一三】數論說の批評。

後半の偈は彼れは無體なるにより、かの因の過失を汝は離るるを得ず。

また次に、婆私弗多羅は言ふ、汝は今何故に自ら分別を生じて、先住ありて彼の眼等の諸根の前に在りと言つて後に還つて自ら破するや。我等の法中にもまた此の説を作す。偈に曰ふが如し、

(六)[9]一切の眼等の根より　先には、一人の住するもの無し。

釋して曰く、一人の住するもの無くんば、謂く彼の眼等の一一の根に先に各々人あつて住せん。何となれば偈に曰く、

[10]かの眼等の根の異異によつて　彼れの異を了せん。

釋して曰く、眼等とは謂く、耳、鼻、舌、身、受等なり。眼より受に至るまで各各異あるによるが故に、説いて此れはこれ見者、此れはこれ觸者と言ふことを得。異の取に觀ずるによるが故に、彼の取者は成ずることを得。汝「因は成ぜず」と言ふは此の如き義なし。

論者の偈に曰く、

(七)[11]若し眼等の諸根より　先に一の住者なくば、
眼等の一一より先に　彼れ別に云何んが有らん。

釋して曰く、諸の外道は一一の取より先に取者ありと立つるによりて、「眼耳等より先に各々人あつて住す」と謂ふ。この義は然らず。何となれば、若し眼等に觀ぜずんば取者は無體なるが故なり。此の意は是の如し。前の立驗により眼等の取より先なる一一の取者は、義また成ぜず。

また次に、汝若し定んで彼の取者ありと執すれば、今當に汝に問ふべし。此の見者が卽ちこれ聞者乃至受者なりとなすや。見(者)聞者乃至受者は各各に異なりとなすや。若し受より先に者を説けば是の義は然らず。偈に曰ふが如し、

(八)[12]見者卽ち聞者にして、　聞者卽ち受者ならば、

【八】犢子部說の批評三。

【九】一切眼等根　先無一人住　梵文「一切の見等より先には何びとも存せず」。

【一〇】由彼眼等根　異異了彼異　梵文「其れは見等の一々によつて別時に顯示せらる」。以上四句梵文に正確に一致す。什譯は稍義譯なり。

【一一】若眼等諸根　先無一住者　眼等一一先　彼別云何有　梵文に正確に一致す。什譯は第四句が異る。

【一二】見者卽聞者　聞者卽受者　一一若先有　是義則不然　梵文に正確に一致す。什譯は第四句を缺く。第三句は「一々の見聞より前に本住者あるべし」の意なり。

を以ての故なり。此の中に驗を立つ。「眼等の取より前には彼の取者なし。何となれば、施設なるを以ての故なり。經絹等の如し」。この故に取者は成ぜず。取者成ぜざるによるが故に因の義は則ち壞す。因の壞するによるが故に、かの經絹等の譬喩は無體なり。第一義中には取と及び取者との體は成ぜざるを以ての故なり。

また次に、〔五〕異の婆私弗多羅ありて言ふ、先に天上に生じ、天に生ずるの業盡くるが如し。天上の取者は是の如くに住することを得て、後に人等の諸陰を取るが故に、かの取者は阿含にて成ずることを得。

論者言ふ、かの天に生ずる者は天上の取體を天と施設するが故なり。また汝總じて阿含を說くも別の驗なきが故に疑惑を生ぜしむ。應に定んで信ずべからず。偈に曰ふが如し、

(四)若し眼等の根なくして〔六〕　先に彼の住者あらば、
　また應に取者なくして　眼等の有なること疑ひ無かるべし。

釋して曰く、汝の意、是の如くんば義は則ち然らず。何となれば、若し取者に觀ぜずんば、眼等の諸取の體は則ち成ぜず。此の意は是の如し。若し此の二法互に相觀ぜずんば、此の如き次第の義は應に爾るべからず。所謂る此れはこれ眼等の諸法にして取なり。此れはこれ調達にして取者と名づく。此れはこれ調達にして取者と名づけ、此れはこれ眼等の諸法にして取なり。此れによつて偈に曰く、

(五)或は取あつて人を了し、〔七〕　或は人あつて取を了す。
　取なきに何ぞ人あらん、　人なきに何ぞ取あらん。

釋して曰く、「或は取あつて人を了す」とは、謂く眼等の諸法なり。「或は人あつて取を了す」とは、謂く見者、聞者なり。取と取者とは更互に相觀ずるによつて世諦中に成ず。第一義には非ず。

【四】若眼等諸根　受等諸心法　彼先有取者　因何而施設
　梵文には「取者」に相當する語は正しく vyavasthita-bhāva(什譯には本住)とあり、此の場合燈論の原典に upādātṛ(取者)が用ゐられしとは考へ難し。本住者を意味上から取者とせるが燈論の譯語例とも思はる。

【五】犢子部說の批評。二

【六】若無眼等根　先有彼住者　亦應無取者　眼等有無疑
　住者は梵文の vyavasthita(決定者)に相當するも、第三句の取者は梵文には「彼れ」と云ふ代名詞あるのみにして當然前の「決定者」をさす。而して此の場合燈論の原典に upādātṛ(取者)の語ありとするは、偈文の字數多くなりて不可なり。此の場合は明かに漢譯者の補足と推定し得。

【七】或有取了人　或有人了取　無取何有人　無人何有取
　人と取とは、梵文では kaṃcit(或る人)、kiṃcit(或るもの、或ること)と云ふ、代名詞の男性形と中性形とにて出づ。其の男性形に「人」の語、中性形に「取」の語を當てゝ譯せるなり。什譯は中性形には「法」の語を當つ。其れは主體(人)に對して客體たる事柄そのものを指示するなり。

釋觀取者品第九

また次に、取者の無體を諦觀せしめんが爲めに此の品の起るあり。偈に曰ふが如し、

(一)眼耳等の諸根と　受等の諸の心法とに、
　此れより先に人あつて住すと、　一部は是の如くに說く。

釋して曰く、一切の自部には皆此の執なし。唯だ婆私弗多羅あつて是の如き義を立つ。眼等の諸根と受等の心法と此れ若し有ならば則ち先住あり、と道理は是の如し。若し爾らずんば、偈に曰く、

(二)若し取者無體ならば　眼等は不可得なり。
　是を以ての故に當に知るべし、　先に此の住體あり。

釋して曰く、我れは是の取者あつて先に住するを見る。何となれば、取者なるを以ての故なり。此の取者は可得なるによるが故に、諸取の先に在りて住す。譬ふれば織者の經緯の前に在るが如し。また次に、取者の先に眼等の取あり。何となれば、取あるを以ての故なり。竹篾等の如し。是の如く、取と及び取者とは二つ倶に成ずることを得。この義を以ての故に我れ先に說いて「第一義中に是の陰等の取と及び取者と有り」と言へり。婆伽婆の說は破壞すべからず。

論者の偈に曰く、

(三)若し眼等の諸根と　受等の諸の心法とに、
　彼れより先に取者あらば、　何に因つてか施設せられん。

釋して曰く、眼と及び受等は無體なるを以ての故に、異の取の更に一物として可得なるもの無し。何の取者ありて而も施設せられんや。是の如く、彼れは爾の時に於て有ならず。取は無體なる

【一】眼耳等諸根　受等諸心法　此先有人住　一部如是說

「人」は梵文に「見聞受等が屬して以て起る所の或るもの」と云ふ代名詞の形で出でたるを譯せるなり。意味としては識別、煩惱等の主體になる實在者をさし、本品では pūrva (本有者)、vyavasthita-bhāva (決定的存在者)の概念が用ひられ、什譯では「本住」と譯され、本論では「取者」「住者」「住體」等と譯さる。斯かる主體を否定するが本品の趣旨なり。

【二】婆私弗多羅(vātsīputrīya)は犢子部にして不可說の我を立つ。其れが即ち本品に謂ふ「先住」「本住」「取者」なり。本品は主として犢子部の說を難ず。

【三】若取者無體　眼等不可得　以是故當知　先有此住體

取者と住體とは同義なり。住體は vyavasthita-bhāva の譯語なるが、梵文には「取者」に相當すべき特別の原語出でず。譯者が任意に意味を取りて作りし譯語なるか、又は燈論の原典には upādātṛi の語ありしものか。又本品の題名は梵文及什譯には pūrva (本住)とあれど、西藏無畏論には upādātṛi(取者)とあり。本論は無畏論に一致す。

能なし。此の如き義によつて因中無果なり。

論者言ふ、汝、因を立てて「未起にして無果なるは我れ受けず」といふが如きは、此の意云何ん。汝現見の爲めの故に受けざるや、立驗の爲めの故に受けざるや。一切量の爲めに受けざるや。是の如く分別するに、因の義は成ぜず。立因に過あり。一向に非ざるが故なり。「かの未起の果あるが故に」とは、此の驗は他をして信解せしむること能はず。汝「無果にして起る」と言ふは、此の無果の起るは譬喩なきが故に、云何んが知るべけん。また次に、第一義中に乳は酪を生ぜず。何となれば、因に觀ずるを以ての故なり。譬ふれば絹の起るが如し。また次に、泥は實にして求那と名づけ、假の瓶は[三三]求泥と名づく。第一義中には泥は瓶を成ぜず。何となれば、求泥に觀ずるが故なり。譬ふれば餘物の如し。また次に、第一義中には垂壺等の相は牛體の相に非ず。何となれば、體に觀ずるを以ての故なり。譬ふれば馬相の如し。また次に、別には[三四]阿婆也婆と名づけ、總には[三五]阿婆也毗と名づく。第一義中には實の經等の絹を成ずるもの無し。何となれば、阿婆也毗に觀ずるを以ての故なり。譬ふれば餘物の如し。是の如く、作者と及び業とは自の體性なし。品義は此の如く、この故に成ずることを得。

[三六]佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如し、「善男子よ、色は作者と使作者とに非ず。是の如く、受、想、行、識もまた作者と使作者とに非ず。若し色より識に至るまで作者と使作者とに非ずんば、此れはこれ般若波羅蜜なり」と。また摩訶般若波羅蜜經中に舍利弗の言へるが如し、「婆伽婆よ、無作はこれ般若波羅蜜なりや。佛言ふ、作者は不可得なるが故に」と。また佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如し、「善男子よ、色は善に非ず不善に非ず。受、想、行、識もまたまた是の如し。若し色より識に至るまで善に非ず不善に非ずんば、是れを般若波羅蜜と名づく」と。是の如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く說くべし。

【三三】求泥（guṇin）。「求那（guṇa）をもつもの」の意にして、屬性をもつ實體なり。

【三四】阿婆也婆（avayava）。部分の意にして「分」と譯さる。

【三五】阿婆也毗（avayavin）。「部分をもつもの」の意にして、有分と譯さる。

【三六】以下敎證。

立義の過あるが故なり。

また次に、〔三〇〕異の僧佉人「因が果を作すは是の義然らず。了作するによるが故なり」と言はば、應に是の如く問ふべし。此の了作とは其の相云何ん。彼れ答ふ「燈の瓶等を了作するが如し」と。此の執は已に觀緣品に破せるが如し。また次に、第一義中には燈は彼の瓶衣等を了作せず。何となれば、眼が取るを以ての故に、有礙なるが故に。色なるが故に、觸なるが故に、說なるが故にとの因等あり。譬ふれば土塊の如し。

また次に、〔三一〕異の僧佉言ふ、果は若しくは未起にも及び已滅にも功能の自體あるを名づけて了となすにあらず。この故に我れ「是の如き果あり」と說く。而も「因能く果を作す」と言ふは、此れ云何んが作すや。謂く因の自體轉じて果の體となるなり。語意は此の如し。

論者言ふ、若し汝、〔三二〕過去未來の受を因となさば、依止は成ぜず。若し現在の受を因となすと謂はば則ち譬喩なし。かの果は成ぜず。此等の過あり。また汝の因果は不異なり。若し不異ならば則ち此れは彼れの因に非ず。不異なるを以ての故なり。因の自體の如し。因に非ざるを以ての故に因の義は成ぜず。因成ぜざるが故に法の自性は壞す。立義の過の故に現在の果はまた實體なし。無起なるを以ての故に彼れの有は成ぜず。譬喩は無體なり。是の如く、諸の不異門もまた應に所執に隨つて破すべし。已に實因の果を作す能はざるを說きたり。世諦中に於て若し因なくば、また果を作さず。彼れは無なるを以ての故なり。無なる龜毛の衣をなすべからざるが如し。かくの如く、若し無果ならば因もまた作さず。此の立義には異あり。因と喩とも前に同じ。かの半有半無の執は二俱の過の故に、また先に說けるが如し。

また次に、〔三三〕自部と及び鞞世師等は言ふ、因あり果なくして此の因能く作す。未起にして無果なるは我れ受けざるを以ての故なり。虛空華の如し。已生の果には因は力用なし。未生の果には因は功

【三〇】數論說の批評三。

【三一】數論說の批評四。

【三三】自部及び勝論說の批評。

より起るに非ず。この故に定んで知る「因中有果」なり。また若し無くば、何故に決定して窯師の如きは土の瓶を作るに堪ふるものを見て取つて以て瓶となし、一切を取るに非ざるや。此の功能に能く起作あるによつて「因に果あり」と知る。若し果なくんば因もまた無體なり。終に一物として無果にして因あるもの無し。而して此の事なし。この故に當に知るべし、因は有體なるが故に、彼の果もまた有なり。

論者言ふ、汝因を立てて「作せざること無し」といふが如きは、立義の法に非ず。これ異なるを以ての故に、因の義は成ぜず。汝「無果にして因あるは義則ち爾らず。此れ有るによるが故に彼れ成ずるを得」と言ふは、此れ世諦中に於て成ずるにて第一義には非ず。第一義中を以てすれば、因と及び譬喩との二つ皆無體なり。若し物彼處に有らば、彼の物は彼處に於ては起らざるが故なり。因の自體の如し。此の法體の二種の差別により彼の義は成ぜず。過失あるが故なり。初因を破せるが如し。彼れ乳等を取るの諸因も、また此の道理を以て答遣すべし。

また次に、[二七]毘婆沙師所執の「因中無果にして因能く果を起す」といふが如きは、此の因は力なくしてまた起作すること能はず。彼れは無體なるが故に。譬ふれば兎角の如し。

また[二八]犢子兒の如きは「果の有と非有とは皆不可說にして、而も因は能く起作す」と。此の如き意は世諦中に於ては作者と因と成ずるも、第一義中には若しくは因、若しくは果の、有と及び非有とは皆不可得なるが故に我れに過なし。

また次に、[二九]異の僧佉人言ふ、「因中の果體の不可得なるは、果の細なるによるが故なり」と、此の執は然らず。何となれば、因中には麁なきが故なり。麁は先に無體にして後時に可得ならば、卽ちこれ因中無果となり、汝の立義は破す。若し汝の意「細者が麁となる」と欲すれば、これまた然らず。何となれば、細者の轉じて麁となるを見ざるが故なり。後時の麁果は細と相違す。法體顚倒の

【二七】毘婆沙說の批評。

【二八】犢子部說の批評。

【二九】數論說の批評二。

釋して曰く、何等か餘の法なる。謂く自他の解する所の、若しくは果若しくは因、能依と所依、能相と所相、或は總と別等なり。是の如き諸法もまた應に觀察すべし。果は因に緣り、因は果に緣る。此の義は成ずることを得。これ世俗法にして第一義に非ず。何となれば、或は有る人謂はん、第一義中に因果等の法は皆自體ありと。今かの執著の箭を拔かんと欲するが故に少分を開示す。第一義中には乳は實に酪をなすに非ず。何となれば、果に觀ずるを以ての故なり。譬ふれば經等の如し。若し「世間は悉く乳が酪を作すことを見る。汝、無と說くは卽ち世間の所見を破壞すとなす」と言はば、此の執は然らず。何となれば、我が立義の言は第一義中に非ざればなり。故に我れに過なし。

或は有る人言ふ、第一義中には乳は酪を作さず、而も世諦中には作す。此の義によるが故に汝の譬は成ぜず。立義もまた壞す。若し「諸法は自果を作らず」と言はば、譬はまた成ぜず。何となれば、かの一切法は各々定まれる因果あるが故なり。

論者言ふ、汝の語は善ならず。何となれば、初めの分別は我が所受に非ざればなり。次の分別は譬喩もまた成ず。何となれば、此の經等を以て彼の酪の因となすに非ず。前の立義中に已に簡別せるが故なり。譬喩無體なるに非ず。

また次に、[二六]僧佉人言ふ、我が立義の如きは因中に果ありて因は能く起作す。作せざること無きが故なり。此れ若し無くば彼の因則ち無し。龜毛の衣の如きは是れ何等の因ありや。酪瓶等には是の故に果ありと謂ふ。また次に、若し果なくば是の義は然らず。何となれば、乳中に酪なきが如くに草中にもまた無し。かの酪を求むる者何故に乳を取りて草を取らざるや。彼れ取るによるが故に「因に果あり」と知る。また乳中に酪なきが如くに、また三界等なし。是れ無くば何の因緣の故に乳の因緣よりして酪を生じて三界を生ぜざる。かの乳中より三界を生ぜざるにより、一切の物一因

【二六】以下本品の結論として諸派の說を批評す。最初は數論の因中有果說を難ず。

此れによつて業の義は成ず。　異因を見ざるが故に。

釋して曰く、世諦中に於て作者と作業とは更互に相觀す。此れを離れて外には更に異因の能く業の義を成ずるもの無し。是の如く外人、品初より已來、因を說き譬を立てしも義皆成ぜず。及び義に違するが故に過失を免れず。

また次に、或は有る人言ふ、第一義中に陰と入と界と有り。かの取を以ての故に。佛婆伽婆は是の如き說を作すと。彼れを遮せんが爲めの故に偈に曰く、

〔二三〕業と作者との離の如く、　應に知るべし、取もまた爾り。

釋して曰く、先に已に遮せるが如く、作者は業に緣り業は作者に緣る。是の如く取は取者に緣り、取者は取に緣る。第一義中には不可得なるが故なり。此の義は云何。作者と業との二は倶に離るるによるが故に、かの取と取者ともまた是の如くに離る。また次に、此の中に分別するに、第一義中には實の調達の、有實の取を取るもの無し。何となれば、取に觀ずるを以ての故なり。譬ふれば耶若達多の如し。是の如く、第一義中にはまた實の取者の、無實の取と亦實不實の取とを取るもの無し。立義應に知るべし。また次に、第一義中には實の可取の、實の提婆達多の爲めに取らるるもの無し。かの取者に觀ずるが故なり。譬ふれば耶若達多の取の如し。是の如く、第一義中にはまた不實の取の不實の取者の爲めに取らるるもの、亦實不實の亦實不實の取者の爲めに取らるるもの無し。立義の差別と因と及び譬喩とは先に已に說けるが如し。是の如く、不等に分別するもまた應に類して遮すべし。

また次に、業と作者と及び取と取者とは第一義中に〔二四〕性を以て離するに由るが故に、偈に曰ふが如し。

〔二五〕及び餘の一切法も　また應に是の如く觀ずべし。

明す。

【二三】如業作者離 應知取亦爾　「離」は vyutsarga（破斫、否定）の譯語にして、次の長行中の「遮」と同じく、什譯では「破」とせらる。又「取」は玆では有漏の五蘊を總稱す。

【二四】以性離は「離するに性を以てする」卽ち「自性を否定する」の意に解して可ならん。

【二五】及餘一切法 亦應如是觀　梵文及什譯と同じ。此の「法」は存在の義なり。

外人言ふ、耶若達多の如きはまた作者ありてまた作者なし。汝の立てし譬喩は無體なり。驗も破すること能はず。

論者言ふ、かの耶若達多の自の相續中には、提婆達多の作者と作業の分なきが故なり。我が意欲は爾り。譬成ぜざるに非ず。この故に過なし。廣く前に說けるが如し。是の如き等の分別にて第一義中に依止すれば、作者と及び業との建立は成ぜず。

また次に、有る人言ふ、我れは作者ありて彼の作業なし。この故に過なし。

論者の偈に曰く、

(八)[一八]有なる(作)者は無なる(業)を作さず、　無なる(作)者は有なる(業)を作さず。

釋して曰く、此れ誰が作さざる。謂く作者と業となり。何故に作さざるや。偈に曰く、

[一九]此れは著によつて過あり、　かの過は先に說けるが如し。

釋して曰く、上に說く所の實不實門の如く、第一義中には實の作者が不實の業を作し、また無實の作者が能く實の業を作すこと無し。此の二句の立義には別の因と及び譬喩とあり。廣く前に說けるが如し。また次に、偈に曰く、

(九)[二〇]作者は實なるも不實なるも、　亦實亦不實なるも、
三種の業を作さず。　この過は先に已に說きたり。

(一〇)[二一]作業は實なるも不實なるも　亦實亦不實なるも、
倶に作者の作に非ず。　過はまた先に說けるが如し。

釋して曰く、此の諸の過失は前に廣く明せるが如し。唯だ立義に差別をなすこと有るのみ。是の如く觀ずるによつて偈に曰く、

(一一)[二二]作者に緣りて業あり、　業に緣りて作者あり、

【一八】有者不作無　無者不作有
梵文「實有なる作者によりて非實有(の業)は作されず。非實有なる作者によりて實有(の業)は作されず」とあり。之に基いて漢譯に省略されし語を補ひて訓みたり。

【一九】此由著有過　彼過如先說
梵文「かの凡ての誤語は其處に伴ひ來ればなり」として前句にかゝる。

【二〇】作者實不實　亦實亦不實
不作三種業　是過先已說
梵文「實有なる作者は、非實有の業、或は實亦非實有の業を作さず。前に說かれしその理由によりて」とあり、什譯も之に一致す。

【二一】作業實不實　亦實亦不實
非俱作者作　過亦如先說
梵文「非實有なる作者は、實有の業、實亦非實有の業を作さず。前に說かれしその理由によつて」とあり、什譯も之に一致す。
以上二偈本論のみ著しく異るが、原本の相違か、或は譯者が解釋によつて整へしものなり。
尙次偈との間に梵文には一偈を加ふ。中論註參照。

【二二】緣作者有業　緣業有作者
由此業義成　不見異因故
梵文及什譯に一致す。此の偈、作者と業との緣起關係を

非法とに觀ずるを以ての故なり。若し作者なくんば則ち所觀なし。業成ぜざるが故に法等は無體なり。汝は過を免れず。相觀の道理なきを以ての故なり。道理は云何ん。偈に曰ふが如し、

[一六]若し法と非法と無くば　從生する果もまた無し。

釋して曰く、かの二が因となつて從生するを果となす。人天等の善道は可愛となし、地獄等の惡道は不可愛となす。かの身、根、受用は皆無自體なり。また次に、善道中に於ては彼の修行者は戒を受け禪を習ひ、三摩鉢底、八聖道支、正見を首となして諸の煩惱を離る。此の義悉く空となる。是の如く無實の作者と無實の作業とを分別すれば、此の諸過の聚は皆汝に屬して療治すべきこと難し。過失を知り已れり。應に作者と及び彼の作業との相觀の道理を信ずべし。この義を以ての故に說く所は過なし。因あるを以ての故なり。無實の作者と無實の作業との此の執は然らず。此れの然らざるの義は先に已に說けるが如し。

また次に、或は有る人言ふ、我れは異門を立てん。是の如き作者は亦有非有にして、かの所作の業も亦有非有なり。此の異門によれば上の如き過なし。

論者の偈に曰く、

（一七）有と無とは互に相違す、　一法の處に二無し。

釋して曰く、一物體に於て一剎那中に有と及び非有とは互に相違するが故に二は不可得なり。云何んが相違なるや。法若しこれ有ならば云何んが非有ならん。法若し非有ならば云何んが有と言はん。猶ほし一火に冷暖の同時なるは世の信ぜざる所なるが如し。若し汝の意「實體あるが故に之を名づけて實となし、所作なきが故に名づけて不實となす。一物一時に觀ずること自在なるが故に、二義の俱を立つること過失なし」と謂はば、是の義は然らず。何となれば、かの二門は前に已に遮せるが故に過なし。相觀の道理は後に當に遮すべきが如し。

【一六】若無法非法　從生果亦無　梵文に正確に一致す。前二句と併せて本品第五偈なり。而して什譯及び梵文の第六偈に相當するものを本論は缺く。其の偈は「果報の無きとき解脫と天界への道はあり得ず。又一切諸作用の無意義が伴はん」とあり。

【一七】有無互相違　一法處無二　梵文及什譯第七偈の後半に相當す。其の全偈は「實有にして且つ非實有なる作者は、實有にして非實有なる業を作さず。何となれば、相互に矛盾せる實有と非實有とが、如何にして一處に有らん」とあり。此の前二句に相當するものは本論では長行に出づ。

(四)[一三]無因の義は然らず　因なく果なきが故に。

釋して曰く、云何んが果と名づくるや。謂く各各決定の因緣力にて起るが爲めの故に、名づけて果となす。云何んが因と名づくるや。謂く近と遠と和合して同じく所作あり、此れ有るによるが故に彼の法起ることを得る、是れを名づけて因となす。汝の分別の如きは因は則ち無因にして、果もまた無果なり。觀の無體なるが故なり。この義は然らず、應に此の意を知るべし。

また次に、若し相觀ぜざれば則ち彼の體なし。此の執は然らず。何等の體なきや。偈に曰ふが如し。

[一四]作と及び彼の作者と　作用の具と皆無し。

釋して曰く、世間中に於て瓶衣等の物にもまた作者あり、かの業を作さんと欲す。若し「作者は業に觀ぜず、業は作者に觀ぜず」と謂はば、かの瓶衣等は則ち人工の善巧方便を藉らずして自然に成就せん。また彼の瓶等は種種の技因の成就する所にして、彼れは勝分の具なり。若し觀ぜずんば具等もまた無し。かくの如く一切の斫者と斫具と及び所斫の物とは、また皆無體ならん。また偈に曰ふが如し。

(五)[一五]法と非法ともまた無し、　作等の無體なるが故に。

釋して曰く、何故に法と非法との二つ有ることなきや。かの法と非法とは作者と作具との成就する所なるが故なり。また彼の作者と作具とは了せるが故に、法と非法との二もまた無體なり。

また次に、或は有る自部のもの是の如き心を生ず。諸行は空なるが故に作者は無體なり。かの作者の空は我れに於て咎なし。何となれば、勝れたる身口意の自體が能く作す。法と非法とは此の如き義によるが故に我れに咎なし。

論者言ふ、汝の立因は但だ聚集あるを饒益して、世諦中に於て彼れを作者と名づくるのみ。法と

【一三】無因義不然　無因無果故　梵文「因無きときは所作(の果)と能作(の因)とは存せず」とあり、什譯も之と同じ。本論の譯は多少異る。

【一四】作及彼作者　作用具皆無　作は第二偈に出でし作用(kriyā)の義、作用具はkaraṇaの譯語にして、此の語本來「道具」を意味すれば「作用具」の譯語は正しけれど、茲では梵文そのものに於てkaraṇaはkarman(業)と同義に用ひられ居るが如し。

【一五】法非法亦無　作等無體故　「作等」とは作用、作者、業等なり。其れ等の無體なるが故に法と非法とも存在せずと言ふ。「法、非法」はdharma, adharmaの譯語にして此の場合は「善行、惡行」を意味す。什譯は「罪福」とせり。

論者言ふ、かの執は然らず。何となれば、耶若達多の彼の相續の業を提婆達多の我は作さざるが故なり。是の如き義によつて譬を立つること成ずるを得。彼れ是の如く「作業に觀せずして實の作者あり」と說くは、虛妄分別にして義に於て然らず。作者は無體なるを以ての故なり。偈に曰ふが如し。

〔一〇〕業は是れ作者無からん。

釋して曰く、業もまた是の如し。作者に觀ぜずして自然に有り。作者の是の業を作すもの無きによるが故なり。若し彼れ業の有實を分別すれば、業は卽ち無作となりて、此の過失あり。また作者と及び業との互に相觀せざるは世能く信ずることなし。この故に彼の二は必ず相因待す。應に是の如く知るべし。此の中は驗を立つ。「第一義中には提婆達多の相續の作者は、提婆達多の定の業を作さず。何となれば、觀あるを以ての故なり。譬ふれば耶若達多の如し」。また次に、「第一義中には提婆達多の相續の作者は調達の〔一一〕定受報業を作さず。何となれば、作者に觀ずるが故なり。譬ふれば耶若達多の相續の業を作すが如し」。

また次に、今更に義を立てて前の所說を遮せん。偈に曰ふが如し。

〔一二〕業と及び彼の作者とは　則ち無因に墮す。

釋して曰く、此の後半の偈は業と及び作者との無因の過に墮するを顯さんと欲す。此の義は云何ん。謂く業は作者を離るるが故に、作者は業を離るるが故に、互に相待せざるが故に無因に墮す。無因の義を以て他に開示するは、一切の世間の信ずる能はざる所なり。また次に、第一義中には提婆達多の相續は提婆達多の業の因を作さず。何となれば、觀あるを以ての故なり。譬ふれば耶若達多の如し。また次に、第一義中には調達の相續は調達の定報業の因を作さず。何となれば、作者に觀ずるが故なり。譬ふれば耶若達多の相續の業を作すが如し。是の故に偈に曰く、

〔一〇〕業是無作者　第二偈第二句、前句に「實有なるものには作用無し」と言へるを受けて、「業は(實有なら)作者無くして有らん」と言ふ。偈梵文には此の次に「實有なるものには作用無し。作者は(實有なら)業無くして有らん」と云ふ二句あれど、本論には缺きて出でず。

〔一一〕定受報業は「定んで報を受くる業」なり。

〔一二〕業及彼作者　則墮於無因　梵文及什譯第三偈の後半に相當す。前半は本論には出でず。全偈の梵文には「若し非實有の作者が非實有の業を作さば(卽ち作者と業と共に非實有にして作者が業を作すならば)、業も無因に、作者も無因にならん」とあり。

釋して曰く、若し彼の作が有ならば、則ち作者は有實にして、作と相應するの業もまた有實なり。此の義に翻ずるによつて二つ皆無實なり。かの無實の者にはまた作あること能はず。偈に曰ふが如し。

(四)若し無實の作者ならば　無實の業を作さず。

釋して曰く、所作を業と名づけ、能作を者と名づく。此の中先づ有實の者を立つるを觀ん。偈に曰ふが如し、

(五)有實の者には作無し。

釋して曰く、若し汝の意、作業に(六)觀ぜずして作者の體ありと欲すれば、若し定んで此の如くならば則ち作業なし。作にして既に無體ならば則ち作者は成ぜず。

また次に、「有實のものに作なし」とは此の言は何の謂ぞ、喩を立てて驗釋せん。有實の作者は彼れは五取陰にして但だ假の施設のみ。また外道所計の(七)提婆達多の名の如し。若しくは善業なるも、若しくは不善業なるも。また次に、第一義中には調達の相續は業を作す能はず。何となれば、作者なるを以ての故なり。譬ふれば(八)耶若達多の如し。また次に、若し有實の作者が假の施設に非ずんば、(九)食糠外道が我を作者となすが如し。彼れの意欲の如きは此の義然らず。かの執の爲めの故に此の中に驗を立つ。「第一義中には彼の調達の我は業を作すこと能はず。何となれば、物なるを以ての故なり。譬ふれば業の如し」。また次に「第一義中には彼の業もまた提婆達多の相續の我の作に非ず。何となれば、業なるを以ての故に。譬ふれば餘物の如し。

また次に、若し彼の外人、是の如き意を作して「汝の此の立義は何の所以ありや。提婆達多の彼の相續の業の如きは是れ他作なりとなすや、當に無作なるべしとなすや。二つ倶に然らず。何となれば、若し他作ならば汝の立義は破す。若し無作ならば則ち譬喩は無體なり」といはゞ、

【四】若無實作者 不作無實業　無實は asadbhūta(非實有。實無)の譯語にして、什譯では「決定無」なり。以上の第一偈、梵文及什譯と全く一致す。

【五】有實者無作　有實者は「實有なるもの」を意味し、作者にても業にても、其の他何ものにても實有なるもの一般を指示す得。作は kriyā(作用)の譯語なり。

【六】觀は觀待の意なり。

【七】提婆達多(調達)。觀緣品第一註六七を見よ。

【八】耶若達多は安慧菩薩の中觀釋論にては演若達多と音譯せらる。觀緣品第一註六七參照。

【九】食糠外道。觀去來品第二註四二を見よ。

卷の第六

釋觀作者業品第八

また次に、空の所對治なる、陰無體の義を驗知せしめんと欲して此の品の起るあり。

（一）有る人言ふ、第一義中に陰と入と界と有り。婆伽婆は「此れを以て因となして作者と作業とを起す」と說けるが故に。此れ若し無くば、佛は彼れを與て因となして作者と及び業ありと說くべからず。譬ふれば馬角の如し。作者と及び作業と有るによるが故に、修多羅中に是の偈を說いて曰く、

（二）應に善法行を行ずべし　惡法は應に行ずべからず。
此世と及び後生とに　行者は安樂を得ん。

釋して曰く、此の經中に作者と及び作業と有り。かの業には三種あり。善、不善、無記なり。かの善業は分別するに四あり。一には自性(善)、二には相應(善)、三には發起(善)、四には第一義(善)なり。不善もまた爾り。無記の四種は謂く報生と威儀と工巧と變化となり。この故に所說の因の如きは勢力あるが故に、第一義中に陰等は是れ有なり。

論者言ふ、若し汝、第一義中に彼れを以て因となして作者と及び作業と有るを知ることを得んと欲して、此れを說いて因となさば、此の義は成ぜず。若し世諦中に爾ることを得んと欲すれば則ち譬喩無體なり。此の如く無體なり。第一義中に婆伽婆の「彼れを以て因となして實の作者あり及び作業あり」と說けるを此の如くに解するは、義に於て然らず。其の然らざるが如きは應に是の如く觀ずべし。今此の作者は有實、無實、亦有無實にして能く業を作すとなすや、業もまた是の如く有實、無實、亦有無實にして作者の爲めに作さるるや。これ皆然らず。偈に曰ふが如し。

（三）若し有實の作者ならば　有實の業を作さず。

【一】主として有部の立場をさす。

【二】應行善法行　惡法不應行　此世及後生　行者得安樂
この偈は巴利法句經第百六十九偈に相當す。安慧菩薩の中觀釋論にも玆にこの偈引用せられ、左の如く飜出せらる。
應修善法行　勿修惡法行　修善法行人　二世安樂寂
本論著者が釋論を襲踏せしこと炳かなり。

【三】若有實作者　不作有實業
有實は Sadbhūta(實有)の譯にして什譯では「決定有」とせらる。又作者は「行爲者」、業は「行爲」を意味することは、中論に註せり。

楞伽經に說くが如し、「有爲と無爲とは自の體相なし。但だ彼の凡夫の愚癡妄執にて異ありと分別するのみ。猶ほし石女の夢に兒を抱くを見るが如し」と。また金剛般若經に說くが如し、「須菩提よ、凡そ有らゆる相は皆是れ虛妄なり。若し諸相の非相なるを見れば則ち如來を見る」と。是の如き等の諸の修多羅の、此の中に應に廣く說くべし。

なり。偈に曰ふが如し、

（三四）夢の如くまた幻の如く、　乾闥婆城の如し、
起、住、壞ありと說くも　其の相また是の如し。

釋して曰く、諸仙は彼の有爲の起等を知りて能く覺因を生じ、實の知見を開く。かの智人所說の起等の如きは是れ我が所欲なり。無智の者は慧眼を覆はるるによるが故に、無實の境に於て增上慢を起し、夢中の語の如く彼の諸法の起、住、滅等を說く。此の染汙の熏習により各々異因を執して三種を分別し實義ありと謂ふ。彼れに示さんが爲めの故に夢幻等の三種の譬喩を說くこと應に知るべし。

〔七〇〕有る人言ふ、「起等は是れ有なり。何となれば、現前に覺取するが故なり。譬ふれば色の如し。また作者あるが故に。また相續同じく取るが故に」と。是の如く說くは此の執然らず。何となれば、一向に非ざるが故なり。彼れに開示せんが爲めに其の數量の如く夢等の譬喩を說くこと應に知るべし。

また次に、佛婆伽婆の眞實を見たまふもの、聲聞乘の爲めに惑障を對治せんが故に是の如き說をなす、〔七一〕「色は聚沫の如く、受は水泡に喩へ、想は陽焰に同じく、行は芭蕉に似、識は幻事に譬ふ」と。此の意は我我所の本より無自性にして、猶ほし光影の如くなるを知らしめんと欲するなり。また大乘の爲めに惑障と及び智障とを對治せんが故に、「有爲法は本より無自體」と說く。金剛般若經に「一切の有爲法は星翳燈幻露泡夢電雲の如し。應に是の如く觀ずべし」と說くが如きは、他をして有爲の無體を解せしめんと欲するなり。これ此の品の義は是の故に成ずるを得。般若波羅蜜經中に說くが如し、「佛、極勇猛菩薩に告げて言ふ、善男子よ、色は有爲に非ず無爲に非ず、受想行識もまたまた是の如し。若し色受想行識は有爲に非ず無爲に非ずんば、此れはこれ般若波羅蜜なり」と。また

【六九】如夢亦如幻　如乾闥婆城
　說有起住壞　其相亦如是
梵文及什譯に同じ。但し什譯にては之は第三十五偈となる。

【七〇】以下本品の結語。敎證として金剛般若經、般若波羅蜜經、楞伽經を引く。

【七一】色如聚沫　受喩水泡
　想同陽焰　行似芭蕉
　識譬幻事
雜阿含第十卷に左の如く之に相當する偈あり（大正大藏經第二卷六九頁）。
　觀色如聚沫　受如水上泡
　想如春時燄　諸行如芭蕉
　諸識法如幻　日種姓尊說
巴利雜部第三卷一四二頁にも之と同義の頌あり。本漢譯に於ては偈中第六句を全く省けるも、西藏譯にてはそれが「かく照覽者によつて說かれたり」と翻出せられ、觀誓の廣疏には之を說明して「照覽者とは佛世尊なり。異本にては日種によつてといはる。」と記す。

譬もまた無體なり。若し世諦中にて因と譬喩とを說かば、汝の義に違するが故なり。前に驗を立つるが如し。

已に廣く道理を分別して自在あるが故に、偈に曰ふが如し、

（三三）起、住、壞は成ぜず、　故に有爲なるもの有ること無し。

釋して曰く、外人所說の如き「彼の陰等の諸の有爲法あり、有爲相と和合するを以ての故に」とは、彼れは已に破せりと爲す。

また有る人言ふ「第一義中に彼の牛等の諸の有爲法あり。何となれば、角犎垂胡等の相あるを以ての故に」と。此れまた應に遮すべし。汝此等の有爲相を立つるに、更に相ありと爲すや、更に相なしと爲すや。若し更に相あらば、此の角犎等は則ち牛體に非ずして有爲相なり。何となれば、相あるを以ての故なり。譬ふれば牛實の如し。廣く前には破せるが如し。若し更に相なくば、相なきを以ての故に、此等の諸相は自然に成ぜず。能相に力なきを以ての故に所相もまた無し。また相あらば相に無窮の過あり。此等の一切は先に廣く遮せるが如し。

また有る人言ふ、第一義中にこの有爲なるものあり。何となれば、待對あるが故なり。此れ若し無くば、待對なきこと石女の兒の如くなるべし。かの有爲と無爲との二法は相待するを以ての故に第一義中に是の有爲なるものあり。

論者言ふ、若し有爲法成立することを得れば、有爲を除くが故に無爲と說くべし。かの有爲法は理の如く諦觀するに體は不可得なり。是の故に偈に曰く、

六八 有爲なるもの成ぜざるが故に、　云何んが無爲なるもの有らん。

釋して曰く、兎角の無生なるが如きは世諦中に於てもまた實解となさず。應に此の意を知るべし。この義を以ての故に因等は無體なり。若し爾らば云何んが諸相等ありと分別せん。世諦の爲めの故

して、本論また之を襲用し、しかも本頌にあらざることを觀破して、特に釋偈なることを說明せしならん。

【六七】起住壞不成 故無有有爲　以上の論議の結論にして、生住滅三相の不成立を根據にして、其の相によつて相せらるる有爲自體の存在をも否定す。梵文の正確な譯にして「成ぜず」「有ること無し」の賓辭も其のまゝ梵文に相應す。

【六八】有爲不成故 云何有無爲　之も梵文に正確に一致し、「成ぜず」「有らん」の賓辭も相應す。斯かる用語は問題を理解するに重要なり。

また次に、偈に曰く、

(六二)法若し無體ならば　滅あることまた然らず。
第二頭無きとき　其の斷を言ふべからざるが如し。

釋して曰く、偈の譬喩は其の無なるを以ての故なり。此の無體を以て滅ありと驗するは、是の義然らず。法體の壞するが故なり。

また次に、汝等若し「第一義中に彼の滅相と及び隨滅とあり」と言はば、これ自ら滅すと爲すや、これ他にて滅すと爲すや。二つ倶に然らず。偈に曰ふが如し、

(六三)法は自體にて滅せず　他體にてもまた滅せず。
自體にて起らず　他體にてもまた起らざるが如し。

釋して曰く、自體にて起るは此れ相應せず。前に已に說けるが如し。「(六四)此の起若し未だ起らずんば、云何んが能く自ら生ぜん。此の起若し已に生ずれば、生じたるにまた何の所起あらん」と。他體にて起るとは、偈に「(六五)此の起に若し異の起あらば、起は則ち無窮の過あり」と言へるが如きが故なり。起は既に此の如し。滅もまた類して然り。滅の類偈は「(六六)此の滅若し未だ滅せずんば、云何んが能く自ら滅せん。此の滅若し已に壞すれば、滅したるにまた何の所壞あらん。此の滅に若し異の滅あらば、滅は則ち無窮の過あり。(此の)滅に若し滅なくば、滅法は皆是の如く壞す。」となり。此の釋義の偈は應に知るべし。自他の起の如きは前に已に廣く遮したり。自他の滅は起に類同して破す。有る人、壞因を得る時、壞法方に壞すと言はば、應に是の如く答ふべし。汝、壞因を立つるは、この義然らず。何となれば、かの法はこれ此の法の壞因に非ず。彼れは異なるを以ての故なり。譬ふれば餘物の如し。

品初已來、廣く彼れの說を遮したり。是の如く、起住は第一義中を以てすれば、起の因は成ぜず。

【六二】法若無體者　有滅亦不然
　如無第二頭　不可言其斷
　梵文及什譯と同じ。「無體」は前偈の「有體」に對する概念にして [illegible]（非實有、實無）の語にして、前二句は「實無なる存在に滅は不可得」の意なり。「實無なる存在」とは第二頭等の如し。

【六三】法不自體滅　他體亦不滅
　如自體不起　他體亦不起
　梵文及什譯と同じ。

【六四】此起若未起　云何能自生
　此起若已生　生復何所起
　本漢譯に於ける本品本頌第十三に相當すれども、兩者の譯語に相違あり。

【六五】此起若異起　起則無窮過
　本漢譯に於ける本品本頌第十八に相當すれども、是れ亦その譯語を異にせり。以て本漢譯の譯語の不統一なることを推知し得べし。

【六六】此滅若未滅　云何能自滅
　此滅若已壞　滅復何所壞
　此滅若異滅　滅則無窮過
　(此)滅若無滅　法皆如是壞
　安慧菩薩の釋論の同所にも之に相當する左の二偈を擧ぐ。
　此滅若未滅　自體可能滅
　此滅若已滅　滅已復何滅
　是滅若有異　滅卽是無窮
　滅若無所滅　皆皆如是滅
　惟ふにこの二偈は滅に關して安慧菩薩の創作せしものに

外人言ふ、此の言は何の謂ぞ。

論者の偈に曰く、

(二八)[五八]彼れは此の位の時に於ては　卽ち此の位にて滅せず。
　　彼れは異の位の時に於ては　また異の位にて滅するに非ず。

釋して曰く、「卽ち此の位にて滅せず」とは、自體を捨てざるを以ての故なり。譬ふれば乳の乳位に住せるが如し。また彼れは異の位の時に於て滅するにあらず。何となれば、此の中に驗を說かん。「第一義中に乳は彼の酪の位の時に於て滅するにあらず。彼れは異なるを以ての故なり。異の瓶等の如し」。

また有る人言ふ、是の如き滅あり。體に依止するが故なり。譬ふれば彼の熟の如し。

論者の偈に曰く、

(二九)[五九]若し一切の諸法の　起相不可得ならば、
　　起相なきを以ての故に　滅あるはまた然らず。

釋して曰く、諸法の不起なるは前に已に說けるが如し。未熟と已熟との此の執も成ぜず。譬喩は無體なり。

また次に、汝「滅」と言ふは有體にて滅すと爲すや、無體にて滅すと爲すや。二つ倶に然らず。偈に曰ふが如し。

(三〇)[六〇]法若し有體ならば　有ならば則ち滅相なし。

釋して曰く、相違するを以ての故なり。譬ふれば水と火との如し。是の如きによるが故に、偈に曰く、

(三一)[六一]一法に有と無との有るは　義に於て應に爾るべからず。

【五八】彼於此位時　不卽此位滅
　彼於異位時　亦非異位滅
位(avasthā)は或る物の其の物たる狀態を意味す。此の漢譯は梵文に關して正確にして且つ巧みなり。

【五九】若一切諸法　起相不可得
　以無起相故　有滅亦不然
梵文及什譯と同じ。

【六〇】法若有體者　有則無滅相
梵文「實有なる存在には實に滅はあり得ず」。「有體」は sat(實有)の譯語なり。

【六一】一法有有無　於義不應爾
「有、無」は bhāva (存在) abhāva (非存在)の譯。此の偈にて、有に對する無は存在の滅を意味することが注意せしめらる。

無くば彼の共行の法は體應に有るべからず。譬ふれば馬角の如し。起住あるに由るが故に彼れと共に行ずる滅あり。この故に第一義中に因を說ける力の故に、起住はこれ有なり。

論者言ふ、滅もまた是の如し。謂く此の體を已滅、未滅、滅時に滅あらしめんと欲するは一切然らず。偈に曰ふが如し、

[五五](二六)未滅の法は滅せず、　已滅の法も滅せず、
　滅時もまた滅せず、　生なきに何等か滅せん。

釋して曰く、第一句は滅の空なるを以ての故なり。譬ふれば住の如し。第二句は人已に死すれば、また更に死せず。第三句は彼の已滅と及び未滅とを離れては法更に滅時なし。俱過あるが故なり。この故に定んで知る、滅時は滅せず。また次に、第一義中には滅時は滅せず。世の傳流なるを以ての故なり。當起の法の現在に來る者の如し。第四句は其の義云何ん。一切諸法皆不生なるが故なり。生なしと言ふは生相なきが故なり。生なくして滅あるは義則ち然らず。石女の兒の如し。是の如く、彼れは起者と及び不起者とを欲するも、一切時に於て滅あるは然らず。

また次に、法の住するも、住すること無きも、彼に滅を分別するに、二つ俱に然らず。偈に曰ふが如し、

[五六](二七)法體若し住すれば　滅相は不可得なり。

釋して曰く、住するを以ての故に滅なきは、世間悉く解す。若し汝、住すること無くして滅あるは過失なしと言はば、これまた然らず。偈に曰ふが故し、

[五七]法體若し住すること無くば、　滅また不可得なり。

釋して曰く、住なきを以ての故なり。かの滅相の如し。

また次に、此の法は卽ち此の位に住して滅すべしと爲すや、異の位に住して滅すると爲すや。

【五五】未滅法不滅　已滅法不滅　滅時亦不滅　無生何等滅
梵文及什譯と全く同じ。以下滅法不可得の論議。

【五六】法體若住者　滅相不可得
梵文には「已に住せる存在には滅は不可得」とあり。法體は「存在」の譯語。「住」は已住の意なり。

【五七】法體若無住　滅亦不可得
梵文には「未だ住せざる存在にも滅は不可得」とあり。「無住」は未住の意なり。

何等か是の法、住して　而も老死の相無からん。

釋して曰く、若し起あらば、この體の處に隨つて住ありて可見なるべし。起の可得の成ずるは今則ち爾らず。この故に彼れの立因の義は成ぜず。

また次に、汝等かの「住の住」を得んと欲すれば、住は能く自ら住すとなすや、異の住を假りて住すとなすや。二つ倶に然らず。偈に曰ふが如し、

(一五三)住は異の住來るによつて住すと、　此の義は則ち然らず。
起の自ら起らず　また他より起らざるが如し。

釋して曰く、云何んが起は自ら起ること然らざるや。前に偈に「此の起若し未だ起らずんば、云何んが自ら生ずるを得ん。若し已に起りて能く生ずれば、生じたるにまた何の所起あらん」と說けるが如きが故なり。云何んが他より生ぜざるや。先の偈に「若し起に更に起あらば、此の起は無窮の過あり」と言へるが如きが故なり。住もまた此の如し。偈に曰く、

(五四)此の住若し未だ住せずんば　自體にて云何んが住せん。
此の住若し已に住すれば　住し已つて何ぞ住するを須ひん。
住は若し異の住にて住すれば　此の住は則ち無窮なり。
住が若し住なくして住すれば　法は皆是の如くに住せん。

釋して曰く、此の二偈は是れ釋義の偈にして論の本偈に非ず。前に自住の住を遮するは、自體の起を遮せるが如く、後に他住の住を遮するは、他より起るを遮せるが如し。應に此の如く知るべし。この故に當に知るべし、住は無自體なり。汝先に「是の如き起あり、彼れは體あるが故に」と說けるが如きは、法に體ありとは此の因成ぜず。

外人言ふ、第一義中に此の起住あり。何となれば、共行の諸法は彼の體あるが故なり。これ若し

【五三】住異住來住　此義則不然
如起不自起　亦不從他起
前二句は梵文には「他の住によつても其の同一者によつても住の住立は可能ならず」とあり。卽ち、住が「自己によつて住すること」と「他の住法によつて住すること」とを共に否定す。此の漢譯は「自己によつて(tayaiva 其の同一者によつて)」の語を略せり。什譯には「住は自相にて住せず」として加ふ。

【五四】此住亦未住　自體云何住
此住若已住　住已何須住
住若異住住　此住則無窮
住若無住住　法皆如是住
この二偈安慧菩薩の大乘中觀釋論に出づ。本論が此二偈の中論本頌にあらずして釋義の偈なることを說明せるは、本論と安慧の釋論との間に存する密接なる關係を示すものと謂ふべし。

論者の偈に曰く、

[五一] 若し法無滅時ならば　彼の體は不可得なり。

釋して曰く、諸の有爲法には無常隨逐するを以ての故なり。また次に、かの體は不可得なり。何となれば、滅時なきが故なり。虚空華の如し。偈意は是の如し。

また次に、若し汝の意「已に起れる刹那に住相は力あり。當に爾の時に於て法體は滅せず。また是れ常ならず。住の無間に次で卽ち老あつて無常隨逐するを以ての故なり」と謂はば、此の執は然らず。何となれば、若し此の色等に、住相の用ある時に無常なくんば、後時にもまた無常の隨逐すること無からん。火處に水なく、火は後時に於てもまた水とならざるが如し。住の義もまた然り。

外人言ふ、世間は法體の滅盡するを現見す。云何んが無しと言はん。

論者言ふ、此れ應に觀察すべし。汝、滅を見るとは、この滅は體と恒に相隨ふとなすや。各々別處なりとなすや。若し與に相隨はば卽ち住の義なし。若し別處に在らば體は滅時なし。既に滅時なくんば體は不可得なり。二つ倶に然らず。

また次に、聰慢の者あつて或は是の如く言はん。「譬ふれば、人あり先に佛體(佛性)なくして後時に佛を得るが如く、住もまた是の如し。先に滅なしと雖も後時に滅すること、竟に何の咎あらん」と。此の執は然らず。何となれば、佛體(佛性)なしとは、謂く一切智の相用なきなり。凡夫の智が後時に佛を得るは、此の如き義なし。世諦中に於ても此の方便語はまた成立せず。是の如く、煩惱障と及び彼の(智の)境の障(所知障)とを斷じて、最後の刹那に智相の起る時、說いて佛を得と名づく。佛の智は佛體(佛性)と差別なし。汝の言ふ所の如きは實の道理なし。是の如く、老と住との若しくは一、若しくは異なるもまた此の過に同じ。此れは成ぜざるに由るが故に、阿闍黎の偈に曰く、

(二四) [五二] かの一切の諸法は　恒時に老死あり。

【五一】若法無滅時　彼體不可得
第二十一偈の後半と全く同じ。

【五二】彼一切諸法　恒時有老死
何等是法住　而無老死相
後二句は梵文に「如何なる存在が老死を離れて住せん」とあるものゝ譯なり。

外人言ふ、是の如き起あり。かの所起の法あるが故なり。此れ(起)若し無くば、かの所起の法は則ち有ることを得ず。龜毛を用ひて衣となすが如く、二つ皆無體ならん。起の成ずるを以ての故に住法則ち有り。この故に所說の因の如く起は無體に非ず。

論者言ふ、起は無體なるが故に所起は成ぜず。世諦中に此の起ありと說くと雖も、第一義中には則ち住相なし。今此の體を問はん。未住の體が住すとなすや、已住の體が住すとなすや、住時の體が住すとなすや。第一義中に三皆然らず。偈に曰ふが如し、

(二二)[四九]未住の體は住せず　(已)住の體もまた住せず。
住時もまた住せず　起なきに誰か當に住すべき。

釋して曰く、第一句は住に非ざるに由るが故なり。譬ふれば滅の如し。第二句は現在世と及び過去世との二世の一時なるは不可得なるを以ての故に、住の義は則ち空なり。第三句は(已)住と未住とを離れて更に住時なし。有らば然らず。廣く前に破せるが如し。第四句は一物として起るもの無く、一物として住するもの無し。偈意は是の如し。また次に、第一義中には一物體として起相の可得なるもの無きこと、前より已來廣く道理を引いて人をして解了せしめたり。起は旣に成ぜず。誰か住者となさん。此の義に由るが故に、汝先に說いて「所起の法と起とに因あり」と言へるは、此れ皆成ぜず。

また次に、偈に曰ふが如し、

(二三)[五〇]滅時に住あるは　是の義は則ち然らず。

釋して曰く、相違するを以ての故なり。若し相違の法ならば則ち同時ならず。烈日の光は闇と竝ばざるが如し。偈意は是の如し。

外人言ふ、かの未滅時の體は可得なるが故に。

【四九】未住體不住　住體亦不住　住時亦不住　無起誰當住
梵文及什譯と全く同じ。以下住法不可得の論議。

【五〇】滅時有住者　是義則不然
梵文「滅しつゝある存在に住は不可得なり」。漢譯は主語の「存在」を省略す。

論者の偈に曰く、

　若し起は起無くして起らば　法皆是の如くに起らん。[四五]

釋して曰く、法既に爾らず。起もまた應に然るべし。是の故に強ひて分別を作すべからず。

また次に、此の有起の者は、若しくは有體、若しくは無體、若しくは有無體なるも、起は悉く過あり。偈に曰ふが如し、

(二〇)有體ならば起は無用なり、　無體ならば體は無依なり、[四六]
　有無體なるもまた然り、　此の義は先に已に說きたり。

釋して曰く、何處に先に說けるや。觀緣品中の偈に說けるが如し。有に非ずまた無に非ず、諸緣の義應に爾るべし。また偈に言ふが如し、「有にしても不有にしても有無にしても法は起るに非ず」と。先に已に遮せるが如し。また更に釋せず。

また次に、偈に曰く、

(二一)若し滅時に起あるは　此の義は則ち然らず。[四七]

釋して曰く、滅時なるを以ての故なり。譬ふれば死時の如し。

外人言ふ、未滅の時に起る、この故に過なし。

論者の偈に曰く、

[四八]法若し無滅時ならば　彼の體は不可得なり。

釋して曰く、かの體相の(常なるは)相應せざるを以ての故なり。虛空華の如し。偈意は是の如し。

外人言ふ、住は一向に非ざるが故に。

論者言ふ、彼れにもまた無常隨ふが故に未滅時は成ぜず。我れに過咎なし。前に廣く說けるが如し。

【四五】若起無起起　法皆如是起
「是の如くに起らん」は「起無くして起らん」の意。又上句は梵文には「生無くして已生のものあらば」とありて意義明瞭す。

【四六】有體起無用　無體起無依　有無體亦然　此義先已說
「無用なり」「無依なり」は梵文には na yujyate(可能ならず、妥當せず)の一語あるのみ。其の義譯なるべし。又「有體、無體、有無體」はそれぞれ sat(實有)asat(非實有)sadasat(實亦非實有)の譯語なり。

【四七】若滅時有起　此義則不然
梵文「滅しつゝある存在には生起はあり得ず」。漢譯には主語の「存在」の語略さる。補ひ見るべし。

【四八】法若無滅時　彼體不可得
梵文の殆ど直譯體なれど意義不明なり。「無滅時」は aniruddhyamāna の譯語にして「滅しつゝあるに非ざる」を意味し、全體として「存在にして滅しつゝあるに非ざるものは不可得」「滅しつゝあるに非ざる存在は不可得」「存在は常に滅しつゝあり」の意なり。什譯の「法若し滅せずといはゞ終に是の事あること無し」の方が巧みなり。

體の異、相の異、及び位の異は、先の過失の如く、皆以て此に答へたり。

また次に、[四一]僧佉人言ふ、諸法の體は有なり。顯了すべきが故なり。我れに過失なし。

論者言ふ、顯了すべしとは先に巳に遮せるが故に此れ相應せず。また次に、未起にして體あるを云何んが信ずべけん。

僧佉また言ふ、世(諦)の攝なるを以ての故なり。現在の物の如し。

論者言ふ、現在の物は第一義中には無自體なるが故に、汝の譬は成ぜず。所欲の義は壞す。また次に、無自體なりと雖もまた世諦を壞せず。現在時の色等の諸法は猶ほし幻等の如くなるも、また可得なるを以ての故なり。かの世諦中の色等の諸法は但だ假の施設のみ。應に是の如く知るべし。偈に「起時と及び巳起と未起とに皆起なし」と言へる、是の如き等は先に巳に答へたりと雖も、今當に更に說くべし。偈に曰ふが如し、

(一八)[四二]若し起は起時に(對して)　此の起は所起ありと謂はば、

釋して曰く、彼れの意は若し「起は起時に於て(對して)能く所起あり」と謂はば、此の執は然らず。過失あるが故なり。偈に曰ふが如し、

[四三]彼の起は能く起作するに　何等か復た是れを起さん。

釋して曰く、彼の起は然らず。起作するを以ての故なり。譬ふれば父子の起の無自體なるが如し。偈義は是の如し。

また次に、若し是の如く「更に異の起あつて能く此の起を起す」と說かば、これまた過あり。何等の過を得るや。偈に曰く、

(一九)[四四]若し起に更に起あらば　此の起は無窮の過あり、

外人言ふ、不起(無起)にして起るが故に無窮の過なし。我れ是の如きを欲す。

【四〇】體有起無故　此の一句に相當するもの什譯にも梵文にも無し。

【四一】數論說の批評。

【四二】若謂起起時　此起有所起　梵文「若しまた此の生が生じつゝあるもの(生時)を生ぜしむるなら」の正確な譯なり。

【四三】彼起能起作　何等復起是　梵文には前句を受けて「其の生を更に如何なる生が生ぜしめん」とあり、什譯も之に一致す。「彼起能起作」は多少異る。

【四四】若起更有起　此起無窮過　梵文及什譯と全く同じ。

の驗の現見に勝るものなし。戒等の起るを以ての故なり。

論者言ふ、かの戒等の聚は功德に隨順す。誰れか能く違する者ぞ。而も是れ世諦にして第一義に非ず。彼れ是の如き等に執著を捨てんが爲めに、實義の爲めの故に、此の論の起るあり。この故に過なし。若し汝の意に「瓶衣に起あり」と謂ふは、また是れ世諦にして第一義に非ず。我が所欲は、若しくは瓶、若しくは衣は現起するとき可得なり。かの未起には非ず。若し「已起には起あること然らず。瓶衣等の起は未起にして起るが故に」といふは、此の如き執は是の義然らず。何となれば、若し瓶の未だ起らざるに妄覺を安立して、かの瓶の名に緣つて「瓶の起るあり」と謂はば、是の如き意は此れ但だ世諦に妄覺を安置するのみ。瓶は未生にして不可得なるを以ての故なり。

また次に、[三七]毘婆沙師は言ふ、三世に有なるが故に彼の瓶等は起る。我が義は此の如し。

論者言ふ、此れまた然らず。偈に曰ふが如し。

(一七)[三八]隨處に、若し一物の　未起にして而も體有らば、

釋して曰く、一物とは或は瓶衣等なり。若しくは諸緣に於て、若しくは和合中に、及び餘處に於て體先に有ならば、偈に曰く、

[三九]已に有ならば何ぞ起るを須ひん。

釋して曰く、彼れ若し已に有ならば、起は則ち無用なるが故なり。この因緣の爲めに偈に曰く、

[四〇]體有ならば起は無なるが故に。

釋して曰く、此の義を以ての故に、起より先に體あらば起を驗するに則ち無し。有體にして起るとは立義に過あり。

また次に、時の異なるを執する者、是の如き言を說く。「諸法は體あり、云何んが驗知するや。現世に來るが故に」と。此の執は然らず。何となれば、若し現在に來らば則ち現在を破す。是の如く

る

若諸緣起彼無起　彼起自體不可得
若緣自在說彼空　解空名爲不放逸

といふ偈文も、後の觀聖諦品第二十四第十八偈の釋文中に經偈として揭出せる

從緣不名生　生法無自體
若有屬緣者　是即名爲空

といふ頌文もまた本品の此偈も共に西藏譯に於ては全く同一偈文なり。かく同一偈文を本漢譯に於て三箇所各々全く別異の譯文を出すといふが如きは、本漢譯の譯語の不統一、その內容の亂雜を暴露せるものと謂ふ可し。

【三六】　現見は現量の意にして、驗(比量)に對す。

【三七】　毘婆沙(有部)說の批評。

【三八】　隨處若一物　未起而有體
本論では第十六偈になるも梵文の順序に隨ひ第十七偈とせり。梵文には「若し何か未だ生じない存在が何處かに有るなら」とあり。隨處は「何處かに」、一物は「何か」、體は「存在」の譯語なり。

【三九】　已有何須起
什譯の「此法先已有、更復何用生」に一致すれど、梵文にては意味反對となる。中論註參照。

るが如し。

外人言ふ、譬ふれば人あり、善く劍術を解し不善の心を起し、惡逆の行を行じて自ら其の母を害し、以て隨順すとなすが如し。汝もまた是の如し。何となれば、大仙は彼の聲聞、獨覺のために深き緣起を說きたまへるに、汝は久しく妄想の行、非法の行に習ふを以て、自ら所欲を破し正道理を害す。此の執は然らざるなり。

論者言ふ、汝知らずや、惡見の人あつて因果を撥無し、白法を破壞して肯へて信受せず、かの惡見人を敎化して不善垢穢の義を洗濯せんと欲するための故に、佛婆伽婆は此の如き說を作したまふ、「此れ有るが故に彼れ有り、此れ生ずるが故に彼れ生ず」と。所謂る無明は行に緣たるなり。諸の是の如き等は世諦のための故にして、第一義に非ず。是の如き意は是れ我が所欲なり。汝「自ら所欲を破し正理を害す」と言ふは、此の語然らざるなり。偈に曰ふが如し、

[三四] 諸法は無性にして　自體非有なるに由るが故に、
此れ有るによつて彼れ得とは　是の如きは則ち然らず。

また次に、佛、偈を說きたまへるが如し。

[三五] 若し緣より生ずれば則ち不生なり、　かの緣起は體非有なり。
若し因緣に屬すれば此れ則ち空なり、　空を解する者を不放逸と名づく、と。

是の如き等は、諸經の此の中に應に廣く說くべし。

是の如く觀ずるに由つて、若しくは(已)生と未生と悉く皆幻の如し。この故に起時は寂滅にして則ち起相なし。かの外人の所說の如く、起時を以て緣起となすは、第一義中に驗は成ぜざるが故に、彼れは不善となす。

また有る人言ふ、世間は種種の因緣にて各各の果起ることを[三六]現見す。謂く瓶衣等なり。更に異

【三四】由諸法無性　自體非有故
此有彼得者　如是則不然
觀緣品第十一偈の引用にして本品の頌に非ず。本漢譯に於ては梵文第十六偈（什譯第十七偈）に相當するものを欠く。其偈は「如何なるものにても相緣りて生ずるものは本性上寂靜なり。其れ故生時と生起とは寂滅なり」とありて、前偈に續く。然るに西藏譯にては觀緣品第十一偈の次に此第十六偈の前半を揭げ、之を註して「如何なる物にても緣より生ずるものは、第一義に於てその自性は寂靜にして無生なりとの意なり。」と說き、次いで本漢譯にも出づる一偈を擧げて「大慧よ、自性に依りて生ずることなしといふことより推して、一切法自性なしと敎ふ。」といふ楞伽經の文を引證し、更に此第十六偈の後半を揭ぐ。かくの如く本漢譯は此部分甚だしく省略せられたる爲、第十六偈を全く缺くに至れるなり。

【三五】若從緣生則不生
彼緣起者體非有
若屬因緣此則空
解空者名不放逸
觀誓の本論廣疏に依れば、これは無熱池龍王所問經の偈頌なり。本漢譯觀緣品第一結尾に大乘經の偈として引證せ

已に分別したり。また次に、偈に曰く、

[30]此の起若し已起ならば、　（已に）起りてまた何ぞ起る所あらん。

釋して曰く、已に起るに由るが故に、彼の起を生ずるに則ち功用なし。是の如く觀察するに、汝「起は能く自他を起す」と言ふは、義則ち爾らず。前の無窮の過を免れざるを以ての故なり。また彼の起等はその無爲なるを成ず。無爲なるを以ての故に、かの諸の起等は有爲の相に非ず。汝「相するが故に」と言ふは、因の義成ぜず。

またまた當に問ふべし。起ありと說かば云何んが起るや。起時に起るとなすや、已起に起るとなすや。これ皆然らず。偈に曰ふが如し、

（二四）[31]起時と及び已起と　未起とに皆起ること無し。
去と未去と去時との　彼に於て已に解釋したり。

釋して曰く、彼に已に驗せるが如し。此の中にまた應に是の如く廣く說くべし。第一義中を以てすれば、起時には起らず。何となれば、[32]異世向前なるが故なり。欲滅の時の如し。また次に、若し「かの法の少しは（已に）起り、少しは未だ起らざるを說いて起時となす」と謂はば、これまた然らず。何となれば、若し少しく起れるものは彼れ更に起らず。起は無用なるが故なり。若し未だ起らざるものにも起はまた起らず。未起なるを以ての故なり。譬ふれば未來の如し。

外人言ふ、決定して起は現在に來向す。これを起時と名づく。

論者言ふ、是の如き義もまた應に觀察すべし。偈に曰ふが如し、

（二五）[33]起時に由つて起と名づくるは　此の義は則ち然らず。
云何んが彼の起時を　而も說いて緣起となさん。

釋して曰く、かの起時は有となすや無となすや、亦有亦無となすや。此等の過失は上に已に遮せ

【三〇】此起若已起　起復何所起
已起の語は未起、起時の語に對す。「已に起りて」と訓むも可なり。「起り已りて」の意なり。梵文には「已に生じたるに何ぞ更に生ぜん」とあり。

【三一】起時及已起　未起皆無起
去未去去時　於彼已解釋
第二句「無起」は「起無し」とも「無起なり」とも訓み得れど、梵文には生ぜず（na…utpadyate）と動詞形が用ひあれば、それに順じたり。

【三二】異世向前は「世を異にして前に向ふ」か、意義不明。

【三三】由起時名起　此義則不然
云何彼起時　而說爲緣起
梵文には「此の生時が生起中に現れざるとき、如何にして生時は生起に緣ると說かれん」とあり。之によれば漢譯第一句「起時に由つて起と名づく」は反對にして、「起に由つて起時と名づく」とあるべきが如し。又第四句「而も說いて緣起となさん」は梵文に對する誤解と思はる。pratitya-utpattim は場合によれば所謂る「緣起」を意味すれど、玆では「utpatti に緣りて」卽ち「生起に緣りて」の意なり。

外人言ふ、現見するに燈は闇に到らずして而も能く明を作すが故に。
論者言ふ、汝この門を立つるは我が破力を增し、我が譬喩をして轉た更に明顯ならしむ。故に我れに過なし。彼れ若し是の如くならば、今當に觀察すべし。所見の如しとなすや、また異となすや。我れまた、燈の闇に到らずして而も能く闇を除くを見ず。若し燈、闇に到らずして而も能く闇を除かば、この義は然らず。偈に曰ふが如し、

(二七)若し燈、闇に到らずして　而も彼の闇を破すれば、
燈は此の中に住して　應に一切の闇を破すべし。

釋して曰く、燈の遠闇を破することは汝旣に許さず。近きもまた是の如し。云何んが能く破せん。
また次に、偈に曰ふが如し、

(二八)若し燈能く自ら照らし　また能く他を照らさば、
闇もまた是の如く　自ら障へまた他を障ふべし。

釋して曰く、闇の自他の二(を障ふるは)爾ることを欲せずんば、燈の自他の二(を照らすことを)豈得んと欲せんや。まだ次に、此の中に驗を立つ。「第一義中には燈は自他に於て所治を壞せず。何となれば、能治あるが故なり。譬ふれば彼の闇の如し」。是の如く、燈體の自ら照らし他を照らすは、先に已に遮せるが故に譬喩は無體なり。この故に外人、かの燈喩を引いて「起」の義を成立せんとし、能く自他を起すとは、是れ則ち然らず。前の無窮の過を免れざるを以ての故なり。
また次に、若し自ら起りまた他を起すと謂はば、云何んが能く起すや。已起にして起すとなすや、未起にして起すとなすや。若し爾らば他の過あらん。若し未起にして起さば、偈に曰ふが如し、

(二九)此の起若し未起ならば　云何んが自他を生ぜん。

釋して曰く、未起には生なし。未生なるを以ての故に。前の未生の時の如し。是の如き意は先に

【二七】若燈不到闇　而破彼闇者
燈住於此中　應破一切闇
梵文及什譯と同じ。

【二八】若燈能自照　亦能照他者
闇亦應如是　自障亦障他
梵文及什譯と同じ。「障ふ」は「覆ふ」の意なり。

【二九】此起若未起　云何生自他
未起は「未だ起らざるときに」と訓むも可なり。又梵文には「此の生未だ生ぜざるとき如何にして自體を生ぜしめん」とあり。漢譯には「自他」とあれど、茲は問題上「自」のみにてよし。什譯も「自」のみを問題にす。又「起が自體を生ぜしむる」ことは卽ち起が自ら生ずることなり。

つ。「燈體は彼の第一義中に於て自ら照らすこと能はず。また他を照らさず。何となれば、闇なきを以ての故なり。譬ふれば猛熾の日光の如し」。また次に「第一義中には燈は闇を破せず。何となれば、其の大なるを以ての故なり。譬ふれば彼の地の如し」。この義を以ての故に譬喩は無體なり。

外人言ふ、燈の初めて起る時に卽ち能く闇を破す。偈に「燈能く闇を破するが如し」と言ふが如し。謂く自體に明を作し能く外の闇を除くなり。義意は是の如し。先の所說の如き「闇なきが故に」とは、此の因成ぜず。また譬喩も無體なり。燈と及び光の義は可得なるを以ての故なり。

論者の偈に曰く、

(二〇)[二四]云何んが燈の起時に　而も能く闇を破せん。

釋して曰く、「云何んが破せん」とは謂く破すること能はざるが故なり。語意は是の如し。偈に曰く、

[二五]此の燈の初めて起る時には　かの闇に到らざるが故に。

釋して曰く、起時なるを以ての故なり。譬ふれば闇き燈の如し。

外人言ふ、智と非智等とは一向に非ざるが故に。

論者言ふ、汝この義を執するは前の成立分中の摒に墮するが故に、是の如きもまた遮す。[二六]非一向には非ざるなり。また次に、起時は未生なるが故に、未生の子に所作の業なきが如く、燈もまた是の如く明を作すこと能はず。また次に、前偈に說けるが如き「云何んが燈の起時に而も能く闇を破せん、此の燈初めて起る時には彼の闇に到らざるが故に」とは此の中に驗を立てん、「第一義中には彼の燈は起時に闇を破すること能はず。何となれば、到らざるを以ての故なり。譬ふれば無明世界の中間の黑闇の如し」。また次に「第一義中には燈は闇を破せず。何となれば、所對治を得ざるを以ての故なり。譬ふれば彼の闇の如し」。

【二四】云何燈起時　而能破於闇　梵文及什譯と全く同じ。

【二五】此燈初起時　不到彼闇故　「初起時」は前の「起時」と同じ。「起りつゝあるとき」の意なり。

【二六】非一向は普通に「不定」と譯さる。因明論理の術語にして、因の決定的ならざるを云ふ。

外人言ふ、かの根本起と及び起起との此の二は、起時に各々自ら作業あり。この故に過なし。

論者の偈に曰く、

(七)[三一]汝、此の起時に　　所欲に隨つて起を作すと謂はば、
若し此の起未だ生ぜずんば　未だ生ぜざるに何ぞ能く起さん

釋して曰く、第一句は根本起を謂ひ、第二句は起起を謂ひ、第三句は起時の未起なるを謂ひ、第四句は根本起に起の功能なきを謂ふ。何となれば、未だ生ぜざるを以ての故に、また起時なるが故に。譬ふれば前の未生の時の如く、また當起の法體の如し。

外人言ふ、共有因の如きは法の起時と及び已起の者とに於て共に起る。諸法に起の功能あるが故に、一向と謂ふに非ず。汝「起時の故に」との因と、及び「未生の故に」との因を言ふは、此の義成ぜず。

論者言ふ、前の染染者中に已に遮したり。共起もまた遮したり。かの因を汝一向に非ずと言ふは我れに過ありと說く。また無窮の過あること無しと言ふも、此れ避くること能はず。

また有る人言ふ、別の道理あつて無窮の過を避けん。道理とは云何ん。偈に曰ふが如し、

(八)[三二]燈は自體を照らし　また能く他を照らすが如く、
起法もまた然り　自ら起りまた彼れを起す。

釋して曰く、この義を以ての故に無窮の過なし。

論者の偈に曰く、

(九)[三三]燈中に自ら闇なく　住處にもまた闇なし。
かの燈に何の所照あつて　而も自他を照らすと言はん。

釋して曰く、是の如くして燈には毫末の照用なし。語意に因つて爾り。また次に此の中に驗を立

【三一】汝謂此起時　隨所欲作起　若此起未生　未生何能起　梵文第七偈、什譯の七八兩偈に相當す。梵文「汝に取つては、此のものは生じつゝある時意の儘に彼のものを生ぜしめん。若し此のもの未だ生ぜざるとき彼のものを生ぜしめ得れば」とある義譯なり。

【三二】如燈照自體　亦能照於他　起法亦復然　自起亦起彼　梵文及什譯と全く同じ。

【三三】燈中自無闇　住處亦無闇　彼燈何所照　而言照自他　後二句は梵文には「燈は何ものを照らさん。闇の破るゝが照なればなり」とあり、之の義譯と見るべし。

自體と和合して十五法あつて總じて共に起るに由るが故なり。何等か十五なる。一には此の法體、二には謂く彼れの起、三には住異、四には滅相、五には若しこれ白法ならば則ち正解脫の起るあり、六には若しこれ黑法ならば則ち邪解脫の起るあり、七には若しこれ出離法ならば則ち出離の體起るあり。八には若し非出離法ならば則ち非出離の體起るあり。此の前七種は是れ法體の[一六]眷族なり。七眷族中に皆一の隨眷族あり。謂く「起の起」乃至「非出離の非出離」なる體あり。此れはこれ「眷族の眷族」一法なり。

是の如く、法體と和合して總じて十五法の起るあり。かの「根本起」は其の自體を除いて能く十四法を起作す。「起の起」は能く彼の「根本起」を起す。住等もまた然り。この義を以ての故に無窮の過なし。我が偈に曰ふが如し、

[一七](四)かの「起起」の起る時には　獨り「根本起」のみを起し、
　「根本起」の起る時には　還つて「起起」を起す。

[一八]阿闍黎言ふ、汝種種に多く語ると雖も而も義に於て然らず。云何んが然らざる。偈に曰ふが如し、

[一九](五)若し「起起」の時に　能く「根本起」を起すと謂はば、
　汝は「本起」より生じたるに　何ぞ能く「本起」を起さん。

釋して曰く、是の如く生ぜず。未だ起らざるを以ての故なり。前の都て未起なる時の如し。
外人言ふ、根本起は能く起起を起す。是の如く、起起も能く本起を起す。義は正に此の如し。
論者の偈に曰く、

[二〇](六)若し「根本起」が　能く彼の「起起」を起すと謂はば、
　彼れは「起起」より生じたるに　何ぞ能く「起起」を起さん。

釋して曰く、是の如く生ぜず。未だ起らざるを以ての故なり。義意は是の如し。

【一六】　眷族とは「從屬するもの」の意にして、起住壞乃至非出離等の七法は、主體になる法體に屬する法で、此の屬法に更に屬する所の隨眷族法あり合して十五法になる。

【一七】　彼起起起時　獨起根本起
　根本起起時　還起於起起
根本起(mūla utpāda)は存在を生ぜしめる起法、起起(utpāda-utpāda)は其の起法そのものを生ぜしめる起法なり。什譯の「本生」「生生」の概念に相當す。以下の論意については中論註に詳し。

【一八】　阿闍黎は大師にして龍樹をさす。

【一九】　若謂起起時　能起根本起
　汝從本起生　何能起本起
「汝」は梵文に「彼れ」と云ふ代名詞ありて「起起」と指示するに相應し、同じく起起を意味すと見るべし。什譯と全く同じ。梵文も文章の形は同様なれど、別樣の譯し方あり。中論註參照。

【二〇】　若謂根本起　能起彼起起
　彼從起起生　何能起起起
「彼れ」とは根本起をさす。之も什譯梵文と一致すれど、梵文については別の譯し方あり。

彼の有爲の諸法の相なり」と言はば、此の義然らず。何となれば、次第あるが故なり。次第とは云何ん。泥團を以て輪上に置き、手を運んで旋らし已れば小塔の形の如く、次に拍ちて平かならしめ、次で轉ずれば蓋の如く、後に攏すれば箭の如きなり。此の諸位の別は彼の瓶家の有爲の體相に非ず。起等の諸相もまた彼の有爲法を離れずとは、假に施設せるのみ。眞實の「起」は此の中に遮するが故なり。此れ云何んが遮するや。かの未起の者には住と滅とは無體なるが故なり。若し當來の起時に住と滅と有るべしと謂ひて此の分別をなすは、唯だ世諦の言說にして、先の所說の如き過咎を免れず。

是の如く、起等の諸の有爲相は次第なるも同時なるも彼の體は成ぜず。因に過あるが故なり。

また次に、偈に曰く、

(三)[一三]若し諸の起・住・壞に　異の有爲相あらば、
　有らば則ち無窮となす。

釋して曰く、若し彼れに異ありて、彼れにまた異あらば、是の如くならば則ち無窮なり。而も爾るを欲せず。

また次に、若し起等の諸相に更に相なくば、また先の所說の如く過失を得。偈に曰ふが如し。

[一四]無くば則ち有爲なるものに非ず。

釋して曰く、此の義は云何ん。汝の意の如きは、有爲の諸法は有爲の相に非ずと欲す。有爲なるを以ての故に、是の如き起等もまた有爲の相に非ざるべし。この義を以ての故に、第一義中には起等の諸相を分別すべからず。若しくは是れ有爲にしても、若しくは是れ無爲にしても、所說の過の如きは、今還つて汝に屬す。

また次に、[一五]犢子部は言ふ、起は是れ有爲なるものにして而も無窮に非ず。云何んが知るや。此の

【一三】若諸起住壞　有異有爲相　有則爲無窮
第一偈前二句に「起が有爲ならば更に三相あらん」と言ひて、然るときに起る誤謬を茲に述ぶ。梵文及什譯と一致す。

【一四】無則非有爲
第三偈第四句。「無くば」とは「起等に更に起住滅の三相無くば」の意なり。

【一五】犢子部說の批評一。青目の中論釋には七法俱起說を出せるが、此處には十五法俱起說を出し、西藏文無畏論に一致す。然し七法も十五法も意味は同じ。中論の同處參照。

住あらば無常なり　　無常あらば住なきなり。

また次に、若し起等の諸の有爲相は同時に有りと謂はば、これまた然らず。偈に曰ふが如し、

[八]云何んが一物に於て、　同時に三相あらん。

釋して曰く、此の相、是の如く同時に有らず。語義は此の如し。云何んが(同時に)有らざるや。謂く彼の一物に一時中に於て起住滅あるは、義は則ち然らず。畢竟じて相違するを以ての故なり。

また次に、[九]經部師は言ふ、諸法は各別に定まれる因緣ありて自在に相續す。一時中に於て、當に起るべき者が自體を得る時これを名づけて起となし、初めの刹那に相續する位を此れを名づけて住となし、先の刹那に相似せざるを此れを名づけて老となし、已に起れる者の壞するを此れを名づけて滅となす。是の如き等に決定して[一〇]觀あり、一刹那に於て同時に有るが故に、汝方便をなして我れに與へて過となすは我れに此の咎なし。

論者言ふ、是の相續はまた實有に非ず。また觀あるが故に、住の分別は是れ世諦の三相にして第一義に非ず。汝「住時は住と滅とに違す」と言ふは、此れ然るべからず。先に說く所の過を免れざるを以ての故なり。

また次に、[一一]毘婆沙師は言ふ、先體未だ起らざる者の如きが後に於て自體を得る時、これを名づけて起となし、起者の樹立するを此れを名づけて住となし、住者の朽るが故に此れを名づけて老となし、老者の滅するが故に此れを名づけて壞となす。起等は[一二]次第に得て有爲の體を離れざるに由り、この義を以ての故に彼の相と體とは成ず。先の所說の如き「起等の三は次第にしては力として相を作業すること無し」とは、これ不善となす。

論者言ふ、汝の語は非なり。云何んが相と名づくるや。謂く所相と未だ曾て相離れざるなり。譬ふれば堅相は地を離れず、及び大人の諸相は大人を離れざるが如し。若し「起等は第一義中に是れ

【八】云何於一物　同時有三相　第二偈の後半。前二句に「生等の三は分離しては有爲を相する作用無し」と言へるを受けて、「結合してと云はゞ、如何にして(生等の三者が)同一時同一處に存在せん」と言ふ。「結合してと云はゞ(samas-tās)」の一語は此の漢譯に出でず。但しすぐ前の長行「同時に有りと謂はゞ」が其の意を表す。又「於一物」はekatra(同一處に於て)の譯語なり。

【九】經部說の批評一。

【一〇】觀は觀待の意にして、因待、相待と同じ。

【一一】毘婆沙說の批評。

【一二】「次第に得て」とは順次に成立するの意にして、經部の一刹那俱成の考へに對す。

また次に、若し汝、先に說く所の過を避けんと欲して、「起等は是れ無爲なるもの」と成立すれば、義また然らず。偈に曰ふが如し、

[五] 若し起が是れ無爲なるものならば、　何ぞ有爲の相と名づけん。

釋して曰く、若し起が是れ無爲なるものにして、而も有爲の相をなさば、此の如き義なし。無爲の自體は所有なきを以ての故なり。義意は此の如し。また次に、第一義中に起が是れ無爲にして、而も有爲の諸法の相を作すとは是の義然らず。何となれば、無爲なるを以ての故なり。譬ふれば虛空の如し。住と滅ともまた爾り。また廣く遮せず。

また次に、若し汝、起、住、滅等は是れ有爲の相にして所作ありと分別すれば、是れ次第となすや、また同時となすや。二つ倶に過あり、何となれば、若し次第ならば、偈に曰ふが如し、

(二)[六]起等の三は次第にしては、　力として相を作業すること無し。

釋して曰く、誰か無力なるものに於て有爲と謂はん。また次に、起等を次第に隨つて得んと欲すれは、法體の未だ起らざるときの如きは、住と滅との二種は則ち力として相を爲すことなし。法體なきを以ての故なり。また已滅の法は滅すれば則ち無體なり。起住の二種は則ち滅に於ては力なし。また已起の法は起れば則ち力なし。また法體若し住し滅すれば、また力なし。若し住時にも無常隨逐すと謂はゞ、この義は然らず。百論の偈に曰ふが如し、

[七]住を離れては法體なし　無常に何ぞ住あらん、
若し初めに住あらば　後時は應らざるが故に。
若し常に無常あらば　一切時に住なし、
若し先には是れ常ならば　また無常なるを得ず。
若し無常と住とが　法體と共に同時あらば、」

【五】若起是無爲　何名有爲相　第一偈後半にして、梵文及び什譯と全く同じ。

【六】起等三次第　無力作業相　梵文には「生等の三者は分離しては有爲なるものを相する作用ある能はず」とあり。「次第」は vyasta(分離して、各別に、個々に)の譯語。又「力として相を作業することと無し」は「相を作業する力無し」の意なり。

【七】離住無法體　無常何有住　若初有住者　後時不應故　若常有無常　一切時無住　若先是常者　復不得無常　若無常與住　共法體同時　有住無無常　有無常無住

玄奘譯廣百論破時品第三には之に相當する左の偈あり。

無常何有住　住無有何體　初若有住者　後應無變衰　無常若恒有　住相應常無　若法無常俱　而言有住者　無常相應妄　或住相應虛

四百觀論第十一破時觀想數示品に於ける第十七偈第二十三偈及び第二十四偈も亦之に相當す。

共に相扶くるを以ての故なり。これ若し無くば、かの有爲相の相扶くるの義なし。譬へば兎角の如し。起等の諸相と陰等と相扶くるに、因に力あるに由るが故に、かの法は無ならず。所謂る「有爲なる諸陰等」なり。

論者言ふ、汝、起等の有爲の相を說くは、かの起等の相は、これ有爲なるものと爲すや。これ無爲なるものと爲すや。

外人言ふ、これ有爲なるものなり。

論者言ふ、今當に次第に此の義を分別すべし。先づ「起」を驗すれば、偈に曰ふが如し、

(一)若し起が是れ有爲なるものならば[二]、　また應に三相あるべし。

釋して曰く、第一義中には、彼の起等の諸相をして是れ有爲の相たらしめんと欲せず。何となれば、有爲なるものなるを以ての故なり。譬ふれば法體の如し。

外人言ふ、起と住と滅とは各々作用あり。この故に起等の諸相を是れ有爲の相たらしめんと欲す。

論者言ふ、此の驗は無體なり。唯だ立義あるのみなるが故に。

外人言ふ、起と住と滅等は各々功能あり。汝撥無するは義として則ち然らず。

論者言ふ、起等の作相[三]は不可得なるが故なり。又世諦中にも起はまた彼の有爲法の相に非ず。何となれば、起は作[四]なるを以ての故なり。父の子を生むが如し。住もまた彼の有爲法の相に非ず。何となれば、住は作あるを以ての故なり。食の身を持するが如し。又有爲相は彼の住の作に非ず。何となれば、住は作なるを以ての故なり。譬ふれば女人の瓶を地に置くが如し。滅もまた彼の有爲法の相に非ず。何となれば、破壞するを以ての故なり。棒の物を破するが如し。是の如く、彼れ「起等は有爲相なり」と立つるは此の義成ぜず。因成ぜず、及び義と相違するの此の過あるを以ての故に、起は有爲なるものに非ず。この故に「起は有爲の相」と說くは義則ち然らず。

【二】若起是有爲　亦應有三相　梵文及什譯と一致す。「起」は什譯にては「生」とあり。存在を生ぜしむる一法なり。生(起)・住・滅の三法は夫々存在を生ぜしめ、住せしめ、滅せしむる法にして、此の三法と合することによつて存在は「有爲なるもの」となる。生住滅は有爲をして有爲たらしむるものなれば「有爲の三相」と云ふ。此の三相の有自體を否定するが本品の主題なり。之に關しては中論註參照。

【三】作相は「相を作す」にて、起住滅の法が、陰等に有爲法として相を與ふること。

【四】作は前の「相」に對して用の意なるべし。

諸法もまた染の如く　　同なるも不同なるも成ぜず。

釋して曰く、かの瞋癡等と、若しくは内若しくは外とは、同にても不同を以ても、また皆成ぜず。是の如く、第一義中には彼の染等は成ぜざるが故に、外人の如きが品初に是の如き説を作して「陰等は是れ有なり。染汙の過患を以ての故に」といふは、彼の因は成ぜず。又世諦にて因を説きて及び義に違するが故に、先の所説の如き因の過失あるが故に。

【二】品内に明す所の染と及び染者に其の自體なきを、他をして解することを得せしめたり。此の義は成ずることを得。般若波羅蜜經に、佛、極勇猛菩薩に告げて言へるが如し、「善男子よ、色は染の體に非ず。離染の體に非ず。是の如く、受・想・行・識は染の體に非ず。離染の體に非ず。また次に、色・受・想・行・識は染の體に非ずして空なり。離染の體に非ずして空なり。此れはこれ般若波羅蜜なり。是の如く色は瞋の體に非ず。非瞋の體に非ず。また癡の體に非ず。非癡の體に非ず。受・想・行・識もまた是の如し。此れを般若波羅蜜と名づく。極勇猛よ、色は染に非ず淨に非ず、受・想・行・識も染に非ず淨に非ず、また次に、色は染に非ずして法性なり。淨に非ずして法性なり。受・想・行・識もまたまた是の如し。此れを般若波羅蜜と名づく」と。是の如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く説くべし。

釋觀有爲相品第七

また次に、此の品を成立する其の相云何ん。陰等の諸法は本より無自性なり。惑者は未だ知らずして相を取りて分別す。今顯示して彼れをして無自性の義を識知せしめんと欲して、此の品の起るあり。

【一】外人言ふ、第一義中に是の陰等あり、有爲の自體なり。何となれば、かの起等の諸の有爲相が

【二】以下本品の結語。般若波羅蜜經を教證として引く。

【一】主として有部の立場をさす。

ば染と及び離染との如し。

また次に、偈に曰く、

(一七)若し染と及び染者と　各各の自體成ずれば、
何の義にて強ひて　此の二の同時に起るを分別せん。

釋して曰く、若し染と及び染者との我體各々別ならば、體の別なるを以ての故に、則ち相觀せず。また次に、若し所用ありて、此れはこれ染者と染、此れはこれ染と染者と、有觀なる相貌を「同時に起る」と說く、汝の意は爾るや。此の說には過あり。何となれば、偈に言ふが如し、「染と及び染者との二が同時に起るは然らず」と。是の如き等に、同時に起るは爾るべからず。觀あるが故なり。不卽ならば此の法は同時に起ると說くも、不異なるを以ての故なり。若し別體にして同時に起るを欲すれば、此れまた然らず。偈に曰ふが如し、

(一八)是の如く別は成ぜず、　(故に)同時に起るを求欲す。
同時に起るを成立せんとし　また別體を欲するや。

釋して曰く、是の如き義は、長老、應に說くべし。偈に曰ふが如し、

(一九)何等の別體ありて、　同時に起るを欲するや。

釋して曰く、「同時に起る」とは何等の義ありや。別體ありて次第に起るが故に說いて「同時に起る」となすや。別體なくして「同時に起る」となすや。若し次第にして同時に起ると言はば、これ則ち然らず。染と及び離染との如し。先に已に過を說きたり。若し(別體なくして)同時に起るとは、此れまた然らず。觀あるを以ての故に。因果の二の如し。また先に已に說きたり。是の故に偈に曰く。

(二〇)由つて染と染者との二は　同なるも不同なるも成ぜず。

【一七】若染及染者　各各自體成　何義强分別　此二同時起　第二句は梵文及什譯には「各々別異性成立すれば」とあり。他は同じ。

【一八】如是別不成　求欲同時起　成立同時起　復欲別體耶　梵文「別異性は成立せずと、斯くて汝は結合を求は。結合を成立せしめんが爲に、更に汝は別異性をのぞむ」と。之の正確な譯なり。什譯も同じ。

【一九】有何等別體　欲同時起耶　梵文及什譯第九偈の後半に相當す。前半は本論には出でず。梵文全偈は「而して別異性の不成立の故に結合は成立せず。如何なる別性の有るとき、汝は結合をのぞむか」とあり。別異性有るも別異性無きも結合の不可能なるを言ふ。

【二〇】由染染者二　同不同不成　諸法亦如染　同不同不成　梵文及什譯と全く同じ。第一句冒頭の「由」はevam(是の如くして)の譯語なれば「由つて」と訓む。

釋して曰く、若し同時と言はば卽ち二體あるなり。偈意は是の如し。此の中に驗を立つ。「染と及び染者とは同時に起らず。何となれば、一體なるを以ての故なり。染者の自體の如し」。若し汝の意に、染と及び染者との一體を欲すれば、同時の義は則ち不可なり。相違するを以ての故なり。「我れ今、染と染者とは別體にして同時なれば上の如き過なし」といはば、此れまた然らず。偈に曰ふが如し、

一四 染と及び染者と異ならば、　同時はまた得べからず。

釋して曰く、別體にして同時なるは此の義あることなし。驗破するを以ての故なり。また次に、彼れ別體を立てて而も同時を欲し、他をして解せしむるは、驗は無體なるが故なり。此の中に驗を立つ。「染と染者との二は同時なることを得ず。何となれば、觀あるを以ての故に。染の自體の如し」。

また次に、今更に別體にして同時なるを破すべし。偈に曰ふが如し、

一五 (五)若し別にして同時ならば、　伴を離るるも亦應に同なるべし。

釋して曰く、若し汝の意に、「染と及び染者との此の二は同時なり」と謂つて、而も隨一に伴を離れしめんと欲せずんば、此の中に驗を立てん。「第一義中には彼の染と及び染者とを別體にして同時ならしめんと欲せず。觀あるを以ての故に。因果の二の如し」。

また次に、餘の論師は言ふ、「若し汝、別體にして同時なることを得んと欲すれば、今處處に別體にして彼彼の同時あり。馬の邊りに牛あるを說いて同時となすが如し。是の如く獨りの牛は伴なきもまた同時なることを得」と。此れは先に答へたるが如し。義に少異なし。

また次に、偈に曰く、

一六 (六)若し別にして同時に起らば、　何ぞ染と染者とを用ひん。

釋して曰く、染と及び染者と若し同時に起らば是の義は然らず。其の別なるを以ての故に。譬へ

【一四】染及染者異　同時亦叵得　第四偈後半。梵文及什譯とよく一致す。「異」はprithaktva(別異性)の譯、「同時」は前と同じく「結合」を意味す。

【一五】若別同時者　離伴亦應同　梵文及什譯の第五偈の後半に相當す。前半は本論には出でず。前半は「若し(染と染者とが)同一にして結合あらば、其れ(結合)は結合者(隨伴者)を離れてあらん」とあり、之を受けて後半では「若し別異にして結合あらば、其れ(結合)は結合者を離れてあらん」と言ふ。右の二句は之の正確な漢譯なり。伴は sahāya(結合者、隨伴者)の譯。

【一六】若別同時起　何用染染者　梵文及什譯第六偈の前半に相當す。後半は本論には出でず。此偈梵文には「若し別異にして結合ありとすれば、染と染者に於て何ぞ(結合)あらん。何となれば、各々の別異性の已に成立したるときに倘彼の二つの結合あるべければ」とあり。此の後半の意は、長行中に「以其別故」として現る。

とは同時に起るが故に咎なし。

論者言ふ、此れまた過あり。汝今當に聽くべし。偈に曰ふが如し、

(三)[一一]染と及び染者との二の　同時に起るは然らず。
是の如くならば染と染者とは　則ち相觀せざるが故なり。

釋して曰く、何の因緣の故に此の分別を起すや。觀なきを以ての故に、而も「此れはこれ染者にして彼れは染法たり、此れはこれ染法にして彼れは染者たり」と分別すべし。而も爾ることを欲せず。此れまた云何ん。觀あるを欲するが故なり。此の中に驗を立つ。「彼の染と染者とは同起の義なし。何となれば、觀あるを以ての故なり。譬へば子芽の如し」。

また次に、[一二]鞞婆沙師は言ふ、汝此の因を出すは何等の義ありや。生に觀ずるための故に名づけて觀ありとなすや。別語に觀ずるために名づけて觀ありとなすや。若し生に觀ずるが故に觀ありと名づくれば、心と心數法は此れ恒に相隨ひ亦同時に起る。共有因の故なり。又燈炷と光明との如きもまた同時に起る。一向に非ざるが故なり。若し別語に觀ずるを觀ありと名づくれば、牛の二角の如きもまた同時に起る。一は左、一は右なり。別語あるが故なり。現見は此の如くしてまた一向に非ず。

論者言ふ、この心と心數、及び燈と光等の和合して自在に同時に共に起ると、彼の二つの牛角が別語に觀ずる等とは、世諦中に於ては此の如くならしめんと欲す。第一義中には皆成ぜざるが故に汝說く所の過は我れに此の咎なし。

また次に、染と及び染者とは、「若しくは一にして、若しくは異にして同時なり」との分別は二つ皆然らず。偈に曰ふが如し、

(四)[一三]染と及び染者とが一ならば　一ならば則ち同時なし。

【一〇】 毘婆沙(有部)說に對する批評二。

【一一】 染及染者二　同時起不然
如是染染者　則不相觀故
本品第三偈にして、梵文及什譯とよく一致す。「相觀」は什譯では「相待」とあり、因待、觀待の意なり。

【一二】 毘婆沙(有部)說の批評三。

【一三】 染及染者一　一則無同時
梵文「(染と染者との)同一なるときは結合無し。彼れが彼れ自身と結合すること無きが故に」。一は ekatva (同一性)の譯。同時は sahabhâva (結合、合成)の譯、什譯では「合」とす。

染者より先に染あらば、　染者を離れて染は成ぜん。

釋して曰く、此れまた云何ん。若し染者より先にかの染法あらば、これ則ち過あり。謂く此れはこれ染、此れはこれ染者なるが故なり。所染あるが故に之を名づけて染となし、所依より先に有るに非ず。譬ふれば飯の熟するが如きが故に。若し汝染者に觀ぜずして而も染法あることを得んと欲するは、此れまた然らず。偈に曰ふが如し、

八 染者を離れて染は成ずと、　かくの如きを得んと欲せざれ。

釋して曰く、熟が熟物に觀ぜずして起るが如きが故なり。此れ云何んが驗するや。染者は無體にして而も染法あるに非ず。何となれば、觀あるを以ての故に。染者の自體の如し。

外人言ふ、父子の二體の如きは、一向に非ざるが故に、此の義成ずることを得。

論者言ふ、彼れもまたかくの如く遮するが故に過なし。

外人言ふ、先の刹那に染を起すが如きは已に離るるも而も當起の染の刹那の因となる。この故に過なし。

論者の偈に曰ふ、

九 染あるも復た染者は　何處に當に得べけん。

釋して曰く、かくの如く別時に染を起すの刹那より無間に次いで染者の刹那を生ずるは、此れ不可得なり。染者は成ぜざるを以ての故なり。彼の異熟と是の異熟との如し。是の異熟は、事則ち然らず。かくの如く、過去に染を起すの刹那を立てて現在の染者の因となすは、義また爾らず。云何んが爾らざる。調達の染は調達染者の因とならざるが如し。何となれば、其れの染なるを以ての故に。譬ふれば相續と別なる染の如し。

また次に、一〇 鞞婆沙師は言ふ、我が所立の義には上の如き過なし。何となれば、かの染と及び染者

略符ある方がよく、第一偈に「先に染者有なるも染を起さず」と言へるに對し、此處で「先に染者無なるも染を起さず」と言ふなり。燈論が此處で再び「先に染有ならば」と云ふ形に譯せるは燈論の原典に省略符を脫落せるか、或は其れを見落せるかなり。

【七】若有若無染 染者亦同過
　染者先有染 離染者染成

此の中前二句は第二偈の後半に屬するものにして、梵文及び什譯とよく一致す。第一偈と第二偈の前半までに「染者が染を離れて先に有なるも無なるも、染の起る能はざる」ことを言へるに對して、茲で、染の方を主にして「染が染者を離れて先に有なるも無なるも染者を成立せしむる能はざる」ことを言はんとす。

此漢譯の後二句は釋偈にして本頌に非ず。第一偈にて染者に關して立言せる所を、染に關して繰り返せるものなり。

【八】離染者染成 不欲得如是

此偈も釋偈にして本頌に非ず。

【九】有染復染者 何處當可得

之も釋偈にして本頌に非ず。以上六句は、第二偈の後半に「染有るも染無きも染者また同じく過あり」と言へるを敷衍せるものなり。

釋して曰く、若し各々別異にして此れはこれ染法、此れはこれ染者ならば、是れ則ち染を離るるもまた染者と名づく。また染者が染を起すことは終に義を得ることなし。云何んが驗知するや。染體なくして染者と名づくることを得るに非ず。[四]觀あるを以ての故なり。染の自體の如し。

また次に、[五]阿毗曇人は言ふ、我が偈に「染汙を遍因と名づく、自地中に先に起る」と曰ふが如し。この故に染者は染の因となることを得。阿毗達磨の相義はかくの如し。

論者の偈に曰ふ、

(二)[六]染者先に有るが故に、　何處に復た染を起さん。

釋して曰く、染人無くして後時に染を起すとき乃ち染者と名づくるが如し。若しかの染者先に已に名を得て此の染者が復た染を起すと說くは、かくの如き義なし。驗は無體なるが故に。義意かくの如し。復た次に、猶ほ調達の相續中の染をかの調達染者は證因となさざるが如し。何となれば、染者なるを以ての故に。譬ふれば耶若達多の如し。

外人言ふ、相續と別なるも別ならざるも、染は因に非ざるが故に、染者門は成じ已つて復た成ずるの過をなす。また譬喩無體なり。及び義に違するが故に。

論者言ふ、かの說は善ならず。相續と別ならざる染は因に非ざるが故に、染者門は成じ已つて復た成ずるの過に非ずとなす。かの相續と別なる染と及び染者とも、また應に同じく遮すべし。また譬喩無體なるに非ず。所成と相似と及び異門とを遮するは義に違するに非ざるが故なり。

外人言ふ、所作の因あり。謂く他相續の染者もまた染の因となるが故に、譬喩無體なり。

論者言ふ、此れは相應せず。不共因を遮するが故に、此の過は實に非ず。

また次に、若し汝定んで染者の先に染法ありと謂ふは、是れまた然らず　偈に曰ふが如し、

[七]若しくは(染)有るも若しくは染無きも　染者もまた同じく過あり。(第二偈)

のみを獨立に見れば論意は明かなり。即ち前二句にて「先に染者あらば染者は染を離れて成ず」と言へるを受けて、「染に因りて初めて染者が成立し、染を離れて先に染者有りて、その染者が染すると云ふは然らず」と言ふなり。

【四】觀は觀待(相待)の義なり。

【五】阿毗曇(有部)說の批評一。

【六】染者先有故 何處復起染　什譯には「若し染者有ること無くんば云何んが當に染あるべけん」とありて、第一句は「染者先無故」と云ふと同じになり、本論の「染者先有故」と正反對になる。而して梵文には

rakte 'sati punā rāgo
kuta eva bhavisyati.

とあり、此の中 rakte 'sati の「'」はaの省略符にして、此符あるが爲に茲では「染者の無なるときに」の意となり、若し此の省略符なければ「染者の有なるときに」の意となり、燈論の譯と同義になる。されば、燈論と什譯との「有」と「無」との相違は sati の前の省略符一つにかゝり、其の他は却つて原文の同一なるを知らしむ。而して此處は前後の關係上省

釋觀染染者品第六

復た次に、一切法は空なり。何となれば、かの染と染者と瞋と瞋者等とは本と無自性なればなり。無自性の義を了知せしめんと欲して、此の品の起るあり。

人ありて言ふ、「第一義中に陰、入、界あり。何となれば、婆伽婆は彼れを說いて染汙の過惡の因となすが故に。若し此れ非有ならば佛は則ち彼れを說いて染因となさざらん。譬ふれば龜毛の如し。云何んが驗知するや。經中の偈に曰く、

[一]染者は法を知らず、　染者は法を見ず、
若し人此れを安受すれば　名づけて極盲暗となす。

釋して曰く、染と染者との如く、乃至癡等の盲闇もまた然り。この故に當に知るべし、かの陰等あり。」

論者言ふ、かの陰等の行聚は染因を增長して過惡顯現す。かくの如く、染者と及びかの染等は世諦中に於て幻、焰、夢、乾闥婆城の如くなり。第一義には非ず。かくの如く汝の此の分別を諦觀するに、欲染より先に染者ありとなすや、染者より先に染ありとなすや、染と及び染者と此の二は倶時なりとなすや。三皆然らず。偈に曰ふが如し、

(一)若し先に染者あらば、[二]染を離れて染者は成ず。

釋して曰く、染はこれ愛著の異名なり。若し染者が染を離るれば、彼れを染者と名づくるは此れ則ち然らず。何となれば、熟にして果なきが如きは云何んが熟と名づけん。偈に曰ふが如し、

[三]染に因りて染者を得るなり、　染者が染するは然らず。

【一】染者不知法　染者不見法
若人安受此　名爲極盲暗
西藏譯に於ては三偈となり、第一偈は「愛欲によつて諸法を知らず、愛欲によつて諸法を見ず、人若し愛欲に據らば、その時冥闇となる。」、第二偈は第一偈に於ける愛欲を瞋恚に代へ、第三偈も亦それを愚癡に代へたるのみにして、他の辭句全く同一なり。法句經忿怒品には此偈意に關聯せる左の二偈を含む。
忿怒不見法　忿怒不知道
能除忿怒者　福喜常隨身
貪婬不見法　愚痴意亦然
除婬去癡者　其福第一尊

【二】若先有染者　離染染者成
梵文及什譯とよく一致す。但し梵文には「若し染より前に染を離れて染者成ずれば」とありて、二句全體が一前提となつて次句にかゝる。此漢譯も「若し先に染者ありて染を離れて染者成ずれば」と訓めば梵文に一致せしめ得るも、前後の關係上、上の國譯の如く訓みたり。

【三】因染得染者　染者染不然
此の二句は譯としては疑問なり。梵文には「彼の(染者)によつて染生ずべし」とあり、之の譯としては相應せず。然れど姑く原文より離れて漢譯

樂を得んと欲すれば、應に須らくこの二種の惡見を遮すべし。此れまた云何ん。若しくは三界の所攝、若しくは出世間、若しくは善不善及び無記と、世諦に種ょに諸に營作するところの如きは、彼れが第一義中に於て若し有自體ならば、勤方便を起して善不善をなすも、此の諸の作業は應に空にして果なかるべし。何となれば、先に有なるを以ての故なり。譬ふれば先に有なる若しくは瓶衣等の如し。かくの如く樂は常に樂、苦は常に苦ならん。壁上の彩畫の形量威儀相貌の變ぜざるが如く、一切の衆生もまた應にかくの如くなるべし。

復た次に、若し有自體ならば、かの三界所攝、若しくは出世間の、善不善の法は、勤方便を起すも則ち空にして果なし。有ることなきを以ての故なり。かくの如くならば、世間は則ち斷滅に墮す。譬ふれば兎角を磨瑩し、そをして銛利ならしめんも終に不可得なるが如し。この故に偈に曰く、

[二七]少慧は諸法の、　若しくは有若しくは無等を見る。
かの人は則ち　滅見第一義を見ず。

復た次に、[二八]寶聚經中に佛迦葉に告ぐるが如きは、「有はこれ一邊、無はこれ一邊。かくの如き等に、かの內の地界と、及び外の地界とは皆二義なし。諸佛如來は實慧にて證知し、正覺を成ずることを得たり。無二一相、所謂る無相なり」と。又上の金光明女經に文殊師利、善女人に問うて言ふが如きは、「姉は云何んが界を觀ずるや。女人答へて言ふ、文殊師利よ、劫燒くる時の世の如く、界は空虛にして一の見るべきものなし」と。又偈に曰ふが如し、

[二九]世間は空相の如く　虛空もまた無相なり、
若し能くかくの如く知らば　世に於て解脫することを得ん。

かくの如き等の諸の修多羅に此の中に應に廣く說くべし。

が、梵文には「吉祥なる可見(相)の寂滅」とあり。又第二句の「有、無」は此の場合astitva(存在性)nāstitva(非存在性)の譯にして、「諸法」がbhāvaなり。

【二八】以下本品の結語。寶聚(寶積)經、金光明女經を敎證として引く。最初に引用せる寶聚經中の佛說は先きの觀六根品の終に無言說經より引證せる「內外地界無二義、如來智慧能覺了、彼無二相及不二、一相無相如是知、」といふ偈の異譯に他ならず。しかも之は勝思惟梵天所問經中の散文なり。以て本論の引證文が如何に蕪雜にして、その譯語が如何に不統一なるかを想見し得べし。

【二九】世間如空相　虛空亦無相
若能如是知　於世得解脫
思益梵天所問經卷一、分別品。

「世間虛空相、虛空亦無相、菩薩知如是、不染於世間」

西藏譯に依れば、本偈と先きの觀五陰品の最後に勝思惟梵天所問經の偈として「世間如彼虛空相、彼虛空相亦自無、由如是解無所依、世間八法不能染」と譯せるものとは全く同一偈文なれば、兩偈は同文異譯なること疑を容れず。これ亦譯語不統一の一例なり。

り。偈に曰ふが如し、

[二三] 地等より先には、　微毫の相も得べきもの有ることなし。

釋して曰く、かの地水等もまたかくの如く廣く分別して說くべし。乃至偈に言ふ「體に非ず無體に非ず、所相と能相とに非ず」と。應に同じく虛空の如くに遮することをなすべし。云何んが「界」と名づくるや。「藏」の義これ界の義なり。かの金界の如し。かの虛空等は能く憂苦等の藏の義をなすが故なり。復た次に、「無功用にて自相を持する」の義これ界の義なり。かの界を說くは衆生を敎化する憐愍のための故に說く。かの佛語は世諦の所攝にして第一義中には界は無體なり。人もまた成ぜず。界あるを以ての故に、所欲は破せず。

復た人ありて言ふ、若し第一義中に一切の句義を皆撥無すれば、此れはこれ路伽耶陀法の邪見の所說にして、佛語と相似するも此れ應に棄捨すべし。佛語に非ざるを以ての故なり。

論者言ふ、汝は過を起す。[二四]翳の不眞の髮毛蚊蚋蠅等を增して妄りに遮をなすが故なり。この義云何ん。我れ人の有を遮することを說くは、有自體を遮するにて無體を說くにあらず。楞伽經中の偈に曰ふが如し。

[二五] 有無は倶にこれ邊なり、　乃至心の所行なり。
かの心行滅し已れば、　名づけて正心滅となす。

釋して曰く、かくの如く、有體に著せず無體に著せず。若し法無體ならば則ち一として作すべきもの無きが故なり。また偈に曰ふが如し、

[二六] 有を遮して非有と言ふも　非有を取らざるが故なり。
青を遮して非青といふも　說いて白となすを欲せざるが如し。

釋して曰く、この二種の見は名づけて不善となす。この故に智慧ある者は、戲論を息めて無餘の

【二三】先地等無有　微毫相可得
第一偈の最初に虛空に關して「虛空より前には毫末の虛空相無し」と言へるに倣ひて、同樣のことを「地大」について立言せる釋偈なり。本頌に非ず。

【二四】翳は翳眼人(taimirika)の意にして眼病者なり。眼病者の見る不眞(不實)の物を强ひて實有と假定するが所謂「增する」なり。

【二五】有無俱是邊　乃至心所行
彼心行滅已　名爲正心滅
七卷楞伽卷四無常品、「有無是二邊、乃至心所行、淨除彼所行、平等心寂滅、」

【二六】遮有言非有　不取非有故
如遮青非青　不欲說爲白
この偈は觀誓の廣疏に從へば龍樹菩薩の撰述たる觀世間論に於ける偈文なりと。惟ふにこの偈は安慧菩薩の大乘中觀釋論本品に於ける左の偈を襲用せしなるべし。
遣有言無性　亦不取無性
如說青非青　不欲成其白

【二七】少慧見諸法　若有若無等
彼人則不見　滅見第一義
本頌第八偈、梵文及什譯とよく一致す。「滅見第一義」は「見を滅する第一義」の意なる

釋して曰く、色は名なり。偈に曰く、

　　何處に

釋して曰く、味なるが故に。偈に曰く、

　　無體は當に得べけん。

釋して曰く、かの色無なるが故に、譬喩無體にして所欲の義壞す。應に知るべし。

外人言ふ、有體と無體との二は皆これ有なり。かの解者あるが故なり。若し解者あらばかの物則ち有なり。

論者言ふ、汝「解者が體と無體とを解す」と謂ふは、此の解者はこれ有體となすや、これ無體となすや。倶なるもまた已に遮せり。解者の有體なるは此の義成ぜず。また有體と無體と相似せざるが故に。此れに異なりて外に解者を分別するは此の義然らず。偈に曰ふが如し。

　[三二]體と無體とより異にして、　何處に解者あらん。

釋して曰く、解者は無體なり。偈義かくの如し。

外人また言ふ、我れは異門ありて此の分別をなす。かくの如き解者は、かの有體と無體とに相似せざるが故に。

論者言ふ、かの不相似の體は是れ一物にして、二分あるは、この義然らず。相違するを以ての故に、觀もまた立たず。彼れは驗して人をして信知せしむべきことなし。かくの如く虚空は諦に觀察する時、道理に應ぜず。偈に曰ふが如し、

　(七)[三三]是の故に知る虚空は　體に非ず無體に非ず、
　　所相と能相とに非ず。　餘の五は虚空に同じ。

釋して曰く、虚空は毫末有ることなきを遮して、人をして信受せしめしが如く、餘の五もまた然

【三二】與體無體異　何處有解者
梵文には「有無を離れたるに誰か有無を知らん」とあり、什譯も同じ。此處でも「體」、「無體」は「有、無」を意味す。

【三三】是故知虚空　非體非無體
非所相能相　餘五同虚空
梵文及什譯と全く一致す。

釋して曰く、自部の義かくの如し。餘の涅槃等の隨一物體は、能成の譬喩皆成ぜざるが故なり。

復た次に、別部の人言ふ、「虛空はこれ有なり。自體を領受するが故に、また有爲なるが故に。此の義と及び因の二は皆成ぜず。前に過を驗せるが如し。應にかくの如く說くべし。

復た次に、[一七]經部の人言ふ、我が立義の如きは實に無碍の處を說いて虛空となす。虛空は無體にして唯だこれ假名のみ。我が義はかくの如し。

論者言ふ、毘婆沙師の所說の如きは三摩鉢提の所緣なるが故に、彼れ境界となつて欲染斷ずるが故に、空に體ありと立てて人をして解せしめんと欲す。今經部執じて「實に無礙の處を說いて虛空となし、唯だこれ假名のみ」と言ひて前の有體を遮す。かくの如き計は我が譬喩をして轉た更に明顯ならしむ。今この義を說かん。偈に曰ふが如し、

[一八]色因を離れて色あるは　この義則ち然らず。
色は本無體なるが故に　無體にして云何んが成ぜん。

釋して曰く、先に觀陰品に說けるが如し。第一義中には有礙を色と名づくるは此の道理なし。經部の虛空無體を分別して、驗して解せしむる如きは此の義成ぜず。

人ありて言ふ、「虛空の有體は人をして解せしめず、譬喩なし」といはば、我が今の立義は人をして解し易からしむ。應にかくの如く說くべし、色等の有體はかの無體に[一九]觀じてあるが故に、此れが若しこれ有なるは彼の體の無なるに觀ず。譬ふれば色味の二の如し。無體なるが故なり。法若し無體ならば、無ならば則ち觀ぜず。譬ふれば馬角の如し。

論者言ふ、色法の有體は我れ先に已に遮せり。汝をして彼の無體を受けしめんと欲せず。偈に曰ふが如し、

[二〇]有體無し。

【一七】經部說の批評一。

【一八】離色因有色　是義則不然
　　色本無體故　無體云何成
本偈の前半は觀五陰品第四第一偈の前半「若離於色因、色則不可得、」に相當し、その後半は本品第六偈の前半「無有體何處、無體當可得」の異譯と看做し得べきが如し。故に之は本來此處に位すべき中論本頌にあらずして、前說を要約せる一種の釋偈と看做すべきものなり。

【一九】觀は觀待(相待)の義なり。

【二〇】無有體何處　無體當可得
梵文及什譯第六偈の前半に相當し、よく一致す。梵文には「有の存せざるとき何ものゝ無がおこらう」とあり。此の漢譯の「有體、無體」は夫々bhāva, abhāvaの譯にして單に「有無」とあると全く同じ。又第一句は「體あること無し」と訓みても可なり。燈論の譯語例では體の一字にても、無に對する有を意味す。

復た次に、人ありて言ふ、「有相無相の物に相が中に於て轉ずるは、これ過咎なし」と。彼れを遮せんがための故に偈に言ふが如し。「有相と無相とを離れて異處にもまた轉ぜず」と。此の二は倶に然らず。彼れを定んで觀ずるは燃可燃品に後當に廣く遮すべし。先に他をして解せしめし二分の過は今還つて汝に屬す。此れ相應せず、二過あるを以ての故なり。

復た次に、人ありて言ふ、「第一義中には虛空はこれ有なり。彼の相あるを以ての故なり。此れ若し無くば、彼の相を說かず。虛空華の如し。經に言ふが如くんば、「佛は大王に告ぐ、此の六種の界を名づけて丈夫となす」と。この故に彼れは有なり、及び相をなすが故に。

論者言ふ、所相の成ぜざること、我れ先に已に破せり。偈に曰ふが如し、

[13](四)所相成ぜざるが故に、　能相もまた成ぜず。

釋して曰く、能相もまた所相中に墮するが故に、相もまた成ぜず。譬喩無體なり。この義のための故に、慧を以て諦觀すれば所相能相の二つ皆立たず。偈に曰ふが如し、

[14](五)是の故に所相なく、　また能相も有ることなし。

釋して曰く、彼れは他をして無體を解せしむ。驗すべきが故なり。是を以て驗知するに彼れは實に無體なり。此の義は成ずることを得。

復た次に、[15]毘婆沙師は言ふ、我が立義の如きは虛空は體あり。何となれば、彼れ境界となつて欲染斷ずるが故に。譬ふれば色の如し。また三摩鉢提の所緣なるが故に。譬ふれば識の如し。また無爲なるが故に。譬ふれば涅槃の如し。

論者言ふ、汝若し第一義中にこの虛空を有らしめんと欲すれば、これ所相となすや。これ能相となすや。二つ皆然らず。先に已に說いて人をして解することを得しめたり。この故に偈に曰く、

[16]所相と能相とを離れては、　是の體もまた有らず。

【一三】所相不成故　能相亦不成　梵文及什譯第四偈の後二句に相當す。前二句は本論には出でず。所相は什譯にては可相と譯さる。原語 lakṣya は嚴密には「相せらるべきもの」の意なるが、日本語としては「相せられるもの」と言ひてよし。相から離れて相によつて相せられる所の存在自體をさす。又「能相」は單に「相」とあると同じ。相は存在を相するものなるが故に、存在を「所相」と云へるに對して「能相」と稱せしなり。

【一四】是故無所相　亦無有能相　第五偈にして、梵文及什譯とよく一致す。

【一五】毘婆沙(有部)說の批評。

【一六】離所相能相　是體亦不有　第五偈の後半、之も梵文及什譯とよく一致す。「是の體」は bhāva の譯にして存在なり。所相と能相、卽ち相せらるるものと相とを離れては存在は成立せずと云ふが論意なり。之を反面から言へば、存在は必ず能相と所相との契機を含むで成立すると云ふことなり。

釋して曰く、第一義中に若しくは自分より若しくは他分より、此の體成ずるは義則ち然らず。

或は人ありて言ふ、「所相の虚空、是の如きは體あり。彼れに於て能相の轉ずるあり」とは、此れまた然らず。偈に曰ふが如し、

〔一〇〕無相の體は既に無し、　相は何處に於て轉ぜん。

釋して曰く、所依は無體なるが故に、能依もまた無體なり。義成ぜざるが故に。復たこれ因の過なり。

復た次に、所相と能相と若し不異ならば、豈に所相を以て還つて所相を相せんや。かの異相は無體なるが故に。この義を以ての故に無異門中には虚空は無相なり。若し異門にて相を說かば、彼れまた相に非ず。所相と異なるが故に。譬ふれば隨一物等の如し。かくの如く相は既に無體なり。空もまた無相なるが故なり。偈に「無相の體は有ることなし」と言ふは、謂く虚空なり。「相は何處に於て轉ぜん」とは、かれに於て轉ぜざるを以ての故なり。この義應に知るべし。復た次に偈に曰く、

〔一一〕無相に相は轉ぜず、　有相に相は轉ぜず。

釋して曰く、汝の所說の如き能相と所相とは義皆然らず。何となれば、かの物體なくして而も相あるは、これ則ち成ぜず。體あるもまた爾り。偈に曰く、

〔一二〕有相と無相とを離れて、　異處にもまた轉ぜず。

釋して曰く、第一義中には、一物體ありて相が中に於て轉ずるは、これ皆然らず。何となれば、譬喩無體なるを以て、外人所欲の義は成ぜざるが故なり。復た次に、虚空華等の如し。無相なるを以ての故なり。かの相もまた爾り。無體なるを以ての故に轉ずと說くべからず。世間悉く解す。この故に偈に、「有相に相は轉ぜず」と言ふ。第一義中を以て如實に驗すれば、かの無障礙は虚空の相に非ず。何となれば、相なるを以ての故なり。堅等の相の如し。

【一〇】無相體既無　相於何處轉　第二偈の後半、之も梵文と完全に一致す。但し此處では bhāva(存在)が單に「體」と譯さる。前の「有體」と全く同義にして、是れ燈論の譯語例なり。

【一一】無相相不轉　有相相不轉　本品第三偈、之も梵文と完全に一致す。「無相、有相」は夫々「無相の存在の上に」「有相の存在の上に」の意にして、存在(有體)の語を略せる形なり。「轉ず」は「現はる」の意、存在と言へば必ず相を有せるものなるが、その場合、相そのものと、相を離れたる存在自體とが別々に實有にして其れが結合して存在が成立すると云ふ考へを否定するが本品の趣意なり。

【一二】離有相無相　異處亦不轉　第三偈の後半、之も梵文及什譯と完全に一致す。

してかの他を解せしむる因を說くことを須ふ。彼れ若し說かば、因と及び譬喩との過失あり。ただ立義あるのみなるを以ての故なり。

復た次に、[五]毗婆沙師は言ふ、「實に虛空あり。これ無爲法なり」と。彼れに答へんがための故に、偈に曰ふが如し、

[六]此の中に虛空を驗するに　毫釐の實體無し。

釋して曰く、第一義中には虛空は無實なり。何となれば、無生なるを以ての故なり。譬ふれば兎角の如し。かくの如く「因は無體なるが故に」、「果なきが故に」、「有ることなきが故に」等の諸因にて應にかくの如く廣く說くべし。

復た次に、[七]鞞世師は言ふ、所相と能相との二法は異なるが故に。

論者言ふ、若し爾らば彼れ等は則ち先後あらん。瓶衣等の如し。彼れに答へんがための故に、偈に曰ふが如し、

[八]若し先に虛空あらば、　空は則ちこれ無相なり。

釋して曰く、虛空は無相なり。偈意かくの如し。此の中に驗を說かん、「虛空はかの相の所相に非ず。何となれば、先に已に有るが故に。隨一物の如し」。復た次に、無障礙は虛空の相に非ず。何となれば、彼れは異なるを以ての故に。隨一物の如し。復た次に、所相と能相と無相とを謂ふは、是れまた然らず。何となれば、異の分別は我れまた捨するが故に。復た次に、若し汝「世諦に因を說かば、因は成ぜざるに非ず」と言はば、義に違するの過失を汝は避くること能はず。この故に相と別なるも別ならざるも二つ皆成ぜず。故に知る、虛空は定んでこれ無相なり。若し無相にして體ありと言はば、人は知ること能はず。是れがための故に、偈に曰ふが如し、

（二二）[九]處として一物として、　無相にして而も有體なるもの有ることなし。

【五】 毗婆沙（有部）說の批評三。

【六】 此中驗虛空　無毫釐實體
此れ釋偈にして本頌に非ず。

【七】 勝論說の批評一。

【八】 若先有虛空　空則是無相
第一偈の後半にして、梵文及什譯とよく一致す。前二句にて「虛空相より前に虛空は無し」と言へるを受けて、「若し相より前に有らば無相のものならん」と言ふ。此邊の論旨については中論註參照。

【九】 無處有一物　無相而有體
本品第二偈の前半にして梵文の完全な直譯なり。梵文には「何處に於ても何であつても無相の存在は存せず」とあり。此の中の「何處に於ても」（kva cit）を「處として」と譯し、「何であつても」（kaç cit）を「一物として」と譯し、存在（bhāva）を「有體」と譯せるなり。什譯では「有體」は「法」と譯せらる。

なし」と。

此の中に〔一〕「自部また佛語を引いて證となす。經に言ふが如きは、「佛は大王に告ぐ。界に六種あり。地、水、火、風及び空、識なり。彼れは各々相あり。謂く堅、濕、煖、動、容受、了別なり。此の六種の界を說いて丈夫と名づく」と。空華無きを施設して有となすが如くに、取りて丈夫と名づくるは、此の義然らず。この故に論者の先の所立の義なる「地等の色因の體非有なり」とは、彼の所立の義は則ち破壞すとなす。また阿含と相違するが故なり。

論者言ふ、世諦のための故に如來此の地等の六界を說いて以て丈夫となす。第一義に非ず。

復た次に、〔二〕毘婆沙師は言ふ、「第一義中に地等の果あり。何となれば、彼の相あるが故なり。此の地等の界若し實無ならば、如來は彼の相ありと說くべからず。虛空華の如し。今堅等ありて地等の相となる。相あるを以ての故に地等は無なるに非ず。

論者言ふ、虛空は無自體なり。少しの功用の他の解を生ずるもの、彼れは無物なるが故なり。空界を解し已れば、自餘の諸界は卽ち遮すべきこと易し。偈に曰ふが如し、

〔三〕虛空より先には、　毫末も虛空の相あることなし。

釋して曰く、虛空と、彼の無障礙の相と、此の二は別なし。偈意かくの如し。

復た次に、〔四〕毘婆沙師は言ふ、我れ此の義を立つ、無障礙はこれ虛空の相なり。かの相あるが故に。

論者言ふ、この無障礙を立てて有となすは、他は解すること能はず。此の義云何ん。「無常なり」の聲が是れその立義なるとき、「無常なるが故に」を以て將つて出因となすが如し。かくの如く、「此の虛空あり、虛空は有なるを以ての故に」とは、これ則ち唯だ立義あるのみにして、因なく及び喩の義則ち成ぜず。若し汝の意に、無障礙の相を虛空となすと謂はば、世諦中に於て隨人悉く解して、かの他を解せしむる因を說くことを須ひず。第一義中に於ては此れ成ぜざるを以ての故に、決

【一】本論で「自部」と言へば、主として大乘派をさすも、外道に對する佛教の意味にて有部等の小乘をさすことあり。此處は後者なるべし。所引の經文は觀誓の廣疏に依りて、父子合集經、卽ち大寶積經の第四會たる菩薩見實會中の一節なることを知る。

【二】毘婆沙(有部)說の批評一。

【三】先虛空無有　毫末虛空相　梵文及什譯第一偈の前半に相當すれど、此の二句誤譯なるが如し。梵文には「虛空相より前には何等の虛空も存在せず」とあり、問題上も此方が適當にして、此二句によりて「相より前には如何なる存在も無き」ことを言ひあらはして以下の論議を引き起す前提になる。此の漢譯の如く「虛空より前には虛空相無し」としては意味反對になりて、論旨通ぜず。

【四】毘婆沙(有部)說の批評二。

離る。かくの如く受想行識は識の自性を離る。若し色より識に至るまで諸性を離るれば、此れはこれ般若波羅蜜なり。善男子よ、色は無自性なるが故に、受想行識もまた無自性なり。若し色より識に至るまで無自性ならば、是れを般若波羅蜜となす」と。

また勝思惟梵天所問經の偈に曰ふが如し、

二六 我れは世間のために諸陰を說く　かの陰はかの世間の依たり、
能くかの陰に於て依をなさずんば　世間の諸法は解脫することを得。
世間はかの虛空の相の如し　かの虛空の相もまた自ら無し、
かくの如き解によれば所依なく　世間の八法も染すること能はず。

また金剛般若經中に說くが如し、「須菩提よ、菩薩は色に住せずして布施し、聲香味觸法に住せずして而も布施を行ず」と。

また楞伽經の偈に曰ふが如し、

二七 三有は假の施設なり　物は無自體なるが故に。
ただ假設中に於て　妄想して分別をなすのみ。
分別を覺する時を以てすれば　自體は不可得なり。
無自體なるを以ての故に　彼の言說もまた無し。

かくの如き等の諸の修多羅の此の中に應に廣く說くべし。」

釋觀六界品第五

復た次に、諸法は無體なり。空に對治せらるるによるが故に。今また地等の諸界の無自性の義を明かさんとして、此の品の起るあり。此の義云何ん。觀陰中に說くに、「若し色を離るれば則ち色因

【二六】我爲世間說諸陰　彼陰爲彼世間依　能於彼陰不作依　世間諸法得解脫　世間如彼虛空相　彼虛空相亦自無　由如是解無所依　世間八法不能染
羅什譯思益梵天所問經卷一分別品、「說五陰是世、世間所依止　依止於五陰、不脫世間法、　世間虛空相、虛空亦無相、　菩薩知如是、不染於世間」

【二七】三有假施設　物無自體故　但於假設中　妄想作分別　以覺分別時　自體不可得　以無自體故　彼言說亦無
七卷楞伽卷四無常品、「三有唯假名、無有實法體、由此假施設、分別妄計度」「三有唯分別、外境悉無有、妄想種々現、凡愚不能覺、經々說分別、但是假名字、若離於語言、其義不可得」

虛空と作意等とは、その所應の如く當にかくの如く遮すべし。復た次に、色等の諸因の別ならざるが如きは、已に他をして解せしめたり。かくの如く、第一義中には受等の諸因もまた別異なし。自の和合の支は不可取なるが故に、彼れは應に取るべからず。自因自體の如きは此れまた過を與ふ。應に先の如く說くべし。若し外人過を與ふれば應に先の如く避くべし。

復た次に、「かくの如き等の諸法とは、謂く、かの陰の外の有爲の諸法の有らゆる分別なり。「瓶衣等は實有なるが故に異なるが故に」といふが如きは、その所應の如く彼の色に同じく遮す。「色等の陰の攝なるが故に」といふを因となすが如きは、此の因は成ぜず。譬もまた無體なり。陰の義壞するが故なり。「かの陰の攝」とは世諦中の攝にして第一義に非ず。因の義に違するを以ての故なり。此の諸の道理は應にかくの如く知るべし。

或は復た人あり、妄想分別して「第一義中に何等かの物あるに隨つて自體不空なり、及び起滅す」等といふ。此の諸の諍論は義皆然らず。何となれば、如實に諦觀すればかの相は空なるが故なり。第一義中を以てすれば諸入は起らず。體は實有に非ず。かくの如く觀察して人をして識知せしむ。若し不空を執じて空に與へて過となすは、此れまた然らず。何となれば、前と同じく遮するが故に。一切は空に與へて過となすこと能はず。偈に曰ふが如し、

[二四](八)若し一物體を觀ずれば　則ち一切の體を見る。
かくの如く一物空ならば　一切皆空なるが故に。

釋して曰く、前の文句にて諸入の起を遮せるより、陰の無自性を以て行人に曉示す。品義かくの如し。この故に成ずることを得たり。

[二五]佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如し、「善男子よ、色は起滅なきが故に、受想行識もまた起滅なし。若しかの五陰にして起なく滅なくば、此れはこれ般若波羅蜜なり。善男子よ、色は色の自性を

【二四】若觀一物體　則見一切體　如是一物空　一切皆空故

此偈は中論本頌にあらず。維浄譯大乘中觀釋論觀五蘊品第四第九偈が之に相當するのみにして、他本には全く之を缺く。堅意菩薩の入大乘論には尊者提婆所說偈として「一法若有體、諸法亦復然、一切法本無、因緣皆悉空、眞實觀一法、諸法不二相、諦了是空已、則見一切空、」と記し、西藏譯の四百觀論弟子敎誨品第八の第十六偈は正しく之に相當するものなれば、之が提婆菩薩の作に係る偈を引證せしものなることは炳かなり。而して本論に於ては本品最後の第八偈と第九偈とは省略せられ、提婆菩薩の偈の直前の長行中に兩偈の意義挿入せらる。

【二五】以下本品の結語。般若波羅蜜經、勝思惟梵天所問經、金剛般若經、楞伽經を敎證として引く。

釋して曰く、第一義中にこの穀子を驗するに芽の因とならず。何となれば、相似せざるが故に。譬ふれば碎瓦の如し。

或は謂ふ「稻穀は是れかの芽の因なり。穀に體あるを以てかの芽あることを得、指示すべきが故に。大鼓の聲と及び麥芽等の如し」と。

論者言ふ、汝は善說ならず。諸有の起は一切遮せるが故に。譬喩無體なるを以て能成は不足す。この過あるが故なり。若し「かの眼等の根より識等の果を生ずるは、此れは不相似なり。一向に非ざるが故に」と謂はゞ、是れまた然らず。何となれば、諸法を破するが如く、かの眼識等もまたかくの如く遮す。更に異門なきが故に、非一向の過に非ず。前の所說の如き「實の地等あり、かの果あるが故に」とは二つ皆成ぜず。義に違するを以ての故なり。

復た次に、〔二二〕毗婆沙者言ふ、所作の因あるが故に、謂く有爲法の起る時、一切の相似不相似の法は、彼れの因となるが故に、譬喩無體なり。

論者言ふ、汝は善說ならず。簡別あるが故に。彼れが自分より生ずると、不共等の所作の因が能く起すとは、已に遮せるが故に。品初已來この諸の文句にて已に四大と及びかの因色を遮して、他をして色陰の無體なることを解知せしめたり。餘の受陰等は偈に曰ふが如し、

(七)〔二三〕受陰と及び心陰と　想と行と、一切種の
是の如き等の諸法は、　皆色陰に同じく遮す。

釋して曰く、色陰を遮せるが如く受等もまた爾り。已に說けり、第一義中には色は實有に非ず、自因を取らざるが故に、かの覺無體なるが故に。軍衆等の如し。かくの如く、第一義中には受、心、想、觸、及び作意等は皆實有に非ず。自因を取らざるが故に、彼れもまた取らず。軍衆等の如し。一切もまた應にかくの如く類して知るべし。復た次に、受等の諸因は所謂る觸なり。及び色と明と

【二二】毗婆沙(有部)說の批評
二。

【二三】受陰及心陰　想行一切種
如是等諸法　皆同色陰遮
梵文及什譯と同じ。心陰は識陰のことなれど、梵文には心(citta)の語が用ひらる。

らずと。かくの如き色等の形相差別の、此の境界に於て應に分別すべからず。前の所説の過を免れざるを以ての故なり。眞實無分別智を得んと欲する聰慧眼者は應に善く諦觀すべし。夢の所見は覺むれば則ち然らざるが如く、かの智もまた爾りと。

復た人ありて言ふ、先因の功能次第に相續して後果の起るとき、かの因の功力の相もまた見るべし。紫礦の汁が白氎子を染むるが如し。熏習を以ての故に、次第に相續して後果の時に至りてかの色は得べしと。

此の執を遮せんがための故に、偈に曰ふが如し、

[18](六)若し果が因に似るは、　此の義則ち然らず。

釋して曰く、此の驗は、彼れは果の因に非ず。語義かくの如し。何となれば、第一義中にはかの青等の色の經をして青等の氎の因となさしめんと欲せず。相似なるを以ての故なり。餘の青氎等の如し。

[19]僧佉人言ふ、汝「かの餘の青氎の因もまた無し」と説くは然らず。何となれば、汝譬喩を立つるも無體なるを以ての故なり。

論者言ふ、汝は善説ならず。かの氎の起る時此の因は分に非ず。かの氎を成ぜざるを以ての故なり。かくの如く、譬喩は成ずることを得。

復た次に、[20]自部の人言ふ、相似の因果と不相似の因果とあり。かの前後の刹那に世に異ありと雖も、物類中に於て、風と燈焔の刹那に起滅するが如きは、これを相似の因果と名づけ、木を燒き灰となり、乳を變じて酪となる等の如きは、これを不相似の因果と名づく。

論者言ふ、かの相似の因果は先に已に遮せるが如し。不相似はこれ今破するが如し。偈に曰く、

[21]若し果が因に似ざるは　義また爾るべからず。

【一八】若果似因者　此義則不然　梵文及什譯と全く同じ。

【一九】數論說の批評六。

【二〇】自部人は大乘派の異解をさす。

【二一】若果不似因　義亦不應爾　第六偈の後半。之も梵文什譯と同じ。

無果にして而も因あるは　云何んが此の義あらん。

釋して曰く、若し色等の果を離れて色因あらば、卽ちこれ無果にして因あるなり。何となれば、其れと異なるを以ての故に。竹篾等の如し。又かの因はまた色等の聚なるが故なり。かくの如き義によつて因果成ぜず。汝所說の如く「果あるが故に」を因となすは義に違するが故に、此の執は成ぜず。

復た次に、此の色の、若しくは有若しくは無を分別するに、二つ倶に然らず。因は無用なるが故なり。偈に曰ふが如し、

(四)[一五]色若し已に有ならば　則ち色因を待たず。
色若し先に無ならば　また色因を待たず。

釋して曰く、色若し先に有ならば則ち因を須ひず。何となれば、其の有なるを以ての故なり。かの瓶衣の如し。色若し先に無ならば、卽ちこれ未だ有ならず。かの餘物の如し。義意かくの如し。

復た次に、無因を執する者が、因の無體を謂ふは、この義然らず。偈に曰ふが如し、

(五)[一六]無因にして而も色あるは　この義則ち然らず。

釋して曰く、世諦中に於て色の無因なるは、義また爾らず。復た次に、毘婆沙師が「未來の色の有」を言ふは、前偈に同じく答ふ。

復た次に、世諦中に於て因未だ果を取らざるときは色は、則ち無體なり。而も有と言ふは、この義然らず。この因を以ての故に、一切時に於て四大と及び造色と有りと執するは義と相違す。偈に曰ふが如し、

[一七]この故に色の境に於て、　應に分別を生ずべからず。

釋して曰く、云何んが分別なる。謂く實色あり、或は因は異ならず、及び果は地等の色因に異な

【一五】色若已有者　則不待色因　色若先無者　亦不待色因　梵文及什譯と同じ「不待色因」は什譯では「不用色因」、梵文には「色因不可得(na-upapadyate)」とあり。

【一六】無因而有色　是義則不然　梵文及什譯と同じ。

【一七】是故於色境　不應生分別　梵文には「それ故に色に關する如何なる分別も分別すべからず」、什譯には「是故に有智者は色を分別すべからず」とあり。

「〔一〇〕不異にしては體あることなし、束蘆と及び別處とに、
若しくは一若しくは異等と、　凡夫妄に分別す。」

釋して曰く、色入等の如きを彼れ成立せんと欲して、「因あるが故に」と說いて、以て因となすは、この因成ぜず。また義に違するが故に。

復た次に、若し汝かの色因を離れて而も色ありと分別すれば、此れまた然らず。何となれば、過失あるが故なり。偈に曰ふが如し、

〔一一〕色因を離れて色あらば、　色は則ち無因に墮す。

釋して曰く、諸の無因を說くものは、言ひて無因にして色あらしめんと欲す。彼れに應にかくの如く問ふべし。縱ひ汝の說をして理と相應せしむるも、何等の物に隨へば是れ汝の所說の無因の種なるや。爾らしめんと欲せず。偈に曰ふが如し、

〔一二〕無因にして而も物あるは、　終にこの處あることなし。

釋して曰く、この義云何ん。譬喩の、彼の體を顯はすものなきを以ての故なり。若し因を撥無すれば大過失あり。この執は成ぜず。觀緣品中に已に破せるが如し。

〔一三〕僧佉言ふ、第一義中には實に地等あり。色等と異なきが故に。色の自體の如し。

論者言ふ、汝の因は成ぜず。喩もまた無體なり。色等と異なきと及び色の自體とは、前已に遮せるが故に。

また人ありて言ふ、第一義中にかの地等あり。何となれば、かの果あるが故に。此れ若しなくば、かの果は有らず。虛空華の如し。今果色あるが故に地等は無ならず。

此の執は然らず。偈に曰ふが如し、

〔一四〕「若し色を離れて因あらば　此の因は則ち無果なり。」

【一〇】不異無有體　束蘆及別處　若一若異等　凡夫妄分別　七卷楞伽卷五無常品、「若離諸因緣、則更無有法　一性及異性、凡愚所分別」

【一一】離色因有色　色則墮無因　本頌第二偈。梵文及び什譯と同じ。

【一二】無因而有物　終無有是處　第二偈後半。梵文及什譯と同じ。「物」は什譯では「法」、梵文には artha が用ひらる。特殊な意義なく、單に任意の對象物を指示するなり。

【一三】數論說の批評二。

【一四】若離色有因　此因則無果　無果而有因　云何有此義　梵文及什譯と同じ。

論者言ふ、異を遮せるが故に、不異を以て汝に解を得しむるに非ず。汝邪分別にて不異と言ふは、我れ受けざるが故に。

復た次に、鞞世師言ふ、汝の出因は非一向の過あり。何となれば、燈を取らざれば則ち瓶覺なきが如し。かれまた異なるが故に。

論者言ふ、汝は善說ならず。餘事を論ぜず。我れ但だ彼れの自の和合の支を遮するのみ。不可取なるが故に、かの覺は無體なり。燈は無體なりと雖も而も寶珠、藥草、日月等の光ありてかの瓶の覺起る。自の和合の支の已外に更に異色の得べきものなし。この義を以ての故に汝の喩は非なり。燈はかの瓶の自の和合の支に非ざるが故に、異門は無體にして非一向の過に非ず。偈に曰ふが如し、

[八]此の物と彼の物と、異なるは則ち然らず。

釋して曰く、この義は後に當に說くべきが如し。また次に、第一義中には燈と瓶と異なるは、此れまた成ぜず。この義を以ての故に非一向の過に非ず。

復た次に、[九]鞞世師言ふ、かの軍衆等の總は實に初起あるを以ての故に、汝地等は實なしと言ひ、驗を立てて解せしむるは譬喩成ぜず。

論者言ふ、軍衆の諸枝は、かの軍衆の總の實の初起の因に非ず。何となれば、總なるを以ての故に。樹、根、莖、枝、葉等の諸分の如し。かの軍衆の象等の諸分は、かの軍衆の初起の因に非ず。何となれば、彼れは分に非ざるが故に。譬ふれば莖等の如し。また譬喩無體なるに非ず。偈に言ふが如し。「若し當に色を離るべくば色因もまた見ず」と。前の立義、出因、譬喩の如くに驗す。かの色等は地等に異なることなし。及びかの地等は色等に異なることなし。異は前に遮せるが如し。不異は後に破せん。若し不異ならば乳卽ち是れ酪にして、酪また乳とならん。不異なるを以ての故なり。この義を以ての故に、この證は成ずることを得。楞伽經の偈に曰ふが如し、

【七】勝論說の批評一。

【八】此物與彼物　異者則不然　此偈中論本頌に非ず。但し觀合品第十四第四偈の後半と義相通ず。觀去來品註(八三)參照。

【九】勝論說の批評二。

かの覺に異なし。この義を以ての故に實色ありと知る。
論者言ふ、第一義中には驗は無體なるが故なり。已に因色を觀じたり。次に四大を遮せん。偈に曰ふが如し、

〔四〕若し當に色を離るべくんば、　色因もまた見ず。

釋して曰く、色、聲、香、味、觸等の此の諸の因色は皆相離るるが故に、かの色の因なる地等は見取すべからず。この義のための故に今造論者は初めにかの地を遮す。かの地等を遮するは何の所以ありや。大の義あるが故に。云何んが大の義なる。世諦中に因より起るものの如きは、第一義中には體實に無性にしてこれ無自體なり。楞伽經の偈に曰ふが如し。

〔五〕積聚を離れては體無く、　彼の覺は取るべき無し。
故に知る緣起は空にして　我れ無自性と說く。
物として緣より起るもの無く　物として緣より滅するも無なし、
起とは唯だ諸緣の起るのみ　滅とは唯だ諸緣の滅するのみ。

釋して曰く、この方便を以て第一義中に地は實有に非ず。かくの如く決定して彼の因は不可見にして彼れを見ざるが故なり。若し不可見なるが故に彼れを見ざれば、第一義中には彼れは實有ならず。軍衆等の如し。復た次に、第一義中には地の覺の境界は體實有に非ず。何となれば、覺なるを以ての故に。林等の覺の如し。復た次に、第一義中に「地」の聲の句義は境界無實なり。何となれば、聞くを以ての故に。譬ふれば「軍衆」等の聲の如し。復た次に、第一義中には自の和合の分なる彼の異色なし。何となれば、彼れは不可取にしてかの覺無體なるが故なり。譬ふれば地等の自體の如し。

復た次に、〔六〕僧佉人言ふ、汝「色等は地等に異ならず」と言ふは、これ我が所成を成す。

【四】若當離於色　色因亦不見
第一偈の後半。梵文及什譯と同じ。

【五】離積聚無體　彼覺無可取
故知緣起空　我說無自性
無物從緣起　無物從緣滅
起唯諸緣起　滅唯諸緣滅
七卷楞伽卷無常品、
「離諸和合緣、智慧不能見、
以是故我說、空無生無性、
因緣共集會、是故有生滅、
分散於因緣、生滅則無有、」
同卷二、集一切法品、
「一切法無生、亦復無有滅、
於彼諸緣中、分別生滅相、」

【六】數論說の批評一。

復た次に、陰の無性の義を識知せしめんと欲するが故に此の品あり。

(一)人ありて言ふ、第一義中に諸の入等有り。何となれば、陰の攝なるを以ての故なり。若し其れ無くば、かの色入等は則ち陰の攝に非ず。虛空華の如し。諸の入有りてかれは陰の攝なるによるが故なり。十種の色入の如きは一の色陰の攝にして、法入は三陰、謂く受と想と行となり、及び彼れの一分は色陰の所攝なり。かの意入は識陰の攝なり。この因を以ての故に、第一義中に諸の入等有り。

論者言ふ、色陰と謂ふは、略して二種を說く。四大と及び所造となり。若しくは三世等の一切の差別も總じて色陰と說く。かの眼等が陰の攝なるを、外人は因となさんと欲すれば、色は麁にして解し易し。先に分別して說かん。偈に曰ふが如し、

(二)若し色因を離るれば、　色は則ち不可得なり。

釋して曰く、何等か是れかの色の因なる。謂く地等の四種の大なり。第一義中に若し此れらを離れては色は不可得なり。而も世諦に於ては四大の因によつて假に色を施設す。第一義中には色を驗するに實なし。自因を受けざるが故に彼の覺は無體なるが故なり。若し自因を受けずして覺が無體ならば、彼れは實に有に非ず。軍衆等の如し。色の因の不可取にして、色覺の無自體なるは、亦またかくの如し。復た次に、第一義中には色覺の境界は體實有に非ず。何となれば、覺なるを以ての故に。譬ふれば林等の覺の如し。復た次に、第一義中には「色」の聲の句義は境界無實なり。何となれば、聞くを以ての故に。譬ふれば「軍」等の聲の如し。若し受等の諸陰は一向に非ずと言はば、この義は然らず。何となれば、識等の心數もまた同じく遮するが故に、(三)非一向に非ず。

或は謂ふ、第一義中にかの實色あり。何となれば、かの色は變異するも覺に別なきが故なり。若し物變異して覺また別ならば、これ世俗の有なり。譬ふれば瓶等の如し。青色の如きは別の時にも

【一】主として有部の立場をさす。

【二】若離於色因 色則不可得 梵文及什譯と全く同じ。

【三】非一向は不定因の義なり。

偈に說けるが如し。この故に去は無性にして去者もまたまた然り。去時と及び諸法と一切は所有無し。この義を以ての故に外人「彼の入の起と、及び去義と有り」と分別するは、これ皆成ぜず。先に過を說けるが如し。入等の體空なるを以て、信解を生ぜしむ。品義かくの如し。この故に成ずることを得たり。

【三〇】無言說經の偈に曰ふが如し、

【三一】內外の地界は二義なし、　如來の智慧能く覺了す。
彼れは二相なく及び不二なり、一相なり、無相なり、かくの如くに知る。

また金光女經に言ふが如し、「文殊師利かの童女に語る、應に諸界を觀ずべし。童女答へて言ふ、文殊師利よ、譬ふれば劫の燒くる時の如く、三界等もまた爾り」と。また偈を說いて曰ふ、

【三二】眼は色を見ること能はず、　意は諸法を知らず。
此れはこれ無上の諦なり、　世間は了すること能はず。

また般若波羅蜜經に說くが如し、「かの一切法は智者なく、見者なく、かの說法師もまた不可得なり。心を以て分別すべからず、意を以て能知すべからず」と。また佛母經に說くが如し、「阿姉、眼は色を見ず乃至意は法を知らず。かくの如く、菩提は離なるが故に眼色を離れ、乃至菩提は離なるが故に意法を離る」等と。又佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如きは、「善男子よ、色は色の境界とならず。受想行識は識等の境とならず。境界なきを以ての故なり。極勇猛よ、色は色を知らず、色は色を見ず。若し色にして不知不見ならば、是れを般若波羅蜜となす。乃至受想行識にして不知不見ならば、亦また是の如し」と。

釋觀五陰品第四

【三〇】以下本品の結語。教證として無言說經・金光女經・般若波羅蜜經・佛母經を引證す。

【三一】內外地界無二義　如來智慧能覺了
彼無二相及不二　一相無相如是知
本論に於ては此偈を以て無言說經中の偈文となすも、實は勝思惟梵天所問經中の長行なり。

【三二】眼不能見色　意不知諸法
此是無上諦　世間不能了
觀誓の廣疏に依れば、此偈は轉有經の偈文なり。本品の先きに「眼不見色塵、意不知諸法、此名最上實、世人不能度」(註六)と譯出せる偈も此偈も共に西藏譯に於ては全然同一文なり。是れ亦本漢譯の譯語の不統一なる例なり。

る」と言ふは、この義然らず。この故に汝「具業あるが故に」と言ふは、かの因成ぜず。また義に違するが故に、過失かくの如し。

復た次に、自乘[三六]の人言ふ、諸行は因緣にて他に依るが故に空なり。眼と及び彼の我とが倶に見ること能はざるは、この義應に爾るべし。而も所見と能見と都て無體なりと言ふは、この義然らず。何となれば、かの識等の果に四種あるが故なり。此れ若し無くば、かの識と觸と受と愛とを名づけて果となさず。生盲人の如し。論者言ふ、所見と及び見とは、この義成ぜず。先に已に破せるが如し。今謂ふところは偈に曰ふが如し、

(七)見[三七]と所見と無きが故に、識等の四種は無し。

釋して曰く、何故に無きや。緣なきが故なり。この義を以ての故に識等は成ぜず。能所既に成ぜず。譬喩また無體なり。

人ありて言ふ、第一義中にこの識等あり、かの取等の果は有體なるを以ての故なり。

論者言ふ、此れ應にかくの如く答ふべし。偈に曰く、

彼[三八]の取(卽ち)緣等の果は　何處に當に得べけん。

釋して曰く、識等なきが故に取もまた成ぜず。偈義はかくの如く攝受す。是の取の義、彼れに幾種ありや。謂く欲取、戒取、我語取、見取なり。かの取は、有及び生老死に緣たり。かくの如き過失は常に汝に隨逐す。外人が品初に譬喩等を擧げて眼見を成立せるは、先に已に遮せるが如し。かの耳聲等も例して前に同じく破す。偈に曰ふが如し、

(八)耳[三九]、鼻、舌、身、意と　聞者と所聞等とは、
應に知るべし、かくの如き義は　皆眼見と同じく遮す。

復た次に、外人品初に「是の去あり、果を作すを以てなり」と說けるは、是れまた然らず。先の

【三六】大乘中の唯識派をさすべし。

【三七】見所見無故 識等四種無　梵文及什譯と一致す。「見、所見」は前の「能所」の語と同義なり。而して識は能所の關係の上に成立す。能所既に成立せずんば識は成立せず。隨つて識に屬する心所、煩惱は成立せず。「識等の四種」とは長行の如く、識、觸、受、愛をさす。而してそれ等は十二支緣起說の體系では、取、有、生、老死等の緣になる。

【三八】彼取緣等果 何處當可得　第一句は「緣等の果なる彼の取」の意にて、識等の緣より生ずる果たる取は、識等の緣成立せざれば、之も又成立せずと言ふなり。

【三九】耳鼻舌身意 聞者所聞等　應知如是義 皆同眼見遮　梵文及び什譯と同じ。但だ耳、鼻、舌、身、意は第一偈と同じく、能聞、能嗅等と譯すが、梵文に關しても、又問題上にも、正確なり。

また見者なし。

復た次に、〔二三〕鞞世師言ふ、見者は無體なり。四種和合して色識起るに由るが故に「見者が見る」と名づく。

論者言ふ、彼れは前の過に同じ。四種和合するとき別に見者あるは世皆知らず。而も有りと言ふは、この義然らず。この故に偈に「眼を離れては見者なし」と言ふ、彼の自體なきが故なり。眼を離るるを以て見に則ち見能なし。總じて見者と名づくるは、此れはこれ汝の意に隨つて說くなり。復た次に、鞞世師所立の第一義中に「見者が色を見る」とは、この義然らず。何となれば、眼と異なるが故なり。瓶等の如し。前の二門を以て見者は成ぜざるが故に。復た次に、丈夫を分別して以て見者となすは無自體なるが故に、偈に言ふが如し、「眼を離るるも眼を離れざるも見者は不可得なり」と。かの見者の自體は眼あるも眼なきも不可見なるが故なり。若し「見者に眼ありて能く見る」と謂はば、此れまた然らず。何となれば、眼は有體なるによつて色を見ること成ずるを得。火の能く燒くが如く、眼が見ることもまた爾り。世諦中の說はかくの如く應に知るべし。若しかの眼を離れて別に見者あらば、盲人は眼なきもまた應に能く見るべし。この義は然らず。

復た次に、〔二四〕鞞世師云ふ、見者は作と合して能く色を見る。かくの如く應に知るべし。かの具業あるが故なり。此れ若し作なくば、かの業具は則ち無し。譬ふれば虛空の如し。眼具ありて、色を見ることを業となすにより、見者と及びかの見作とあるを知る。

論者言ふ、第一義中には一切時に於て眼は有ることなきが故に、而も見者を立つるはこれ則ち然らず。偈に曰ふが如し、

〔二五〕見者は有ることなきが故に、能所の二は皆空なり。

釋して曰く、見者にして無體ならば則ち所取なし。而も「眼が彼れの具となり、此の眼を以て見

【二三】 勝論說の批評二。

【二四】 勝論說の批評三。「具業」は二字にて karaṇa（道具）の譯なるか、或は「具の業（作用）」の意なるか。何れにしても、見者は眼根を道具として、その道具に能見の作用ありと言ふなり。

【二五】 見者無有故　能所二皆空　第六偈の後半にして、能所二皆空は義譯なり。什譯の「何ぞ見と可見と有らん」が正確な譯なり。見は「見るはたらき」、可見(draṣṭavya)は「見られるもの」の意にして、之を「能、所」と譯せるなり。能所は主客の概念と同じ。

體なるが故なり。成じ已つて復た成ずるに非ず。

人ありて言ふ、汝「見者は見ず」と說くは、語自ら相違す。何となれば、若し見者と言はば、云何んが見ずと言ふや。若し見ずと言はば、云何んが見者と名づけん。此れはこれ立義の過なり。

論者言ふ、緣起法の不起なること先に已に答へしが如し。復た更に說かず。復た次に、汝見者と言ふは、是れ自體を見るとなすや見ずとなすや。若し自體を見るといはば、僧佉が「是の丈夫の自體を思ふ」と言ふが如し。若しかの見者がこれ自體を見るならば、自體は作に非ず。かの眼根を離るるもまた應に見ることを得べし。復た次に、斫者が斧を離るれば則ち斫ること能はず。丈夫は眼を離れて豈に能く見んや。我を見者と及びかの斫者となすは、世諦中の說にて第一義に非ず。この分別をなさんが故に、偈に曰く、

（一六）[二二]眼を離るるも眼を離れざるも、　見者は不可得なり。

釋して曰く、眼等の諸具先に未だ有らざる時と及びかれを捨つる時とには卽ちこれ眼なし。若し眼なくば則ち能所の見は空なり。能所の見を離れて見者ありと執するは、これ則ち然らず。見が無自體ならば見者もまた無し。義意かくの如し。復た次に、若し「火の自性の如く見者もまた爾り」と言はば、この義然らず。何となれば、若し薪なき時には火は無體なるが故に。

復た次に、[二三]僧佉人言ふ、「若し眼を離れずば、此の色は可得なり。かの見者ありて能く見ると驗知す」と。此の執は然らず。何となれば、見者なきが故なり。かの色が可得なるは、謂く眼と色と空と明と及び作意と、此れらの有るが故に色の可得なるあり。また此れらの諸緣具足して聚集するとき、かの調達を說いて名づけて見者となす。僧佉所計の如き丈夫を名づけて見者となすことなし。何となれば、盲人のよく色を見るもの有ることなきが故なり。かの眼が能く見るを說いて見者となす。燈に思なきもまた明の因となすが如し。眼見もまた爾り。この義を以ての故に世諦中に於ても

【二二】離眼不離眼　見者不可得　梵文及什譯に同じ。但し「眼」の語を什譯では「　」とす。梵文に關しては此の方「　」確なり。

【二三】數論說の批評五。

釋して曰く、能見は空なるが故なり。土石等の如し。偈意はかくの如し。かくの如き二種に見作あるは、この義然らず。この故に偈に言ふ、「見には則ちかの見なく、非見にもまた見なし」と。二種倶に遮す。譬ふれば若しくは有なるも非有なるも緣は皆無用なるが如し。かくの如く、若しくは有なるも非有なるも、因もまた類して遮す。

復た次に、[一九]僧佉と鞞世師等は言ふ、此の眼見は所作の具なるを以ての故に、彼れを有するところの眼を、彼れを見者と名づく。かの見者は自ら眼見するを以ての故なり。所斫の木は斫者能く斫りて、斧が能く斫るに非ざるが如し。この故に「眼が見るに非ず」とは、これ則ち我が所成を成ず。謂く、かの作者には諸の作具あり。作具なるを以ての故なり。譬へば斧等に必ず斫者あるが如し。

論者言ふ、かれは邪まに分別して見者ありと謂ふ。この執は然らず。偈に曰ふが如し、

[二〇]若し已に見を遮すれば、應に知るべし、見者を遮す。

釋して曰く、眼は自ら見ざるが如く、彼れもまた爾り。丈夫の自體が丈夫を見るとは、この義然らず。世間の所作と相違するを以ての故に。刀は自ら割かざる等の如し。云何んが驗知するや。謂く第一義中にはかの丈夫に能見の義なし。何となれば、自體を見ざるが故なり。譬ふれば耳等の如し。また因の義は成ぜざるに非ず。かの經中に我が還つて我を見ると說くは、但だ心の上に於て我の名を施設するのみ。世諦の故に說き、第一義には非ず。かくの如く物なるが故に、所識の境なるが故に、量の故に。聲及び耳の如し。是れらの諸因と及びかの譬喩とは應に廣く說くべし。

復た次に、第一義中には色は我が見るに非ず。何となれば、物なるを以ての故なり。我の自體の自ら見ること能はざるが如し。かくの如く、所識の境等も應に廣く說くべし。

外人言ふ、佛法には我なし。汝「我の自體の見ること能はざるが如し」と言ふは敎と相違す。

論者言ふ、世諦中に於て假りに我の喩を說くは敎に違せず。第一義中には斧等と及び譬とは皆無

【一九】數論勝論說の批評。

【二〇】若已遮於見　應知遮見者　梵文及什譯と同じ。見の否定より見者の否定に進む。見者は我又は丈夫にして、それが眼識の主體として規定されるとき、「見者」と名づけらるるなり。

[一五](三)火の喩は則ち、　かの眼見の義を成ずること能はず。

釋して曰く、第一義中には燒は成ぜず。世諦中に於て火は見性に非ず。またかの火の自體は世諦中に於て燒の義成ぜず。云何んが燒と名づくるや。謂く、薪が火にて變異するなり。是の故に知る、火の自體は燒に非ず。復た次に「火の喩は眼見の義を成ぜず」とは、かの眼見の火喩は前に已に說けるが如し。云何んが已に說けるや。偈に曰く、

[一六]去と未去と去時とに、　已に總じて說いて遮せるが故に。

釋して曰く、第一義中に已去と未去と去時とに義なきは、先に已に說けるが如し。かくの如く、第一義中には已燒と未燒と燒時とに燒なし。何となれば、燒時の故に、已燒の故に、未燒の故に。譬ふれば燒時と已燒と未燒との如し。かの燒時といはば二過あるが故なり。かの已燒といはば久しく已に燒し訖れるが如し。かの未燒といはば本より燒なきが故なり。かくの如く、已見と未見と見時とに見ず。何となれば已に見たるが故に、未だ見ざるが故に、見時なるが故に。譬ふれば已見と未見と見時との如し。その次第に隨つて應に驗破すべし。

人ありて言ふ、眼に見作あり。何となれば、諸部の論中に皆この說をなすが故なり。譬ふれば眼は諸色を見るといふが如し。

論者言ふ、この眼見は世諦中に於て方便を以て說く。第一義には非ず。云何んが知るや。今この論中に眼見を遮するが故に、また起を遮するが故に、かの眼は則ち空なり。偈に曰ふが如し。

[一七](四)眼若し未だ見ざる時には、　說いて見となすことを得ず。
而も眼が能く見ると言ふは　この義則ち然らず。

釋して曰く、見の義は然らず。偈意かくの如し。この義を以ての故に、偈に曰ふが如し、

[一八](五)見に則ちかの見なし、　非見にもまた見なし。

【一五】火喩則不能　成彼眼見義　梵文及什譯と同じ。「眼見」は darçana の譯にして單に「見」とあると同じく、「見るはたらき」を意味す。

【一六】去未去去時　已總說遮故　前の二句と合して本品第三偈なり。此の二句も梵文及什譯とよく一致す。

【一七】眼若未見時　不得說爲見　而言眼能見　是義則不然　梵文及什譯と同じ。但だ二個の「眼」の語は什譯では「見」とせらる。其の方梵文に關しては正確なり。

【一八】見則無彼見　非見亦無見　梵文及什譯と同じ。

復た人ありて言ふ、前の所說の如く、かくの如く、かの眼根は自體を見ること能はずとは、これ何の義ありや。諸法に若し自體の可見なるあらば、彼の和合の時には他もまた可見ならん。譬ふれば華香の如し。かくの如き義によつて眼は自ら見ず、また他を見ず。提婆菩薩の百論の偈に曰ふが如し、

〔一三〕かの一切の諸法　若し先に自體あらば、
　かくの如くに眼根あらば、云何んが自ら見ざるや、と。

論者言ふ、見るとは何の義ぞ。謂く、色の可得なるなり。彼の色は可得なり。若し眼の有らざるが如くに色もまた無くば、成じ已つて復た成ずるの過あり。偈に曰ふが如し、

〔一四〕識は眼と色とに在らず、　二の中間にも住せず。
　有に非ずまた無に非ず、　かの識は何處に住せん。

復た次に、若しかの眼根中に見の種子なく、この故に見ずと言ふ者が曼那華の譬喩を須ふるは然らず。何故に然らざるや。かの華は因緣和合自在なるが故に香の起るあり。倶蘇摩と麻と和合するが故に油に則ち香あるが如し。人、色に見作あるの義を立つるものなし。かの遮は成ぜず。復た次に、若し「自ら見ざるが故にまた他をも見ず」と謂はば、火華の譬喩は二つ皆無力なり。火華等は自他を取らざるを以ての故に此れ相應せず。かくの如く眼見の義は成ぜざるが故に、かの起と及び去ともまた皆成ぜず。譬喩無體なるを以ての故なり、また因の義に違するが故なり。

外人言ふ、汝「眼が色を見ざるは自體を見ざるによるが故に」と言ふは、此の義の明かすところ若し自體に於て無力にして他に於てまた然りとならば、かくの如き義は一向に非ざるが故に。火の自體にその燒力なく他に於て則ち能あるが如く、眼もまたかくの如くならん。

論者の偈に曰く、

【一三】彼一切諸法　若先有自體　如是有眼根　云何不自見（百論卷下、破情品參照）

【一四】識不在眼色　不住二中間　非有亦非無　彼識住何處
本偈も亦前の百論の偈と同じく、他より引證せしものにして、中論本頌にあらず。

て取らば義は壞す。縦ひ實に因成ずるも驗は無體なるが故なり。かの第一義中には意もまた到らずして而も能く取るとは、この執成ぜず。義に違するを以ての故なり。

復た次に、[一〇]僧佉人言ふ、汝眼は境に到らずして取るには非ずと言ふは、これ我が所成を成ず。何となれば、我れ眼をして境に到つて取らしめんと欲するが故なり。

論者言ふ、到らずして取るとは、眼法の空なるを信知せしめんと欲するが故なり。眼法既に空なり。豈に復た境に到つて取るを成立せんや。汝非處に於て妄に歡喜を生ず。復た次に、眼が境に到つて取るは云何んが然らざる。根なるを以ての故なり。譬ふれば意の如し。また不取の鼻等の諸根は一向の過に非ず。何故に一向の過に非ざるや。かの鼻根等もまたかくの如く破す。後に當に說くべきが如し。復た次に、眼が境に到るとはこれ何の義ありや。當に所取の境界に依止すべしとなす、かくの如き意なりや。この義は然らず。何となれば、かの眼識の依止は實に外に去らず。何となれば、識なるを以ての故なり。鼻等の識の如し。第一義中には眼識はかの境界を能取せず。何となれば、因あるを以ての故なり。譬ふれば聲等の如し。

外人言ふ、汝二門に依つて更互に相破す。此れに依つて彼れを遮し、二つ倶に成ぜず。

論者言ふ、二つ倶に無體なるが故に我れ取らず。取らざるを以ての故に所欲の義は成す。

復た次に、[一一]僧佉人言ふ「眼と光とが境に到るが故に色を能取す」と。かくの如き意は此れまた然らず。かの眼根と光とは世諦中に於てもまた有ることを得ず。何となれば、色識の因なるが故なり。譬ふればかの色の如し。

復た次に、[一二]僧佉人言ふ、眼根に光あり。眼根なるを以ての故なり。譬ふれば伏翼の猫狸等の眼の如し。

論者言ふ、眼根と色とは不可見なるが故に、縦ひかの依止に實に光あるも則ち譬喩成ぜず。

【一〇】數論說の批評一。

【一一】數論說の批評二。

【一二】數論說の批評三。

所受の義もまた破せざるが故なり。謂く、かくの如くに修多羅の義を領受するは世諦に隨順するが故にして、第一義中には驗は則ち無體なり。已に眼と色との二を遮したり。見と可見等のかの差別は義皆然らず。かくの如く、學人をして諸の覺意を生ぜしめんと欲して少分の說をなす。先の偈に言ふが如し、「かくの如きかの眼根は自體を見ること能はず。若し自體を見ずんば、云何んが他を見ることを得ん」と。第一義中を以てすれば、眼は色を見ず。何となれば、自體を見ざるが故なり。譬ふれば耳等の如し。

或は人ありて言ふ、眼は境に到らずして而も色を能取す。何となれば、かの眼根は可得なるの義を以ての故なり。譬ふれば人をして事を見せしむるを名づけて王が見るとなすが如し。

論者言ふ、第一義中には眼は境に到らずして色塵を能取するの、かくの如き義なし。何となれば、眼は自體を能取せざるを以ての故なり。譬ふれば耳等の如し。かくの如く第一義中には、所取の色塵はかの不到の眼根の境界に非ず。何となれば、所造の色なるを以ての故なり。譬ふれば香等の如し。かくの如く有礙なるが故に、因より起るが故に、色陰の所攝なるが故に、また積聚なるが故に、此れらの諸因にて竝びに眼の境に到らざるを遮す。色は所取に非ず。立義と譬喩と前に廣く說けるが如し。二門の僻執は應に驗知すべし。復た次に、第一義中には眼は境界に到らざるに非ず。何となれば、現在の境界なるが故なり。譬ふれば鼻等の如し。

或は人ありて言ふ、眼は境に到らず。何となれば、有間[九]に色を取るが故なり。譬へば意の如し。また功用なし。時節差別して色を能取するが故に。また量を過ぎて取るが故に。立義と譬喩と前の如く知るべし。

論者言ふ、この說は爾らず。汝境に到らずと言ふは即ちこれ有間の色を取るなり。有間に色を取るとは即ちこれ立義の一分にして、更に別義なきが故に、この說は然らず。また時に差別なくし

【九】有間。眼と色との間に間隔ありて眼根の淸官なるを云ふ。

阿毗曇中にかくの如き說をなす、豈に受くるところの阿含の義破するに非ずや。

論者言ふ、汝の立義の如きこの有分の眼に色を見せしめんと欲するは、この義然らず。何となれば、二なきの過の故なり。謂く成じ已つて復た成ずるに非ず、及び所欲の義破するに非ず。云何んが破せざる。經の偈に曰ふが如し、

[六]眼は色塵を見ず、　意は諸法を知らず、
此れを最上の實と名づく　世人は度ること能はず。

釋して曰く、第一義中にはかの眼をして色を見せしめんと欲せざるが故なり。先に廣く破せるが如し。この義成ずることを得。また第一義中にはかの有分の眼は色を見ること能はず。何となれば、眼根なるを以ての故なり。無分の眼の如し。また第一義中にはかの有分の眼は色を見ること能はず。何となれば、色根なるを以ての故なり。譬ふれば耳等の如し。またまた世間の所解を破せず。何となれば、立義別なるが故に。謂く第一義中には過を與ふるものなし。

[七]復た次に、迦葉彌羅の毗婆沙中にかくの如く義を立つ、謂くかの眼は諸色を見る。能く見業をなすを以ての故にと。

論者言ふ、汝の出因は立義の一分なるが故に、驗は無體なるが故に、已に遮を說けるが故に、この義成ぜず。復た次に、若し作あらば則ち刹那を立つるものと義相違するが故に、また刹那なきものと異するが故に、これ皆然らず。この故に迦葉彌の所執の義は相應せず。

[八]復た次に、經部師言ふ、諸行は無作なるが故に眼は見ること能はず。異もまた見ず。而もかの眼と色とを緣となして眼識起ることを得。修多羅中にかくの如き說をなす。汝「眼は見ず」と言ふは、これ成じ已つて復た成ずるの過をなす。

論者言ふ、先に已に起を遮せるが故に眼識は不可得なり。成じ已つて復た成ずるの過なし。また

【六】眼不見色塵　意不知諸法
此名最上實　世人不能度
觀誓の本論廣疏に依れば、この經偈は轉有經の偈文なり。

【七】毗婆沙(有部)說の批評二。

【八】經部說の批評一。

解せしむるや。眼根を觀ずるが如きは、偈に曰く、

　(二)[三]かくの如き彼の眼根は　自體を見ること能はず。
　自體を旣に見ず、　云何んが他を見ることを得ん。

釋して曰く、何故に見ざるや。かくの如き眼根は、第一義中には能取成ぜず。何となれば、偈に自體を見ずと言ふが故なり。また有礙なるが故に、また造色なるが故に。譬ふれば耳等の如し。また第一義中には眼は色を見ず。何となれば、かの色法は因より起るを以ての故なり。譬ふれば鼻等の如し。また色陰の所攝なるが故なり。譬ふれば舌等の如し。かくの如く第一義中には色は眼の境に非ず。何となれば、積聚なるを以ての故なり。眼の自體の如し。また第一義中には色は眼の境に非ず。何となれば、有礙なるを以ての故に、また造色なるが故に。譬ふれば耳等の如し。また第一義中には色は眼の境に非ず。何となれば、因より起るが故なり。譬ふれば鼻等の如し。また色陰の所攝なるが故なり。譬ふれば舌等の如し。

　復た人ありて言ふ、「眼は見ず」とは、自體を見ざるを謂ふ。色は可見なるを以て、この故に眼は能く色を見る。

　論者言ふ、汝の「眼見ず」と說くところの如きは、我が出因と及び譬喩との力を助く。豈に能く我が所立の義を破せんや。

　復た次に、[四]阿毗曇人言ふ、若し簡別なくしてかくの如く說いて「眼は色を見ず」と言はば、これ我が義を成ず。何となれば、一門を得るが故なり。我が立義中にかの無分の眼は色を見ざるが故なり。若し有分の眼が色を見ずんば、汝の受くるところの阿含の義は破す。我が倶舍論の偈に曰ふが如し。

　[五]有分の眼が色を見る、彼の能依の識には非ず。

【三】如是彼眼根　不能見自體
自體旣不見　云何得見他
梵文及什譯と全く同じ。

【四】阿毗曇(有部)說の批評一。倶舍論を引用す。

【五】有分眼見色　非彼能依識
倶舍論卷二分別界品、
「眼見色同分、非彼能依識」

卷の第四

釋觀六根品第三

復た次に、此の品を成立するその相云何ん。起を遮せんがための故に、人をして內の六入等の無自性の義を識知せしむるが故に此の品を說く。また去執を遮し人等の空義に通達せしめんと欲して、此の品次いで生ず。

初めに分別すれば、[1]外人言ふ內入の起あり、第一義中にはかくの如く應に受くべし。何となれば、境界定まるが故なり。此の起若しなくば、かの定境界は則ち有ることを得ず。石女の兒の如し。この故を以て知る、內入の起あり、かの境定まるが故に。偈に曰ふが如し、

(一)[2]眼、耳及び、鼻、舌、　身、意等は六根なり、

かの色等の六塵は　其の數の如く境界なり。

釋して曰く、この義を以ての故に、所說の因成じて入起るの義は立つと。

次に分別すれば外人定んで說く、かくの如き去あり。何となれば、果を作すを以ての故なり。色等を見るが如し、と。

論者言ふ、この二つの分別を今次第に遮せん。かの眼等の根は各各增上に聚集して作あり、色等を能取す。この故に根と名づく。世諦中に於ては根の外にまた色等の可得なるものあり。作者の自體を以て顯示せらるべきが故なり。謂く見の故に眼と名づけ、乃至知の故に意と名づく。復た次に、この諸根等は可見、可聞、嗅、甞、觸、知の諸境界を顯示するが故なり。境界の義は云何ん。謂く根は塵に於て能取の力あるが故に、境界と名づく。有境と及び境とは世諦中にあり。第一義中に根と塵と定んでありとは、この執然らず。義に違するを以ての故なり。云何んが開示して彼れをして

【一】主として有部の立場をさす。

【二】眼耳及鼻舌　身意等六根　彼色等六塵　如其數境界　梵文及什譯と同じ。第四句「其の數の如く」は此の漢譯のみに出づる語なるが、漢譯の語例から云へば「次第に」とかを意味し、色等の六塵が夫々眼等の六根に應じて境界となるの意なり。

を、信解せしめんと欲するなり。無盡慧經中に說くが如し、「無去無來とは名づけて聖去來となす」と。又金剛般若經に說くが如し、「善男子よ、如來は從來するところ無く、また去るところ無し。故に如來と名づく」と。又無言說經に曰ふが如し、「來去は實あることなし。諸法は虛空の如し」と。又般若波羅蜜經に說くが如し、「かの微塵等もまた從來するところ無く、また去るところ無し。かの去來は不可見なるを以ての故に」と。又佛、極勇猛菩薩に告げて言ふが如し、「善男子よ、色法の去來は不可見なるが故に、受想行識もまたまたかくの如し。五陰の去來の不可見なるを、是れを般若波羅蜜と名づく」と。かくの如き等の諸の修多羅の、此の中に應に廣く說くべし。

りて「かの調達去す」と言ふが如し。又かの燈が明のために因となるを名づけて燈明と曰ふが如し。汝先に說けるが如き、「去者一なるが故に去の二つ有るは然らず」とは應に爾るべからず。

論者言ふ、汝は善說に非ず。前の所說の如く、諸の因力等は、第一義中の去と及び未起とに、皆已に遮せるが故なり。復た次に、去者は去の和合因とならず、聲を起すは覺の別因なるを以ての故なり。譬ふれば彼の業の如し。此の驗を以て知る、汝「去と去者と和合す」と言ふは虛妄の說なるのみ。何となれば、若し人未だ去と和合せざる時には則ち去者に非ず。譬ふれば住者の如し。而も「かの去者と和合す」と言ふは、この義然らず。

復た次に、如理に諦觀すれば、去と及び去者とは不可得なるが故に。偈に曰ふが如し

(二五)[八六]有實なる、無有實なる、　亦有實無實なる、
かくの如き三の去者は、　各々三の去を用ゐず。

釋して曰く、「有實の去者」は、謂く、去と和合するが故に名づけて去ありとなす。此の義云何ん。若しくは「有實の去者」は三去を用ゐず。謂く「有實の去」を去せず、「無實の去」を去せず、「亦俱の去」を去せず、動を作すを以ての故に。譬ふれば餘物の如し。若しくは「無實の去者」にもまた三去無し。去は空なるを以ての故に。譬ふれば住者の如し。かの俱の去と去者も、前の驗と同じく破す。去者を破せるが如く去法もまた然り。立義、出因、引譬の方便にて應にかくの如く知るべし。道理と阿含との二種の觀察に依るによつて、一切時に於て三去は成ぜざるが故に、偈に曰ふが如し、

(二六)[八七]この故に去は無性なり、　去者もまた然り。
去時と及び諸法との、　一切は所有無し。

釋して曰く、[八八]先に驗を立てて去と去者とを破せるが如く、諸餘の作法もまた應に例して遮すべし。此の品中に去の無自性を明かせるは、「無來無去なる別緣起」の義が是の故に成ずることを得る

【八六】有實無有實　亦有實無實　如是三去者　各不用三去　有實(sadbhūta)は實有の意、無實(asadbhūta)は非實有の意、亦有實無實(sadasadbhūta)は實有にして非實有なる意。而して此の漢譯の一偈は梵文の第二十四偈「實有なる去者は三種の去を去らず、非實有なる去者も三種の去を去らず」と、第二十五偈の前半「實有亦實無なる去者も三種の去を去らない」との六句を四句に要約せるものなり。

【八七】是故去無性　去者亦復然　去時及諸法　一切無所有　此偈の前二句は梵文及什譯第二十五偈の後半に相當す。但し其處には「それ故に去と去者と去るべき所(所去處)とは存在しない」とあるを、「去處」を略せり。後半の二句は他本には全く無きものにして、譯者の敷衍なり。

【八八】以下本品の結語。教證として無盡慧經、金剛般若經、般若波羅蜜經、無言說經を引く。

此れ皆然らず。何となれば、自體が自ら作すは義然らざるが故なり。かの意欲を因となすによりて次で功用を起し、作等の因に處し、かの字句音聲の行聚を生ずるを名づけて「語者」となす。而も別の語言の自體ありと執するは、此れ則ち然らず。かくの如き語より先に名づけて「語者」となすは、かくの如き義なし。

復た次に、[八〇]鞞世師言ふ、先の所説の如き、「去に因つて去者を知り、かの去を則ち去せず」とは、汝已に破せりと雖も義また然らず。何となれば、かの去者の外に別に去法あり。この義を以ての故に前の過失なし。別義は云何ん。謂く[八一]實の覺と業の覺となり。此の二は同じからず。境界別なるが故なり。譬ふれば牛と水牛との二角は相異するが如し。若し異らずんば、かの二の境界は則ち差別なし。譬ふれば牛角の自體の如し。論者言ふ、「去に因つて去者を了し、かの去を則ち去せず」と。此の過は前に説けるが如し。今彼の異を遮せん。偈に曰ふが如し、

(二四)[八二]去に因つて去者を了するに、　異去をもまた去せず。

釋して曰く、彼れ異者を立てて他をして解を得しむるは、驗無體なるが故なり。偈に曰ふが如し、

[八三]此の物と彼の物とに、異あるは成ぜず。

釋して曰く、第一義中には法性かくの如きが故に、我が譬喩は成ずることを得。復た次に、「去に因つて去者を了し、異去をもまた去せず」とは、此の義云何ん。偈に曰く、

[八四]去者は是れ一なるが故に、去に二つ有るは然らず。

釋して曰く、何故に然らざるや。驗を立てて知るが故なり。「第一義中には去者の體の外に異去の去すること無きを以てなり。何となれば、二去と合せざるを以ての故に。譬ふれば住者の如し」と。

復た次に、[八五]食糠者は言ふ、我が立義の如きは唯だ一去あるのみ、「去」が「者」と合するを名づけて「去者」となす。此れは異なるによるが故に能く去の因となる。かの去を作すを以ての故なり。人あ

【八〇】 勝論説の批評三。

【八一】 實と業とは勝論六句義（又は十句義）中の二つにて、實體と作用とを意味す。覺は覺知の意にて、實、業等の認識なり。

【八二】 因去了去者　異去亦不去　梵文及什譯第二十三偈に相當し、此の二句はよく一致す。梵文には「其れによつて去者と呼ばれる所の其れとは別なる去を彼の去者は去らない」とあり。

【八三】 此物與彼物　有異者不成　本頌に非ず。釋偈なり。但し、この意味より觀れば、觀合品第十四の第四偈の後半「如何なる物と如何なる物とも、それが相伴へるものである限り、その別異性は不可得である。」といふ説を引證せしものとも考へらる。

【八四】 去者是一故　去有二不然　前の第二十四偈の後半にして梵文及什譯とよく一致す。

【八五】 食糠外道説の批評。食糠外道は勝論者を意味す。本品註四二參照。

[七七]是の人村等に往くの去あるを、見るが如きが故に。

釋して曰く、彼の人の體の外に別に村等あることは世間悉く解す。復た次に、「去に因つて去者を了す、かの去を則ち去せず」と、此の義云何ん。此のための故に偈に曰ふが如し、

[七八]先に去法あること無し、故に去者の去無し。

釋して曰く、住者の自體が去の因となり而も去を作すことを得て、此の去者無きが如きが故なり。去者無しと雖も、而も世諦中に意欲を因となし、次で功用を生じ、風界自在に處邊無間に諸行の聚起り、時節差別し刹那刹那に前後相異す。此れ等の起るが故に名づけて去者となす。世諦中に於て實にかくの如き作者をして作者の因たらしめんとは欲せず。この故に偈に言ふ、「是の人の村等に往くの去あるを見るが如きが故に」と。自體を以て自體の因となすに非ず。かくの如く、諸の自部の輩は去によつて去者を了し、かの去を則ち去せざること、此の義應に知るべし。

復た次に、[七九]僧佉人言ふ、地等の聚集するにより別に身種と名づけ、かの塵の増長するが故に稱して去となす。かくの如く去果は聚因に依止す。去が人と和合するを名づけて去者となす。此の執は然らず。何となれば、かの未去の時には去者無きが故なり。若し未去の時に名づけて去者となさば、かくの如くして住者もまた應に去と名づくべし。而も實には然らず。若し「かの已去者をかの去の因となす」と謂はば、是れまた然らず。何となれば、先の偈に言へるが如し、「是の人のかの村等に往くの(去)あるを見るが如きが故に」と。此の義云何ん。かくの如く、かの去は去を作すこと能はず。應にかくの如く知るべし。

外人ありて言ふ、生の作あるが故に説いて芽生ずとなす。猶ほ智人自ら智慧を生ずるが如し。此の執は然らず。但だ妄分別なるのみ。芽の未生の時を以てすれば生に所作なし。而も「生の作」を言ふは此の義然らず。かくの如く去者は自體にて去し、説者自ら言説し、斫者自ら斫作するは、

【七七】如見有是人　往村等去故　本頌に非ず。挿入の釋偈なり。

【七八】先無有去法　故無去者去　前の第二十三偈の後半にして、什譯と全く同じ。梵文は多少異り、「去より前に何等かの去者存在して何等かの去を去すること無ければなり」とあり。

【七九】數論説の批評二。

[七五]彼の二は成ずること有ることなし、云何んが當に去あるべけん。

釋して曰く、かの去を已に遮せるを捨てんと欲するには非ざるが故なり。此の如き義によつて一等の分別もまたかくの如く遮す。世諦中に於て彼の二は有るが故なり。應に知るべし、汝の意に謂ふが如きは、第一義中に若しくは一、若しくは異にして去者と去と成ずと。かくの如き義なし。一異の體は無し。而も執じて有りとなし、人をして解せしむるはこの義然らず。

或は聰明の慢人ありて、かくの如き說をなす、汝「第一義中には去者の去は無し。動を作すを以ての故に。かの餘物の如し。かくの如く住者に住無し。動を作すを以ての故に。かの調達の去未だ謝せざるが如し」と言はば、此の前の二驗は何の所顯ありとなすや。「動を作すが故に」とは、當に外の動作者の此の作が不作なるべしと爲すや、當に身の動作者の此の作が不作なるべしと爲すや。若し外の作が不作なりと言はば則ち譬喩は成ぜず。彼れは異にして作を作すを以ての故なり。若し身の作が不作なりと言はば則ち義と相違す。語者語るを以ての故に、斫者斫るが故なり。かの去もまた然り。身既に動作するに何ぞ不作と名づけん。かくの如く、失の所說の驗は此の義成ぜず。過失あるが故なり。

論者言ふ、かの異の作者は去作を作さず。この義を以ての故に、かの住者等の譬喩は成ずることを得。所說の過の如きは今還つて汝に在り。譬喩既に成じてまた義に違せず。云何んが違せざる。偈に曰ふが如し。

(二三)[七六]去に因つて去者を了す、　かの去を則ち去せず。

釋して曰く、「かの去を去せず」とは、謂く第一義中にはかの去を作さず。何となれば、無異なるを以ての故に。去の自體の如し。此れ謂く、「無異」と說くは、自の驗破るるが故に、また世間の共に解する所を破するが故に。何となれば、偈に曰ふが如し、

【七五】彼二無有成 云何當有去　右の偈の後半なるが、第四句に疑問あり、先づ「彼の二」は此の漢文上は一異の二門をさすこと明かなり。其の他に梵文には「かの二つ」なる代名詞ありて其は去と去者の二をさす。而して其の二つの存せざることを立言するが第四句なれば、去と去者とを否定せざるべからず。

【七六】因去了去者 彼去則不去　梵文及什譯第二十二偈に相當し、此の二句はよく一致す。

乃至無量の調達等なり。此の驗を以て「轉不轉」の聲を知る、因は非一向なるが故に。

外人言ふ、簡別あるが故なり。同一名なりと雖も而もかの黒長の調達には「去」の聲は此に於て轉じ、餘には則ち轉ぜず。この義を以ての故に我が因は成ずることを得。非一向に非ず。

論者言ふ、汝言ふところの黒長の調達は第一義中には無體なるを以ての故に、因の義成ぜず。青衣の喩の如し。及び境界は第一義中に皆不可得なり。若し有るが說いて「去は去者に異なる、差別を覺するが故に」と言ひ、此の如く驗を立つれば、前の因喩と同じく破す。復た次に、若し汝「我れは一を立てて異を遮し、異を立てて一を遮す。終に異を離れざるが故に、異を遮すること成ぜず」と謂はば、この義然らず。何となれば、一と異と倶に遮す。先に已に說けるが故なり。此の驗力を以て二邊に著するを破す。かの境界の覺は何に因つて起ることを得るや。智人は已に解す。故に我れに過なし。この故に汝「我れの『去者と去との不異を遮する』立義を分別するに不異を受く」と言ふは、我れに此の過なし。復た次に、汝若し細心に觀察して、我れ上に「譬ふれば去者の自體の如し」と言へるを取りて、不異なるが故に立義成ぜずとし、譬喩の無體を以て我れに過失を與ふるは、この說然らず。何となれば、去者の體の外に更に異法なし。異法なきが故に去者の體は成ず。體成ずるを以ての故に譬喩に過なし。かくの如く、鞞世師人と諸の食糠等とは已れの過を覆藏して正理を壞せんと欲す。先の所說の如く、驗は皆成ぜず。

復た人ありて、「汝先に去を遮し、今則ち棄捨して乃ち更に餘を論じ、『若しくは一若しくは異なるも、去と及び去者との二は皆成ぜず』と、此れ善說に非ず」と云ふは然らず。偈に曰ふが如し、

(七四)去者と及び去との二は、　一か異かの故に成ずとなす。

釋して曰く、去者と去との二は、一となすか異となすか、彼の二あるが故に領受すべきか。若し方便して「或は一、或は異」を說かば、偈に曰ふが如し、

【七三】非一向。因明の用語にして不定因のことなり。

【七四】去者及去二　爲一異故成　梵文及什譯第二十一偈に相當す。此の二句はよく一致す。

外人言ふ、[七〇]異部の迴轉は他をして解せしめず。汝此の過を得。
論者言ふ、かの異部は無體にして迴轉の義成ず。
外人言ふ「世間には自ら能依と所依と有り、未だ必ずしも和合せず。汝待對ありと言ふは、此の因の義成ぜず。何となれば所驗中に於て一分は徧せざるが故なり。
論者言ふ、かの諸物等にまた此彼あり。相觀じて異なるが故に待對には過なし。因は成ぜざるに非ず。汝驗を說くは終にこれ異を立つるなり。異は先に遮せるが故に異は成ずることを得ず。異部の無體はまた二邊に非ず。世間の所解もまた破壞せず。云何んが破せざるや。今この論中に眞實に觀察するに、能依所依の相應和合するは、無漏慧所觀の境界に非ず。先の所說の如し。
復た次に、或は人ありて言ふ、我れには去に異なりてかの去者有り。指示すべきが故に。譬ふれば提婆達多と及びかの馬等の如し。能依と所依の二相異なるが故に」。
論者言ふ、汝は善說ならず。去者の自體の義は成ぜざるが故に。「提婆達多と馬等の異なるが故に」とは、此の義成ぜず。第一義中に譬喩無體なるを以ての故なり。若し邪慧ありて諸因の差別等の相を分別するも、また此の義を以て答ふ。
復た次に、[七一]鞞世師は言ふ、聰明の智人はかくの如き解をなす。謂く「去者」の聲は、此の自體の外に「去」の句義ありて相應和合す。提婆達多の如し。所知の境界に[七二]轉不轉あるがための故なり。青衣と言ふが如し。餘は則ち分に非ず。若しかくの如くならずば、かの「去者」の聲は應に轉不轉の異無かるべし。譬ふれば大有の如し。
論者言ふ、汝此の異を立てて以て驗となすは、この義然らず。何となれば、所依と能依との相應は無體なり。去と去者との此の二の和合するは先に已に遮せるが故なり。驗もまた成ぜず。云何んが知るや。謂く、多の同名人は彼れの自體の外の句義と合せず。謂く、若しくは二、若しくは三、

【七〇】異部は「異門」と同じく、去と去者との異を考ふるなり。迴轉は語義明確ならねど、定異の見の否定を意味すと解して然るべし。
【七一】勝論說の批評二。
【七二】轉不轉は、現行するか現行せざるかの意なり。「所知の境界」は去者自體をさす。其處に去の句義現行すれば去者となり、現行せざれば非去者なりと言ふ。

斫は第一義中に二體無異なり。何となれば、其の量なるを以ての故に。譬ふれば所斫自體の如し。彼れは一と立つ」と謂はば、この義然らず。何となれば、所斫自體の不異なるは成ぜざるが故なり。何故に成ぜざるか。第一義中には一異の二邊は取受せざるを以ての故なり。世諦中に於ては能所各各異る。而も一と言ふは世間の解を破す。復た次に、若し汝の意に「我れは去者と及び去の不一を遮するが故に而も異邊を受く」と謂はば、是れまた然らず。先に已に說けるが如し。第一義中には一異の二邊我れ皆取らざるが故に、異を受くるの過なし。

復た人ありて言ふ、我が立義の如きは前の過失なし。謂く、無始より已來名言戲論の熏習せる種子が因となるを以ての故に、決定の因緣にて各各果を起す。虛妄分別の自在力の故に、此の執あり、去と及び去者とに決定して異あらしめんと欲す。

彼れを遮せんがための故に、偈に曰ふが如し、

(二二)[六八]若しかの去法は、　定んで去者に異なりと謂はば、

釋して曰く、世俗の分別には遮あることなきも、如實に觀察すれば義則ち然らず。云何んが然らざるや。偈に曰ふが如し、

[六九]去を離れて去者あり、　去者を離れて去あり。

釋して曰く、此の二は云何んが相離れて有りや。其の異なるを以ての故なり。瓶衣等の如し。彼の異を說く者もまた、去を離れて去者あり、去者を離れて去あらしめんとは欲せず。能依と所依と相觀じて有るを以ての故に方便して說くも、第一義中には、かの去と及び去者とに差別あらしめんとは欲せざるが故なり。差別の語の起るには待對あるを以ての故なり。去の自體の如し。かくの如く、第一義中には去者を離れて外に別に去法ありと分別することを欲せず。何となれば、差別の語の起るには待對あるを以ての故なり。譬ふれば去者の自體の如し。

【六八】若謂彼去法　定異於去者　梵文及什譯第二十偈に相當す。よく一致す。

【六九】離去有去者　離去者有去　右の偈の後半にして之もよく一致す。

の過失を得」とは、是の義は然らず。何となれば、自論の所解に我れまた著せず。第一義中には去と及び去者との此の二の自體は皆受けざるを以ての故なり。先に已に遮せるが如し。

復た次に、若し第一義中に去と及び去者との此の二つ定んで有ならば、或は一、或は異に求めて應に可得なるべし。是の如く觀察するに二つ倶に然らず。偈に曰ふが如し。

(一九)[六六]去法が卽ち去者なるは、　是の如きは則ち然らず。
去法が去者に異なるは、　是の義また然らず。

此の二種の義は云何んが然らざるや。偈に曰く、

(二〇)[六七]若し彼の去法が、　去者に卽是なりと謂はば、
作者と及び作業とが、　則ち一體をなすの過あり。

釋して曰く、かくの如き語義は顚倒の過咎あり。「聲はこれ常なるが如く瓶もまたこれ常なり、其の作なるを以ての故に」とは、此の義成ぜず。何となれば、若し瓶がこれ作ならば則ち常と名づけず。此の義を以ての故に「聲はこれ無常なり。其の作なるを以ての故に。譬ふればかの瓶の如し」。此の言は信ずべし。かくの如く、第一義中には去と及び去者とこの二は一ならず。何となれば、作者と作業なるを以ての故なり。能斫と所斫の如し。此の二は顯現するもまた異なるを得ず。何となれば、去と去者とは更互に倶に空なるを以ての故なり。譬ふれば餘物の如し。或は難じて言ふものあり、若し去と及び去者とが更互に倶に空ならば、空には異相なく體は不可得なり。汝能斫所斫を引いて譬喩となすは、此の義成ぜず。

論者言ふ、汝は善說ならず。唯だ一を遮せんが故なり。かの二相の差別は世間悉く解す。かくの如き能斫と所斫との更互に倶に空なるは、此の義成立す。能覺と所覺との二が、更互に空なるが如し。世諦中に於て二相は異なるが故に、引いて譬喩となす。喩は成ぜざるに非ず。若し「能斫と所

【六六】去法卽去者　如是則不然
去法異去者　是義亦不然
梵文及什譯と全く一致す。
但し第十八偈に相當す。

【六七】若謂彼去法　卽是於去者
作者及作業　則爲一體過
梵文及什譯第十九偈に相當す。よく一致す。去者を作者(kartṛ)去を作業(karman)と規定すること注意すべし。

釋して曰く、「去者の去」の如く「未去者の去」も、「彼の二に異れる去」も義皆然らず。及び已去と、未去と、去時と、去の初發とは、是れまた然らず。是の如く、已去と、未去と、去時と、及び彼の去の息とは皆成ぜざるが故に、是の如く、住者と、未住者と、及び彼の二に異れる住は皆然らず。住にして然らざるが故に、已住と、未住と、住時と、及び住の初發ともまた不可得なり。初發なきが故に、已住と、未住と、住時と、住の息とは、義皆成ぜず。上に廣く說けるが如し。文煩なるを以ての故に今は略して顯示せん。此の義云何ん。かの住者は住せず。何となれば、去の空なるを以ての故なり。かの已住の如し。住の未だ謝せざる者と、久しく已に住せる者とには住の初發なし。何となれば、彼れは已に住せるが故なり。譬ふれば已に久しく住せる者の如し。又已住者には住の除く可きものなし。何となれば、去は無體なるが故なり。譬ふれば住の未だ謝せざる者の如し。已住中に三句を顯示せるが如く、未住と住時とにも、また〳〵是の如く、前の方便を以て應に驗破すべし。是の如く住義は成ぜず。過失あるが故なり。

外人言ふ、汝「去無く及び去者無し」と言ふは、是の義然らず。何となれば、世法を破壞するが故なり。世人は咸な謂ふ、「かの提婆達多は去す」と。或は「耶若達多は去す」と。汝爾らずと言ふは世と相違す。世は皆かの月を是れ月と知るとき、また人ありて是れ兎にして月に非ずと云ふが如し、汝もまた是の如し。

論者言ふ、汝此の因を立つるは、また何の義ありや。世間の所解と相違すとなすや、自論の所解と相違すとなすや。若し爾らば何の過ありや。若し世間の所解と相違すといはば因の義成ぜず。何となれば、かの去と去者とは第一義中には不可得なるが故なり。是の如く、世間の所解に去と去者と有るは、世諦中に於て我れ遮せざるが故なり。若し自論の所解と相違すと言はば、即ち「所解破す」との是の如き意なりや。汝此の說を作すは義理を解せず。應に是の如く說くべし。「汝の所受破して此

初にありし「起行、遮行」と同義と見て可なり。一切の現行止息の法は去と同じく不可得なるの意なり。

ずと雖もまた去者と名づく。此の義成ずるが故に過なし。
論者言ふ、汝は假法を受く。先に成立する所は、第一義には今並びに失壊す。此の如き義によつて、前所出の因と及び譬喩とは過失あるが故なり。復た次に、別の道理ありて彼れの過失を顯はさん。汝此の住を立つるは其の義云何ん。當に去者が已去に止息すべきを名づけて住とすと爲すや、かの去者が未去、若しくは去時に息まるを名づけて住とすと爲すや。三皆然らず。何となれば、偈に曰く、

（一八）去時には則ち住無し。[六三]

釋して曰く、若し去と去者と合するとき此れを名づけて住となさば、義則ち然らず。
外人言ふ、我が先の所説は已去を住と名づく。此の義は成ずることを得。驗を信ずべきが故なり。
論者の偈に曰く、

彼の已去無きが故に。

釋して曰く、已去に住するは是の義然らず。何となれば、かの已去には去は已に謝せるが故に、其の住を言ふも除く所無きが故に。若し汝の意に「かの未去時を、之を名づけて住となす」と謂はば、是れまた然らず。未去にして然も息まるは義然らざるが故なり。是の因緣を以て彼の未去者もまた「住す」と名づけず。是の如く因義は成ぜず。驗も亦無體なり。此の義云何ん。かの明暗等は第一義中には成立すべからず。相違するを以ての故に、また汝の立義に乖くが故に。
復た人ありて言ふ、我れ住義を立つるは[六四]、相違するを以ての故に、初發あるが故に。又彼の除かる可き體の有起なるが故に。
是の義は然らず。彼れは過失あり。偈に曰ふが如し、

[六五]去の起作と及び息とは、その過は去に同じく說く。」

【六三】去時則無住　無彼已去故　梵文及什譯第十七偈に相當すべきも、此の二句は全く共れと一致せず。其處には「去時と已去と未去とから離れて去の住することなし」(梵)、「去未去無住、去時亦無住」(什譯)とあり。

【六四】住を立つる三つの理由を擧ぐ。何れも去に對して住の存立すべき理由なり。第一は去と矛盾關係にある法なるが故に。第二は去の初發あれば其の前に住あるべしと言ふ。第三は住によつて除かるべき去自體有るが故に、住自體も有りと言ふ。

【六五】去起作及息　其過同去說　梵文及什譯第十七偈の後二句に相當し、之は共れとよく一致す。但し魏譯としては原文に對する解釋違ひなるかの疑ひあり。梵文 gamanaṁ sampravṛttiç ca nivṛttiç ca gateḥ samā. の gamanaṁ は前句にかゝるを後にかけて譯せるなり。されば漢譯を一應は「去の起作と及び息とは其の過は去に同じく說く」と訓みたれど、偈の眞意は起作と息とは其の過は去と同じく說く」なり「起作」と「息」とは「去の起作」「去の息」に非ずして、一般に現行と止息を意味す。品

や、是れ去者と爲すや、未去者と爲すや。若し去者が住すれば、義應に然るべからず。偈に曰ふが如し。

[六〇]（二六）去者は則ち住せず。

釋して曰く、此れ謂く、第一義中に去者の住を立つるは、驗するに不可得なり。何となれば、去者は動作するを以ての故なり。譬ふれば調達の正行未だ息まざるが如し。若し未去者が住すと謂はば、是れまた然らず。偈に曰ふが如し、

未去者も住せず。

釋して曰く、かの未去者は去無きを以ての故なり。世諦中に於て、かの去の息むが故に之を名づけて住となすは、此の義成ぜず。去は無體なるを以ての故なり。

復た次に、惡見に持せられ邪執自在にして是の如き說を作し、異の住を得んと欲すれば、偈に曰ふが如し。

[六一]去と未去者とに異りて、誰か第三の住(者)たらん。

釋して曰く、一の住者の之を說いて「住す」と爲すもの無し。この義は得べし。偈意かくの如し。

復た次に偈に曰く、

[六二]（二七）去者若し當に住すべくんば、　此の義云何んが成ぜん。
去者と去とは空なるが故に、　去(者)の住は不可得なり。

釋して曰く、去と住とは相違す。一時中に於て並ぶことを得ざるが故なり。偈意かくの如し。かの去の空なるを人をして解することを得せしめたり。

「去者の住」の無體なるは可示なるを以ての故に。

外人言ふ、譬ふれば窯師の如し。三時中に於て能作失せざるが故に。是の如く、去者はまた去せ

【六〇】去者則不住　未去者不住　梵文及什譯第十五偈前二句に相當す。「未去者」は「未だ去らざる者」に非ず、「去者に非ざる者」の意なれば、「非去者」「不去者」とあるが適當なり。

【六一】異去未去者　誰爲第三住　梵文及什譯第十五偈後二句に相當す。「未去者」は之も非去者、不去者の意なり。

【六二】去者若當住　此義云何成　去者去空故　去住不可得　梵文及什譯第十六偈に相當す。前二句はよく一致するも、後二句は一致せず。梵文什譯共に「去を離れて去者は不可得なるが故に」とあり。

し』と。論者言ふ、若し去法あらば去時と已去と未去とを説くべく、この義應に爾るべし。かの去の無體なるを先に已に廣く説きたり。汝復たありと執す。今當に更に破すべし。偈に曰ふが如し。

(一三)[五七]未だ發せずんば去時無し、またまた已去無し。
彼の初起の去は空なり、　未去ならば何處に發せん。

釋して曰く、前に去と合すること無くば、彼の去は起らざるが故に。偈意かくの如し。先に去の空を説きて他をして解することを得しむ。外人所立の義を驗破せんが故なり。復た次に「未去ならば何處に發せん」とは、此れ去無きことを明かすが故なり。是の如く第一義中に分別は起らず。此の義云何ん。偈に曰く。

(一四)[五八]已去と未去と無く、　また彼の去時も無し。
去法無き中に於て、　何故に妄分別せん。

釋して曰く、「妄分別」とは、翳目の人虚空中に於て或は毛髮蚊蚋蠅等を見るが如し。皆無體なるが故なり。偈に曰ふが如し、

(一五)[五九]是の如く一切時に、　未だ曾て初發を見ず。
而も去等ありと言ふは、　過失則ち甚だ多し。

釋して曰く、譬ふれば那羅延の矟が彼の竭株嗢羯遮阿修羅王を逐ふが如く、彼れもまた是の如く、去等の過失は常に汝に隨逐す。

復た次に人ありて言ふ、第一義中に去法は是れ有なり。何となれば、相違するを以ての故なり。謂く、處處に相違し相待して可得なり。譬ふれば明と闇との如し。是の如く住と相違して去有つて可得なり。而も去無しと言ふは是の義然らず。

論者言ふ、此の義を立つれば是れまた應に問ふべし。汝の意、誰をして住せしめんと欲すとなす

【五七】未發無去時　亦復無已去　彼初起去空　未去何處發
第三句「初起去」は「去の初起」の意にて「發」と全く同じ。梵文には「發より前には去時なく已去なし。其處にこそ發あるべし。未去に於て如何にして發あらん」とあり。什譯も同じ。本論の譯は第三句が異る。

【五八】無已去未已　亦無彼去時　於無去法中　何故妄分別
第三句は嚴密には「去の始まり無きときに於て」の意にして卽ち「發無きときに」の意なり。此の點什譯の方正確なり。又「何故に妄別せん」とは「已去、未去、去時等を分別せん」の意なり。

【五九】如是一切時　未曾見初發　而言有去等　過失則甚多
此偈他本には本頌中に無し。西藏譯に於ては第十四偈の註となる。故にこれは釋偈にして、一偈として別出すべきものに非ずと考へらる。那羅延(nārāyaṇa)は人本生、鉤鎖力士、堅固力士と翻ず。天の力士なり。竭株嗢羯遮は kaṇṭakaṃ bukajāta(朽木若しくは礫蝸螺の如きものを意味す)の音寫ならんか。阿修羅(asura)は非天、非類、不端正などゝ翻ず。常に天神と戰ふ天趣なり。

くと爲すや、未行を初發と名づくと爲すや、行時を初發と名づくと爲すや。三皆然らず。偈に曰ふが如し、

(二三)[五四]已去中には發無し、　未去にもまた發無し、
去時中にも發無し、　何處に當に發有るべけん。

釋して曰く、「已去中に發無し」とは、謂く、去の作用は彼れに於ては已に謝せるが故なり。「未去にもまた發無し」とは、謂く未行は無去にして、去あるは則ち然らず。「去時中に發無し」とは、謂く、已去と未去等に皆去の義なし。云何んが去時に去ありと說くべけん。かくの如き三種には倶に初發無し。是の故に偈に言ふ、「何處に當に發有るべけん」と。是の義を以ての故に汝の因は成ぜず。立義もまた壞す。是の如く、已去と未去と去時とに初發の成ぜざるは、人をして信解せしめたり。語義かくの如し。云何んが驗するや。所謂る已去には初發無し。去者なるを以ての故に。譬ふれば去者去り已れるが如し。未去にもまた發無し。未去なるを以ての故に。譬ふれば欲去者の未だ去せざるが如し。去時中にも發無し。去者なるを以ての故に。譬ふれば已去と未去者の如し。是の如く初發は無體にして因義成ぜず。自ら謂つて因となすも、過失あるが故なり。

外人言ふ、我れに異義あり。所謂るかの[五五]「去」の言說あるが故なり。此の方便を以て、去は有自體なり。[五六]自位と別との故に、また和合の句義を起す別語言の因なるが故に。此れ若し無ならば、彼れの自位と差別と、和合の句義を起す別語の因とは則ち有ることを得ず。生盲人の如きは、眼と識と畢竟じて無和合なるが故に、說いて「彼の生盲の者の已見、現見、及以び當見」を言ふべからず。今、去法と及び自位等の和合の句義を起す別語の因あるが故に、說いて言ふことを得、「彼の行止息するを名づけて已去となし、行法正しく起るを名づけて去時となし、行作未だ發せざるを名づけて未去となす」と。是の故に我が說は因に力あるが故に、去法は不空にして所欲の義成じ前の過失な

【五四】已去中無發　未去亦無發
去時中無發　何處當有發
梵文及什譯と全く一致す。
發とは「去り始める(gantum ārabhyate)」の意なり。

【五五】去といふ言葉あらば、そこに言葉の指する或る對象が實有ならんと言ふ。

【五六】「自位と別」は因明論理で言ふ所の自相(svarūpa)、差別(viśeṣa)と同義なるべし。即ち或る法の自體と其の種々なる性質をさす。又「和合の句義を起す別語言の因」とは「和合の句義」は文章にして、「別語言」は文章中の概念なり。例へば「已去者は去せず」と云へば和合の句義にして、已去者、不去は夫々別語言なり。而して「去法」は此の別語言の因となると言ふ。

何んが過失なる。偈に曰く、

(二〇)[五〇]去者と去と既に空なり、　何ぞ「去者の去」あらん。

釋して曰く、若し「去は成じ、去者はかの去と合す」と謂はば、是の義は然らず。何となれば、若し汝前の如き過失を避けんと欲して、第一義中に「一の去が去者と合するとき、彼れを名づけて『去す』となす」と成立すれば、此の執は則ち二去の過中に墮す。偈に曰ふが如し、

[五一]去者と去と合すれば、則ち二去の咎に墮す。

云何んが此の如くなるや。偈に曰く、

(二一)[五二]一には去にて去者を了し、　二には謂く、去者の去なり。

釋して曰く、是の義を以ての故に、別に過失あり。「二去に墮す」と謂ふは、此れ復た云何ん。偈に曰く、

[五三]去者を離れて去あるは、是の義則ち然らず。

釋して曰く、所依若し無くば能依も有らず。義意かくの如し。必ず去無くして去者有りと欲するが故に。及び二の去と二の去者と有るが故に。理として應に去有るを名づけて去者と爲すべし。又去と去者と一なるを欲するが故に、世諦の成立は第一義に非ず。第一義中には譬喩無體なるを以てなり。彼れの所說の如きは驗成ぜざるが故に。

外人言ふ、定んで去有り。何となれば、彼れの初發足あるが故なり。若し世間に物無くば則ち初起無く、虛空華の如し。世間に物あるによつて彼處に轉離するを即ち初發と名づけ、說いて行相となす。この故に去有り。

論者言ふ、譬ふれば雜を染むるに、後に色異ると雖も體は是れ一なるが如し。汝もまた此の如し。語は前義と異ると雖も更に別なし。先の所問の如くに今還つて汝に問はん。已行を初發と名づ

【五〇】去者去既空　何有去者去
此の二句は梵文及什譯に無きものにして、前の長行の結論の如き形で此處に置かる。

【五一】去者與去合　則墮二去咎
梵文及什譯の第十偈前半に相當す。「若し去者が去するならば二去が結び付き來る」(梵)、「若去者有去、則有二種去」(什譯)。

【五二】一去了去者　二謂去者去
梵文及什譯の第十偈後半に相當す。「一去了去者」は「一の去は去者を了し」と訓むも可なり。此の二句と前の二句と合して、梵文及什譯の第十偈になるなり。

【五三】離去者有去　是義則不然
梵文及什譯の第十一偈に當る筈なるも嚴密には一致せず。要するに本論に於ける以上二偈は、中間の四句を除いては他本に一致せず。

の義然らず。何となれば、所成の分は彼此俱に解す。我れ住者を引いて譬喩となすが故に、竟に何の咎あらん。是の如く、「一人を說いて去者となすは、此の義然らず。先に說けるが如く、「去との合あるに因るが故に彼れは指示すべし」といひ、此れを以て因となすは、因の義成ぜず。また譬喩無體なり。所成の法具するを以ての故なり。因義に違するが故なり。

外人言ふ、世間はかの去者の去するを眼見し、見已つて說を起す、聞等ありと雖も眼見には勝らず。是の義を以ての故に因等は成ぜざるに非ず。

論者言ふ、彼れの是の如き見は、世諦中の慧にては此れを以て實となすも、第一義中に理の如く諦觀すれば、何等を「見」と名づけん。若し世諦の所見を以て第一義となさば、彼れは信ずべからず。此れ云何んが知るや。偈に曰ふが如し、

(九)[四七]若し去者が去すと謂はば。　此の義云何んが成ぜん。

釋して曰く、彼の「去者の去」には去義成ぜず。譬ふれば人ありて自ら勇健の將と言ひ、戰陣に臨んで風を望んで退走するが如し。此の勇にして若し成ずれば汝の義は則ち立つ。云何んが成ぜざる。偈に曰ふが如し。

[四八]去者に去無きが故なり、　不成の義かくの如し。

釋して曰く、去の無體なるが如きは我れ先に已に說いて他をして解せしめしが故なり。何處に解せしめしや。上の偈に言へるが如し。「已去者は去せざるが故に」と。及び彼の[四九]去起もまた先に已に遮せり。「已去は去せず」とは、此れはこれ立義にして、他をして解することを得しむ。云何んが解せしむるや。上の偈に言へるが如し。「若し去者が去すと謂はば、此の義云何んが成ぜん」等と。先に分別せるが如し。是の如く、第一義中には去無く去者無し。去は不實なるを以ての故なり。但だ彼れ妄りに「去者」を置き、「去」と名づくるのみ。彼の諍論者の是の如き立義は、此の過失を得。云

【四七】若謂去者去　此義云何成
梵文及什譯と全く同じ。

【四八】去者無去故　不成義如是
梵文には「去を離れて去者は不可得であるときに」とありて、前二句の立義の理由となる。什譯も同じ。之の義譯と見るべし。

【四九】去起は「去の起る」を意味するか、又は單に去を意味するか、何れとも解し得。

未だ去を作さゞるを未去者と名づく」と言はゞ、是の義は然らず。何となれば汝自ら破するが故なり、謂く、かの去者の先に未だ去せざる時に去は有自體なり。汝の義は是の如し。復た次に、汝、「住等を未去者となすが故に去者は無體なり」と謂はゞ、是の如き意欲は是の義然らず。汝自ら義を立て還つて自ら破するが故なり。謂く、「未だ去を作さず」との聲は、去者の體不可得なるが故なり。

復た人ありて言ふ、[四四]異門あるが故に名づけて去者となし、異門あるが故に未去者と名づく、此の義によつて成ずれば上の如き過なし。

論者言ふ、汝「去者と未去者との外に別に異者ありてかの去と合す」と謂ふは、是の義然らず。

何となれば、偈に曰ふが如し、

[四五]去と及び未去とに異りて、　第三の去者無し。

釋して曰く、此れ何の義を明かすや。謂く、去者と及び未去者とを離れて、彼の第三の「此れはこれ去者にして未去者なる」もの無きが故なり。此の如き人有るは、他をして解せしめ難し。復た次に、去と未去者とは先に已に破せるが故なり。汝「異門あるが故に名づけて去者となし、異門あるが故に未去者と名づく」と言ふは、此の義成ぜず。若し「去者に作有るが故に」と謂はば、此の作は遍せずして、汝の立因の義成ぜず。「彼れは無作なるを以ての故に」といはば、是の義然らず。何となれば、汝「去者は去作と合す」と言へばなり。是の如き作は是れ我が遮する所なり。譬ふれば[四六]功用の如し。「作」の聲は是れそれ無常なり。作は遍せずと雖も而も作なるが故に無常なり。因の義成ずることを得。是の如く、去者が去作と合するは、我れ此れを遮するが故に、因は成ぜざるに非ず、若し未去の義を成立する者あらば、また應に此の未去の因を以て答ふべし。若し「去者有り。去者と住者と無きの立義は譬喩無體なり。所成の法の一分具せざるを以てなり」と謂はば、是

【四四】異門は次の異者と同じ。去者非去者とより異れる第三者あり、其れが去と合して去者となり、去と離れて非去者となると言ふなり。

【四五】異去及未去　無第三去者　梵文及什譯と同じ。但し、前句の「去」「未去」は夫々「去者」「非去者」の意なり。

【四六】功用と作とは同一原語kriyā（作用）の譯語なることあり。されど玆では功用はkriyāに當り、作はkarman（作業）に當るか。第十九偈には去者と去とを夫々「作者」「作業」と言ひあらはせり。

〔八〕[三七]かの去者は去せず。

釋して曰く、今當に此の義を安立して方便を以て說くべし。所謂る、第一義中にはかの去者は去せず。何となれば、作有るを以ての故なり。譬ふれば住者の如し。是の故に應に知るべし、去者は去せず。

復た人ありて言ふ、我れ今「未去者に去あり」と成立す。此の方便を以て、我れを破すること能はず。

論者言ふ、去と合して世諦中に於て「去者が去す」と說くが如きは、義已に成ぜず。今云何んが「未去者の去」を言はん。偈に曰ふが如し、

[三八]未去者も去せず。

釋して曰く、かの未去者には去無きを以ての故なり。義意かくの如し。復た次に、若し未去者ならば云何んが是れ去あらん。若し或は[三九]時に去あらば、云何んが未去者と名づけん。此れ自相違[四〇]なり。復た次に、方便して說かば、第一義中にはかの未去者は名づけて「去す」となさず。何となれば、去は空なるを以ての故なり。かの[四一]異者の如し。前來の遮句は應に自部の諸師と及び[四二]食糠外道等の爲めに是の如き說を作すべし。

復た次に僧佉人言ふ、汝の所說の如きは、かの未去者を名づけて「不去(去せず)」となす。汝此の義を立つるは我が所成を成ずるなり。

論者言ふ、云何んが「未去者」と名づくるや。

外人言ふ、去の未だ[四三]了ならざるが故に未去者と名づく。若し去にして已に了ならば名づけて去者となす。

論者言ふ、汝の所說の「了」は過失あるが故なり。先に已に遮せるが如し。復た次に、汝「先に

【三七】 彼去者不去
梵文及什譯と同じ。

【三八】 未去者不去
「未去者」は梵文によれば agatas に非ず agantā にて、去者の不定なれば、嚴密には「非去者」「不去者」とあるべきなり。什譯は「不去者」とす。

【三九】 時に去あらば（若或時去）は「若し去ある時には」の意なり。

【四〇】 自相違とは因明論理の述語にして、「石女に兒あり」等の如く、命題自身が矛盾を含むものを言ふ。「去ある時に非去者と名づく」と言ふも亦自相違なり。

【四一】 異者は、去者、非去者より異れる第三者を意味す。後に出づ。

【四二】 食糠外道（kaṇāda）食米齋仙人とも譯さる。勝論始祖の綽名にして延いて勝論派をさす。

【四三】 了は顯了の義なり。

有り。因成ずることを得るを以ての故なり。是の如くして諸の內入の起と、及び去・未去等もまた皆成ずることを得。

論者の偈に曰く、

〔三四〕去者を離れて去無し。

釋して曰く、汝「去者は去の依止たり、此の依止有るを以ての故に去の因となる」と言ふは、是の義然らず。何となれば、若し未だ因を說かざる時には去は則ち成ぜず。此の過失を汝は離るゝことを得ず。偈に曰ふが如し、

(七)〔三五〕去者を離れて去あるは、是の義則ち然らず。

釋して曰く、若し去者を離るれば去は則ち成ぜず。此の如き句義は先に已に分別したり。是の故に偈に曰く、

〔三六〕若し其れかの去無くば、何處に去者あらん。

釋して曰く、かの去者の因は驗無體なるが故なり。此の意かくの如し。「何處に」の聲は、去者を信ぜざるを謂ひ、語義成ずることを得。先に已に廣く說きたり。去者は無體なるが故に。是の如く、依止の因不成の過と、及び彼れの義と相違するの過の故に。

復た人ありて言ふ、去には驗あるが故に前執の咎なし。汝應に諦聽すべし。我れは決定して「是の如き去あり」と立つ。此の義云何ん。此れ若し合あらば、彼は則ち指示すべきが故なり。此れ若し合なくば彼は則ち指示すべからず。兎は無角にして指示して角ありと言ふべからざるが如し。今去と合とありて、指示して「かの調達去す」と言ふべし。去あるを以ての故なり。我が立義は成す。

論者言ふ、汝若し定んで「調達の去ありて指示すべし」と謂はゞ、第一義中に於て去者有らしめんと欲するや。去者無きや。偈に曰ふが如し。

【三四】離去者無去。
一見前の第六偈の後二句を換言せるものと考へらるゝも、梵文及什譯には別に此の一句無し。西藏譯に依れば、これは長行中の一句に過ぎず。仍りて惟ふに本譯者は長行中の此の一句を本頌と看誤りて、「論者の偈」となし、前後の註を抹殺せしものなるべし。

【三五】離去者有去　是義則不然
梵文及什譯と同じ。

【三六】若其無彼去　何處有去者
梵文及什譯と同じ。

(五)[三一]若し去時中に去あり、　復た及び此れが去を行ずれば、
則ち二去の過に墮す。　此の義は則ち然らず。

釋して曰く、此れ謂く、世諦中に於て義然らざるが故なり。復た次に偈に曰く、

(六)[三二]若し二の去法あらば、　即ち二の去者あらん。

釋して曰く、何の因緣の故に此の如き遮を作すや。若し二法あらば則ち二者あり。偈に曰く、

去者を離れて去あるは、　是の義則ち然らざればなり。

釋して曰く、是の義の爲めの故に此れ應に爾るべからず。前の過咎の如きは應に清淨なるべきが故なり。此れまた云何ん。是の如き一の去は世諦品に於てかの去者に觀じて、去時は成ずることを得。第一義中には此れを相違す。是の如く、かの境界差別の言說と及び譬喩等とは、驗無體なるが故に、內入不起にして、無來無去の緣起は成ずることを得。

復た次に、[三三]毘伽羅論者は言ふ、我が所立の義は前の過失なし。何となれば、唯だ一の行あるのみにして自體去なるが故なり。彼れが行に處する時を即ち名づけて「去」となし、彼の行が作者なるを、名づけて「去者」となす。是の故に汝「二の去者と及び二の去法あり」と言ふも、此の過は然らず。

論者言ふ、第一義中にはかの去を遮するが故に、(去)時は則ち無體なり。(去)時無體なるが故に去もまた成ぜず。世諦中に於ては、處邊無間に行聚續起するを名づけて去者となす。去時を觀察するに實に無自體にして、此れ相應せず。

復た人ありて言ふ、決定して去ありと、是の如く應に知るべし。此の義云何ん。彼れ(去)の依止あるが故なり。若し此の依止無くば彼れ(去)は則ち有らず。石女の兒、倒行等の事の如し。去が去者に依るの相貌は云何ん。謂く、提婆達多(の如き)なり。是の故に若し依止有らばかの去は則ち

【三一】若去時中去　復及此行去
則墮二去過　此義則不然
第二句「此れ」は去時中に存する去なり。去時中に存する去は去時そのものを成立せしめ、其の去が更に去すと言ふとき、即ち二去あり。梵文及び什譯と多少異るも義譯と見るべし。

【三二】若有二去法　則有二去者
離去者有去　是義不然
梵文及什譯と全く同じ。後二句は前二句の立義を能成する理由なり。

【三三】毘伽羅論者。聲明論者なり。釋觀緣品の餘(一一)參照。

る處」と答へ、何處に去ありと問はゞ、かの「去時」と答ふ。倶に明了ならず。或は謂く、無始なり。世諦に解する所の去時に、彼こに於て、第一義中に去を成立せんと欲するは、是の義然らず。何となれば、此の一の去業は彼の去時に屬すればなり。此の外に何處に更に別に去ありて、而も「彼の去時に於て去あり」と言はんや。是の故に汝、「第一義中に諸の內入の起あり」と說き、及び「かの境界の差別の言說」(を因とし)、又提婆達多等を引いて喩となすは、立義と因と譬との三皆成ぜず。第一義中には無體なるを以ての故なり。

或は、「是の如き去業は去時に屬せず。[二八]屬せざるを以ての故に『去』の名を安置す。彼は有體なるが故なり。因は成ぜざるに非ず」と謂はゞ、偈に曰ふが如し、

(四)[二九]去時に去ありと說かば、

釋して曰く、去時に去を兼ぬるは此の義應に爾るべし。而も去無しと言ふは、此の執は過ありと。是の故に偈に曰く、

去時中に去無し。

釋して曰く、去時中に於て若し去無くんば、則ち說いて以て去時となすべからず。去時に去無きは世間信受せず。是の故に去業は去時に攝屬して(去)時と和合するは義必ず定んで爾り。汝、「去無くして異の去者あり」と言ふは、是の義然らず。過失あるが故なり。若し汝前の如き過咎を避けんと欲して、執して「去と去時と和合して復た是の如くに去を行ず」と言はゞ、此の義然らず。偈に曰ふが如し。

[三〇]去が去時と和合して去するは、唯だ分別なるのみ。

釋して曰く、第一義中には去と和合等とは皆不可得なり。但だ憶想分別なるが故に。若し定んで此の如くならば、何等の過を得るや。偈に曰く、

什譯には「若離於去法、去時不可得」とあり、原典の相違とも考へらる。梵文は更に什譯とも異る。本論の譯偈は註釋から見れば「去時と去とは相因待するものにして無自體空なれば、去時に去あるは然らず」の意なり。

【二五】馬櫪。櫪は廐の意にて、馬と云へば「櫪を有する者」、櫪と云へば「馬を有する者」にて、兩者相因待するを言ふ。

【二六】漢譯には「答彼處去」とあり、之に依れば「彼處に去ありと答ふ」と訓むが正確の如くなれど、意を取りて上の如く訓みたり。

【二七】品初外人の言中の宗因喩の量をさす。

【二八】縮藏本には「去時に屬せず(不屬去時)」の句を脫す。

【二九】說去時去者　去時中無去　梵文「去時の去(去は去時に屬す)と言ふ人には去を離れて去時あらん」の義譯と見らる。

【三〇】去和合去時　去者唯分別　什譯及び梵文と全く異る。

〔一九〕已去と未去とを離れて　去時もまた受けず。

釋して曰く、此の義云何ん。かの去時は不可得なるが故なり。若し去時あらば、已去となすや未去となすや。若し半去半未去ならば二俱にして過あり。

外人言ふ、汝、「去時もまた受けず」と言ふは、是の義然らず。何となれば、此れ應に受くべきが故なり。云何んが知るや。彼處に足を擧げ足を下すの相貌を、名づけて去時となす。偈に曰ふが如し。

〔二〇〕已去と未去とに非ずして、彼處の去時に去あり。

釋して曰く、我が所欲は、去時あるが故に去義成ずることを得。

復た次に、人ありて言ふ、若し有去の處なら、彼に去ありと說くべし。是の如き言說音聲[二一]は有體なり。[二二]作と依止と相離れざるを以ての故なり。「已去と未去とに去を遮す」と說かざるは、此れ相應せず。汝「去時も受けず」と說くは義既に成ぜず。已去と未去とも此れ亦破せず。

論者の偈に曰く、

〔二三〕若し去時に去あらば、云何んが是の義あらん。

釋して曰く、汝の所欲の如く去時に去あるは、此の義成ぜず。先に已に破せるが故なり。復た次に、若し定んで「去時に去あり」と分別すれば、已去中に去ありと爲すや、未去中に去ありと爲すや。此の二に異りて去處ありと爲すや。先に過を說けるが如し。

復た次に、第一義中に去時に去あるは、體無體なるが故なり。此の義云何ん。偈に曰く、

〔二四〕去時と去とは空なるが故に、去時に去あるは然らず。

釋して曰く。[二五]馬櫪は是れ誰か馬櫪なると問はゞ、かの「馬を有する者」と答へ、又誰か馬なると問はゞ、かの「櫪を有する者」と答ふるが如く、是の如くに、何等を去時となすと問はゞ、かの[二六]「去あ

知」なり。

【一七】　經部說の批評一。

【一八】　數論說の批評一。

【一九】　離已去未去　去時亦不受　第一偈の後半なり。梵文には「已に去りたると未だ去らざるとを離れたる、今去りつゝあるときにも去らず」とあり、什譯は「離已去未去、去時亦不去」として梵文と合致す。

【二〇】　非已去未去　彼處去時去　梵文及什譯第二偈の後二句に相當す。偈意は去ると云ふ事から、又は作用は去時に於て成立するを言ふ。前二句「運動のある處、そこに去事あり、而して運動は去時にあり」は本論に於ては直前の長行中「彼處に足を擧げ足を下すの相貌を、名づけて去時となす。」と意譯さる。これ亦本論翻譯の亂雜なる一例なり。

【二一】　有體は原語不明なるも、斯かゝる場合本論の用語例では「眞實」の意なり。又「言說音聲」は單に「言葉」の意なり。「去時に去あり」と云ふ言葉の眞實なるを言ふ。

【二二】　作は去作 (gamana)、依止は去作の所依にして去者自體なり。

【二三】　若去時去者　云何有是義　梵文及び什譯と全く同じ。

【二四】　去時去空故　去時去不然

和合するが故に、其の[一六]去覺を生ず」と顯はして、他をして解せしむるは、世諦中に於て成じ已つて復た成ずるの過あり。何となれば、但だ處邊の刹那々々に前後差別あるを名づけて和合となすのみ。「調達」の名は唯だこれ行聚にして、自ら既に無體なり。何ぞ別の去ありて彼れと合せんや。かくの如き慧は我が意の所欲なり。復た次に「去」の名句義が調達と合するは、第一義中に譬喩なきが故に、體不可得なり。かくの如きはかの世諦中に於てもまた道理に違す。何ぞ況んや第一義諦中をや。此れ等の過失を汝は離るゝことを得ず。

復た次に、[一七]經部師言ふ、欲起の動によつてかの風界と及び四大造とを生ずるを名づけて身聚となし、處邊無間に前後に起滅するを說いて名づけて去となす。若し別に外の去法ありと謂はゞ、是の義然らず。何となれば、所起の處に隨つて、起れば卽ち滅するが故なり。譬ふれば火焰の如し。惑者は去ありと謂ふも、其の實は非なり。第一義中にもまた去時無し。汝、第一義中に於てかの去を遮するは所成を成ずるの過あり。

論者言ふ、起を遮するを以ての故なり、汝方便を說くも此の義成ぜず。何となれば、「焰等の去」は迷智同じく迷へるが故に。かの去者と去との異も亦遮せんと欲するが故に。又世間の智人は汝の所執に於て歡喜せざるが故に。

復た次に、[一八]僧佉人言ふ、我が法中の如きは、動塵偏へに增すれば果は轉た卽ち明了なり。かの未去の者を說いて去となすが故に。

論者言ふ、彼れ了等を執するは、先に已に遮せるが故に、去義は成ぜず。此れ唯だ分別のみ。

復た次に、諸の「去」を說く者は前の過失を聞き、心に怖畏を生じて共に義を立てゝ言ふ、「去時に去あるが故に前の過失なし。此の義は決定す」と。

論者の偈に曰く、

「已去を受けず」「未去を受けず」の宗義と、其の因喩とが共に成立するを言ふ。

【一三】　欲去者とは已去者、未去者に對して「去りつゝある者」「去時の者」を意味す。又「法體法相」には別に特殊な意味なく、單に任意の或るものを指すと解してよし。而して其の何か欲去の者を譬喩として、未去を受けざる所以を論證せんとするなり。

【一四】　優樓佉(ulūka)。勝論派の始祖の名・優樓佉の弟子とは勝論派の學徒をさす。此の問の意を解し易くすれば下の如し。「未去を受けずと言ふが、何う云ふ意味に於て受けないと言ふのか。或る人が未だ去らざるに去つたと言ふ如き、さう云ふ形で未去を受けないと言ふのか。又は去作そのものを否定する意味で受けないのか」と。

【一五】　自體とは去者の自體を意味す。句義(padārtha)は勝論哲學獨特の用語にして、言葉が指示する實有の對象を意味す。此の場合は「去」と云ふ一つの實有の句義存在して、それが去者自體と和合して、「去りつゝある調達」が成立すと言ふなり。調達は提婆達多の別譯語なり。

【一六】　去覺は「去ると云ふ認

に曰ふが如し。

（一）[一〇]已去は應に受くべからず。

釋して曰く。謂く、去法已に謝せるが故なり。此の義は自他倶に解して成立することを須ひず。

偈に曰く、

未去もまた受けず。

釋して曰く、[一一]去者なるによるが故に。已去者の如し。義意かくの如し。

復た次に、云何んが未去なる。謂く、かの去者に未だ起作あらざるなり。かの法未だ去せざるを以ての故に。能成[一二]所成の法は自在に倶に成ずることを得。法體法相の[一三]欲去の者を以て譬喩して驗するが故なり。此れまた云何ん。「未去もまた受けざる」を以て、此の義成立す。何となれば未去なるを以ての故に。譬ふれば餘の欲去者の如し。

復た次に、[一四]優樓佉の弟子は言ふ、何等か「未去」なる。提婆達多の未去を去となすが如く是の如くに受けずと爲すや。提婆達多の去作の去せざるが如くに他をして解せしむると爲すや。

論者言ふ、何の因緣の故に、此の如き問ひを作すや。

外人言ふ、若し汝の意、先の分別を受けんと欲すれば、則ち我が義を成ず。若し汝の意、後の分別を受けんと欲すれば、則ち汝の因義に違す。この故に先の因義は成ぜざるに非ず。復た次に、我れは實に外に「去法あり」と立つ。汝「非なり」と言ふは、是の語は然らず。實に外に「去」あり。云何んが成立するや。謂く、[一五]自體の外の句義が調達の境界と和合して「去調達」あり。我が意かくの如し。緣にて隨轉するを以ての故なり、調達と和合するが如く、（諸法についても）應に是の如くに知るべし。

論者言ふ、若し、世諦中に去ありて提婆達多と和合するとき、「自體の外に句義ありて彼の境界と

體の起あり」と立言せるをさす。「かの境界の差別」とは內入等が言語の對象として定立せらるるを言ふ。內入の言あるが故に、言說せらるべき何かゞ對象的に實在すと考ふるなり。之を否定す。

【七】遮行、起行は原語的確には不明なるも、後の方より見て nivritti（止息）pravritti（現行）の譯かと想像せらる。禪等を修習するが遮行にして、煩惱業等を起すが起行なり。

【八】「境界の差別は言說すべし」との因は此彼共に認むる所と云ふなるべし。

【九】去處は「去時」と同義と解してよかるべし。已去、未去に對して「去りつゝあるとき」を意味す。

【一〇】已去不應受　未去亦不受「受けず」は漢文としては「承認せず」の意なるが、梵文には「去せず gamyate」とあり。「已去は去せず、未去は去せず」と云ふを「已去に去あり、未去に去あるを承認せず」と意味を補ひて「受けず」としたるものか。

【一一】去者と言ふ以上「未去」と言ふことを得ずとの意なり。

【一二】所成法は定立せらるべき宗義、能成法はそれを根據づける因喩なり。此の場合は、

巻の第三

観去來品第二

復た次に、初品に已に一切法の體無起なるを說き、對治して人をして信解せしめたり。今復た次に、[一]「不來不去の緣起」の差別を明かして[二]物をして識知せしめ、彼れの義を遮せんが故に第二品は起る。此の義云何ん。世間法中には言說自在にして、所作の事に於て深く愛染を起す。今彼れの執著の箭を拔かんと欲するが故に[三]一の行相を遮す。此れ外の施爲にして卽ち破すべきこと易し。彼れが謂ふ所は、

外人言ふ、應にかくの如き內入の體の起あるべし。何となれば、かの境界の差別は言說すべきが故なり。若し此の起無くば、かの境界の差別は則ち言說すべからず。石女の兒には「彼れに來あり去あり」と說くべからざるが如し。若し[四]提婆達多・耶若達多ならば是の如くならず。此の譬喩によつて、自他の諸法の起義は成ずることを得。

論者言ふ、若し施・戒・禪等を多く修習するが故に[五]自性起が成じ、或は行及び住が(成ずれば)、世間の所解は此れ成じ已つて復た成ずるの過あり。定に在る者慧眼を以て觀ずるが如くんば、かの施戒等の行と及び不行とは第一義中には體不可得なり。[六]「かの境界の差別は言說すべし」との因義は成ぜざるが故に。遮行の如く起行もまた同じく破す。

復た次に、若し「我が立因の種々は共に汝同じく解して、分別は俱に成ず」と謂はば、此の義は然らず。何となれば、かの俱成の因は驗するに無體なるが故に。是の如きに異りて驗ありと執ずるは彼の因義に違するが故に。

復た次に、若し第一義中に去者ありと謂はゞ、彼の已去・未去・去處の三は應に可得なるべし。偈

【一】「不來不去の緣起」は前品の「不起不滅の緣起」なる概念に對す。緣起を說くは存在又は法の無自性を見て、生滅去來等の差別相を否定するなり。本品では、去來の差別相の不可得なるを論じて、諸法の無自性にして唯だ緣起なるを明かす。又「差別」とは屢々現るゝ語なるが、大抵は「特殊相」と云ふほどの意なり。

【二】物とは衆生又は人を意味す。

【三】一の行相とは去來の相をさす。

【四】提婆達多・耶若達多は前品に註せる如く、特別の意味なく、單に某甲・某乙と云ふと同じ。而して石女の兒は本來無體なれば、來去を言ふべからざるも、某甲・某乙等の實際の人物には來去を見る。其の如く、內入等は有體にして來去ありと言ふなり。

【五】自性起は「自性より起る」の意にて、諸法有體にして自ら起るを意味す。之は世間の所解なり。若し施戒禪等の出世の道を修して尙、自性起の見が成立するとせば、世間の見が更に重ねて成ずるの過ありと言ふ。

【六】外人の言に「かの境界の差別は言說すべきが故に」と云ふを根據にして、「內入の

王問經の偈に曰ふが如し、

　已[四七]にかの諸陰の　無起にしてまた無滅なるを解すれば、
　彼の世間に行ずと雖も　世法は染すること能はず。

是の如き等の諸の修多羅に、此の中に應に廣く說くべし。

【四七】已解彼諸陰　無起亦無滅　雖行彼世間　世法不能染　羅什譯思益梵天所問經卷一四法品「若見知五陰、無生亦無滅、是人現行世、而不依世間」。

釋して曰く、諸の緣と非緣との自體は有らず。偈義かくの如し。復た次に、我れ已に先に有と及び非有とを遮せり。皆果の起ることとなし。是の義を以ての故に果は無自體なり。果既に無體ならば緣は則ち非緣なり。何處にかの緣體の得べきもの有らん。是の如き語義は本より所有なし。但だ彼れは心と聲と相因りて起るのみ。果は無自性と說く。緣體空なるが故なり。

(四五)復た次に、上より已來、外人所說の四種の緣起——所謂る因緣、緣緣、次第、增上等の自體と差別——(につきて)、彼れの所立を遮して無起の義を明かせり。是の故に此の品に諸の緣起を觀じて、無起の義は成じたり。諸の大乘經中に說くが如し。偈に曰く、

(四六)若し諸の緣起、彼れが無起ならば　かの起の自體は不可得なり。
若し緣自在にして彼の空を說かば　空を解するを名づけて不放逸となす。
若し人、一物として起ること無きを知らば　亦また一物として滅すること無きを知る。
彼れは非有なるが故に又非無なり　かの世間の悉く空寂なるを見る。
本來寂靜にして諸の起無し　自性は是の如くに已に涅槃なり。
能く依怙のために法輪を轉じ　諸法の空を說いて彼れに開示す。
有も無も不起なり、俱もまた非なり　非有非無も無起なる處、
世間の因緣は悉く是の如し　但だかの凡夫、妄りに分別するのみ。
常に無起なる法は是れ如來なり、　彼の一切法は善逝の如し。

復た次に、般若波羅蜜經中に說くが如し、「文殊師利よ、是の如く應に知るべし。彼の一切法の不起不滅なるを、名づけて如來となす」と。又梵王問經中に說くが如し、「彼の處には一切の愛滅盡するが故に、彼れを無起と名づく。彼れ若し無起ならば、彼れ即ち菩提なり。世間は顚倒して虛妄に著を起す。第一義中には佛は出世せず、また涅槃せず。本より已來起滅なきが故なり」と。又梵

【四五】以下本品の結語。教證として般若波羅蜜經、梵王問經を引く。又以下各品の最後に二三の教證を引くを例とするが、以て淸辨の愛讀せし(延いては當時の中觀派の背景をなせる)經典を知るべし。

【四六】「若諸緣起彼無起　彼起自體不可得
若緣自在說彼空　解空名爲不放逸」
「若人知無一物起　亦復知無一物滅
彼非有故亦非無　見彼世間悉空寂」
「本來寂靜無諸起　自性如是已涅槃
能爲依怙轉法輪　說諸法空開示彼」
「有無不起俱亦非　非有非無無起處
世間因緣悉如是　但彼凡夫妄分別」
「常無起法是如來　彼一切法如善逝」
以上の四偈及び半偈の中、第一第二の兩偈と最後の半偈とは西藏譯に存すれども、第三第四兩偈は西藏譯に無く。觀誓の本論廣疏に依れば、第一偈は無熱池龍王所問經より、第二偈は入楞伽經より、最後の半偈は智光明莊嚴經よりの引用なりと。

釋して曰く、此れは緣の無自性なるを謂ふ、偈義かくの如し。譬ふれば生酥轉じて婆羅門の心となるが如し。かの緣の自體は不可得なるが故に。先に已に說けるが如し。偈に曰く、

〔四二〕若し緣無自體ならば、　云何んが轉じて果を成ぜん。

釋して曰く、此れ第一義中には緣轉變してかの果體とならざることを明かす。偈義はかくの如し。譬ふれば提婆達多の童子の如し。梵行云何んぞや。若しくは達多が彼の兒となるや。又幻主が泥團を化作して、かの自體空なるに能く瓶等を生ずるが如し。かの轉變の如きは世諦中に於て一切の智者皆能く信ずること能はず。この故に「緣が轉變して果となる」に非ず。かくの如く譬喩は無體なり。所成能成の法無きが故に、先の如き因の義は成ぜず。また相違の過の故に。

外人言ふ、若し緣の自體轉じて果とならずんば、緣の體は無なるべし。而も果は失せず。彼れは果の自體を遮せざるを以ての故に、我が立義の如し。第一義中に諸の內入有り。何となれば、果なるを以ての故に。譬ふれば芽等の如し。

論者の偈に曰く、

(一五)〔四三〕無緣にして果有るに非ず。

釋して曰く、緣の轉變なくして而も果ありとは、世諦中に於てもまた信ずること能はず。何ぞ況んやかの第一義中に於て而も信ずべけんや。この義は成ぜず。

外人言ふ、若し第一義中に緣體空ならば、然もかの非緣は自體不空ならん。而も此の非緣は是れ我が所欲なり。この故に非緣の義は成ず。

論者言ふ、但だ緣體を遮すれば則ち非緣無し。豈に非緣を以て汝に解せしめんや。

復た次に開合の偈に曰く、

〔四四〕何ぞ緣と非緣と有らん。

【四二】若緣無自體　云何轉成果　梵文には「其れ自身にて成立せざる緣より生ずるなり、果は緣所成ならず」とあり。之を數論の轉變說の否定として釋す。茲に中論註釋者との解釋の違ひあり。又偈の「果を成ぜん」は「果と成らん」と訓みてもよし。

【四三】非無緣有果　什譯、梵文の第十六偈（最終偈）に相當すれど、其の第二句を取れるものなり。

【四四】何有緣非緣　同上第四句を取る。

是の如くならば則ち非緣なり、　云何んが果は起ることを得ん。

釋して曰く、第一義中には、是の如く是の如く果等は起らず。諸緣中に無なるが故なり。此の義かくの如し。泥中に酪無ければ酪を生ずべからざるが如し。非因なるを以ての故に。若し稻等の中に其の芽體無くして是の如くに生ずることを得るとは、世諦分中に於て凡夫の智慧同じく見を行ずるが故なり。第一義中にかの眼等の內入ありて生ぜしめんと欲するは、此の義然らず。偈に曰ふが如し。

(一三)若し果は緣中に無くして[四〇]　かの果緣より起らば、
　非緣中にもまた無し　　云何んが果は(非緣より)起らざる。

釋して曰く、彼れ是の如く說くは過失起るが故なり。非緣中に果無きが如く諸緣中にもまた無し。譬ふればかの聲、作なるが故に無常なるが如し。何の所以ありて瓶はこれ作なるが故に而も無常に非ざるや。先に已に說けるが如き、「聲はこれ無常なり。何となれば、作なるによるが故に。譬ふれば瓶の如し」と。此の義應に知るべし。若し此の方便を以てすれば第一義中に芽等空にして穀等より生ずるは、かの芽等の義は應に爾るべからず。何となれば、果なるを以ての故に。譬ふれば酪の如し。この故に有に非ず。先の所說の過を免れざるを以ての故なり。

復た人ありて言ふ、第一義中にかの內入有り。我れは是の如く受く。緣が轉異するが故なり。泥が瓶となるが如し、と。

論者の偈に曰ふ、

(一四)緣は果の自性に及び、[四一]

釋して曰く、此れはかの緣の轉異するを謂ふが故に。偈に曰く、

諸緣は無自體なり

【四〇】若果緣中無　彼果從緣起　非緣中亦無　云何果不起　什譯、梵文の第十三偈に合致す。唯だ第三句「非緣中にも亦無し」の「無し」は譯者の補へる語なり。

【四一】緣及果自性　諸緣無自體　梵文は「果は緣によつて成り立ち、而して緣は其れ自身にては成立せず」とあり。「緣が果の自性に及ぶ」とは「果が緣によつて成り立つ」義なり。而して本論では之を數論の轉變說を指示するものとして釋す。

（三七）此れ有りて彼の法起る、と　この義は則ち然らず。
釋して曰く、この義を以ての故に、かの因の過失を汝は離るることを得ず。復た次に、佛婆伽婆は無分別智にて善巧に安置して、世間の深法を信ぜざる者を教化し、安慰せんが爲めの故に、種種に涅槃寂滅等の諸の勝功德を稱揚するも、世諦法の故にして、第一義に非ず。第一義中にはかの涅槃等は自體空なるを以ての故に、譬喩は無體なり。因成ぜざるが故に、或は世諦中に於て諸法を有體ならしめんと欲するものあり。譬ふれば「涅槃寂滅の故に」といふ者の如し。此れらは先の如く譬喩の過失あり。無常等の諸の過患を說くは、有爲法を毀呰して樂著せしめざらんが故にして、彼れを誘引せんが故に、爲めに涅槃寂滅の功德を說く。世諦の攝なるが故に彼れの有體を說くも、第一義中には彼れは實に無體なり。汝の意の所欲は義成ぜざるが故に。かくの如く諸緣遮し已れり。

（三八）復た外人ありて言ふ、第一義中に緣ありて能く眼等の內入を起す。何となれば、かの果は起ることを得るが故に。穀等と芽との如し。若しこれ無ならば果は起ることを得ず。譬ふれば龜毛を衣となすべからざるが如し。

論者言ふ、汝「有り」と謂ふは、一一の緣中に果の自體有りとなすや、和合の諸緣に果の自體有りとなすや、一一中にも無く和合にもまた無しとなすや。應にかくの如く問ふべし。

外人言ふ、汝、何故に此の問をなすや。

論者言ふ、若し是れ有ならば、前に已に遮せるが如し。果若し是れ有ならば緣とまた何の用あらん。若し是れ無ならば、また先に已に遮したり。果若しこれ無ならば緣また何の用あらん。偈に曰ふが如し、

（三九）一一にも和合にも、　諸緣中に果有るに非ず。

【三七】此有彼法起　是義則不然　什譯にも梵文にも一致す。

【三八】以上は四緣各別に實有を破し、緣無實なれば果を起す能はざると論じたるが、以下は果の方に視點を置き、諸緣中に果の自體は無なれば、諸緣も無實にして果も不起なるを論ず。

【三九】非一一和合　諸緣中有果　如是則非緣　云何果得起　什譯第十三偈に相當す。後二句は什譯及梵文と異る。又「一々」と「和合」は什譯には夫々廣、略とあり、個別的と全體的の意なり。

の次第に滅するを、此れを名づけて意となす。かくの如き滅意を次第縁となさば、過を免れざるが故に。若し汝の意に、かの欲滅のものを次第縁となすと謂はば、汝此の縁を立つるは但だ是れ語あるのみ。何となれば、其れと同時なるは次第縁に非ざるを以ての故なり。

復た次に「滅法は則ち縁に非ず、及び何等の次第ぞ」とは、有るが異に釋して云ふ、此の「及び」の聲は「及び未起の果」なり、應にかくの如く知るべし。其の義云何ん。かの［三五］滅と未起との種子と芽等の二は、皆無體にして倶にこれ無因なり。種子と及び芽の滅起等の二は此の過中に墮す、と。

論者言ふ、彼れ、此の義を立てて「所謂る滅とは、因滅して無體及び無住にして當起に起を作す。無因なるを以ての故に滅起等の二はかくの如き過を得と分別するは、此の說然らず。過なきを以ての故に、所成能成の語義顯了す」と。顚倒せるを以ての故に何の過失を得るや。今當に驗を立つべし、「かの滅は縁に非ず。何となれば、因あるを以ての故に、譬ふれば未滅の心心數法の如し。また無因にして起る、因あるを以ての故に」。此の二語を說けば彼れは相應せず、この義云何ん。先の語は因の義成ぜず、後の語は自義と相違す。一切法の起を遮するを以ての故に、此の偈にまた次第縁を遮するが故に、彼れは二過を得。謂く、因義不成の過と、自義相違の過となり。かくの如く次第縁を分別し已る。

復た次に、增上縁とは、その相云何。「若し此の法有りて彼の法起ることを得るが故に、增上縁と名づく」と。汝の義はかくの如し。今第一義中には縁法は不起なるを、他をして解了せしむ。諸法は幻の如く自體本と空にして不可得なるが故なり。偈に曰ふが如し。

（一二）［三六］諸法は無自體にして　自相非有なるが故に。

釋して曰く、この義を以ての故に、自の大乘中には、獨り第一義諦にのみ諸法無起なるに非ず。世諦中に於ても因ありて果起るはまた不可得なり。偈に曰く、

【三五】「滅せる種子」と「未起の果」との二を意味す。

【三六】諸法無自體　自相非有故　什譯第十二偈の前半「諸法無自性、故無有有相」に相當す。梵文には「自性なきが故に」「諸存在には存在性なきが故に」とあり。「故に」と云ふは、之が根據になつて次の命題を呼び起すなり。

くんば、我れは識に能緣あらしめんと欲せず。佛說けるが如し「復た次に勇猛菩薩摩訶薩よ、應にかくの如く行ずべし、色は所緣に非ず。何となれば、一切法は所緣なく、少法の取るべきものあることなきが故に。彼れ若しこれ取るべくんば、此れ卽ちこれ所緣なり。かくの如く勇猛よ、色は色を行ずるに非ず。乃至識は識を行ずるに非ず。勇猛よ、一切法は行ぜざるが故に、色は見に非ず、また識は見に非ず。乃至識は知に非ず。また可見に非ず。若し色より識に至るまで知に非ず、見に非ずんば、是れを般若波羅蜜と名づく」と。所緣を觀じ竟れり。

復た次に、汝、次第緣を分別するが如きは、此れ應に諦觀すべし。その相云何ん。第一義中には彼の一切種と及び一切法とは皆無起なりと遮す。この[三二]緣を以ての故に、偈に曰ふが如し。

(一〇)[三三]起らずして諸法滅するは、　この義則ち然らず。
滅法は則ち緣に非ず、　及び何等の次第ぞ。

釋して曰く、この義云何ん。無起なるを以ての故なり。第二頭に滅を言ふべからざるが如し。この故に第一義中には次第緣は此れ相應せず。かくの如く彼れの義は成ぜず。相違するを以ての故なり。彼れに順じて說かば、若し汝此の次第滅の心心數法を次第緣となすことを得んと欲すれば、この義は然らず。何となれば、彼の體は滅するが故なり。久しく滅せる識の如く、また色法の如し。緣に非ざるを以ての故なり。此の將に欲起せんとする心心數法には、彼の物滅するが故に、何者か緣とならん。此れの緣に非ざるを以ての故に。彼の滅者と及び欲起の法とは隨攝すること能はざるを以ての故に。此の意かくの如し。次第緣に非ず、また[三四]總緣にも非ざるが故に。

或は「かくの如き心の起あり。所有の決定の因緣は、各々自在に欲起の體に處を與ふるが故に、緣滅せんと欲する時に饒益をなすが故に、彼れは餘の過去の刹那と無間なるを以ての故に、次第緣は成ず。この故に過なし」といはば、此の義は然らず。非色の法には住處なきを以ての故に。六識

【三二】緣は因と同じ。「この故に」の意なり。

【三三】不起諸法滅　是義則不然　滅法則非緣　及何等次第　什譯第十偈に相當す。梵文にも一致す。什譯は「法」を果と譯す。

【三四】總緣。別緣に對して緣一般を意味するか、或は緣々の誤字か、明かならず。

復た次に、今當にかの緣緣の義を觀察すべし。其の緣緣の如きもまた彼れの憶想分別するが如くならず。偈に曰ふが如し。

(九)[29]婆伽婆所說の　　眞實無緣の法、
　此の法體は是の如し。　何處に緣緣あらん。

釋して曰く、かの眼識等は名づけて緣となさず。何となれば、緣緣なきが故に。但だこれ自心の虛妄分別なるのみ。第一義中にはかの法の起を遮す。かの[30]欲起の時にもまた能緣に非ず。何となれば、欲起なるによるが故に。譬ふれば色法の如し。この義を以ての故に緣緣は無體なり。但だ世諦に於て眼等を建立す。自相を持するが故に之を名づけて法となす。識の如きは光によつて然る後に起ることを得。故に緣緣と名づく。財と主と倶なるが如くならず。若し爾らば能緣の法なし。第一義中には能緣の識は成ぜず。所分別の如し。能緣なきが故に所緣もまた無し。所緣は[31]無物なるを以ての故に、其の義かくの如し。譬ふれば五逆を造るもの終に諦を見ざるが如し。この故にかの因は成ぜず。また緣の義と相違するが故に。

復た異人ありて「若し色陰の所攝ならば色は能緣ならず」と言はば、この義は相應す。諸部の論師また是の說をなす、「何等か無所緣の法なる。謂く色と及び涅槃となり。若し汝の意に、心心數法は無所緣なりと謂はば、汝の先の所欲を則ち自ら破すとなす。何等か有所緣の法なる。謂く心と及び心數法となり」と。

論者言ふ、汝の語は善ならず。我が所立の喩を今更に明かに顯はさん。

外人言ふ、心心數法は定んで有所緣にして、造色の如きものに非ず、譬喩なきが故に。復た次に、所取は所緣となす、と。

論者言ふ、彼れ心心數法に所取ありと分別するは、後當に更に破すべし。第一義道理の所說の如

【二九】婆伽婆所說　眞實無緣法
　此法體如是　何處有緣々
什譯第十一偈に相當す。唯梵文の sandharma(有なる法)を「婆伽婆所の眞實法」と譯せるは、什譯と同じ解釋を取れるものなれど、疑問なり。中論註參照。

【三〇】欲起時は起時と同じ。「起りつゝあるとき」の意なり。

【三一】單に「無」の意なり。

によるが故に因緣等ありて、緣の自體をなす。汝「無し」と言ふは、此の因成ぜず。立義破するが故なり。

論者言ふ、汝の所立の義は世諦中に於ては得べし。是の如きは譬喩の過なるを以ての故に、所說然らず。云何んが汝等此の因義を立つるや。世諦中に佛是の如く說くとなすや、第一義中に佛是の如く說くとなすや。若し世諦中に是の如く說くならば、汝の義は自ら壞す。若し第一義中に是の如く說くならば、かの第一義中には「有にしても、不有にしても、有無にしても法起るに非ざる」が故に、彼の、有なる、非有なる、亦有非有なる 二六 自性果の緣は不可得なるが故に、因は起すこと能はず。若し是の如くならば、云何んが定んで「かの因能く起す」と言ふや。この義を以ての故に汝の因は成ぜず。相違するを以ての故に。

復た人ありて言ふ、二七 遮の方便を受くるに、此の中論中には法の無性を明かす。法の無性なるは二つ倶に遮するが故なり。二つとは謂く、二八「名著」と及び「所名著」となり。所名著は前に已に破せるが如し。其の名著は今當に次に遮すべし。若し總じて義を說かば、有に非ず、不有に非ず、また非有に非ず、非不有に非ざる等なり。世人盡く「因能く果を起すことを欲するも、かの因は若しくは有にしても、非有にしても、有非有の倶にしても、自性果の生ずるは皆應に爾るべからず。」「因」の語轉ずるが故にかの因體を知るのみ。是の如き因によるが故に相應せず。

或は人ありて、「第一義中に諸體の起あり。何となれば因あるが故に」と言ふは、先に破を說けるが如く、かの因は成ぜず。

復た次に、異の論師ありて言ふ、「若しくは有、若しくは非有、若しくは有無倶なるも、自體は起らざる」が故に是れ因相に非ず。因の義成ぜず、と。

是の如く釋するは、この義然らず。

【二六】「自性果」は有・非有等の性質をもてる果の意にも、又自性(自體)をもてる果の意にも解し得らるるが此の場合は後者の方適當なるべし。其れに對して緣は不可得なりとの意なり。

【二七】以上の如き否定の方法を承認して見ると、の意なり。

【二八】「名著」「所名著」は言語不明なれど、所名著は「名づけらるゝ何かに對する執著」にて因緣果等の有自體の見をさし、名著は「名に對する執著」にて、有・無・非有無等の見をさすと解すべし。

んと欲す。この故に前の所說は過失なし。

論者言ふ、かの諸の尼揵子等が「有無」の二語を方便して倶に說くは、此れ安隱の處に非ず、立義成ぜず。

かくの如く已に總じて諸緣を破するを說きたり。今當に別に破すべし。この中には總じて因緣を觀ずるが故に。若し能生にして緣に異らば彼れを名づけて因となす。かくの如く和合して自在に所生の法起り、一が能く生ぜしむるに非ざるが故に、又かの起を遮するが故に。我れかくの如きを欲す。世諦中に於ては因の義を建立するも、第一義中には因も因に非ざるが故に、應にかくの如く說くべし。

若し汝の意に「[二三]此の因は有物、若しくは不有物、及び有無物にして能く果を起す」と謂はば此の義然らず。偈に曰く、

[二四]有にしても、非有にしても、　有無にしても、法は起るに非ず。

釋して曰く、第一義中には法相かくの如し。云何んが說いて「因能く起す」と言はんや。故に彼れは非因なり。かくの如く彼れは起すこと能はず。有なるが故に、無なるが故に。猶ほ自他の如し。先に已に驗破せり。若し有無倶ならば則ち二過あり。この故に因體は成ぜず。若し「所生の法起る、應に因を說くべきが故に」と謂はば、此れまた然らず。有等の相は起らざるを以ての故に。世諦中に於ては因に由つて果あり。因もまた是の如く、果起りて因は成ずるが故に。

[二五]復た次に自部の人言ふ、因ありて能くかの內入等を起す。此の緣起の義はこれ如來の說なり。如來の說の如きは變異すべからず。譬ふれば寂滅涅槃の如し。此の能起の因はこれ「因緣」の義なり。心心數法の所緣はこれ「緣緣」の義なり。かの次第滅の心心數法は阿羅漢最後の心を除いてこれ「次第緣」の義なり。若し此の法有りて彼の法起ることを得れば、これ「增上緣」の義なり。佛說

【二三】 有物、不有物、有無物の「物」は漢譯の附加語にして、有、不有(非有)、有無とあると全く同じ。又此の括弧內の句は次の偈と同じ。

【二四】 非有非非有　非有無法起　珍しき譯例にして、na san na-asan na sadasan dharmo nirvartate と云ふ梵文の文字をそのまゝの順に寫せるものなり。「非有」「非非有」「非有無」の「非」字を除いて「有なる、非有なる、有無なる法起る」と續けて讀み、第一句の最初の「非」のみを殘して「……起るに非ず」と讀むものとす。斯かる譯は當時の原文と、現存梵文との全き一致を示す典據となり却つて好都合なり。什譯第九偈「若果非有生。亦復非無生、亦非有無生、何得言有緣」の前三句に相當す。什譯は「法」を「果」と意譯せるのみにして原文は同じ。

【二五】 大乘派の異解。唯識派をさすとも見らる。

復た次に、法若し已に有ならば緣また無用なり。何となれば、自體有るが故に。かくの如く世諦中に於ては、かの稻穀等もまた芽等の緣に非ず。何となれば、〔一七〕生と作と觀ぜざるを以ての故に。かの已生の芽の如くに、及び〔一八〕餘の瓶衣等あり。この驗を以ての故に因の義成ぜず。

〔一九〕僧佉人言ふ、實に物體あり、緣を藉りて了作す。或る時には緣中に先に細果あり、後時に緣を待つて細をして麁ならしむ。汝「已に有ならば緣は何の用あらん」と言ふは、此の語は然らず。

論者言ふ、かの了作は先に已に遮せるが故なり。復た次に、「先に細にして後に麁なる」は若しくは有なるも、非有なるも、前に過を說けるが如し。汝の語は非なり。

復た次に、〔二〇〕經部師言ふ、理實には諸緣は有に非ず、無に非ず。有無を言ふは、義應に爾るべからず。此れ復た云何ん。謂く第一義中には果起るとき現前に諸緣和合し、互に相資攝して能く自體を得す。緣あるを以ての故なり。爾の時かの果は「無」と言ふを得ず、其の起るを以ての故に。「有」と言ふを得ず、未だ現起せざるを以ての故に。我れかくの如きを欲す。この因緣を以て前の如きの過なし。

論者言ふ、此れまた自の分別のみ。「有に非ず、無に非ず、緣の義應に爾るべし」とは、有と及び非有との二種は無きが故に皆說くべからず。譬ふれば餘物の如し。若しくは「〔二一〕有にして不有」なる二倶も緣に非ず。論者の意は爾り。復た次に、此の中に但だこの「有」と及び「非有」と「倶」とのみを說くべからず。何となれば、「非有、非非有」あるが故なり。かくの如き物は、此れはこれ無物なり。謂く眼識或は芽のかの緣、即ち眼等と諸の種子等は、實と說くべからず。何となれば、彼れらの果は有と及び非有とを說くべからざるを以ての故なり。譬ふれば餘物の如し。修多羅人は過を避くること能はず。復た次に、有等の自性は體空なり。世諦中に於て生の義成ずるが故に。

復た「倶」を說く〔二二〕尼揵子ありて言ふ、かの果は亦有非有なり、緣を以ての故に。我が意は爾ら

〔一七〕果の生と、緣の作とが相觀待せざるを言ふ。
〔一八〕餘の瓶衣等も然りの意。
〔一九〕數論說の批評十一。因中有果說を難ず。
〔二〇〕經部說の批評四。緣について有無の四句を否定す。四句を否定するは無自性空を明かすなり。
〔二一〕有にして非有なる兩性質を倶すること。
〔二二〕尼揵子（nirgrantha-putra）は離繫子の義にして、耆那教徒。その說の批評二。「亦有非有」とは「有にして亦非有」の意なり。

是の如く說かば並びに前と同じく破す。謂く、「云何んが芽起り乃至先の刹那の時」と。

復た次に、起ありと說く者は言ふ、第一義中には彼の入等の緣は能く內入を起す。何となれば、緣なるを以ての故に。穀等の芽の如し。若し起すこと能はずんば、彼れは則ち非緣なり。譬ふれば兎角の如し。

論者言ふ、汝所說の如く、第一義中に彼の緣あらば、此の緣は果に於て、有となすや、無となすや、有無の俱となすや。皆應に爾るべからず。偈に曰ふが如し。

（八）［一四］定有と定無とに非ず、　諸緣の義應に爾るべし。

釋して曰く、此の緣は有に非ず。その所執の如きが應に爾るべからざるは、今當に此の義を顯示すべし。偈に「緣は非有なり」と言ふは、これ何等ぞや。此の非有とは空華等の如し。何等か是れかの［一五］摩婁多の緣なるか。故に知るべし、是の如く彼れ一物無くば、虛空華のために兎角のために緣たらんや。此の釋の［一六］「非有の緣」とはこれ何の語義ぞ。此こに驗するに、稻穀等の緣は第一義中には自性有に非ず。何となれば、かの果は非有なるが故に。空華の非有なるが如し。虛空は無體なり。是の如く芽等は非有なり。稻穀等の諸緣は非有なるを以ての故に。虛空華の如し。

或は人ありて言ふ、我れは彼の有法をして起らしめんと欲せず。意は、彼の可起の法をして起らしめんと欲す、先に無體なるが故なり。

論者言ふ、汝「緣は非有なり」と謂ふは、これ何等ぞや、かの瓶等の如きは、先に未だ起らざる時には則ち體相無し。既に無自體ならば、更に何等か有りてかの瓶衣稻穀等の緣をなさん。可起の法をして起らしめんと欲するも、かくの如くならば則ち一緣もなし。應に此の義を知るべし。第一義中に驗するに、稻穀等は芽等の緣に非ず。何となれば、先に未だ起らざるときは其の體無きが故なり。譬ふれば瓶等の如し。

【一四】非定有定無　諸緣義應爾　什譯第八偈「果先於緣中、有無俱不可、先無爲誰緣、先有何用緣」の四句を二句に要約せるものなり。「果は定有なるも定無なるも緣は成立せず」となり。「定有」「定無」は夫々 sat, asat の譯語にして、實有、實無と云ふに同じ。又什譯第七偈に相當するものを本論には欠くも、長行中に其の意に相當するものあり。

【一五】摩婁多(marut, maruta)。風の義。

【一六】「非有の緣」とは「非有なるものについての緣」なり。

云何んが「無作にして果を起す」と名づけん。功能が緣中に空なるが故に說いて「無作」と名づく。若し功能空ならば、則ち彼の緣は能く彼の果を起すに非ず。譬ふれば麥種に稻穀の芽なきが如し。此れ應に爾るべからず。若し有作ならば、此の作有ることを驗するに、緣中に無きが故なり。果の起るによるが故に、彼れは作ありと說く。果未だ起らざる時には、彼れは所作なし。此の驗によるが故に因の義成ぜず。

復た次に〔一三〕經部師言ふ、彼の果起る時に諸緣に作あり。是の緣を以ての故に互に相隨攝し、資益して果起る。因は成ぜざるに非ず。答驗もまた立つ。

論者言ふ、汝經部師は第一義中に穀等の諸緣和合聚集して果起ることを得せしめんと欲するや。若し定んで爾らば、この諸の因緣が乃至未だ能く果を起さずんば、此れより已前にこの稻穀等を云何んが名づけて非緣となさざるや。此の事あることなし。是の如き緣の故に、譬ふれば乃至未だ他より受學せざるが如きを、云何んが無智人と名づけざるや。此の義成ぜず。

問うて曰く、若しかくの如くならば、果先に未だ起らずんば則ち諸緣は非緣なり。我れかくの如きを欲す。この故に過なし。

答へて曰く、汝甚だ過あり。何となれば、汝の意、唯だ果先に未だ起らざるときに諸緣は非緣なることを解するのみにして、而も彼の果正しく起る時にも緣また非緣なるを知らず。此の義のための故に、云何んが芽起る時にかの稻穀等は非緣の自性なる。第一義中には若しくは一若しくは異も說くべからざるが故なり。かの穀等の先の刹那の時の如し。

若し有るが說いて言ふ、「自よりも、他よりも、俱よりも體を起すに非ず」とは、此れはこれ我が所成を成ず。何となれば、因果の二法は一異を說くべからざるが故なり。說くべからずと雖も要ず彼の緣を待つて方に能く果を生ず、と。

〔一三〕 經部說の批評三。起の三時につき、果の起時に緣に作ありと云ふを難ず。

論者言ふ、汝等かくの如く「作」の義を安立し、「稻穀等の如く世諦中に於て作あり」と言ふは、この義然らず。何となれば、偈に曰ふが如し、

〔一〇〕若しくは(作)有るも若しくは作無きも、　諸緣の作は成ぜず。

釋して曰く、世諦中に於て兎角は無なるが故に。第一義中には有もまた成ぜず。作もまた是の如し。無體なるを以ての故なり。汝「譬成ずるによるが故に所欲の義立つ」と言ふは、此の二過を翻ずれば還つて汝に在り。

復た次に〔一一〕僧佉人言ふ、兎角の無體なるは卽ちこれ其の體なり。云何にして知るや。毗伽羅論の第六門中に是の如き說を作すが如し、「別異あるが故に。譬ふれば青優鉢羅華は色と異なりとなすが如し」と。

論者言ふ、汝の說は善ならず。何となれば華と色等の二體別異なるは第一義中には此れ皆成ぜず。譬喩なきが故なり。若し汝の意に「我れ色等の有體を立つるが故に汝をして解せしむること能はざるが如く、かくの如く汝は色等の無體を立つるも、また我れをして解せしむること能はず。彼此同過なるを以ての故に」と謂はば、今當に汝に答ふべし。同過の義なし。何となれば、起法の有體なるは、かくの如きは已に遮したり。況や不起を有體ならしめんと欲するをや。當に遮せざるべけんや。「有體無體」は是れ汝の意にては異相を顯示せんと欲するも、我れ今汝を遮して此の如き解をなす。「有體無體は二邊に墮在す」と。我れは汝が有無を執するに同じからざるが故に二邊に墮せず。此の義云何ん。汝は有體無體を立てて他をして信受せしむるも、驗は無體なるが故に我が所欲に非ず。この故に汝の執は道理なし。故に我が立義は成ず。汝「同過」と言ふは、此れまた非なり。

復た次に、或は諸の「起」を說く者あらば、應に是の如く問ふべし。果先に未だ起らざるときは、かの諸緣等は無作となすや、有作となすや。〔一二〕若し諸緣にして無作ならば果を起すこと能はず。

【一〇】若有若無作 諸緣作不成 第七偈後二句なり、梵文には「緣にして作用をもたぬものは無い。作用をもつものは有るか(それも無い)」とあり。一般に緣の作用の無自體なるを言ひ、更に緣そのものゝ不成立を言ふなり。什譯には「是緣爲有果、是緣爲無果」とあり、一見著しく異るも同原文の意譯なり。

【一一】數論說の批評十。無體は有體と異りて之に對する一體なりと立つ。玆で「有體」「無體」の概念は單に「有、無」とあると同じ。而して其れ等は各々一體なりと云ふ場合の「體」はbhāva(存在)又はsvabhāva(自性)の譯と見るべし。「無も亦一つの存在」「無も亦一つの自性」の意なり。又毗迦羅論(vyākaraṇa)は聲明論、卽ち文法論書なり。

【一二】此の一句原文には「若諸緣無作不能起果者」とあり。之によれば「若し諸緣無作にして果を起すこと能はずんば」と讀むべきが如きも、それでは前後の續き惡ければ讀み替へたり。

し。若し「其れと別なる作無く、但だ縁が是れ作なり」と言はば、是れまた然らず。若し「縁に自體なくして、作に自體あり」と言はば、

論者言ふ、若し無縁にして作あることを得と謂はば、この義然らず。何となれば、若しかの縁無くして自然に作あらば、此の義なきが故なり。

佛護論師は言ふ、彼れはまた無縁にして作あるの過の故に、と。

佛護言ふ、〔八〕世諦中に於て云何んが作ありや。自他の衆縁相因待するが故に作あり、無間刹那に能く果體を起すが如きを、是れを名づけて作となす。かの未來に起らんと欲する法體の如きは、作によつて生ずることを得。世諦中に於て作あること無きに非ず。汝が「縁中に作あり」と執するに同じからず。是の語に答なし。

論者言ふ、汝今因縁と譬喩とを說かず、但だ立義のみありて他に過を與ふるは、此の釋成ぜず。

復た次に〔九〕經部師言ふ、異法の起あり。眼識等の如し。何となれば、作あるによるが故に。譬ふれば種子、地、水、火、風の因縁和合して芽ありて出づることを得るが如し。此の答へを以ての故に汝の先の驗は破す。

論者言ふ、先の偈に說くが如き「縁中に作あること無し」とは、此の義云何ん。第一義中にはかの起を遮するが故に、かの作は無體なり。種子等の縁和合して作ありとは、此れ爾るべからず。汝「縁中に定んで作あり」と言ふは、この義成ぜず。譬喩なきが故なり。汝の先の答へは我れを破すること能はず。

復た次に外人ありて言ふ、稻穀等の如きは眞實にこれ有なり。何となれば、作あるによるが故に。世諦中に於ては、かくの如く世諦に隨順して其の所欲の如くならしめんと欲す。第一義中にも亦またかくの如し。譬ふれば兎角の如し。譬成ずるによるが故に、所欲の義立つ。

〔八〕佛護說の批評四。

〔九〕經部說の批評二。衆縁合するとき、縁と異れるもの（異法）の起るを以て、有作用の根據とす。

復た次に、若し汝執じて「總じて作を說く」と言はば則ち義と相違す。かの緣が有ならば、世智の境界と、識を生ずるの作と、かの衆緣とは、體相離れず。

[四]佛護の問の中に、復た外人ありて是の釋をなして言ふ「若しくは自より起り、若しくは他より起るとは、是の言何の謂ぞ。此の義は我れに於て所用なしとなす。然りと雖も眼等の諸緣は眼識の生を作す。鑽燧等が飯熟を作するが如きが故に」と。而してかの外人、この成立を作して、體の起ありと言ふ。

佛護論師は彼れを遮せんがための故に偈本を引いて云ふ「作は緣中に無し。何となれば、已生と未生と生時に、識に作あるは是れまた然らず」と。

論者言ふ、かれは相應せず、汝等の前後の二語は唯だ立義あるのみなるが故に。

復た異の[五]僧佉ありて言ふ、汝此の過を將ちて安置して我れに與へ、「我が緣中に其の作の義なし」と遮し「作は不起なるが故に譬喩成ぜず」といふは、この義然らず。今、作の在るあり。云何にして作あるを驗知するや。かの識等の自果を生ずるは其の作によるが故なり。能く熟飯を作するが如し。

論者の偈に曰く、

[六]緣を離るるもまた作無し。

釋して曰く、緣無きが故に、また緣と合せずして獨り作あることは無きなり。先に「緣中に作ある」を次第して其の過を說けるが如きが故に。

復た[七]論師あり、此の偈を釋して言ふ、識の自體の生ずるは、卽ち是れ作なり。

論者言ふ、前偈に、緣中に作あることなしと說けるが如く、緣を離るるもまた作無し。若しかの識を生ずる作ありと言はば、この義然らず。何となれば、識の如きは無なるが故にかの作もまた無

【四】佛護論師の中論釋中に出る設問なるべし。以下佛護論師の說の批評三。

【五】數論說の批評九。緣無作なりと雖も、果の生ずる作用は緣を離れて存立すと立つ。

【六】離緣亦無作。梵文には「緣をもたざる作用は無い（作用にして緣をもたざるものは無い）」とあり。前句の「作」は緣の能生する作用なりしも、此の「作」は果の生ずる作用に關す。什譯「爲從非緣生」とあり、之も前句と同じく同原文の意譯なり。燈論は直譯せり。

【七】論師は次の佛護論師をさすか、或は佛護と同派の論師なるべし。緣は無自體なるも作は有自體なりと云ふを破す。

卷の第二

釋觀緣品の餘

[一]復た次に、餘の僧佉言ふ、若し「諸果の功能は緣中に空なるが故に、緣は果を生ぜず」といはば、かくの如き義は我が所成を成ず。何となれば、汝「果體は不起なり」と謂ふは、是れ則ち常と名づく。汝の先の立義は、則ち自ら破るとなす。

論者言ふ、汝の語は非なり、一切時の起を悉く皆遮するが故に。不生の物もまた常と說かず。何となれば、不生の物は世諦中に於て有ることを欲せざるが故に。

[二]復た僧佉あり、かくの如き言を說く、かの衆緣は果を起すこと能はずと雖も、眼、色、空、明、及び作意等の諸緣ありて作あるによるが故に、識生ずることを得。この故に「生」あり「作」あらしめんと欲し、かの「作」と及び「生」とを我れ今當に說くべし。第一義中にはかの識の自果を生ずる作あり。何となれば、緣あるを以ての故なり。譬ふれば熟飪は水、米、及び薪火等の諸緣具し已つて能く飯を成ずることを作すが如し。この驗を以ての故に我が立義は成ず。

論者の偈に曰く、

[三](七)緣中に作は無し。

釋して曰く、我れ第一義中に能く飯を熟するを作せしめんとは欲せず。無作なるを以ての故なり、譬喩成ぜず。譬の成ぜざるが故に汝は則ち過あり。何となれば、能成立の法なきが故に。成立なきによるが故に、緣中に定んで識を生ずるの作なし。若しくは有(果)なるも、若しくは無果なる皆不起なり。後當に遮すべきが如し。作は不起なるが故に因の義成ぜず。第一義中には應にかくの如く說くべし。

【一】數論說の批評七。「功能」は次に出づる「作(作用)」と同じ。作用は緣と果との兩面に關して考へらる。卽ち衆緣が果を能生する作用と、果が衆緣より生ずる作用なり。玆では後者の方面から見て、果が不生ならば常住の過あらんと言ふ。

【二】數論說の批評八。衆緣に作(作用)あり、果に生ありとして、作と生との義を立つ。

【三】緣中無作者。什譯中論第六偈第一句「果爲從緣生」に相當す。梵文では「緣をもつ作用は無い(作用にして緣をもつものは無い)」とあり。緣の能生の作用を否定す。什譯と著しく異るが如くなるも、實は全く同原文に對する異譯なり。什譯は「果を生ずる作用が無い」と云ふ原文を「果は緣より生じない」と意譯せるなり。

一一皆有らず、無自性なるを以ての故に。

釋して曰く、諸緣中に、若しくは[九三]總にしても若しくは別にしても、かの眼等の體は皆不可得なり。此れらの聲は別因中にも無く、和合中にも亦無く、異中にも亦無し。若しくは世諦にも、若しくは第一義諦にも、未だ曾て有る時に無自性の物體が先に起ることあらず。また未だ曾て無自性の物體が先に起ることあらず。また未だ曾て無自性の物有らず。諸緣は他體にして未來に起さんと欲すといふも、諸の「他」無し。他因は無體なるを以ての故なり。

復た次に、若し汝、自心に妄置して、「諸法は有體にして、未來に當に起るべし、此の體に待するが故に、かの緣を他となし、相待力の故に、緣を說いて他となす」といはば、但だ是れ語あるのみ。何となれば、彼れ等の衆緣には他性無きが故なり。この故に此に於て著を生ずべからず。世諦中に於て假りに「他あり」と說くも、第一義中にはかの「他」は不起なり。先に已に說けるが故に。[九六]僧佉人言ふ、我が意の如きは、謂く、微細の我體あり、彼れは後時に於て(果を)作して明了ならしむ。卽ち(緣は)果を了せざるを以て、緣を而も「他」の義となすは、この故に成ずるを得。汝何ぞ能く破せん。

論者言ふ、汝の語は非なり。世間の愚人は此の解をなさず。瓶等の細我はその義成じ難し。汝が「了」を言ふは、先に已に破せるが故に。

又此の邊の譯語例を見るに、bhāva (存在、物)を「物體」「體」「法」「物」等と譯し、此の物體をして實有ならしめる svabhāva (實體、本質)を「自體」「自性」「體」等と譯し、他の物體の自性を「他體」と譯す。異れる原語に同一語を當て、同一原語に異れる譯語を當つ。混同せざるやう注意すべし。

【九四】自我等諸體　內入等衆緣
一一皆不有　以無自性故

前偈と合して他本の本頌第五偈(羅什譯では第四偈)の前半に相當するものと見るべし。什譯の前半の意味は「諸法は無自性であるから諸法の自性は諸緣中に無い」と云ふことなれば、本論の偈も「自我等の諸體と內入等とは衆緣にも、一々にも皆有らず」と讀み得れど、全體としては、衆緣所生の法と共に衆緣そのものの實有をも否定するが本品の主意なれば、姑く本國譯の如く讀み置くべし。而して什譯の後半「以無自性故、他性亦復無」の意味が後の長行中に沒入せり。以て本論の中論本頌譯の粗雜なる一端を窺知し得べし。

【九五】「總」と「別」とは、第十二偈の「和合」「一々」と同義にして、緣一般と個々の緣とを意味す。

【九六】數論說の批評六。此の場合の「我體」は絕對精神たる神我に非ずして、個々の存在に假定せらるゝ實體なり。「自性」の概念と全く同じ。而して玆の論意は、「微細の我體が後に事物の果體を爲作して明了ならしめ、諸緣は果を爲作して明了ならしむるに非ざるが故に、緣は他なり」と言ふなり。

他の緣あるが故に諸法起ることを得。緣決定するが故に我は是の解をなす」と言はば、是の義は然らず。何となれば、若し是の語をなして「自起」を遮すれば、我が義を助成す。若し諸體未だ起らずして他が能く起らしむれば、是の語善ならず。前と同じく遮するが故なり。復た次に、若し「體は他より起らず」と言つて、かの體の外に異の起あるを遮すれば、我が喩を助成す。是の義を以ての故に、赤白の緣中には眼等有ることなし。衆緣中に眼法は空なるを以ての故なり。何となれば、衆緣は無自體にして「他」無きを以ての故なり。

復た次に、是の中に二種の語あり。第一義中には、かの眼入等は赤白の衆緣よりして起らず。何となれば、眼等は無なるが故なり。瓶の如し。第一義中には、赤白の衆緣は其の功能の眼入等を生ずるもの無し。何となれば、かの眼は空なるが故なり。譬ふれば織刀の如し。是の故に佛は說きたまへり、「第一義中には因と及び衆緣とは能く眼を生ずること能はず」と。是の如くに應に知るべし。佛は世間の、亂慧、無因、惡因の諸の諍論に住する者を憐愍するがために、世諦中に於て因緣、次第緣、緣々、增上緣あり」と說きたまふ。是の緣を以ての故に、我が義は破せず。應に是の如く知るべし。

復た異に分別する者ありと言ふ、體は他より起る、と。

論者言ふ、彼れは共に此に於てまた應に思量すべし。是の四緣中云何んが能く眼等の諸體を生ぜん。また異名の差別あり。大衆部及び鞞世師等の分別する所のものの如し。彼れもまた相に隨つて此の中に攝す。この故に決定して第五緣なし。

是の如く、第一義中には、眼等と及び他とは皆爾るべからず。云何にして然らざるや。偈に曰ふが如し。

（六）自我[94]等の諸體と　內入等の衆緣は

五因の名稱は通常、俱有・自分(同類)・相應・偏行・異熟(報)と云ふ玄奘の譯語を用ふ。倘六因四緣の法相的意義に就いては俱舍論卷六、七參照。

【八八】所作因は普通「能作因」と譯さる。果に他して他體をなす疏因なり。

【八九】大衆部說の批評一。諸緣を存在に對して他體と見るを難ず。

【九〇】先生無有とは過去に屬する有無の概念か、その意味する所明かならず。

【九一】所有諸物體　及以外衆緣
　　　　言說音聲等　是皆無自性

此偈と次偈とを本論では「論者の偈」とするも、他本には中論本頌中正しく之に相當するものなし。惟ふにこれは中論本頌第五偈の前半の意義を敷衍せしものならん。その第五偈は羅什譯に於ては第四偈となり、「如諸法自性、不在於緣中、以無自性故、他性亦復無」と精確に翻ぜられをるも、此所に於てはその前半のみが意譯せられしものと考へらる。

【九二】歌羅羅(kalala)。上記の註(六三)を見よ。

【九三】衆緣を他體とし、他體實有を主張するを破す。龍樹では「衆緣所生」は「他より生ず」るを意味さざるなり。

が偈に曰ふが如し。

(四)[八六]因縁と及び縁縁と　次第と増上縁と、
　四縁にて諸法を生ず。　更に第五の縁無し。

釋して曰く、[八七]「因縁」とは謂く、「共有」と「自分」と「相應」と「徧」と「報」等の五因なり。「縁縁」とは謂く、一切法なり。「次第縁」とは、阿羅漢の最後の所起を除ける心心數法なり。「増上縁」とは、諸の[八八]「所作因」なり。第五無しとは、若しくは自宗にも他宗にも、若しくは天上人間にも、若しくは修多羅にも、若しくは阿毗曇にも、及び餘の諸論にも、佛未だ曾て第五縁ありとは說かず。

復た次に、[八九]大衆部の如きは、また是の言をなす。[九〇]先生無有等の諸縁は皆四縁中に攝す。この義を以ての故に、此の四種の縁は能く諸法を生ず。汝「物體は他より起らず」と言ふは、この義然らず。

論者の偈に曰く、

(五)[九一]所有の諸の物體と　及び外の衆縁と
　言說・音聲等は、　是れ皆無自性なり。

釋して曰く、「諸の物體」とは謂く、かの眼等なり。「外の衆縁」とは謂く、[九二]歌羅羅等なり。「言說・聲」とは謂く和合の時なり。「無自性」とは、かの自體を遮するなり。是の義云何ん。かの諸體等は皆無自性なり。また異處及び自在等は有るに非ず。是の故に說いて「かの他も無體なり」と言ふ。

復た次に、[九三]何等をか「自體」となし、而も「衆縁」を言つて「他體」となすや。彼れの有なるは、先に不起の義を已に驗を說いて破せるが如し。是を以ての故に、汝は此の中に於て我れを破すること能はず。

復た次に、或は自心有りと虚妄分別する者が是の說をなして、「若し能く諸法の體を起す者あらば、說いて『他より起る』となす。是れ自體よりに非ず。若し他の縁なくば則ち生ずること能はず。

も、無因よりも起らない」の意なり。

【八一】了作。十二門論有果無果門、及び百論中に多く出でたる了因と同じ。生因に對す。生因は能生の根據にして了因は了別を可能ならしむる根據なり。次の例で言へば、泥團等は瓶の生因にして燈明は瓶の了因なるが如し。

【八二】「受」は識が瓶等を領受(知覺)することなり。「作」は此の場合「作用」の意に解さる。

【八三】「作」は此の場合次の「作法」と同じく所作(作られたるもの)を意味すと解さる。

【八四】佛護論師の說の批評二。前の作とは異る。「無因ならば一切處に常に一切の物が起ることになる」と云ふ解釋を非なりとす。

【八五】阿毘曇(有部)說の批評二。四縁實有の見を難ず。

【八六】因縁及縁縁　次第增上緣
　四緣生諸法　更無第五緣
梵文と全く一致す。羅什譯では「緣緣」と「次第緣」とを置き替ふ。偈文を整へん爲なるべし。

【八七】四緣と六因との關係を述ぶ。六因中の能作因を除ける五因は總じて因緣中に攝す。其の五因は果に對して親緣を爲せばなり。而して能作因をその性質上他の三緣に分つ。

「闇中の眼識は爾の時無受にして、燈明あるによつて闇障等破す」と言はば、前に已に遮せるが如し。これ作法なるが故なり。また闇障の破するは豈作に非ざらんや。若し汝執して「受は先に有るを見る」と言はば、若し先に有らば燈また何の用ぞ。

復た次に、云何んが『瓶』と名づくるや。我が法中の如きは、四大と及び所造の和合するが故に瓶と名づけ、かの燈在る時に、明と倶に起る。この義を以ての故に世諦法中には所作の因あり、一一の物體は各々自因より相續して起る。何となれば、明が物體と倶に起るが如きは、是れを了因となす。第一義中には起法は皆無く、また了有ることなし。大等の諸諦は不了の物にして、能く其をして了せしむるに非ず。何となれば、了せざるに由るが故なり。譬ふれば空華の如し。この故に汝「未だ了せざる者が了す」と言ふ此の語は非なり。

復た次に、[八四]佛護論師此の句を釋して云ふ、「また無因にしてかの物體を起すに非ず。何となれば、若し無因ならば應に一切處に於て一切の物常に起るべく、是の如き過あればなり」と。

此の義は然らず。何となれば、汝の此の語義は、能成と所成と分明に顚倒すればなり。是の義云何ん。謂く、かの物體は因より起るが故に、或は有る時に體の起るあり、或は有る處に一物起りて初起あり。故に先の語と相違す。是の如き不相應は、先に已に過を設けるが故なり。若し彼れに異の不相應の義あらば、また先に說けるが如し。

復た次に、此の中にまた「無因より起らず」とは、一切の諸論に是の如き說無し。有る時有る處に、若しくは自宗にも若しくは他宗にも、一物として若しくは染若しくは淨の、無因より起るもの有ることなし。一一應に是の如く說くべし。是を以ての故に、外道等と不共なる別緣起の不起等の義は成ずることを得。

復た次に、[八五]阿毗曇人言ふ、四種の緣ありて能く諸法を生ず。云何にして緣起は不起と言ふや。我

成する根據をさす。

【七五】 覺(buddhi)。數論二十五諦の一。

【七六】 藏。自性の別語なるべし。

【七七】 大。覺を「大」とも稱す。又地・水・火・風・空の五大を意味すとも解さる。何れにしても問題に變りなし。自性が諸諦の因たり得ざるを言ふのみ。

【七八】 外人は數論人をさす。「丈夫は思と相應す」とは、丈夫は所謂る神我にして、それは絕對精神として常に「思」又は「知」を屬性とし、神我の意思によつて自性より現象を開展し、現象は又常に神我によりて了知せらるゝものと言はる、百論破神品註參照。

【七九】 數論派の見に對する批評第五。前來の問答の續きなれど問題が多少改まる。

【八〇】 旣出第三偈「無時亦無處、隨有一物體、從自他及共、無因而起者」を繰り返したるものにして、此の箇所の漢譯は「不自不他不共不無因、有處有體能起一物」とあり。漢譯上にては甚しき相違あるも原文全く同一なること明かなり。唯偈頌の形に譯さゞりしのみ。而て譯拙劣にして、意味の通ずるやうに書き下せず。「何處でも何でも物は自より起らない。他よりも、共より

問うて曰く、汝の第一義中には譬喩無きが故に（汝の驗は相應せず）。
答へて曰く、總じて[七五]覺を說くが故に世間は共に解す。取りて譬喩となすもまた譬喩無體なるに非ず。この義を以ての故にかの[七六]藏は[七七]大等の諦の因とならず。了せざるに由るが故なり。譬ふれば丈夫の如し。汝若し自性を說いて因となさんと欲すれば、自の驗破るるが故なり。
[七八]外人言ふ、我れ、丈夫は思と相應すと立つれば則ち明了することを得。而も「了せざるに由るが故に」と言ふは、この因成ぜず。又能成の法を具せざるが故に、また譬喩の過の故に。
論者言ふ、彼れの語は義なし。此れまた云何ん。總じて因を說くが故に、また別義の故に、處處に了せず。總じて一は成ぜず。
或は有るが說いて『また無因にして諸法を起すこと能はず、かの性、時、那羅延等を因とするが故なり』と言はば、自在を遮せる中に說けるが如くに、應に知るべし。
復た次に、[七九]僧佉人言ふ、汝『[八〇]自より、他より、共より、無因より、有る處有る體にして能く一物を起さず』と說くは、誠に所言の如し。彼れ實に起らず。實に無起なりと雖も、[八一]了作を以ての故に（一切物有り）。
論者問うて言ふ、是れ何等の物にして、云何んが了作する。
僧佉人言ふ、燈と瓶等との如し。
論者言ふ、燈と瓶との二物は本より自ら不生なり。云何んが、不生の燈を以て彼の不生の瓶等を了作せんと欲する。馬角無きが如きに、豈能く了せんや。第一義中には諸法は不生なるを以ての故なり。世諦に依つて是の如き問ひを作さば、彼の燈は瓶に於て何の所作の用ありや。
外人言ふ、[八二]受が作なるが故に。
論者言ふ、受は本と先に無く、後に於て始めてあり。先無後有なる受は卽ちこれ[八三]作なり。若し

難解なるも其の點を注意すれば却つて解し易し。
【六九】 有我說の立場より「我れは絕對の一我を立つるに、汝は提婆達多の我の如し、耶若達多の我の如し等と言ひて個人我の義に解して難ずるは其の譬喩無體にして、さう云ふ譬喩にて驗（量）を立てゝ我が義を破せんとするも成立せず」と、論者を難ず。
【七〇】 數論派の見に對する批評第四。自性（prakṛiti）は一切現實界の開展する質料因なり。詳しくは百論註參照。
【七一】 梵摩。brahmā の音譯にて梵天のこと。又「住持の際」とは世界を維持する底を言ふ。
【七二】 具（karaṇa）。「道具」の意なれど文法上「能作」の意より轉ぜるもの。若し kāraṇa ならば所謂る「能作因」を意味す。此れが彼れに對して能作の作用をもつ道具である場合には、此れを彼れの「因」と知るの意なり。苦樂癡に對して內入は能作の具なれば因となると言ふ。又樂苦癡とは自性の三德なる所謂る「喜憂暗」なり。
【七三】 此の自性は質料因としての自性に非ず單に性質と云ふほどの意なり。
【七四】 右の數論派の宗義を能

は皆是れ其れ假なり。假なるが故に無量なり。此の義のための故に、[六九]譬喩無體にして驗破は成ぜず立義に過なきが故なり。

論者言ふ、彼れは善說ならず。此の義云何ん。虛空は無生なるを以ての故に、虛空華の如きは體不可得なり。是の如くして「一虛空」と言ふは、この義成ぜず。但だ言說あるのみ。世俗法中に總じて我を說くは、假を示して識らしむるが故なり。汝、一我を立てて他をして信ぜしむるは、驗の無體なるが故に此の義成ぜず。

問うて曰く、縛我は脫我と更に異體なし。何となれば、我なるに由るが故なり、解脫我の如し。

答へて曰く、無餘涅槃界中には一の解脫我も此れ有ること成ぜず。先に說けるが如き過を避くる能はざるが故なり。觀我品に當に廣く解說すべきが如し。

復た次に、[七〇]僧佉人言ふ、我が立義の如きは彼の自性を因となす。謂く、[七一]梵摩を初めとなして下は住持の際に至るまで、諸法の果生ずるは皆自性を因とす。かの內入の如きは苦樂癡の因となり、決定して因を作す。かの[七二]具あるが故なり。若し世間の物に、かの具あらば、我れ因となすと知る。栴檀の札の如く、瓦器の片、金莊嚴具の如く、是の如き等は總別の因なるが故なり。彼の內入の具によつて樂苦癡等あるが故に、內入を說いて彼の樂苦癡の因となす。是の如く應に知るべし、色想行識の諸陰は皆これ樂苦癡等の[七三]自性なり。何となれば、陰なるに由るが故なり。譬ふれば受陰の如し。是の故に因と及び譬喩の義皆成ずることを得。

論者言ふ、此の[七四]『故』たる、第一義中には栴檀等の譬へは成ぜず。無體なるを以ての故なり。世俗中に於ては癡は行陰の攝なるが故に譬喩は成ぜず。彼の樂苦等の二は外の諸法が樂苦の自性に非ざるとは異る。應に是の如く知るべし。何となれば、所量なるが故なり、譬ふれば覺の如し。（汝の）驗は相應せず。

通じて根底（依止）になると言へば、佛教の立場に於ける世俗諦の說に一致することになる。右の轉釋は自在論者の立場から出でて却つて佛教の所說に一致する結果になりしものと見るべし。「我が所成」とは、佛教の宗義を意味す。

【六六】　丈夫（puruṣa）。後の所論より見れば此の丈夫は數論派の所謂る神我（puruṣa）と同じく絕對的宇宙我を意味す。前の創造主自在天を考へる立場より深きものなり。又丈夫を生因とする點に於て數論派と異る。數論派の生因は自性にして、次に出づるが如し。

【六七】　調達（devadatta）。提婆達多と同じ。次の耶若達多（yajñadatta）と共に說話中の人物なるが、此の場合には單に「甲の人」「乙の人」と言ふと全く同じく、二人に關する特殊な說話には何等の關係なし。以下にも、單に甲人、乙人とあるべき所に屢々二人の名を出す。安慧菩薩の大乘中觀釋論に於ても同様なり。是れ本論が釋論を繼承せる一證據と看做し得べし。

【六八】　繋縛我は「繋縛された自我」の意。隨つて次の解脫我は「解放されたる自我」の意なり。以下の論議多く因明論理の形式を用ひたり。一見

や、他性となすや、倶性となすや。此の異の分別は先に已に遮せるが故なり。有起も無起も後に當に廣く破すべし。第一義中には自在は諸法を起すこと能はざるが故なり。

或は有るが說いて言ふ。[六五]『衆生世間と及び器世間とは種種の業因を自在となすが故に、彼の住起壞と苦樂の增減とに通じて依止となる。』と。是の說をなさば我が所成を成ず。世俗の言說は第一義に非ず。第一義中には業は不起なるを以ての故なり。

復た次に、彼の、[六六]丈夫を執して生因となす者、是の如き言を說く、一切の世間は丈夫を因となすが故なり。是の義云何ん。絲齊より網を織るが如く、月珠より水を出すが如く、樹より枝葉等を生ずるが如く、一切衆生の彼れを以て因となすこと亦また是の如し。所謂る彼の過去と未來と、動と不動等と、遠近と內外と、是の如き一切は皆丈夫を因となす。

論者言ふ、前に自在を執して因となせる中に已に此の計を遮したり。今當にまた說くべし。調達[六七]の我の如きは調達の身根の聚の因を作さず。何となれば、我なるに由るが故なり。譬ふれば耶若達多の自我の如し。復た次に、耶若達多の身根等の聚は、耶若達多の我の所作に非ず。何となれば、彼の樂苦は智を起因とするに由るが故なり。譬ふれば提婆達多の身根等の聚の如し。若し「彼の[六八]繫縛我を三界の因となし、一切に非ず」と謂はば、此の義は然らず。何となれば、我なるに由るが故なり。解脫我の如し。彼の執は成ぜず。立義の過の故なり。

問うて曰く、汝「我なるが故に」との因を言ふは、此れ自の立義中の是れ一分なるが故に、汝の出因は是の義成ぜず。過失あるが故なり。

答へて曰く、過失の義なし。先に已に說けるが故なり。何故に過なきや。上に云へるが如し。『常の聲無し、聲なるが故に、譬ふれば鼓聲の如し」と。

若しくは有るが說いて言ふ、我が所立の義は唯だ是れ一我のみにして一虛空の如し。瓶等の分別

【六〇】 作者なくして業因緣によりて存在の生成するを說くは佛敎の立場なり。

【六一】 宗・因・喩の譬喩の成立せざるを云ひて、隨って立義の成立せざるを云ふ。

【六二】 一切法は無因なりと主張して、而も何故なるかの理由(因)を說くは自己矛盾なるを云ふ。

【六三】 婆肓羅人の意味する所的確に判定し難きも、若し婆肓羅を以て地名の音寫とすれば、玄奘の西域記第二に謂ふ所の婆羅覩邏(Śalātura 婆は娑の誤寫)の人といふ義か、または婆は往々 ma の音を寫す慣例あるを以て摩頭羅(mathurā)の人といふ義か、いづれかならんと考へらる。前者は大文法家波儞尼(pāṇini)の生地として有名なる邑なり。また若し之が地名にあらずとすれば、Bhaṭṭāra の音譯にして、尊敬すべき學者の義なるやも知れず。但しこの解釋に就いては、なほ研究を要す。

※ 歌羅羅(kalala)は凝滑と譯し、母胎に受けたる父の精液をいふ。胎內五位の一にして、托胎後初七日間の位。

【六四】 自在天(īçvara)を萬物の因と執する外人を難ず。

【六五】 業因を假りに自在と稱してそれが情器世間の生成を

復た次に、汝は我れと共に無因の義を立てて一切法を成ぜんと欲するも、我れ今汝に示すに「無因なるが故に一切は成ぜざる」ことを以てす。又彼れ「無因」を立てて若し「因」[六二]を說かば先の執破するが故なり。

復た次に、若し『我れ無因を立つるも彼の說因の者をして解せしむること能はざるが故に、須く因を出して無因を解せしむべし。譬ふれば夷狄人と共に還つて彼れの語を作すが如し。此の義のための故に方便して因を說くもまた先の語破するに非ず』と謂はば、是の義は然らず。何となれば、語邊の轉ずるはまた所得の相の如し。此の相の義を以て彼れをして解を得しむるなり。夷狄に『彼處に煙あれば則ち火ありと知る』と語るが如きは、彼れをして相を了知して覺を起さしむるが故なり。此彼の語の異なるは是の故に成ぜず。

復た次に、異の[六三]僧佉婆胄羅人ありて言ふ、彼の歌羅羅と及び芽等は緣なきが故に起り、瓶衣等の若きは緣あるが故に起る。一切の體が自性より起るに非ず。故に我が所成を成ずと。

論者言ふ、かの一切時に一切物の起ること皆悉く遮せるが故に、汝の所說は此れ相應せず、是の如き義によつて自性より起ることなし。

復た次に、外人[六四]自在を執して因となす者あり。是の如き言を說く、「衆生は無智にして苦樂中に於て自在を得ず。善道惡道は皆これ自在の所使なるが故なり」と。

論者言ふ、彼れ是の義を立てて、自在を世間の起因たらしむるは、世俗中に於てもまた應に爾るべからず。何となれば、或は憂喜の因あるが故なり。牧牛者の如きが、若し自在を執して、一切の因にして世間を作る者と名づくれば、此の義は然らず。當に是の如く知るべし、「所量にあるが故なり、譬ふれば自在の如し」と。是の故に當に知るべし、彼の世俗に於てもまた自在が能く諸法を起すに非ず。若し汝定んで、自在が因となつて諸法を生ずと謂はば、この因は果のために自性となす

【五三】數論派の見に對する批評第三。「別と不別」とは、芽の果に對して緣なる地等は別體にして、因なる種子は果と不別なるを云ふ。

【五四】驗。本論の特色ある譯語例にして「量(pramāṇa, anumāna)」の別譯語なり。而も特に宗因喩の形を具へたる論證式をさす。以下の論中「驗を立つ」「驗を作す」等の語が屢々用ゐられ、何れも「量を立つ」る意にして、宗因喩三段の形を具へたる論證式を作ることを意味す。又此の場合、「驗が無體なり」とは、因又は比喩に誤りあり、隨つて宗も誤りになつて、驗の成立せざるを云ふ。此の語も以下に多し。

【五五】裸形部、即ち耆那(Jaina)派の見を難ず。

【五六】不無因(na-ahetutas)。第三偈の「無因より生ぜる存在無き」の義を釋す。

【五七】世間で判斷(驗)する常識的立場の知識。

【五八】惡因とは邪因にして眞實に因ならざるものを因と立つ。それ等をも「無因」の概念に包括すと云ふ。

【五九】「自性を執する者」とは此の場合數論派や有部に非ずして、自然因を立つるものをさすなるべし。

體なるが故に此の義成ぜず。

復た次に、此の中に又[五五]裸形部の義を遮す。「共より起らず」と說くは此の義云何ん。彼れは謂く、金と非金と人功と火等の自他の力の故に環釧等起ると。彼れは是の如くに說く。彼れを遮せんがための故に「共より起らず」と說く。應に此の如く知るべし。

[五六]復た次に、「無因よりならず」とは此の義云何ん。「時となく處となく一物體の無因より起るもの有ることなき」が故なり。何となれば、無因の驗は無體なるが故なり。若し驗ありと說かば、卽ち[五七]世間所驗の解を破すとなす。此の過あるが故なり。「世間の驗」とはその相云何ん。世俗は內入の體をして生ぜしめんと欲す。何となれば、總別有るが故なり。譬ふれば芽等の如し。復た次に、「世間の所解」の過とは、彼の世間に於ては、若し此の物あらば因より生ずるを知る。絲より絹を成ずるが如く、篾より筐を成ずるが如く、泥より瓶を成ずるが如き等なり。彼の過のための故なり。

復た次に、彼の[五八]「惡因」なるものを、また「無因」と名づく。無婦等の如し。何等か惡因なる。所謂る自性と及び自在天、丈夫藏、時、那羅延等なり。眞實ならざるが故に、是の故に此等は無因なり。體を起すこと能はず。若し「彼の自性等より起る」と謂ひて人をして解せしむれば、驗するに爾らざるが故なり。若し驗ありと說かば、此れまた過あり。

復た次に、[五九]自性を執する者は是の如き言を說く。我れ此の義を立つ自性有りてかの內入等生ず。何となれば、我體を莊嚴するが故なり、水生の華の根、鬚、莖、葉、好色形相の如く、大青珠因陀羅尼羅阿毘尼羅寶等の如く、又孔雀頂邊の種種纈目の光明愛すべきが如き、皆自性より爾り。

論者言ふ、彼れ此の義を立てて自性を作者とするは、[六〇]「業因有りて作者無きこと」を觀ぜず。若し爾らば彼の內入の生ずる因緣決定して、世智の所行等は言語と共に成じ已る。復た過を成ず。若し第一義ならば譬喩無體[六一]なり。何となれば、第一義中には蓮華、寶等は本より無生なるが故なり。

をさす。

【四五】異義。第五異句義にして「特殊」を意味す。特殊より普遍(同)を比量する形式なり。文は「異義を分別して因となすや」の意なり。

【四六】地實。既に五身(色・聲・香・味・觸)の屬性を具へて實體として成立せる地。

【四七】阿毗曇人(abhidharmi-ka)。主として有部をさす。既出曇無德人に對する批評と合して有部派に對する批評第二とすべし。

【四八】能成法。因明論理にて宗の命題を成立せしめる根據たる因と喩とを能成法と云ひ、成立せらるべき宗の命題を所成法と云ふ。

【四九】物邊。物は恐らく「有」の別譯語にて有邊の義なるべし。

【五〇】大乘派の異解を批評す。

【五一】佛護論師。中論釋家の一人なり。その註釋は西藏中に存す。本國譯一切經中觀部一、三六頁參照。

【五二】香附子苦參　菴摩羅除熱
石女無有兒　竹筍重有苦
兎印記月光　陽春時作樂

香附子(mustā)菴摩羅(am-lā)は藥草藥果の名なり。本偈は他より引用せられたるものにして、中論の本頌にあらず。

し果の功能空なるを以て說いて「他」となさば、因の義成ぜざるが故なり。若し彼の能が不空ならば、彼の[四八]能成の法は空にして譬喩壞するが故なり。

論者言ふ、總じて聚法を說くが故に、物邊[四九]を觀ずるが故に、他の覺を生ずるが故に、汝「因の義成ぜず、及び能成の法空にして譬喩壞す」と言ふも、此の過失なし。光影に似たるのみ。

復た次に、[五〇]自部ありて言ふ、若し第一義中に彼の內外の入皆不起ならば、法體は成ぜずして能依止は壞す。汝は因義成ぜざるの過を得るが故なりと。

論者言ふ、世俗の言說は實なるが故に、瓶と眼入等の內外は得べきが故に、汝過を說くは此れ相應せず。

復た次に、[五一]佛護論師釋して曰く、他作もまた然らず。何となれば、遍く一切處に一切の起る過の故なり。

論者言ふ、彼れ若し是の如くに過を說かば、卽ち所成と能成と顚倒するが故に、謂く自と俱との因より體を起すの過の故に、或る時[或]有る處に隨つて一物の起るが故に、先の語と相違す。又若し此れに異つて「遍く一切處に一切の起る過」との此の語にて能く「他起」の過を成ずれば此れ相應せず。偈に曰ふが如し、

[五二]香附子は苦參なり、菴摩羅は熱を除く、　石女は兒を有することなし、竹筍は重くして苦あり、
兎印は月光を記し、陽春の時に樂を作す。

[五三]復た次に、異の僧佉人言ふ「かの別と不別なる地等と種子とより芽等の果を生ず。此の如き義に由つて、俱より體を起すと說く」と。彼れの說は然らず。何となれば「二共よりならず」とは「自他に非ざる」の義なればなり。「時となく處となく一物體の共より起るもの有ることなき」が故に、彼れの說は過あり。此れまた云何ん。若し「俱より起る」と謂ひて他をして信ぜしむれば、[五四]驗の無

【三八】僧佉(sāṃkhya)。僧佉人は數論派の人の意、此處に右の問題に就いての數論派の考へを批評す。以下に尙諸派の考へを擧げて批評す。それによつて諸派の思想的立場と、淸辨の立場とが共に明かになる。本論に於ては「相手の立場の批評」を特に注意すべし。

【三九】別の解釋にして論者の認むるものなり。

【四〇】數論の見に對する批評第二。

【四一】韋陀(veda)。吠陀なり。聲論師の如きが吠陀の聲は常住なりと言ふに對して「常の聲なし、聲なるが故に」と言ふとき因の「聲なるが故に」の「聲」は普通の音聲を意味し、それは立義の「聲」の一分なるも猶右の論證は成立すとの意なり。「立義」とは因明論の所謂る「宗」にして、以下の論議に因明論理の形式が非常に多く適用せらる。

【四二】鞞世師人(vaiśeṣika)。勝論派に對する批評第一。勝論の思想については百論參照。

【四三】實(dravya)。勝論六句義中の實句義にして實體を意味す。

【四四】求那(guṇa)。德句義にして屬性を意味す。「我」は實句義に屬する一實體にして、屬性より實體を比量する形式

此れ方便語にして第一義中には內入はかの諸緣より生ずるにあらず。何となれば、他なるを以ての故なり。譬ふれば瓶等の如し。復た次に、第一義中には他の緣より眼等の入を起すこと能はず。何となれば、他なるを以ての故なり。譬ふれば經等の如し。

問うて曰く、汝「他」と言ふは因の義成ぜず。何となれば、立義の一分なるが故なり。譬ふれば「常の聲無し、聲なるが故に」といふが如し。

答へて曰く、汝は善說ならず。「常の聲無し」とは是れ[四一]韋陀の聲にして、「聲なるが故に」とは、鼓聲の如きが故なり。立義の一分なる出因の成ずるを見るを以ての故に、一邊を謂ふにあらず。

復た次に、鞞世師人[四二]言ふ、微塵を因となして諸法の果を生ず。彼の二微塵を初めとなして次第に是の如く地水火風の聚の[四三]實の起ること成ず。汝「他」と言ふは、我の求那[四四]を分別して因義となすや、[四五]異義を分別すとなすや。若し我の求那を分別して因となさば、則ち因の義成ぜず。何となれば、若し我體を離るれば別の求那なきが故なり。若しかの異義を分別すれば卽ち世間解のために破せらるるが故なり。

論者言ふ、彼の說は善ならず、總じて因を說くが故なり。かの法聚集して能く他の覺を生ずるを以て、かくの如き覺の因を總じて說いて「他」となす。彼の我と及び求那とに非ず。異に思惟するが故なり。世間の所解もまた破壞せず、立義別なるが故なり。第一義中には地の微塵初めに起るときは地實[四六]と名づけず。微塵なるを以ての故なり。譬ふれば火塵の如し。かくの如く第一義中には火塵初めて起るときは火實と名づけず。微塵なるを以ての故なり。譬ふれば水塵の如し。是の如き等は次第に應に說くべし。

復た次に、[四七]阿毗曇人言ふ、汝「他」と言ふは、果の功能空なるを以て說いて「他」となすとするや、當に彼の能不空なるべきを說いて「他」となすとするや。二つ俱に過あり。何となれば、若

の意、anta は「終り」「目的」「根據」等の意にして、合して「原理」「宗義」等を意味す。

【三四】色不起行。起行は原語から見て前の「起」と同じく生起を意味するか、又は「現行」を意味するか不明なるも意味は別に變らず。而して此處に指示する阿含が「色の不起」を如何なる形で說けるかは不明なるも問題より察すれば、本論の立場では「色不起」と云へば色の無自體を意味するに、阿含では色の有自體を假定しつゝ何等かの仕方に於て其の「不起」を說明せんとせるを難ずるなるべし。

【三五】「自より起らず」とは體(存在)の無自體を意味するものと解するが正しき領解にして、「他より起る」ことを意味すと解するは正しからずとなり。

悉檀多(siddhānta)は成就、吉法、義宗などと譯さる。

【三六】世。第一義に對して世俗を意味す。世俗とは有部から言へば常識的立場をさすことになるも、本論から言へば有部の如き法有の立場をさすことになる。四諦品參照。

【三七】異部は有部等をさす。「不令解故」「有故」等の因(理由)を立てゝ色等の不起を說明するの不可なるを言ふ。

非ず、譬の過なきが故なり。

復た次に、僧佉人[三八]言ふ、「汝の所立は何の義を立つるや、果を自と名づくとなすや、因を自と名づくとなすや、此れ何の過ありや、若し果體を立てて自となさば、我が悉檀は成ず。若し因體を立てて自となさば義と相違す。因中に體有るを以ての故なり。かくの如く一切は起あるを名づけて「起」となすべし。汝「不起」と言ふは義豈然らんや。

論者言ふ、この語は義なし、汝知らずや、起を分つて遮せるが故なり。謂く自性に因つて起ると及び他性より起ると、此れ等は悉く遮したり。汝正思惟せずしてこの言を出すは惑なり。故に(我れに)過なし。

有るが異釋して曰く、[三九]諸法は自體より起ることあることなし。かの起は義なきが故に、また無窮を生ずるが故に、彼れは相應せず。此の義云何ん。因及び譬喩を說かざるを以ての故に、また他說の過を避くること能はざるが故なり。此の破は(彼の說が)顚倒して過を成就するを顯示す。云何んが顚倒なる。謂く他より體を起すの過、及び有果を生ずるの過、また有窮を生ずるの過の故に悉檀多に違するが故なりと。

復た次に、異の僧佉あつて是の如き言をなす、「諸體は自より起らずとは此れ爾るべからず、何となれば、自ら起を作さんと欲して還つて自ら除くが故なり。三界に兎角の起るありと說くが如し。復た汝の義を屛除せんと欲す。此の如く我が成立するところは、因と果とは能く異體なきを了するが故なり。猶し自我の如し。かの因體より果法自ら起る。この故に義成ず。

論者言ふ、邪分別にて說き道理に應ぜず。先に彼れの義を遮したり。この故に(我れに)過なし。

是の如く、諸法の體は自より起らず。他より起るは義また然らず。何となれば「時となく處となく隨つて一體の他より起るもの有ることなき」が故なり。この義云何ん。「他」とは「異」の義なり。

【三八】「起は不起なり」とは、起卽ち生ずると云ふ其のことが無自性にして不可得なるを言ふ。以下「不起」の語は常に無自性にして空なるを意味するものと解すべし。

【三九】此の體は bhāva の譯語にして、物又は存在を意味す。中論にては「法」と譯さる。

【三〇】造論者とは龍樹をさす。體とするは燈論の譯語例なり。

【三一】無時亦無處　隨有一物體
從自他及共　無因而起者
「何時でも何處でも何ものでも、自より、他より、共より、無因より起れる物體は無い」の意にして、現存梵文と全く合致し、殆ど直譯體なるも、譯文としては拙にして、梵文を對照して辛うじて判讀し得。但だ斯かる直譯文は却つて、此の漢譯の原典と現存梵文の全く同一なるを例證するものとして重要なり。「物體」は bhāva(存在)の譯語にして前の「體」と同じ。

【三二】自よりに非ず(na svatas)の句は梵文にては右の偈の第一句初頭にあり。漢譯は義譯したれば梵文の形を崩せり。釋文は梵文第一句よりの逐次釋なれば此處に先づ「非自」の句出でたり。

【三二】悉檀。siddha-anta の音譯、siddha は「成立したる」

の如くに說き、或は「自より[二九]體を起す」と言ひ、或は「他より體を起す」と言ひ、或は「共より體を起す」と言ひ、或は「無因より體を起す」と言ふ。この諸說は皆然らず。阿含及び正道理に依るに由つて如實に諦觀すれば、起は卽ち義なし。故に[三〇]造論者は自在に決定して、此の偈を說いて曰く、

[三一](三)時として無く、亦處としても　隨つて、一の物體の
自と他と及び共と　無因とより起るもの有ること無し。

釋して曰く、「[三二]自よりに非ず」とは、彼の聚は諸の起法を安立するも、竟に無體なるが故なり。一一の次第の如く應に知るべし。「自」とは我の義の故なり。かの一切の體を何の義の故に遮するや。所謂る「遮す」とは最勝の義の故なり、また無餘の分別網を遮するが故なり。無餘の分別網とは謂く、無餘の所識の境界の故なり。境界無しとは無分別智を成立せんと欲するが故なり。復た次に「遮す」とは有餘の受を遮するが故なり。彼れは異の方便にて諸法の不起を說く。方便して不起を他に解せしむるが故に、此れ大乘の[三三]悉檀に非ず。云何にして知るや。阿含に「[三四]色の不起行」を說くが如きは、般若波羅蜜を行ぜざるが故なり。

復た次に、「自より起らず」とは謂く、自より是の如き體を起さざるが故なり。此れ正しき領解なり。若し此の領解に異にして「[三五]自より體起らず」と言はば、此の義は過あり。何等の過ありや。謂く他より起るの過の故なり。復た次に、汝「自より體起らず」と言はば、唯だ他起の過あるのみに非ず、及び自他の共より起るの過あるが故に、此れ我が欲するに非ず。悉檀多に違するを以ての故なり。此れ方便語にして第一義中には諸の內入等は自より起るの義なし。世[三六]には行ぜざる所なり、有なるを以ての故に、譬ふれば思の如し。[三七]異部が「解せしめざるが故に」「有なるが故に」との因を廻轉するは非因に同じきか。譬喩無體なるを以てなり。是の如く、かの因の廻轉は一切處に

で云ふ緣起とは別の意味なりと言ふは然らず、不起は無爲を意味し、「無爲緣起」(緣起決定法にして卽ち無爲なり)の考へは有部にも有りと反駁す。此の無爲緣起の考は世親の倶舍論にも問題になりたり。卽ち或る者の說として「緣起は是れ無爲法なり、契經に如來の出世若しくは不出世にも是の如き緣起は常住なりと言ふを以てなり」と言ふを擧げて、或る意味では然りとし、或る意味では然らずとす。卽ち無明行等の關係が決定せる意味では緣起は常住なるも、別の緣起と名づくる法體有りて湛然常住なるには非ずと言ふ。(倶舍卷九)。

【三五】「論者言ふ」とは以下凡て清辨の立場からの立言なり。不起は無爲を意味せずして自性を遮するを意味すと云ふ。是れ見るべき言なり。

【三六】次に經部の問難を想定して之に答ふ。之によりて論主は自己の立場が、有部と經部の立場より異るを注意するなり。

【三七】彼體。恐らく tad eva の譯なるべく次の異體に對して同體と言ふと同じ。又摩尼珠と牛糞末と日光と和合して火を起すとは、レンズにて點火する事例なり。

復た次に、[二三]曇無德人言ふ。汝、論初に「不起滅」等と言ふは是れ無爲法なり。「[二四]別の緣起」とはこの義然らず。何となれば、我が法中に有るが故なり。汝、論初に「聲聞等と共なる緣起に非ず」と言ふは義相應せず。

[二五]論者言ふ、自性を遮するが故に不起等と說く。別の緣起法を汝をして解することを得しめん。若しかの無爲緣起有るを他をして信ぜしむと言はば、この義然らず。驗するに無體なるが故なり。若し汝の意、「緣起の決定せるを、緣起は無爲と名づく」と謂はば、此の解は過あり。何となれば、起を遮するに由るが故なり。かの起は無體にして共と名づくべからず。無爲の無起なるは因あるを以ての故なり。譬へば住の如し。

復た次に、[二六]經部師言ふ。不起等の義は聲聞と不共なるに非ず。此の義云何ん。かの「起」と異りて無體なるを名づけて「不起」となす。不自在の如し。かの外道は「滅」を解して、此の滅の無體なるを名づけて「不起」となす。譬ふれば無我の如し。因を藉りて果起るが故に「不斷」、果起りて因壞するが故に「不常」なり。かの摩尼珠と乾きたる牛糞末と日光と和合して是の如くに火を起すとき、[二七]彼體を說くべからざるが故に「不一」、異體を說くべからざるが故に「不種種」なり。是の如く起時に壞するが故に、不來不去なる義も正に是の如し。汝の論初に「聲聞に不共なる別の緣起なり」と言ふは此の義然らず。

論者言ふ、汝にこの語ありと雖も正道理に違す。此の義云何ん。かの[二八]「起」は不起なるが故なり。我れは人をして「不起等なる別の緣起」の義を解せしめんと欲す。この「不共なる別の緣起」を以ての故に、初めに在つて佛婆伽婆を讚歎し、方に此の論を作る。先づ「起」は不起なるを了知せしむれば、餘の不滅等は則ち思ふべきこと易し。

云何にしてかの不起等を解せしむるや。謂く諸の起を分別する者は現前に知るが故に、諸に是

化作せられたる丈夫(puruṣa)即ち化人の義なり。

【一九】 内入。內處にて六根處をさす。又起る(生ず)は常に「有」を意味して、それ等は世俗にては有なるも、自性上有なるに非ずとなり。

【二〇】 偈の第一句は不滅亦不起とありて、「起」を後にして「滅」を初めに言ふは如何と問ふ。「不斷の如し」とは第二句の不斷亦不常も、常を先に遮すべきを言ふ。

【二一】 非一向因(anaikāntika-hetu)。普通「不定因」と譯さる。因明論理の概念にして不正なる因(理由)をさす。因になる命題があらゆる場合に妥當せずして立論を不可能ならしむるもの。此の場合で云へば、「滅より起は先なる故に「起滅」と言ふべし」との難に對し、生死は無始なるが故に起は先なりとも言へずそは不定因なりと答ふ。

「先滅後起」は「滅を先にし起を後にす」の意に非ず、「本無今有」の別譯にして單に生(即ち起)を意味す。

【二二】 起を先に言ふも意義に變りなしと言ふ。

【二三】 曇無德人。有部派の論師。

【二四】 別の緣起。偈に言ふ「不起なる緣起」が、有部の立場

性を語るの執永く行ぜざるが故に「戲論息む」と名づく。一切の災障なきが故に、或は時に自性空なるが故に「善く滅す」と名づく。「說」とは義を開演するが故なり。正しく顚倒ならずして人法二種の無我に通達す、この故に名づけて「佛婆伽婆」となす。此の如き義に由るが故に我れ禮を作す。[11]「諸說中最上」とは、此の言何の謂なりや。彼れは緣起に顚倒ならずして、天人に涅槃信樂の道を開示するが故なり。聲聞・獨覺・菩薩に敎授すること最勝なるが故なり。演說するところの如き正不顚倒の緣起は勝なるが故なり。

問うて曰く、[12]汝向に自ら言へり、「緣起法を說く」と。若し「緣起」と言はば云何んが不起なる。若し不起と言はば云何が緣起なる。この語自ら相違す。また解を生ずること[13]退なるが故に語義倶に壞す。[14]「一切の言語は皆これ妄なり」と云ふ者の如し。

答へて曰く、[15]若し一切の緣起が皆不起ならば、彼れは當に解を作して、我れ此の過を得とすべきも、我れ未だ曾て一切の緣起は皆不起なりとは說かず。故に上の如き過なし。此の義云何んぞ。かの世諦中に緣起有るが故なり。第一義にも亦緣起有るには非ず。彼れ[16]因を說くも此の義成ぜず。猶ほ[17]檀等の如し。第一義中には說いて善となさざるも、生死を攝するが故に之を說いて善となす。又識を說いて我となすが如し。第一義中には識は實に我に非ず。此の如く解知すれば、この故に過なし。又化の[18]丈夫の起るが如し。丈夫の自性は實に所起なし。亦「幻焰の如く[19]內入の起る」等は世俗の故に說き、第一義には非ず。此の故に咎なし。

問うて曰く、[20]「起」の後に「滅」を遮すれば法相として應に爾るべし、彼の（起）は先なるを以ての故なり。「不斷」の如し。

答へて曰く、生死は始めなきが故に、先滅後起も此れまた同じく遮す。[21]非一向因の過あり。義の次第を觀ずるに異を觀ぜず。[22]文若し先に「起」を遮すれば「滅」と同じく過あり。

【一〇】世俗と第一義との兩方に於ての意。
【一一】諸說中最上とは「諸の說く者の中最上」の意にて、それに就いて、說者の智の勝なること、敎化の力の勝なること、所說の法の勝なることの三つの理由を擧ぐ。
【一二】偈に「不起不滅なる緣起」と言へるに關し、「緣起」といひつゝ「不起なる」と云ふ規定を附するは矛盾なるを指摘す。
【一三】退。原語は推定し得ざるも、命題が矛盾を含みて理解の不可能なるを云ふ。
【一四】斯く言ふ命題が眞ならば「一切の言語皆妄」とは言はれず、一切言語皆妄ならば斯く言ふ命題も成立せず。西洋哲學で懷疑論の陷る自己矛盾を指摘する論法と全く同じ。
【一五】右の問ひに對し、緣起は世諦にては有にして起滅あるも第一義諦には空にして不起不滅なりと答ふ。世諦と第一義諦とを明別する考へは以下の論議を貫いて、淸辨の思想體系の基礎になる。
【一六】因は理由にして、「緣起不起」の命題は矛盾なるの理由を說けるも、其れは成立せずと云ふ。
【一七】檀(dāna)。布施。
【一八】化丈夫。咒術によつて

般若の境界海を鑽して一切の戲論網を斷じ、他に緣るに非ず、分別なく、一切法の眞實甘露を得て、かの趣、壽、分齊、性、處、時等に於て（衆生を）攝受利益したまひ、一切の聲聞・緣覺・及び諸の外道と不共[六]にして、唯だ第一乘のみに進趣する者のために、かの世諦と第一義諦とに依つて不起等の諸の名字句を施設したまへり。此の緣起の實說中に最勝なる我が[七]阿闍黎もまた不起等の文句に於て如來如實の道理を開示し、如實の解を得て極勇猛を生じ、通達するところの如くに婆伽婆を讃歎し、故に此の論を造る。又悲水心に適ひ、己れの所解を驗し、かの世間をして己れに同じく解を得せしめんが故に此の言を出す。

偈に曰ふが如し、

（一）不滅にしてまた不起、不斷にしてまた不常、
一に非ず種種に非ず、不來にしてまた不去なる、
（二）緣起にて戲論は息む、說者善く滅するが故に。
かの婆伽婆を禮す、諸說中最上なりと。

釋して曰く、かの句義を次第に解すること無間の故に此の論の義を解せん。この故に初めに是の如き句義を說かん。

破壞するが故に「滅」、出生するが故に「起」、相續の死するが故に「斷」、一切時に住するが故に「常」、別なく異義ならざるが故に「一」、差別の異義の故に「種種」、此に向ふの義の故に「來」、彼に向ふの義の故に「去」なり。此の「滅」なきが故に「不滅」、乃至此の「去」なきが故に「不去」なり。かの起滅と一異とは第一義にて遮し、かの斷常は世俗中にて遮し、かの來去は或は[一〇]倶に遮すと言ふ。或は有るが說いて言ふ、「是の如き一切は第一義にて遮す、彼れが爲すを以ての故なり」と。彼れとは佛婆伽婆なり。「緣起」とは、種種の因緣和合して起ることを得るが故に緣起と名づく。自

【六】　不共。共通ならざる意。

【七】　阿闍黎。ācārya の音譯、前の「師聖」と同じ。龍樹をさす。而して佛說の緣起說に深き意義を認めて中論は此の緣起說の眞意を顯はす爲めのものなりと言ふ。是れ龍樹の中論に對する淸辨の理解なれど、此の理解は正しきものなり。

【八】　不滅亦不起　不斷亦不常
非一非種種　不來亦不去
緣起戲論息　說者善滅故
禮彼婆伽婆　諸說中最上

中論本頌の序偈にして、嚴密には中論全體にかゝるも今初品中に入れて第一偈、二偈とす。此の偈の意義に關しては中論註參照。「非種々」は羅什譯にては「不異」なるも、此の「異」は「相異」よりも一に對する「多」を意味すべければ「種々」の譯は適當なり。又「緣起」は羅什譯にては「因緣」なるも、之も緣起の方よし。所謂る緣起を因緣とするは羅什の譯語例なるも誤解を起し易し。

【九】　句義（padārtha）。言語の意義にて、起滅等の一々の概念の意義を解釋することから、直接に中論全體の論意の解釋に進まんとの意。無間（anantaram）は直接の意なり。

般若燈論

偈本　　　　　　龍樹菩薩
釋論分別明〔清辨〕菩薩
唐波羅頗密多羅譯

巻の第一

釋觀緣品第一之一

[一]普く諸の分別を斷じ　一切の戲論を滅し
能く有根を拔除し　巧に眞實法を說き
非言語の境に於て　善く文字を安立し
惡慧妄心を破す　この故に稽首して禮す

釋して曰く、是の如き等の偈は其の義云何ん。[二]我が師聖は自の所證の如く深般若波羅蜜中に於て審かに眞理を驗し、實義を開顯せり。諸の惡邪なる慧網を斷ぜんがための故なり。かの惡見の者は梵行を修すと雖も、迷惑するを以ての故に皆不善を成す。今彼をして正道を悟解せしめんと欲し、[三]淨阿含に依つて此の中論を作り佛語を宣通す。

[四]論の所爲はその相云何ん。謂く、[五]婆伽婆は、かの無明の衆生が世間の起滅、斷常、一異、來去等の諸の戲論網の稠林に壞せらるるを見て、第一の悲を起し勇猛の慧を發して、無量億百千俱胝那由他の劫に於て、他を利益せんがために身命を捐捨し、厭倦の心なく能く無量福慧の聚擔を擔ひ、

【一】普斷諸分別　滅一切戲論
　能拔除有根　巧說眞實法
　於非言語境　善安立文字
　破惡慧妄心　是故稽首禮
　淸辨論師の歸敬序なり。「有根」の「有」は三有等の有(bhāva)にして言語上「存在」を意味すれど、bhāva(存在物)と異りて、存在の世界、生死の世界をさし、生死とも譯さる。又「非言語」は不可說の意なり。

【二】我師聖は龍樹菩薩をさす。

【三】淨阿含 Agama は聖敎の意にして、玆には主として般若經を指す。

【四】論の所爲。「所爲」は猶目的と云ふが如し。「論」は龍樹著作の中論本偈をさす。

【五】婆伽婆。bhagavat の音譯、普通「世尊」と譯さる。歷史的佛陀をさす。此の主語は「不起等の諸の名字句を施設したまへり」までかかる。

し。信は是れ心神を瑩にするの砥礪、溟險を越ゆるの舟輿・昏識を駭かすの雷霆、幽塗を照らすの日月なり。此の土に先に中論四卷有り、本偈は大そ同じ。【四五】賓頭盧伽其の注解を爲るも其の部執に晦くして學者昧し。此の論既に興る、明鏡と爲るべし。庶くは悟玄の君子詳にして之を味はへ。

【三六】僧伽。Saṃgha の音譯。西域の佛僧ならん。

【三七】崛多律師。闍那崛多(Jñānagupta)の略稱。

【三八】尚書左僕射。尚書省（百官を總領して、端揆を儀刑することを掌る）の下に吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部の六部あり。その中吏・戸・禮の三部を統ぶる者を尚書左僕射といふ。

【三九】太子詹事。東宮家の事を管理する屬官。

【四〇】禮部尚書。禮儀・祀祭・燕饗・貢擧の事を掌る尚書省の長官。

【四一】右光祿大夫。光祿大夫は本來祭祀・朝會・宴饗・酒醴・膳羞の事を掌る大官なりしも、隋代より之を左右に分ち、いづれも散官にして、事務に參與せざることゝなれり。

【四二】壽星。東方の星宿。

【四三】司南車。書言故事に「指南は車なり、木を刻みて人と爲し、手を擧げて南を指す。後世の羅經針の如し。」とあり。すべて學藝を敎導することを指南車が道に迷へる者に方角を知らしむるに喩ふるなり。

【四四】照膽鏡。心中の穢惡を照らす鏡にして、照魔鏡といふに同じ。

【四五】賓頭盧伽。羅什三藏譯中論長行の作者たる賓伽羅(Piṅgala)の誤傳なり。

ふ。詣りて方に茲に感應すべし。道冥符に契ひ家國休祥なり。德人爰に降り、有司奏見して殊に帝心を悅ばす。其の年勅有り、大興善寺を安置し仍ち請ひて[34]寶星經一部を譯出せしむ。四年六月[35]勝光に移住し乃ち義學沙門の慧乘、慧朗、法常、曇藏、智首、慧明、道岳、僧辯、僧珍、智解、文順、法琳、靈佳、慧賾、慧淨等と傳譯沙門の玄謨、[36]僧伽、及び三藏の同學[37]崛多律師等を召して同じく證明を作し、此の論を對翻す。[38]尚書左僕射邠國公房玄齡、[39]太子詹事杜正倫、[40]禮部尚書趙郡王李孝恭等は並に是れ聖賢を翊くるの臣にして、時を佐けて匡濟し、忠貞を盡して主に事ふ。形骸を外にして以て法を求め、聖君の肇慮より竟に此れ弘宣す。利深益厚寔に開發に資す。監譯の勅使[41]右光祿大夫太府卿蘭陵蕭璟は、信根始めに篤く慧力終りを要し、寂慮して眞を尋ね、虛心に道を慕ひ、贊揚を影響し、勸助輟むこと無し。其の諸の德僧は夙に匪懈を興し、函丈すれば則ち其の是非を究め、文定まると雖も詳義を覆はば乃ち明して重ねて幽旨を研覈し、華を去り實を存し、目擊すれば則ち其の理に會するを欣び、審かにす。歲[42]壽星に次るの十月十七日檢勘畢了す。

其の論たるや、觀ずるに中道を明かにして中を存す。空を觀じ第一を顯はして一乘の空を得す。然れば則ち[43]司南の車は本と迷者に示し、[44]照膽の鏡は邪人を鑑らさんが爲めなり。邪無くんば則ち鏡は施す所無く、迷はずんば則ち車は用を爲さず。斯の論の破申は其れ此れに由る。復た內を斥け外を遮し、妄を盡し眞を窮むと雖も、而も妙存を存す。破は可破の如く、蕩蕩焉たり、恢恢焉たり。之を迎ふるに其の源を測ること曠く、之に順ふも其の末を知ること罔

【二一】 略廣相成。廣は事法の差別せるをいひ、略は差別せる事法を統攝する平等の理をいふ。差別門たる俗諦と平等門たる眞諦とが相依相成する義なり。
【二二】 我皇帝。唐の太宗をさす。
【二三】 羲農。伏羲及び神農にして、女媧若しくは黄帝を加へて支那上古の三皇と稱せらる。
【二四】 造化。万物を創造化育せし主、また延いて天地の義を有す。
【二五】 六合。天地四方にして、六極ともいふ。
【二六】 三才。天地人をいふ。才は裁にして、萬物を裁制する作用を持つ義なり。
【二七】 四生。胎生・卵生・濕生・化生をいふ。
【二八】 十善。十善戒ともいふ。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見をさす。
【二九】 半滿。半滿二教の略、佛一代の教を判別したる半字教(小乘教)を滿字教(大乘教)とをいふ。
【三〇】 葱嶺。波謎羅(Pāmir)高原をさす。
【三一】 娵觜。西方の星宿。
【三二】 童壽。鳩摩羅什(Kumārajīva)の意譯。羅什三藏なほ龜茲に在りし時、その高名を耳にせし前秦王符堅が、將軍呂光に命ずるに、若し龜茲に剋たば直ちに羅什三藏を送るべきことを以てして、西域諸國を伐たしめたりと傳へらる。
【三三】 摩騰。具さに迦葉摩騰(Kāçyapa-mātaṅga)と稱す。後漢の明帝の派遣せし使者に請はれて、初めて支那に佛教を傳へたる中天竺の高僧なりと傳へらる。
【三四】 寶星經。寶星陀羅尼經十卷。開元釋教錄第八に依れば、此經は貞觀四年四月譯了せられたりと。
【三五】 勝光。寺名なり。

家を定め、[16]三空を混へて萬物を齊しうす。[17]點塵の劫數に諸難を歷試し、彼の群迷を悼み、故に斯の論を作る。文玄旨妙、破巧申工にして、之を鈍根に被らしむるに多く怯退を生ず。[18]分別明菩薩といふ者有り、大乘の法將にして道を體し衷に居し、遐かに[19]眞言を覽て其の釋論を爲り、祕密の藏を開き[20]如意珠を賜ふ。[21]略廣相成じ師資互に顯はれ、自乘の異執鬱起千端、外道の殊計紛然萬緒なるも、驢乘の馳を駕騏に競ひ、螢火の燿を龍燭に爭ふが若きに至る。其の品類を標し厥の師宗を顯はさざること莫し。玉石旣に分ち玄黃已に判ず。西域に翰を染むるもの乃ち數家あるも、實を考へ微を析するに此れ精詣たり。若し本末を含通すれば六千偈有り。梵文は此の如し、翻ずれば則ち之を減ず。[22]我が皇帝は神道[23]義農より邁れ、陶鑄[24]造化に侔し。[25]六合を一にして[26]三才を貫き、[27]四生を攝して[28]十善を弘め、本を崇びて末を息め、無爲太平、母を守りて子を存し、不言にして治む。偏へに復た心を釋典に留め、遐かに至眞を想ふ。以爲へらく、聖敎東流して年數百に淹しきも而も億象の負ふ所、闕くる者猶多しと。未だ聞かざるを聞かんと希ひ寤寐に勞す。

中天竺國の三藏法師波頗蜜多羅は唐に明友と言ふ。學は[29]半滿を兼ね博く群詮を綜べ、我を喪ひ神を怡ばし、玄を搜り性を養ひ、遊方念に在り、物を利するを懷となす。故に能く筏に附して身を傳け、烟を擧げて召件す。冰霜を冒して[30]蔥嶺を越へ、風熱を犯して沙河を渡り、時五年を積み塗四萬を經、大唐貞觀元年歲[31]娵訾に次るの十一月二十日を以て、梵文を頂戴して京輦に至止す。昔秦[32]童壽を徵して苦めて戎兵を用ゐ、漢は[33]摩騰を請ひて遠く蕃使を勞ら

【八】敎學者といふ義なり。
【九】深經。大乘經典をさす。本國譯中觀部一、註八參照。
【一〇】獨尊の懸記。「如來滅後南天竺に龍樹と名づくる大德出現して、能く有無の見を破し、大乘無上の法を顯はし、初歡喜地を證得して、安樂國に往生せん。」といふ入楞伽經に於ける釋尊の豫言。
【一一】閻浮。須彌（Sumeru）四州の一なる閻浮提（Jambu-dvīpa）にして、須彌山の南方に位するといふ吾人所住の世界、諸佛は唯この州にのみに出現し給ふといはる。
【一二】其地越初依、功超伏位。龍樹菩薩の解行を讃歎せし文にして、すでに歡喜地を證得せる地上の菩薩なることを示す。
【一三】一實。一如實根の義にして、中道實相に同じ。
【一四】二能。智慧（自覺）と慈悲（覺他）との二功能をいふ。
【一五】兩印。眞俗二諦の義。
【一六】三空。我空・法空・俱空（我法に對する執著を離るゝと同時に、その無執著をも離れ、執著無執著ともに亡びて、初めて諸法の本性に契ひたるをいふ）をさす。
【一七】點塵劫數。劫は劫波（Kalpa）にして長時と翻ず。無限の時間の意。
【一八】分別明菩薩。清辨菩薩のこと。
【一九】眞言。こゝにては通常所謂呪（Mantra）卽ち祕密語の義にあらずして、單に眞實語の意なり。龍樹菩薩の敎說をさす。
【二〇】如意珠。如意寶珠（Cinta maṇi）ともいひ、意のまゝに種々の珍寶を出す寶珠なるが故に此の名あり。密敎にては大悲福德圓滿の標示とす。

般若燈論序（釋慧賾[一]述）

般若燈論は一に中論と名づく。本と五百偈あり。龍樹菩薩の所作なり。燈を借つて名となすは、[二]無分別智に寂照の功あればなり。中を擧げて目を標するは、[三]緣觀等しく二邊を離るるなり。然れば則ち燈は本と[四]無心智なり。鑑亡じて照を亡ずれば法性平等、中義斯に在り。故に論に寄せて以て之を明す。若し夫れ滯旨を尋詮し、俗に執し眞に迷ひ、[五]斷常の間に顚沛し、有無の內に造次し、名を守り實を喪ひ、葉に攀ぢて根を亡るる者は豈に爾るを欲せんや。蓋し由有るなり。請ふ試みに之を陳べよ。若し乃ち分別の因を構ふれば虛妄の果を招き、惑業其の內識に熏じ、惡友其の外緣を結び、慢をして崇山より峻く滄海より深からしむるを致し、恚火觸れ難く、詞鋒罕れに當る。有を說くを聞いて心を快ばし、空を談ずるを聞いて謗を起す。[六]六種に偏執して各々偏に非ずと謂ひ、[七]五百の論師爭ひて異論を興し、或は邪を將て正を亂し、或は僞を以て眞に齊しうし、識りて悟に似るも翻つて迷ひ、敎へて通ずと雖も更に壅ぐ。珠を捐てて石を翫び、寶を棄てて薪を負ひ、畫を觀て龍を怖れ、跡を尋ねて象を怯ると謂ふべし。愛好すること此の如きは、良に悲しむべし。

夫れ龍樹菩薩は世を救ひ生を挺す。[八]嗜欲を訶して發心し、[九]深經を閱して自ら鄙うし、[一〇]獨尊の懸記を蒙り、法炬を[一一]閻浮に燃やす。且つ[一二]其の地は初依を越へ、功は、伏位を越へ、既に[一三]一實を窮め且つ[一四]二能を究め、[一五]兩印を佩びて百

【一】慧賾。陳宣帝大建十二年（西曆五八〇年）荊州江陵に生る。早悟非凡。九歲の時隱法師に從うて出家し、初め涅槃法華を學び、後三論を聽きて、いづれも理義に通曉す。隋の開皇中期江陵寺に住し、年少の身を以て大いに法筵を張り、道俗に推尊せらる。その名聲を聞きし荊州刺史宜龍公元壽の奏上に依つて、遂に詔を被りて京輦に入り、清禪寺に住して經理を講授す。時に隋末帝都の騷擾を避けて、終南山の高冠嶺に移りしも、唐運勃興するや、再び京輦に還りて講誦に精進す。道を求むる者雲集す。貞觀の譯場に參じて執筆綴文の任に當り、帛百疋衣服一具を下賜さる。貞觀十年（西曆六三六年）四月六日五十七歲入寂。（唐高僧傳卷三、慧賾傳參照）

【二】無分別智。諸の推求推察等の分別作用を離れ、任運に諸法の實性に冥合する平等智をいふ。

【三】緣觀等離二邊。外緣も內觀も共に有無の相對的偏見を捨離すること。

【四】無心智。分別慮知の心作用を滅盡したる寂靜平等の無漏智をいふ。

【五】顚沛斷常之間、造次亦無之內。顚沛は傾覆流離の際、造次は急遽苟且の時を意味するが故に、處として斷常の二見に囚はれざるべく、時として有無の二邊に執せざるはなしとの義なり。

【六】六種偏執。作者の眞意を把握すること困難なり。或は貪・瞋・痴・慢・疑・惡見の六種の根本煩惱に囚はるゝことゝも解し得べく、或は自性・外（外境）・內（內心）・相（外相）・麤重（煩惱）・作意（特に外道に從ふこと）に執ずることに依つて生ずる六種散亂の義とも釋し得べく、或は六師外道の說に著することゝも考へらる。

【七】五百論師。五百は單に大數を示す。多くの佛

譯の中論から引用して原典を布衍した場合も二三に止らない。かやうに漢譯された本論が、翻譯の亂雜拙劣のため、尠なからず其の學術的價値を削減せられたことは、本論のためには遺憾の極みであり、本論主に對しては同情の念に堪へない。殊に玄奘三藏に依つて完全に翻譯せられた本論主の他の著書たる大乘掌珍論を見れば、一層この感に打たれざるを得ない。

然らば、如何なる理由で本論漢譯がかくも不完全不統一なものとなつたのであらうか。これは何と言つても譯主波羅頗迦羅蜜多羅三藏がその責任の大部分を負はねばならないのである。三藏はその傳記に於ては「博通內外、研精大小」と傳へられてゐるけれ共、元來戒賢論師に諮受した瑜伽派の學者であつて、中觀の學匠ではなかつた上に、本論の翻譯に着手したのが六十四歲の老境に入つてからであり、而して之を譯了したのが其の歿する約半年前即ち貞觀六年十月であつたから、老衰後の不得意の仕事に對しては自然の人情として興味熱誠を持ち得ず、自らは只原典を誦出したるに止り、その他の仕事は總て之を傳譯者・證義者・潤文者などに一任して顧みなかつたのであらう。かやうに譯主が譯場の統制に努めなかつた結果、翻譯の分擔者は各々その欲するまゝに譯出し、證義し潤文して、一見別人の翻譯と想はれるほど譯語の不統一を來し、誤譯拙譯脫落挿入などの遺憾なことが生じたのであらう。故にこの譯場に參與した者は總てその責任を免れることの出來ないのは勿論である。併しながら、假令不完全なりとはいへ、本論の漢譯が成就されて、現代に傳へられたことは佛教學界のため衷心慶賀すべきことであつて、譯主を始めとして譯場參列者の勞に對して滿腔の謝意を捧げねばならぬ。

昭和五年七月廿日

譯者　羽溪了諦　識

【一九】人能降伏心　利益於衆生
是名爲慈善　得二世果報。
羅什譯に於ては右の第四句が「二世果報種」となれるのみにて他は全同なり。

【二〇】若有若無染　染者亦同過

【二一】染者先有染　離染者染成。

【二二】住異住來住　此義則不然
處處緣起法　不卽是彼緣
亦不異彼緣　不常亦不斷。

【二三】婆伽婆說彼　虛妄劫奪法。

【二四】本國譯觀六界品第五註二九・三〇、觀有爲相品第七註二五・五三・五四、觀生死品第十一註三、觀法品第十八註三二、觀如來品第二十二註一八、觀邪見品第二十七註一參照。

【二五】本國譯觀有爲相品第七註二四、觀苦品第十二註一、觀涅槃品第二十五註三二參照。

觀成壞品第二十一の第二偈第三句も亦誤譯である。觀顚倒品第二十三に於ける第二偈第三句・第三偈後半二句・第五偈前半二句及び第十一偈は梵文並に羅什譯と異り、原典の相違か若しくは誤解かであるに違ひない。またその第十三偈の前半二句は直前の長行に接續すべき結語であり、その後半二句は觀法品第六偈の後半を別譯したものであつて、本來こゝに在るべき本頌ではなく、その第十四偈は梵文及び羅什譯の第十三第十四兩偈を、その第十七偈は梵文及び羅什譯の第十七第十八兩偈を夫々綜合したやうな偈であり、その第十九偈と第二十偈との第四句は梵文及び羅什譯に徵すれば共に明かに誤譯であり、その第二十二偈の次には他本では之と對句をなす一偈が置かれてゐるけれ共、本譯では全く之を缺いてゐる。觀聖諦品第二十四の第三偈第四句は梵文並に羅什譯では住果者（Phalastha 得果者）と共に向果者（Pratipannaka）をも否定してゐるが、本譯では前者のみを否定してをり、その第四偈と第十一偈との前半及び第二十一偈の第四句は誤譯であること疑ひなく、その第二十二偈の次に羅什譯第二十六偈がそのまゝ引用され、しかも梵文及び羅什譯の第二十七第二十八兩偈は省略されてをり、またその第三十九偈は慥かに誤譯である。最後の觀邪見品第二十七に於ては梵文及び羅什譯の第六偈に相當する本頌が脫落してゐる。

以上大體指摘した所に依つて、本論漢譯の本頌が如何に亂雜であるかを知り得るであらう。併しながら、梵文及び羅什譯とその意味を異にする本漢譯の本頌が悉く誤譯であると速斷してはならない。前に注意したものゝ他、觀去來品第二第十八偈の後半二句、觀聖諦品第二十四の第七偈・第十三偈・第十七偈・第二十七偈・第四十偈及び觀邪見品第二十七の第十一偈・第二十七偈の如きは、梵文並に羅什譯のそれ等と義に於て異るものであるけれ共、それは原典の相違か若しくは解釋の相違と觀るのが妥當であらう。また本漢譯の本頌註釋に於て、觀去來品第二の第二十二偈及び觀如來品第二十二の第九偈の釋文の如きは明かに誤解であるけれ共觀緣品第一の第十四偈の釋文の如く著者獨特の見解を發表したものもないではない。この點に於て、本漢譯の本頌は一方に於て多くの缺點を持つてゐるに拘らず、中論本頌の研究上棄て難い學的價値を具へてゐるのである。

本漢譯を西藏譯に對照すれば、その他幾多の缺點が暴露される。即ち[二四]同一引用文が再三引用された度每に一見異つた引用文と想はれるやうな文體言詮を以て譯出された場合が尠くなく、西藏譯に徵して原典にあるべき筈の部分が本漢譯には屢々脫落してをり、また[二五]炳かに羅什

せられて、提婆偈の直前の長行中にその意義が挿入せられてゐる。觀六界品第五の第一偈中前半二句は他本に照して明かに誤譯であり、その第四偈は前半に相當する二句を缺き、その第五偈の次偈は恰も本頌のやうに配列せられてゐるけれ共、その前半二句は觀五陰品第一偈の前半に相當し、その後半二句は本品第六偈の前半の異譯であつて、本來こゝに位すべき中論本頌でなく、前説を要約せる一種の釋偈であり、その第七偈の次に揭げられてゐる「先地等無有、微毫相可得、」といふ二句一偈は本品第一偈の前半に「虛空より前には毫末の虛空相無く」と言つてあるのに倣うて、同樣のことを地大に就いて立言した釋偈であつて、これ亦本頌ではない。觀染染者品第六の第一偈の後半二句「因染得染者、染者染不然、」は「彼の染者に緣りて染生じ、染者有るによりて染生ずべし。」といふ意味の誤譯であり、その第二偈の第一句は梵文及び羅什譯に從へば「染者先無故」と譯さるべきに拘らず、却つてそれと反對に「染者先有故」と譯されてゐるのは、本譯の原典に於て Sa ti の前に略符を脫落せるか若しくはそれを看落した爲であり、その第二偈の次に本頌の如く配置せられてゐる[二〇]一偈の前半二句は第二偈の後半であつて、梵文及び羅什譯によく一致してゐるが、その後半二句は釋偈であつて本頌でないものが附加されたのである。觀有爲相品第七には梵文第十六偈（羅什譯第十七偈）に相當する本頌を缺いてゐるが、西藏譯では之に相當する偈文もその釋文も飜出せられてをり、またその[二一]第二十一偈の後半は梵文及び羅什譯に照せば「自己によつて(tayai)」といふ語が全く省略せられてゐる。觀作者業品第八の第九第十兩偈は梵文及び羅什譯に對して著しくその意味を異にしてゐるから、多分誤解であらう。觀薪火品第十の第四偈の後半二句はその意義梵文及び羅什譯と相反し、その第十第十一兩偈の後半二句はその意味不當であるから、おそらく誤解であらう。觀苦品第十二の第二偈の次に本頌の如く擧げられてゐる[二二]一偈は觀法品の第十偈とほゞ同義であつて、他本には絕えて無いものである。觀行品第十三の第一偈の[二三]前半二句は「外人の偈」として引用せられてゐるけれ共、これは慥に中論本頌であつて、批評せんとする相手の立場を示した偈に他ならない。觀法品第十八の第十一偈の次に論偈として揭げられてゐる一偈は釋偈を看誤つたものであつて、他本の本頌中には見當らない。觀時品第十九の第三偈の後半二句及び第五偈の第三句は誤譯であり、觀因果和合品第二十の第十四偈は全くその意味を解することが出來ない。原典の相違であるかも知れないけれ共、多分誤譯であらう。

を引證し、更に中論諸品の説を引用してゐるが、西藏譯では只梵天所問經よりの引證文のみを以て本品を終つてをり、しかも本漢譯に引用されてゐる中論諸品、即ち觀行品・觀苦品・觀本住品・觀作作者品・觀三相品・觀去來品・觀有爲品等の文はいづれも羅什譯中論から取り來つたものであり、尙また無上依經の説として引用せる文は本漢譯釋觀緣品の釋文であり、寶勝經の偈として引用せる文は羅什譯中論觀縛解品の末文に相當する。以上指摘した所に依つて觀ても、本論漢譯が如何に蕪雜なものであるかゞ推測されるであらう。

次に本論漢譯の本頌中にも拙譯・誤解若しくは脫落・附加と認むべきものが尠くない。觀緣第一の第三偈は甚だ拙譯であつて、梵文と對照して辛うじて判讀し得る程度のものであり、その第六偈はその前偈と合せて他本の本頌第五偈（羅什譯は第四偈）の前半に相當し、しかも羅什譯の後半の意味は後の長行中に沒入されてゐる。またその第八偈は羅什譯第八偈の四句を二句に要約したものであり、しかも羅什譯第七偈に相當する部分はこれまた長行中に混入し、その第十五偈は梵文及び羅什譯の第十六偈の第二句と第四句とに相當する文を譯出せるのみであつて、他は脫落してゐる。觀去來品第二の第二偈は梵文及び羅什譯の第二偈の後半二句のみを譯出したものであつて、その前半は直前の長行中に沒入し、その第六偈の釋文中、論者の偈として「離去者無去」といふ一句が擧げられてゐるが、これは本品第六偈の後半二句を換言せるものであつて、西藏譯では長行中の一句となつてゐるのであるから、これは本來長行中にあつた一句を本頌と看誤つたものであり、その第十偈の二句一偈は直前の長行の結論の如き形式內容を具へてゐる釋偈であつて、梵文及び羅什譯には之を缺きその第十五偈は西藏譯では第十四偈の註釋となつてゐるから、これは明かに釋文を本頌と誤解したものであり、その第十七偈の後半二句「去者去空故、去住不可得、」は梵文及び羅什譯に徵してみれば、「去を離れて去者は不可得なるが故に。」といふ意義を誤譯したものであり、その第十八偈の前半二句「去時則無住、無彼已去故、」も亦「去時と已去と未去とより離れて、去の住することなし。」の誤譯であり、その第二十五偈は梵文の第二十四偈と第二十五偈の前半との六句を四句に要約したものであり、その第二十六偈の後半二句は譯者の布衍であつて、絕えて他本に無いものである。觀五陰品の第八偈は提婆菩薩の四百觀論弟子敎誨品第八の第十六偈に相當するものであるにも拘らず、本頌として引用せられ、しかも梵文及び羅什譯の第八第九兩偈は省略

【一七】瑜伽派の立場よりいへば、「假の境界を緣ずる」は偏計所執性にして、「實の境界を緣ずる」は依他・圓成の二性なれども、淸辨論師の立場は之と異る。論師の二諦說を見よ。

【一八】世俗諦は世間の習慣的眞理、勝義諦は第一義諦若しくは眞諦ともいひ、最高の意味の眞理といふ義なり。

五、本論の漢譯に就いて

すでに一言したやうに、本論漢譯の蕪雜拙劣なことは實に言語道斷といふべきであつて、多くの漢譯佛典中その比類を見ないほどである。譯語の不統一、誤譯、拙譯、譯者任意の刪除挿入など枚擧に遑のないほどの亂暴さであるが、一々本國譯の註に指摘して置いた。その多くは密教研究第三十三號及び第三十五號に連載せられた月輪賢隆氏の論文「漢譯般若燈論の一考察」を依用したのであるから、茲に重ねて同氏の研究に對して謝意を表する。

本論漢譯の缺點は各品を通じて頻々認め得るのであるが、就中最も著しく其の缺點の目立つものは釋觀業品第十七であるから、本品に於ける缺點を摘發して、以て本論漢譯の蕪雜拙劣なことを例證しよう。先づ本品第十一偈の釋文は全く靑目釋の羅什譯中論をそのまゝ襲用したものであつて、殊に第十一偈の次に揭げられてゐる[一九]偈文は羅什譯中論本品第一偈の第四句を少しく改めたばかりで他の三句は羅什譯そのまゝであるから、かゝる偈が原本になかつたことは明かであつて、多分偈前の長行と共に潤文家の附加したものであらう。次にその第十三偈が阿含經中の偈とせられてゐるけれ共、實は中論本頌である。またその第十五偈の釋文中にある目犍連(Maudgalyāyanī)と離婆多(Revata)とに關する記事は西藏譯に無い所であるから、原本を異にしたとも考へ得られるけれ共、多分漢譯者の添附に係るものであらう。またその第二十六偈の釋文中には後に來る觀顚倒品第二十三を指して先きの觀煩惱品といふやうな錯誤を敢てし、またその第二十八偈の釋文中にある「云何爲名、名謂衆生、」といふ一句は何故こゝに置かれたのであるか、全く不明であつて、冗句としか想はれない。またその第三十一偈の第二句とその次偈の第一句とに化佛身と譯されてをる言葉は、梵本及び羅什譯に照してみると單に化人と翻ぜらるべきものを誤つたのであることが判る。またその第三十三偈の釋文中に經中の偈として引用せる「有體既不成、無體亦不成、」といふ二句は明かに觀有無品第十五に於ける第五偈の前半を異譯したものであり、次にまた經偈として引用せる「有者是常見、無者是斷見、是故有及無、智者不應依、」といふ四句は觀有無品第十偈の別譯に他ならない。また本品の最後には梵王所問經の說

若し爾らば、譬ふれば人ありて瀉藥を服し已りて便を瀉し、乃ち他に語りて「是れ天我れを瀉す」と言ひて、「藥が瀉す」と言はざるが如く、汝も亦是の如し。無常の法は一切時中に能く法體を壞す。而も壞品の來るを待つと言ふは、是の事然らず。若し壞因を得て無常始めて能く法體を壞すれば、但是れ壞因能く法體を壞するのみ。何ぞ復無常能く壞すと言ふことを得ん。今外人に問はん、法體は是れ壞性にして、壞因來つて壞することを得となすや、非壞性にして壞因來つて壞することを得となすや。此の法體が若し是れ壞性にして、壞因來つて壞することを得と言ふは然らず。何が故に然らざるや。法體の起る時、無間に即ち壞す。また起れば便ち滅し、第二の刹那に到らず。云何んか壞因の來るを待ちて壞することを得ん。若し法の自體が非壞ならば、譬ふれば涅槃の如く、また彼の壞因來つて壞するを待たず。また次に壞には因有ることなし。壞は無因なるが故に、法は則ち壞せず。譬ふれば無爲の如し。此の驗を以ての故に、彼の「壞因」を破す。彼の因既に破すれば、即ち法體を破す。是れ汝の立義の過なり。且く成壞の二法が前後にして有るは然らず。

「壞を離れて成無き」を釋し已りぬ。

終りに論師の立言が如何に嚴正に宗・因・喩の形式を整へたものであるかを例證して本節を結ばう。掌珍論の主題偈に曰ふ。

　眞性には有爲は空なり、
　幻の如し、緣生なるが故に。
　無爲は實有ること無し、
　不起なればなり、空華に似たり。

前二句は有爲の空を立言し、後の二句は無爲の空を立言したものであつて、夫々宗・因・喩の形式を整へた立量である。即ち有爲空を立言した前二句中「眞性(勝義諦)には有爲は空なり」は宗を示し、「幻の如し」は喩、「緣生なるが故に」は因をさし、無爲空を立言した後の二句中「無爲は實有ることなし」は宗を示し、「不起なればなり」は因に當り、「空華に似たり」は喩を擧げたのである。

これは單に最も標範的な一例を揭げたに過ぎないが、淸辨論師の立言にはすべてかやうに整然たる論證的形式を具へてゐる。論理の發達した當時に於ては、かやうに立量的形式を整へることは敢て珍とするに足らないかも知れないけれ共、その運用の圓熟巧妙な點に於て異彩を放つてゐると謂つて差支あるまい。

【三五】轉依(āçrayasya parāvṛitti 梵文唯識三十頌所出)。「所依の轉廻」の義なり。所依は根柢の義にして、阿賴耶識(ālaya-vijñāna)と解する說と、偏計・依他・圓性の三性と解する說とあり。それ等は何れも識界の根柢を爲せばなり。而してその所依を轉廻するとき識界は轉じて智を成就するものとせらる。

【三六】異熟識は阿賴耶識をさす。

題に限られてゐるのであつて、「若し他作を許せば、一切處に一切の起る過失あり。」との解釋に對して、若しかゝる過失を說かば、所成と能成とが顚倒するといふ非難がその一、「無因にして物體生ぜず、何となれば若し無因ならば、一切處に常に一切の物起るべきが故に。」といふ見解に對して、前と同じく此の語義に能成と所成との顚倒ありといふ非難がその二、外人が體の起ありとする主張を遮せんが爲に佛護論師が「作は緣中に無し。何となれば已生と未生と生時とに識に作あるは是れまた然らず。」といふ偈を引いて反駁したのに對して、前後の二語の不相應と唯立義あるのみで因・喩を缺くといふ非難がその三、「自他の衆緣因待するが故に、世諦中に於て作あり。」といふ解釋に對して、前と同じく唯立義のみあつて因緣と譬喩とを缺くといふ非難がその四——之等四種の論難に過ぎないのであるが、論師は本論に於て外道小乘各派を始めとして大乘の敎說をも抑貶したにも拘らず、特に個人の名を擧げて、あからさまに其の學說を非難したものは只佛護論師一人のみであつた所から看ると、論師が佛護疏に對抗意志を懐いてゐたことは否定することが出來ない。かゝる事情から、佛護系統の中觀學徒の憤慨する所となり、故意に論師の所說が曲解され非難さるゝに至つたのであらう。こゝに於て本論は啻に瑜伽派に對して部執を發揮し、瑜伽・中觀兩派の抗爭をして愈々旺ならしめたばかりでなく、同じ中觀派內に於ても佛護學系に對して異學系を樹つる素因を作り、これが爲後に至つてプラーサンギカ派とスヷータントリカ派との對峙を見るやうになつたのであるから、本論は印度大乘敎學史上實に重要な地位を占めるものと謂はねばならぬ。

最後に本論の特色として認め得ることは、その論理の運用が極めて整然としてゐることである。勿論、論鋒の鋭利巧妙なことは龍樹菩薩以來中觀學匠を一貫せる特徵であるが、特に淸辨論師は如何なる場合に於ても宗・因・喩の形式を具備せる立量を嚴守し、若し相手の立義に因緣・譬喩を缺く場合には悉く之を否認してゐる。先きに揭げた佛護論師の立義を批評するに當つても、二回まで因喩を缺く理由で、その不成立を宣言してゐる。その他かゝる例は枚擧に遑がない。從つて論師は自らの立義に對しては必ず因喩の立量的形式を整へ、殊に譬喩に力を注いだやうである。今本論に於ける巧妙な譬喩の一例を擧げよう。釋成壞品第二十一の第四偈の釋文中、正量部が「法は無常なりと雖も、壞因來つて法體卽ち壞することを得。」と主張するに對して、論師は次のやうに論駁した。

この所說に依つて明かであるやうに、論師は自性の有無に關しても世俗諦と勝義諦との二種の立場から截然區分したのである。かやうに二諦說に就いて論師は中觀派の傳承的見解に拠き、また瑜伽派の賴耶緣起論の法相を用ゐたけれ共、その根本的立場に於ては飽くまで中觀派の正統思想を固持してゐたのであつて、掌珍論卷下に於て論師が「云何んが迷ひて相應師(瑜伽學徒)の義を成ぜん。」と言つてゐることに依つても、その立場を窺知することが出來る。

然るに、論師が所謂プラーサンギカ派の中觀學徒からスヷータントラ主義に立脚して、一切諸法は常住なる自らの本性實體によつて存在するといふやうな異解を主張したと非難せられたのは何故であらうか。實際論師の著書を通じてかゝる見解は絕えて現はれてゐないのであつて、却つて之に反する解釋が頻々と示されてゐるのである。例せば、本論序偈の釋文に於て、有部が汝論初に「不起滅」等といふは是れ無爲法であつて、之が自部の立場でいふ緣起とは別の意味であることを示して、「別の緣起」といふは不當である、不起は無爲を意味し、「無爲緣起」の考は自部にもあると反駁したのに對して、論師は「自性を遮するが故に不起等と說く。」といひ、不起は無爲を意味せずして、自性を遮することを意味すると答へ、また掌珍論卷下に於ては「一切の有爲無爲の自性は能く若しは心・若しは慧の、若しは有分別・若しは無分別の境界の自性と爲るもの有ること無し。是の如くに知り已れば、明慧の月光能く一切愚癡の黑暗を除かん。」と說いてゐる。これ等の論議に徵しても、論師が一切諸法の常住なる自性の實在を認めたといふ非難の不當なることが明瞭である。惟ふに、かゝる非難者は論師の思想體系の基礎をなした二諦の立場を正當に理解せず、論師が世諦の立場から自性ありと認めた言論を誤解したのであらう。前揭の引文に於ても明かであるやうに、また本論釋觀如來品第二十二の最初にも「若し世諦に依止すれば、智の諸體と及び如來とは自性あり。」と說いてあるやうに、論師が自性の存在を許す場合には必ず豫めそれが世諦の立場からであることが斷つてある。故に若し論師の所說を精讀すれば、かゝる誤解の起るべき筈がない譯である。仍つて惟ふに、これは單なる誤解から出た非難ではなく、他に何等かの有力な理由がなければならぬ。それは論師が本論に於て主として瑜伽派の學匠安慧論師の中觀釋論を繼紹したばかりでなく、同一中觀派の佛護論師の說を論駁した爲、佛護系統の學徒の反感を買つたからであるに違ひない。固より佛護論師の說に對する論難はいづれも極めて些細な問

のであるが、是れ全く瑜伽唯識派の賴耶緣起說に影響せられた爲であつたことは疑を容れない。

清辨論師は一切の認識に就て世諦の立場と第一義諦の立場とを劃然區別し、しかもそれらを關係づけた點に於て其の思想的特色を發揮したのである。本論序偈の釋文中、「緣起不起」の命題に就いて、若し緣起といはゞ不起とはいへず、若し不起といはゞ緣起とはいへないから、「緣起不起」とは自語相違であり、若しかゝる命題が眞ならば「一切の言語は皆妄なり」とはいはれず、一切の言語皆妄ならば、かゝる命題も成立せないといふ難問に對して、論師は「若し一切の緣起が皆不起といふならば、この過失あらんも、我は未だ曾て一切の緣起皆かく不起とは說かず、却つて世諦に於ては緣起ありと說く。世諦に於ては緣起生滅あるも、第一義諦に於ては不起不滅なり。」と解答してゐる。これ世諦と第一義諦とを峻別する立場を示したものであつて、この立場は論師のあらゆる論議を一貫せる思想體系の基礎であると謂つて可い。なほ掌珍論卷下に於ける左の一節を見れば、この立場が一層明瞭となるであらう。

若し因緣力所生の眼等を一切世間に共に實有と許すは、是れ諸の愚夫の覺慧の所行なり。世俗には有自性に似て顯現するも、勝義諦の覺慧を以て尋求すれば、猶し幻士の如く都て實性なし。是の故に說いて「彼れに由るが故に空にして、彼は實に是れ無なり。」と言ふ。常邊に墮するの過を遮せんと欲するが爲の故なり。常邊に墮するの過を棄捨せんが爲に彼を說いて無となすが如くに、亦斷邊に墮するの過を棄捨せんが爲に此れを說いて有となすなり。謂く、因緣力所生の眼等は世諦に攝すれば、自性是れ有なり。空華の全く物有ること無きに同じからず。但眞性に就いて之を說いて空となすのみ。是の故に「此れに依るが故に空にして、此れは實に是れ有なり。」と言ふ。是の如く空性は是れ天人師の如實の所說なり。若し此の義に就いて依他起自性は是れ有なりと說かば則ち善說となす。是の如き自性は我れも亦許すが故なり。世間に隨順する言說の所攝にして福德と智慧との二の資料なるが故なり。世俗假立の所依は有なるが故に假法も亦有なり。……若し衆緣力所生の一切の依他起が勝義諦に就いて自性有らば、幻士に應に實士の自性有るべし。若し他性有るも亦理に應ぜず。牛上に應に驢性有るべからざるが故なり。……諸の緣より生ずるものは皆共に世俗には有性なることを了知す。若し定んで勝義諦に有なりと執ずるもの有らば、應に此の義を以て彼の宗を遮破すべし。

唯是れ一切分別の永滅なり。實有性に非ず、非有を離るゝに非ず。實性眞如は[15]轉依を相と爲して法身成就す。空を觀ずる眞對治道を得るに由つて、一切の分別と偏計所執の種子の所依なる[16]異熟識中の分別等の種は餘り無く永斷す。因緣無きが故に畢竟じて生ぜず。本性は無生にして、本性は常住なり。是れを如來の轉依の法身と名づく。」と。この眞如實有說に對する清辨論師の批評を一讀して、直ちに吾人の氣付くことは、その論調が瑜伽派の教說に影響されてゐることである。即ちその所說の終りに於て、瑜伽派の中心思想たる賴耶緣起說に於ける偏計所執性(Parikalpita-svabhāva)依他起性(Paratantra-svabhāva)圓成實性(Parinispanna-svabhāva) の三性說と、また賴耶緣起論に於て 阿賴耶識 (Ālaya-vijñāna)を以て種子を包藏する識體となす說とをそのまゝ採用して立論してゐる。蓋しこれは護法論師の賴耶緣起論に拮抗し、之を批評せんが爲の對策であつて、勢止むを得ないことゝ謂はねばならぬ。從つて般若燈論に於ても賴耶緣起論の法相論が屢々現はれてをるのであつて、即ちその釋觀法品第十八の第一偈釋文中に於て、「假設の聲あり、實體を召すの聲あり。智もまた是の如し。[17]假の境界を緣ずるあり。實の境界を緣ずるありて、我が佛法の義は成ずることを得。」と說いてゐる如きは其の一例である。

かゝる對瑜伽派策的立場から、清辨論師の學說中には從來の中觀派學匠のそれと趣を異にした見解が現はれるやうになつた。それは即ち[18]世俗諦(Lokavyavasaṁhāra-satyam)と勝義諦(Paramartha-satyam) とに關する見解である。大體龍樹菩薩以來の中觀學徒が繼述した、眞俗二諦は專ら約教的立場から施設せられたものであつて、衆生の差別的相對的偏執を打破して無所得中道を體驗せしめん爲の說法化導の方法形式に他ならなかつたのである。從つて眞諦(第一義諦)といつても所證の眞理を意味するものではなく、眞理そのものは空有眞俗の相對的觀念を超絕せる無所得の實相であるとしたのであるが、清辨論師に至つて之が約理的意味に解釋せられるやうになり、世俗諦は有の境、第一義諦は空の境であつて、二諦は二種の理を指すものと觀られたのである。是れ蓋し賴耶緣起論に於て偏計・依他・圓成の三性中偏計所執性を空として、之を俗諦に攝し、他の二性を有として、之を眞諦と名づけたのに對應せんが爲であつて、清辨論師は一往その三性說を採用して、偏計・依他の二性は空有の二相を分別するを以て、之を有の俗諦とし、圓成實性こそ空不可得なる眞諦の理と看做したのである。中觀派に於ける二諦說は清辨論師に至つて一轉化を來した

慧頴の撰述した本論序文の結尾に、本土には青目註解の中論四巻があつたけれ共、部執を示さないため學者これに昧かつたが、今や本論現れて初めて明鏡となすことが出來るといふことの記されゐるのは、全くその部執的特色を明言したものと謂つて可からう。

當時瑜伽唯識派がその派の大德護法論師の活動によつて那爛陀寺を中心として隆盛に赴いたから、中觀派の清辨論師は之に對抗して、自派の眞理を宣揚する必要に逼られたのである。故に本論に於ては「內部の人」若しくは「十七地論者」の說として瑜伽派の主張を引用して之を抑貶したのである。殊に論師の他の著書たる大乘掌珍論に於ては頻りに瑜伽派の說が破せられてゐるが、就中その眞如實有說が最も力强く再三論難せられてゐる。今その一例を擧ぐれば、相應論師(Yogācārya)即ち瑜伽學徒が「勝義(第一義諦即ち眞諦)上に於て更に勝義なし。眞如は即ち是れ諸法の勝義なり。故に勝義に就いて眞如は空なりと說かば、此の言は理に稱ふ。而も眞如は實有に非ずと言ふは、此れ理に稱はず。云何んぞ。出世の無分別智と及び此の後得清淨世智とが無爲の境を緣ずるは、是れ正理に應ずればなり。」と說き、眞如の實有を主張するに對して、清辨論師は難じていふ、「實に理に應ぜず。世智が無爲の境を緣ずと說くは正理に應ぜざる如く、是の如く此の智(出世無分別智)が有爲の境を緣ずるも亦理に應ぜず。眞如の實有を執ずるは理に應ずるに非ず。此の實有性は成立し難きが故なり。眞如を緣ずるの智は眞の出世無分別智に非ず。所緣あるが故に、及び有爲なるが故なり。世緣の智の如し。是の故に經に言はく、……此等の諸の契經には、應に此の無分別智は是れ能く現觀して及び眞如を緣ずと許すべからず。又彼の眞如は眞の勝義に非ず。是れ所緣なるが故なり。猶し色等の如し。又汝の所說の「勝義上に於て更に勝義無し」とは、是の如き等の言は、若し「此の上に於て空無きを此の故に說いて名づけて空と爲す」といはゞ、諸の衣絹の上に更に衣絹無きは牧羊人等も亦共に了知す。彼も亦應に眞理を見る者と名づくべし。又諸の惡見を對治せんが爲の故に是の如き空を說く。勝義上に於て更に勝義ありとの此の類の惡見は曾て未だ有らざるが故に、應に彼を遮して是の如き空を說くべからず。又彼の眞如は實有性に非ず。前說の如き比量の理に違するが故なり。如來は生死と及び涅槃とを見ずと說き、已に正しく顚倒より起る所の煩惱有るに非ず。本性畢竟は無生を自性とすと了知せるが如く、是の如く正しく本性畢竟を知らば、是れ正知に非ず、不正知に非ず。此の聖教に由つて應に知るべし。眞如は

等は銓定に參助し、右光祿大夫太府卿蕭璟の監護の下に翌年四月に至つて、寶星陀羅尼經(大集寶幢分)十卷(或は八卷)を譯了し、後勝光寺に移つて前述した般若燈論十五卷とこれと同時に着手して同七年春に至つて完了した大乘莊嚴經論十三卷(或は十五卷)を出した。以上三藏が四年間に傳譯した三部三十八卷が上聞に達するや、太宗勅を下して各十部を書寫して海内に散流せしめ、三藏を始めとして譯場に參與した者に恩賞を下賜せられた。

その後太子不例、諸の治療法が試みられたけれ共、いづれも無効に終つたから、勅を下して三藏を宮中に請入すること一百餘日、その間三藏は忠實に帝旨を奉じて看病に努めた爲、太子の病患漸く平癒するに至つて、宮中を辭して勝光寺に還つたのであるが、この時も綾帛等六十段及び時服十具を下賜せられた。

三藏は躬ら印度より齎らし來つた梵本を盡く譯出せんと欲したのであるが、其の後勅命が下らなかつた爲、本志を果し得ない失望のあまり病を起し、遂に貞觀七年(西暦六三三年)四月六日勝光寺に於て示寂した。享年六十七歲。

以上略說した波羅頗迦羅蜜多羅三藏の事蹟に徴して知り得る如く、三藏は本來中觀派系統の學者ではなく、那爛陀寺に於て戒賢論師に諮受して瑜伽師地論を學修したのであるから、寧ろ瑜伽派系統の學匠であつたと謂はねばならぬ。三藏が瑜伽派の開祖無著菩薩の撰述に係る大乘莊嚴經論を傳譯したことに依つても、その學系を窺知することが出來る。故に三藏が中觀派の驍將淸辨論師の著たる般若燈論を翻譯したといふことは、三藏に取つて專門違ひの不得手な仕事であつたに違ひない。後に述べるであらうやうに、その譯本が極めて蕪雜拙劣なものとなつた所以は、主として玆に在つたと考へられる。

【三】十七地論は瑜伽師地論をさす。同論の劈頭に左の說明を掲ぐ。

云何瑜伽師地、謂十七地、何等十七、嗢柁南曰

五識相應意　有尋伺等三　三摩地俱非

有心無心地　聞思修所立　如是具三乘

有依及無依　是名十七地

【四】この年時は「開元錄」第八の記事に隨ひしものなるが、「唐僧傳」第三には「以其年十二月達京」と記し、武德九年なりとす。今は「開元錄」に據る。

四、本論主の思想的特徴

般若燈論の思想的特徴として先づ第一に擧ぐべきは、その部執的立場の顯著なことである。外道及び小乘各派の邪見偏見を論破することは、龍樹菩薩以來中觀學匠の一貫せる傳承的態度であつたが、論主淸辨に至つては啻に外道及び小乘各派の說を破斥の對象としたばかりでなく、大乘瑜伽派の見解に對しても、なほまた同じ中觀派の佛護論師の學說に對してさへも反抗的態度を採つたのである。

atna) 河畔のベツワーダ (Bezwāda) を以てその首府とせり。

三、本論の譯者に就いて

慧頤のものした般若燈論の序文によると、本論は唐貞觀四年(西暦六三〇年)六月より同六年十月十七日に至るまでの期間に勝光寺に於て中印度の沙門波羅頗迦羅蜜多羅(Prabhākaramitra 作明知識若しくは朋友の義) が譯主となり、義學沙門慧乘・慧朗・法常・曇藏・智首・慧明・道岳・僧辯・僧珍・智解・文順・法琳・靈佳・慧頤・慧淨等が傳譯の任に當り、沙門玄謨・僧伽(Saṃgha)及び闍那崛多(Jñānagupta)等が證義に與り、房玄齡・杜正倫・李孝恭等銓定に參助し、勅使蕭璟の監護の下に翻了せられたものである。

譯主波羅頗羅蜜多羅三藏は陳天嘉六年(西暦五六五年)中印度の王種に生れ、十歳にして出家して、師に隨つて學修し、十萬偈の大乘經を誦し、具足戒を受けて後律藏を學び、更に禪定を修し、十二年間引續いて佛經を究めた。その後摩揭陀國の那爛陀寺に遊んで、戒賢論師の[13]十七地論を講ずるを聽き、この論中小乘を兼說せるを以て、また小乘諸論を讀誦した。こゝに於て三藏の學は博く內外に通じ、深く大小に達し、傳燈の學匠同俗に推尊せられ、本國に歸つて敎化するや、上下の欽重を受けた。然るに、佛弟子たるものは一處に停るべきでないとして、道俗十人と共に弘法の志願に駈られて展轉北行し、西面可汗葉護(君長)の衙所に達して突厥(Turk)の君長を化導したところが、旬日を出でずして信伏し、君長は三藏に對して日に二十人料を給して旦夕懇ろに奉仕し、同侶の道俗をも優遇するに至つた。時を經るに從つて三藏に對する君長の敬重は益々その度を加へたといふことである。

武德九年(西暦六二六年)高平王突厥に入り、三藏と會見して其の化風を承け、共に東歸せんとしたけれども突厥の君臣留戀して許さなかつたから、高平王は之を唐高宗帝に奏聞し、その勅命によつて漸く三藏を伴ひ來つて帝に謁し、[14]翌年(貞觀元年)十一月二十日京師に達し、勅許を得て大興善寺に住することゝなつた。而して釋門の英達を敎導し、宮中に於て法理を說き、その恩賞として綵四十段と宮禁新衲一領と五僧加料の供給とを賜はり、懇篤なる慰問と破格の欵待とを受けた。

かくて貞觀三年三月に至り、三藏勅を奉じて大興善寺に於て翻譯の業を創め、沙門玄謨・僧伽等は譯語の任にあたり、三藏と同學の闍那崛多律師は證譯をつかさどり、沙門法琳・惠明・慧頤・慧淨等は執筆をつとめ、沙門慧乘・法常・慧朗・曇藏・智解・智首・僧辯・僧珍・道岳・靈佳・文順等は證義にあづかり、房玄齡・杜正倫・李孝恭

に執金剛神の靈告によつて巖窟內の阿素洛(Asura)宮に入定して、彌勒菩薩の出世を待つたといふことであるから、論師が馱那羯磔迦國へ赴いたのは本國に於ける觀音菩薩像の靈告に随つたのであつて、馱那羯磔迦そのものを本國と看做してゐないことは明瞭であると謂はねばならぬ。故に論師の生地は西藏傳に於て明示せられてゐるやうに摩頼耶國とするのが正當であらう。また西域記には清辨論師は雅量に富み德性高く、數論外道の服を著けながら龍樹の教學を宣揚してゐたと傳へられてゐるが、若しこれが事實とすれば、論師は佛教比丘ではないこととなつて、その本國に於て出家したといふ西藏傳と衝突する。理趣分述讃上にも論師が「身は數論の儀に同じ、朋黨の執なきを示す。」と記されてゐるけれ共、論師の撰述に係る般若燈論に於て前述したやうに數論の教義が最も多く論破の對象となつてゐる所から觀ると、論師が數論外道の服裝をしてゐたといふやうなことは到底信ぜられない。惟ふにこれは支那中觀學徒によつて最も尊重せられた羅什譯の中論が佛教沙門ではなく婆羅門でありながら、龍樹教學を發揮した青目の釋する所であつたから、彼に準じて斯る傳說が捏造せられたのであらう。

清辨論師の著書として現存せるものは、漢譯では般若燈論十五卷と大乘掌珍論二卷とであるが、西藏譯では既述した般若燈根本中論註の他、中道寶燈論(Madhyamaka-ratnapradīpa-nāma)中道心論偈(Madhyamaka-hṛidaya-kārikā)同疏炎理論(Madhyamaka-hṛidaya-vṛitti-tarkajvālā)及び中道義集(Madhya-makārthasaṁgraha)等である。なほ論師の著として西藏で行はれてゐる異部精要(Kayabhetrovibhanga)は先きの中道心論疏炎理論の一部が別行されたものに他ならない。

【五】 論主の梵名 Bhāvaviveka は有辨若しくは情辨の義を有するも、この場合の bhāva は bhā を語根とせるものなるが故に Bhā-viveka と同じく清辨若しくは明辨を譯することを得。

【六】 Bhagya は「美はしき」「正しき」または「優れたる」等の義を有し、翻譯名義大集(Mahāvyutpatti)に於ては「有清分」と譯さるゝを以て、清辨の西藏譯語に照せば、或は清辨の梵名は Bhagyaviveka と言ひしやも知れず。

【七】 小野玄妙氏著「佛教年代考」二三六―七頁、前田慧雲氏著「大乘佛教史論」二三三―四頁參照。

【八】 本國譯中觀部一解題二頁に於て、清辨の活動時期を以て西曆第五世紀の末葉若しくは第六世紀の初期となせしは誤記なり。

【九】 シーフナー(Schiefner)氏獨譯書三六―八頁、寺本氏和譯書二〇五―六頁。

【10】 Malyara は「開元錄」第九金剛智(Va-jrabodhi)傳に謂ふ所の摩頼耶(Malaya)國にして、印度半島の南端、東は今の Tanjore 並に Madura を含み、西は Coimbador, Cochin, Travancore 等を包む(Cunni-ngham; Ancient Geography of India, P. 549.)。

【11】 三昧耶(Samaya)は平等の理をさす。

【12】 馱那羯磔迦國は現今のキストナ(Ki-

ふことであるから、戒賢の生年は梁中大通三年（西暦五三一年）となる。而して西域記第八に依れば、戒賢が護法に代つて摩掲陀（Magadha）國の外道と對論して之を屈服した時は戒賢三十歳、即ち陳天嘉元年（西暦五六〇年）であつて、當時護法はなほ那爛陀（Nalanda）寺の學匠として活動してゐたのであつた。更に唯識樞要上本には護法は二十九歳の時那爛陀寺を去つて大菩提（Mahabodhi）寺に隱退し、その後三年を經て入滅したと傳へられてゐるから、彼の享年は三十二歳となる。今若し護法隱遁の時を戒賢三十歳の時とすれば（この推定は前後の事情から考察して大過はないと思ふ）、護法の歿年は陳天嘉四年（西暦五六三年）となる。[七]故に西域記第十に記されてゐるやうに、清辨が護法の盛名を聞いて、敬慕のあまり南印度から摩掲陀國の華氏城（Pāṭaliputra）に至つた時、護法はすでに大菩提寺に隱栖してゐたから、弟子を護法の許に遣し、面會するを得なかつたけれ共、互に信書の往復をしたといふことは、勿論護法の歿年（西暦五六三年）までのことであらねばならぬ。[八]從つて清辨の活動時期は西暦第六世紀の中葉と觀て然るべきであらう。

清辨論師の事蹟に就いては、[九]ターラナートハの印度佛教史に比較的精確に傳へられてゐる。論師は南印度[一〇]マルヤラ（Malyara）の王種に生れ、その本國に於て出家して三藏に精通したが、後中印度に來り、僧護（Saṅgharakṣita）論師に師事して大乘の諸經典と龍樹菩薩の釋論とを學修し、後再び南印度に還り、金剛手（Vajrapāṇi）の相好を觀じて[一一]三昧耶を成就し、南印度に於ける五十餘ケ寺の上首となつて佛法を宣揚した。佛護論師の歿後その所作の諸論を閲讀して之を論駁し、中觀疏を始めとして經典の註釋を撰述した。佛護論師の弟子は甚だ多くなかつたが、清辨論師は一千の比丘を化導し、龍樹菩薩の宗風を發揚した。佛護清辨兩論師の出世以後はこれまで一味であつた大乘教が龍樹菩薩の教派と無著（Asaṅga）菩薩のそれとに分裂して、兩派互に相諍ふに至つた。以上がターラナートハ所傳の大要である。

然るに、一般の學者は西域記第十の記事に據つて、清辨論師を以て[一二]駄那羯磔迦（Dhanakaṭaka）國の人と看做してゐるが、併しその記事を精査すれば斯る見解の誤つてゐることが容易に知られる。即ちその記事に從へば、清辨論師が本土に還り、彌勒菩薩の出世に會はんと欲して觀世音菩薩の像前に於て穀を絶ち水を飲んで隨心陀羅尼を誦すること三年、遂に菩薩の靈告を蒙り、それに隨つて駄那羯磔迦國城南の巖窟の執金剛神に詣で、執金剛陀羅尼を誦することまた三年、遂

しかも賢首大師は別に淸辨菩薩所造般若燈論及掌珍論等と傳へたのであるから、日照三藏の口授は現存せないけれども智光論師の中觀釋論を指示したものと解すべく、また之を以て青目の異名とした二敎論指光鈔第三卷の說は何等根據のない臆測に過ぎないから、一般に之を以て淸辨論師と看做すのを妥當と考へられてゐたやうである。殊に近年漢譯般若燈論に相當する西藏譯般若燈根本中論註がブハーヴギヱカ(Bhāvaviveka)の著となつてゐることが知られてゐるから、分別明と淸辨とは同語異譯なることが明瞭となつて、漢譯燈論の所謂分別明菩薩が淸辨論師であることが確定するに至つた。西域記・慈恩傳・釋迦方志・三論大義鈔等に於て婆毘吠迦と音寫せられてゐる原語は Bhāvaviveka ではなくて、Bhāviveka であつたらうと考へられる。果して然りとすれば、之は「光る」「輝く」または「現はる」などの義を有する Bhā と「辨別」または「判斷」などの義を持つ Viveka との結合した言葉であるから、西域記及び南海寄歸傳のやうに淸辨とも、また釋迦方志のやうに明辨とも、倘また漢譯燈論のやうに分別明とも譯され得るのである。[五]

然るに、ターラナートハ(Tāranātha)の印度佛敎史にはブハギヤ(Bhavya)といふ異名を擧げてゐる。寺本婉雅氏は之等兩者を以て別人の名稱とし、その證據として前者の著中道寶燈論に佛護・淸辨・月稱といふ順序で敬禮の意の表せられてゐる事實を指摘したが、この歸敬序の文は必ずしも著者の自作と看做すべきものでなく、淸辨論師に敬意を表した歸敬序が西藏譯般若燈論にもあるやうに、之等は共に後人の附加したものと判定するのが當然であるから、かゝる理由でブハギヤが淸辨でないと斷言することは出來ない。殊に西藏語では淸辨をレクダンエツパ(Legs-Ldan-ḥ Byed-pa)といひ、ブハギヤを單にレクダン(Legs-Ldan)と稱してゐるのであるから、後者が前者の略音であることは明瞭であるばかりでなく、[六]ターラナートハの佛敎史に於ては後者の傳のみを記して、前者のそれを缺き、しかも後者の傳は西域記第十及び西藏のパクサム・ジョンザン(dpag-ḥ Sam Ljon-ḥ Zaṅ)史一一七頁に記されてゐる前者のそれと極めて相似通ふてゐるのであるから、西藏傳の所謂ブハギヤは慥かに淸辨を指してゐるに違ひない。

淸辨論師の年代は精確に知り難いけれ共、護法(Dharmapāla)論師の年代に基いて、ほゞ其の活動時代を推定することが出來る。唐高僧傳第四玄奘傳並に慈恩傳第三に依ると、玄奘三藏が護法の弟子戒賢(Çīlabhadra)論師に初めて會見したのは唐貞觀十年(西曆六三六年)であつて、その時戒賢の齡百六歲であつたとい

尼乾子(Nirgrautha-putra) 即ち耆那(Jaina)敎、順世外道(Lokāyata)聲論派(Mtmāṇsaka)、無因論派(巴 Adhicca-samuppannika)、聲明論師(Vyākaraṇa)、自在天(içvara)外道、多摩羅跋(Tamāla-pattra) 外道等の說も一回乃至數回引用せられて、論破の對象となつてゐる。次に佛敎內に於て最も多く論難せられてゐるものは一切有部(Sarvāsti-vādas) の敎義であり、之に次ぐものは經量部(Sau-trautikaș)と犢子部(Vātsīputrīyas)とのそれであり、その他正量部(Sammitīyas)法護部(Dharmagupta) 等の部派佛敎の立義も亦破斥せられてゐる。特に注意すべきは前述の佛護論師の釋義のほか、大乘學派(主として唯識派)の見解が「自部の人」の言として屢々引用せられ論難せられてゐることである。故に吾人は本論に基いて清辨論師時代佛學者によつて理解せられてゐた外道及び佛敎各派の立義を窺知することが出來る。

上來論述した所に依つて觀れば、本論は印度中觀派の敎學史硏究上からいつても、安慧・佛護及び月稱の中觀疏と本論との思想的關係を究明する上からいつても、將たまた淸辨時代に於ける內外諸派の敎說を檢討する上からいつても、實に珍重すべき學術的價値を有することが炳かである。從つて本論の硏究が種々の意味に於て、緊要であることは言ふを須ゐない。

【一】 觀誓の廣疏第八卷と第十一卷と第十六卷とに中論本頌註釋の八大家の名が列擧せられをるも、その順序は必ず龍樹・佛護(Buddhapālita)月稱(Candrakīrti) 提婆設摩(Devaçarman) 求那師利 (Guṇaçri) 德慧(Guṇamati) 安慧 (Sthiramati) 清辨となれり。この配列は年代若しくは傳燈の順序にあらざること明かにして、おそらく具緣派(Prāsaṅgika) の佛護と月稱とを一群とし、唯識派の德慧と安慧とを一群とし、提婆設摩と求那師利とを一群とし、龍樹と淸辨とを特別扱として、兩者をこの系列の首尾に位せしめたるならん。(龍谷大學論叢第二百八十號所載 月輪賢隆氏の 論文「安慧菩薩の大乘中觀釋論に就いて」參照)。

【二】 前田慧雲氏著「大乘佛敎史論」一八九頁參照。

【三】 本國譯中 觀部一、解題 三二—七頁參照。

【四】 本論釋觀業品第十七に於ては第一第二及び第十三偈の三偈は長行中に混入し、一見中論本頌に非ざる如く取扱はれをるも、他本に徵すれば、いづれも明かに本頌なり。是れ安慧の釋論に於ても同樣なれば、安慧の誤認がそのまゝ本論に於て襲踏せられしものならん。その他本國譯釋觀有爲相品第七註七・五五、釋觀作者業品第八註一、釋觀合品第十四註一、釋觀有無品第十五註一二、釋觀縛解品第十六註八・一六、釋觀業品第十七註二等を參照せよ。

二、本論の著者に就いて

すでに一言したやうに、般若燈論の漢譯ではその著者が分別明菩薩と記されてゐる爲、古來その何人たるかの問題に就いて異見が現はれたけれ共、之を以て智光とする說は賢首大師が日照(Divākara)三藏の口授に隨つて共の撰述に係る十二門論宗致義記卷上に「智光論師般若燈論云々」と記したのに基いたものであつて、

ntrika）とが對峙するやうになつた源流は實に本論にあつたといはれてゐる。果して本論の所說が月稱（Candrakīrti）の反駁したほど唯識派の有所得中道の立場に囚はれて、一切法の自性を以て常住なる實體とするスヷータントラ主義に立脚せるか何うかは頗る疑の存する所であるが、兎に角本論が後世中觀派內に思想的分裂を生ずる契機となつたことは爭はれない事實である。故に本論は印度中觀派敎學史上に於ける淸辨論師の地位を檢討することに對して重要な資料を提供するものと謂はねばならぬ。

　また本論と安慧菩薩の釋論とを對照比較してみると、前者が後者を繼承してゐる點が著しく目立つのであつて、(四)後者に引用せられてをる佛典の本文並に外道の立義が屢々襲用せられ、殊に甚だしきに至つては後者の誤認さへもそのまゝ前者によつて襲踏せられてゐる。この事實は幸にして既に月輪賢隆氏によつて龍谷大學論叢第二百八十八號八六—一〇一頁に於て詳細に討究指摘せられた所であるから、本國譯の註に於て之を借用した。同氏の研究に對して玆に謹んで謝意を表する。かやうに本論は唯識派の學匠安慧菩薩の釋論に準據したと同時に、佛護（Buddhapālita）論師の中論疏に對抗したことは最も注意すべき所である。但し本論の佛護疏に對する反抗的態度は安慧釋論に對するその隨順的態度に比して甚だ微溫的であつて、本論が佛護疏を批難したのは只第一卷に於て四回あるのみである。しかもその四回の批難も後に述べるであらうやうに極めて枝末の問題に關したものに過ぎない。故に後世の中觀派の學徒が臆斷したほど力強く本論が佛護疏に拮抗したものとは考へられない。寧ろ唯識派の學說に對して頻りに中觀的立場から論破を加へ、瑜伽派に對する部執的傾向を示してをる點が顯著である。併しながら、本論が唯識十大論師中の錚々たる學匠安慧菩薩の釋論をあまりに忠實に繼紹した爲、中觀派と瑜伽派との部執的對抗が劇烈となるに隨つて、益々本論が一部の中觀學徒から嫌忌せられ、殊に佛護論師の敎流を汲んだ所謂プラーサンギカ派の學徒によつて異解謬釋として排斥せらるゝに至つたのであらう。

　尙また本論が廣く外道小乘各派の敎說を始めとして唯識大乘の見解までも縱橫に批判し破斥してゐる點は注意に價する。先づ外道中最も多く論破せられてをるものは數論（Sāṁkhya）であつて、觀緣品第一の釋文中に於ては十一回、觀作者業品第八のそれに於ては四回、觀法品第十八及び觀因果和合品第二十のそれに於ては各八回その敎說が反駁せられてゐる。數論に次いで多く批難せられてゐる外道は勝論（Vaiçeṣika）であり、その他

般若燈論解題

一、本論研究の必要

般若燈論の梵語原典は未だ發見せられないけれ共、その譯本は今國譯せんとする漢譯の般若燈論十五卷と西藏譯の般若燈根本中論註(Prajñāpradipa-mulamadhyamaka-vṛtti)との二種現存してゐる。西藏に於ては本論は相當盛んに研究せられたと見えて、現に西藏丹珠爾部には觀誓(Avalokita-vrata)の本論廣疏が編入せられ、またそれに依つてヨンタンジン(Yon-tan-din)師の本論廣疏のあつたことが知られるばかりでなく、觀誓がその廣疏中に三度列擧した中論本頌註釋の八大家の配列順序を看ても、[一]尠くとも觀誓自身は龍樹(nāgārjuna)菩薩の自撰と傳へられる無畏論に次いで、淸辨(Bhāva-viveka)論師の燈論を重視してゐたことが判る。然るに支那及び日本に於ては、古來中論研究といへば、必ず梵志靑目(Piṅgala)釋・羅什三藏譯の中論四卷を所依とした爲、之に對する廣疏は嘉祥大師のものを中心として、支那日本に亘つて多數發表せられたのであるが、他の二種の漢譯中論釋書、即ち安慧(Sihiramati)菩薩釋・惟淨及び法護譯の大乘中觀釋論十八卷と本論漢譯とは殆んど學者の顧みる所とならず、從つて之等兩書に對する廣疏は絕えて現はれなかつたのである。これ蓋し梵志靑目釋の中論四卷は最も早く支那の佛教界へ紹介せられた中論本頌及び釋文であり、しかもそれが支那四大翻譯家の一人であつたと同時に、支那の中觀派即ち三論宗の一祖師と仰がれた羅什三藏の譯出した所のものであつた爲であることはいふまでもないが、安慧菩薩の釋論は漸く宋代に至つてその前後兩半部が別人によつて翻譯せられ、しかもその釋者が唯識派の驍將であつたから、一般の中論研究者は殆んど無批判的に之を以て中論の謬釋と獨斷した爲であり、また般若燈論はその撰者分別明菩薩に就いて[二]「異論を生じ、或は智光(Jñānaprabha)に指定せられ、或は靑目と看做され、或は淸辨と考定せられて、決する所なかつたから、自ら本書の重要性が觀過せられるやうになつた上、偶これを閱讀した學者でもその翻譯が羅什譯の中論に比して餘りに蕪雜拙劣であつたから、之を棄てて顧みなかつた爲であらう。

併しながら、般若燈論は[三]現存七種の中論本頌註譯書中特殊の敎學的地位を占むるものであつて、印度中觀派内に於て具緣派(Prāsaṅgcka)と依自起派(Svāta-

目次

中觀部　二

羽溪了諦譯

國譯一切經

大東出版社藏版